

機動戦士ガンダムティ ワズの狙撃手

みっつー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類の英雄、アグニカ・カイエルと彼が所属していたヘイムダルがモビルアーマー、ガブリエルを討伐して300年後。

ドルトコロニーにいる一人の少年。8年前とある戦いに巻き込まれた。その戦いで当時6歳だった青年はモビルスーツを手に入れた。

それはヘイムダルが保有していたガンダムフレームの内の一機、ASW — G — 63ガンダムアンドラスだった。

青年は家族に支えられながらアンドラスと共に狙撃手として成長する。

アグニカ・カイエルの願いはまだ終わっていない。

鉄華団のメンバーが1人増えました。の設定を使用しています。

簡単に言うとアグニカが死んでいてーっていう世界です。

つまりバルバトスに乗っていたのはクレイグ・オーガスです。

アンドラスのパイロットはトビツ（ry）

鉄華団のメンバーが1人増えました

<https://syosetu.org/novel/117690/>

NToz先生よりとあるキャラのイラスト

注意

この小説には多少差別的発言や差別的表現が見られますがそれは世界観やキャラ崩壊を防ぐためであり、決して差別を助長するものではありません

批評大募集です！

勿論高評価、お気に入り、感想、推薦もいつでも待っています！
つていうかお願いしま
す！

目次

鉄血、ガンダムを知らない人用の設定集	
鉄血 専門用語解説	1
鉄華団のメンバーが一人増えましたの設定集（本作を読む際に知っておいた方が 良いもの）	
鉄華団のメンバーが一人増えましたの 設定集 オリジナル設定編	14
鉄華団のメンバーが一人増えましたの 設定集 モビルスーツ編	22
鉄華団のメンバーが一人増えましたの 設定集 キャラクター編	37
鉄華団のメンバーが一人増えましたの	
設定集 オリジナル戦艦編	46
本作のみの設定集	
設定集 JPTトラスト編までのネ タバレ注意!!	56
番外編	
番外編 その1 鉄華団と僕	68
番外編その2 アリアンロッド入隊	78
ドルトコロニー編	
第1話	88
第2話	95
第3話	101
地球降下編	

第二期	地球編	第4話	118
ロークスコロニー編	第5話	128	
(ほぼオリ)	第6話	138	
	第8話	149	
	第7話	157	
	第9話	164	
	第10話	174	
	第11話	184	
	第12話	195	
	第13話	206	
	第14話	217	

第25話	鉄華団地球支部編	第15話	232
		第16話	241
		第17話	250
		第18話	259
		第19話	268
		第20話	277
		第21話	286
		第22話	299
		第23話	312
		第24話	322
		第25話	333

ジナル)

第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	モビルアーマー編	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話
478	467	453	439	431	420		404	393	379	365	354	344

第49話	第48話	第47話	第46話	第45話	第44話	第43話	第42話	第41話	第40話	タービンス編	第39話	第38話
燃える太陽	その力は正義か	兄として	タービンの力	何が為の光	あの日の光	太陽のように	覚悟	蒼い瞳の女	引き金		ハシユマル	
618	604	590	580	568	556	545	535	525	511		500	488

	第50話	照らされる者	633
	第51話	タービンス	643
	JPTトラスト編		
	第52話	遺されたもの	657
	第53話	ジョーカー・クラウド	668
	第54話	もう一度	685
	第55話	復讐のため	701
	第56話	変革	719
	第57話	因果応報の一撃	733
	革命編		
	第58話	宣戦布告	748
	第59話	いきたい	758
	第60話	王のイス取り	771
	第61話	思いの交差(前編)	787
	第62話	思いの交差(後編)	800
	第63話	アベック・スナイプ	815
	第64話	最後の指導	827
	第65話	子孫VS再来	838
	第66話	射撃VS近接	852
	第67話	孤独VS家族	871
	第68話	これしかない	885

第77話	第76話	第75話	第74話	951	第73話	第72話	第71話	第70話	899	第69話
遺されたもの	ユウ	トドメの一撃	義務		ライバルその3	ライバルその2	ライバルその1	特攻―賭け―		再戦
										獣VS悪魔
1035	1008	987	963			937	925	915		

鉄血、ガンダムを知らない人用の設定集

鉄血 専門用語解説

機動戦士ガンダムティワズの狙撃手

専門用語解説

ここではこの作品は勿論原作である機動戦士ガンダム鉄血のオルフェンズがわからない人にも分かりやすいように解説していきます。

まだ他にもあったらお願いします。

オリジナルキャラ、オリジナル機体については設定集を参考にしてください。

(注意) ネットの受け売りが多いです。

ごちゃごちゃしていて読みにくいかもしれません。

分かりやすくするために多作品の事も書いています

情報元はだいたいウィキペディア

[https://ja.m.wikipedia.org/wiki/機動戦士ガン](https://ja.m.wikipedia.org/wiki/機動戦士ガンダム)

[ダム](#) | 鉄血のオルフェンズ

鉄華団のメンバーが1人増えました(通称鉄メン)の設定も使用しています。三次創

作とは言わないで

<https://syosetu.org/novel/117690/>

時代設定

無人機動兵器モビルアーマー（通称MA）（後述）と人類との戦い厄祭戦から約300年後の物語です。

アグニカ・カイエル。

それはガンダムが一番機であるガンダムバエルを駆り、宇宙にいるMA（後述）を片っ端から殺した人類の英雄。その操縦能力は特殊能力（阿頼擲識はあるが特殊能力ではないので除く※阿頼擲識については後述）が無いのにガンダムシリーズ中最強といっても過言ではない。

バエルも機体性能がそこまで高く無いことから世界中のパイロットを集めても勝てないと思われる。

その上厄祭戦についても本を書いていて（原作では名前がわからなかった為、この作品では鉄メンから借りてアグニカ叙事詩としています）原作の世界で厄祭戦の事実を知れる数少ない書物となっている。

すでに死んでいるがその強さからか原作ではマグギリス。この作品ではオリ主のユウも憧れを抱いている人物

勢力

厄祭戦ではガンダムフレーム（後述）の一番機であるガンダムバエルを操った英雄アグニカ・カイエルが当時の仲間と作ったギヤラルホルン（元ネタはおそらくヘイムダルの笛。マークにもそれが表れている）が一大勢力となっている。

その他にも四大経済圏として

ロシアやカナダ、アラスカ地域を中心とするアープラウ

アメリカ合衆国とラテンアメリカ地域を中心とするSAU（STRATEGIC ALLIANCE UNION）

ヨーロッパとアフリカ、中東、中央アジア地域を中心とする。アフリカユニオン
日本や中国、インド、東南アジア、オセアニア地域を中心とする。オセアニア連邦
がある。

ギヤラルホルン。

原作でもこの作品でも敵勢力として描かれる。治安維持組織と言われているところから戦前の日本を彷彿とさせる。その様子は過去の作品（特に宇宙世紀の）連邦軍に酷似しているが最も違う点は世襲制であること。ギヤラルホルンは作中でも何度も腐敗してしまっただけと言われていたがその原因は世襲制であると言える。エイハブリアクター（後述）を生産できる唯一の勢力で他の勢力はギヤラルホルン等から買ったり宇宙

に放り出されている物を取ったりすることしか出来ない。

テイワズ

この作品主人公ユウ・タービンも中盤からは鉄華団（後述）も入る火星から木製圏まで支配する開発を手がける巨大コングロマリット。代表はマクマード・バリストーン。実態はマフィアに近い。相当数のモビルスーツ（後述）を持つためギャラルホルンも簡単に手が出せないとされる。日本のヤクザに近い文化形態をもち、和装による盃事で義親子・兄弟の契りを結ぶ風習がある

タービンズ

テイワズの下部組織の一つでこの作品のオリジナル主人公であるユウ・タービンの父親である名瀬・タービンが運営している。もともとは名瀬とアマダ・アルカが下層階級の女性労働者を保護する目的で結成した組織であり、テイワズ加入後はに代表される独自の大輸送網を構築したことで直系組織に昇格し、5万人を越える大組織に成長する。構成員は全員が名瀬の妻、彼女、子供（ユウは名瀬の息子）という名目で引き取られた身寄りのない女性たちであり、家族のような絆で結ばれている。（二期からはその息子達もタービンズから自身の妻を持つようになる）

CGS（クリュセ・ガード・セキュリティ）

クリュセ郊外にある民間警備会社。社長はマルバ・アーケイ。主力兵器の多くが旧式

のモビルワーカー（MW）で占められており、戦力は正規の軍隊に遠くおよばない。地下の動力室にはマルバが発見したガンダム・バルバトスが保管されており、施設の電力源として利用されていた。

鉄華団

CGS基地を掌握した少年兵達が新たに立ち上げた組織。社名は「決して散ることのない鉄の華」という意味を込めてオルガが命名した。原作主人公三日月・オーガスの所属する勢力

兵器

この作品の兵器は他のガンダム作品より硬く頑丈なため戦闘はだいたい物理。オリジナル主人公のユウみたいに狙撃キヤラは作中ではとても珍しい。（これはユウがティワズの狙撃手とよばれる理由でもある。簡単に言うるとティワズレベルの大企業でもユウの他に狙撃手がないということ）原作ではギャラルホルンにイオク・クジャンがいるがはつきり言っていない（もしかしたらルナマリア・ホークより下手かもしれない）ユウ以上の狙撃手は現在いない。（作中で出てこないとは言っていない）

モビルスーツ 通称MS

この作品でのモビルスーツは厄祭戦のモビルアーマーの対処の為に作られたという

設定でモビルアーマーとの差別化を図るためと阿頼擲識（後述）の同調の為に人型になっている。

フレームを全面的に押し出しているためフレームの情報は以外と多い。（宇宙世紀でもマープルフレーム等あるがそれよりポピュラー）

ガンダムフレームもしくはガンダム・フレーム

この世界のガンダム。

主人公三日月・オーガス、ユウ・ターピンを初め、使用されるフレーム。

英雄アグニカ・カイエルがガンダムの一番機であるガンダムバエルを使った事からギャラルホルンの象徴とされている。

普通のフレームにはひとつしかないエイハブリアクター（後述）を二つ搭載しており（作中ではツインリアクターと呼ばれる）火力は歴代最強といっても過言ではない。

<要するに00のツインドライヴシステムと同じ。>

しかしツインリアクターは同調が難しく72機しか生産されなかった。その機体の数と機体の名前から元ネタはソロモンの悪魔とも言われている。（実際バエルはソロモン第一の悪魔でバルバトスは8、アンドラスは63番目よ悪魔）

阿頼擲識（後述）の使用を前提とされており、ユウのように阿頼擲識を使わないと動かない機体が大抵。

モビルアーマーに一定距離近づくともパイロットの安全システムが外される。その為強大な力を得れるがその代わりに体を代償として払う可能性がある。(ハガレンとは違う)

グレイズフレームもしくはグレイズ・フレーム

ギヤラルホルンの現行MSに採用されているフレーム。紛争鎮圧や治安維持を目的に開発された結果、厄祭戦時代のフレームよりも構造の大幅な簡略化と軽量化がなされ、高い生産性と整備性を実現している。

因みにグレイズの旧式のゲイレールはグレイズフレームでは無い(敵のモビルスーツが一つの機体とその派生機だけというのは初代からあったがスポンサー等の理由から認められなかったらしい。)

レギンレイズ・フレーム・もしくはレギンレイズフレーム

グレイズ・フレームから発展した新型フレーム。グレイズ・フレームの特長を継承しつつ、その始祖であるヴァルキュリア・フレームの構造も取り入れられており、可動範囲の拡大や、高出力と重武装に対応した強化が行われている。

ゲイレール・フレーム・

グレイズ・フレームの一世代前にあたる旧式フレーム。グレイズ・フレーム機の配備後は訓練用などを除き大半が退役しているが、一部は傭兵部隊などに非合法的に流出し

ている。

テイワズ・フレーム・

テイワズが宇宙海賊などへの対抗策として、厄祭戦後期に設計された高出力機を原型に開発したフレーム。エイハブ・リアクターは厄祭戦当時のものを流用しているが、ギャラルホルン以外の勢力では初めてフレームから新造された。文献によつては後述のイオ・フレームと同一化させる。

イオ・フレームもしくはイオフレーム

テイワズ・フレームの本格的な量産化を目的に再構築されたフレーム。フレーム自体は新規設計だが、細部が調整されている以外はテイワズ・フレームとほぼ同じ構造をもつ

ロデイ・フレーム・

厄祭戦中期に大量生産され、幅広く普及した汎用型フレーム

ヘキサ・フレーム・

ロデイ・フレームに次いで多く生産された厄祭戦中期のフレーム。頭部に設置されたコクピットブロックが特徴

頭部にあるせいでユーゴーという機体は太鼓の達人やられたという経験もある

ヴァルキュリア・フレーム・

厄祭戦末期に製造されたフレームの一つ。戦場の主力となりうる性能をもちながらも、同時期に開発されたガンダム・フレームが注目されたため生産数は9機に止まり、実戦記録もほとんど残されていない。

モビルアーマー・

戦争の自動化が進むなかで開発され、厄祭戦勃発の直接的な原因となった自立型無人兵器と設定されている。

基本的に人間コロス！っていう感じ。

イタリア語で羽と言う意味のブルーマという子機を沢山連れている。

ガンダムフレームの由来が悪魔な為かモビルアーマーの由来は天使。

簡単に言うとAI積んだやべー奴

エイハブリアクターもしくはエイハブ・リアクター

MSやMA、艦船、スペースコロニーの動力に使用されている相転移変換炉。発明者の「エイハブ・バラエナ」にちなんでこの名が付けられた。（これは宇宙世紀のミノフスキー粒子と同じ。流行ってるのかな？）物理的な破壊は理論上不可能とされるほど耐久性が高く、稼働中は半永久的にエネルギーを生み出し続けるため、世界のエネルギー問題を解決しただけでなく、厄祭戦からの復興に大きな役割を果たした。本編ではギャ

ラルホルンが製造技術を独占しているため希少価値が高く、他勢力は厄祭戦時代の残存兵器に搭載されていたリアクターをレストアして使用している。また濫用の危険性やエイハブ・ウエーブ（後述）の影響で、戦後復興以降は電力供給機関として用いられなくなったほか、地球では都市部への持ち込みが禁止されている。

（二期にてギャラルホルンがそれを破ったとは言ってはいけない）

エイハブ粒子

リアクター内の真空素子が相転移して生成される重粒子。慣性制御効果をもち、MSの耐Gシステムや、艦艇などの疑似重力発生装置に用いられる。MSは効率的な耐G効果を生み出す目的で、コクピットをリアクターの近くに配置している。

エイハブ・ウエーブ

エイハブ粒子の粒子崩壊で生まれた素粒子が、超高速で拡散して発生する磁気嵐。影響範囲内ではレーザーなどの電波利用機器やレーザー通信以外の無線が使用不能になるため、有線または専用の中継機を介した通信手段が用いられる。製造されたリアクターはすべてワンオフ品であるためウエーブの固有周波数にも個体差があり、ギャラルホルンはデータベースと照合することで搭載機の個体識別を可能としている。因みにタービンはそれを攪乱する方法を知っており、それを使っているお陰で奇襲もできる。

阿頼耶識システム（あらいやしきシステム）もしくは阿頼擲識

厄祭戦時代のMSのコクピットに採用された有機デバイスシステム。パイロットの脊髄に埋め込まれた「ピアス」と呼ばれるインプラント機器と操縦席側の端子を接続し、ナノマシンを介してパイロットの脳神経と機体のコンピュータを直結させることで、脳内に空間認識を司る器官が疑似的に形成される。これによって、通常はディスプレイなどから得る情報がパイロットの脳に直接伝達され、専門知識が無い者でも機械的プログラムに縛られない操作が可能となる。（この作品では一応阿頼擲識を使わなくてもプログラムは細かくすれば出来ないことは無いが作るのも操作するのも相当難易度が高い。他にもモビルスーツとパイロットを繋げればよしとしています。）本編の時代では被術者の反乱を警戒してギャラルホルンによって非人道的なシステムとして使用が禁止されている。しかし、圏外圏では不完全な形で流出したものがヒューマンデブリの間に横行しておる。

ナノラミネートアーマー

エイハブ・リアクター搭載兵器に採用されている特殊装甲。エイハブ・ウェーブに反応して衝撃の吸収・拡散に適した複層分子配列を形成する金属塗料が表面に蒸着されており、実弾やビーム兵器に対して高い防御力を発揮する。要するにこの世界で狙撃手があまりいない理由となっている。その理由は弾丸が通らないから。

ナノミラーチャフ

ナノラミネートアーマーに用いる粉末状の素材を利用したチャフ。エイハブ・ウエーブの影響下でレーザー通信や光学探知を妨害することができる。

ナノミラーチャフ

ナノラミネートアーマーに用いる粉末状の素材を利用したチャフ。エイハブ・ウエーブの影響下でレーザー通信や光学探知を妨害することができる。火星の大地には厄祭戦時代のMSやMAなどが埋まっていることがあるが、ハーフメタルを多く含有する土地では発せられるウエーブが大きく減衰するため、発見されていない機体も多い。

ヒューマンデブリ

二束三文の値段で人身売買される孤児たちのことを指す言葉。つまり奴隷。ではあるが後述の理由からかわられるのはだいたい男。本編には女性のヒューマンデブリは出てこない。(アミダと名瀬に拾われたのが女性版ヒューマンデブリと想ってもらって構わない)

大半は戦闘において使い捨てにされ、強制的に阿頼耶識システムの手術を受けさせられた上、苦痛に耐え切れずに死んだり、重度の障害を負うものもあり、そういった阿頼耶識施術に失敗した者は、廃棄物扱いされ、人知れず死んでしまうことが多い。

運良く阿頼耶識が定着した者もMSによる戦闘に駆り出され、少年兵として使われることとなり、「宇宙ネズミ」と蔑まれている。

鉄華団のメンバーが一人増えましたの設定集（本作を読む際に知っておいた方が良いもの）

鉄華団のメンバーが一人増えましたの設定集 オリジナル設定編

ここでは鉄血のオルフェンズにはなく、鉄華団のメンバーが一人増えました（通称鉄メン）で出てきた設定もしくは今作と鉄メンと原作の違う点を書きます。

本作で使うもしくはその為に必要な知識を分かりやすくするために抜粋させてもらっています

基本的に鉄メンの情報はコピペです

鉄メンは此方で

<https://syosetu.org/novel/117690/>

《オリジナル設定》

誕生経緯について。

ガンダム・フレームは、MAを倒す為スリーヤ・カイエル（後述）らの手で作られました。

原作では「MSがMAを倒す為作られた」とされていますが、鉄メンと本作では「MSは元々作業機械として作られ、それが戦争に利用された物。MAを倒す為に作られたのは、ガンダム・フレームとヴァルキュリア・フレームのみ」となります。ナノラミネートアーモアの誕生経緯について。

この硬い装甲の誕生経緯は語られてなかったと思うので、元々ガンダム用に造られた設定になりました。

それが他のフレームにも流用された、と言う事で。

ガンダムの意志について。

ガンダム・フレームには、マジモンの悪魔が宿っていると言う鉄メンオリジナル設定です。

アニメを見ていた時にバルバトスが三日月に意志を持って呼応していたように感じまして、そこから出て来た設定となります。

ユウがアンドラス搭乗時に誰かと話しているのはアンドラスと話していることとなります。

案外仲良いです。（地味に大事）

阿頼耶織のリミッターについて。

原作のハシユマル戦で、バルバトスとグシオンは動きが鈍くなっています。

これは阿頼耶織からの情報を制限するシステムの安全装置と出力を全開にしたい機体がぶつかつた結果だったので、ガンダム元々のコクピットには安全装置が付いていないと言う設定です。

だから、動きが鈍くなる所か活発化してMAにも追い付けるようになります。

厄祭戦での被害について。

公式では厄祭戦時代の総人口が明言されていなかった為、勝手に「約120億人」としました。

それから、公式設定での「厄祭戦で人類の約4分の1死亡」は本作に於いて「約4分の3」に変わっています。

宇宙世紀との繋がりについて。

今作では、やんわり繋がっているとと言う設定です。

様々な文献が残されていますが、事実であったかは疑われています。

また、何故か技術水準が下がっていたり。

ギャラルホルンの成り立ちについて。

旧名を「ヘイムダル」。

名前の由来は、北歐神話に於いて角笛「ギヤラルホルン」の持ち主である光の神です。そして彼の角笛は、北歐神話での神々の最終戦争「神々の黄昏^{ラグナロク}」の始まりを告げるとされます。

ヘイムダルは「世界の光」とも言われる為、アグニカは自らの組織が世界に光…希望をもたらせるように、と言う願いを込めて名付けました。

そして戦争が終わり、アグニカはヘイムダルを巨大化して世界の警察組織へと作り替えます。

名前が「ギヤラルホルン」となったのも、その時。

いざと言う時は戦争の始まりを世界に知らせ、それを収められるような組織になれば、との願いを込めたようです。

公式では、ギヤラルホルンの前身なる組織の名前は語られていませんでした。厄祭戦の期間。

3年程になります。

核爆弾について。

原作で登場、言及が有りませんが、今作ではダインスレイヴと同じく禁止兵器と言う扱いでギヤラルホルンが嚴重管理しています。

七星十字勲章について。

概要は公式と変わりませんが、与えられる条件は鉄メンから。

「トドメを刺す」事が条件で、トドメを刺した者のみに授与されます（協力しただけでは貰えない）。

貰える個数は倒したMAの位階によって異なり、天使なら1個、天使長なら2個、四大天使なら5個、天使王なら10個貰えます。

阿頼耶織システムの誕生経緯。

アグニカ祖父が考案し、その理論をアグニカ父が発見し、マッドサイエンティストが手を加えて完成させた事になっています。

ビームの原理。

エイハブ・リアクターによって生み出されるエイハブ粒子を超高速振動させる事で高熱を持たせ、物質を溶解する新兵器です。

月面の巨大都市。

鉄血世界に存在した事自体が、鉄メン設定となります。

場所は、フォン・ブラウンと同じ所です。

各地に散らばるヘイムダル基地について。

オリジナル設定として、これが後にギャラルホルンの基地となつて300年後も残っているモノも有ります。

スリーヤの持つ海上移動研究所。

オリジナル設定として、これが後に施設拡張されてギャラルホルン地球本部基地「ヴァインゴールヴ」となりました。

オーストラリアの穴について。

宇宙世紀での「コロニー落とし」：「ブリテイッシュ作戦」の爪痕です。

原作では言及がありませんでしたが、世界地図にはクレーターが出来ています。

カラドボルグ。

鉄メンのオリジナル兵器で、バージニア級戦艦に搭載されています。

後に禁止兵器とされる、ダインスレイヴの凄惨な版。

弾頭はダインスレイヴの物とは違って25mと巨大で捻れており、ドリルに似た形状をした専用の弾頭を巨大な弩に似た砲身で高速回転させながら高速射出する凶悪な兵器です。

煽動屋について。

各経済圏などから依頼を受け、指定された場所にMAを誘導する仕事をする者達の総称。

依頼者は主に、敵対者に大きな被害を与える為に彼らが必要とします。

依頼者から払われる報酬は絶大で、行き場を無くした者が煽動屋に身をやつす例も少なくありません。

クラウ・ソラス。

バージニア級戦艦の右舷に取り付けられた、エイハブ・リアクターと直結して放たれる超強力なビーム砲。

この作品で最も硬いものは？

ナノラミネートアーマーヘレアアロイヘナノラミネートコートへ特殊超硬合金へエイハブ・リアクター

物の硬さはこんな感じですよ。

ナノラミネートコートは、レアアロイの武器で破壊出来ません。

特殊超硬合金の武器ならばナノラミネートコートを破壊出来ますが、エイハブ・リアクターを壊す事は不可能となります。

アデレード禁止条約について。

原作に於いては「禁止条約」としか言われていなかったため、命名。オーストラリアのアデレードで調印が行われた事から、こう呼ばれている——と言う鉄メンのオリジナル設定です。

地球外縁軌道統制統合艦隊について。

「地球外縁軌道統制統合艦隊」、通称して「グウイデイオン」と呼ぶことにしたいと思いません。

通称の由来はケルト神話の英雄「グウイデイオン」から来ており、この英雄の姉の名が「アリアンロッド」となっております

鉄華団のメンバーが一人増えましたの設定集 モビル スーツ編

ここでは鉄血のオルフェンズにはなく、鉄華団のメンバーが一人増えました（通称鉄メン）で出てきた設定もしくはは今作と鉄メンと原作の違う点を書きます。

本作で使うもしくははその為に必要な知識を分かりやすくするために抜粋させてもらっています

鉄メンと本作両方に出てくる予定のモビルスーツを乗せますが本作に出てこないモビルスーツも必要な知識がある場合のせます。

鉄メンの作者であるNTOz先生が作ったものに加えていて募集で集められたものも許可が取れた物のみ集めております。

基本的に鉄メンの情報はコピペです

鉄メンは此方で

<https://syosetu.org/novel/117690/>

因みにガンダムフレームは番号順にしています。

後から許可が取れたものも追加で乗せます。

アンドラスのみは別の設定集で解説します

ASW|G|01 ガンダム・バエル

全高：18.0m

本体重量：30.0t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：バエル・ソード×2

ヴァルキュリア・ブレード×2

電磁砲×2

概要

アグニカ・カイエルの専用機。

厄祭戦後、ギャラルホルンの権力を象徴するMSとして動態保存されていた。

専用武器「バエル・ソード」と、グリム・パウリナより継続使用の「ヴァルキュリア・ブレード」を使う。

バエル・ソードとヴァルキュリア・ブレードは同じ特殊超硬合金で錬成されており、決して折れないとされる。

電磁砲は補助装備としてそれぞれバックパックの左右に取り付けられているが、使用される事は殆ど無い。

2機のエイハブ・リアクターと直結された超高出力のスラスターを持ち、大気圏内でも自由に飛び回る機動力を誇る。

名前の由来はソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第一位の悪魔「バエル（バアルとも）」から。

バエルは東方を支配し、66の軍団を率いる大いなる王だとされる。

ASW-G-02 ガンダム・アガレス

全高：18.0m

本体重量：30.0t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：アガレス・ライフル×2

アガレス・ナイフ×2

電磁砲×2

概要

スヴァア・クニギンの専用機。

専用武器「アガレス・ライフル」と「アガレス・ナイフ」を2つつ持つ。

武器と色こそ違うが、本体の構造はバエルと同一。

バエルの青い部分が、アガレスではピンクになっている。

また、目の色はバエルがピンク or 赤、アガレスが水色 or 赤。

バエルと同じく2機のエイハブ・リアクターに直結された超高出力のスラスタールを持ち、大気圏内でも自由に飛び回る機動力を持つ。

武装はとてもコンパクトかつ軽量で、取り回しが良い。

アガレス・ライフルは正確にはピストル。装弾数は35発で、予備カートリッジを腰に100個ほど装備する事が出来る。

アガレス・ナイフはバエル・ソードと同じ素材で錬成されており、決して折れる事は無い。

しかし普段は使われず、膝の側面辺りの鞘に格納されている。

名前の由来は、ソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第二位の悪魔「アガレス」から。

アガレスは東方に属し、31の軍団を率いる大公爵だとされる。

ASW | G | 09 ガンダム・パイモン

全高：19.1m

本体重量：31.7t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：クサナギノツルギ×1

概要

カロム・イシューの専用機。

ギヤラルホルン本部「ヴィーンゴルーヴ」の「バエル宮殿」に動態保存されていた、イシュー家に伝わるガンダム・フレーム。

紅白に染め上げられた機体色は、日本かぶれなカロムの意向によるモノ。

カロム曰く、「源平合わされば最強」。

300年の時を越え、カルタ・イシューにより再び戦線に投入された。

専用武器として「クサナギノツルギ」を持つが、それ以外の武装は一切装備していない潔さを誇る。

クサナギノツルギは名前の通り日本刀であり、バエル・ソードと同じ特殊超合金で錬成されている黄金の太刀。

故に決して折れる事は無く、あらゆる物を斬り裂くとされる。

普段は鞘に納められ、左側の腰に接続されている。

大型の飛行用ユニットを装備しており、地上では高い敏捷性を、宇宙では高い機動性を獲得している。

名前の由来は、ソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第九位の悪魔「パイモン」から。

パイモンは空の軍勢に属し、200もの軍を率いる地獄の王だとされる。

ASW|G|25 ガンダム・グラシヤラボラス

全高：18.9m

本体重量：29.7t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：有線式テイルブレード×1

マウスフアング×1

クロー×4

概要

大駕・コリンズの専用機。

かつて「ヘイムダル」で運用された、最凶のガンダム・フレーム。

機体は漆黒と真紅に塗られている。

手に持つような武器は無く、両手両足の巨大な「クロー」と特殊な口で咬み千切る「マウスファンング」に「有線式テイルブレード」を装備する。

中距離の敵はテイルブレードで凧払い、近距離の敵は引き裂き咬み千切る事を前提とした獣の如きコンセプトで建造された。

対価や負担は、他のガンダムとは比較にならない。

背中には巨大なウイングが取り付けられており、機動力はバエルにすら迫り一瞬ならば上回れる程。

また、ステルスシステムを装備していて、一時的ならば他の機体を透明化する事も可能。

名前の由来は、ソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第二十五位の悪魔「グラシヤラボラス（グラシヤ||ラボラス、カークリノラーズ、カーシモラルとも）」から。

グラシヤラボラスは、36の軍団を率いる地獄の大総裁だとされる。

VOLTEXさんより頂いた案を元に、設定しました物の許可を取りました。ありがとうございます。

ASW|G|32 ガンダム・アスモデウス

全高：20.0m

本体重量：39.2 t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：ヴァナルガンダ×1

アームスヴァルトニル×2

グレイプニル×2

スラッシュディスク×2

概要

フエンリス・ファリドの専用機。

ギヤラルホルン本部「ヴィーンゴールヴ」の「バエル宮殿」に動態保存されている、ファリド家に伝わるガンダム・フレーム。

専用武器として、「ヴァナルガンダ」と「アームスヴァルトニル」更に「グレイプニル」が用意されている。

その他、汎用武器の「スラッシュディスク」を肩部に装備する。

ヴァナルガンダは全長25mにもなる長大な槍状のメイン武装であり、基本的にはこれを振り回して接近戦を行う。

先端部分は、バエル・ソードと同じ素材で錬成されている。

グレイプニルは巨大なレールガンで、2基がバックパックに接続されている。

これは、ダインスレイヴ用弾頭の運用が可能。

アームスヴァルトニルは腕部に取り付けられており、全長5mにもなる巨大なカギ爪である。

肩、腰、足が大きく太いのが特徴だが、腕や胴体は平均的なガンダムの太さと変わらない。

また、全身にバーニアを搭載している為機動力はかなり高い。

名前の由来は、ソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第三十二位の悪魔「アスモデウス（アスマダイとも）」から。

アスモデウスは四大悪魔の1体アマイモン配下の東方の悪魔の首座で、72の軍団を率いる大いなる王だとされる。

また、ソロモン王が72体の悪魔を従える際に唯一反抗した悪魔だとも言われる。

ASWG-41 ガンダム・フォカロル

全高：18.5m

本体重量：34.5t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：トライデント×1

ハーブーン×2

テイザーアンカー×4

ネプチューン×1

概要

アマデイス・クアークの専用機。

水中戦を想定して開発されたが、それ以外でもある程度の戦闘能力を発揮する。

水中でも高い機動力と運動性能、長時間運用を可能にすべく装備される専用装備「ネプチューン」が大きな特徴である。

専用武器「トライデント」と「ハーブーン」、「テイザーアンカー」は、水中での使用が前提とされている。

トライデントは三叉の長槍であり、水の抵抗を受けにくいよう刃は極限まで薄く錬成されている。

ハーブーンは、「水中用ダインスレイヴ」である。ダインスレイヴ専用弾頭を装填し、射出する事が可能。

水中でも高い破壊力が実現されているが、射程は大幅に短くなっている。

テイザーアンカーはテイザーガンとアンカーガンを組み合わせた物であり、腰と両腕

に装備されている。

相手を拘束して電撃を放てる他、様々な用途で活用される。

名前の由来は、ソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第四十一位の悪魔「フォカロール（フルカロールとも）」から。

フォカロールは30の軍団を率いる、地獄の大公爵だとされる。

逸般Peopleさんより頂いた案を元に、設定しました物を使わせてもらいます。ありがとうございます

ASW—G—68 ガンダム・ベリアル

全高：19・0m

本体重量：31・0t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：グラム×1

アンドヴァリ×2

閃光弾×2

概要

ドウォーム・エリオンの専用機。

ギヤラルホルン本部「ヴィーンゴールヴ」の「バエル宮殿」に動態保存されている、エリオン家に伝わるガンダム・フレーム。

専用武器として、「グラム」と「アンドヴァリ」が用意されている。

グラムはバエル・ソードと同じ素材で錬成された剣を更にレアアロイで覆う形となっている大剣であり、基本は両手での運用を前提としている。

ただ、ガンダムの出力なら片手での運用が可能。

アンドヴァリは、膝に取り付けられた迫撃砲。

大剣を持つている為に機動性は若干低いが、強度は折り紙付きなので接近して大剣で攻撃を捌きつつ叩き斬る戦法を取る。

名前の由来は、ソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第六十八位の悪魔「ベリアル」から。

ベリアルは80もの軍団と72の悪魔を率いており、元はルシファーと同じレベルの大天使であった強大な王だとされる。

ASW|G|72 ガンダム・アンドロマリウス

全高：18.4 m

本体重量：29.6 t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ガンダム・フレーム

武装：ナノラミネート・バスターソード×1

迫撃砲×1

マシンガン×1

ビームマント×1

アイギス×1

概要

ロブ・ダリモアの専用機。

機体は黒と白で塗られており、4つ眼かつ4本角。

ナノラミネート・バスターソードによる、近接戦を得意とする。

左利きの機体で、左腕には迫撃砲が取り付けられている。

右腕ではマシンガンを持ち、右肩にはビームマント発生装置と右腕にアイギスが装備

されている。

背中と腰には大型スラスターが有り、バエルをも越える高機動を実現した。

機体はシンプルだが、それ故に扱いやすい。

名前の由来はソロモン王直属の使い魔「ソロモン七十二柱」に於ける序列第七十二位

の悪魔「アンドロマリウス」から。

アンドロマリウスは36の軍団を率いる、地獄の伯爵だとされる。

UGR—G74 マドナツグ

全高：17.3 m

本体重量：35.8 t

動力源：エイハブ・リアクター×2

使用フレーム：ロデイ・フレーム

武装：90mmマシンガン×1

グレイブ・シールド×1

ヒート・チョツパー×1

ハルバード×1

ダインスレイヴ×1

概要

ロデイ・フレームのMS。

オセアニア連邦が開発したガンダムに似せて造られた機体。

ガンダムの残骸を解析し、それを元に量産したパチモン。

要はにせガンダム。

エイハブ・リアクターを2基搭載しているが、これは言わば「ダブルリアクターシステム」なのでオリジナルの「ツインリアクターシステム」のように同調はしていない。僅かな数が生産されたが、現在となつてはその全てが失われている。(とされている) skulheartさんから頂いた案を元に、設定した物の許可を取りました。ありがとうございます。

名前は「ガンダム(GUNDAM)」の逆さ読み「マドナッグ(MADNUG)」らしいです。

鉄華団のメンバーが一人増えましたの設定集

キャラクター編

ここでは鉄血のオルフェンズにはなく、鉄華団のメンバーが一人増えました（通称鉄メン）で出てきた設定もしくはは今作と鉄メンと原作の違う点を書きます。

本作で使うもしくははその為に必要な知識を分かりやすくするために抜粋させてもらっています

本作を見る際に知っておいた方がいいキャラ、そして知っているともっと面白くなるキャラです。

鉄メンの作者であるNT0z先生が作ったものに加えていて募集で集められたものも許可が取れた物のみ集めております。

基本的に鉄メンの情報はコピペです

鉄メンは此方で

<https://syosetu.org/novel/117690/>

アラズ・アフトル 男

鉄華団のメンバーが一人増えました、通称鉄メン（NT0z先生考案）の主人公。

赤髪蒼眼で、身長は高め。

阿頼耶織の手術を3回受けており、猛毒を舐めてもケロリとしている人外。MSやMA、ギャラルホルンについて豊富な知識を持つ。

因みに本作ではこの名前はあまり出てこない。

アグニカ・カイエル 男

鉄華団のメンバーが一人増えましたの主人公、アラズ・アフトルの正体。

「ガンダム・バエル」のパイロットで、ギャラルホルンの最高幕僚長でもある。

300年前の人物。

人類の英雄。ジーク・アグニカ！

因みに暴風竜ヴェルドラを封印した勇者とは別物。だからマツキー、暴走するな。

本作にもファンはいる。

スリーヤ・カイエル 男

天才科学者で、アグニカの父。

「ツインリアクターシステム」を立証し、「ガンダム・フレーム」を開発した。

「ヴァルキュリア・フレーム」などを初めとして、戦艦なども開発して厄祭戦に於ける人

類の戦線を支えた。

300年前の人物。

プラージャ・カイエル 男

天才科学者で、アグニカの祖父。

「エイハブ・リアクター」を利用して作業機械「モビルスーツ」を造ったが、MSが戦争に利用された事から人類に憤る。

人類の結束を促すべくエイハブ・バーラエナと共に殺戮兵器「モビルアーマー」を開発し、起動させた際に死亡した。

300年前の人物。

スヴァハ・クニギン 女

「ガンダム・アガレス」のパイロットで、アグニカの幼なじみ兼恋人。

桃色の髪と金の瞳を持ち、身長は165cm前後。

家事万能で性格も良いが、SAN値の上限が低い。

アグニカ曰く「かわいい」。

——アグニカの語彙力を奪うくらいに可愛さだと思おう。

鉄華団のメンバーが一人増えましたではミカエル戦に於いて、ブレード・ファンネルにコクピットごと身体を引き裂かれて戦死したが、本作では生き残った設定。

NToz先生曰く、アグニカポイント高い——やったぜ。

300年前の人物。

ヴィヴァト・クニギン 男

天才科学者で、スヴァアの父。

アグニカからは「マッドサイエンティスト」と呼ばれており、本人も否定はしない。「魔術的な現象を科学的に発生させる」事が彼の研究であり、実際に成功した為「ガンダム・フレーム」開発にも利用される。

プラーリジャ・カイエルが基礎理論を遺した「阿頼耶織システム」を、難なく実用化させた。

バージニア級戦艦「ゲートティア」に乗り込み、技術長を勤めていた。

300年前の人物。

カロム・イシユウ 女

セブンスターズ第一席「イシユウ家」の初代当主で、カルタ・イシユウの先祖。

「ガンダム・パイモン」のパイロット。

銀髪の美人で、常に帯刀する日本かぶれ。

彼女は麻呂眉ではないが、イシユウ家の遺伝子が300年間頑張った結果、カルタ様に行き着いた。

イシユウ家の遺伝子、恐ろしや。

300年前の人物。

フェンリス・ファリド 男

セブンスターズ第二席「ファリド家」の初代当主で、イズナリオ・ファリドの先祖。「ガンダム・アスモデウス」のパイロット。

黒髪で、身長はクリウスと同じくらい。

前髪が凄い。

とにかく凄い。

凄く長い上に跳ねている。

セットとかはしておらず、クセっ毛とのこと。

300年前の人物。

クリウス・ボードウィン 男

セブンスターズ第三席「ボードウィン家」の初代当主で、ガエリオ・ボードウィンらの先祖。

「ガンダム・キマリス」のパイロット。

髪の色は子孫達と同一。

イシュー家が続いて、遺伝子が強いらしい。

髪の毛がもう訳わからない事になっている。

本人曰く「クセっ毛」らしいが、毎朝時間を掛けてセットしているのではと言う疑惑

が有る。

300年前の人物。

ドワーム・エリオン 男

セブンスターズ第四席「エリオン家」の初代当主で、ラストル・エリオンの先祖。「ガンダム・ベリアル」のパイロット兼、バージニア級戦艦「サロモニス」の艦長。

髪の毛がボツサボツしているが、サラサラらしい。

基本、常に何かを羽織っている。

300年前の人物。

ケニング・クジャン 男

セブンスターズ第五席「クジャン家」の初代当主で、イオク・クジャンの先祖。

「ガンダム・プルソン」のパイロット。

愛すべきバカであるが、頭はとてつもなく回るのでアホではない。

と言うか、普通に有能。

子孫イオクよ、何故バカ兼アホのたわけなどになった？

300年前の人物。

リック・バクラザン 男

セブンスターズ第六席「バクラザン家」の初代当主。

「ガンダム・ヴィネ」のパイロット。

髪をとりあえず伸ばしており、風に靡かせるのが好きらしい。

その事について数時間熱弁したコトがあるが、誰にも理解してもらえなかったとか。

300年前の人物。

ミズガルズ・ファルク 男

セブンスターズ第七席「ファルク家」の初代当主。

「ガンダム・アモン」のパイロット。

フエンリスよりも前髪が凄い。

凄い勢いで跳ねているため、あの前髪には重力が作用していないのではと疑われて一

時期は前髪研究のモルモットにされていた。

300年前の人物。

アマデイス・クアーク 男

「ガンダム・フォカロール」のパイロット。

18歳で彼女いない歴11年齢の童貞を貫いた男。

300年前の人物。

^{たいが}大駕・コリンズ 男

トリントンへのMA襲撃で姉を喪い、MAへの復讐を目的として戦う。

「ガンダム・グラシヤラボラス」のパイロット。

後にミカエル戦でグラシヤラボラスを暴走させ、バエルによって殺された。

300年前の人物。

名無し／サミュエル 男

「ガンダム・アムドウスキアス」のパイロット。

寡黙な天才。

「四大天使」ガブリエル戦に参加したが、その後は消息不明。

300年前の人物。

…天才。

トビー・メイ 男

アグニカとスヴァハに拾われた孤児。

無気力だが、「ガンダム・アンドラス」のパイロットになる。

300年前の人物。

後に本作の主人公であるユウ・タービンにアンドラスを託した事から厄祭戦は生存したと考えられる。

そのあとどのようなルートでアンドラスがユウに渡ったか今は不明。

ルベルト・ノア 男

バージニア級戦艦「ゲーティア」の艦長。

300年前の人物。

ロブ・ダリモア 男

汚れ仕事の代表である「煽動屋」の最大勢力「フヴェズルング」のリーダー。

ヘイムダルより強奪した「ガンダム・アンドロマリウス」のパイロット。

300年前の人物。

レオナルド・マクティア 男

「ヘイムダル」火星基地のメンバーで、「ガンダム・イポス」のパイロット。

変人なのは、元芸術家志望であったから？

300年前の人物。

尚死んだときにはスヴァハへのラブレターを書いていた模様。

遺産を使って財団作ったある意味凄い奴。

鉄華団のメンバーが一人増えましたの設定集 オリジナル戦艦編

ここでは鉄血のオルフェンズにはなく、鉄華団のメンバーが一人増えました（通称鉄メン）で出てきた設定もしくはは今作と鉄メンと原作の違う点を書きます。

本作で使うもしくははその為に必要な知識を分かりやすくするために抜粋させてもらっています

鉄メンと本作両方に出てくる予定の戦艦を乗せますが本作に出てこない戦艦も必要な知識がある場合のせます。

鉄メンの作者であるNTOz先生が作ったものに加えていて募集で集められたものも許可が取れた物のみ集めております。

基本的に鉄メンの情報はコピーです

鉄メンは此方で

<https://syosetu.org/novel/117690/>

《マンリー級》

マンリー級強襲揚陸艦

全長：192 m

動力源：エイハブリアクター×1

武装：2連装主砲×2

対空ミサイル×4

魚雷×4

対空砲×10

艦載可能数：5機

艦載機：ガンダムフレーム

ヘキサフレーム

ロディフレーム など

概要

「ハイムダル」を始め、世界中で運用されている海上戦艦。

5機のMSを運用可能で、武装もそれなりに充実している。

厄祭戦時代に建造され、現在もギャラルホルンで使用される。

《レキシントン級》

レキシントン級大型輸送機

全長：325 m

動力源：エイハブリアクター×5

武装：対空拡散ビーム砲×3

ミサイルランチャー×6

対空砲×30

艦載可能数：40機

艦載機：ガンダムフレーム

ロディフレーム

ヘキサフレーム

概要

「エイムダル」を始め、世界中で運用されている大型輸送機。

全長が325m、翼の全幅は530m。

半永久機関である5基のエイハブ・リアクターを動力源としており、食糧などを考慮しないならば航続距離に制限は無い。

対空拡散ビーム砲と対空砲により、圧倒的な火力を誇る。

《バージニア級》

ゲートティア

階級：バージニア級汎用戦艦

全長：624 m

動力源：エイハブリアクター×5

武装：2連装主砲×4

ミサイルランチャー×8

対空砲×20

クラウ・ソラス×1

カラドボルグ×1

艦載可能数：20機

艦載機：ガンダムフレームなど

艦長：ルベルト・ノア

概要

「ヘイムダル」のスリーヤ・カイエルが開発し、ヴィーンゴールヴで建造されたバージニア級汎用戦艦の1隻。

600 mと言う、スキップジャック級には届かないもののハーフブーク級を上回る巨大な船体を持つ。

ハーフブーク級やスキップジャック級に比べて装甲は少し薄いですが、武装はバージニア級の方が充実している。

特に、右舷側面に取り付けられた「カラドボルグ」と左舷側面に取り付けられた「クラウ・ソラス」が強力である。

カラドボルグはダインスレイヴの強化発展版で、命中しなければ威力を発揮しないダインスレイヴとは異なり、命中せずとも絶大な破壊力を発揮する。

大型化してしまった為ガンダムに載せられず、バージニア級に搭載されている。

クラウ・ソラスは高出力のビーム砲で、その威力は宇宙世紀時代のハイパーメガ粒子砲に匹敵する。

エイハブ粒子の使用量が膨大な為、連発は不可能である。

MSの艦載可能数は20機であり、主な艦載機はガンダムフレーム。

サロモニス

階級：バージニア級汎用戦艦

全長：624m

動力源：エイハブリアクター×5

武装：2連装主砲×4

ミサイルランチャー×8

対空砲×20

クラウ・ソラス×1

カラドボルグ×1

艦載可能数：20機

艦長：ドワーム・エリオン

概要

日本基地で建造された、バージニア級汎用戦艦。
形状、武装は「ゲーティア」と同一。

《ハーフビーク級》

ヴァイシユヴァーナラ

階級：ハーフビーク級宇宙戦艦

全長：403 m

動力源：エイハブリアクター×3

武装：2連装主砲×2

対空砲×4

ミサイランチャー×6

艦載可能数：35機

艦長：アグニカ・カイエル

概要

主力戦艦として「ヘイムダル」時代より現在の「ギャラルホルン」でも運用される宇宙戦艦。

400m級の戦艦であり、最も多く建造され運用されている艦種でもある。

「カイエル家」が個人所有する戦艦であり、ギャラルホルン最高幕僚長アグニカ・カイエルが艦長を務める。

ガンダム・バエルと同じく、白と青で塗装されている。

フェンリル

階級：ハーフビーク級宇宙戦艦

全長：403m

動力源：エイハブリアクター×3

武装：2連装主砲×2

対空砲×4

ミサイランチャー×6

艦載可能数：35機

艦載機：ガンダムフレーム

ヴァルキュリアフレーム

グレイズフレーム

艦長：フェンリス・ファリド

イズナリオ・ファリド

マクギリス・ファリド

概要

セブンスターズ第二席「ファリド家」が個人所有するハーフビーク級戦艦。

300年前はフェンリス・ファリドが、現在はマクギリス・ファリドが艦長を務める。ガンダム・アスモデウスと同じ塗装をされていたが、マクギリスの趣味で白と青に塗り直された。

スレイプニル

階級：ハーフビーク級宇宙戦艦

全長：403 m

動力源：エイハブ・リアクター×3

武装：2連装主砲×2

対空砲×4

ミサイルランチャー×6

艦載可能数：35機

艦載機：ガンダムフレーム

グレイズフレーム

艦長：クリウス・ボードウィン

ガルス・ボードウィン

ガエリオ・ボードウィン

概要

セブンスターズ第三席「ボードウィン家」が個人所有するハーフビーク級戦艦。

300年前はクリウス・ボードウィンが、現在はガエリオ・ボードウィンが艦長を務める。

ガンダム・キマリスより少し濃い紫で塗装されている。

《スキップジャック級》

フアフニール

階級：スキップジャック級大型戦艦

全長：820 m

動力源：エイハブ・リアクター×6

武装：2連装主砲×6

対空砲×8

ミサイルランチャー×12

艦載可能数：70機

艦載機：ガンダムフレーム

グレイズフレーム

レギンレイズ・フレーム

艦長：ドワーム・エリオン

ラストアル・エリオン

概要

800mと言う世界最大の全長を誇るアリアンロッド艦隊の旗艦にして、セブンスターズ第四席「エリオン家」が個人所有する戦艦。

とりあえずハーフビーク級の2倍のスペックを持つ。

300年前はドワーム・エリオンが、現在はラストアル・エリオンが艦長を務める。

元々有ったアリアンロッド艦隊の旗艦はハーフビーク級であったが、ラストアルが司令官となった事でこのファフニールが旗艦となった。

白で塗装されている。

本作のみの設定集

設定集

JPTトラスト編までのネタバレ注意!!

オリジナル機体

一期

ティワズ（タービンズ、イプシロン）

ガンダムアンドラス 第一形態

形式番号 ASW | G | 63

フレーム ガンダムフレーム

パイロット ユウ・タービン

武装 ライフル×2

ソード×2

胸部バルカン

シールド

概要 厄歳戦後半に作られた中々長距離型モビルスーツ。

カラーは白多め。

ライフルとソードは腰に掛かっている。

全体的にピーキーな機体で阿頼擲識の負担がガンダムフレームの中で一番弱いと言
う文献もある。

300年前はバエルの援護をしていたとかしてないとか。

速度以外は他の機体とあまり変わらない。

しかし、後半のガンダムフレームタイプのもビルスーツは何らか特別な力（例フラウ
ロスの変形）を持っているらしいがアンドラスは不明

勘違いしてはいけないのはアンドラス自体は射撃の補正に優れたりしているわけ
はない。元々汎用性に富んだ機体をパイロットの影響で射撃のみになっているだけ
ある。

ギヤラルホルン

シュヴァルベグレイズカスタム

形式番号EB | 05s2

フレーム グレイズフレーム

パイロット ライル・バレル

武装 マシンガン

ワイヤークロー

実体剣

概要 グレイズのエース用の機体であるシユヴァルベグレイズをライル・バレルが改造したもの。変更点はバトルアックスを専用のソードに変えたことと、スラストの強化、カラーを青(紫)から、黒にしたことである。

それ以外は普通のシユヴァルベグレイズとあまり変わらない。

ライフルはガエリオ用の物を参考に行っている。

グレイズファンング

形式番号 EB-06fg

フレーム グレイズフレーム

パイロット ライル・バレル(テストパイロット)

ニール・ガロン(正式パイロット)

武装 ファンング専用アーム

ミサイル

グレイズのあらゆる環境・状況の対応力や、整備性を捨てることによりアームの火力を異常に上げたモビルスーツ。

アームは専用物の為取り回しが悪いが火力は折り紙付きで遠距離の敵はミサイルを対応している間にアームで潰す。というのが基本戦術となる。

特殊なアームのせいか、ろくに武器を持たない。

その上、重量が重いため、重力下でのジャンプの時間は短い。その為、ホバー移動を可能にしている。

ライル曰く非常に扱いにくい機体で一部からは扱いにくいから唯一の部下であるニールに押し付けたと言われている。

名前は独語で「牙」という意味

二期

ガンダムアンドラス 第三形態

形式番号、フレーム、パイロットは第一形態と同じ

武装 レールガン

胸部バルカン

ミサイル付きシールド

概要 アンドラスをユウ用に調整した機体。ユウの得意な狙撃を生かすために無駄（近接武器）を省きシンプルな狙撃型になった。

そして、《スナイプモード》というフラウロスのようにレールガンをほぼダインスレイヴ並の火力で打ち出す事が出来る機能が追加された。しかし、弱点として貫通力があまり

りなくただ破壊する為なので二重装甲等は砕く事が出来ない、スナイプモード中は耐Gが行われれない、二基分のエイハブリアクターをかけているのであまり動けないということ。

獅電改(トート)

形式番号・STH-16

フレーム・イオ・フレーム

パイロット ジョーカー・クロウズ

武装・ライフル

トート専用鎌

追撃砲

ライオットシールド

ガントレットシールド

概要 ジョーカー・クロウズがJPTトラストからそのまんま持ってきた機体。普通の獅電に加えて鎌と追撃砲を追加したのみ

海賊等

シヴァ・ロディ

UGY-R2

フレーム ロディフレーム

パイロツト ヒューマンデブリ他

武装 100mmマシンガン

チョツパーアクス

煙玉

概要

ロディフレームの一種で厄祭戦の時代からあるため阿頼擲識と相性が良い。

装甲は軽く、機動力重視。武装も簡単なのでヒューマンデブリに使われる事が多い。

ギヤラルホルン

グレイズクルーガ

形式番号EB—05sr

フレーム グレイズフレーム

パイロツト ライル・バレル

実体剣

マシンガン

シユヴァルベグレイズカスタムとグレイズリッターのそれぞれのいい点を会わせた

機体。

カルタ・イシユウの使っていたグレイズリッターを使用したため、セブンスターズの中では嫌な機体という認識になっている。

名前の由来は独語で「戦士」

グレイズルデン

形式番号EB | 06gc

フレーム グレイズフレーム

パイロット ニール・ガロン他

武装 マシンガン×2

専用バトルアックス×2

シールド×2

レッグソード×2

元々ギャラルホルンのエースパイロット用としてグレイズから作られた機体。しかし、グレイズの元々の性能の良さとそのバリエーション、レギンレイズの予算に押された為ごく少数しか使われなかった。いわば幻の機体。

名前の由来は独語の「改造」であるウムビルデンから後ろ三文字

キャラクター

一期

ユウ・タービン

性別男

年齢6↓14↓16

本作の主人公。タービンの名瀬・タービンの息子（母親はアミダだとおもっているが彼女は子供が産めない体なので違う）でモビルスーツ操作技術、特に狙撃技術が高い。その事からティワズ内では『ティワズの狙撃手』と呼ばれている。がこれは元々狙撃手が必要だった作戦で腕の良い狙撃手をティワズ内から選ぶときに狙撃手が少ないティワズが狙撃手といったらあいつでしょ。的な感じで言われたのみで腕を認めている者は少ない。

彼の狙撃は悟られず、ライル曰く強さがない。ニール曰く当たって初めて撃たれたと分かる。という狙撃

一人称は珍しく僕でひ弱だが、戦闘等でスイッチが入るとひ弱さが抜けたように強くなる（それでも生身の殴り合いはそこまで強くない）。

ライル・バレル

性別男

年齢24↓32↓34

ギヤラルホルン最強のパイロット。阿頼擲識を着けていて、力を求めている。素行が悪く喧嘩等でギヤラルホルン内でも(特に若者に)嫌われている。機体色は黒を好み、私生活も何も不明。しかし老人には好まれている。

8年前のジェラルド戦火によって名を上げたが、その前からエースパイロットとして有名だった。

なのでセブンスターズ内でも人気が高い。唯一の部下にニール・ガロンがいる。

ニール・ガロン

性別男

年齢25↓27

概要 ライル・バレルの唯一の部下。ライルの部下になる前は礼儀正しくはあったが、モビルスーツ操縦技術が無に等しく、最低ランクだったが、ライルの部下となつてから急に伸びた。

アガート・ベルク

性別女

年齢 名瀬、アミダと同じ

概要 イプシロンの実質の長。(ユウはモビルスーツのパイロットとしては優秀だが人の上に立つ為に必要な能力は優れていない。)茶髪の女性でイプシロンの中では高齢。因みに夫は名瀬。

ジョーカー・クロウド

性別男

年齢 26

概要 元JPTトラストのモビルスーツパイロット。モビルスーツパイロットでは珍しく鎌を使う。モビルスーツパイロットとして優秀でヒューマンデブリが三機で群がってきてても耐えたりした。しかし、女性に全く相手をされずイプシロンの中ではかわいそうな役割。(元々ユウが信用した人間でその女性がOKしなければ触る事も許さないうという事なので、ユウがOKしても女性が嫌がると何も出来ない)モビルスーツパイロットらしく筋肉質な体を持つ

シュイン・ヴァイプ

性別 女

年齢 24

概要 珍しくユウより身長が低い女性で、これまた珍しく相手を名瀬からユウに変え

た。(イプシロンの中でも名瀬は人気でユウとエストは息子として愛されているが稀に名瀬からユウやエストに相手を変えろる女性がいる)元々は黒髪セミロングだったがとある事から金色に染めて、髪を伸ばした。元々はモビルスーツパイロット専門だったがユウの為に事務作業もやっている。ラフタやアジーのようにペインナツツ商会から拾われた訳ではなく親が海賊に殺され、自身が売り飛ばされるか物のように使われるかの所を間一髪ユウに助けられた。タービンスでは珍しい常識人。

エスト・タービン

性別男

年齢 19

概要 名瀬・タービンの息子で、ユウの兄。ユウとは違ってちゃんと自身の母をわかってる。(まだ本編では言っていない)戦い方も正攻法が多く、その分エースパイロットには悟られやすい。簡単に言うとな普通のパイロットと戦うならユウより強いが、エースの場合ユウの方が強い。

アメリカ・エリオン

性別女

年齢 謎

概要 赤い髪の女性でライルとニールの上司。月外縁軌道統合艦隊(アリアンロツ

ド)を率いて、セブンスターズの一人であるラスタル・エリオンの娘。本人は赤い髪(ラスタルの本当の娘ではなく養子だとばれる可能性があるため)染めたいらしいが、ラスタルとある女性に誉められた為そのままにしている。あのライルをうまく使えることからアメリカの指揮能力はラスタルも当てにしている。

ジエラルド戦火

ジエラルドコロニーというコロニーで起こった反政府組織である反ギャラルホルン組織というギャラルホルンに反対していて武力で革命を起こそうとしている組織のうちの一つとギャラルホルンの中でもアリアンロッドとの二つの戦争。

第一戦はギャラルホルンが敵の数を予想出来なかったこともあり、ギャラルホルンの大敗で終わるが、第二戦にて阿頼耶識システムをつけたモビルスーツを真つ黒に塗り替えた一人のパイロットの働きもあり、ギャラルホルンが勝利。今はギャラルホルンが直属で支配しているものの、そのコロニーに潜んでいた反ギャラルホルン組織のメンバーは逃げた模様。

番外編

番外編 その1 鉄華団と僕

大型惑星間巡航船『歳星』。テイワズの拠点である。

そこでは依頼を完遂したイプシロンのメンバーが次の仕事へ移ろうとしていた。

「お前どつかでみたことあるんだけどなあー誰だっけ？」

ピアスを着けた男が目の前に出てきて言う。

確かにあった事がある。まだこの男は記憶に新しい。

ラフタ姉さんが『ピアスのアホ』という男。文字通りピアスを着けた女好きのアホだ。

此方の女性にもちよっかいをかけられた事がある。

下品な人だ。

「そーいやいたなあ。こんなやつ」

そういうのはガチムチ筋肉の人だ。でかくて止まっている船の狙撃に失敗した人。

ラフタ姉さんと仲が良いが。一言言うとう汗臭い。

グシオンさんだ。

「うん。クーデリアを地球に送るときにいた人。ずっと援護してもらってた」

そういうのは黒い髪で僕より身長の低い男の人。

小さいのに物凄く頼りになる。

バルバトスさんだ。

「……ども」

軽く挨拶をして通り過ぎようとする。というか何で僕は絡まれてるの？別に金をせがまれている訳ではないしすぐに逃げられる筈だ。そう考えているとまた何人が来た。

「(増援か！)」

いつも(戦場)の癖で増援と勘違いして身構える。すると

何人もの屈強な男達が来た。間違いない。鉄華団のメンバーだ。

鉄華団団長、美味しそうな名前をした人……僕から見れば当たり前だが男性の割合が圧倒的に高い。

「(くそ……こんなことなら姉さんについていけば良かった!)」

生まれた場所から同性の関わりが無い僕は鉄華団を怖い男の集団と認知している。女性の相手ならお手のものだが男怖い!

アワアワしているとその後ろにいた人間に気づいた。

「父さん!?!」

「おお、ユウ。丁度お前に頼みたい事があつてな」

それならこの男達をどうかしててください。とは言えずコクリと頷く。

それを肯定と見た名瀬は端末を出してくる。

端末を渡されたので、見る。そこには…

「… お見合い？」

多数の名前が書いてあつて、その横には希望する女性と書いてあつた。結婚等の話を此方に持ちかけたのか。

… ふざけているのか。そういう憤りを出来る限り、セーブして言う。

「うちはいつから女性派遣会社になったの？ 父さん。止めてよね。こんなの」

そう言つて名瀬に無理やり押し付ける。後から思えば、名瀬も受ける気は無かつたと分かるがその時は全くわからない為怒りながら言う。

「うちの女性は一夜のおもちゃでも、便利な家事道具でもなんでもない。人だ。その中で僕らを選んだ。それを単なる女性を狼の欲の行き先にしてもらっちゃ困る」

「まあ、そんなのわかっているよ。しかしなあその中にはまともな男がいて女の方も気になるかも知れないだろ？ だからさ、イブシロンの奴も分は第一考査としてお前の目を信用したいんだ。良いよな」

納得は出来なかつたが断る理由が無かつた。

そして、今鉄華団のメンバーと飲んでる。

：． いや。違うだろ。

わかつている。第一考查として鉄華団のメンバーを見ている。

しかし、この状態は：．

そう思つて見ると団長さんの掛け声にあわせて男たちがグラスを合わせた。

「かんぱーい！」

「「かんぱーい！」」

グラス同士が当たると綺麗な音が男臭いせいでグラスが割れたんじゃないかと心配する。

「おーいお前らー！もつと飲めよーほらー！ユウモー！」

いきなり立ち上がった団長が団員に呼び掛ける。それを見ていると此方にも来て、肩をおもいつきり叩きながら言った。酔っているな。メモメモ。

この人はえーと無いな。まあ小さい組織とはいえ、団長なんだ。女性の一人や二人いるのだろう。

見ていくと鉄華団の時間が少ないメンバーが多い。最初のメンバーは元々女性がいたりするのだろう。

そう思いながらきた酒に口を着ける。

「ねえ」

声をかけられたので後ろを見るとそこには三日月がいた。

「バルバトスさん。どうかしましたか？」

「あんだ、何してるの？」

端末を指して隣に座る。

その端末を見せながら言う。

「今回、鉄華団のメンバーの中でイプシロンのお見合いを望んでいる人間を見ています」

そう言つて、端末を三日月の前に出す。

それをなんどか見て、首を捻つて此方を見る。

もしかしたら読めないのだろうか？鉄華団のメンバーは学習してない人が多い。

「えーとこっちには鉄華団のメンバーの名前でこっちにはイプシロンの「わかった」

指を指して説明していると端末をとった三日月がジーつと眺めている。

動かすに。一言でいうとなかなか怖い。

「あの…すみません。実は僕、貴方達の事あまり信用…というか姉さん達の伴侶としては力不足だと思ふんです。まだ貴方達はまだ戦いしか自分の価値を見いだせないし、女性の扱いも慣れていない可能性が高い。何より…名前くらいしか知らない女性を自身の女にするという精神が理解出来ません」

そう思うと自身は物凄く恵まれた人間だ。彼らのように道具にされず、温かい家族に

大切に育てられ、女性がいるのが当たり前だった。（逆に女性を除くと父さんと兄弟しかいないが）

こんな言葉、ほんとうは言つてはいけないことくらいわかつてる。しかし、僕はこの人達の未来より家族の未来を優先する人間なのだ。

そう思つて酒を飲むと、三日月が端末を返してきた。

「どうも。何かあつたんですか？こんなことに興味を持つなんて」

「別に。それよりさ、あんた。信用つて出来る？」

何を言っているんだ？この人。そのような感情が出てくる。信用？確かに鉄華団相手には出来ないが、タービンス、イプシロン相手には十分できている。出来ていなければ、狙撃手なんて不思議な仕事ができる筈がない。

「出来ますよ。貴方達と一緒に戦う時だつて貴方達を信用していました」

狙撃手に背中を預けると言うことは相当信用していななければならないというのとはわかると思うが狙撃手はスコープをずっと覗いているため、視野が狭い。その為狙撃手も信用が必要となる。

誰だつてそうだ。戦場に出ている以上、信用は一番大切な物となる。

仲間に撃たれたらそれこそ終わりだからだ。

でも三日月は此方を見もせず、声もかけずに酒を飲む。

その姿を見てみると、それに気付いた三日月が声をかける。

「だってあんた場所で人を見ているじゃん」

「見ていませんよ。時間で：： 関わりで人を見ていますのです。確かに貴方達の事を信用出来ていません。でも貴方達と長い時間仕事していったら：： 「無理でしょ」なつ：： いきなり遮って来るので驚く。この人の見方はどこが違う。僕とは違う。

「あなたは時間と場所をおんなじにしている。だから名瀬って言う人と一緒にいる人間しか信用しない。だからあなたはタービンズの周りでしか愛されないし、認められない。それでよくテイワズの狙撃手って言えるね。タービンズの狙撃手の間違いでしょ？」

ぐっ：： と怒りを抑え込むがこの人の言っている事は正しい。俺はタービンズとイプシロンのみんなと地球の兄弟しか信用出来ない。

「信用してみなよ。オルガを。俺達を」

そう言つて三日月は違う席へと行った。少なくとも三日月は僕の狙撃を信用していた。だから振り返りもせず任せた。モビルワーカーが集まっているところへの狙撃も信用していなければ自陣へ撃ち込むんじゃないのかと思うのかもしれない。その時は此方へ撃ち込んでも得がないと解釈したのかもしれないが、どちらにしろ自分の狙撃を信用していた。

そこにオルガとビスケットが来た。

「おい！ユウ！もつと飲めよ！ほら！ほら！」

「ごめんね三日月が。なんかあったのかな……」

そう言つてビスケットは三日月の方に行くがオルガがこちらの方へと来る。何？これは新人団員の教育？

そう思いながら見ているとオルガがにやつと笑つて頭をわしゃわしゃした後、また三日月の方へと行つた。

なにこれ？

その後団長さんは二日酔いになりましたとき。

めでたしめでたし

…… な訳がなく、みんなと合流した後三日月さんの言葉を考えていた。

「あんたは時間と場所をおんなじにしている。だから名瀬つて言う人と一緒にいる人間しか信用しない。だからあんたはタービンスの周りではしか愛されないし、認められない」

確かにそうだ。俺は彼らを信用出来ない……

そう考えながら自室にいと急に扉が開いた。

「ゆーちゃん、今後の事なんだけど…」

「アガート姉さん、ノックって知ってる？」

そう言われて苦笑しながらも詫びをしない女性を見る。姉さんと呼んでいるが小さい頃から母さんと呼ばれるような人でタービンスでも高齢だ。戦闘に関しては完全な素人だが事務職が良くできる。

でもノックという物を知らない。

最後の情報はいらぬとして、知識が必要な事は何かと頼る。

「ゆーちゃん。JPTトラストの方から傭兵を派遣したいって言っているんだけど…どうする？」

JPTトラスト。それはテイワズのNo. 2といわれるジャスレイ・ドノミクロスが代表をしている組織だ。(因みにミとコの間にチをいれてはならない)

そのような情報を思い出しながらブリッジにて数人のメンバーで話し合っていた。

彼女達から聞いたことから考えるとあちらは傭兵の訓練といって此方に逆らえない駒を送るつもりなのだろう。という判断だ。

しかしどこか三日月の言葉がユウの頭にはちらついていた。

「あんたは時間と場所をおんなじにしている。だから名瀬って言う人と一緒にいる人間しか信用しない。だからあんたはタービンスの周りではしか愛されないし、認められない

い。それでよくテイワズの狙撃手って言えるね。タービンスの狙撃手の間違いでしょ？」

信用してみようか。いや、信じてみようか。

「姉さん、受け入れよう。此方も人が少なくて困っていたところだったんだ」

「ゆーちゃん!? 良いの!」

そう言って全員が驚く。なかには酒に酔ってしまったのではないかという人もいたが、ハンドガンをくるくる回しながら言った。

「うまくいけばジャスレイと父さんの橋渡しが出来るかもしれない。これはチャンスだよ。それにね、信用してみようと思うんだ」

もし、姉さん達に危害を加えるなら殺すけどね。といった風にハンドガンを構える。

それを見ながら、何人か笑う。アガーテが側の女性に話し掛けるとその女性がJPTトラストへの返事を書き始めた。

それから数ヶ月後イプシロンはジョーカー・クロウドを迎えた。

しかし彼が本当に信用されるまで先になりそうである

番外編その2 アリアンロッド入隊

それは、ライルが地球外縁軌道統制統合艦隊を除隊してからすぐの事だった。アリアンロッドに属するようになったのは。

そのライルの部下であるニールがライルに向けて呟いた。

「……が……アリアンロッド……」

「ああ。ここに来るのは結構久しぶりだな。それこそ5年くらいきてねえ」

フアフニールと呼ばれる戦艦に入り、モビルスーツを預け銃を持った四人の男に導かれながら歩く。この四人はこちらを守るといふより、こちらを撃つ為にいる気がする。

まあ元々アリアンロッドの代表であるラストル・エリオンの政敵であるマクギリス・フアリドが受け継ぐと思われる地球外縁軌道統制統合艦隊（グヴィディオーン）出身なのだ。それこそ警戒するだろう。

そう思つて歩き、目の前に出てきた扉を開けて部屋に入る。

「長旅お疲れ様です。お身体に異常はありませんか？」

そこにいたのは赤髪の女性。背丈はライル、ニールより低い。しかしその姿は女性にしてはしまっている。もちろん戦場に出れるほどではないが小太りが出てくると思っ

ていた分美形の女性が出てきたので驚いた。

その笑顔を見ながらライルは一足前に出す。

四人の男が此方に銃口を向けるがその女性は「大丈夫です」といつて下がらせる。

「おっ！なんだねえちゃん？何者だ？」

敬語じゃないからか女性の眉がピクツと動く。しかし、それを感じさせないように笑う。

「私はアメリカ・エリオンと言います。父はラスタル・エリオンといってアリアンロッドの代表をしています。父からの命令を受けました。今から案内します。着いてきてください」

そう言つて二人の間を通りすぎる。

そして、銃を持った四人に

「ありがとうございます。ここから二人の案内をするので仕事に戻ってください」と言つた。

「待つてください！アメリカ様！流石に危険すぎます！」

「大丈夫です。彼らは今日からアリアンロッドの人間です。兵を信用できない用では指揮など取れません。それに、兵も安心して此方を信じてくれません」

するとその四人は悔しそうな顔をしながらアメリカに拳銃を渡して、それではと言つ

て離れた。

「なかなか肝っ玉の大きい事だ。もし俺が拳銃を持っていたら？ 持っていないなくても二人ともスパイでお前を狙っているとしたら？ それを逃げるか倒せるほど、お前は強いのか？」

「強くありません。ですから貴方達はいつでも私を殺せます」

するとニールをが目を見開き、ライルはひゅーと口笛を鳴らす。

いつでも殺せる。この言葉が意味するものは戦場に出た経験のある彼らだからこそわかった言葉だ。

彼女は死を知っている。それでいて、そういうのだ。つまり、覚悟がある。

信じているのだ。おろおろとするのではなく、どっしりと構えて。

「面白い」

そうライルは一人で呟いた。

そのままアメリカに案内されて行く。

モビルスーツデッキ、指令室、そして此方の個室。

色々な所を廻った後にラスタル・エリオンの部屋の前へと連れてこられた。

「ここには私の父であるラスタル・エリオンがいます。くれぐれも失礼の無いようにお願いします」

そう言ったのでライルとニールは同時に頷いた。

それを確認した後、アメリカは扉を叩いた。

「失礼します。お父様、イオク様。アメリカです」

「入れ」

すると若い男と初老はいつているだろう男の声が聞こえた。

「失礼します」

扉を開けるといたのは想像通りの二人だった。

ラスタル・エリオン。アリアンロッドの司令にて、現在のギャラルホルンで兵力では最強と言われている。

隣に立っているイオク・クジャンも若いながらセブンスターズの一人で自身の部隊を
持っている。

若いせいかなり目立った活躍は聞かない。

するとアメリカが一步前に出て言った。

「お父様、イオク様。二人を連れて参りました」

「礼を言おう」

「ありがとうございます」

そう言つてアメリカは下がる。

そしてラスタルとイオクを見て、値踏みした後にはライルは一步出て言った。

「どうもどうも。ライル・バレル三佐です。：。久しぶりだな。ラスタル・エリオン。ちよいと話をしねえか？別に今からお前を殺そうって事じゃない」

「貴様！ラスタルに何を言っている！」

イオクがすぐ前に出てきて、此方に殴りかかってくる。

若く、セブンスターズの一角として名を連ねるイオク・クジャンのこの拳を止めるものはいないと。そう思っていた。

「至近距離のフック。だが遅い」

しかしそれをライルはガツチリと片手で押さええてしまう。

「！！くそお！」

イオクはまた殴ろうとするがこれを全てライルはいなす。

「ライル・バレル三佐！」

アメリカが二人の間に入ってライルを押し。それでもライルは止まらない。

イオクもニールが必死の説得にかかる。

「勝手に殴って来ておいて俺を止めるか」

「貴方を止めます。止めなければイオク様に何かがあるのか」

アメリカがそういうとイオクが止まったので必然的にライルも止まる。

すると息を切らしながらイオクはラスタルに訴えた。

「ラスタル様！こんな者、アリアンロッドには：：いえ、ギャラルホルンには必要ありません！この場でクビにしてしましましょう！」

「「：：」」

イオクがそうラスタルに叫ぶもラスタルはどつしりと構えたまま、何も喋らない。

するとその様子を見たライルは笑った。

「フフフ：：ギャハハ：：意気地無しだなあ。イオク・クジヤン。それでもセブンスターズの一人か？」

「なんだと！」

イオクがそう言つて殴りかかるがそれを余裕をもつてかわしたライルはそれを通り過ぎて、ラスタルに言う。

「なあ！まさかあんだだけの事しておいて俺に何もなしか？」

「ふっ。わかっている。場所を替えよう」

「ラスタル様！」

イオクが必死にラスタルを止めようとするがラスタルは良いと言つて部屋を出る。

それを見たアメリカも何が起きているのか把握できないのかそのまま突つ立つていた。

何も言えなかった。トントン拍子に進む会話はまるで再生スピードを弄くった動画を見せられているようだった。

そのまま、ライルはラスタルに舌打ちしながら別の部屋へと向かった。

「イオク様。心配なら私が見てきますが」

「…頼む」

イオクがそう言うのを確認して、拳銃の居場所を確認しながら二人を追跡することにした。

「久しぶりだな。ラスタル・エリオン…。もう10年になるのか？…。同じ仕事をやりたりアリアンロッドに入った事はあっても顔を合わせるのはいくらいか」

ライルは手すりに腰を下ろしました顔でラスタルの方を見た。対するラスタルの表情一つかえず、ライルを見ている。

「そうだな。あの時…。ジェラルド戦火の後に貴様に殴られたのが最後だったか」

ラスタルはライルから顔をずらして遠い記憶を思い出す。その頃のライルを。

変わってしまったと気付き、ライルを再び見る。

「俺は今でもあんたの事を憎んでいる。あの時お前が止めなければ彼女は助かっていた。：。お前が雇ったとか言っていた傭兵も顔すら見れなかったが、マトモな事をしなかつたし。よく考えてみれば俺の方がギャラルホルンを勝利に導いている。：。憎んでいるよ。俺は。あんたを。：。けどとりあえずそれは良い。あんたも知らずのうちに父親になつていたみたいだしな。あの女、幾つだ？」

「今年で28になる。戦況を読み取れる自慢の娘だ」

親馬鹿だなと思いつながらもラスタルから目を背けない。こいつも見てない間に父親となつていた。自分の時間が止まっている間、彼の時間は動き続けていた。

「出来れば貴様の力を貸してほしいのだがな。彼女をエリオン家の跡取りとして完璧にするために。それに、それはお前にとつてもプラスとなるだろう。働きで考えれば、エリオン家として活動することも出来る」

ラスタルは身体を口以外ピクリとも動かさず、此方に用件を示してくる。

その様子に嫌気がさした為、手すりから降りた。

そして、その頬を殴った。

回りに誰かいると知っておいて。

あのイオク・クジャンかもしれない可能性があるのはわかっているし、ニールかもしれない。しかし、そんなことは気にしていなかった。ただ、単純に殴った。

「——!!」

「よく言えるな。どうせ彼女に足りない物を俺で補おうとしているのだろう？ 敢えて言おう。ふざけるな今のお前には人を人として見る事が出来てない。駒としか見えてない。だからあの時彼女は死んだし、貴様は俺に殴られた。今お前はそれを繰り返している。そして、今さっきの言葉、それは自身の娘でさえも例外じゃないと言うことか？ それなら願い下げだ。お前なんか俺の人生を決められたくない。その分おかしいけど、真つ直ぐなあの女の方が有能だ。」

そう言いながら心配が消えていくのを感じた。

彼女だったのか。少々悪いことをしたな。と思うと同時に何故今の自分がそういうことを考えているのだろうかと思つた。

「……けど、まあいいよ。あの女を守れば良いんだろ。お前には、どうせやってほしい事があるからな。俺もお前もやらなければならぬ事がある。それを考えておけ。俺は……彼女の意思を継ぐ」

それだけ言つてラスタルから離れようとしたとき、声がかかった。

振り替えると赤髪の女がライルとラスタルの間に入っていた。アメリカ・エリオンだ。

「わかりました。ライル・バレル三佐。貴方はニール・ガロン二尉と共に私の隊に入つて

貰います」

親が殴られているのに表情一つ先程と変わらず此方に用件を伝えてくる。

「殴られたいのか？」

「いえ、この世の中に殴りたい人間なんていません。だから暴力は力なのです。そして、権力も。今回はそれを行使させて貰います。貴方は私の隊に入って貰います。反対は聞きません」

それを聞いた後、ライルは彼女を睨んだ。アメリカはその気迫に押されたのか数歩後退りする。

はあ。とため息を吐いた後、言った。

「わかったよ。パワハラを受けさせて貰います。さてと。もう少し説明を貰うか。色々」と

「はい。わかりました」

そう言って向き合った二人をラスタルは軽く笑いながら見ていた。

ドルトコロニー編

第1話

第1話

ドオオン

鳴り響く銃声。その衝撃か、身体が回る。坂から落ちて赤い線を作った。坂の上では、銃を持った初老はいつているだろう男が笑みを隠しきれずに、笑っていた。

~~~~~

「くっ… また思い出してしまった。」

思い出したくもない思い出。けど恐怖のせいかな、覚えてしまう。思い出してしまった。こういうとき、人の頭は不便だなとは思わずいられた。今があるコロニーに潜入調査中。といつてもやることがないのでほぼ観光だ。このコロニーは資本主義で、資本家が労働者を酷い労働環境で働かせる所だ。一部を除いて。

仕事はこのコロニーの現状などを伝えることだ。つまり、今酷い労働環境の中に僕はいない。コロニーの現状とはいつてもニュースキャスターやテレビ局のスタッフでは

ない。

僕はテイワズという大企業の人間だ。その中でタービンスという、輸送部門の組織の人間だ。しかし、今はテイワズのボス、マクマード・バリストンに指名されたのだ。それも二ヶ月前に。

「たつく……仕事がないところも暇だとはな……」

そう言い、自分の端末の電源をつける。その時に、メールがきていたのに気づいた。

「父さんから？なんだ？」

自分の父親からメールが来ていた。内容はそっちにクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を乗せた船が行くから、その仕事を手伝って欲しい。という内容だった。

「クーデリア・藍那・バーンスタイン？確か火星の独立運動の……」

「ノアキスの七月会議」を成功させたことで有名な人だ。確か、地球の経済都市アープラウの蒔苗氏との交渉のため地球に行くそうだから、その護衛ということだろう。しかし、クーデリア・藍那・バーンスタインかの革命の乙女はこのドルトコロニーの参上を見て、火星の独立と言うのだろうか、それも考えどころだった。

しかし、その護衛の団体の名は聞いたことの無い名前だった。

「鉄華団？テイワズの中でも知らない名だな」

それとも、ほかの団体から入ったのか、にしても、漢字で鉄華団は変わっている。火

ではなくて、華なのか。

とりあえず仕事は受ける。火星の独立運動の革命の乙女の相手もしてみたいし、なんといつてもその仕事をすればやらなかったときの言い訳ができる。

「わかつたつと」

メールの返信を送り、伸びをする。窓の外では、日が出ていた。

~~~~~

「あいつはわかつただつてよアミダ。」

そう男が言うと、アミダと言われた、腹に大きな傷跡がある女は「そうだねえ。あの子ならそう言うと思ったよ」

といい、男を抱き締める。男は嬉しそうに、目を細目ながら、

「オルガを呼んでくれ」

と言った。

「あいよ。」

~~~~~

黄色の髪をした男がオルガと言われた男に通信を渡す。

「オルガ通信名瀬さんからだ」

と言うとオルガと言われた男は

「兄貴が？ありがとうユージン。」

そう言われるとユージンと言われた男は「ああ」と言つて行つてしまつた。

その後オルガは名瀬のいる船（ハンマーヘッド）に行つた。

~~~~~

ハンマーヘッドでは名瀬が三日月と呼ばれる青年と話しているところだつた。

「よう兄弟。」

「どうしたんすか？兄貴。」

そう言つと、名瀬は椅子を勧めた。勧められたとおりに座り、隣に三日月と呼ばれる青年が立つた。

「ドルトのことなんだが、協力者がいる。まずドルトに着いたらそいつの協力を上げ。一人でドルトにいるから……」

と言つたところに三日月と呼ばれる青年が割り込んできた。

「そいつ、大丈夫なの？一人で。」

「どうした？ミカ？お前らしくないな。」

オルガは三日月のことをミカと言う。長い時間でできた愛称なのだろう。

「別に」

嫌つているように聞こえるがむしろ逆だ。この二人はいつも気が通じあつている。

それはすごいことだと思う。(同時に男同士で気持ち悪いとも思うが)

「大丈夫だ。」

名瀬がその質問に答えた。

「モビルスーツ戦ならお前の倍強いから。」

~~~~~

数日後、オルガ率いる鉄華団と名瀬率いるタービンスがドルトに着いた。

「ええ。商業施設があるのなら少し買い物したいと思つて。」

そう言ったのはクーデリア・藍那・バースタイン。そう革命の乙女だ。

「お嬢様それは……」

メイドらしき女が止めようとする。

「いいでしょ? フミタン。いろいろ買っておきたいものもあるし。何より買い物なんて

久しぶりなんだもの。」

フミタンというメイドはそこで止めるのを止めた

「それは……分かりましたでは……一緒に」

それで彼女も納得したようだ。

「えっ?! 買い物?! ……いいな」

見てくれ15歳位の女が言う。

「ならアトラさんも一緒に」

そうするとアトラと呼ばれた少女は「あつ、ほんとですか」と喜んでいる。

その脇でフミタンは少し不満そうだった。

~~~~~

「出るのももう少しだし、最後のドルトということで今日の飯を買つとくか」

そう言う青年は近くの店に行く。大きな店だ。食料だけではなく、服なども売っているらしいが近づいたことがない。理由は青年はそういうところはなにも考えてないからだ。

店に入ると青年は異変にすぐ気づいた。

「なんだ……あの人……もしかしてクーデリア・藍那・バーンスティン？まさか……」

そこで買い物を止めて、服売り場の服の陰に隠れながら観察することにした。

店の窓に二人の男が並んでいる。おそらく買い物が終わるのを待っているのだろう。青年は、自分より背が低い男に目をつけた。

「あれは……阿頼耶職？隣の奴もだ。つまりやつらが護衛か……」

ヒューマンデブリかもしくはヒューマンデブリ並の扱いしかされていない子供たちを護衛に選ぶとは……その瞬間青年は革命の乙女を値踏みした。彼女は少し傲慢だな

と思ひながら。

見ていると店から出た。そのあとを気づかれないようにつけるか……いや、それではストーリーカーと変わらない。護衛にやられるのが落ちだ。最悪の場合それが死になる。じゃあ事情を説明するか？いや、信じてもらえないかもしれない。慎重に慎重に。ならば

「今からテイワズの支部のあるドルト6に行くか……」

そつちの方が誰かに会える確率が高い。まだ彼女だって本物の革命の乙女とは限らないのだから。

結局その後つけるのは止めて家に帰って寝てしまった。しかし、数時間後戦闘が起るとも知らずに寝込んでしまった。彼が起きたのは、デモの音だった。

第1話終わり

第2話

第2話

「?!!」

青年は急に起きた。いや、起こされたという方が正しい。爆発だ。何かはまでは見えなかったが、あそこはギヤラルホルンの方向だ。嫌な予感がする。

「クーデターか? 悪くないといいが。」

爆発何てするんだから悪くない分けねえだろ

そう言つてもう最後になる我が家を見つめた。

「まあここはテイワズの家だからまた来れるか。」

そう言つて、端末と家の鍵等の最低限の物だけリュックに積めて家を出た。しつかり鍵をして。

~~~~~

外に出ると、たくさんの人が倒れていた。いや、死んでいた。その中で一人の女性がクーデリアに抱き抱えられてる。

「うれ：： しい私革命の乙女の：： 手の中で：： まるで物語：： みた」

カクツと彼女の首が、体が力を無くし、倒れる。

「しつかり…… あ…… そんな…… 私は…… 私は……」

その時ものすごい殺気を感じた。

「クーデリア・藍那・バーンスタイン!!」

「……はっ……」

「!!」

ドオオン

「フミ……タン……」

その光景は青年に8年前を感じさせた。

眼鏡を掛けた女性がクーデリアを庇った。その衝撃で眼鏡が吹き飛ぶ。

「このっー!」

腰のホルスターに入れていた拳銃を抜き撃ってきた方向に、撃つ。距離から考えれば、当たっても死にはしない。しかし、それでも、それでも気休めとして。

「おいつ大丈夫か?! お前?! 無事か!」

しかし無事なわけがない。彼女の背中は赤く染まり、もう長くないことを物語っていた。

「はあ…… はあ……」

「フミタン？フミタン……」

「動かないで……。まだ……連中が狙っているかも知れない……」

青年が撃つたことには氣いていないようだ。青年はその二人の会話をどうすることも出来ずに見ていた。

「これじゃあ……。一緒じゃないか……」

自分があと少し早ければ間に合ったかもしれない。自分がその弾を受けれたかもしれない。身代わりになれたかもしれない。

「連中？連中って……。あつ……」

「これは私には……。ふさわしくない。」

「えっ……」

それはクーデリアがフミタンとお揃いで買ったものだが、彼には気づくよしもなかった。

「覚えて……。ますか？私は……。火星のスラムでわざと……。あなたをあなたを置き去りに……。」

「フミタン？」

「だってあの子はまるで昔の私だったから。」

「フミ……」

青年はそこで遠くからの視線を感じた。振り向くと、店で見た阿頼耶職をつけている、青年（三日月）だった。青年（??）は、すみませんとだけ言つて、その場を離れた。クーデリアは彼（三日月）と彼女（フミタン）が守る。自分にもやらなければいけないことがある。

「フミ……タン…… ああつ…… フミタン？ ねえ返事をしてフミタン、フミタン」

その声を聞いたときに青年の頬には水が伝つていた。

「くっ…… どうすればよかつたの？ ねえ教えてよ。父さん…… 母さん…… みんな……」

父さん…… 母さん…… みんな…… 僕は…… 僕は……

~~~~~

とりあえず走つた。走っているとたくさん死体が見える。まるでこっちを見てい
るような顔をしている死体もある。

「（考えるな考えるな……）」

走っているとコロニーの無重力の所についた。そこにはモビルスーツが置いてある。

（作業用ではあるが）

何機かあるなかで一番近い機体を選んだ。

ピッピッピッ

「(データの改ざんとかやられてなければいいけど……)」

先程の恐怖に怯える顔とはうって代わり、一人の兵士の顔になった。

コンピューター部分を端末に接続して、設定する。

「(ううっ……やはりわからん)」

コンピューターについてはあまり知らないので適当にやってみる。

「もういいや。とりあえず満タンだけど、スラスター確認するか」

そう言つてコックピットから出て、スラスターを見る。

「(?!ガスがない?!)」

その事に気付いた瞬間にガスを入れる。しかし、時間がかかる。その上、データ改ざんがわかつたのでどれだけ入れればいいのかわからない。

少し、データをいじりながら、見ていく。

「まあいいかつ」

そう言つて、モビルスーツを発射の体制にする。元々、空っぽな訳じゃなかつたし、さつきまでの時間で結構入った。後はみんなに任せとけばいい。

発進どうぞ等の声はない。それはそうだ。一人なのだから。宇宙を見ると、戦闘が始まつている。スラスターを節約して、ハンマーヘッドの方に行ければいい。後は残酷ではあるがテイワズとして名が売れてしまつているこちらは上手く動けない。それで

も……

「ユウ・タービン行きます!!」

誰も聞こえはしないが、青年は叫び、それとほぼ同時にモビルスーツが暗い宇宙に飛び出した。ユウ・タービン。それが青年の名前だ。

第2話終わり

第3話

第3話

宇宙空間。無重力。戦闘による光。その空間に一機のスピナ・ロデイが飛び出した。回りには何も無い。

飛び出して数秒後、モビルスーツはスラスタからガスを出して、動いた。それと同時に、メインカメラが光った。

「さて……と……どうするか……」

遠くの方を見ると、一機のモビルスーツがものすごい速さで動いている。

「あの機動性……まさか……ね……」

ピーピーピーピー

「?!」

いきなりの音が鳴った。敵か。メインカメラをその方向に向けるとギヤラルホルンのモビルスーツでは見られない、茶色のモビルスーツがいた。

「この固有周波数……まさか……?!」

その固有周波数とあのフレーム。そしてこの速度は……

「ガンダムか!!」

~~~~~

「なんだ?あのモビルスーツ?」

そうガンダムのパイロット昭弘・アルトランドは言った。

ギャラルホルンのモビルスーツには見えない。それにしてもこの阿頼耶職はきつい。

三日月はいつもこんな感じで……

つと思つた所で通信が来た。目の前にいるモビルスーツからだ。

~~~~~

「おい。そのモビルスーツ。名前と所属をいえ。」

ユウはわざと強めに言った。年上だとは思うがあえて強めに言った。あのモビルスーツのパイロットはギャラルホルンのパイロットとは思えない。しかし、こんなときに来るとは思えないが海賊かもしれない。

「昭弘・アルトランド所属は鉄華団だ。」

昭弘というパイロットも強めに返してきた。

(鉄華団……?)

そういえば、父さんが言っていた。父さんの言葉からしてテイワズだろう。

「僕は、ユウ・タービン。タービンスだ。そちらは?テイワズの間人……」

「タービンス!! 名瀬さんのか!!」

驚いている。何かあったのだろうか？

「あつああ。テイワズだ。」

その言葉は彼が仲間であることを物語っていた。

「わかった。そちらの援護をする。」

「ああ。」

少し、驚きが抜けていないようだ。しかし、なんか、変な感じがする。家族でも失ったかと言おうとしたのを止めた。今はそんなことを聞いている場合ではない。

~~~~~

宇宙では、鉄華団が所有するなかでもう一機のガンダムフレームの機体、バルバトス  
がいた。パイロットは三日月あのときの青年。

「まさか！ マニピュレーターで受けただと!!」

ギヤラルホルンの量産機グレイズの攻撃がバルバトスの手によって受け止められる。

ピーピーピー

その瞬間一機のモビルスーツがバルバトスに攻撃をする。その機体はガンダムキマ  
リス。

ガンダムの名を冠する72機の内の一機。

バルバトスは受け止めた、グレイズを持って投げる。キマリスかそのグレイズを弾く。パイロットはガエリオ・ボードウィン特務3佐。

「あの機体……」

「この出力、この性能、予想以上だ。まっそれでなくては骨董品を我が家の蔵から引っぱり出した甲斐がない！」

その突撃をバルバトスはメイスで受ける。

「ぐっ……ちっ。あっ！」

その時、キマリスとは反対方向から、攻撃が来た。シュヴァルベグレイズ。アイン・ダルトン3尉が乗っているモビルスーツ。

「……！」

「ガンダム・フレイム……貴様なぞには過ぎた名だ。身の程を知れ小僧……」

その遠くでは、仮面を着けた大人が一人、戦闘を見ていた。フミタンが死んだのはその男のせいでもある。

「ASW—G—66、ガンダム・キマリス。ガエリオめ、ボードウィン家秘蔵の品を持ち出してきたか。すでに風化した伝説だとはいえ、かつてはギャラルホルンの象徴として世界を守った機体同士が戦うとは、皮肉なものだな」

その男は笑っていた。

「あつ…… くっ！」

シユヴァルベグレイズが放った弾が、バルバトスに命中する。あの技量なら避けられた弾を。それで気づいてしまった。彼は

「……？あえて受けた？なぜあつあれは！そういうことか！」

「やらせるか！ぐっ！くそっ！ランチが！」

アインはそのまま、ランチへと向かう。

「ひい……！」

「ちっ！」

「まずはそつちを！なっ?！」

その瞬間。鉄華団の船、イサリビがアインの前に立ちはだかった。アインは避けるしか無かった

「くっ！」

~~~~~

敵の攻撃から逃げてきた、オルガ達が、合流する。そこには仲間のチャド、メリビツト達があった。

「いいタイミングだったぜチャド！」

「団長！」

「悪い。心配かけたな」

「無事でよかった」

「途中でやられちまうんじゃないやねえかってひやひやだったぜ」

「三日月がうまく引き付けてくれたおかげだね」

「さっどうぞどうぞ」

アトラがテレビの人たちをもてなした。

「え…… ええ」

「誰だ？」

「ああ…… ちょっと訳ありで」

「あのくこれは…… 一体私たちは君らの戦いに加担するつもりは……」

その時クーデリアが言った。

「分かっています」

「……？」

「準備が整うまでここで少しお待ちください」

「準備？」

「私に考えがあります」

そう言うとうと、クーデリアは奥の方へ行ってしまった。

「あっクーデリアさん」

ドオオン

敵からの攻撃により、イサリビの艦内が揺れる。それを合図にオルガは言った。

「早速来やがった。シノ！出られるか？」

「おういつでも行けるぜ！ん？」

その時、オルガとは違う通信がかかる。

「気をつけてね」

シノは笑う。

「へっ！氷の花咲かせんのは当分先だぜ！ノルバ・シノ、流星号行くぜおらあ〜！」

その瞬間雪之丞（おやつさん）とライド（見た目子供）が言った。

「流星号？」

「流星号？」

ハモった。しかも謎で。

~~~~~

ピーピーピーピー

「はっ！この識別コードはクラランクさんのグレイズ！」

出た瞬間良くないおもてなしが来た。

シユヴァルベグレイズはバトルアックスを盾で止める。

「こいつはそんなだせえ名前じゃねえ！このシノ様の流星号だ！」

「あんな厳格だったクラシクさんの機体をこんな下品な色に……許せん！」

撃つたがそれを難なく避ける。

「この反応……あいつも阿頼耶識か！」

~~~~~

「くっ！こういう相手は相性が悪い」

撃つていくが、それをキマリスは、持ち前の機動性で避ける。

「どうした？阿頼耶識とやらでも追いきれないか？とどめだ！」

「……！」

その時迫ってくるランスを止める。

「何!？」

「捕まえ……た」

ガガガガガガ

「放せ！この宇宙ネズミが！」

「ん？この声、あんたチヨコの隣の……」

すぐに声は来た。

「ガエリオ・ボードウィンだ！」

「ガリガリ？」

貴様わざとか！

おもいつきり怒られた。しかし、それは気にしなかった。

「まあなんでもいいや。どうせすぐに消える名前だ」

メイスを振りかぶる。

「甘いーうらあ〜！」

その時、キマリスの肩から刃のようなものが飛び出て、バルバトスに当たる。

「ぐっ…ぐあっ！」

そのまま、ランスを降って、放り投げ、ランチに当てる。

メイスが勢いで飛んでいく、それを青年が受け止めた。

しかし、それに気づかない二機は

「ネズミ相手に大人気なかつたかな。許せよ！」

「ぐっ…」

ピピピッ

通信が入る。

「待たせたな」

「あっ」

ランスを、グシオンの背中を流用した、盾が受け流す。それがランチに当たった。

「なっ!？」

煙からガンダムグシオンリバイクが姿を現す。

「昭弘? それ出来たんだ?」

「ああ。ガンダム・フレーム、グシオンリバイクだ!」

バン!!

それがキマリスの肩に当たる。

「くっ! 新手法」

「助かった。でも速いよあのガリガリ」

「ガリガリ?なんだそりゃ。俺はまだ阿頼耶識に慣れてねえ。3人掛かりでやるぞ!」

「3人? あっ来る」

その瞬間。バルバトスのメイスがキマリスを叩いた。

「ん?」

「ふっ」

「よっど。」

「ぐっ！ああつ」 「ぐう〜！」

~~~~~

「どりゃあ〜！」

「ああつくつくそ〜！」

「……！特務三佐！くっ！」

アインのシュヴァルブレイズが蹴りを入れる。

「くそっ！悪い三日月！そっちに行つた！」

「特務三佐！」

「アイン！」

「させるか！」

その瞬間、どこからか出てきたバズーカの弾がイサリビに当たる。

「「うわっ！」」

「あつ悪い！」

「バカ野郎！てめえは詰めが甘えんだよ！」

「だ……だつて初めてなんだからしかたねえだろ」

「大丈夫なの？」

「えつと……」

口ごもる。大丈夫と言ったところで、信用して貰えないだろう。

「大丈夫です」

そこには赤いドレスに着替えた、クーデリアがいた。

「クーデリアさん？」

「大丈夫って……」

ピピピッ

「あつ？量子暗号通信です」

「通信だと？」

「ノブリス・ゴルドンからですね？」

「えっ？ええ……」

「あんた一体……」

その時クーデリアはあることを考えていた。

~~~~~

「うっ！」

「もらった〜！」

グシオンリバイクの攻撃をシュヴァルベが受け止める。

「ううっ！」

その衝撃でキマリスに当たる。

「アイン！」

「申し訳ありません。余計なまねを……」

「逃がすと思うなよ。」

メイスで殴りかかる。

「グハッ！」

「アイン！なんだ？」

「アリアンロッドの本隊がそちらに向かっています」

そこには何十隻あるのだろう。戦艦がたくさんあった。戦艦だけではない。モビルスーツもだ。

「あれは……」

「三日月……」

艦長さんは続ける。

「これ以上の作戦への介入はいくらセブンスターズといえど問題になります！」

「ぐっ……ここまでか」

そう言つて、ガエリオは、アインを連れて行つてしまった。

「あーあ持つたいねえな。ガンダムフレームは貴重なのに……あつそうだ。このメイス

「あんたのもんだろ。返すよ」

「ありがとう。」

「すげえ数だな」

「逃げてえ〜」

「逃がしてもらえるもんならね」

ピリピピッ

通信だ。

「私はクーデリア・藍那・バーンスタイン」

「はっ……クーデリア？」

「何故？」

わからない。何故今クーデリアが出てくるのか。

「今テレビの画面を通して世界の皆さんに呼びかけています。私の声が届いていますか？皆さんにお伝えします。宇宙の片隅……ドルトコロニーで起きていることを。ここに生きる人々の真実を。私は自分の生まれ育った火星の人々を救いたいと願う行動してきました。けれどあまりに無知だった。ギャラルホルンの支配に苦しむ人々は宇宙の各地に存在していたのです。私はドルトコロニーで自分たちの現状に立ち向かおうとする人々に出会いました。彼らはデモという手段をとりました。しかしそれはあく

まで経営陣……」

「何だ？これは？」

演説だろうか。それにしては……

「しかし彼らが行動を起こした際まるで示し合わせたかのように付近で謎の爆発が起こったのです。その爆発はドルトの人々が起こしたものではありません。けれどそれきつかけに」

「もういい！直接放送局を押さえろ！機材を破壊してでも止めるんだ！」

ギャラルホルンの艦隊の人が叫ぶそれでもクーデリアは止まらない。

「ギャラルホルンは労働者たちに攻撃を開始しました。そしてその戦闘……いえ虐殺は今も続いているのです」

「おい！まだ止められないのか！」

「映像の発信元を特定しました。正面の強襲装甲艦です！」

「来るぞ」

「くっそ…… うようよと！」

「今私の船はギャラルホルンの艦隊に包囲されています。ギャラルホルンに私は問いたい。あなた方は正義を守る存在ではないのですか？これがあなた方の言う正義なのですか？ならば私はそんな正義は認められない。私の発言が間違っているというのなら

ば…… かまいません」

「おいおい、何言いだすんだ？」

「今すぐ私の船を撃ち落としなさい！」

「おいおい……」

「何言つてくれちやつてんの？」

「どつちにしろやる……」

「邪魔するなよ。」

「動くな三日月！」

「おいおいどういうこつた？ヤツら動かねえぞ」

「すごいなあいつ」

「三日月？」

「俺たちが必死になつて一匹一匹ぶちぶち潰してきたヤツらを声だけで……止めた」

「ああ。本当にすごいな……」

~~~~~

「カット！」

「ありがとうございます。いい画が撮れましたよ」

「いや〜これぞ報道だよ。すばらしかった」

そうやってテレビの人は喜んでいる。

「とんだ博打だったな」

「団長さん……」

「だがあんたはそれに勝った」

「勝った…… のでしょうか？ 私は今まで一体なんの勝負をしていたというのでしょうか？」

クーデリアの顔はまだ暗かった。

第3話終わり

## 地球降下編

### 第4話

機動戦士ガンダムティワズの狙撃手

#### 第4話

「ふう〜やつと我が家に帰れた。」

首を右回りで一周、左回りで一周したところでやつと我が家ーハンマーヘッドに来了。約2ヶ月間まじで暇だったからな、あの戦闘でもわかるように鈍ったな感覚が。ちゃんと訓練しないと。でないと、みんなにおいてかれる。

そう思って、考えていると、いきなり、抱かれた。見なくてもわかる。タービンスのパイロット、ラフタだ。

「ほーら。ゆーちゃん。捕まえた♪」

「ラ．．．ラフタ姉さん!!」

その横では、ラフタと違い、クールなパイロット、アジーがいる。

「お帰り。ユウ。」

「ただいま。アジー姉さん。」



ユウはラフタやアジーを姉さんという。それは自分と同じ状況だったからだ。彼女は名瀬の妻もしくは彼女であるがそれは名だけ。どちらかと言えば娘の方が近い。というか娘だ。僕はどの人の腹から産まれたのか知らないがそれでも姉という意識だ。

「どうだ〜ゆーちゃん参ったか〜」

ギユユウ

「うわっ!! いった息が…」  
おもいつきり首を絞められた。口をパクパクしたり脚を叩いたりして、降参を告げるがわかっていないようだ。

「それくらいにしてやんな。ユウが死んじまう。」

「あっそっか」

やっと解放された。おもいつきり深呼吸をして、思った。ああ。空気がおいしい。

「どうだった? ゆーちゃん?」

首絞められてどうだった? は無いだろう。

「久しぶり空気の美味しさを知ったよ。」

煽って見せた。

ラフタがえー嘘だ〜とか言っているのをアジーが止めるのを見ながら、僕、父さんの所に行ってくる。と残し。指令室に向かう。

「父さん？」

そこには、父さん（名瀬）の姿は無く、数人の家族がいた。挨拶をした後に、父さんの事を聞く。そうすると、一人が答える。

「ダーリンならイサリビの方に行つたわよ。」

「へ？」

その顔を見て、少し笑つた後に、ビルトはすぐそこだからと言つた。

「行つてみるよ。」

そう言つて、イサリビに行くことにした。

~~~~~

「悪いな、遅くなつちまつて」

「いえ、こつちこそ面倒かけちまつてすみませんでした」

「気にすんな。それにしてもやつてくれたなあのお嬢さんは。つと、」

「お待たせして申し訳ありません」

名瀬に抱きついているアミダが言つた。

「フミタンのこと残念だつたね」

「…それで出発はすぐにはできないのですね？」

「ああそれなんだが…」

名瀬は少し溜めてから言った。

「予定では地球軌道上にある2つの共同宇宙港のどちらかで降下船を借りて地球に降りる手筈だったんだがお前たちの動きはギャラルホルンにきつちりマークされちゃった。もうこの手はとれねえ」

「じゃあどうすればいいんですか!？」

「おいおいもとはといえはあんたのせいでもあるんだぜ? そんな言い方はねえんじやねえか」

「ユージン!」

ビスケットがユージンを注意する

「いやだつてよ…」

ユージンも引き下がらない

「私には責任があるのです」

「責任?」

「私を信じてくれる人たちのために私は私自信の責任を果たさねばならないのです」

「それは分かっているんですが…」

指令室の扉が開いた。そこにはユウがいた。

「あつ父さん、母さん。」

タービンスの服を着て、指令室に入る。何か大変な話をしていそうだが気にしなかった。

「ああユウか」

「帰って来たんだね。」

「うん。」

そうすると名瀬は、ユウを指差し、オルガに説明する。

「こいつが言っていた、協力者だ。名前はユウ・タービン。俺の息子だ。」

ユウは適当にども。とだけ言って、三日月に近づく。

「ん?」

「バルバトスのパイロットですね。ユウ・タービン。スピナロデイのパイロットです。よろしくお願いします。」

今スピナロデイは、データの改ざんとかされたので、イサリビの整備士に頼んで直している。

「うん。よろしく。」

しかし、ユウは三日月をバルバトスのパイロットと気づくということは、見たということになるが、ユウは三日月を初めて……いや、バルバトスのパイロットであると知ら

ないはずだった。

「知ってたのか？」

そう言うとうユウは首を振って

「感覚で。」

とだけ、返した。

「かんかく…？」

オルガは首を傾げたが、ある音がその考えを急に終わらせた。

ピピピッ

オルガは考えるのをやめて、なんだ？と聞いた。

「エイハブ・ウェーブの反応。船が近づいてきます」

「ギャラルホルンですか？」

「なら1隻つてことはないだろう」

「接近する船から通信が届いていますが」

「正面に出してくれ」

「うおっ！」

その瞬間見たことのない男が出てきた。

「あの男…」

しかし、クーデリアだけはその男を知っていた。

「突然申し訳ない。モンターク商会と申します。代表者とお話がしたいのですが」

「タービンスの名瀬・タービンだ。その貿易商とやらが一体なんの用だ？」

「ええ。実はひとつ商談がありまして」

~~~~~

「改めましてモンターク商会と申します。またお会いしましたね、クーデリアさん」

「そう言つて男はクーデリアを見る。」

「知つてんのか？」

「いえ…少し」

「で、商談つてのは？」

「私どもには地球降下船を手配する用意があります」

「はあ？」

その時ユウは名瀬の脇腹をつついた。

そして小声で、

「(父さん。これって…)」

名瀬も小声で返す。

「(ああ…)」

「あなたの革命をお手伝いさせていただきますのでクーデリア・藍那・バーンスタイン」

「パトロンの申し込みか？こいつは商談じゃなかったのか？」

「もちろん商談です。革命成功の暁にノブリス・ゴルドン氏とマクマード・バリストーン氏が得るであろうハーフメタル利権。その中に私どもも加えていただきたい」

「ノブリス？」

ビスケットは首を傾げるが、名瀬は納得している。

「なるほどな」

「いかがでしょうか？」

「まだ始まってもない交渉が成功すると？」

「少なくともドルトコロニーではその兆しが見えました」

「返事はいつまでに？」

「あまり時間はありません。なるべく早いご決断を」

その時、ユウは彼を目に焼き付けていた。彼の仮面の裏の顔は、そう遠くない未来に  
関わる顔だったから。

~~~~~

「モンターク商会：：100年以上の歴史を持つ老舗、なんの問題もない企業だ。表向

きはな。あいつらまた厄介なことに巻き込まれやがって……」

百年以上、なんの問題もない。その言葉からユウは疑問を抱いた。

「手のかかる子ほどかわいいんだろ？ あんたはさ」

「でなきやお前みたいな暴れ馬に恐ろしくて手は出せないさ」

「ふふふっ」

その瞬間ユウの疑問は他のものにかわった

「(母さんって暴れ馬か?)」

「父さん。母さんって暴れ馬かな？」

「……」

「……」

「(僕はなんか悪いことでも言った?)」

~~~~~

「モンターク商会の件、取れるだけの裏は取ったがそれでも危険な賭けだぜ」

「分かっています。それでも……」

「他に手はないのでしょ？」

オルガが思っていたことをクーデリアが言った。

「利用できるものは利用させてもらいます」



「…………… 確かに。毒を食らわばか……………」

「じゃあ兄貴」

「ああ、商談成立だ」

第4話終わり

## 第5話

機動戦士ガンダムティワズの狙撃手

第5話

プシユー

扉が開く。

ここはギヤラルホルンの船名前は…… 忘れた。確かハーフなんたら…… だったような気がする。

「こい。カルタ様がお待ちだ。」

こいつらはイシユー家の跡取りカルタイシユーに尽くしているやつらだ。俺から言えばただの馬鹿。

「ふうーやつと出られる…… ってかてめえ階級は？」

「貴様に言う義理はない！」

嫌われている。俺はモビルスーツの操縦のみでギヤラルホルンに位置している。血の気も多く、喧嘩ばかりな為嫌われている。がそんなことどうだっていい。

「まあいいや。俺は上官だ。敬語を使え敬語を。」

「グツ……… わかりました……… ライル・バレル三佐。カルタイシュー司令が……… お呼びです………」

「がはっはっはっはっ!! 笑いなものだ!! これは! わかったよ! 行ってやろうじゃないの! カルタイシュー司令のもとにな!」

「グツ……… 私は……… なんてことを………」

「ギャーはっはー! さっきの思いだしまつた! はーおもええな!」

そういつて、奴は行つた。カルタ様も「あんな者は要らん!」

といつておられたがマクギリス特務三佐が頼み込んだ為、承諾することになった。どうなつてゐるんだ……… 確かにあいつの腕は凄い。一人でこの部隊も全滅できるかもしれない。と思つてもおかしくないほどだ。どんだけきつい訓練を受けてもあいつには追いつけない。なのに奴は訓練のくのじもやってない。天才つて奴だ。

~~~~~

「よう! カルタし・れ・い」

さつきまで上官には敬語を。とかいつていたくせに自分は使わない。

「きつ……… 貴様!」

その態度にカルタも怒つてゐる。

「あーれれーおつかしいなー俺を呼び出したのはあんだだろ。何で怒つてゐるのかなー

！」

対してなんとも思っていない為かまだ挑発を続ける。

「貴様はモビルスーツでクーなんちやらを殺せばいい！それ以外は干渉するな！」

「はいはい。嫌われものですねー俺も。まあいいよ。そのクーデリアってやつ、俺の女にしてもいいんだろ。」

「社会的に死んだことにすればいい。早く戻れ！戦闘になったら言うからな！」

「はいはい。」

面白くなりそうだ　　————

~~~~~

「クーデリア・藍那・バースタイン。」

「はい。なんででしょう?」

ーあんたの事を嘗めていた。すまないー

そう言おうとしたのを止めた。彼女は今、成長しているあのときの僕のように。だから必要以上に干渉しない方がいい。

「いや。あつてみたかったとでも言っておこうか。革命の乙女ー色々聞いていたからな。」

「そうですね。」

「僕はあるたを信用している。けど、もし俺の家族に手を出すなら、それが命令でなくても殺す。覚えておけ。」

「はい。」

そう言つて行つていく彼女の背中を見ながら

(僕は……なんであんなことを…… 馬鹿だな。)

と思つた。

そのまま彼はハンマーヘッドへと戻つた。

~~~~~

「お前はクーデリアの護衛……つて鉄華団の手助けをして貰えないか？」

「やだ。」

「即答だな……」

ハンマーヘッドに戻り名瀬との最初の会話がそれだ。親子つて感じがないな。

「どうしてなんだい？別にあの子達悪い子じゃ……」

「だって……みんな来ないんですよ。やだよ、一人で放置なんて。」

その時そばで聞いていたラフタが飛びつく。

「大ー丈夫♪お姉ちゃん達がついていってあげるからー」

「なら……いいけど……百里でいくの？それって私たちはテイワズの間でーす

!! って言っているようなもんじゃん。」

「……」

黙る。なんか泣きそうな目してるんだけど……冗談だよな。

「やめてよ。そんな目しないでよ。僕が悪いことしたみたいじゃん。」

「まあなんとか言っておくさ、よろしくな。ユウ。」

「……」

「「……」」

「なんか……言おうな。」

その後了承しました。

~~~~~

話は固まった。もうすぐで地球に行ける。ってかどうしようかな。あいつらの扱い。

しっかし……それよりも……

「……」

(イサリビ行ったりハンマーヘッドに戻ったり……疲れた……)

てかさ、帰ってきてきて弟の船があるからって連絡役に何度も行き来なんてありか

よ……

今日はもう寝ます！別に悪くないし！

それでもそこにかにも頼み事があるよ的な雰囲気であーが来る。

「あつユウ」

「(逃げろ!!)」

「バレてるぞ……ユウ」

「イサリビにはもういかないよ。」

「……あつちの整備士からだ。モビルスーツの整備が終わったって……」

「イサリビ行つてくるね。」

そう言つてすぐ横を駆け抜けていった。

「ったく……」

「ゆーちゃん、戦闘ばつか頭の中にあるからね。」

そういいながらその背中を二人で見つめていた。~~~~~

~~~~~

イサリビに来て早速モビルスーツデッキへと行く。

「おやっさん」

「あ?」

名前は違うらしいが彼の事を皆がおやっさんつて言うから僕もそう言つてる。

「モビルスーツ。」

「あ？ああ。」

そこには来たときは見た目は変わらないがスピナロデイがあった。

「調整はやってくれたようだけど……武器は？」

「腰のやつだけでいいか？」

「えーと……あのライフル……くれない？」

指で差した先には滑空砲があった。

「あれか？……ああ。持ってけ持ってけ。」

「これで準備は……まあいいか。後はコックピットで待ってます。」

その後これからの事を考えていた。

~~~~~

その後金髪の人達が頑張って時間を作ってくれた。

その間に地球に降りる。まあ無駄な戦いは避けるべきだな……

「攻撃!？」

「どこからだ!？」

しかし、バレたつばい。攻撃された。

「よく見つけた、アイン」

「ネズミのやり方は火星から見てきましたので、それもここで終わらせる!」



「うおおく!!」

「あいつは任せて」

「ふっ」

「こいつには借りがあつからな! うおっ!」

二人が別れた。つまり、この船はあの筋肉さんと僕で守るのか。筋肉さんも狙撃手つ

ぽいし…… 大丈夫かな。

「シノ! …… !? くっそまた来た」

「昭弘! ユウ! 行けるか!」

「僕もかよ!」

「行けるかだと? 行くしかねえだろ!」

二人が一斉に撃つ。それは昭弘のはかわされユウのは一番近くに当たった。

「感覚が……」

「ちよこまかと!」

「くっそ数が……。 なっ!」

「この程度で……。 !」

その時謎のモビルスーツ二機が手助けをしてくれた。

「あ……。 あんたらは?」

「姉さん！」

「ごつめんごめん。装甲の換装に時間かかってさあ」

「遅れた分の仕事はするよ」

「なっなんで二人が!？」

でもユウは当たり前的な雰囲気だ。

「ダーリンにあんたらのこと頼まれたの」

「ならその機体は……」

「百鍊を持ち出せばテイワズだどこつちから名乗ってるようなものだ」

「これは百鍊改め漏影ってことでうちらともどもよろしく！」

「すっすげえ……」

しかし、いきなりの砲撃で攻撃が止む

「うっー！」

「ん？敵モビルスーツ三機？よし。あいつらは僕がやる。他は頼む。」

「ゆーちゃん！スイッチ……」

「話は後できく。」

通信で「もー！」と怒られたが気にせず行つた。

~~~~~

「てめえら仕事しろよ。せめて俺の足を引つ張るな。」

「当たり前だ！そこで黙って見てろ！」

そう言つて二機がこちらにきたモビルスーツ一機に狙いをつけた。

「ふん！貴様ら火星の……」

「うるさい。」

攻撃を軽くかわし、敵モビルスーツのコックピットにめがけて撃つた。それはコックピットに穴を開けた。パイロットは死んでるだろう。

「きつ…… 貴s・・があっ！」

もうひとつの機体にも、数秒とかかからず終わらせた。

「あいっら…… 俺の足ばつか引つ張りやがって…… フツ！俺が仕事してやんよ！」

「あの機体…… グレイズ？…… なのか……？」

「このシユヴァルベグレイズカスタムでな！」

第5話終わり

第6話

機動戦士ガンダムティワズの狙撃手

第6話

「このシュヴァルベグレイズカスタムでな！」

「新型か……」

なんか名前言っちゃってるし。聞いたことのない名前だ。

「エースか…… なら！この距離で！」

その時敵のモビルスーツもランスに内臓されているライフルを見せた。

「勝てる…… 思うな！」

バンバンバン

弾は3つ。この距離じゃ何も起こらないだろう。

そう思い、スコープのみをかばい腕に当てる。

—その瞬間。敵は目の前にいた。

「
!!」

「嘗めるな！」

コックピット近くを蹴られた。この行動から見るに敵は接近戦の方が得意ということになる。

クルリと回転し、上手く弾の弾道をずらして、新型に当てる。

「ほう……見かけより出来るようだな」

楽しんでそうさ。

「はあ…はあ…」

(この距離でも近づかれる…どうすれば…)

ひとまず、急に迫れない距離まで離れる。

「どうした！ここまで来なければ勝てないぞ!!」

わかってている。しかし、生き急ぐことはない。僕は、狙撃手。この武器なら…勝てる。

狙撃。古代から接近するより早く敵を倒せるということでも重宝されていた。現代でも暗殺等幅広く扱われる。しかし、それはナノラミネートアーマーモビルスーツに囲まれたMS相手では非力すぎる。禁止兵器レベルでなければ、狙撃手も気を引いたり、援護程度にしかならない。つまり、一人での作戦には向いてない。そのため、MSモビルスーツ戦は大体が接近戦なのだ。

でも、それはある戦闘方法を知らない人間の解釈。

ユウはスコープを覗く。彼ほどの狙撃手ならば、敵の狙い目を考えなくても見つければいい。

先ほどナノラミネートアーマーに囲まれたモビルスーツ相手では非力すぎる。と言ったが、それは、厚い所の場合。禁止兵器程出なくとも、薄い場所ならば易々と風穴を開けられる。

その薄い場所の良い例はモビルスーツのコックピットの上。あそこうまく弾を入れれば、一撃でパイロットを殺せる。モビルスーツ事態を爆破するわけではないが、パイロットがなければモビルスーツも金属の塊。相手にならない。

その他にも、間接、付け根等狙いやすいところはいくらでもある。腕の良い狙撃手はそこを狙う。

そうすることで厄祭戦でも天^{モビルアーマー}使の討伐に成功している。無論。狙撃手一人で。

「……」

狙いは一撃必殺の場所。コックピットの開閉する場所。少し動かなければいけないが、そこでじっとしているのが狙撃手って訳ではない。

バアン

一発撃つ。その弾は、コックピットの一番厚いところに当たる。それで、相手のモビルスーツの動きが一瞬ではあるが止まる。その一瞬を生かすのは……僕だ。

すぐに、相手のモビルスーツのコックピットの一番装甲が薄い所に狙いを定める。そのまま撃つ。しかし、それは盾に防がれた。

ライルは考えていた。

「訓練を十分に積んだ狙撃手……本当に鉄華団の人間なのか？」

鉄華団とは最近になって出てきた企業である。つまり、あそこまで訓練を積んだ狙撃手がいるとは思えない。その上、他からだとしても、こんな小さい企業に協力するとは思えないし、あのお嬢様が雇ったとも考えにくい。

さつきは防いだが、これが続くと思うと……考えものだな。

そう考えながらも笑っていた。

「チイッ！」

盛大に舌打ちした後、狙いを敵の武器のライフル部分の銃口に変える。

そのまま、少々ずらして撃つ。

そのままライルのモビルスーツのライフルが火を噴いた。

宇宙なので、ライフルの中に入っていた、少ない空気だった為、一瞬だった。しかし、気づくのは早かった。

「なっ…！」

考えられないだろう。銃口を狙って弾薬のケースが火を噴いた。つまり、もう使えない。

やはり、相当な狙撃手なんだろう。そう考えるとやはり、おかしい。つまり、何らの企業と鉄華団は繋がっているということだろう。何故だ。

ギャラルホルンに喧嘩売っている辺りから鉄華団という新しい企業は潰れるのを待つだけだろう。圏外圏で活動しているならまだしも…

それに協力するなんてお人好しいるわけが…

いや。待てよ。ハーフメタル目当ての可能性がある。つまり、あんな狙撃手がいるってことは大企業。それもハーフメタルが欲しいお人好し企業。となるな。調べなければ。

死ぬ気は微塵もない。しかし、この狙撃手を殺す気は物凄くある。

今シユヴァルベグレイズカスタムの腰にかかっている、剣はあまり抜いたことはないが、今一番使いやすく、強い武器だ。ここまできて、手を抜かれると困るのだが…まあ

大丈夫だろう。

「……殺すぞ。」

「この俺に剣を抜かせるとは！ 実力者と見た！」

「剣士!?! しかも…この速度！」

奴は剣を抜いた瞬間、スラスター、肩、腰のパーツが移動した。そこから小さなスラスターが出てくる。スラスターは面積が増える。空気抵抗がある地球では面積が増えるのは空気抵抗を増やすような物だが、宇宙ではパージするより、経済的には良い。

わかるようにスピードが早くなった。

剣を抜いて一瞬。剣の先端が太陽の光で輝いた一瞬。

モビルスーツのアンテナが吹き飛んだ。

避けようとスラスターを使い避けた瞬間。勿論、瞬間移動のようなものではない。目で追う事も出来た。けど、一瞬の気の緩みに潰け込まれたため、逃げることは出来なかった。

「(っ)っ…殺られるー！」

そのスピードをほぼ緩めず、Uターンして切り裂く。

肩、膝、腰といろんな所に剣がかする。

その度、微調整をしながら迎え撃つが、避けられる。

これが奴の本気……。

相手の攻撃をかわし、決定的な攻撃をせず、相手が乗ったところで終わらせる。あれは、見せかけだったのか……強い。感覚が鈍っている上に機体の差が埋まる所か広がっている。勝てるわけがない。

「(彼奴さえ……いたならな……)」

腕を引き裂かれ、腰のパーツは吹き飛び、膝がおかしな方向に曲がって、もう人形のモビルスーツとは思える状態ではなかった。

外見だけではない。コックピットの液晶は割れて、下半身のモーターが死んでいる。

そのまま殺られた振りをしていた。

そして、最後となるであろう通信を開いた。

「ん？ ゆーちゃんからの……通信？」

嫌な予感を感じていたが開いた。

案の定ヤバイみたいだ。

「姉さん……逃げて……ヤバイやつがいる。」

「?どうした?」

「言つたとおり。こいつはさすがに不味い。皆はさつきと地球に降りて。僕はこ…」

こいつを引き付ける。そういおうとした。

二人とも、僕の戦闘方法を知っている。一人で戦えると知っている。

でも、ヤバイやつって言うのは勝てないということだろう。とはバレている。反対を言われるだろうから押しきろうと考えていた。でも、その考えも数秒で消えた。

「駄目!」

「ゆーちゃんは家族なんだから。絶対に地球に行くんだから。地球って綺麗なんだから!絶対連れていくから!」

「でも…」

「そうだぞ。ユウ。お前は私達の家族だ。置いてきぼりなんてできる筈がない。」

「姉さん…」

家族って良いな。

ここに産まれて良かった。

そう。だから、誰の腹から産まれたかはどうでもいい。

ここで産まれて育つことが出来たのが嬉しい。

「それにだ。ユウ。名瀬からの伝言だ。もうすぐで着くそうだと。」

「彼奴が!？」

「ああ。だから敵は私達に任せな。気を引くくらいなら!」

あいつー シュヴァルベルグレイズカスタムが漏影×2を見つける。不味い。姉さん達の實力だと…

「行くよ!アジール!」

「わかった!」

信号弾を打ち上げた後、戦闘を開始した。

奴のスピードに翻弄されず、攻撃を弾いて、突っ込まずにいる。あれでは奴は倒せないが倒される事もないだろう。

少し心配したが、大丈夫の用だ。その間に父さんに通信を取りたいが、チャフがあるなかではあまり信用出来ない。

仕方なく、滑空砲を残り一つの腕で担いで、防衛の方に回る。

「嘗めえるな!」

奴の自慢のスピードで、ベビークラブを弾く。

その後、ワイヤークローで脚を狙って弾く。

「いっしょ!」

「私達は障害物程度にしか思っていないようだ。」

二人でも、ちょこまか動かささないようにするだけで精一杯だった。

「貴様らなど！」

そう叫んだかと思えば、回ってきた。

刀を斜めに向けて、弾を弾く。

その勢いで、突破された。

「ゆーちゃん！危ない！」

気づかれた。

滑空砲を離す。

敵の勢いは止まらない。

アジー姉さんの言葉からもうすぐ来る筈だ。

そこまで耐えれば良い。

敵の攻撃を決定打を打たれないように、微妙にかわそうとする。

奴のスピードからだど、守れる訳ではないが……時間稼ぎ程度なら。難しくはない。

「待てー！」

二機の漏影が間に入ったたりして、守ってくれる。が、時間をかけながら、突破してし

まった。

不味い雰囲気だ。このままだとコックピットごと貫かれる。でも笑っていた。近くに反応がある。来たな。

「貫つたああああ！」

「悪いが……時間切れだ。」

その時だった。

何処かが輝いたと思えば、エイハブリアクターを積んだ何かがとんできた。

それは二機の間に入って、展開した。中から純白のモビルスーツが出てきた。

ユウの顔は輝き、ライルは首をひねった。

ユウはスピナロディのコックピットから出て、言った。

「待ってたぜ！相棒！」

このモビルスーツこそが彼の奥の手である。

AGW | G | 63ガンダムアンドラス。ガンダムフレイムの機体だ。

地球編

第8話

俺は呼び出された。

相手は簡単あの馬鹿指揮官様だ。

「よ・うカ・ル・タ・指・令どうした？」

「貴様！ 作戦に参加させてやったのに！ なにもしなかったわけ！」

怒ってるようだ。けど、そんなのどうでもいい。確かに逃げられたのは気に入らない。強さが足りなかった。ただそれだけだろう。

「したね。けど、相手は強いよ。アンタじゃ返り討ちに会うくらいにね。」

「何!? 我等地球……」

「馬鹿にするわけじゃない。あんたらより、俺が強くて、それ並みに鉄華団はしぶといつて……」

そういう司令の言葉を遮り、言っちゃった。

「けどね。俺も気に入らない。力が欲しい。すべてを押し付けられる決定的な力が。だから次の作戦も手伝うよ……但し、俺の目標はクーデリア。それ以外はあんたらが好きに

やれ。」

その後、地球に降りる準備をした。会いたい人がいる。勿論、その人は宇宙にいるが、鉄華団を追うなら、地球に行く。ならば待ち構えてやる。

「それじゃ、俺はあんたらについて行って、ボロボロになったクーデリアを確保、もしくは殺す。それでいいな。」

了承の声も聞かず、地球降下の準備を始めた。

奴の背中には3つの出っ張りがある事を数人に気づかせるように振り向いたあと。

大変な事もあったが、まあ誰もかける事なく地球に着いた。

機体をおろした時12月のあの日なら「サンタだ!」とか子供が叫びそうな叔父さんが来た。

なんかくれたそうだけど。あつ魚だ。

魚と言えば、父さん達が地球に行った帰りに一度貰って、食べたことがある。なのでこの魚も……

へ?なにこれ?

こんな薄っぺらい魚はじめて食べるや。

鉄華団の人たちは引いてるようだけど…… あっ美味しい。

三日月さんがなんか怒られるけどほっとこう。

その後着替えて、アンドラスの整備を手伝おうと思ったが雑用程度にしかならなかった。

仕方がない。宇宙にいたときも雑用くらいしかやってなかったしな。

「ゆーちゃん。」

そこに、タービンズ3人娘……（ゴホゴホ）の一人であるエーコ・タービンが来て話しかけた。

「どうしたの?」

「これからどうするの?」

「え?」

今使えるモビルスーツはバルバトス、グシオン、アンドラスのガンダムフレームの機体と、グレイズ改式、漏影が二機で合わせて六機。その上、スピナ・ロデイとグレイズリッターも動きはしないが少なくともエイハブリアクターは使えるとのことだ。あと、装甲も使えるだろう。

そう考えると、大抵の仕事は行える気がする。なんか安全そうだし、モビルワーカーもそれなりにあるため、戦略戦も行える。

「戦う。それが仕事だし。」

「うん。そうだよね……」

その後休憩を挟みながら作業していたら日が暮れていた。

「おやつさん。アンドラスのライフル……」

そう言ったが、おやつさんがいない。回りを見渡すと、参謀の美味しそ（ゴホゴホ）ビスケットさんと話していた。

「どうかしたんですか？」

「ああ…… まだやってたんですか？」

「ああ。タービンスのエコーって子に言われてな。地上戦闘用のサスペンションをいじってたんだ。俺が役に立てるのはこれくらいしかねえしなあ。あつ？どうかしたか？」

「あついえ…… ちょっとオルガとぶつかっちゃって……」

その言葉に驚いた僕は手に持った工具を落としてしまった。

「えっ！」

「……」

しかし、おやつさんはあまり驚いて居ないようだ。

「どうかしたんですか？」

「うん…… まあね……」

その後ビスケットさんは話始めた。

内容は

団長のオルガさんがみんなの危険を省みず、危険な選択―蒔苗の護衛。という提案について喧嘩をして、鉄華団を降りる。という選択をしたそうだ。

ユウ自身、オルガとビスケットがどういう関係かは全く知らない。団長と参謀の衝突なんて最近出来た企業ならあってもおかしくない。

けど、降りる。という選択肢を入れるということは……

「本気で言ってるのか？鉄華団辞めるなんて」

「オルガは前に進むことしか考えてない」

「今に始まったことじゃねえだろうそいつは」

つまり、オルガさんはいままでこんな作戦を思い付いてきたということか……

それなら、僕でも止めはするだろう。それと同時に自分達の力を過信しすぎてしまうかもしれない。

実際、鉄華団はティワズさえなければ、歳星に行くまでに全滅だろう。ガンダム・フレームの力も大したものだが、その時期はバルバトスしか無かったようだし…… ほぼ運

だろう。

「そうですね……そして実際オルガはみんなを連れてここまで来た。けどそれはただ運がよかつただけかもしれない。いつまでもそんなふうまくいくかどうか……もつと穏やかな道を選んでいくことだってできるはずなのに……」

「……」

反論できない。ここなら、違います。といたいところだが、正論過ぎて言葉が出ない。

「そうかもしれない」

「でしょ？」

「けどそうじゃねえかもしれない。先のことなんか誰にも分からねえよ。オルガだってビクビクしながら前に進んでんだ。勘違いするんじゃないぞ。鉄華団はただのラツキーだけでここまでやってこれたんじゃねえ。オルガがいてみんながいてそしておめえがいたからだ。ちゃんとオルガと話してみろよ。いつもそうやってきたじゃねえか、なあ？」

「ユウ！敵だ！」

「敵？ギャラルホルン？」

その声で気がつくときアジールがここまで来て、喋っていた。戦闘。戦わなければ。
「多分な。どうする?」

「戦うよ。アンドラスは出せる?」

その時、エーゴがアンドラスを差して

「出せるよ!準備して!」

と言った。

「ビスケットさん。」

その言葉をかけたとき、ビスケットの頭が持ち上がった。

「僕は鉄華団の誰も殺させはしません。それが仕事ですから。」

そのまま走ってアンドラスに乗り込み、機体を起動する。

「ユウ・タービン!ガンダムアンドラスでいきます!」

「逃がしはしないわ鉄華団、このカルタ・イシユウの名に賭けて! 我等、地球外縁軌道

統制統合艦隊!!」

「二面壁九年、堅牢堅固!!」

「さあ、捻り潰してあげるわ!!!」

「さあ見せてくれ鉄華団。俺の目が節穴かどうか。さて、本命はどこに行くのかな？」

第7話

「待ってたぜ！相棒！」

すぐにコックピットに乗り移る。

仕方ないが、僕には阿頼擲職がない。

良かった。接続コネクタは外してくれた用だ。これでやり易くなる。

コックピットの扉を閉める。同時に、メインカメラが光った。

「それじゃあユウ・タービン。ガンダムアンドラスで行きます！」

起動。

その瞬間。

アンドラスに迫る刀を止めた。

勿論。刀を直接止めたわけではない。腕を止めることで刀を動かなくしたのだ。

「…なんだ？こいつ？」

新型？いきなり来て、さっきのパイロットが乗り換えたとところまでは見た。しかし、これはどうなっているんだ？あそこまで読んでいたと言うことか？それにしても、最初

の方は安全にやっていたが、後々知ったような気がする。

「まあどつちにしても、殺すがな！」

「アンドラス… さあ8年ぶりの戦場だ。着いてきてくれるよな。」

さつき離れた、滑空砲を拾う。あっちの方では、三日月乗るバルバトスがキマリスと戦っている。

もう片方では昭弘乗るグシオンが数機のグレイズと戦っている。

とれる時間は少し。倒すことはできないかもしれない。でも、地球に行くんだ！

「さあ行こうか！アンドラス！」

腕を離れた瞬間に当然のことながら、刀が振るわれる。その刀を回転することでかわし、蹴りを入れる。その後、離れて射撃の体制に入る。

そして、数発撃つ。

その弾がまるで吸い込まれるように当たった。その後、当たった弾ごと爆発した。何かに当たったのだらうか。

速度をあげる。狙撃用ながら、敵の機体とほぼ同じ速度を誇る。そのまま、射撃を続けながら、それでも狙って撃つ。

数発外れるが、それよりも接近されないことの方が大切だ。

他の戦場に目を配る。バルバトスとグレイズ改式がキマリスを倒したようだ。こちらあまり時間がない。

「このまま、大気圏突入に繋げる！二人とも接近戦はよろしく！」

了解！という声が聞こえたと同時に、二機の漏影が敵に接近する。

斜めからの攻撃に対応している間に、回り込んだ。

そのまま狙いをつける。

敵の機体を狙い撃った。

狙うはスラスター。直進していった弾はスラスター辺りで爆発して、その煙は敵の機体を巻き込んだ。

「なっ!?!ぐぐっ!」

しかし、まだ他のスラスターがあつたようで、それを使って戦線を離脱した。

「やつぱり早いな...よし。二人とも！このまま大気圏に突入するよ！」

「ハイハイ。」

「お前は...」

そのままアンドラスとスピナ・ロデイをランチに固定する。

「ねえおやつさん。このままほかっとならば地球に着くの？」

「まあな。」

安心ととれる言葉がきたため。コックピットで眠りにつこうと思った矢先。

なんか、グレイズリッターが一機で突っ込んで来た。

三日月が応戦しているが、このままでは三日月を宇宙にほったらかしにするこになるだろう。

それだと怒られる。

「姉さん！滑空砲を宜しくー！」

そう言つて滑空砲を預け、腰に掛かっている、ライフルをとりだす。その後、ランチに固定した状態で、敵の機体のコックピットを撃つ。

何発か弾かれたが、まあその隙にバルバトスが剣を差してくれたから良しとしよう。
が…

「おい！バルバトス！なんでこっちに来ねえんだ！重力に殺されるぞ！」

「三日月！」

そうか。あの距離では追い付けないのか。なら、

「駄目！ゆーちゃんまで行ったら…！」

「くそお！」

コックピットの壁を叩く。その手から血が出たのは言うまでもない。

「地球の重力つて凄いんだな……」

そう言いながら三日月は思い出していた。オルガとの……

幼少期の……

(回想)

オルガ「行くんだよ」

三日月「どこに？」

オルガ「ここじゃないどっか……俺たちの本当の居場所に」

三日月「ほんとの？」

オルガ「ん？」

三日月「それつてどんなところ？」

オルガ「えっ？うくん分かんねえけど……すげえところだよ、飯がいっぱいあつてよ、寝床もちやんとあつてよ、あとは……えつとあとは……行つてみなけりや分つかんねえ。見てみなけりや分かんねえよ」

三日月「見てみなけりや？」

オルガ「そうだよ。どうせこつから行くんだからよ」

三日月「そっか。オルガについていったら見たことないものいっぱい見れるね」

オルガ「ああ。だから行くぞ！」

「……！ そうだ俺はその場所を見たい。お前はどうか？ バルバトス！ あっ……えっ？」

「ううっ…… うう……」

「(三日月…… ここで終わりにしないで。あなたの大きな手はきつと大切な何かをつかめるはず)」

強い力に引かれる感じがした。

「ぐううー！」

その後恐る恐る目を開けると……

「出たよ、地球だ！」

「三日月は!？」

「く…… はっ！」

「はっ！ うう…… ううっ…… 三日月く！」

そこにはグレイズリッターに剣を差してサーフィンしているバルバトスがいた。

「三日月！」

「はははっ！ やるじゃない」

「やっぱり…… あの人は凄い……」

「……！」

「ははははっ、よかつた……」

「ひやひやさせるぜお前はよ」

「なあ姉さん……」

「ん？」

「ここが地球……あれが……三日月」

「気づかなかつたけど……綺麗だね。」

第9話

蒔苗が隠遁する島は、ギャラルホルンに包囲されていた。

「ステンジャ艦長。投降勧告の刻限を過ぎました」

水上戦艦の艦長は、部下からそう報告を受ける。

「そうでなくてはな。これで火星に散った我が弟、オーリス・ステンジャの敵が取れると言うモノだ」

オーリス・ステンジャとは、三日月が最初に潰したグレイズのパイロットである。まあ忘れられてるけど。

「全艦に通達、掃討作戦を開始する！ 射撃開始と共に、MS部隊発進！ カルタ様の戦場に花を添えよ！」

艦長の指示で、各艦が飽和射撃を開始した。

「うっわああああ……金持ちはいいねえ。」

飛んできた攻撃を避けながら少し、驚いている。

「モビルスーツには意味ないってのに無駄撃ち大好きだよね、金持ちってさ」

全くその通りであります。姉さん。

島を取り囲むように、ギヤラルホルンの水上戦艦が正面に3隻、裏側に2隻。

正面はMS隊の陽動で、本命は裏側部隊でのクーデリアと蒔苗の確保と言った所だろう。

昭弘が射撃を開始する。

始めは外れたが、阿頼擲識で、調整した。

「右舷格納ブロックに被弾！被弾部より浸水を確認！」

「上陸部隊を先に出せ！終わりしだい総員退避だ！」

ギヤラルホルンの方は焦っているようで。

「感覚だけで照準を補正するとはね」

「阿頼耶識ってやつぱずっこい！」

「モビルスーツ出てきたぞ！」

そうオルガさんが叫んだので、海上を見るとああ。いるいる。馬鹿みたいに飛んでくるやつが

「へへっ」

「できるだけ海上でたたいてくれ」

「了解」

「こりや俺たちの出番はねえかもな！」

その時、片方のライフルが爆発した。

「つんだ!? こりゃ」

「上か? あれは……」

「ラフタさんとアジーさんとユウは海から来る敵を頼みます」

「了解」

「お前らはあれを撃ち落とせ!」

「もうやってんよ! おらおらあゝ!」

「……!」

「ヒラヒラとうつとうしい!」

「おつと!」

「あ…… あっ?」

「宇宙での借りは必ず返してあげるわ」

「ちつ、予定よりも早く島に入られちゃったな」

「我ら地球外縁軌道統制統合艦隊!」

「二面壁九年! 堅牢堅固!」

なんかカッコいい決めポーズを決めた直後。右から二つ目が撃たれた。

「うっ!」

「撃って…… いいんだよな？」

撃ったのは、昭弘だ。

「当たり前じゃん」

「ハハハ……」

乾いた笑いをする。

「なんと…… 不作法な！」

え？ブサホウ？そんなのは知らない。まずここは戦場だ。

「ギヤルホルンにもバカはいるんだ」

「まあでかい組織となればバカも何人かはいらさ。」

アジーと会話する。確かに、ティワズにも数人いる。

あいつとか…… あいつとか…… あいつとか

「それより今は海上の敵を叩くぞ！援護しろ！」

「言われなくとも！」

片膝を付き構える。個人的な話、この構えは好きだ。撃った時の衝撃が小さい。

そして、海から来るバカを撃つ。海からくれば良いのだ。海に落ちてしまえば、動きが悪くなる。それから苦手な接近戦を仕掛けられてもすぐに銃撃戦に変えられる。

「あんたら邪魔するなよ。」

そう言つて、接近してくる敵のスラスターからフライトユニットを撃つ。
勿論海水にドボン。

それからはもう作業だった。撃ち落としたやつが起きる前にコックピットを撃ち抜く。危険ではないこの行動は作業以外例える言葉がなかった。

その作業を終えた後見ると三日月さんとシノさんがバカを残り三人にしているところだった。

「もうほかつといても大丈夫そうだね。」

「上手く行けばな。」

「うん。」

カルタ・イシュー。その名の通りイシュー家の人間である。セブンスターズ第一主席であるイシュー家の彼女はイシュー家の誇りを大切にしている。つまり、この失態は問題だ。

「このような無様、イシュー家の戦歴に必要な。このままでは……」

「カルタ様！」

「……!?なんだ？」

「上陸部隊が目的の拠点を制圧したと報告が……」

「そうか！それでクーデリアとかいう小娘は？」

「たつ、ただいま捜索中とのことですよ」

「見つけてから報告なさい！……！！」

その時、目標の拠点の方向から爆発がした。

ドカーン

「何!?何が起こった!?!」

「じよ……上陸部隊との連絡が途絶えました」

「くっ……奴まだか!」

ここまで来るとあのうざったい奴が最後の頼みだ。

「只今こちらに向かっている模様。しかし、このままでは……」

間に合わないだろう。あいつは……あいつは……あいつだつて宇宙そらで借りがあるだ

ろうに。怖じ気づいたのか。

そうではないと知っていないながらそうと考えなければ気がすまなかった。

「おのれ!おのれ!!」

「また私のかわいい部下が!」

「うるさいなあ」

「ミカ、船は押さえた。あとはそいつらだけだ」

その声が聞こえたのは三日月だけではない。あのカルタにも聞こえてしまったのだ。

「この声……。はっ、あれは！あいつが賊の頭目か！」

「無駄な。えっ……。しまっ……。オルガ！」

行かせまいと、バルバトスが止めようとするが、残り二機の連携で動きが止まる。

「ビスケット！」

「分かってる！」

モビルワーカーは逃げるがこんなのでは逃げ切れる訳がない。

なんたたって大きさが違うのだ。どんどんと距離を縮められる。それは誰にだってわかることだ！

「よくも私のかわいい部下を！」

じりじりと近づいてくる。もうだめだ。

「(ダメだこのままじゃ。くっ！)」

「オルガ！手を放して！」

せめてオルガだけでも……

「ぐ……。何言って……。うわっ！」

抵抗使用とするが、急な蛇行運転で手を放してしまう。その時、グレイズリッターの剣がモビルワーカーに当たった。

「危ね！」

その時、アンドラスの手がモビルワーカーをホールドした。

「あつ…… ああ…… ぐっ…… 痛え…… あつビスケット！」

そのままアンドラスは離れる。

グレイズリッターとはいえ、アンドラスには追いつけない。

運良くオルガは気付かれてないようだ。

モビルワーカーを見る。ボロボロな上、中のビスケットさんですら生きてるかどうかわからない。確認できない。

「僕は言ったんだ。鉄華団の誰も死なせはしないって。鉄華団のみんなを殺させはしないって……」

目から涙が流れるがコックピットから出る。一縷の望みでモビルワーカーを確認する。

「まだ動くか」

「不味い！」

「しづとい虫けらが……」

「こちらに來そうなグレイズリッターの動きが止まる。バルバトスだ。」

「うっ！ああっ……………」

「何を…………… やっている……………！」

完全にド怒りだ。普段あんまり喋らないが故に、恐怖を感じさせる。

「なっ!?!はっ！うあっ！」

「お前が…………… あっ?！」

そのときに気づいたそうだからこちらにビスケットさんがいると。

それで少しは攻撃が揺らいだが、またもとに戻った。

「ビスケットさん！ビスケットさん！大丈夫ですか!?!」

そう声を出して、安否を確認する。同時に、モビルワーカーの残骸を壊して見る。

右腕の骨折。大量出血。意識がない。

等色々と見られたが、安心した。

まだ息生きてがある。

そのままカルタ以外のバカ二人をシノさんと昭弘さんと姉さん達が潰してくれたよ
うだ。

「三日月さん！後はそいっただけだ！ゆっくりでも良いから潰しておいて！」

「言われなくとも．．!!」

バルバトスは本気だ。もう大丈夫だろう。そう思って、ビスケットさんを船の所まで送り届けた。そのときだった。

「助けて．． マクギリス．．」

新しい反応が見覚えがある。

「新しいエイハブ・ウエーブの反応!!この信号は!」

「あいつは．．．」

敵の船もないのに．． まさか遠くから飛んできたのか!?そこには宇宙にいた、あいつがいた。

「やはり俺の目は節穴では無かったようだ。感謝するぞ!鉄華団!」

第10話

「やはり俺の目は節穴では無かったようだ。感謝するぞ！鉄華団！」

「あいつ……！」

「何をしていた！ライル・バレル！」

カルタが声を荒らげながらいう。

「ヒーローってのは遅れてくるもんだぜ。カルタ司令！」

素晴らしいながら、手に持ったライフルを乱れうちする。そのあと、近い機体ではなく、バルバトスを狙った。

「三日月さん！危ない！」

「えっ……」

「貰った！」

ライフルを投げて、それをよけたバルバトスに蹴りを加える。その衝撃で、グレイズリッターが離れる。

倒れたバルバトスがレンチメイスをしようとした瞬間。それは吹き飛ばされた。

「貴様らガンダムフレームの火力に頼っている用な連中に、俺を殺せるわけねえだろ！」

その状態でグレイズリッターを抱える。そのまま海の方へと行く。「しまった！」

ライフルで狙うが、最大のスピードの状態の奴にはライフルの火力じゃ倒せない。「クーデリア…：…いつか俺に抱えられているのは司令じゃなくてお前だからな…：…」

そのまま、グレイズリッターを抱えたまま、飛んでいってしまった。被害は0に等しい。しかし、短時間で力の差を見せつけられた。

「アインの容体はどうだ？」

ギヤラルホルンのとある場所。そこでガエリオとマクギリスは話していた。

「相変わらずさ。生命維持装置に生かされているだけだ」

「もう答えは出ているのだから？」

「マクギリス、俺はどうしても踏み切れん。このままではアインを救えないのは分かっている。ヤツの悲願だった上官の敵も討たせてやりたい。しかしそのために体に機械を……人間であることを捨てろとは……」

「人間であることを捨てる……か、今の世はまさにその選択の上に築かれたと言ってもいいだろうな」

マクギリスの言っている意味がわかんないようだ

「どういう意味だ？」

マクギリスが答える。

「300年前、長く続く厄祭戦のために人々は疲弊し人類存亡の危機に瀕していた。人類が生き延びるためには誰かが戦争を終わらせる必要があった。戦力の均衡を破る圧倒的な力……人間の能力を超えた力だな」

「……………」

黙る。この時どのような感情が彼の中にあるのかそれは彼にしかわからない。いや、もしかしたら彼にもわからないのかもしれない。

「同じ志を持つ者たちが集まり、国や経済圏の枠にとらわれない組織が編制された。そして彼らは人類最強の戦力であるモビルスーツの運動性を最大限に高めるシステム……すなわち阿頼耶識システムを作り上げた。そしてその力を限界まで発揮できる72機のモビルスーツを」

「ガンダム・フレイム」

ガエリオは理解した。

「元をたどれば全てそこに行き着くのさ。人間であることを捨て人間を救ったアグニカを始めとする救世主たち彼らは後にギャラルホルンと呼ばれる組織となった」

「かつて人類を救った阿頼耶識が今では戦争の遺物として嫌悪の対象になっているといふわけか。皮肉だな」

「まったくくだ。300年の間にギャラルホルンは腐敗し弱体化し権力闘争の温床と成り果てた。カルタ・イシューの隊が鉄華団の追撃に失敗したのは知ってるか？」

「何？」

知らないようだ。

「クーデリアと鉄華団は元アープラウ代表の蒔苗東護ノ介を連れ逃走、太平洋上で消息

を絶った」

「なっ?! 衛星監視網はどうした? ここは俺たちの庭ではないのか?」

「おそらくこちらの内部に情報提供者がいるんだろう。腐敗ここに極まれりさ」

その情報提供者が目の前の方の男とはまさかガエリオも思うわけもない。

「くっ下劣な! アインの忠誠心を少しは見習うがいい。」

「アインのような男こそかつてのギャラルホルンの本質に最も近い人間なのかもしれない。」

そう言うとマクギリスはガエリオと共にある部屋に入る。

「……は?」

「阿頼耶識の研究は近年まで行われていた。ここはその研究施設だ」

「……が……」

驚いている。それも仕方ない位人に知られていない施設。

「分かるだろうガエリオ。これはアインのためでもあり俺たちのためでもある」

「……これは……」

そこには一機のモビルスーツがあった。しかし、普通より大きい。専用のフレームだろうか。

「示すんだ。身を捨てて地球を守ったギャラルホルンの原点を。お前と阿頼耶識をま

とったアインとであの宇宙ネズミどもを駆逐し我々こそが組織を正しく導けるのだと分かせてやれ」

「……………、原点を示す……………か」

その様子を人の男が見ていたことは二人とも気づいていた。無論。覗きではない。許可を得ている。彼は微笑んだあと。ガエリオにある言葉を放った。

「なあ。ボードウィンさんよ。その機体。使わないのなら俺に貸してくんね？」

「何？」

「俺にだって阿頼耶識位着けている。それも人類最大の数までな。」

そういうと彼は背中を見せる。そこには3つの出っ張りがあった。言わずもがな阿頼耶識だ。

「阿頼耶識か……何故ギヤラルホルンの人間が？」

「簡単さ。直属の上司が秘密を知っていたから弱味を握らせて、手に入れたのさ。」

言うのは簡単だがガエリオには到底考えられない事だった。

「なんと……」

「ライル・バレルと言ったな。8年前のジェラルド戦火で名を上げた。」

そういうと彼は少し悲しそうな顔をして

「ジェラルドか……もう2度と聞きたくない名だな。」

「失礼なら濟まない。何故だ？今の自分がいるのはあの戦争のお陰では無いのか？」

「俺が初めて負けた場所だから…。これくらいでいいか。」

「ああ。濟まない。君には頼みたいことがあつてな…。」

「頼みたいこと？」

その頃鉄華団では…

「ビスケットさん…。」

アインと同じく生命維持装置に生かされているビスケットがいた。

「くそ…。ギャラルホルンの奴ら…。」

「…。すみません。僕が未熟でした。」

「いや。いい。」

「団長さん…。」

謝ろうとした僕の声に団長さんが返す。

「ビスケットはこうやって生きてる。なんとかなるさ」

「なんとかなれば…。良いですね。」

「ああ…。」

近くを見渡せば、回りの人も喋っている。

「頑張れよ。ビスケット。生きてチビ達を学校に行かせるんだろ。」
生きろよ。生きろよ。と暗い声が何処かから聞こえた気がした。

ヴィーンゴールヴに戻ったカルタは、イズナリオの部屋に呼び出されていた。

「申し訳ありません、イズナリオ様。セブンスターズの一員で有りながら、失態を……」
「詫びるならば私にはなく、偉大なる父上に対して詫びるのだな。カルタ、君はセブンスターズの一角イシュー家……引いてはギャラルホルンの名に泥を塗ったのだ。どうなるか、分かっていような？」

イズナリオに頭を垂れながら、カルタは齒噛みする。

己の情けなさに、カルタはどうしようも無く怒っていた。

「しかし病床の父上に代わり君の後見人となつたからには黙って見ているわけにもい兼ねだろう。名誉挽回のチャンスを与えようじゃないか」

「はっそれは……」

カルタは感謝し、頭を上げイズナリオを見据える。

「蒔苗は鉄華団と名乗る輩と共に、エドモントンへ向かっているとの情報が入っている。世界の秩序を維持するギャラルホルンとしては、何としても阻止せねばならぬ事だ。

敗戦したばかりのお前には荷が重いと感じているが、マクギリスがぜひお前にと言うのでな」

それを聞いて、カルタは拳を握り締める。

カルタは深く礼をし、イズナリオの部屋を後にした。

その部屋の前には、マクギリスが控えていた。

「久しぶりだなカルタ」

「惨めな私に手を差し伸べてくれるなんてね。感謝するわマクギリス」

「惨めだなどと……」

そう言っつていつもの通り笑う

「しらばつくないで！失態を犯した私を笑いたいのでしょ？そのこちらをバカにしくさったニヤケ面、本当に変わらない……！」

「君も初めて出会ったときから変わらない。セブンスターズの第一席、イシュー家の美しく誇り高き一人娘」

「貴様何を……」

「カルタ」

「……？」

「君は私にとって手の届かない憧れのような存在だった」

「……！マクギリス……」

思い出す。カルタとガエリオはいつもマクギリスを平等に扱っていた。

「君は哀れみでも情けでもなく私を平等に扱ってくれた」

「感謝されるようなことじゃないわ」

「私の目に映る君はいつでも高潔だった。君に屈辱は似合わない。そのためにも私にできることがあればさせてほしいんだ。カルタ」

「マクギリス……」

「彼を控えさせてある。彼と共に行くといい。」

「ありがとうマクギリス……」

第11話

「アインの意識が戻ったというのは本当か？」

「ええ。お待ちしておりました。こちらへ」

「それでアインは一体……」

「ガエリオ特務三佐！」

「この声は……!!」

「……!?アイン?今の声はお前なのか？」

「はい！」

聞こえる。アインの声が。良かった。これで悲願である上官の敵を……

「アイン……ああ……成功したんだな。よかった……よかった……ほんと

に……」

「特務三佐、こちらをご覧ください」

「ん？」

「三尉の現在の状況です」

「なっ!？」

そこから良かったという言葉を言った自分を呪いたい気分になった。そこには四肢を切り落としたアインがあつたのだから

「阿頼耶識の同調は順調ですよ!」

「本当にありがとうございます。これでクランク二尉の無念を晴らすこともできる!」

「そうか……」

「心から尊敬できる方に人生の中で2人も出会えたなんて」

「ぐ……!」

悔しい。けど、これは彼の望んだことだ。奴と同じように、いや。違う。奴は阿頼耶識の力のみがほしいだけだ。だけど、同じ気がする。

「これ以上の幸せはありません。この御恩、この命をもつて必ずやお返しします」

「そうか……　そうか……」

そう表面で言うしかなかった。

「彼が望んだことだ。お前は上官として彼の望む最高の選択を与えることができたんだ。あとは雪辱を晴らすための最高の舞台へと彼をいざなつてやるだけ。ガエリオ、墮落したギャラルホルンにおいて君の心の清らかさはいかに守られてきたのだろうか」

「バカにしてるのか？」

「本気だ。お前だけじゃない。アインも。ギャラルホルンに変革をもたらすのは君たちの良心だと私は思う」

「アインも？」

「ああ。今回の作戦が成功すれば彼がギャラルホルンに残す功績は計り知れないだろう。たとえばどのような姿になっても、この戦いによつて彼は英雄となれる」

「ありがとう、我が友よ」

「ガエリオ、カルタ、君たちはよき友だった。その言葉に嘘はない。君たちこそがギャラルホルンを変える」

確かにその言葉に嘘はない。しかし、彼の頭にある変え方はガエリオには想像出来ないものだということを彼は知らない。

その頃鉄華団では

「三日月、そろそろ交代の時間だよ」

「分かった。あつあれは……」

「……！エイハブ・ウエーブの反応!？」

カルタの最後の試合が始まろうとしてきた。同時に奇襲が成功したように、勝ち誇つた雰囲気の二機がきた。

「団長、モビルスーツが2機です」

「島でやったやつだ」

「くっそ！」

「おいおい、ギャラルホルンの監視網をすり抜けられる安全なルートじゃなかったのか？」

「こんなに早く敵に知られてしまうなんて……」

クーデリアも驚いている。

「俺たちのルートを知ってるヤツといえば……」

「……！！」

仮面を着けたあの男。あの男が……

「(あの男が裏切ったのか)」

「心当たりでもあるのか？」

蒔苗の声で現実を引き戻される。

「いや話はあとだ。ヤマギ、列車を止めろ！」

「了解！」

列車が止まる。

「ほんとに2機だけか？」

「はい、今のところ」

「三日月！バルバトスはいつでも出せるようにしとけよ」

「うん。あつあれは……………」

「まさか……………」

「私はギャラルホルン地球本部所属地球外縁軌道統制統合艦隊、司令官カルタ・イシユー！鉄華団に対しモビルスーツ2機同士による決闘を申し込みに来た！」

「おいおい、これって確か……………」

鉄華団は前にも決闘をしたことがある。それを思い出しているんだろう。

「私たちが勝利を収めた暁には蒔苗東護ノ介およびクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を無論、鉄華団の諸君にはおとなしく投降していただく。我らが敗北した場合は好きないようにここを通るといい」

「へえ面白え！やってやろうじゃねえか。なあ昭弘！」

「ああ」

鉄華団のみんなも熱くなっているようだ。

「熱くなつてんじやないよ！決闘なんて無駄だ！」

「そうそう。こんな戦いに公平さも糞もない。只でさえ、数が違う状態で勝つてきたのだ。今回くらいボコ殴りで。」

「そうそう！数はこつちが上なんだしき、みんなでボコ殴りにしちゃえばいいだけじゃん。えっ？」

その時、通信回線が開く。無論。相手に聞かれないためだ。

「僕が行く。」

「ゆーちゃん!？」

「たつた二機に馬鹿みたいな数で行つたらそれこそ、時間の無駄だ。鉄華団と僕で邪魔を何とかする。三日月さん！なんか華奢っぽい奴は頼みます！」

「わかった。」

「合図をしたら総攻撃だ。合図は団長さんに任せる。」

「お、おいユウ！」

団長さんもそのペースに着いていけない。

「さすがダーリンの血ね。」

「ああ。」

それほどに名瀬の血は凄いのだ。

「こちらユウ。アンドラスに乗り込んだ。いつでも行けるよ」

「こちら昭弘。準備できた」

昭弘さんも做つて言う。

「こちらノルバ・シノ！流星号！準備完了！」

「行けるよオルガ」

やっと团长さんもこちらについてこられたようだ。行ける。

「よつしやあ！じゃ行くぞ！」

列車に隠れたアンドラスと流星号が射撃準備をする。

「砲撃開始！」

さあ！始めようか！殺し合いを！

「!？」

コックピットで待っていた彼に銃弾が来る。それを素で避ける。

「カルタ司令！どうやら敵さんは二対二を望んで無いようだ。」

「なんだと!？」

「おらみろ！来やがった！」

こちらが奇襲を仕掛ければ良かった。と齒噛みする。しかし、終わってしまったこと

にケチを言つては、殺される。

「司令！あんたと二対一でやりたい奴が来ている！そいつ以外は俺に任せろ！」

「くっ！」

見ると、バルバトスが司令を標的にしたようだ。司令の腕じゃそう長くは持たない。さつさと…

その時、急速接近してくる一機のガンダムに気づいた。

「俺に接近戦を仕掛けるか！」

かわして蹴飛ばす。そこに、下品な色をした二機目が来る。遠くを見れば宇宙^{そら}でみた奴が狙撃をしている。

「三対一…！」

不味いな。レベルが高い。使うしかないか。

そう思いながら、にやけた。嘲笑うような顔で。

「やっぱりあのグレイズ！」

脚が早いやつだ。あいつには隙を与えない方がいい。

そう考えて、あまり狙わず、足元に弾を当てる。

間髪いれずにグシオン、グレイズ改式と接近戦を開始する。グシオンのハルバードが、グレイズ改式の斧が、弾かれる。まだ剣も抜いていないのに。

「ちいー！」

「なんだ！こいつ！強え！」

二人も精鋭顔負けの連携攻撃を仕掛ける。が、それも奴に取っては雑魚二機。避けられ、マシンガンを浴びせられる。

しかし、それは彼にとっては獲物が目の前で寝ているのと同じだった。

滑空砲が火を噴く。弾がマシンガンを破壊するまでそう時間はかからなかった。

「やはり……奴は！」

多少驚いている。そこにグシオンのハルバードが当たる。どんなに弱くともこんな隙は見逃さないだろう。倒れないように保ったその肩にグレイズ改式のライフルの弾が当たる。当然倒れる。

「ぐっ！がっ！」

「貫ったー！」

グレイズ改式が斧を振り上げる。このコースなら殺せる。しかし、何かおかしい。この感じは……！！

「シノさん！」

大声で叫んだが遅かった。

「へ？」

「はあっ！」

剣がコックピットに刺さった。

「ぐあああ——！」

「シノ！」

「シノさん！」

グレイズ改式の動きが止まる。それとほぼ同時にシユヴァルベグレイズカスタムが立つ。

「くそっ……！」

「嘘だろ……」

「そんな……」

「シノ！」

「シノさん！」

通信が、鉄華団の子供たちが叫ぶが応答しない。

その中でもユウは分析できた。あの動きは……いままでなかった……

「あの動きは……まさか……」

「阿頼耶識：」

シュヴァルベグレイズカスタムが剣を持ち、隠していたスラストターを露にした。
やる気だ。

地面に降り積もった雪。

その慣れない地形と新たな力に不安を抱いた。

第12話

「あの動きは……まさか……」

「阿頼耶識……」

倒れて動かないシノ機。しかし、まだ死んだと決まった訳ではない。

通信を開く

「姉さん！出て！シノさんがやられた。回収と代わりを頼む！」

「了解！」

けど、あいつが阿頼耶識とは……全員でかかった方が良かったな。

そう思いながら、自分の作戦を恨んだ。

倒れていく敵機を見ながら思った。

予想以上だと。

あれ以来、阿頼耶識は使用しなかった。それほどの敵もいなかったし、何より、着け

るのを許可してくれる人がいなかった。だからこそ、マクギリスとの話の時に頼んだのだ。阿頼耶識を着けてくれと。まだ鈍りが残つてあるようだが、順調だ。これなら……殺れる。

「さあ！鉄華団。お前らはここまでか？見せてくれ。俺に、貴様らの力！そのすべてを！」

「くっ！行くよ！アジー！」

「わかった！」

アジーとラフタが同時に漏影に乗り込み、発進する。

その時に戦場は二つに別れていた。

一つ目はバルバトス対グレイズリッター

二つ目はグシオン&アンドラス対謎のグレイズ。

一つ目はバルバトスが完全に有利逆に二つ目は二人が突つ込まないように、流星号に気を向けさせないように戦っていた。

まず、アジーの漏影が撃つ弾が謎のグレイズに当たる。その瞬間、グシオンがハルバードを隙を作らないように降る。それも押さえられた時には、ラフタがバックアップに入っていた。

漏影のヘビークラブを避け、グシオンの後ろに回るが、アンドラスの砲撃を喰らう。

これで、有利になったように見えるが、違う。未だに、倒れている流星号の救助に向かわなければならぬのに、4対1位の差で無ければ奴を押さえ込めない。

今の状況も誰かがミスをすれば簡単に殺られる。

問題は三日月だ。さっさともう一機を片付ければ、三日月がシノを救助できる。しかし、バルバトスが戦闘しているのも手練れだ。そう簡単には殺られない。

「早く！三日月！」

そう叫ぶが三日月だって苦戦しているのだ。

「くうっ！」

押し込んでいるといえ、まだ時間が掛かりそうだ。

「アジー姉さん！接近戦に持ち込める？」

「わかった！」

そう言うとうと武器をアサルトライフルへとかえ接近する。

これで後方支援はユウだけとなった。しかし、彼も手練れ。三機の後方支援位できる。

この戦いだって接近戦に意識を向けて射撃を当てるの連続だ。

それほど彼の射撃能力は高い。

「この程度か!? 鉄華団!」

「まだだ!」

「嘗めるなあ!」

シュヴァルベルグレイズカスタムの剣が、漏影二機を吹き飛ばす。しかし、それは、グシオンに背中を向けることとなった。シュヴァルベルグレイズカスタムの剣とほぼ同時。つまり、避けられない。

グシオンのハルバードが肩に当たる。そのまま、うつ伏せに倒れる。

アンドラスがスラストアーに弾を当てる。そして、横に転がる。

「チャンス!」

「ラフタ姉さん! 離れて! アジー姉さん! バックアップ!」

ラフタが突っ込もうとしたときに、その声を聞き、漏影が下がる。それと同時にアサルトライフルの音が戦場に響いた。

シュヴァルベルグレイズカスタムはワイヤークローで、アサルトライフルを弾き、接近してくる。

「不味い!」

ユウはすぐさま、スコープから目を離し、上に上がる。その時には、滑空砲が潰されていた。

「ちっ！」

あれほどの火力の物はあいにく、持ち合わせていない。

その時、遠くでバルバトスがとどめを刺そうとしていた。

「やられてんじゃねえよ!!」

アンドラスのライフル攻撃をかわして、リッターにとどめを刺そうとするバルバトスのレンチメイスを弾く、そのあと

「あんたはそこで寝ている！俺はその間に戦いを終わらせる！」

そう言って、バルバトスと対峙した。

「(チャンス!) 昭弘さん！今のうちにシノさんを！姉さんは突っ込んでバルバトスの援護！」

「了解！」

アンドラスも自らの腰に備え付けてあるライフルを出す。物としてはアサルトライフルより銃身が長く、グレイズのライフルに近い。おそらく、アンドラスのライフルの情報をもとに作っているのだろう。

「さあ！仕上げと行こうか！」

「シノ！シノ！返事をしろ！シノ！」

「昭……弘……」

急いで、昭弘はグシオンのコックピットを開けて、流星号に近づく、コックピットに穴が空いているとはいえ、小さい。これならシノも生きてる。

「大丈夫か!？」

「あ…… ああ」

「良かった……」

それでも、すぐ近くでは戦闘をしている。あまり構っている時間はない。

「まだ戦えるぞ」

「けど……」

「おい待てお前! このシノ様と流星号を疑っているのか?」

「…… わかった」

「おっしやあ! 行くぜ!」

遠くの二機が立ち上がった。これで、6対1。流星に不味い。この機体で、この状況で、これでは…… 負ける。

「俺が…… 負けるだと……!!」

「この俺が……!!」

戦火に一人で行って帰って来たこの俺が！
負けるだと！

そんな・！

「そんなわけ……！あるかああああ!!」

バルバトスが吹き飛ばされる。

「くっ！」

「三日月！」

「三日月さん！」

速い！

敵は、こちらには全く予想できない動きをしてきた、スラストを一部破壊されてい
る、モビルスーツの動きとは思えない。

剣を振るう。

その一撃で、漏影が一機、吹き飛ばされる。

「うっ！」

ラフタ機だ。

「ラフター！」

「ラフタ姉さん！」

シュヴァルベグレイズカスタムのメインカメラが輝く、その光が線を描く。

それほどに速い。

これは、宇宙そらの時と同じ……

同じだけど、違う。

同じ戦法ではあるが、速度が、細かさが違う。

前の戦法でも前の動きでも、普通のエースパイロット×2、3人を相手にしても、まともに戦える実力だ。

けど、それを凌ぐ。

速い。

全く動けない！

これでは……！

これでは……！

負ける。

「くっそお！」

「強い……！」

「くっ!」

六機のモビルスーツが束になって攻め混んでもあしらわれた。

一撃一撃がそんなに重くない代わりに、速いため、盾が、装甲が傷ついていく。

「くっ!がっ!」

コックピットが揺れる。

6対1だぞ。それも全員、それなりの実力者だ。

それを……

これが、強さ。彼の強さ。

「みんな!一旦離れて!」

そう言って、離れようとするが、敵の攻撃を盾で受け止めた為、動きが止まった。

「しまっー!」

殺られる!

死ぬ……のか……

「ゆーちゃん!」

「!!」

ラフタの声で現実に引き戻される。危なかった。

あの声がなければ。本当に死んでいた。

当の敵はというと、仕留めそこなった為か、一旦離れた。

その時、一発逆転の方法を思い付いた。

「姉さん！二人で倒れているモビルスーツを盾にして進んで！」

「わかった！」

「!?!」

敵のなかで全くこの状況に関与していないのが一機倒れているやつだ。

そいつを盾にすることで、驚き、つまり、隙が生まれる！

「今だ！」

高く飛び上がる。そのあと、胸部バルカンも含めて一斉射撃をした。それによって、手首の破壊に成功した。

「やった！」

「剣が：！」

ワイヤークローで拾おうとしたところをバルバトスのレンチメイスが左腕ごと破壊する。これで、攻撃出来ない。

「ちっ！」

シユヴァルベグレイズカスタムは漏影にタックルをして、リッターを奪い取り、逃げ

てしまった。

けど、あの状況で生き残る事が出来た。それは、良かった。

「カルタ司令？無事か？」

「マクギリス… ああ… マクギリス… 助けに来て… くれた… のね。マクギリス…」

「… まあな」

「私は… ぶぎまだった… わね」

「… いや。あんたは立派な戦士だカルタ司令」

「ああ…」

「ありが… どう… マク… ギリ…」

「(せめて… 安らかに眠れ…)」

第13話

「すまないな。ガエリオさんよ」

「……」

作戦から帰ってきた奴からの知らせはカルタの死亡。

旧友を失ってしまったのだ。

「俺の機体もボロボロでアーブラウまでは行けない。でも、これでわかったよ。奴ら鉄華団の強さ。それは連携だ。戦うなら複数の機体で敵をバラバラにしてから戦うことをおすすめる」

「そうか。礼を言う」

そう言うガエリオは下を向いて、ただ喋ってはいたがまるで止まったロボットの用に動かなかった。

「とりあえず、俺の唯一の部下を共に行かせよう。まだ強者の側にはたててないが戦力にはなる。……後、マクギリスさんに伝えてくれ。彼女は最後まであんたを呼んでいたい」

「……！」

ガエリオの頭が上がる。それを確認して、手に持ったジュースを呷ってあるいつていった。

「じゃあな。大切にしろよ」

「ああ……」

その頃、鉄華団はエドモンソンに到着した。

しかしギャラルホルンがかなりの戦力で待ち構えており、鉄華団はその防衛線を突破すべく戦闘を開始せざるを得なかった。

市街地にエイハブリアクターを着けたモビルスーツを入れるわけにはいかないのもビルワーカーで戦うことになった。

シノ機は阿頼擲識以外、別の鹵獲したグレイズのため色は普通のダークバイオレット（宇宙用）だ。

そして、それが一昨日の事だ。

鉄華団はぶっ通しで戦っているが、未だに防衛線を突破する事が出来ない。

日が沈み、夜。ギャラルホルンも一時撤退を行なった。

「姉さん。流石にこれは……」

「うん。きついね……」

「仕方ない。仕事だ」

三人でコックピットの食料も無くなつたし、残弾も少ないので、補給しに来た。

「姉さん。良いこと思いついた。明日、戦況を覆す」

「ゆーちゃん……」

「これが終わつたらさ。団長さんからお金もらつてまた、運び屋をやろう。ね？」

「うん……」

休息をとりたいが、夜でも光のせいで寝る気になれない。

「明日の朝、作戦を開始する」

「うん」

「オルガさんに伝えといて」

「わかつた」

先程もいった通り、光が眩しいので、アンドラスのコックピットに入る。

「なあ。アンドラス、お前はと思う？鉄華団を。」

そんなことを言つたつてアンドラスは機械。阿頼耶識もないのに、会話などできるはずがない。

「お前の前のパイロットはどんな人で、どんな事をしていたんだろうな……」
「なあ、相棒……」

その時は何か聞こえたような気がした。

その頃、ギャラルホルン。

「貴様が、ニール・ガロン。あの、ライル・バレルの唯一の部下……」

「はっ！このニール・ガロン二尉！この度作戦に参加します！」

唯一の上司である、ライルとは全く違う。礼儀は出来るし、問題行動もあまりない。あると言えば、ライルの部下になったこと位だ。

「明日、アーブラウ代表選だ。お前には鉄華団のモビルスーツを止めてもらう」

「はっ！おまかせください！では、失礼します！」

そう言つて、部屋を出る。

戦績を見ると、最初の方の戦績はギャラルホルンでも、底辺のレベルだ。しかし、ライル・バレルの部下となつてから延びていき、今ではエースといつても過言ではない戦績を残している。まるで奴が裏から手を引いてるいように。

「まあ信用しよう。やつ部下だ。仕事はするだろう」

翌日。

アーブラウ代表選の日。

鉄華団にとっては蒔苗を届ける最後のチャンスである。

「よし！お前ら！ここからが正念場だ！氣い引き締めて行くぞ！」

「「おう！」」

「始まった…か」

「うん。そうだね」

「じゃあやるよ」

そう言つて、片膝を付き、補給の時にもらつた残り一個の滑空砲を構える。

「それじゃ…狙い撃つぞ！」

引き金を引く。

同時に出てきた弾が、モビルスーツの戦場を越えて、モビルワーカーの戦場、それもギヤラルホルンのモビルワーカーが固まっている場所に命中した。

「す、すげえ…。」

これがユウの狙いだ。エイハブリアクターを持ち込めないなら、撃つてしまえばいい。その後も、二発目、三発目と撃つていき、ギャラルホルンのモビルワーカー隊は壊滅的状况となった。

「よし。団長さん。もういい?」

「おう。ありがとな。ユウ! よつしや行くぞ! お前ら!」

「「おう!」」

それを確認した後、滑空砲を投げ捨てた。弾はあるがこういう乱戦では、超遠距離射撃は向かない。アンドラスの腰からアンドラスライフルを抜き、敵が休んでいるところまで行つた。

「なんだ? 警報? 敵襲!?! ぐわっ!」

「おらあ行くぜ〜!」

「これで最後だからな!」

「混乱しているうちに数を減らすよ!」

「了解!」

鉄華団が保有する全部のモビルスーツで敵の拠点に攻め混む。

モビルスーツに乗ってないのも結構いるので止まっているやつはコックピットを踏むだけなので簡単だ。

「まさか向こうから来るとは！」

「ここで全部終わらせる」

「ああ。行くぞ！アンドラス！」

胸部バルカンを放ち、モビルスーツに乗っていないやつを殺す。威力がそこまでないバルカンだが、人を殺す程度朝飯前だ。

そこに、救援部隊が来た。キマリスか。

「あつ、ぐつ！ちつ！この間のやつか」

「カルタ、任せてくれ。お前の無念は俺が晴らしてみせる。そしてギャラルホルンの未来を俺たちの手に！」

キマリスはバルバトスに狙いを決めたようだ。大変だな。あの人も。

それと二機のモビルスーツ。データにはない。

一機はただデカイモビルスーツ。

もう一機は腕が腕というより、ハサミの用なモビルスーツ。

「ニール・ガロン！グレイズファング！いきます！」

「なんだ…あれは…」

そう戸惑っている間にキマリスのパイロットが言う。

「コーリス・ステンジンジャ、お前たちはニール・ガロンと共にモビルワーカー隊の援護に向かえ」

「ボードウィン特務三佐、しかし2機だけでは……」

「問題ない。行け」

「は……はっ！」

謎のグレイズが他のグレイズの殿をして、援護に行こうとする。

「あいつら……行かせるか！」

「待って！… 僕が行く。昭弘さんは姉さん達と後二機を！」

そう言って、アンドラスライフルを撃つ。

すぐさま敵の指揮官と思われる機体が振り向く。

「!!」

そして蹴り飛ばし、コックピットを踏んだ。

「ステン……があっ！」

また、来た一機を倒す。

しかし、そのときには、逃げられていた。いや。まだ方法はある。アンドラスのス

ピードなら…… 追い付ける！

そう考えながら、スラスタをフルに使って。追い付こうとした。

その頃、三人（アジー、ラフタ、シノ）は突如来た、デカイグレイズにやられて機能停止してしまった。

そして、三人を倒したグレイズは市街地に入ろうとしている。それを止めるのはグレイズに追い付いたばかりのアンドラスには無理だった。

「あつ……！くっ！三日月さん！昭弘さん！一機入られちゃった！殺つといて……！！」

オルガ達は議事堂に向かっていたがその時。

「団長！LCSを除く全ての通信が切断！レーダーも消えました！これって……」

「正気か？ヤツらこんな街なかに………モビルスーツだと!?」

その声に反応したように来たモビルスーツがモビルワーカーと車を吹き飛ばす。

「そうだ……… 思い出しました。申し訳ありません。クランク二尉。俺はあなた……… あなたの命令に従いクーデリア・藍那・バーンスタインを捕獲しなければならなかった！」

そう言うグレイズにクーデリアは向かう。

「クーデリアさん!!」

「私がクーデリア・藍那・バーンスタインです！私に御用がおりますか！」

「ああ、こんな所にいたのですね。CGSまでお迎えに上がったのですが……なぜあの時私から逃げたのですか！こちらについてきてくださればクランク二尉が死ぬこともなかった！そもそもあなたが独立運動などと言い出さなければ……！ああそうか。あなたのせいでクランク二尉は………」

あんだけ言われても、クーデリアは止まらない。

「私の行動のせいで多くの犠牲が生まれました！しかしだからこそ私はもう立ち止まらない！！」

「その思い上がり！この私が正す！」

「クーデリアさん！」

アトラがクーデリアを突き飛ばし、そこに斧が振り落とされる

筈だった。

しかし、いきなり来たバルバトスにそれは止められた。

続いてグシオンが射撃を開始する。

「くっ！…… 貴様ら…… 野蛮な獣が！」

「行くぞ。バルバトス」

バルバトスとグシオンの目が光った。

その頃ユウは、

「あいつは危険だ。早く二人を助けに…」

行かないと、というようにした。しかし、それは倒したグレイズ隊の中の殿を務めていたモビルスーツに邪魔された。

アームを避ける。

避けたところを見ると、クレーターが出来ていて、威力を物語っている。

「かわした？流石ライルさんが認めれた敵だ」

「なんだ？あのグレイズ…」

「グレイズファンク… この機体性能でパイロットの差をどこまで埋められるか…」

「さっさと行くぞ！アンドラス！」

アンドラスの目が輝いた。

第14話

グレイズファングという謎の機体は、大昔にいたカニという生き物を感じさせるアームを持っている。そして、今さつきそのアームで小さなクレーターを作った。威力は折り紙つき。といったところだろうか。しかし、弱点も一つや二つあるに決まっている。

その一つに他の武器を使えないというものがあるように感じる。

あの体からサブアームが出るとは思えない。つまり、あのアームさえ気を付けられれば倒せない相手ではない。

「行くぞ。アンドラス」

グレイズファングが接近してくる。速度は普通のグレイズとほぼ同じ。

倒したグレイズからマシンガンを奪って、連射する。

この距離では効かない用で、アームを振り落とされる。

それを避けて、間接に弾を入れようとしたら、バックパックから何かが出た。

大きさからして、信号弾ではない。なんなんだ？

六角柱の形をしたものから何かが飛行機雲を作りながら大量に出てきた。

「これは……小型ミサイル!」

「貫ったー！」

六角柱の物体が落ちる。あれ事態には攻撃力は無さそうだ。しかし、その物体から飛び出したミサイルが接近してくる。距離は近い。数発も当たれば、こっちの体が溶けてしまう。

「くっ！」

咄嗟に下がりがながら、マシンガンを発砲する。

爆破による、炎で視界が妨げられる。

気を抜いた。いや、このような状態で抜ける訳がない。では、なんなのか。ミサイルの1つが地面に落ちた。それに気をとられた。

その瞬間、グレイズから奪ったマシンガンの1つに被弾した。

それに気付き、投げる。

早速ひとつのマシンガンを失った。

「しまっー」

「貫ったー！」

グレイズファングが腕を振り落とす、その時、グレイズファングは牙を剥いた。咄嗟に盾でガードする。しかし、盾に縦の線が二本、残った。

「強いー！」

マシンガンで動きを止める。これなら、滑空砲で遠距離射撃でもしていた方が良かったな。

そう思いながら、離れる。おそらく、相手の方が強い。ならば……どうする……

「逃げるか…… 団長さんはもう出た。ここで、奴の相手をしていたら、三日月さんと昭弘さんが死んでしまう」

そんなことを思いながら、相手と、撃ち合いしていた。

その頃、バルバトスとグシオンは必死に対抗していたが、もうほとんどもちそうになかった。

グシオンはライフルとシールドを失い、バルバトスも装甲を少し、剥がされている。

それにたいして、アインはなんともなっていない。

「罪深き子供……。クランク二尉は、お前達と戦うつもりなど無かった…… やはり、貴様らは出来損ない！ 清廉なる正しき人道を理解しようとしなさい、野蛮な獣！ それどころか、救いに手を掛け冷たい墓標の下に引きずり込んだ！」

全く聞かれていないが、アインは喋る。いや、叫ぶと言った方が近いかもしれない。

しかし、聞いていない。

「行くぞ、三日月！」

「ああ！」

バルバトスがレンチメイスを投げる。それを、砕くのを合図にグシオンがサブアームでアインの動きを封じる。

「なっ．．!!」

そして、バルバトスが太刀と、ハルバードを握って、突っ込む。

「なめるな〜！」

ドリルキックで、グシオンを強引に飛ばして、バルバトスが斧を出す。

ハルバードを捨てて、斧を回避するが、キックが辺り、倒れ混む。

「ぐっ！がつ！」

「三日月！」

「ネズミの悪あがきもこれで終わりだ〜！」

「何やってんだあミカ〜!!!」

その時、何処から来たのかモビルワーカーに乗った、オルガが叫ぶ。その後瞬間、装甲をパージをして、アインの腕を切る。

「……！」

「何?! モビルスーツの装甲をフレームごと?!」

「こいつの使い方、やっと分かった」

ドリルで攻撃するが、同じように、飛ばされる。

「この…… 化け物があゝ!」

「お前にだけは言われたくないよ」

「克蘭ク二尉! ボードウイン特務三佐! 私は、私の正し……」

「うるさいな。オルガの声が聞こえないだろ」

台詞を言い切る前に、グレイズ・アインのコクピットは太刀によって貫かれる。

沈み行く夕日が、太刀の刃を紅く輝かせた。

変わって、ユウは、マシンガンが弾切れとなり、ライフルを出す。盾を外し、真っ直ぐ前を見る。

「仕方ない…… 本気を出すぞ。アンドラス。」

アンドラスの目が輝く。

それと、ほぼ同時にグレイズファングが牙を剥き、ミサイルを発射しながら、接近する。

「……!!」

モニターに移るミサイルを全てロックオンした。

「これなら……!!」

胸部バルカンで全て墮とす。

「今だ!」

「いいや! そんな簡単にアンドラスは墮ちないよ!」

牙をすり抜ける、そして、ジャンプをして、上から、撃ちまくる。その全てが、グレイズファングに当たる。

「小癩な!」

ミサイルを出すのがそれは、ライフルで撃ち落とされた。

グレイズファングの後ろに回り、タックルで転ばせる。

「ぐっ!」

その動きはまるで……

「阿頼耶識…… そんな……!」

しかし、ユウは阿頼耶識の手術を受けていない。
つまり、使えない。

筈なのに……

「ライルさんと……同じだなんて……」

その間もアンドラスによる猛攻が続く。

グレイズファングが攻撃しても、当たらない。ミサイルは撃ち落とされ、アームはかわされる。

「だあああー!!」

グレイズファングがホバー移動で、逃げる。しかし、それを逃がすわけがない。

「逃がすかっ!」

ライフルで、足を撃つ。

そして、接近して、ライフルを撃つ。

「はあっ…… はあっ…… なんなんだ! 貴様は!」

接触回線が開かれる。それは、弱々しいしかし、それでいて強い声だった。

「僕か? 僕はな……」

ライフルをひとつ投げる。

それを避けた瞬間に懐に入る。

「テイワズの… 狙撃手だー」

グレイズファンクが倒れる。

久しぶりに相手と会話した気がする。

「… テイワズって… 言っちゃったな」

乾いた笑いをする。

まあでも倒したんだし… よしとするか。

「… い… きる… る… んだ…」

気がつくのと、グレイズファンクが地面を這ってこちらに近づいてくる。

「… まだ生きていたのか。呆れたなその生命力」

「はあ… はあ… 流石にライルさんと渡り合った奴に挑もうとした俺が馬鹿だっ

た… けど、俺はこいつにも勝つんだ… いつか… !!」

「なら、行けば良いじゃん。僕も仕事があるし」

「まさか… 「勘違いするな」」

言葉を強引に遮る。敵に情けなど、したくないのだがな。

「僕はあるたを殺したって何も無いからなにもしないだけ。死にたいなら勝手に死ね

ば」

「…」

グレイズファンクがスラストー使って逃げるのを全くみずに自らの家族を助けにいった。

戻ると、エーコが二人をヤマギ（とかいう鉄華団団員）がシノさんを助けていた。

「エーコ姉さん！」

「ゆーちゃん！早く二人を！」

「わかった！」

それ以上の会話はいらなかった。止血をして、包帯を巻き、寝かせる。

少し時間がたてば三人とも起きた。機体も問題無さそうだ。

シノさんはこの短い期間で機体を二機スクラップにしてしまったが。

まあだいたいコックピット回りを変えたのみなので損害的には一機だが。

その上、そこらに散らばっているエイハブリアクターを回収してしまえば、それなり

の金になる。貰ってくか。

そんなことを考えながら、夕日を見た。

それに倣ったのか、タービンスのみんなが並ぶ。

「終わったな」

「うん」

「帰ったらダーリンに誉めて貰おっかなー♪」

「ああー私もー」

そんな会話を聞きながら、空を見上げる。

宇宙そらでやりあつた敵。おそらく、今回のやつと言葉から、ライル。という名前だろう。

一応生きてはいるが、あいつは強い。今じゃ勝てない。

「もつと…強くなりたい。もつと…もつと…」

「ユウ…」

アンドラスはいい機体だ。

しかし、今はその性能に引つ張られている気がする。もつと使えるようになりたい。

「アンドラス…見せてくれ。僕達の未来を」

アーブラウ代表選は、蒔苗東護ノ介が再選した。

それと共にアンリ・フリユウとイズナリオ・ファリドの癒着が明かされる事となり、ギヤラルホルンの社会的信用はガタ落ち。

イズナリオ・ファリドは、亡命先へ追放される事となった。

それから、4日がたった。

鉄華団は明日地球から出る予定であり、タービンスもそれと共に行くらしい。

それで…… 名瀬が来た。

何で来たの？

と言いたいのがそれは無粋だろうと口からは出さない。

まあこれで鉄華団のお目付け役とかめんどくさい仕事は終わりだろう。
しかし。

「うわあ〜ん！」

「ダーリン！」

「よしよし、よく頑張ってくれたな」

これを見せつけられて、息子としては…… 悪い。もう慣れた。

「なんかそれちよつとおざなり！」

「もつとちやんと褒めて！」

いや。満足してよ。

まあいままでの仕事でそれじゃわりにあわないのかな？

近くで、母さんとアジー姉さんが同じようなことをやっている

「あんたはいいのかい？」

「私は……。あつ」

「かわいいねえあんたは」

「えっ? やめてください姐さん」

「ほら、ユウも」

「はいはい」

そう言つて来たので近づくといきなり抱かれた。始めての時は緊張した
がもう慣れた。

「よくやった。よくやった。」

「うん。ありがとう」

今はその感情を全て受け止めることが出来る。

「(やっぱりユウも名瀬の子だね…… 似てきた)」

そうアミダが感じているのをユウは全く気づいていなかった。

その日ギヤラルホルンでも

病室から出てきたニールとライルは会った。

ニールは身体中を包帯で巻かれて、その上にギヤラルホルンの制服を着ている。

「怪我が治つたと聞いてな」

「すみません。ライルさん。敵を逃がした上に情けをかけられてしまうだなんて……」

ニールにとっては生きていることは嬉しい。しかし、情けというのは少し嫌だった。「気にすることは無い。次に討てば問題ない……それより」

その言葉でニールの顔が上がる。

「奴に会ったのだろうか？ どうだった？ アンドラスとやらのパイロットは」

ニールは下を向き、黙り混んだ。

でも、ライルは外の景色に視線をやり、何も言わなかった。

何も無い時間に耐えかねたのか、ニールが口を開く。

「強かった……といえれば良いのでしょうか。強い、というより全くわからない。といった方が正しい気がします」

その言葉を聞いて、ライルも喋る。

「数度戦ってわかった。奴は……奴の弾には強くない」

その強さとは、とニールが言う。

「感情がない。といった方が正しいのか俺にもわからない。普通射撃とは、人を殺すつまり、それなりの感情がある。誰だつてそうだ。無感情で殺す奴でも、機械にですら、何か来る。つていう感覚がある。奴と戦っているときにはそれがなかった」

そう言つて、ニールの方に振り替える。

「それは……」

「どんだけ早く撃てようと、どれだけ威力があろうと今からここに撃つぞと言うのがあ
る。銃弾を捌けるたり避けられる奴はみんなそれを感じている。俺だつてそうだ。し
かし、あいつにはそれが無い」

ニールは考える。あいつだつて無感情で戦いをやっているわけではない。

それでも、あるはずの何かしらの気、というのがない。

「至近距離で撃つても、遠距離で撃つても、わからない。強さが無い。それが奴の強さ
だ。」

強さが無い。それが強さ。

矛盾しているはずの言葉なのに、真つ正面で向き合つたからか、理解できる。

どんな距離でも、撃つのか撃たないのかわからない。

当たつて始めて、撃たれたとわかる

それが奴の射撃だ、狙撃だ。

「まあカルタ司令もボードウインの人も死んじまつたし、これからどうする?」

「そうですね……アリアンロッドなんてどうでしょう?」

「おういいな! それ! よし! 今日飲むぞ! 思いつきりな!」

「はい!」

その二人のエースパイロットにも、また明日が来る。

そして、また鉄華団を苦しめるのは別の話。

第二期 ロークスコロニー編（ほぼオリジナル） 第15話

アーブラウでの代表選から、約2年。

蒔苗東護ノ介の再選と同時にギャラルホルンの腐敗が暴かれた事により、世界の情勢は少しずつ変化している。

クーデリア・藍那・バーンスタインの護衛任務をやり遂げた鉄華団は、その名を世界に轟かせた。

ハーフメタル利権を得たテイワズは、大きく貢献した鉄華団を直系団体とし莫大な利益を得た。

鉄華団の助けをしたタービンズも同時に規模を拡大。タービンズの下部組織が増える事となった。地球にいた息子、娘達も希望をすればであるが、タービンズもしくはその下部組織の中に入っていた。

タービンズの下部組織、イプシロンの代表には、名瀬・タービンの息子である、ユウ・タービンが就任した。

同時にクーデリアはテイワズと協力し、アーブラウ植民地域のハーフメタルの採掘、

一次加工、輸送業務を行うアドモス商会を設立。また鉄華団と提携して桜農園の敷地内に孤児院を設立。社会的弱者への能動的支援と火星全土の経済的独立のため、日々奔走している。

その反面でギャラルホルンは社会的信用を失い、世界の治安はより悪化する結果となった。鉄華団の活躍により少年兵の有用性が示された結果、子供たちは戦場へ大量に投入されヒューマン・デブリも増加。また戦力としてのモビルスーツの重要性も再認識され、各地で大戦期のモビルスーツの復元と改修が進み、モビルスーツの総数は爆発的に伸びている。

とあるコロニー。そこでは、イプシロンの代表である、ユウとそのコロニーの代表が話していた。

「よし。言っていた通り。受け取ったよ。ありがとさん」

「いえいえ。積み荷の運搬の業者を私達にでもらっていること感謝します」

そういつている彼の服装はいつもの少しだしらない格好ではなく、しっかりとスーツを着ている。

「いやいや。最近海賊が多いのに、君達は積み荷に一切傷つけなくて来るからね。最初は驚いたよ」

「海賊……ですか。物騒な世の中になったものですね」

そう言っただけでここまで来たときに使った戦艦フュンフを見る。

ハンマーベッドよりイサリビにフォルムは近い。

カタパルトが二つ。つまりモビルスーツは一度に二機出ることが出来て、運搬用の戦艦というより海賊が使っている戦艦と言われた方がしっくりくる。

「では、私たちはこれから本拠地へ戻りますので。それでは、また機会がありましたら」「ああ。海賊退治と物資の運搬はテイワズを推薦しておくよ」

「ありがとうございます。失礼しました」

そう言っただけで頭を下げる。その後、フュンフに入って、そのコロニーを出る。

フュンフに入ってすぐネクタイをほどく。

「こういう堅苦しいのは嫌なんだって。姉さん」

そこに一人の女性がくる。身長はユウと同じくらいで髪の毛は茶色。イプシロンの中でおそらく一番高齢で頼れる女性。アガーテ・ベルク。タービンのメンバーである。

「ゆーちゃんは、戦闘以外にも学んだ方がいいかと思って」

「よく言うよ。戦闘が出来ないから、事務系統任せていたのに」

アガーテはイプシロンの事務系統、戦闘中はブリッジクルーをもらっている。

そこに、一人の男が来る。頬の傷が分かりやすく、身長はユウやアガーテより高い。髪の毛は黒色で、筋肉質な体。

「良いじゃねえか。二年前のクーデリアのことをハーフメタル利権を勝ち取ってティワズにもたらしたのはユウ。お前だ。つまり、お前がイプシロンの代表になってこういう仕事をする義務がある。」

そう言うのはジョーカー・クロウド。元々JPTトラストの傭兵だったが、今はイプシロンでモビルスーツ隊の副隊長をやっている。(しかし、事実的にはユウがいないときや艦長としてブリッジに残る時にしか指揮は一切しない。)

「でもなあ。モビルスーツ隊隊長に艦長。イプシロンの代表となった。ここまでくればただの社畜だろ」

実際、イプシロンのメンバーはしっかりと働いてくれるので社畜。とは行かないのだが、そう勘違いされてもおかしくない程の肩書きではある。

まあユウ曰く、満足はしている。らしい。

「あつ！そういうえばジョーカー。お前、クーデリアを送り届けたのは僕だつて言つたらろ」
「ああ。まあな」

「送り届けたのは僕じゃなくて鉄華団！何度言えばわかるんだよ。それに、援助したのはタービンズでも父さん!!」

「へいへい。でもお前がいなければ出来なかったんだろ？」

「んー」

「そうだ。何度も思い出す。ライルというパイロット。外見も何もわからないが：いや。モビルスーツは動きが早く、弾を当てさせてくれない。という事だったり、あと表現しづらいが、強い。つてのはわかる。今の鉄華団でも抑え込めるかわからない。そいつがいた戦場で生き残っている。そこからユウのパイロットとしての強さが伺える。」

「ほらほら、さっさと歳星行くよ」

「そうアガーテが言ったので、答える。」

「ああ。これから歳星に戻ってそれからロークスに行く」

「そう言っつてブリッジへと行く。」

「そこには、アガーテがする筈だった事務作業をしている女性、シユイン・ヴァイプがいた。身長はユウより少し低く、髪の毛は金色。他の女性より少し痩せててスタイルは良い。そこまで長い髪ではないが縛っている用だ。」

「ゆーちゃん。うまくいった?？」

「うん。本当はアガーテ姉さんにやらせたかったんだけどね」

「ははは...」

シユインは今は事務作業だが、戦闘時はモビルスーツをうまく動かせる、良い人材だ。そう返すと艦長の席に座って言った。

「それじゃあ歳星に向かうよ。フュンフ。発進！」
フュンフがガスを吹き出しながら前進した。

歳星に向かう途中。

「……成る程。それで、鉄華団は夜明けの地平線団を倒すんだね」
とある部屋でユウは名瀬と通信をとっていた。

「面白い人だね。んで手伝うの？」

「いいや。手伝いはラフタとアジー、エーコだけで十分だとき。なんともギャラルホルンがバックにいるそうで」

ギャラルホルン。鉄華団なら仲間の敵では、あるが今の鉄華団だけでは倒せないことはないが、相当な被害になるだろう。

「獅電を売り込むチャンスだな。夜明けの地平線団……まあ大丈夫だろう」
鉄華団より今は聞きたいことがある。

「それより父さん」

「ん?どうした?」

「次の仕事ロークスコロニーなんだけど...」

ロークスコロニー。端から見れば普通の工業コロニーである。

しかし、調べて見た結果もうじき反乱が起こってもおかしくない。

「まさかドルトと同じことにはならないよね」

「あー。その件なら親父と話したらどうだ?」

ドルトコロニー。その反乱はうまくいったものの、それなりの犠牲もあった。

それに巻き込まれるのはこちらとしては避けたい。

「わかった。その件はおじいちゃんと話しく」

そう言っただけでまた会話を続けようとしたときに振動が起こった。

「どうした?」

「ゆーちゃん...海賊よ。物資を渡せば見逃してやるって」

そうアガターテが部屋に入って言う。

部屋に入るときはノック位しろよ。と言いたいがこの場合仕方ない。見逃すか。

「ユウ...大丈夫か?」

「うん。通信はまた後でするよ」

そう言っただけで、通信を切る。

そして、アガータに言う。

「ジョーカーとシュイン姉さんにいつでも出れるようにって言つといて」

「わかった！」

そう言つたのを見て、自分のノーマルスーツを着る。

その後、ブリッジへと向かった。

モビルスーツデツキそこでは十数機の獅電と数機の百鍊と百里。そして、一機のガンダムがいた。

そこに、数人の人間が来る。

その中には、ジョーカーとシュインの姿があつた。

「おいシュイン！ さつさと出るぞー！」

「はいはい」

そう言つてシュインは獅電にそして、ジョーカーは獅電改（トート）に乗り込んだ。

「はいはい獅電、シュインさんから出すよー」

そう何処からか声がして、獅電が降りる。

そこに通信が入った。

ピピッ

ユウだ。

「シュイン姉さん、ジョーカー。聞いてくれ。敵はシヴァ・ロデイ三機とスピナ・ロデイ十六機だ。ある程度チームワークもとれているから敵艦の尻尾が取れたら僕も出る」
それは助かる。

「了解」

「わかったわ。：シュイン・ヴァイプ！獅電いきます！」

「ジョーカー・クロウド！出るぞ！」

二機のモビルスーツが宇宙へと飛び出した。

それを見守っていたユウはブリッツジで眩いた。

「さあ見せてあげようか。イプシロンの力とやらを」

第16話

シュインが飛び出した瞬間。総勢16機のモビルスーツがのカメラが一斉にこちらを向く。

「あーあ… 勘弁してほしいわー」

シュインの獅電がライフルを放つ。

それが一機のスピナ・ロデイに当たる。それから始まった。

一機のスピナ・ロデイがブーストハンマーを持って襲いかかる。

その攻撃をかわした時、数機のスピナ・ロデイに囲まれていた。

「モビルスーツ同士の戦いはお手のもの… って訳ね」

スピナ・ロデイのマシガンでライオットシールドで全て受け止める。

敵モビルスーツはシュインの獅電を軸として幾つかの円となっている。もしかしたら、中心にいるのはヒューマンデブリかもしれない。

外側のモビルスーツはピクリとも動かない。死んだ訳ではない。要るだけでいいからだ。しかし、これが此方の狙い。

「来なさい！ ジョーカー！」

ジョーカーのトートが一番外側のスピナ・ロデイのライフルを斬った。それも鎌で。鎌。ジョーカー専用の獅電の一番の特徴と言える武器。剣や斧より扱いは難しいがその分攻撃範囲が広い。

メイスのような質量兵器とは違う。

その切れ味。それがジョーカーの持ち味だ。

「はあっ！」

鎌で敵のライフルを斬ったあとと止まらずに、頭上へと上がる。そして、回りながら此方に視線を向ける。

「いいぞーいいー！」

先ほどライフルを破壊したスピナ・ロデイがブーストハンマーを持って接近する。それを避けて、コックピットに鎌の先端を刺す。

それで動かなくなった。

また二機来た。しかし、速度が遅い。さっきの戦いを見て恐怖したか。

「へへっ」

鎌を持ち直して、突撃するライフルを向けた頃には腰の辺りを切り裂いていた。

近くにいたもう一機も巻き込んで。

これだから嫌はいい。モビルスーツのナノラミネートアーマーを広範囲で切り裂ける。

切り裂いた二機を蹴り飛ばして、離れる。そうすると、何機かが追ってきた。

「良いぞ！来い！」

ブリッジ。そこでは二つの戦艦が撃ち合いをしていた。シユインの獅電が飛び出したので敵意があるとバレたな。

まあ良いけど。

「このまま撃ち合いでいける？」

そう聞く。出来るだけ二機を危険な状態にしておきたくない。

「うーん。やつらもただの海賊だからね」

今は正面で向き合ってるの撃ち合いだ。相手の懐にさえ入ってしまえば良いが…

「ナパーム」

「はいよ」

ユウの合図でナパーム弾を出す。

あと少しというところで撃墜された。

「二人はあとどれくらい耐えられそう?」

「死にはしないと思うけど、大変そうだね」

まあ十数機を二機で耐えろといっているのだから。仕方ないだろう。

「スモーク」

「わかった」

ナパーム弾に形が似ている、スモークを出す。

さっきのナパームの要領で撃墜された。その時に煙が二つの戦艦の間に出てきた。

行くなら今だな。

これで大丈夫だろう。

「もうそろそろ僕も行くよ。ブリッジよろしく」

「はいはい」

急いでモビルスーツデッキへと行く。

着くと今か今かと待ち望んでいるように見える、相棒の姿があった。

「よし。行くかアンドラス」

相棒はじつと使われるのを待っていた。

数人の従業員の声が聞こえる。

コックピットに入って、起動する。

アンドラスが発射体制へとなる。

「ガンダムアンドラス。ユウ・タービンで出撃します！」

その頃ジョーカーは

「!!」

もうそろそろで半分というところで新手がきた。

スピナ・ロディじゃないな。

シヴァ・ロディか。

三機がマシンガンを放ちながら、接近してくる。

「今だ！」

鎌を降った。それを人間のような身のこなしで避けられた。これは…

「阿頼耶識?! ヒューマンデブリか！」

鎌を避けた一機が背後からチョップパーアクスを出して接近戦を仕掛けてくる。しか

し、それに対応しては残りの二機にやられる。

仕方なく、腕部にある、追撃砲で二機を牽制する。後ろに回った一機の攻撃をギリギリで避けて、足で蹴り飛ばす。

「早く来いよ！ユウ！」

マシンガンを受けて、揺れるコックピットの中で叫んだ。

それは通信となつて本人に聞こえた。

「了解。先に危ないシユイン姉さんの援護する」

そう言うと、戦艦からあまり動かず、シユインに攻撃を仕掛ける数機のモビルスーツにマルチロツクオンをした。しかし、バルカン等を放つ訳ではなく、背中に掛けられたレールガンを取る。このレールガンは変わった形状をしている。肘の近くの部品に引つ搔けて使うため、普通のライフルの反対方向で握るため、ライフルの銃口が腕の下の方に着く。まあ、肘に引つ搔けるパーツを外せば普通のライフルとして使えるから別に良いが。

「：：撃つ」

レールガンから放たれた弾丸がシユイン目掛けて後ろから追撃しようとした、一機のモビルスーツに当たる。

そのモビルスーツがよろけたときにシュインの獅電がバルチザンを伸ばして、飛ばす。

その後、アンドラスの存在に気付いた機体からコックピットに弾丸を入れていった。

その様子はまるでギリシア神話のメデューサをみたかのように動かなくなつた。

撃たれたが、モビルスーツがやられたとは思えない傷の量である。

バルバトス見たいに殴つたりすればへこむし、トート見たいに切り裂けば切り傷が出る。しかし、アンドラスの射撃はコックピット周りに少々傷がついているだけである。(コックピットの中はぐちゃぐちゃだろうが)

その調子でシュインが敵のコックピットをこちらに向けさせてくれて、簡単に狙撃が出来た。いくら能力が高くて弱点が見えなければ意味がないからな。

あらかた処理はしただろう。

ジョーカーの助けに入らなければ。

そう思い、機体をジョーカーの方に向ける。

阿頼耶識の機体が三機同時にかかってきても、未だに耐えている。

流石だな。

「シュイン姉さん。僕はジョーカーの方に行く。ここは頼む」

「はい。いってらっしやーい」

機体のスラスターを使ってジョーカーと三機のシヴァ・ロデイが戦っている現場へと向かう。

結構良いところまで行っているな。来なくても良かったのかも。

「ユウ！ さっさと！」

「わかつてる。狙い撃つ」

レールガンに掲げたあと、接近する機体をかわして追撃をジョーカーが受けた。

「チャンス！」

狙い撃って、一機を倒す。

それを見た残りの二機が挟み撃ちをするようだ。

こちらの方に狙いを着けたシヴァ・ロデイに向けて弾丸を放つ。

それは、相手のマシンガンを破壊して、動きを鈍らせた。その瞬間に飛び付き、コックピットに弾丸を入れた。

後ろを見れば、ジョーカーが残りの一機を切り裂いていた。

「流石だな。ジョーカー」

「そっちこそ。流石……テイワズの狙撃手」

機体をフュンフに戻してその後、襲ってきた海賊の方に金とエイハブリアクターを戦

利品として貰い海賊と別れた。

これでわかったことも数点ある。

皆にしても肩慣らし程度にはちようど良かっただろう。

そう思いながら、父さんに事の顛末を話した。

これから、鉄華団とすれ違う形で歳屋へと行き、危険な可能性があるロークスコロニーへと行く。

そのロークスコロニーでの一件が今後に関係してくることなど誰にも予測できなかった。

第17話

その後、イブシロン一行は歳屋に戻ってきた。

生憎、父さんは別の仕事があるため歳屋にはいなかった。

みんなは買い物等用があるだろうが僕にも用がある。

「おー。よくきたな。ユウ。どうだ？たまにはモビルスーツの操縦以外の仕事をしてい
るのも」

そう言つて僕の目の前に座っているのがティワズのボス。マクマード・バリストーン。

「正直言つて疲れますね。集中して狙撃した方が楽チンだ」

一番疲れるのは目上の人との会話だが。鉄華団との仕事なんて色々な意味で大変
だった。

「はは！やっぱりおめえは面白い！流石は名瀬の子だな」

そう言われていると菓子が出される。

僕はティワズの中ではモビルスーツ戦なら指折りのパイロットの上に、狙撃戦が得意
ということからティワズの狙撃手と言われている。

その二つ名とティワズの中でそれなりにデカイ企業であるタービンの長である名

瀬・タービンの息子でありそして、その下部組織であるイプシロンの代表なのだからそれなりの力はある。

ということまで話している間は菓子も茶もでるし対応もしてくれる。

「お祖父様。今回はロークスコロニーについてなのですが……」

その一言でマクマードの顔が変わる。この人は商売なら物凄い人だ。その言葉にもピンと来るものがあるだろう。

「他のコロニーの作業環境、反乱レベルを考えてみますと、相当大きな反乱が起こる可能性があります」

「ああ。知っている。けどな今回はロークスコロニーから地球への物資の配達だ。反乱は別に避けても構わない」

確かにそうだ。鉄華団のドルトコロニーの場合はクーデリアが望んだからあのような展開になっただけであり、見過ごす事も終わるまで籠ることも出来た。

今回はそちらの手を使えば良いと言うことか。

「その許しが出ただけで十分です」

「ああ。そう言えばあの小娘が言っておったぞ。言われた物を見つけたとな」

小娘とはクーデリア・藍那・バーンスタインだ。頼んでいた物……あれか！

「!!そうですか！ありがとうございます！……では……」

「ああ。頑張れ」

その言葉が聞こえたので、菓子を少し貰ってユウは部屋を出る。その後、マクマードはユウがクーデリアに頼んだ物を思い出して笑った。

「ユウの奴。ビツクネームを引っ張ってきたな：：アグニカ・カイエルか：：面白くなってきたな」

そこから約一週間は歳屋にいた。

別に物資の調達程度ならすぐに終わるのだが歳屋には少しでも長く居たかった。

「姉さん達はシヨツピング。ジョーカーはかつての仲間と飲みに：：だってよ」

だってよ。といったのは伝えるべき相手がいたからだ。

「やっぱり：：ユウ：：お前は母さん達になんかしているだろう」

「そんなことはないって。兄さん」

「ふふっ」

笑った相手は正真正銘兄貴だ。とはいってもその兄さんも誰の腹から産まれたかはよくわからない。

名をエスト・タービンという。

地球の方でモビルスーツに関する工学について勉強していたが、タービンズに行つてその後イプシロンに流れてきた。

それなりにモビルスーツが動かせる人材だ。

これで戦場で上手く戦えるパイロット三人に、僕か。

合わせて四人となったエースパイロットは上手く使えれば、海賊も落とせそうだ。

「じゃ、よろしく」

「あいよ」

そう言つて手を握り会う。これでエスト・タービンは晴れてイプシロンのモビルスーツ隊だ。

モビルスーツデッキに着いたとき、エストが呟く。

「それで、二年たったのにあんまり変わらないな。あのモビルスーツ」

確かに。鉄華団のバルバトス、グシオン等と比べればあまり変わってないように見える。(その二機も外見はあまり変わらないが)

「変わった点と言えば武装か。どうせ整備長がお前の戦闘データ云々で作ってくれたんだろ」

改良の際に整備長が「この際だし、装甲も変えちやおつか」とか言っていたが、全く

変わっておらずいい感じではある。

個人的にアンドラスのこの感じが好きだしな。

その時独り言が口から溢れ出た。

「アンドラス。見せてくれ僕たちの……未来を」

「なあ。ジョーカー」

暗いバー。そこで酒を飲んでいるジョーカーの横には何人かの男たちがいた。皆J P Tトラストの傭兵達だ。

「ん？どうした？」

「戻ってくる気はないか？」

戻る。それは何度か考えたことはある。元々ジョーカーは戦力がまだ無かったイプシロンでモビルスーツ隊を鍛える為に頼まれただけなので今からでも抜けて戻る事は可能だ。イプシロンにもそれなりに慣れたが、やっぱり時間とは怖いもので嫌な筈のJ P Tトラストの方が居心地がいい。

「ああ。考えとく」

「頼むよ。ウチのエースパイロットさん」

手に持っている酒を飲み干した。
そのグラスから氷がグラスに当たる音が響いた。

イプシロンが歳星についてから約一週間歳星にいた。その間エストを迎え入れて、歳星にて息抜きをしたあと、ロークスコロニーへと向かう。

そして、地球へと行く手筈だ。

また地球か……とフュンフの窓から宇宙を見る。

すると、アガートが来る。

「ゆーちゃん」

「アガート姉さん。どうかしたの？」

そう言うのと、端末を出してきて、資料を見せてくる。

「前回の海賊戦の戦利品ほとんど売却したけど、こんな値段になったって」

端末を見ると、それなりの金がある。

「へえ。今回はそれなりにいい値段になったね」

「うん。モビルスーツは大抵鹵獲したからエイハブ・リアクターを大量に取れたって言うのが大きいと思うけどね」

この二年間でモビルスーツの数が爆発的に増えた。それは事実だがそれと同時にエイハブ・リアクター不足が出てきた。つまり、売ったのはティワズに向けてだがそれなりの金は取れた。これで弾代等の消耗品とモビルスーツを二、三機買つてもお釣りが出てくる。

金は十分。モビルスーツも十分。：：：。だろう。けど、まだやりあう事は無理だろう。

重い口を開いた。

「なあ。：：。アガーテ姉さん」

「?：どうかしたの?」

窓の近くにある手すりに体重を乗せて言う。

「もしもロークスコロニーで反乱が起こったりしたら。：：。どうする?」

聞きたい事がある。それは反乱の対処だ。勿論逃げたり隠れたりするのも可能だ。

おじいちゃんにもそれは許されたし、別に反乱に参加しろ等の声も出てこない。けど。：。：。

「あそこにいるのもちゃんとした人なんだ。：。反乱を起こせば必ず負けるだろう。あの辺りにはアリアンロッドが居座っているから」

アリアンロッドとはセブンスターズの一人、ラストル・エリオンが率いるギャラルホ

ルン統制局直轄の宇宙艦隊であり、月の公転軌道外を管轄とし、主に敵対勢力の地球圏侵攻を阻止する事を任務とする。

ギャラルホルンの中で高い士気と練度を誇り、部隊規模もハーブピーク級戦艦のみでも40隻以上と、ギャラルホルンの中では最も大きい。

反乱を起こせば十中八九皆殺しだ。そんな結果僕は望んじやいない。

「ゆうちゃんの弱点だよ。相手を人だと考えたと撃てなくなるってやつ」

顔を背けるしかなかった。アガーテの言うことは正しい。

実際二年前の変なグレイズを使うやつを人だと思ってしまった為見逃してしまった。

狙撃手としていけないのはわかっている。けどそのときは引き金が引けないのだ。

我ながら馬鹿馬鹿しい。

「：：でもね。それはゆうちゃんの良いところでもあると思うよ」

「アガーテ姉さん：：」

「ほらほら。顔を背けてないで上げる！大丈夫。お母さん達もみーんな揃っている。ゆうちゃんはゆうちゃんの選択をして」

実際。みんなには色々と救われている。十年前から救われっぱなしだ。子供なら仕方ないとはいえ、この年齢から見ても一人で出来る事が僕には出来ない。甘やかされて育ったのだろう。ならばせめて、せめて僕が出来る狙撃でみんなを助けてあげたい。

「うん。わかった。アガーテ姉さん」

次の仕事は大変になりそうだ。ユウはもし反乱になったらどうするか心に決めることにした。

第18話

「ロークスコロニー……ですか？」

とある船のモビルスーツデツキそこにはギャラルホルンの制服に身を包んだ男二人が話していた。

その名は、ニール・ガロンとライル・バレルである。

「ああ。もうすぐ彼方さんは仕掛けてくるとのことだ」

ライルが煙草を吸いながら答える。

ロークスコロニー。そこは二人が今向かっている場所だった。

「全く。今から仕事だと言うのに貴方達は何をしているのですか」

そう二人に話し掛ける女性が一人。只でさえ女性が少ないこの艦で二人（ニールは兎も角ライル）に話し掛ける女性はとても少ない。

「まあまあ。反乱があるかどうか決めるのはコロニーあっの住人だ。だからあるかどうかもわからないんだぞ。まだ気い引き締める必要なんか無いってアメリカさんよお」

そう。彼女の名前はアメリカ。アリアンロッドの司令官だ。アリアンロッドを志願したものの以外にアリアンロッドに入っている物は大きく二つ。ライル（ついでにニール

ル)そしてここにはいないがジュリエッタ等のパイロットの腕を見て選ばれた者。そしてアメリカの用に別の面から選ばれた者。四人はラスタルに選ばれた者という点では同じだが、ラスタル・エリオンを信用するかという面では四人は違う。

ジュリエッタは異常なまでにラスタルに拘り、アメリカはラスタルをまるで父のように(実際に養子である)ライルとニールはあくまで戦士と指揮官としての関係だ。どちらかというと前の上司であった者の方が印象深いかもされない。

「そんな言葉を出しているようには見えませんが楽しんでますよね」

「ああ。楽しんでるな」

「全く。お父様に腕を見込まれて入ってきたというのにお気楽ですね」

これでもアメリカはライルの腕のみは信用している。他のパイロットより数段：いや。もうそういう次元にはいないんじゃないかと。その理由の1つが背中の出っ張りである。自身の父に聞いてもはぐらかされて聞かない方が良いと自分との間に壁を作るような代物らしい。

「何がしたいーじゃなくて会いたいんだよ」

「それはー恋人ですか? いえ。失礼。貴方に恋人はいませんかよね」

失礼なのはそこじゃない。と言われそうなセリフだ。

しかし、ライルはアメリカから目はずしモバイルスーツを見る。

「言われちゃってますよ。ライルさん」

ニールも横からライルを突つつく。普通の上司と部下の関係なら怒られるが、ライルは怒るところか笑って答えた。

「確かにな。それは言えてる」

「まさか、認めてしまうとは。貴方はつくづく変わったお方ですねーそれにあのモビルスーツ。何なんですか？」

アメリカの言葉で二人は二機のモビルスーツを見る。

その二機のモビルスーツはひとつはグレイスクルーガ（ライル機）もうひとつはグレイスルデン（ニール機）だ。

グレイスルデンに関しては過去に量産だった予定（シュヴァルベグレイズやグレイズの性能、レギンレイズによって少量量産で終わったが）のグレイスの上位機だ。なので珍しくはあるが、そこまで不自然じゃない。問題は……グレイスクルーガだ。

左はグレイスリッター。右はシュヴァルベグレイズと少し不自然に見える機体だ。それでもカラーのせいか、そこまでおかしい見た目ではない。どこか、グレイズリッターよりな気もする。彼の言葉をそのまま信じるのなら昔の上司が死んだのでその機体を引き継いだ。とのことだ。しかし、グレイズリッターと言うことは地球外縁軌道統制統合艦隊ということになり代表がこちらアリアンロッドのラストルと睨み合いの状

態の^金マクギリス・^髪フアリドとなりここに来るのはおかしい。そもそもこんな奴が尊敬した上司がいたとしてもその亡骸とも言える機体を引き継ぐ事など不可能だ。つまり嘘だと考えられる。

しかし、その（恐らく）嘘をライルは突き通すつもりらしい。

「おっ疑ってるな」

「当然です。貴方なんか亡骸とも言える機体を与える人はおりません」

「へえ、嫌われてるねえ俺は」

そう言うところある端末を見せてきた。証拠か。と思つたが違うらしい。

「買い物頼む」

「・・・はあ。わかりました」

どうせ、買い物なんかめんどくさいから女に押し付けるか。といった様子だろう。気に障るが了承した。

「ありがとよ。お嬢さん」

最後の言葉は流石に怒つたが。

その数日前、イプシロン一行はロークスコロニーへと着いた。

ここで積み荷を貰ってそれを地球へと届ける。のだがそこまで急がなくても良いらしい（信用はあまりできないが、労働者の話を聞くに小さなデモはあっても此方に危険が及ぶような物はないらしい）。と言っていたがさつさと別のコロニーか地球へと逃げたかったが、積み荷に何かあつたらしく少しこのコロニーに居座る事となった。

しかし、わかっている。積み荷に何かあつたのは嘘だ。事件を引き起こした際手伝つて欲しいのだろう。

手伝いたい。という自分もいるが、ここで手伝つてギヤラルホルンにマークでもされれば地球はおろか、これからの仕事に支障をきたす。せめてギヤラルホルンを口止めできるもの。例えばドルトコロニーと同じ手口の場合証拠を出す等。それが出来れば手伝おうと思う。

しかし、今の状態じゃ手伝わずに逃げるが。

結局、ここで待たれる事となった。

まあ歳星にいたのも数日だしどうか。と頭を納得させる。

その間に歳星と連絡する。もしかしたら戦闘の可能性があると言うことを。

マークマード曰く、ギヤラルホルンにマークされなければ良いらしい。

あの人らしい。と言えばあの人らしいと言える。

そう思いながら一室で射撃練習をしている。

射撃練習といっても弾はゴムだし、モビルスーツではなく、対人用なので阿頼擲識が無いのに意味はあるのか。といわれそうだが、これでも意味はある。

例えば、たとえモビルスーツのコックピット無いでも体のブレは弾に影響する。その為かモビルスーツとはいえ、優れた狙撃手は拳銃等もうまく使える。

飽和攻撃が得意なわけではなく、あくまで一機一機の確に処理していくタイプなので弾のブレは命の危険になる。その上、モビルスーツの射撃はプログラム任せだと相手が戦艦などの動きが遅い、もしくは動かない奴にしかあまり意味を成さない。なので二年前も鉄華団のメンバーが筋トレをしている最中、ユウはずっと射撃練習をしていたのだ。

部屋の端から撃ち端にある的に当てるのだが、いくら端と端とは言っても一つの部屋だ。そこまで離れていない。その為、外すわけもない。

引き金を引いていくと一発も外れず、的の中心に当たった。やっばりのが近いな。次は廊下とか使ってみるか。

「ねえ。ゆーちゃん。コロニーの人が呼んでいるよ」

「どうやら呼び出しのようだ。」

「わかった。…念のため銃でも持ってきてくか」

近くにある拳銃を練習用と変えてポケットに入れて呼ばれた所へと行った。

そこには、拳銃を用意した此方とは対照的に何にも無いところに呼び出されたが、部屋が汚い。汚いと言ったが片付いていない。という意味ではなく、出来てから何年かたっているのか所々脆くなっているように見えた。

「すみませんねえ。こんなに汚くて」

言っている人は30、40代位の男だ。どうやらここは労働者の場所らしい。

「いえ。それで話とは何ですか？此方は早めに地球に行かなくてはならないので遅れるのは困るのですが」

実は実際地球に行くのに問題はない。積み荷に問題があつたのは事実だが地球の方に伝えてあるらしく運ぶのには問題はない。

そういうえばドルトのデモの引き金は鉄華団が運んできた武器だ。

となればこの人たちが要求するのは…

「実は我々は近い内に大規模なデモを行おうと思つて居るのです。貴殿方にはその…ギヤラルホルンとの戦闘になつた際に使える武器を送つて欲しいのです」

やはりきたか。此方があまり突つ込まなかつたので逆に頼みに来たか。

「すみません。我々には戦闘しても得がありません。実際このまま戦闘となれば後の仕事に響きます。それに我々の力があつてもギヤラルホルンには勝てないでしょう」

「その事はわかっております。しかし、二年前鉄華団がドルトコロニーに増援を送った用に救って欲しいのです。成功したら報酬だつて……」

鉄華団。その名はたった二年で大きくなった。コロニーの労働者に対してはその存在はまるで英雄ヒーローのように映つただろう。そして、それと同時にその上部組織であるティワズも。イプシロンはティワズの下部組織です。ティワズの下部組織であるタービンズの下部組織です。という風で名前を売っている。つまり、ここで裏切れば信用問題となりかねない。しかし、先程も言つた通り、ギャラルホルンに喧嘩を売ると、後の仕事に支障をきたす。

……どうする。どちらを選ぶか……いや。待てよ。選ぶ必要なんて……

「……わかりました。その代わりにやってほしい事があります」
「なんででしょう」

相手の顔が一気に明るくなった。その顔がこの言葉でどう変わるのか、それはわからない。

「我々が戦闘に参加する十分な理由が欲しいのです。例えば、ギャラルホルンが此方を攻撃してきたとか。それが無ければ一切参加できません」

「ええ。わかりました」

そう言つて、その男は手を出してきた。少し微笑んでからその手を握つた。

「此方も出来る限りの事はさせて貰います。… 勿論商売人として」
「お願いします」

少し行ける気がした。

その頃ヒュンフでは…

「ええ。今ロークスコロニーです。… はい。お願いします」

一人の男が通信していた。

第19話

ギヤラルホルンと戦う事が決まり、すぐさまフンフへと戻ったユウは現状を皆に伝えた。

ギヤラルホルンと戦う事について誰も反対しなかった。ゆうちゃんならやりかねないよね。とみんなは許してくれた。

しかしゆうちゃんならやりかねないよねってそこまで僕は危険人物と認定されているのだろうか。

とは言ってもまだ時間はある。数日間ではあるが。その為作戦会議（という名目のお喋り）をしている。

「ゆうちゃん。ギヤラルホルンと戦う正当な理由って…どうするの？」
「簡単だよ。此方が攻撃されればいい」

淡々と答えたがその答えはみんなを殺す。ということだ。勿論僕はみんなを殺す気なんて微塵も存在しない。しかしアガータは少し押さえつけながら怒った。

「ゆうちゃん！そんなこと許されるわけないでしょ！」

「いつ僕はみんなを傷つける何て言った？そんな作戦するくらいならこんなコロニー捨

「てているよ」

「じゃあ、どうするの?」

アガーテがそう聞いてきたのでクスリと笑ったユウは言った。

「2年前あいつらが使った手を使わせてもらうんだよ」

「あいつら? ギャラルホルンのこと?」

「うん」

するとジョーカーが聞いていたのか此方に来た。

「2年前か... そういえばお前と鉄華団の出会いってドルトコロニーだったよな」

「ああ。あのときはクーデリア・藍那・バーンスタインを嘗めていたよ。彼処まで成長するとは思えなかった。多分あのときに無くなった人が関係しているんだろう」

あの後聞くに彼女の名前はフミタン・アドモスというそうで今は彼女の名前の学校もあるらしい。

でも僕は彼処で人を救えなかった。殺気を感じたのならそこに向けて発砲すれば良かったのに。俺は人を見捨てた。だからこそ。今度は

「誰も死なせない」

「?」

僕の間違い(?)な一言にアガーテとジョーカーは顔を見合う。

しかし、そこでも僕の考えは止まらなかった。

コロニーにいい思い出はあまりない。アンドラスと会ったのもあるコロニーだが、彼処で僕は生まれて始めて地獄を味わった。

でも今度は……

「んで、そのクーデリア嬢にお前は頼んだらしいな」

「ああ。アグニカ・カイエルについての情報をまとめて欲しいとね。そういうは上手いからな彼女」

アグニカ・カイエル。ギャラルホルンの英雄であり、今僕がアンドラスに乗っている理由であり、僕を狙撃手にした男だ。

彼の伝記でもいいから情報はないか。とクーデリアに言ったらまともておくと言ってくれた。今度火星に行くときに受け取ろうと思う。どうやら紙の本もあるらしいからな。

「んで、どうするんだ？2年前使った方法と云えば……なんだ？」

そうジョーカーが聞いてきたので答えることにした。

そこで説明したのは2年前のドルトコロニーの一件についてだ。

ギャラルホルンは武装を持ちながら抗議をするデモ隊の前でモビルワーカーを爆破した。そこから、罪を擦り付けてデモ隊に向けて砲撃を開始。その点についても抗議さ

れる前にその場のデモ隊を黙らせた後他の所にいたデモ隊に使えないモビルスーツ（作業用の為装甲も武装も弱い）をわざと与えそこから戦闘を開始した。とはいっても使えないモビルスーツで正規兵に勝てる筈もなく、なぶり殺しされた。ということだ。

その間にユウがした方法はわざと与えられたモビルスーツの一機に問題があることに気付き、少し手を加えて戦場でギヤラルホルン部隊を攻撃した。だけだ。

自分でも良く生きてたな。と自身の悪運が強いことを知った。

とりあえずその状況は置いといて、今回についてだが…

「……と言うことをする」

「成る程。その後私達でギヤラルホルンのモビルスーツ隊を押さえつけてその間に交渉。って言うわけね」

「うん。これならギヤラルホルンもなんとも言えない筈だ。問題は交渉の間モビルスーツを押さえつけられるかと準備は間に合うか、だけだな」

それから数日

作戦についてなのか僕は呼び出された。一応アガートも連れてきたが。

「何でしょう？」

またなんとも言えないソファに座って話をする。

「見て欲しい物があるのですが…」

「はい。何でしょう」

見て欲しい物が何かというのを聞かずに話を進める。

すると立ち上がって来てください。と言ってきた。どうやらここにあるものじゃ無さそう。そう思い付いていく。腰に拳銃を下げて。

その間、男が話始めた。

「作戦に必要な物資を集めている間にあるものが見つかったのです。どうやらモバイルスーツの用なんですけど……」

「モバイルスーツ？作業用の物では無いのですか？」

すると男は首を降り言った。

「そのモバイルスーツモドキにはコックピットが無いのです」

「コックピットが……無い？」

モバイルスーツにはコックピットがある。それは当然の話だ。コックピットが無いならいくらモバイルスーツでも金属の塊と変わらないからだ。モバイルスーツモドキと言っているからモバイルスーツで無いと分かる。300年以上前の厄祭戦にて阿頼耶識と相性がいいということで人型のモバイルスーツが作られた。現在あるものはいわばそれを元にしたものであり、モバイルスーツが人型だと扱いにくいと言う者も出ている。簡単に言うとなら無いものが動かすならモバイルスーツよりモバイルワーカー等の人型で無い物

の方が扱いやすい。そのモバイルスーツにコックピットが無いと言うことはモバイルスーツの利点をそのまま潰しているような物だ。という理由で厄祭戦のモバイルアーマーの脅威で瞬く間に人前から消えた全自動A Iも考えにくい。ならば…

考えていたからか横から来た人に気付かなかった。

「うおっ！」

「す、すみません」

当たった人は驚いてはいたものも声を出さずに倒れこんだ。赤髪で鉄華団のメンバーより少し年上の用な容姿の女性だった。そして、彼女の着る制服が

「(ギャラルホルン!?まさか…)」

今の話聞かれて居ないだろうか。

腰に掛けてある拳銃を再確認する。最悪二人を逃がして頭を撃ち抜き適当な所で殺された風に装う。そう決めていたユウの肩に手が乗った。彼女のだ。

「すみません。私急いでいるので」

「あっ…はい」

そう言つて走り去っていく彼女の後ろで拳銃を構えた。

アガータが声を上げようとする男を止めたが、ユウは引き金を引かなかった。いや。引けなかった。

震える銃を腰に戻しながら言った。

「：すみません。案内してください、モビルスーツモドキの所まで」

着くとそこには文字通りモビルスーツモドキがあった。

確かに外見はモビルスーツその物だ。しかし、コックピットが開けない。恐らくコックピットにあたる場所に、AIが入っていると思うのだが、外すのは難しそうだ。

もしかしたら厄祭戦以前のモビルスーツか、モビルアーマーの一種かもしれない。もし後者なら子機があってもおかしくはない。

厄祭戦時のモビルアーマーには例外はあるがブルーマ等と言った子機が搭載されていて対モビルアーマー戦には厄介な存在だ。

フレームもわからない。しかし、ヴァルキュリアフレームとガンダムフレームに似ている。メインカメラはツインアイでもモノアイでもなく、横に線が一本入っているのみ。装甲の色は灰色基調。頭部アンテナは一本。バックパックにはまるで羽根の用な物が4つある。武器は：：見えないな。

まるで：：かのアグニカ・カイエルが乗ったモビルスーツ、ガンダムバエルのようだった。

もしかしたらこれがそれなのかもしれない。アグニカの伝説は聞いていても文字の

みではあまり伝わらないからだ。

「どうですか？」

「全く分かりません。これは……どこからですか？」

そう聞くと男は首を降り、端末を見せてきた。

「反ギャラルホルン組織を名乗る者が此方に運んできました。『そちらに一番必要な力』
と言つて」

何故だ。何故反ギャラルホルン組織が此方に協力する？まさか、バレたのだろうか。

何故？何処から？スパイか？

「起動は今すぐ出来るので始めましょうか？」

「止めてください。相手は恐らくAIです。何をしでかすかわかったもんじやない」

ちつ。と舌打ちをした。どうする？これは使えるのか。いや何かもわからないこの
状況でそれは危険すぎる。

恐らく……これはプルーマの一種だろう。モバイルアーマー本体にしては小さすぎる。

「とりあえずこれは此方が預かります。そして此方で見ます。なので作戦は言った通りに頼みます」

「わ、わかりました」

そうやって男が逃げていくのを見ながらこの機械の正体を考えていた。

第20話

決行の日だ。

ユウはスーツの下に動きやすくノーマルスーツの下に着る服を着る。

そして拳銃と狙撃銃を持ち、コックピットに少々食料とデータが入った端末を入れる。

拳銃を腰に下げて狙撃銃をジョーカーに預け暴動、いやデモへと向かう。

向かうとそこには大量の人が大声で何かを訴えていた。ギャラルホルンの予定なら、ここで何かしらダメージを受けたかのように装い、防衛目的でここを鎮圧するのだから。

そう考えたユウはジョーカーから狙撃銃を回収し、双眼鏡を持たせてデモの戦闘付近にいかせる。そのあと、手頃なビルに入ってスコープでデモを見る。

そして、手始めにデモ隊の人と人の間に発砲した。

するとデモ隊の声は大きくなった。

こうする事でギャラルホルンもデモ隊を皆殺しにするしかない。しかし、いま皆殺しにしてはマスコミに見つかる。その中には生放送している者もあるだろう。そうすれ

ばギャラルホルンの悪行は社会に出る。そう考えていると視界の端にジョーカーが映った。

するとジョーカーが携帯通信機で喋りかけた。

「見つけた。やつら、モビルワーカーを一つお釈迦にして暴動を止めるつもりだ。右から二つ目左前の脚の辺りに爆弾がある。その上、右から8人目の兵士が何かを持っている。形からして、起爆装置だ」

ギャラルホルンは兵を撃たせるわけにはいかないので、恐らく爆破するのだろう。スコープを覗くとあった。保護色で見にくい爆弾だ。これで攻撃された用に装うのだろう。僕らの目的は…

「…ツ」

狙撃銃の引き金を引く。するとそれは先程示したモビルワーカーに辺り爆弾の上部に命中した。すると爆発はせず、地面に転がった。

「ふう」

ユウがやったのは爆弾の火薬には手をつけずに爆弾の電子部品を扶る事である。

簡単にいえば爆弾を不発弾と同じ状態にしたことである。爆弾は爆弾っぽくないとはいえ大きい為火薬の入っていないところはだいたい特定できた。その後簡単だ。よく映画等で時限爆弾のリード線を切って止める作業を弾丸でやっただけだ。

今回は時限爆弾ではない為リード線を全て切ると爆発する。なんて物はない。こんな暴動を止めるためにそこまで考えては無いようだし。まあ最悪爆発しても数人の武装を狙撃して侵入させれば良かった。っていうか本当の作戦はこれだが。

まあ結果意表を突かれたギャラルホルン兵は成す術なく、占拠されていく。

その事を確認して、ビルから出るそしてジョーカーに言った。

「よし。これからそちらに向かう。ジョーカーはフュンフに戻って出撃用意」

「了解。お前が来るまではなんとかしとくから死ぬなよ。ユウ」

「わかった」

そう短い会話をして、施設に侵入するが、そこはもうデモ隊にほぼ占拠されていた。

なにやら叫んでいる。これは恐らく交渉の場に引きずり出すつもりだろう。これな

ら僕の仕事はもうない…。そう思って、出ようとしたときだった。

殺気を感じた。

咄嗟に向いた方向を狙撃銃で撃つ。すると誰かが曲がり角へ逃げて行った。ギャラルホルン兵だろうか。

「逃がすか！」

そう言つて走る。

撃つた相手は成人男性。曲がり角を曲がると顔の横に拳銃を突き付けられた。

「武装解除しろ」

重々しい声。拳銃の方向も見ずに狙撃銃を下ろして、両手を挙げた。

「… 若いな。いくつだ？」

「… 16。こここのコロニーの人間のデモに参加させてもらっている」

そう言うのと男はクスリと笑って、此方を向け。と言った。それに従い両手を挙げたまま、男の方に向く。そこには20〜30辺りの男がいた。

ユウは思った。

こいつを… 僕はこいつを知っている。それも何度も会っている。と。

「アリアンロット所属ライル・バレル三佐だ。そちらは？」

「ユウ・タービン。所属は… テイワズ、イプシロンだ」

重い空気が流れた。所属を傭兵とでも言いたかったが、ばれると言う感覚があった為イプシロンと言った。

「テイワズ… そうか。二年前の鉄華団のようにコロニーの暴動の援助か。そうだな… 確か鉄華団が手伝ったのはドルトコロニー。ここと同じようなコロニーだな。」

「鉄華団の事を知っているのか？」

「ああ。二年間は俺も鉄華団と戦っていた。いやその中でも俺が戦っていたのは鉄華団の手伝いをする一機のガンダム。後から聞けばアンドラスとか言うらしいな」

「……っ！」

思い出した。こいつだ。ライル・バレル！

（「はあ……はあ…… 流石にライルさんと渡り合った奴に挑もうとした俺が馬鹿だった……けど、俺はこいつにも勝つんだ……いつか……!!」）

ライル。あの……グレイズのパイロット！何故ここに！

何かに気付いたようで、ライルが言った。

「どうした？気分が優れないようだな。もしかして、額に拳銃を当てられた事がないのか？」

「いや。違うね。覚えていてくれて嬉しいよ。俺をアンドラスのパイロットとして……もしかして、最初から気付いていたのか？それで、わざわざあんな言い方をした」

「さあ？どうだろうな」

そう言うとライルは拳銃を強く握る。

「ひとまずここから去れ。アンドラスのパイロットなら分かるだろう。俺のレベルを。今去れば見なかったことにしてやる」

断れば拳銃の引き金を引かれるだろう。引き金に力がこもっているのがわかる。でも、逆に言いたいことがある。

「なんで僕と戦うのに拳銃でやったんだ？」

「どういふことだ？」

「あんたならモビルスーツでやると思っただがな」

「… お前は敵だ。敵は殺せれば良い。とりあえず去れ今なら見逃す」

「… 分かった… けど無理だね！」

そう言つて腰を下げる。その瞬間ライルが引き金を引いた。やはりライルは引き金を引く際に一瞬の間がある。腰から拳銃を引き抜きライルの額に向けた。

「ッー」

ライルは避ける格好をとるが遅い！

そう思つて引き金を引こうとしたとき、指が重くなつた。くそ…！相手は敵だ！

そう言い聞かせて向きを調節して引き金を引くとライルの腕を掠めた。

「ライルさんー！」

すると近くからまたギャラルホルン兵が出てきた。なので狙撃銃を拾い、威嚇射撃をして引いた。

「くっ…！ドジつたあ…」

「大丈夫ですか？ライルさん？」

ガンダムアンドラスのパイロット、ユウ・タービン。手を抜かれたな。あくまでモビ

ルスーツ戦をしたいということか。

それにしても射撃の腕は健在のようだ。

先程も俺がモビルスーツで鍛えた反応速度がなければ死んでいた。

「ああ無事だ。．． はあ。．． 年はとりたくないものだな」

「冗談が言えるようなら大丈夫ですね。．． 報告します。謎の勢力が此方に攻撃を仕掛けてきました。恐らく労働者側が雇った傭兵かと」

あいつらは傭兵と見られているのか、しかしテイワズとしてギャラルホルンに喧嘩を売ったら相当の問題となる。何か秘策があるはずだ。こちらの口止めの。．．

「．． アメリカに連絡しろ」

「わかりました」

考えてもどうせわからない。俺はパイロット。戦えばいい。

ただそれだけだ。

「了解」

その頃。．．

フュンフ指令室

指令室の艦長の席にはアガーテがいる。ユウも艦長として駄目というわけではない

がアガーターや名瀬、オルガと比べると指揮能力は弱い。

「ジョーカー機、出撃準備完了」

「出撃させて」

「了解」

戦場にはシユインとエストが獅電で艦を守っている。ギャラルホルンにとってはここでモビルスーツを出している時点で敵意があると思っっているそうだ。

今は待ち時間だ。コロニーで労働者側が交渉している。それがうまくいけば、ユウを迎えて労働者側から報酬をもらって地球に行くのみ。

しかし普通に考えて無理だろう。

モビルスーツを出撃させたのはもし決裂したら攻撃すると言う抑えの役割もあるがそこまで機能しないだろう。

「アガーターさん。ゆーちゃんから連絡。1226地点にアンドラスを射出。ギャラルホルンの攻撃を警戒せよとのこと」

「わかった」

オペレーターがそう言ったので言われた通りにアンドラスを射出形態に移行させる。

「ガンダムアンドラスを射出形態に移行させました。いつでも出せます」

「わかった。出させて」

「了解。ガンダムアンドラス、射出」

ガンダムアンドラスが宇宙へ飛び出した。

その頃ユウは

狙撃銃を両手に抱えて、ノーマルスーツを着て回りを見ていた。するとギャラルホルン方向から何かが出た。

攻撃だ。ギャラルホルンが攻撃してきた。

「ゆーちゃん、行けるよ」

通信でそう聞こえて来たので「うん」と返してノーマルスーツにある、バーニアで位置調整を行いながら此方に来る相棒を見据える。

「アンドラス……見せてくれ。僕たちの未来を」

アンドラス相棒のコックピットに入って狙撃銃を分解、収納する。その後バックパックのレールガンを取って狙撃ポイントへと向かう。

「行くぞ……ユウ・タービン。ガンダムアンドラスで出撃します！」

第21話

「ユウ・タービン…か」

先程聞いた男の名前を思い出す。これで二年前の謎は繋がった。鉄華団とテイワズは繋がっていて、鉄華団だけでは戦力不足だから何人かテイワズから派遣したんだろう。その中に奴がいた。

確かに強さは十分だ。あの射撃スキルを持つものはギャラルホルンにもいない。まず、狙撃手があまりいないのだが。

その理由の一つに狙撃手には隣に観測手が必要だからだ。しかし、やつには前衛はいなくても観測手はいなかった。つまり一人二役となる。

アリアンロッドで有名な狙撃手と言えばイオク…いや。あいつは俺より射撃が下手だ。部下に持ち上げられたただけだろう。

「とりあえず行くか」

そう呟き通信を繋げる。

「ニール、出撃準備を出来たか？」

「出来ました！いつでも行けます！」

そういうニールの機体はカタパルトデッキに移動していた。ライルは口を綻ばせた。

その頃フユンフ

「いよいよね…。」

艦長の席でアガーテが呟いた。当然だ。ここまで待たされたのだから。するとオペレーターが急に言った。

「アガーテさん！労働者側からモビルスーツ17機、武装ランチ34機援護に回る模様」
「労働者側に礼を」

そう言うとおペレーターはまた作業を始めた。

そして、少しすると敵のエイハブウェーブを感知した。その数…

「アガーテさん！敵モビルスーツの数は8機。その数… 8機です…。」
言われた通り敵モビルスーツの数は8機。

ギャラルホルンはなんのつもりだ。これなら我々が介入する必要も… もしくは只の第一波で援軍が来るのか。

ひとまず、なんとかする必要がある。

「作戦を開始して！ シュイン、ジョーカー、エストを前に出して労働者のモビルスーツ、武装ランチの順に防衛線を張って！」

「了解！」

そして、戦場

「オラオラオラ！」

ジョーカーがそう叫びながら鎌を振るう。

それを防御出来ずに一機が武装解除された。

やはり妙だ。全員がエースパイロットという訳ではなさそうだ。つまりこの全員捨て駒か？

すると3機がジョーカーに仕掛けてきた。

「おわっ！」

その3機の攻撃を避けたとき、その内二機をシュインが撃つて残り一機をエストが仕留めた。

そして、シュインが撃つて止まった二機に鎌を振るうが避けられるしかし、後ろに回っていたシュインにとどめをさせられた。

これで残り半分。

残りの内三機は防御線を突破して労働者側の所に行くそうさ。残り一機が仕掛けてくる。

「ジョーカー、ここは任せたよ」

「わかった」

シュインの言葉を返すとシュインとエストが労働者側に行こうとする三機の方へと行った。

そして、ジョーカーは残った一機にタツクルする。それで飛ばされた所に鎌を振るうが避けられる。

しかし、それを読んだジョーカーは鎌をもう一度振るいコックピットに振り込んだ。

その頃エストの方では。

「う、うわあああ！」

着くと労働者側のモビルスーツがやられていた。

間に合わなかったか。

そういつた自分を責めた。まだ助かる人が要るじゃないかと。

「シュイン母さん。一機任せていい？」

「わかったー」

シュインが弾幕を張って労働者側のモビルスーツとギャラルホルンのモビルスーツの間に入る。

それを見ながらエストは一機のグレイズの腕を掴みパルチザンを振じ込む。そして、労働者側に蹴った。その後労働者側のモビルスーツが倒した。それに逆上したように襲いかかるモビルスーツをかわしてパルチザンで殴る。

隣ではシュインが終わらせていた。

「… 妙じゃないか？」

「妙だと思わない方がおかしいよ」

敵モビルスーツ全機が行動不能なのだ。いくらなんでも早すぎる。そして、いくらなんでも少なすぎる。しかし労働者側はまるでこれで終わりだと勘違いしているように喜んでいる。

「シュイン母さん。フუნフに戻って防衛しよう」

「わかった」

バーニアを吹かして、フუნフの方へと戻った。

それを見ていた二機のモビルスーツは打ち合わせをしていた。

「とりあえず、俺があのもビルスーツをなんとかする。敵も馬鹿じゃないみたいだから戦艦の方に行った二機は任せる。二機を潰さなくても良い。とりあえず、戦艦を潰して戻ってこい。そして後からプチプチ潰す」

「了解。では指定の場所で仕掛けます」

そう言うのと、ニールはコロニーの方へと行った。

楽しみだ。

そう感じていた。その近くにアンドラスが要ることを知らずに。

二人のを動向を見たユウはフロンツの方に通信を繋げる。

「姉さん。そっちにモビルスーツが二機、行くから気を付けて」

するとアガターが返答をした。

『わかったわ。っていうかゆうちゃん、敵の会話を聞いたの?』

声からして、他の問題は終わったのだろう。しかし今からが本番だ。

「ううん。だから作戦もわからない」

そう報告すると『うーん』と唸る声が聞こえた。

体をコックピットに預けて返答を待つ。

『ゆうちゃんの存在は...』

「多分気づかれてないと思う」

『だったら援護はお願いね。テイワズの狙撃手』

僕の二つ名（仲間の間にしか言われていないが）を喋って笑い声をした。

「そうやって呼ばないでって… まあわかった。」

そうやって敵の反応が無いことを確認してスラスタを吹かした。

その通信を切った後、アガーテは艦長席から言った。

「ゆーちゃんから報告。敵モビルスーツ二機来るみたいだから全機対応して」

「了解」

そうやってジョーカーは前にそして、労働者側のモビルスーツを挟んでエスト、シユイン、そしてアガーテ達が乗るフュンフと臨戦態勢となった。後ろや上にも労働者側のモビルスーツやランチが散らばっていて気づかれないでフュンフを仕留めるのは無理だ。

「二機でかかってくるって事はエースパイロットの可能性が高い…。早く話し合いが終わればいいんだけど」

元々こちらの仕事は人殺しじゃない。ギャラルホルンとお偉いさんに恐怖をつけて話し合いに持ち込む。ということだ。つまりあちらさえ来なければ戦闘も意味がない。

しかし時間はかかるだろう。ドルトでもクーデリアの演説が無ければ始まらなかった。まあその変わりの物があるのだが。

それでも不安にはなる。

「アガーテさん！敵モビルスーツ一機真つ正面から来ます！」

そこには真つ正面から突つ込む一機のモビルスーツがいた。

違う二機のモビルスーツをニコイチしたようなモビルスーツ。

「まずは一機ね…。ジョーカーに任せなさい。ゆーちゃんの報告と照らし合わせるとそいつは囷の可能性が高い。周りは警戒をおこら足らないように！」

「了解！」

ジョーカーが乗るトートの鎌を軽く避け逆に蹴りを加えたのはライル・バレルが乗るグレイズクルーガだった。ライルは手始めとでも言わんばかりに労働者側のモビルスーツを六機、スクラップにして来た。

「なんなんだ。こいつ…。！当たらねえ！」

鎌を降るがギリギリの所で避けられる。

避けられた所に鎌を持たれて投げ飛ばされる。

「俺に剣を抜かせるとは…。実力者とみた！…。当たり前か」

そういう通信を聞きながら体制を整えると目の前に剣が出てきた。

ーやられる！

そう思い身構えるが、その剣の切れ味が悪いため弾き出されただけですんだ。しかし追撃をくらって再び体制を崩す。これじゃあジリ貧だ。

これでも十分なダメージの為やられる可能性だつて捨てきれない。

なので体制を整える前に追撃砲を放ち、避ける間に体制をと整える。鎌を構えて、相手のモビルスーツをロックオンする。するとそのモビルスーツはくるくるとまわりながら回り込もうとする。

「させつかよー！」

追撃砲を放つがそれが全て避けられる。くるくる回るその出てきた隙間の中に吸い込まれるように入っていくのだ。まるで狙っているみたいだ。

「こいつ……それなりに強いな。此方も仕掛ける！」

そう言って、鎌を持ちながら急接近して鎌を振るう。しかし剣の刃に受け止められた。

「やるっ！」

そう唸りながら蹴りで弾き飛ばす。

追撃しようと鎌を振り上げた瞬間、剣がコックピットに当たった。流れるような動きで通りすぎた。

「阿頼耶識?!なんで?!」

ギャラルホルンは阿頼耶識に否定的なはず。何故?

そう考える余裕もなく、追撃された。Gを感じながら、行動を観察する。特定の法則があるわけでもなく、本当に人が動いているような動きだ。

「人が動いているような... そうか!」

追撃砲を相手のバックパックに向けて放つ。

それは命中した。しかし爆発は起こらず、ただ此方を向いた。ガスを噴射していなかった。まるでこちらの動きを読んだように... 何者だ。

不穏な気持ちに駆られた。

その頃警戒体制を強めているフュンフに一機のモビルスーツが接近していた。

そのモビルスーツも労働者側のモビルスーツを二機弾いて接近してくる。両手にライフルを持った状態で。

それにいち早く気付いたシュインがライフル同士の状態にした。

「射撃の勝負でゆるちゃんに勝てる人はいない！ゆるちゃんが来るまでの時間稼ぎさえすれば！」

「舐められたものだ！私もギャラルホルンの兵士だ！」

そのモビルスーツ、グレイズルデンに乗ったニールの目的は敵戦艦の破壊。それが完了すれば敵の敵意が失われ、後は本隊に任せればいい。それくらいなら数機でやれると思ったが思いの外敵が強かったみたいだ。

そう思っ、離れる。

そこに、エストが来て、援護射撃をする。

「シュイン母さん！ジョーカーがヤバイ！さっさとこいつを倒して援護する！」

「わかったわ。じゃあ「俺が突っ込む！」りょーかい」

エストがライフルをシュインの方に投げてパルチザンを持って突っ込んだ。

しかしそれをかわされてバトルアックスで傷つけられた。そして、機体が止まった。

そこにバトルアックスを大きく振りかぶるグレイズルデン。

「しまっー」

「貰ったあ！」

するとエストの機体が急に動いた。

「な…」

「はあ！」

驚いているニールにエストが攻撃する。

「はっはっはー！後少しで仕留めてやるよ！」

「こいつ… 雰囲気が変わった!?!」

「なんなのよ… あれ」

仲間のシユインでさえも驚き動きが止まる。

それを見たニールは攻撃をかわしてフユンフの方に全速力で行った。

「てめえ！逃げてんじゃねえ！」

「アガーテさん！」

ニールのライフルの弾がフユンフに当たる。その影響で艦内が揺れる。

「近づかせないで！至近距離で当たったら穴が空いちやう！」

アガーテがそう叫ぶが防御は間に合わなかった。

グレイズルデンは簡単な弾幕を潜り抜けライフルを一発二発と当てていく。

二人が参戦するが、弾幕でうまく邪魔できない。

しかしエストが急接近する。パルチザンを最大まで伸ばしてギリギリの射程でグレイズルデンを殴る。

グレイズルデンは即座に体制を整え、獅電の首に当たるパーツに腕を引つ掻けた。対人戦だとリアアットと言われる行為だ。それを見ると阿頼擲識かと思つたが違う。急接近しながら攻撃のコマンドにしたのか。

それを逃げようとして、体が一回転する。その間にグレイズルデンは一つのライフルをフユンフの指令室に突きつけた。

「しまったー！」

「もらつ… たー！」

そして、グレイズルデンのライフルが火を吹いた。

いや、爆発した。

二丁のライフルそれぞれ貫通して。

「ぐっ！敵の援軍!?… あ、あいつは…！」

「おせえんだよー！」

エストの視線の先にはガンダムアンドラスがいた。

「あ… 二年前の… ガンダム！」

ニールは耳がおかしくなるくらい叫んだ。

第22話

「ふーっ。間に合った」

アンドラスの放った弾丸がグレイズルデンの二丁のライフルそれぞれ貫通した。

それを見ながらロックオンの体制から戻す。そして、二機のモビルスーツを見据えた。

ライフルは爆発し、グレイズルデンはライフルを放棄してバトルアックスを二本手に取る。

すると通信が来た。ライルだ。

「ニール！機体は無事か？」

「ええ。まだ戦えます。しかし、三機は難しいのでガンダム以外頼んで良いですか？俺はこいつを…」

「待て。お前がああガンダムを狩れるのか？」

「行けます！機体は此方の方が上なんだ！」

そういうとニールは機体を加速させる。

そして、ガンダムに突っ込むがアンドラスはそれをよけて左足の膝を撃ち抜く。

「ぐっ！ガンダムー！」

左足の膝を庇いながら接近してバトルアックスを振るう。

ユウは機体を細かく動かして避ける。確かに避けられる攻撃だが避けるのに集中して、反撃を封じられる。

「この戦い方……何処かでと思ったがあのと時の変なグレイズのパイロットか」

基本的に一対一を望んでいるようだ。ならば

「兄さんー！」

「任せなあ!!」

後ろに回り込んだ獅電がグレイズルデンを攻撃する。

「邪魔を……するなあー！」

グレイズルデンが獅電を攻撃する。それをまともに食らってエストは下がる。

しかしそれを変わったシューインがグレイズルデンを砲撃する。数発くらいグレイズルデンも下がる。

「ちっ！」

「ニール。冷静になれ。奇襲は失敗だ。体制を建て直す。今から此方に来い」

「…了解。合流します」

「ちい！逃がしちまつたじゃねえか」

ニールは真つ直ぐライルの方に向かう。

それを見たユウはジョーカーに通信をする。

「ジョーカー。よく耐えてくれた。戻ってくれ」

「…死にそうだよ」

労働者側のモビルスーツとランチがあつたとはいえあのライルを一時的に押さえつけた。期待以上の動きをしてくれた。

しかし奴らはまだ終わっていない。

戻つて体制を整えてから来るのか、合流した後そのままか、増援が来るのか。それだけで十分変わってくる。

「相手の目的は殲滅だけど此方は時間内に生き残ればいい。倒すことを考えてず生き残ることを考えて。いい？来るよ」

背中が相手の殺気を感じる。もし阿頼擲識があつたら、アンドラスから情報が送られてくる筈だが。

感じた通り、二機のモビルスーツが突っ込んでくる。

「シュイン姉さん！」

「わかった!」

シューインが二機のモビルスーツの間を射撃する。

そして、割れた二機に散っていった。

「兄さん。速いやつはこつちが引き受けるからもう一機よろしく」

「わかったわかった! さっさと行けえ!」

それぞれに散らばり敵モビルスーツを迎撃していった。

奇襲に失敗した。それは此方が劣っているのか彼方が優秀なのか。わからないが、相手も馬鹿ではない。あのガンダム……精密射撃が強い。つまりは置いておくのも危険だな。仲間にいれば嬉しいが敵なら邪魔以外何者でもない。

「アンドラスのパイロット!」

叫ぶとアンドラスが目の前に出てきた。

「……僕か!」

レールガンを此方に向けてくる。狙いは間接か。

「お前の行動はよめてんだよ!」

「ジョーカー!」

後ろから先程の鎌持ちが奇襲をして鎌を振るう。

「…それも読めんだよ！」

後ろから出てきた鎌持ちを蹴りとばす。

この動きは先程の戦いで十分見た。俺に勝つにはまた行動パターンを変えなければならぬ。

しかし例外がある。それは仲間が近くにいる場合だ。

「もらった！」

アンドラスの弾丸が脚に当たる。それに気をとられた瞬間、おそらくテイワズの量産機と鎌持ちが同時攻撃を仕掛けてきた。

「ぬっ！」

剣を振るい、二人の攻撃を弾くが二人が微妙にタイミングをずらしていた為軽く喰らう。

「…戦い方って言うものを少しは学んだみたいだな」

いままでみたいに技術でゴリ押しではなく、ある程度戦い方を考えているようだ。

こちらとしてはあの射撃スキルのゴリ押しが戦っていてやりごたえがあつたのだが、少し寂しくもある。

あの2年前の射撃一度外してからの正確な射撃から練習期間も少なかったととれる。しかしあの時間で誤差を正確に読み取り、偏差射撃するあのスキルは現在のようだ。

量産機が後ろにまわる。それを振り返らず横に避けると鎌持ちが急接近してくる。

それを避けて蹴りとばすと頭部のカメラに狙撃が当たった。

「たかがメインカメラだけだ！」

アンドラスには構わず、鎌持ちに剣を振るう。

すると鎌で受け止めた後に鎌を振るってくる。鎌の刃の部分にあわせて剣の刃を当てると鎌での攻撃を諦めたのか腕についた武器で砲撃してきた。

量産機との弾幕。しかしそこにアンドラスはいない。

すると死角から弾が来た。

「ぐおっ！」

完全に気配を消した弾に追い付けず食らう。

このままおちよくるつもりか……

まあいい。それを倒してこそ、こちらの力を示せる。

「来い！全員相手をしてやる！」

グレイズでかつてアグニカがやった時のように剣を掲げるポーズを作りながら言った。

それに他のモビルスーツ全てが反応をし、此方をロックオンしている物は武器を再び構えた。

「ライルさんは敵の気を引いてくれている。ならば此方が母艦をやりたいところだが……くっ！本隊は何をしている！」

本隊が出ようとした際にライルが言った一言で本隊は出なくなってしまった。確かにこのコロニーもそこまで大切にされている訳ではないから、解放してもあまり変わらないのだが、それでも組織が微細化されるのはギャラルホルンとしてめんどくさい。

しかもライルも止めるために言った訳ではなさそうだ。

今回は少数で喧嘩の理由作りをしてエース二機で敵の母艦を沈めて何処からか出てきたモビルスーツで倒す。という事だったが奇襲が失敗したので本隊が来てもいい筈だが。

「もしかしたらライルさんをよく思わない奴らか？アメリカ一佐は何をしているのだ」

あの人はライルを悪く思っているような印象は無かった。なのでライルをよく思わないものたちが死んでほしいと願ったとしても彼女なら増援位出せるだろうに何故出さないのだろうか。

「よそ見出来るなんてなあ！」

すると近くの敵のおそらく傭兵の機体が此方の後ろに回っていた。

パルチザンを掲げ接触まで時間はない。

「その程度！」

斧で受け止めた瞬間蹴りが来たので避けて蹴り返す。

敵の機体はくるりと回って此方に接近してくる。

「あの狙撃手のせいで射撃でケリをつける気は無いのか……」

言ってしまうえばこの状態は普通に見ればニールが不利だ。アックス以外の武器を失い、撃ち合いが出来ないからだ。

なので遠くから撃ちまくるだけでも負けるが、なのに奴らは接近戦を好んでいる。

「ならお望み通り！」

此方も接近戦で戦ってやろうじゃないか。そう思いながら斧を振るう。

それを避けた機体が華麗なマニニューバをしながらかわす。

「かわしたって！」

ニールもライルの影に隠れるとはいえ、相当な実力のエースパイロットだ。エドモントンでの戦闘でもあれだけピーキーな機体を扱い、ユウを圧倒した。

それほどの実力だからなのか。敵のパルチザンをかわしてバトルアックスを振り下ろす。

そこを回り込んだ敵が砲撃するが脚で抑える。

「くそッ！ギヤラルホルン！きつさと死ぬよ！」

「コロニーのパイロットとは思えない操作技術ではあるが……やはり奴等が雇った傭兵か。なら力の差を……みせつけてやるよ」

エステの獅電は細かな悲鳴をあげていた。

バトルアックスをもう一度振り上げ、これで……と思つた瞬間。獅電は急な方向転換をするようなガス噴射でニールから逃げた。

「くっ……逃げますか……な！」

追い付こうと周りを見渡した瞬間、驚いた。そこには大量のモビルスーツと武装ランチがこちらに武器を向けていたからだ。包囲されている。

「こいつら……あのとき全然邪魔してこないかと思えば……まさか！誘導されたのか……」

だから射撃をあまりしなかったのか。と齒噛みをする。

そして、獅電が安全圏まで逃げると一斉射撃が行われた。

獅電のパイロットの顔は見えなかったが勝ち誇っているのを安易に想像できた。

大量の弾が一機のモビルスーツに向けて放たれる。それを見ながら通信を開いた。

「兄さん！仕留めた？」

「出来てねえな．．．ちっ！今度こそ！」

自身の兄とは思えないその言葉に驚く。兄さんも実践になると言動が変わる人か。実際、戦闘にて言動が変わるのは珍しい事ではない。実際ユウも、戦闘になると口数が少々減る。イプシロンの上となつてから、増えた印象が大きいが。

しかし、驚いた事にはかわり無いので聞き返す。

「兄さん？どうか．．．」

そうしようと思つた。しかし一機のモビルスーツがそれを許さなかつた。

「周りに構つてる暇があるとはな！」

「ライル・バレル！」

そのモビルスーツに乗るパイロットの名を叫ぶ。

二人を軽くかわしたそいつはプログラムのロックオンはやはり間に合わない。

「そっ！」

一閃を盾で防いでレールガンを放つ。コックピット周辺に当たつたが弾かれる。

「やはり硬いな．．．」

「その程度の火力で！」

急速接近してきたその機体をかわそうと機体を動かすが間に合わない。

すると横から出てきたジョーカーが鎌で切る。

そうだ。一対一じゃない。ならば！

「ジョーカー！シユイン姉さん！惹き付けて！」

すると間に二機のモビルスーツが入る。

「任せて（ろ）！」

それを確認しながら下がり、フュンフに脚をつけるそして、バックパックにあるコールドをレールガンに接続する。そして、レールガンから出てきたもうひとつの持ち手を左で持つ。

「見せてやる。これがアンドラスのもうひとつの力！《スナイプモード》！」

アンドラスの右目にロックオンのマークが出て片膝をついた狙撃ポーズをとる。

そして、専用のライフル型のコントローラーが出てくる。これでレールガンの射撃を行う。

プログラムのロックオンが外れ、自身の狙撃技術がものをいう状態になった。これが《スナイプモード》。

ツインリアクターの火力を全てレールガンに込める事で、ダインスレイヴよりは劣るものの、十分な火力が出せる。

「仕留める！」

ロックオンのマークは出ないが照準器が出てくる。ここから偏差射撃を行えばいい。狙うは旋回時。スピードが早すぎる上に予想出来ない動きなので動いている時は難しい。しかしつばぜり合い時も味方を盾にされる。つまりある程度先が読めて、かつ味方が盾にされない状態。それが旋回時しかし急な旋回時に限るためしつかり見なくてはいけない上に、ちゃんと当てなければいけない。つまり敵の動きを予測しながらそこを狙い敵に十分なダメージを与えなくてはならない。実際縦横無尽に動くやつ動きを予測というのは骨が折れる。

「でも、やって見せるさ。期待だつてされてるしね」

こちらの作戦に気がついたのかスキがなくなつた。

しかし、やつも人間一瞬のスキがあるはず。その一瞬を逃がさない。

心臓の鼓動が聞こえる。これを外したら自分はおろか、仲間さえも失つてしまう。この一発にこれからが…

「シユイン姉さん！その先塞いで！ジョーカー左に誘導！」

二人に指示をだし、二人に邪魔をされない一瞬を作りやすくする。

「アンドラス！僕に未来をみせてみる！」

するとあの機体のガスが止まった。ような映像が頭の中に流れてきた。これか！それに合わせて標準を合わせる勿論誤差も考慮する。

先ほど流れた映像の少し前をみた瞬間。引き金を引いた。

それは真っ直ぐ出てきて、そのままグレイズクルーガのコックピットに当たった。

「ヒット」

動きが止まったグレイズクルーガを見ながら呟いた。

第23話

「ヒット」

動きが止まったグレイズクルーガを見ながら呟いた。

しかし、不思議ではある。確かにコックピットには当たったがコックピットの中に弾が当たった訳ではなく、あくまでコックピットに直撃したのみ。挟つてもいない。

管制制御が追い付かなくてパイロットが気絶でもしているのかと思つたが違う。あのパイロットはライル・バレルだ。この程度で気絶するような奴なら二年前に死んでいゝる。つまりまだ動ける状態……ということか。

そう思いながら、コントローラーから動きが止まったグレイズを見る。するとそのグレイズのコックピットの横に何か……黒いパイプのようなものがあつた。なんだあれは……

「二人とも、下手に手を出さないで。増援が来ても良いようにレーダーを見張つてて」

「了解」

「……何がどうなっているんだ……？」

そう思いながらエストの方を向くとグレイズと獅電が激しい攻防を繰り広げていた。

周りにはエストの隙を埋めるコロニーの労働者がいる。モビルスーツの調子が良いとはいえ、前のドルトより成績がいいな。そう思っていた。その時イプシロンの人間は気づかなかつた。ほぼコロニーの労働者じゃ無いことを。

「ふーっ。あつぶねえー死ぬかと思つたー」

グレイズのコックピットでライルは呟く。敵の超精密狙撃。もし増強したパーツが無ければ死んでいた。

しかし直撃だったようでモニターにはアラートがけたたましく鳴り響いていた。その音がうるさくて手を振るう。しかし収まる筈もなく、続く。機体の状況を見ながらモニターを叩く。そして、横に置いてあるボトルをとり、中にある水を飲む。

そんな感じでお気楽なその男は背中―阿頼擲識を確認したあと体を伸ばす。

「敵がこちらに攻撃してこない。死んだと思つたのか。となればこんな狙撃を毎回やってる事になる。いやしかし確認位はするだろう。もしかしたら俺との戦いを望んでいる。いや、そんな戦闘狂じゃない。ならなんだ。？」

このモニター等に映される情報からして長い時間戦うとパーツに問題が発生しそうだ。

短期決戦……となる。

モニターを弄くり阿頼耶識との差を確認する。

結構ズレが来てしまっている。元々シユヴァルグレイズとグレイズリッターを組み合わせた機体の為ズレが大きい。それを調整しながらこちらを見てくるモビルスーツのメインカメラを睨んだ。

すると通信が来た。ニールではなくその人は……

「アメリカ？何やってんだあいつ」

アメリカ・エリオン。

赤髪の女でここを見張っていた人間だ。しかしおかしい。俺にロークスコロニーの事を伝えたもの奴だ。多数あるコロニーの中で何故このコロニーを見ていたのだろうか。

そう思いながら通信を開く。

「あーいよつと。ア・メ・リ・ア・一佐、どうした？」

「作戦は終了です。戻ってください」

「はあ？」

調子に乗りながら通信を開くと戻れ。つてこの人は何を考えているんだ。

「戻れって何言ってるんだ？反乱による暴動は今でも……」

「安心してください。暴動の鎮圧は必要ありません」

どう言うことだ。俺は首をひねり考える。

しかし、考えなど不要だろう。そう考え直して言った。

「わかった。すぐに戻る」

「頼みます」

そうして切れた通信を見ながら呟いた。

「さあさあ。ラストと行きますか、お嬢様が待っているからね」

そう言ってモニターのあるボタンを叩いた。

その瞬間だった。

動かない奴をスコープで覗いて大丈夫だろうと思い、シュインにエストの援護を言った瞬間だった。

そいつが動いたのだ。そして、胸部装甲をパージした。

「まさか！二重装甲!?!」

そう言いながら狙いをつける。しかし僕よりも先に気付いたのかジョーカーが間に入り、撃てない。

「ジョーカー!」

「はいっ！」

ジョーカーのトートが鎌を巧みに使い、グレイズを攻撃する。まるで行動パターンを読んだように。しかしそれでやられるほどライル・バレルという男は弱くなかった。

「雑魚に構っている暇なんてねえんだよ！」

そう言つて剣で鎌を弾く。それを、何度も。その後剣を下から突き上げる形で強引に離した。

「くっ！」

「ジョーカー！離れろ！」

そう叫ぶ間も離れた瞬間に最後の一撃を叩き込めるように狙っている。

するとジョーカーが離れた。そしてそこを撃とうとしたがそれは機体ではなかった。

そこには、黒い板があった。

パージした装甲を盾にしたのか。

奴の反応が薄い。何処だ。何処にいるもしかして、フუნフの裏側!?… そう考えながらレーダーとにらめっこしているとアラートが鳴った。

「後ろか！」

機体を後ろに回転させて狙い撃とうとした瞬間、コックピットにマニピレーターが当たった。

殴られたのだ。

「ぐうっ！」

この《スナイプモード》の弱点はエイハブ粒子を射撃に全て使ってしまうこと。

その為、Gを緩和する能力等無い。

視界が暗くなっていく。

声も出せず気を失った。

「ユウー」

動かなかったモビルスーツが急に動いたのに気づいた瞬間フュンフを盾にしながら周り、アンドラスを殴った。

まさか奴は《スナイプモード》の弱点を知っていたのか……？

多分それだと思う。あの出力が出せるならそれなりにそこ以外の部分をおぎなりにしていると考えるのが普通だ。となれば耐Gの部分も削っていると考えるもおおかしくはない。しかしなら何故あんな高度な狙撃が出来るのかと考えるかもしれないがあいつは俺よりも多い数ユウとやりあっている可能性がある。となればその狙撃技術もわかっている可能性が高い。

「結局ユウはやられちゃったのか!」

そう唸りながらモビルスーツを加速される。奴の初撃をかわして一発食らわせてやる。

「シユイン! 援護しろ!」

そう叫んであのグレイズの前に出る。

するとそのグレイズはアンドラスを投げた。

「正気か!」

それを受け止めた瞬間視界から消えた。

確認するためにアンドラスを退けてシユインに預ける。すると下から反応がする。

来たか。そう思い、鎌を向ける。

あのグレイズが止まった。

それに構わず仕掛ける。しかしそんな簡単な攻撃が当たる筈もなく、蹴飛ばされた。

そしてフュンフに押さえつけられる。

「これがギャラルホルンの実力:」

自分達がどんだけかちつぽけな存在であるかの証明だ。

仕方ないが敗北だ。

それを接触通信で繋げる。

「降伏する。武装も解除しよう」

そう言いながら、コックピットを開き、武装を解除する。とは言っても鎌と追撃砲だけだが。

するとその敵モビルスーツは鎌を奪い、シユインの方に投げる。

「っー」

避けようとするがアンドラスが邪魔となり、命中する。

それが命中したのを確認して元いた方向へと気体を動かした。

それを確認してゆっくりとため息を吐いた。

「惨敗だな…」

「うん…」

「だああああああ!!!」

パルチザンを敵のモビルスーツに向かって振るう。こちらの際を労働者側が埋めてくれる。

しかし何かがおかしい。あれ？こいつら増えてね？

一瞬そう思ったがすぐにその思考を捨てる。

今はそんな場合ではない。

「この… 死ねええええ!!」

雄叫びをあげながら突進する。

相手のモビルスーツのパイロットが笑っている。いやその顔を見たわけではない。それがまるで映像のように鮮明に出てきた。

それを考えていると相手のモビルスーツがバトルアックスを投げた。それを避けてパルチザンを突き刺す。しかしコックピットに刺さらず肩に刺さる。するともう一本のバトルアックスでバックパックを壊される。

「う… があっ!!」

小規模な爆発が起こり、頭をコックピットの壁に打ち付ける。そして、敵を見失う。

「何処だ!」

リーダーを見るともう遠くへ下がっていた。

その後ろにはユウ達と戦っていた奴が続く。

逃がすか。と思いい、機体を前に動かそうとするがバックパックを破壊された為うまく動けない。

その間にも敵は逃げていく。情けをかけたつもりか。そう思っただけで叫んだ。

「待てよ! 戦えよ! くそ! 待て! お前! 恥ずかしくないのか! あああ!」

何度も叫ぶがそれは敵のモビルスーツに届くことはなかった。

「く、くそがあああああ!!」

必死に手を伸ばすがそれは届かない。

届くはずもなく弱い手は落ちた。

イブシロン。敗北。

しかしコロニーは独立……とまではいかなかったが大きな会社が契約内容の改善に手を出したようだ。時期に良くなるだろう。

何故かこちらがギャラルホルンに睨まれて今後の仕事ができなくなることも無さそうだ。

彼らにとっては、試合に負けて勝負に勝った。という気分だろう。

しかし彼らは知らない。ギャラルホルンは試合すら挑んでなかった事を。

第24話

「良かったんですか？」

帰り。ニールがライルに向けて呟いた。

「何がだ？」

ライルも軽く返す。するとニールはため息をつき、伸びをした後に言った。

「敵の始末です。今回の目的から殺す必要性は無いですが、生かす必要も無いでしょう」
淡々とニールは言った。確かにそうではある。敵を生かす必要性等無い。いくら殺しても罪には問われない。それどころか英雄と取られるだろう。

「確かにそうだろうな。生かす必要も殺す必要もない。だったらどつちでも良いだろう？
そういうこと言うってことはお前、まだ二年前の事引きずっているのか？」

そういうと音声だけでもギクツという表現が伝わってきた。

ニールはプライドが高い。と感じる。見た感じだと伝わらないが、ここまで一緒にいると流石にわかる。

二年前のアーブラウでの選挙時苗が代表を勝ち取った裏ではギャラルホルン対鉄華団とテイワズとみられる増援で戦争をしていた。

そこでニールはアンドラスに負けた。

「気にするな」とは何度も声をかけたがあまり意味は無いようだ。俺に弟子入りする前はそんな事もなかった。俺に弟子入りして、自身の強さを確信してプライドが高くなつたと推測される。

「まだ若いな」

そうだ。ニールはまだ若い。そう考えているとニールが返してきた。

「その基準だと、ライルさんだって十分若いじゃありませんか。10年前の事を引きずっているのですから。俺の5倍ですよ」

ふっ。

考えていた通りの答えが返ってきて、一人でほくそ笑んだ。

まあそうもなるだろう。確かにニールが言っていることは正しいのかもしれない。しかし正しくないかもしれない。その答えは神にもわからない。

胸ポケットに入っている写真を出して数分眺めたあと言われたポイントに戻った。

その写真には金髪の女性と若い頃のライルが写っていた。

「.:。」

イブシロンは負けてしまったものの、ギャラルホルンの部隊を追い払ってくれた。

ということでは英雄とまではいかないものの高い扱いをされていた。やはり鉄華団の影響だろうか。この調子なら他のコロニーでもいい目で見られるかもしれない。いい目で見られれば信頼関係、そこからビジネスにも発展できる。そこからイプシロンの行為はとて褒められたものではないものの、結果としていい方向に傾いていた。

しかし、イプシロンにはまだ問題があった。ギヤラルホルンとの関係についてだ。このままギヤラルホルンに喧嘩を売ったままだと仕事もロクに受けられない。なのでギヤラルホルンとの交渉だ。

勿論、その交渉は難儀な物だ。

そう思っていた。

しかし、僕の目が覚めた時にはもう終わっていた。あのあと姉に聞くとすぐに終わってもうコロニーを出る準備をしているらしい。交渉が決裂等ではなく、穏便に。まるでギヤラルホルンはこのコロニーではない。他の物を見るように交渉をしていたらしい。「……そうなんだ。」

ベッドから起き上がりながらそう呟く。隣にはシュインが飲み物片手に座っていた。アガーテ姉さんは現場の指揮、エスト、ジョーカーは傷を癒している。

本当はシュインも傷を癒してほしいのだが、彼女曰く「ゆーちゃんも寝ている間に治った」らしい。信じる気はないが。

起き上がり、頭を手で支えているとシュインが此方を見ていたことに気づく。

「ねえ、ゆうちゃん」

シュインは肩をつつき、その肩に頭を乗せる。

「何？」

「負けちゃったね」

まるでかけっこに負けた子供にかけられる言葉のようで今の雰囲気とはまるであわない。しかし、負けたのは事実だ。

二重装甲という苦手な手を使われたが……それは単に相手の方が一枚上手だったということだ。

「ごめんね。あのとき……僕があの時すっかりと敵の二重装甲に気づいていれば……《スナイプモード》の練習をしておけば、外さなかった」

元々《スナイプモード》は使わないものと思っていたし、二重装甲についてはそのような事をしていないという発想が無かった。

しかし、この言葉は言い訳だ。この世界、結果が全て。結果が出せないものに価値はない。

「おかしいよ。ゆうちゃん。普通の子はそんなこと考えないよ……」

「でも僕はミスっちゃったから……みんなが危険に……アンドラスだって傷つけて……」

そういうといきなり頭をわしやわしや撫でられてその後、驚掴みして視線を合わせた。

「私だってゆーちゃんを守れなかった。自分の息子：：弟うん。自分の夫を守れなかった。ごめんね」

そう言うのと目の前にシユインの胸が来たので、目を閉じた。

安心する。小さい頃から甘えん坊で泣き虫でよく母親、姉に抱かれていた。特に深い意味は無いが女性に抱かれると安心する。

「うん。姉さん：：シユイン」

「何？」

ゆつくりとシユインをさつきまで寝ていたベッドに寝かせる。そしてゆつくりとその肌に触れていく。

そして頬に触れて、目を閉じたシユインの唇に自身の唇を近づける。

その瞬間。

「ゆーちゃん。反ギヤラルホルン組織っていう人が：：あつ」

突如の乱入者アガーテにびびり動きが止まる。ユウの頭はゆつくりと持ち上がり、その顔は驚いています。と喋っているようだった。アガーテも何をしていたかわかったようにゆつくりだが確実に引いてる。

「……」

こちらもジト目に見られるような目で見つめる。別に悪いことではないが……ノック位してほしい。もし本番だったと思うと……

「えつと……後でブリッジ来てね」

そう言つてアガーテは出ていく。それを見届けた後小さく欠伸をして起き上がる。

「あれ？しないの？」

「そんな僕を狼みたいに言わないでよ」

シュインが止めるように此方を見るがそう言つて出ていく。

側で少し悲しそうな目をしていたが。

ブリッジへと向かうと、ごめんねと言わんばかりの表情でアガーテが目の前に出てきて手を合わせてそのしたに顔を下げる。

人はこれを謝罪という。

「別にいいよ。けどノック位してよね……それより用件つて？あのモバイルスーツモードキについて？」

「うん。あれを送つてきた反ギヤラルホルン組織つていう人たちが此方と話がしたいって言っているの」

反ギヤラルホルン組織。聞いたことはあるがどんな組織かわからない。名前から

ギヤラルホルンに反対するということくらいか。

「だったら話せば…」

「それが、直接話したいって言っているの。「此方は貴殿方が欲しいものを持っている」って」

「商売についてか。だったら一度おじいちゃんに話を通してそこでやらせて貰えば良いじゃん」

商売という証拠はないが、テイワズに欲しい物と云ったらおそらく商売についてだろう。ならばマクマードに話を通した方がいい。

「でも商売だつて確証はないよ。どちらにしろ、マクマードさんと話はするだろうけど。でも良いの？これから地球に行かなくちゃいけないのに」

「…」

そうだった。これから仕事で地球に行く必要がある。今回の戦いのせいで一秒でも早く向かいたいのこれでは大きなタイムロス。

どちらかの時間をずらしてもらおうか…

そう考えていると、とある組織から連絡がきた。

「ゆーちゃん…これは鉄華団から通信が来ている。どうしよう？」

「開いて。僕が話すからアガーテ姉さん以外外して」

そう言ってみんなを下がらせた後通信を開く。その後アガーテに座らせる。通信を開くとある男が目の前の画面に出てきた。

「よお久しぶりだな、ユウ」

「お久しぶりです。団長さん。何かありましたか？地球支部への物資は予定通り行わせてもらいます」

そう。地球に行く理由は鉄華団地球支部へ物資を持つていく事だ。

「それが……地球支部の方でなんかあったみたいだな。そっちから援護に行ってくれねえか。火星支部（こっ）からも獅電を送るのと同時に様子を見るつもりだが何せ遠い。そっちの方が速く着けるだろ。虫のいい話つてのはわかっている。けどよ「ストップ」手で制す。この人は本当に……リーダーとして優秀なせいで気負い過ぎだ。

「報酬を弾んでくれるなら、考えますよ。こっちも地球支部を潰されると困る」

優しい表情をしながらユウは言う。当然オルガはある程度なら報酬を弾んでくれる筈だ。ならばこの際それも貰ってしまおうという考えである。

悪い大人になってしまったのか。

「でも、ゆうちゃん。こっちには反ギヤラル……」

アガーテがそう言うのを遮ってオルガに言う。

そのときの目は戦場の時と同じく時には仲間にも恐怖を与える目だった。

「しかし、条件があります」

人差し指を立ててていたはずらっぽい笑みをしながら条件を提示した。
鉄華団にもイプシロンにも断る理由はなかった。

「よう！アメリカさんよ！」

そう言つて司令室へと入る一人の男、言わずもがなライルだ。上司にも敬語を使わないその態度から側にいたギャラルホルン兵士が睨むがそれを無視してアメリカの横にたつ。するとアメリカは振り向きもせず、部下達に命令を送る。そして、リラックスをしたと言つてところにまたライルが顔を覗かせて右手を上げながら「よっ！」と言つた。

「お疲れ様です。パイロットは休んでください」

そう言つてライルが首を降りながら前にたつそして、アメリカの脚のギリギリをおもいつきりふんだ。

それに気づいたギャラルホルン兵士が無理矢理止めようとしますがアメリカは「大丈夫です」といつて下がらせる。しかしそれを全く気にしないライルは見下すように見ながら言う。

「俺は知りたいんだ。何であんたはあのコロニーの事は良いと言つた？どちらにしる

ギヤラルホルンにしては打撃だが」

そう言うのとアメリカはため息をつき、回りの人間に仕事を頼んでついでにきてください。とだけ言つて司令室から出る。

「おいおい。他言無用な案件か？」

おかしい。こんなことを他言無用にする必要性がない。司令室でやったのだから不信心は出る筈だ。それでも知られたくないとは……

首を捻つて考える。

「(実はそのコロニー出身……違うな。だつたら俺に言う必要がない。なら……このコロニーとの貿易の関係か？……違う。そんなに大切なコロニーだつたらそれなりに儲かる筈だ)」

ただでさえ二年間のドルトから大切と思われるコロニーは経営状態によつて待遇が変わつた。そんなコロニーが今さら戦いなんて挑む筈がない。

だとしたら。

「本当の目的はそれじゃない」

そう呟くとアメリカが止まつた。こちらに振り向き驚きの表情を浮かべている。

アメリカのイメージである堅苦しい感じとはかけ離れていた。どこか年頃の女性のよう……

「おつ。意外と良い顔出来るじゃーんけ！んで詳しいことは？」

アメリカはその言葉を返さず、急いで自室へと入る。そして、そのなかにライルも入った。

無重力空間なのでくるくる回りながらアメリカの方へと向く。こいつに俺とは違う。「確かに貴方の言った通りです。目的はロークスコロニーの暴動の鎮圧ではありません。反ギヤラルホルン組織の事はご存知ですよね」

アメリカがそう言うと言とライルは眉を細める。その細くなった目がまるで怒りを表すように見えた。

「反ギヤラルホルン組織の一部がロークスコロニーにいますと言う情報を受けてこちらはロークスコロニーへと潜入捜査をしたわけです。よく推理できましたね」

「べーつに」

腑に落ちなかったのか、気分が悪いのか、返事がおかしい。

それを察したアメリカはとりあえず言う。

「これからお父様とイオク様達と合流します。ので体をしっかり休ませてください」
今度はライルがため息をつきながら扉を開け自室へと行った。
その姿を見ながらアメリカは目を細めた。

鉄華団地球支部編

第25話

「今からイプシロンを2つに分ける。1つはこのまま地球へ行つて鉄華団の援護、もう1つは反ギャラルホルン組織との話し合い……というか商談をする。これでどう？」

あの後、ジョーカー、エスト等を加えたイプシロンの人間と今後の事を話し合つていゝる時に鉄華団のオルガと話した内容を言う。

反応を見ると反対意見もあるだろう。只でさえイプシロンは人が少ない。それを半分に分けるとなると海賊は無いとしても危険な事には変わらない。

それに……

「別けた方はどうするんだ？反ギャラルホルン組織との商談を終えたとしても、その後鉄華団の方に行つた者との合流は？そちらでもし殺られたらもう片方は問題の原因にここにいるつて言うことになるんだぞ。危険過ぎるだろ」

そうジョーカーが言う。まるで仲間の事を信用出来ないようだが、まあ事実ではある。

「それなら鉄華団の本部から人が来るらしいから。そこまではもつてよ……最悪こつ

ちにモビルスーツパイロットとモビルスーツを置いていけばいい。こっちは鉄華団の地球支部に物資を届けていくのと援護して死亡者を無くせばいいんだから」

まだなんか意見はありそうだったが少々睨みをきかせ、黙らせる。

とりあえず、アガータにここを頼む。

「アガータ姉さん、ここ頼んでいい？ 事務作業が出来る人と後ジョーカーも入れば大丈夫だろうし」

するとアガータは少々唸る。なんか嫌そうな顔をしていると言うのが伝わってくる。

「ねえ、男はジョーカーだけ？ せめてエストも……」

ジョーカーは地味に嫌われているらしい。

ということを知っていた。

なので男が少ないこの状態でジョーカーだけは確かに心配だ。

「あつ。そうだね。ごめん」

「おい！」

ジョーカーが間髪いれずに突っ込むがそれを無視する。

今の問題はそこではないのだ。

すぐに別れてそれぞれの事をする必要がある。

「でも、そっちにいるモビルスーツパイロットはゆうちゃんとシュインだけになるけ

ど……大丈夫？」

「うん。だ「大丈夫です」」

振り向くとシユインが笑いながらアガーテに向けていつていた。

とりあえずわざとらしく咳込み、これからの内容を話す。

ユウ、シユイン等の地球行きチーム

地球へ行く。↓鉄華団地球支部へ行く。↓物資を届けて状況を聞く。↓戦闘の可能性がある場合は戦闘を手伝う。もしくはオルガの伝えたい事を伝える。↓歳星へと行く。

アガーテ、エスト、ジョーカー等の反ギャラルホルン組織との話のチーム

マクマードに話を通す。↓ロークスコロニーにて反ギャラルホルン組織が来るのを待つ。↓反ギャラルホルン組織が来たら情報を引き出す。↓もし反ギャラルホルン組織との戦闘になりそうでも出来るだけ控える。↓(おそらく)商談を終えたら、鉄華団本部、もしくはイプシロンの地球へと行くチームと合流し、歳星に戻る。

これだけ見てみればこんなに上手く行くとは到底思えない。鉄華団の戦闘に参加すると言う話なのに戦闘員は二人しかいない。生きて帰れるとも限らない。考えたくないが罠の可能性も少ないがある。しかし。

「これが終わったら歳星で合流しよう！じゃあ、解散！」

その数日後フュンフは地球へと向かった。
仕事の為に。

「そうですか。そうですか。テイワズの下部組織との対……彼らは受け入れてくれたのですね」

暗い部屋で何人かの男達が酒を飲んでいる。

その中で一人の男がイブシロンの事を呟いた。その男はスーツに身を包み、紳士といえど10000人中100000が頷くような人間だった。他の場所にいる仲間と連絡をとっているのか視線は端末から離れない。

するとその男の部下が言った。

「ええ。情報通り、彼らはガンダムフレームの機体を所持しております。場合によっては……」

そこまで聞くと酒を飲んで喉を潤す。それを見て部下は会話を止める。

その男が良いという話題をかえてきた。

「それにしても良かったんですか？あれ、反ギヤラルホルン組織が持ってきた物なのに

あんなコロニーに送ってしまった。人も送ったりなど、よいしよすぎじや無いんですか？いくらテイワズとはいっても」

あれ。というのは反ギヤラルホルン組織が入手した者であり、ロークスコロニーに送ったものである。コロニーの者達はモビルスーツモドキと言っていた物だ。

ユウはバエルのような物と言ってはいるが実は全然違う。バエルを模しているのは真実だがバエル……いや、アグニカ・カイエルの足元にも届かないAIを積んだバエルの特殊な機能や性能を全て取っ払ってしまったような物だ。

「良いんだ。あんなのあってもAIだからタチが悪いだけだ」

厄祭戦にてモビルアーマーに使われて猛威を振るったAIは忌むべき物となっていない。

それにあれは人類の敵だ。力はあれど、AIの為扱いが難しい。

それに此方も殺される危険性があるのだ。

その正体は……

「ふっ。真の正義を唱える我らが悪を体現するような物を持つてはいけけない。ならば有効活用できる人に送ったのだが……使われなかったか。流星に慎重に行くよな」

部下が口々に「当たり前ですよ。」と言う。それもそうだろう。いきなりモビルアーマーのような物を送りつけられたって先方は驚くし、なんとかしようと思うだろう。破

壊されたのだろうか？保管されているのだろうか？どちらでも構わないが、彼らがそんなものもあるという認識ができただけでもそれなりの戦果があると言えるだろう。

「二年前の鉄華団の事件：それによりギヤラルホルンの地位は落ちた。それが忘れ去られない今がチャンスだ」

そう言つて新しいのを要求していると部下が別の端末を持ってきて、それを見せながら言った。

「それにギヤラルホルンに送つたスパイの情報が正しければ彼らの中にはあのアンドラスのパイロットがいるらしいですね」

周りの男達がガタツと音を立てて驚く。数人分かりやすいような者もいたが。

「10年前のあのいざこざでアンドラスを手に入れられるような者がいたとは。てつきり俺はあんときに壊れちまったと思つたけどな」

違う部下が呟く。酒に酔っているのか、顔が赤い。

それを何人か頷き何人か怒つたような表情になるが男は返す。

「何を言う。アグニカ叙事詩にてアンドラスはほぼ触れられていなかった。しかしこれはアグニカ叙事詩が一般向けの書物だからだ。アグニカ・カイエルの父スリーヤ・カイエルがアンドラスをなんと言つたと思つた？とあるメモにこう書いてあつたのさーアードラスはパイロットの欲しい物を渡すガンダムだと。人を助ける方法も人を殺す方

法も。しかしアンドラスに認められないとそのパイロットすら殺すと。でもな、阿頼耶識システムを使用しなくても動く方法があると」

その男はそう言いながらグラスを回し満足げに微笑んだ。

殺すときは必要以上の情報を送ったりするのでだろうか。しかし阿頼耶識の負担が最も少ないということはあまり使われれないということと殺せるほどの力を出せるとは思えない。つまり阿頼耶識とは違う何かがあるということになる。阿頼耶識が要らないとされるその機能とは。わからない事が多いがそれもテイワズとの対話でわかるかもしれない。

「つまりアンドラスは今のパイロットを認めたということになる。阿頼耶識をつけていようがつけてなからうが。面白い、厄祭戦時のパイロットを処刑し続けたガンダムを納得させたパイロット…。会って見たいものだな」

その男はぐいっと酒を喉に流し込みながらまた満足げに微笑んだ。

「ねえ、ゆーちゃん」

数日後いつもより少ない乗員のフロンフで地球が目と鼻の先というような所まで近づいた。元々ロークスコロニーが地球に近かった為そこまで行っていないのだが。

ここから先はギャラルホルンが管理するグラスヘイムに入港許可を得なければなら
ない。

まあ今回は法を破ったりする必要が無いので法の道を沿っていくか。

そう思っていると耳に吐息がきた。なんだ？と思った瞬間大音量で呼ばれた。

「ゆーちゃん!!!」

「うおっ！いてえ！」

無駄だと知つていながら体をおもいつきり転がし、耳を押さえる。

不機嫌な顔をしながら呼んだシユインを見る。シユインも不機嫌なようで嫌なム
ドが漂う。

「なあに？」

「…別に。何でもないよ。地球に行けないだけだよ」

そう言つてシユインは部屋から出ていく。というか部屋をノック無しで入つて来た
のか？アガータ姉さんの上を行くとは…

なんかぶつきらぼうに返して来るがなんかしたのだろうか…

そう思っていると大変な事に気付きシユインを追いかける。

「つてちよつと待つて！地球に行けないつてどう言うこと!?!」

そう言いながら走つて追い付くとシユインは膨れた後に舌を出して言う。

「妻の相手を出来ない夫なんかにおしえてあげませーん！」

どうやらお怒りのようだ。理由はわからないが。そういえばたまにシユインはこう怒る事がある。理由はわからないが。まあそういうお年頃？なんだろうか。とりあえず司令室にでも行つてオペレーター姉さんに聞かか。

そう思つて逆向きにある司令室に行こうとすると誰かに肩を捕まれた。

シユインだ。

「ねえ。私が教えてあげるよ。だからさ。部屋でゆつくりと話をしよう。ね？」

「… 教えてくれないんじゃないの？」

なんかデジャヴを感じるんだけど。姉さん？

とりあえず領き自室へ入れる。

シユインは入ると同時にすぐに言った。

「うん。じゃあ話すね。今アーブラウは非常事態宣言を発令中でーす。つていう状態で全てのシャトル発着場への着陸許可は出せない。しかもそれはいかなる例外も認められないって」

「… 参つたね。地球はすぐそこなのに」

しかめっ面で言つた後に齒噛みする。

二人とも椅子とベットの座って嫌な雰囲気の流れる。

此方も前回の敗けから少々機嫌が悪い。

暴れても良いならもう暴れている。

「アーブラウじゃなくても他の経済圏からしか無いのか：。アフリカユニオンには2年前と今回の一件で睨まれているようだからSAUかオセアニア連邦のどちらかだね」

出来るだけ感情を抑えながらそう言うと言いつつシユインは頷き言う。

「どつちにする？」

「SAUは火星独立に反対だ。オセアニア連邦にしよう。今はアガーテ姉さんがいないんだ。すぐに行動しよう。時間も惜しい」

そう言うって立ち上がる。そして司令室に行く。

シユインも「うん」といつて此方についてくる。

手にシユインの手が重なった。

シユインの方を向くとシユインはそっぽ向いてしまった。

ああ。成る程

そうすれば良いならそう言うってくれば良いじゃないか。

シユインの手を握り走る。

「ちよつと待って！ゆーちゃん！早い！」

「置いてくよ。着いてきて」

そう言いながら走る。

何故かシュインも笑っている気がした。

第26話

その後、オセアニア連邦から許可を得てフュンフを宇宙に置き、地球へと立つ。その後、列車を使用してオセアニア連邦とアブラウの国境近く（オセアニア連邦より）にいる。（大昔だと中国？ロシア？と言われていたらしい）流星にアブラウに入るのきつそうだ。

「んー…久しぶりの地球だよ。ゆーちゃんー」

隣で積み降ろしの作業を終えたシュインが体を伸ばして言ってきた。

実際今地球（こゝろ）にいるのタービンスのモビルスーツパイロットはユウとシュインのみだ。機体は万全ではあるが二機だと押しが弱い。

彼女にも頑張ってもらおう必要がある。

「そうだね。とりあえずモビルスーツ持ったまんまアブラウまで行かなきゃね。：はあ。今更だけど相当めんどくさい仕事だな、これ」

「うん」

そう言いながらもシュインは若干テンションが高い。やはりそういうのだろう。しかしこれから別れるのだが。

自分がリードするのは今回が始めてだな。

積極的にいままで来ていたからな……

そういうことを今からしなくてはいけないと思うと少し億劫になる。コンテナに腰をかけて遠くを見る。

そんなブルーな気持ちを感じ取ったのか、隣でシュインがため息をつく。

「ゆーちゃんは大人になっちゃって残念と思っていたらまだそういうところは子供なのね」

「大人になれないんだよ。みんなが大人だから」

そう言っただけで立ち上がると列車で一人のイプシロンの女性に言われた事を思い出した。

「ごめんね。これ以上はモビルスーツの運搬が難しいみたいで……一機しか運べなさそうなんだ。とりあえずアンドラスはゆーちゃんがいなくて動かせないからアンドラスと鉄華団に送る物資だけでも運んでくれない？」

今列車にはアンドラスと鉄華団に向けて運ぶ物資と数人の女性しかいない。モビルスーツパイロットのシュインとはここで一旦お別れだ。

「またね。シュイン姉さん」

「……うん。またね」

そう言っただけで軽く笑う彼女を見ながら再び列車に乗り込んだ。

「…」

彼女は哀愁に溢れていた。悪いことをしたな。とは思っている。しかしこれは男女二人のせいで崩していい計画ではない。その点はわかって欲しかった。

「お父様。帰還しました。それと先日送った反ギャラルホルン組織の事ですが」
「ああ。わかっている」

アリアンロッド。その中のある戦艦の中で二人の人物が話をしている。一人はアリアンロッドの司令官、ラストル・エリオン。そして、その娘、アメリカ・エリオン。その二人のかしこまった姿を見ながら「父娘らしくないな」と壁に凭れかけたライル・バレルは呟いた。

「ジュリエッタの方はマクギリスの思惑を見過ごす形となったようだ」

ラストルがそういうとアメリカの表情が緩んだ。それをライルは見過ごす筈もなく乾いた笑いをした。彼女の表情はまるで可愛い妹の活躍を見守る表情だった。その後、ライルを見て顔を赤くして仏頂面に戻った。ライルは見過ごす形というのはミスしたということだろ。と呟いた。

「しかし次はそうとはいかないだろう。次の舞台は地球だ」

地球？何でわざわざ相手の本陣で？直接攻める訳でも無いのに。それを感じたのか
ラスタルが言った。

「そのためにあの男の協力を仰いである」

そうどや顔でラスタルが言うがライルは首をひねる。

「あの男？誰だそれ？」

「ライル。口を慎み……慎んでください」

司令官に対して敬語を使わないライルをアメリカが注意する。自分に使われないのは放っておくが他は気になるのだろう。

それをラスタルは「まあいい」と言うのでアメリカは下がる。

「あの男というのはおじ様ですか？どうやら兵は集まったようですね」

アメリカがそういうとラスタルはすぐに頷く。

……いやだからおじ様って誰だよ？叔父か？しかしラスタルに兄弟がいるとは聞いたことない。つまり……赤の他人。兵がいてそれなりに自由に動けるといことは傭兵か。しかしラスタルが使っているということはラスタルと何らかの関係がある可能性が高い。もしかして士官学校でおんなじで仲が良い友ということか？だからおじ様か。

「まあな。だからお前達は体を休ませておけ」

「……」

ライルはラスタルにそういわれたアメリカの表情を見逃さなかった。難しい顔をしている。

その後ラスタルから離れた所に1人の女性が来た。金髪でアメリカより年下に見える女性。その女性はアメリカを見つけるとすぐにバツの悪そうな顔をして止まった。

その女性を見つけるとアメリカはすぐに近づいていった。

知り合いか？

「どうしたの？ジュリエッタ？少し悔しそうね。その様子だと負けたようね」

「アメリカ：：大丈夫。次こそはいける」

アメリカは親しく話した事より敬語を使っていないことに驚いたライルはその場に止まった。

あの部下にも、親にも敬語を使うあのアメリカが敬語を使っていない。

「アメリカ：：その男は：：確かライル・バレル」

「ええ。そういえば彼と顔を会わせるのははじめてかしら。彼はライル・バレル。うちのエースパイロット：：モラルさえ除けば最強ね」

実は何度かあっているのだがアメリカはその事を知らないようで紹介する。しかし

そう言われると何故か背中が痒くなり、二人の所に近づき言う。

「なんだよモラルさえ除けばって……もつと他の言葉あんだろ」

「じゃあ、相手を敬う気持ちがあれば？とかですか？」

「……そうかい。そうかい。そうですね」

こつちはコントやっている訳じゃないんだ。

そう思つてとりあえず返す。

確かにそのジュリエッタとか言う女性は外見は外見は違えど雰囲気はなんとなく似ている。

妹を見るような感じで接するアメリカを見るとなんか笑えてくる。

すると笑いを堪えていることに気づいたのか、ジュリエッタが突っ込む。

「なんですか？何かおかしいのですか？」

それを返そうとしたときに限界が来た。

「ちよ……ぎやはは！」

腹を抱えて笑う。転がらなかつた分良かった。

「ライル？」

アメリカもおおかしく感じたようで目を丸くしながら驚く。

「お前が……人に優しく接する事が出来るなんてな……はあー。始めて見て……わりい

な。お前の事勘違いしていたわ」

そう言つて壁を蹴つて、モビルスーツデッキへと行く。

二人は口を動かさず、

その時、二人の女性を視界に入れながら、遠い記憶を思い出していた。

「ニールを叱れないな。」

モビルスーツデッキには数人の整備士と仮面を被つた謎の男がいる。確かアメリカの話だと確かヴィダールという名前らしい。その近くにある一機の謎のモビルスーツ。名前もその男と同じヴィダールという名らしい。このモビルスーツ、見たことがある。素人にはわからないだろうがライルには一目でわかつた。ガンダムフレームの機体だ。しかも、ヴィダールという男は何処か見たことのあるような人間だ。

「……お前は、ライル・バレル」

そう言うヴィダールという男は噂通りの機械的な声を出し、仮面をこちらに向ける。どうやらこちらを見ているようだ。その仮面は感情を隠すために着けているようで何処か……嫌な感じはした。そこから一つの答えを導きだしたため息について隣に立つ。

「その機体……いい機体だな。見ればわかる」

優しく微笑みながらそう言う。確かにこれはいい機体だ。

「ガンダムキマリスの回収型か？ ボードウィン特務三佐」

頭の中に浮かんできた予想の答えを言うとその男は振り向きもせずには答えた。勿論整備士に聞こえないように。

ボードウィン特務三佐：ガエリオ・ボードウィン。「セブンスターズ」の一家門ボードウイン家の出身。2年前の鉄華団との戦いで一緒に戦った。(しかし交流は少なかつた)

「…何故、気付いた」

これはどうやら肯定を意味しているらしい。

それは声が整備士に聞こえないだからだろうか。

「感覚さ」

手すりに身を預けながらライルはそう言う。

ガエリオは納得しきれしていないようでそのままこちらを見てくる。(仮面の為目がどちらに向いているのかわからないが)しかしずっと見ているうちに無理矢理納得させたようでガンダムヴィダールを見ながら話す。

「そうか…マクギリスの事、お前も考えたのか？」

未だに機械的な声を戻す気はないようで(戻せないのかもしれないが)こちらに問いかけてくる。

彼はカルタ・イシユウが亡くなった後、新しい地球外縁機動統制統合艦隊を作り上げたマグギリス・フアリドではなく、アリアンロッドのラストル・エリオンの元に行つた事についてのようだ。

「期待が出来ないからな。彼の目指す未来は力のみで支配し、支配される世の中。生まれなんて関係ないから確かに理想の世の中ではある」

そういうと強烈な殺気を感じた。どうやらガエリオの中に怒りの感情が出てきたようだ。その仮面を被つていても感じる殺気……。どうやらお怒りのようだ。

「しかし、彼はそれを急ぎすぎだ。時間もまだあるというのに……。俺の読みが正しければもうそろそろ奴は仕掛けてくる。でも残りのギヤラルホルンを倒せるとは到底思えない。だったら勝つ確率が高いここに入る。俺はそう言う人間だ」

殺気を隠す気もないガエリオはそのまま問いかける。

「ではマグギリスがアリアンロッド以上の戦力を持ち世界を開ける可能性が高ければそちらに行つたのか？」

「まあな。だつてそうだろ？俺はまだ死にたくないからね」

そう言うのとガエリオは怒つたのか手を握りしめる……。言い過ぎたか。

「お前は……。マグギリスの考えを肯定するのか？」

彼はまだ感情を抑える術がないのかそれを越す程の怒りなのか……。そうか。彼が死

んだと思われるエドモントンでの戦いでマクギリスが裏にいた。何らかの手引きがあつたのを気付いたのだろうか。誰にやられたのかもわからなかったしな。

「ああ。それより怒りを抑えろ。若さが滲み出てる」

若さが滲み出てる。というのは大抵の人間は喜ぶだろうが、若さというのとは未熟。ということだ。つまり相手の価値を下げる言葉ということ。

それを知っているガエリオは黙る。自分はすぐに気づいてしまったが他の人間には彼はヴァイダールとして生きてほしい。

「くっ……わかった」

そう言うとは仮面から滲み出てくる感情が消えた。そして彼は再びヴァイダールという違う人間として振る舞う。

「食堂でも行こうか？まだ兵士が沢山いるだろう」

「ふざけるな」

となるのは時間がかかるようだ。

第27話

とりあえず物資を積んだ状態で列車等を選び継ぎアープラウのとある場所にて荷を卸す。

鉄華団地球支部。

それを確認していると一人の男が寄ってきた。

「なんなんですか。あなた達は。困ります。今すぐに帰っていただかないと」

後に聞いたことだが、この男の名はラディーチェ・リロト。鉄華団地球支部の事務系統を全部やっているらしい。

「すみません。僕はイプシロンのユウ・タービンです。言われた通りに物資を届けに来たのですが」

そう言うトラディーチェは首をかしげて「少し待ってください」といつて何かを取りに行った。その間に回りを歩く。

どうやらまだまだ戦闘中のようなうだ。モビルワーカー、モビルスーツは勿論、工具等も大量に無くなっているし、見張りすらいない。

工具棚にある不自然にホコリを被っていない所が無いことから相当の時間空けてい

ると思われる。

「：すみません。確かに：って何やっているんですか!？」

すると扉から出たラディーチェに止められた。その時にちらつと見えた端末にテイワズの組織ではない、見たことのない名前があるのを確認した。：恋人か？おそらく違う。兵が長い間戦っているというのに恋人に連絡するバカはいないだろう。いま思いうせば男の名つぽかった。ならば友人か？それは上記の理由から違う。

とりあえずこいつは何らかの理由で鉄華団と別の所と通信していたみたいだ。

「すみません。少し鉄華団にしてモビルワーカーの数が少ないなあと思って：実は知っているんですよ。アーブラウの戦争について」

ラディーチェの眉が動く。

それをユウは見逃さずに言った。

「誰と戦争しているんですか？そして何故？我々の耳に入って来ないのでですか？」

「：SAUとの抗争です」

沈黙が流れる。それ以上言う気は無いようだ。言った要件の半分も答えてないが。しかしそのせいで危険を感じる。

「そうですか。では鉄華団のメンバーの無事を祈ります」

「ありがとうございます」

そう言つて下がる。

その後物資の点検などをすませて渡したことを確認。そしてそのまま背を向けて歩いていった。列車に乗って行くときに女性達に言った。

「みんなはこのままシュイン姉さん達に合流してすぐに地球を出れる準備。僕はアンドラスで戦場に行く」

そして、ラディーチェの目を掻い潜り戦場へと行った。しかしその時武装がマシンガン一丁と盾そして、バルカンのみだったが。

「なんなんだ！あいつら！イプシロンって！名瀬の劣化版が代表とか言つてたやつか！」

ユウ達が戻つた後、すぐに部屋に戻り頭を抱えるラディーチェ。あの男はもしかしたらこちらに関わつてくるのかもしれないのだ。

「火星支部の方は上で止めていたのに……どうやってこちらに来た！……はあ、はあ、とりあえずガラン・モツサに連絡を……」

ラディーチェは急いで部屋へ入つて、ガラン・モツサに通信を繋げる。

「ガラン・モツサ！今テイワズからガキが来ました！… おそらくそちらに向かうかと」
「そうか。わかった。こちらにも動く必要がありそうだ」

通信のガランの声は締まっていた。今までと違い、危険を見に染みたような。

「お願いします」

そうとしか言えなかった。

「アンドラス。こんな静かな戦場は初めて… いや、久しぶりだね」

時間は経ち、戦場。そこにはアンドラスに乗るユウがいた。

得物はマシンガン一丁と改修した盾。そして、バルカン。レールガンは殴られた時に
損傷、修理中である。ライフルも今は使えない。

しかし地球では狙撃より弾幕をはる方がいいのかもしれない。地球は重力、大気等を受けやすい。只でさえ、アンドラスには射撃に対して有効な能力等がない。元々狙撃用ではなく、汎用性に優れた機体を射撃にしか使っていないだけなのだから。しかも改修した盾にはナパーム弾等のミサイルがある。上手く使えば塗装を剥がして通常弾でも決められるかもしれない。つまり汎用性に富んだマシンガンを使った方がいいのかもしれない。

まだ自信はないのでしれないとしか言えないが。

個人的にはマシンガンを使うのは苦手ではあるが。

そう思いながら動いていると敵機を見つけた。

「……敵機を確認……三機か。」

とりあえずエイハブウェーブは隠せないがしゃがんで相手を見る。タービンス特有の攪乱と敵の数で少しは接近出来るが。

ヘキサフレームの量産機、ジルダが奥に三機。

その内一機にはカスタマイズがされており、それは狙撃用を彷彿とさせる。狙撃といえどモバイルスーツを倒すのは相当な技量がいるためすれた筈。

おそらく狙撃で十分な相手、モバイルワーカーの始末だろうか。エイハブウェーブの影響が出ない所からの遠距離射撃。モバイルスーツの援護がなければ相当難しい芸当だ。戦場だからモバイルスーツパイロットはモバイルスーツにいると推測されるため、おそらくモバイルワーカーで指揮を行う者がいる。鉄華団のメンバーだな。

そう推測して、マシンガンを構える。

やっぱり狙撃銃は欲しい。ちよつと手荒だがもらい受ける！

そう思っていると相手が気づいたのか接近して来る。

まだだ。もつと来い、その姿をしつかり見せろ。

すると敵のモバイルスーツから通信がくる。

「何処の部隊だ。所属と名前をを言え」

やっぱり見せてはくれないか。相手も馬鹿ではないと確認した後マシンガンを構えた状態で目の前に姿を出す。

いけるな。アンドラス。

そう思つて手に力を入れる。

「所属はイプシロン。名前は…… そうだな。テイワズの狙撃手！」

そう叫んでマシンガンを発砲させながら急接近する。

ジルダも驚き二機ともこちらに狙いをつけて撃つ。

「その程度……」

一機のジルダのゼロ距離まで接近してコックピットに銃口を刺し、撃つ。

悲鳴は銃声書き消してくれる。何も聞こえない。

倒したジルダを盾にするともう一機が怯えたのか動きが止まる。狙撃用が此方に狙いをつけたのを確認して倒したジルダを狙撃用のモビルスーツに向けて蹴飛ばした。

勿論、届くようなことはない。届く前に落ちる。

しかし虚仮脅しであろうと脅しは脅し。狙撃用の機体が撃つがそれはアンドラスの上に行く。

「アンドラス！」

阿頼擲識をつけているのか。と思われるような滑らかな動きで腰を落とし、姿勢を低くして丸まって敵モビルスーツの前に出る。

もし接触していたら、接触回線で敵の最後の言葉が知れたらうなど他愛もない妄想をしながら引き金を引いた。

止めはささない。狙撃銃が欲しいだけだ。

ジルダの胸パーツに当たるがヘキサフレームのジルダはそこにコックピットはない。つまりまだ生きている。

相手が倒れて、此方に体を預ける。その影響か、接触回線が開かれる。

「このっ…悪魔っ！」

「うるさいなあ…消えろよ」

その声に怒りが籠る。そうやって自分じゃない方向にしないと相手を人と考えてしまふ。相手は人じゃない。

殺すべき、相手。

コックピット前に銃口を出して間髪入れずに射撃。正確無比な射撃はパイロットの目を殺す。

ジルダが余力で抵抗したのかマシンガンが弾かれる。

それを迎え撃つのではなく、それに従ってマシンガンを落とす。

それと同時に溜めていた息を吐く。

「はあー！」

ジルダから奪った狙撃銃を構える。すると目の前には接近用の武器を持ったジルダがいた。

「この……悪魔が……！」

お前の声など聞きたくない！

狙撃銃の残弾を確認せず、引き金を引く。

その弾は再びパイロットのみを殺した。

「——よし。次」

敵のパイロットの実力はそこまで高くはなかった。しかし、時間をかけた。最初の得物がマシンガン一丁という苦手な武装だった事もあるだろう。それより、相手が人である。そして、人を殺しているという事を考えたせいで作業と出来なかった。相手の声を聞かなくていい。聞く可能性が低い狙撃はやはり好みだった。

「……アンドラス」

ほとんどの場合近くには仲間がいるためその仲間に慰めてもらっていた。

大丈夫だよ。と

他の人が聞けば情けないことこの上無いが、彼は人の声が頭に響いて戦闘だけではな

く、私生活の邪魔もするのだ。

だからこうするしかない。仕方ないじゃないか。自分じゃどうにも出来ないのだから。

しかしここには慰めてくれる人はいない。

コックピットの壁にもたれかかる。

アンドラスに頼る。慰めを要求しているわけではない。ただ、頼りたいだけだ。

「次は……どうすればいい?」

アンドラスはツインカメラを光らせ、体を優しく包み込んだ。

しかし、それで終わりとはならない。

マシンガンを腰にかけて、狙撃銃を構える。

息を整え、回りの敵影を見る。

エイハブ・ウエーブを見ると端の方に他の機体を見つけた。

動いていて、捕捉しづらいが。これは……おそらくギャラルホルン。いや、違う。

ギャラルホルンでも旧式だ。それなりの機械がないとまだ断定は出来ないがカメラを使ってみると、おそらくゲイレルやその改修機シャルフリヒター。その回りにはモビルワーカーがちらほら見え隠れしている。

この狙撃銃の持ち主はエイハブ・ウエーブ外にある敵機を狙撃すると思っていたのだ

が、これではバれてしまっただろう。

只でさえ地球での狙撃は難易度が高い。しかしここまで近づくとはいないが。そう思うと珍しい狙撃手だが、レベルは自分より低そうだ。何より相手は狙撃用にカスタマイズされているのに比べて、此方は狙撃が出来るだけの汎用機なのだから。

《スナイプモード》用のライフル型のコントローラーを出す。

別に狙撃に補正がかかるわけではないが狙撃はこちらの方がしやすい。それに機械式のロックオンは遅い。マルチロックオンならば機械の方が速いが。一体を狙い撃ちする場合だったり個人の力量がある場合は機械のロックオンを見ずに撃つ場合もある。

「…そう」

シャルフリヒターに狙いをつけて狙撃する。その引き金を引いた後すぐに機械のロックオンが追い付いたが今更気にしない。

その弾はシャルフリヒターの頭部に命中。敵が慌てているところで弱点である、コックピットの開閉部分に狙撃をする。

「……よし。次」

その要領で次々と敵モビルスーツを倒すがすぐに弾が無くなる。

「仕方ない。行くよ。アンドラス」

スラスターを吹かせて、そこにいた機体の方へと行く。

そこにはゲイレールを駆る、ガラン・モツサもいた。

第28話

鳴り響く銃声。それは左肩へと命中する。普通の人生なら来ることのないダメージ。何故か痛みは感じなかった。体が半回転してそのままクレーターの坂を転げ落ちる。その間で石などが当たるがその痛みも感じなかった。撃たれた方向を見ると初老はいったらう男は笑みを隠せずに笑っていた。

なんで？なんで人を撃って笑っていられるの？

そう思っていると体が止まる。その瞬間急激な痛みがくる。

「ぎゃあああ!!!」

お姉ちゃん！お母さん！お父さん！助けて。

助けを求めようとすがすがそれも叶わず、肺の空気が完全に抜ける。少なからず、臓器にもダメージが来ているだろう。

赤い血が池を作る。回りに落ちている小石を赤く染める。雑菌が入り込み、膿んでいくのだろう。撃たれたわりには出血は少なかったが、そんなのをわかる筈もなく、痛みでもがく。

涙が出てきて、それは頬を伝い血が作った池へと入る。混ぜ違ってわからなくなってい

くそれは、これからの自分の用だった。

「はー、はー」

慌てて呼吸をするが痛みは止まらない。それどころか加速していく。思考が追いついたのだろうか。自分は撃たれた。

痛い。血が出た。助けを。みんなはどこ。

いままで何度も戦鬪があり、家族は敵を殺していった。その中では敵の死体を見ることが一度だけがあった。しかし、それは味方ではない。敵なんだ。お父さんやお姉ちゃんを殺そうとしたんだ。ならば殺される可能性だつてあると思つた。淡白になつてしまつたとお姉ちゃん達が泣いていたのを思い出す。そうか。人は死ぬ前にこうなるんだ。こうやつて、苦しんで死んでいくんだ。

それを、当然と言つたんだ。思つたんだ。

これはいままで感じた事のない痛み。コンテナに軽く頭をぶつかけたり、転んだり。お姉ちゃん達に締め付けられたり。そういうのではない。痛み。つまり、今苦しんでいる。死ぬのか、僕は。なにもできずに。迷惑ばかりかけて。

お姉ちゃん！お母さん！お父さん！

右腕で左肩を掴みながら叫んだ。

「痛いー！」

耳をつんぎく爆発の音。それが友軍機の機体が撃たれた音だと気づくのに、時間はかからなかった。しかし、敵の姿は見えない。

狙撃か。

そう思った瞬間にその機体のコックピット部分が爆発する。あの位置は。

「倒れてくる!」

すぐに自身の危険に気づいて乗っていたモビルワーカーを動かす。その近くにゲイレールシャルフリヒターが倒れる。

「どうした!」

戦場の音に書き消されないように誰かが大声で言った。

「狙撃だ! かなり遠い!」

「そいつはおそらく相当な腕だろう。見ろ。コックピットがやられている。ゼロ距離射撃でも難しい一撃必殺の部位を狙って当てている。気を付けろ!」

そう友軍のガラン・モツサの落ち着いていながら危険を知らせる声が聞こえる。

そうだ。近くにいたからわかるが、敵は牽制や、塗装を剥がすのではなく、一撃で沈める方法を選んだ。

狙撃手。こんな相手がいるとなれば、おそらくギャラルホルン。

「アストン！みんなを一旦隠れさせて！敵の方向はわかるだろ！」

「わかった！」

ここ、鉄華団地球支部で手に入れた相棒に声をかけて木の影に隠れさせる。

その後も正確無比な狙撃は続くがモビルワーカーには一度も撃つて来なかった。

「安心しろ！こういう狙撃銃はすぐに弾が切れる！弾が切れたらすぐに押し掛ける！」

ガランがそう言いながら、味方に指令を送る。

狙撃銃は安全性の確保や、連射する必要が無いことから、弾数は異常に低い。

予想通り、何機かを転ばせたり殺したりしたが、すぐに止まった。

狙撃した機体ははじめはエイハブ・ウェーブの感知できる範囲内にいたが、一発だけ撃つた後、すぐに範囲外に出ている。つまりは逃げている可能性もある。普通なら回りに護衛

「よし。俺達が先行するからついてこい」

ガランが重い声で言う。相手の技量を判断しての行動だろう。

この時、ガランはこの狙撃をしてきた人間を知っていた為そう反応したが、此方はそれを知らない為ただ反応する。

「はい」

「タカキ」

その中で、アストンが自身の名を言う

その声は強く、そしてはつきりしていた。

「モビルワーカーを下がらせて。エイハブ・ウェーブとか見てもあつちの他にモビルスーツはなかったから」

「うん。気を付けて」

「ああ——っ!？」

アストンがそう頷くと何か投げ込まれてきた。反射的にアストンがそれを撃ち抜く。

それは大きな銃だった。爆発が小さいことからもう弾切れをおこしたものだ と推測できる。

「狙撃銃!？」

「気を付けろ！来るぞ！」

エイハブ・ウェーブが新たな機影、いや先程まで消えていた機影を再び感知した。

白を基調としたモビルスーツ。胸パーツの右下には弾数が少ないとはいえ、バルカンが備わっている。汎用機らしく、ランドマンロディと比べるとスラリとした体型。両手で大事そうにマシンガンを構えて、少々太く、そのモビルスーツと不釣り合いなシール

ドを腕につけている。

それは――

「アンドラス!？」

二年間、鉄華団の援護をしたモビルスーツ。何故こんな所で…

「タカキ、知っていい…」

そうアストンが言う前にそのモビルスーツは空に向けて一発放った。

「団長命令を伝えに来た！すぐに戦闘を中断せよ！繰り返し！戦闘を中断せよ！これは鉄華団団長である…えーと…オルガ！オルガ！イツカからの命令である！信用出来ないのであれば証拠のデータを開示しよう。だから！鉄華団はすぐに戦闘を中断せよ！」

昔仲間だった者は怒りを含んでいるかもしれない声でそう叫んだ。

それは鉄華団メンバーの頭を混乱させるのには十分過ぎた。

「ええ！ゆーちゃんが!？」

イプシロンのメンバーがユウ以外全員合流したとき、一人の女性がシュインにそういった。

何かあったのだろうか。と思つたが、別に誰かに襲われた訳ではなく、ユウが一人で
すぐに行つてしまつたらしい。

速さより正確にやることにこだわるユウがシユインと合流すらせず、一人で行つてし
まうと言ふことは、それなりに考えがあるのだろう。

そういうえば移動で聞いた気がする。地球支部のリーダーのような存在であるチャド
さんが今、意識不明の重体だと。

今、ユウは一人。一人であることにそこまで意味はない。

「わかつた！ 獅電を出して！ 私も行く！」

すぐに獅電に乗り込む。

今のユウは危険だ。何を急いでいるのかはわからないが急ぎすぎている。

「やつぱり前回の敗北から行き急いでいる……？」

色々考えるがそれくらいしか頭には浮かばない。

ユウもそこまで敗北を味わつた訳ではないが、食い下がる等はした覚えはない。

「とりあえず……シユイン・ヴァイプ！ いきます！」

マシンガンで敵のシャルフリヒターを撃った後、すぐにシールドからミサイルを放ち、それを狙撃する。

ミサイルから爆発して回りが高温になる。塗料が溶けていく姿を想像しながら別のシャルフリヒターの攻撃を避けて、蹴りを加えようとするが避けられたので下がる。

「くっ……！」

こいつら接近戦ばつかしている。しかも数が多い上に連携もとれているためめんどくさいことこの上ない。

端には鉄華団が戸惑っている。

そうだ。それでいい。もっと欲するのであればそのまま本部へと引き返して欲しいのだが。

二年前の事があってよかった。もしそれがなければ今頃「うるせえ！」とか言われながら撃ち込まれていたところだろう。

その場合負けていた。

思考を戦闘に戻してミサイルを放つ。しかしそれは真横にいたゲイレールに撃ち落とされた。

「近っ！」

「腕はいいようだがな。俺を倒せると思うな！」

ピツケルのような物にシールドを引つ掛けられる。

このままでは格闘戦だ。

「その程度で！」

それを察してシールドをパージする。まだ弾はあつたのだが仕方ない。

そのままゲイレールから離れる。こいつ……手練れだ。

すぐにでも倒した方がいい。

すると後ろにシャルフリヒターがまたピツケルのような物で攻撃してきた。

「そんな得物で！」

すぐにかわしてマシンガンで撃った後に離れる。

まだか。そう思っているとまた違うシャルフリヒターが、それをかわすとまた別の

シャルフリヒターが。最初は10機ほどだったが狙撃等で6機まで減らした。

「——っ！そこお！」

マシンガンを構えて、よんだ場所に撃つ。そこには一機のみシャルフリヒターがいた。

そのシャルフリヒターコックピットから火花を散らして倒れ、沈黙した。

「これで五つ！」

そのままマシンガンを敵に向けて撃っていると弾が少なくなってきた。

「マガジンは後一つ。すぐにあのゲイレールを仕留めなきゃ……」

すぐに弾切れをおこしてそのままマガジンをパージする。シャルフリヒターが接近してくるが、あつという間にリロードを終わらせて、マシンガン撃つ。

シャルフリヒターに数発当たるが、すぐに逃げて撃破までは至らなかった。

「貴様！ 若いな！」

「なんだと！……があつ！」

ゲイレールのピッケルをまともくらい、機体が揺らぐ。

コックピットの壁に頭をぶつけてそこから血が出る。

「あの頃のようにいくと思うな……あの頃？」

疑問が出てきたがそれを頭を降つて捨ててすぐに後ろにいるゲイレールを撃つた。

左肩に当たりはまともにくらったのかゲイレールが揺らぐ。

「右に重心が傾いた。今！」

マシンガンでゲイレールの腰を撃つ。バックバックに当たり、小規模な爆発が起こる。

止めを。と思つたら隣からシャルフリヒターが出てきてピッケルを振るう。

一人に殺気を向けさせて、他の機体が邪魔をする。十分すぎるレベルの連携だ。

「だからつて！ まだ！」

マシンガン撃つて敵を牽制する。あと少し。あと少しだけでいい。せめてモビル

ワーカーだけでも逃がさなければ。それを感じたのかどうかはわからないが、鉄華団のモビルワーカーとモビルスーツが離れていった。

「耐えてくれ！アンドラス！」

両目が輝く。その瞬間突っ込んできた、シャルフリヒターをシステムが捉えた。

その時間こえる筈の無い音がユウの耳の中で響いた。

「やっと聞こえた」

ツインアイのカメラがより輝く。

マシンガンでコックピットの開閉部分を撃って倒す。

これで六つ。

それに怒りを感じたのか、二機のシャルフリヒターがピッケルを持って突っ込んできた。

「アンドラスだって、ガンダムだ！」

マシンガンで牽制して退かせる。あと少し。あと少し。

だんだん戦闘が激しくなってきた。全弾当てているとはいえ、まだ時間がかかる。

弾が少ない。不味いな。マガジンはもうない。当たり前だが、補給も受けられない。バルカンではコックピットに開閉部分を当ててもパイロットを殺すのは難しいだろう。

マシンガンを連射させて、ゲイレールのライフルを破壊する。そのまま近くにいたシャルフリヒターの頭を掴み、投げた後に右腕を踏んでコックピットを撃つ。

これで7つ。あと三機。その後、ピツケルを投げて、シャルフリヒターを転ばせる。「ピツケルは投げるもの！」

アンドラスの両目が輝いたまま、ジグザグに動く。

光を置いていき、二本の線を作る。

すぐにシャルフリヒターに追い付き、コックピットを踏み潰す。

残り二つ。

「早……化け物が！」

マシンガンを連射しながらシャルフリヒターに近づく。その状態でいると急にシャルフリヒターのコックピットから火花が散る。

「あと少し！」

火花が増える。そのままコックピットの壁が外れた。

それは重力に従い、シャルフリヒターの腰に当たった後に、足元に落ちた。

「つ!!なんだと！」

「これを狙っていたのか」

それを逃がすようなユウではない。すぐにバルカンでシャルフリヒターのパイロツ

トを殺した。

人と姿が見えたのに。

人と認識しなかった。

その為、その引き金に迷いはなかった。

「さあ、後はある一人だ。どうする？死ぬか、投降するか」

「くくく… ははは…」

なんだ。こいつ… 笑っているのか…

そう思ってマシンガンを構える。止まった敵を当てられないほど、僕は下手ではない。

「見たことある機体だと思ってな。その機体アンドラスだろう。ジェラルドコロニーにあった」

「なんだと…」

アンドラスも固まる。こいつ… まさか…

そう思いながら、そして出来るだけシンプルに前向きに言った。

「良かった。あんたを殺せば僕の迷いが無くなる」

アンドラスはそれが最適解だと言うようにツインアイを輝かせた。

「シュインがたどり着くまであと少し。
待っててね。ゆーちゃん……」

第29話

それはユウがガランのいる戦場に行つて戦闘を初めてすぐの事だった。

「何？正体不明のモビルスーツが戦闘している？」

マクギリス・フェアイドは確かに聞いたのだ。正体不明のモビルスーツが戦闘をしていると。それも敵側のモビルスーツに殴り込みに行っているとのこと。

今現在部隊は出していない。つまり、何らかの陣営からの援軍もしくは。

「敵の仲間割れか？いや、そうとは思えない。指揮機能は整つてないものの機動性に優れた鉄華団さえも把握している者だ。そうそう簡単に仲間割れなど……ひとまず私は現場へ向かう。——今日はいいい予感がする」

そう言い残して、マクギリスは闇へ消えた。

「……変わった。」

ユウの座標を他のメンバーは知らなかった為、とりあえず戦闘が起こりそうな場所を探しているのだがユウはおろか、アンドラスすら会えない。

しかし何かが変わった。そう思った。

「エイハブ・ウエーブも感知しないなんて……」

視覚的にも見つけられない。小規模な爆発くらいはあっても良いのに……とぼやく。心配だ。一人での行動を嫌がるあの子が、わざわざ一人で、それも自ら行動するなんて。

「あの甘えん坊で、泣き虫で。あんなゆるーちゃんが一人で行動……どうしよう。大丈夫かな？」

そわそわする。何らかの理由があるのだろう。なんだろうか……色々と浮かぶがどれもユウが一人で行くような物ではない。

「やっぱり新しい女の子でも引つ搔けてないかな……いや、ありそう……」
なんか道端に救難信号を出した女の子がーどーとかこーとか。

彼はナンパ等しないので（本人は気付いてないがそれに近いものなら経験あり）少し意味は違うがそれに気付かずうやむやする。

「……行こう」

仕方ない、変わった。というのを調べに行くか。

そこにユウがいるとは知らずに。

「くっそ……ここは逃げるしかない。それについてもどこに逃げる……？」
ラディーチエは荷物を纏めながら考える。

どうする……？ここから逃げた所でテイワズに捕まるに決まっている。

鉄華団地球支部は戦争によつてほぼ全滅。此方は金をもらつて歳星へと帰り、「最善は尽くしたが鉄華団地球支部は崩壊した」と虚偽の報告をしてテイワズで他の仕事を始める……完璧な筈だった。虚偽の報告もバレ無いように最善は尽くした。こんなところで終われるか。

「くっそ……獣が！」

机にあたりながら、怒鳴る。

どうやらガランと再び通信を取る必要があるようだ。

歯噛みしながらテイワズの狙撃手の死亡を祈った。

「心配だね蒔苗のおじいちゃん」

三日目が普段使わないおじいちゃんという言葉を使つて

蒔苗代表の心配をするが、なんとなくそれはクーデリアを氣遣つてのような気がす

る。

「でも容体はニュースで分かります。チャドさんは生死すら……」

チャド・チャダーン。鉄華団地球支部の責任者でそのまとめ役を任される事になるが、現場と火星本部双方の意見の板挟みとなり、中間管理職としての苦悩を知る。テロにより蒔苗を守ることに成功するものの、今は蒔苗同様療養生活を強いられている。

「情報入らないからね」

しかし三日月達にはそういう話が入ってこないのだ。

「ああ、地球に着きや嫌でも分かるさ。ジタバタするのはそれからいい」

「ええそうですね」

クーデリアもそう言って決意を固めた。

その手にはアグニカ叙事詩が握られていた。

もし彼がいるのなら……と思いつながらアグニカ叙事詩を強く握った。

「……アメリカ。少しは休め」

ラストルが娘にそう言う。

アリアンロッド。そこではアメリカが資料に目を通りしていた。側にはやる気のな

ライルとラスタルがいる。

それを言われたアメリカは「落ち着けません」とだけ返してまた作業を開始させる。資料に目を通してなにかを書き込み、また新しい物を見る。

ブラックも良いところだ。それを娘に一任させるラスタルという男をライルは眺めた。

するとライルに見られているので察したのかラスタルが此方を見て言う。

「これはアメリカが望んだ事だ。どうやら心配なようだ」

「それも仕方ないだろ。彼女は頭がいい。危険が来ることを察したんじゃないか？ 変な事を考えちまう時は作業をするのが一番いいし」

そう言ってライルは部屋を出る。

ラスタルは神妙な顔つきでアメリカに言った。

「心配なのか？あの男が」

そう言うのとアメリカは作業を止めて、俯く。

ラスタルは「いや、いい」と言って椅子に座り直す。しばらくするとアメリカが口を開いた。

「心配です。それもイプシロンというグループが、地球に向かったのです。イプシロンはどうやらタービンズという組織の下部組織らしくそのタービンズと鉄華団は仲が良

い。つまり、彼らは地球に向かう可能性があるのです。あの：：ライルを苦戦させた者達が：：それはおじ様でもきつい」

おじ様ことガラン・モツサ（これも偽名ではあるがここでは置いておく。）のモビルスーツ操縦技術をよく知っている。だからこそ心配なのだ。別にガランが弱いという訳ではない。アリアンロッドでもエースのジュリエッタを教育し、あれほどにまで育てる程の実力はある。

「おじ様は身寄りのなかつた私を拾って：：お父様に会わせてくれた。もう一人の父親のような存在です。だからこそ生きてて欲しいのです。心配なのです」

アメリカは顔を暗くしながら言った。

そして祈った。ガランの無事を。

それを盗聴用の機械を使って聞いていたライルはゆつくりとため息を吐いて呟いた。

「紅茶でも出してやるか」

数は少ないのに多数の思惑が重なり混沌カオスとしていく戦場。

しかしその戦場は儚くも美しい。思惑等感じさせないほど。真つ直ぐな感情のぶつ

かり合い。自身の感情をぶつけ合うモビルスーツの戦場は美しい。

マシンガンでコックピットを外そうとするが、それを警戒したガランは外れないようにシールドアックスで守りながら接近する。

シールドアックスやそれをつけている左腕を飛ばすほどマシンガンの弾丸はない。

馬鹿みたいに使い過ぎた。まず相手が多いのもあつたが一番はマシンガンが苦手だからコックピットを外すという離れ業をしなくてはならない。

「ちっ… 弾があと少ししか…」

舌打ちをしながらも冷静に状況を見る。

これは相当不味い。射撃以外あまりできないのに、弾がもう少ない。

「どうした！ 殺すんだろ！ こい！」

此方の戦闘方法を知ったゲイレルは勝ち誇りながらジグザグに動く。

これでは的が絞れない。

近づいてくる。接近用の武器が無いことから悟ったのだろう。接近戦が大の苦手だと。

「ならばなあー！」

ゲイレルは腰を低く、もう地面にくっつくと思われるところまで下げて、速さをま

す。

重心を前に出して突進か。

もう牽制に使える弾はないので横に流れる。しかし、ゲイレールのパイロットも相当な手練れのように着いてくる。

「はっはっはっ！ しっはっはっ！」

S字を描きながら避けるがこれでは意味がない。

やるしかないのか。接近戦を。武装はマシンガンと落ちているシールドのみ。バルカンは期待出来ない。

罨でも張れば状況は変わっていただろうが、生憎準備すら出来ない。

「だから……しっこいなあ……！」

バルカンを放つがゲイレールにはかすり傷さえつけられず弾切れする。

「ちっ」

敵の攻撃を的確にかわしながら次の方法を考えるが浮かばない。せめて落ちた盾が使えればいいのだが。

「馬鹿が！」

「しまった！」

ピッケルを出したゲイレールがおもいつきり振るう。マシンガンの銃身にひびが入

る。

しかし、そのピツケルを強引に奪い、離れる。

「はあはあ……ぐっ！」

ゲイレールはシールドを左腕から取って此方に見せる。

斧か。

「さて……そろそろ終わらせてやろう」

ゲイレールが急接近して、アックスを振るう。それをピツケルで受け止めて、流す。

「お前……！」

「今だ……！」

流れたゲイレールのバツクパツク、を狙い撃つ。

銃身にひびが入っているのでそこまで正確ではないがスラスタを次々と破壊する。

同時に弾切れした。

「よくやったが……これで！」

ゲイレールが回転しながら斧を振るう。それをピツケルで受け止める。ピツケルにひびが入ったのでそのまま投げる。

「これで……終わり」

マシンガン捨てて。マシンガンの銃身が砕けたような音がしたがそれを無視してコックピット近くを掴む。

そこから接触回線が繋がれる。

その男は笑っていた。

「ふふふ… ふははは！ どうか。どうか。貴様は10年前の… それでアンドラスか…」

わかつていた。今、奴の顔すら見ることは出来ないがその顔はおそらくやりきった顔だろう。

「お前は… 何故僕を撃った？」

まだ笑っているその男に一つの事を聞いた。

しかし、答えはわかっている。訳のわからない質問だ。

答えは簡単

「お前が俺の前に出てきたからだ… ふっ… 忘れるな！ このロートルの姿は必ずや、貴様の未来の姿となるだろう!!」

そう敵のパイロットが叫んだ。

「ふざけるな。僕とあんたを一緒にしないで。僕は生きるんだ。こんな惨めな死はしない。僕はあんたと違うから」

その時接近する機影を確認。獅電。シユイン姉さんか。

「やってみろ、若造しかし！さらばだ！」

「ゆーちゃん!!」

すぐにゲイレールを投げ捨て、後方に下がる。

すると後ろの何かに当たったので見ると獅電が後ろから支えていた。

ゲイレールは火に包まれる。データがほしかつたがまあ仕方ない。

「ゆーちゃん!!大丈夫?」

シユインがすぐに接触回線を開いて応答する。

「うん。大丈夫。だから安心し「出来ません！はい！さつきとこっち来る！」」

どうやらお怒りのようだ。声に隠す気のない…：ではなく、隠せないくらいの怒りが

こもっている。

もしかして…：一人で出たことを怒っているのかもしれない…：さて…：どうしよ

う。

「あ、あのさ。悪いって思っているよ！さ、流石にねー。あつあははは…：」

とりあえずこれを落ち着かせようと、色々と言ってみる…：が全く変わらない。それどころかなんか大きくなっている気がする。

接触回線の所にシユインの顔が写る。なんかジト目で見られています。

「……すみませんでした」

「来なさい」

「はい」

大人しくアンドラスのハッチを開けたその時、何かを感じた。

この感じ……敵意じゃない。

しかしなんだ？この感じは？

「姉さん。じつとしてて」

「ちよつと！そんな事聞かないからね！つて！ちよつと！」

獅電のライフルを一瞬で盗み獅電を下げながらシールドを拾う。

すると何かの正体がわかった。グレイズリッターだ。それも指揮官機。

するとそのグレイズリッターと思われるパイロットが通信してきた。

それは金髪で20代と思われる美形の男。機体からギャラルホルンのパイロット。

「警戒させてすまない。此方はギャラルホルンのマクギリス・ファリドという者だ。ガ

ラン・モツサの討伐。感謝する」

「モンスター商会？」

記憶の隅の隅にあった物が呼び起こされてつい眩く。

するとマクギリス・ファリドの表情が弛んだ。

「今ので気づくか。凄まじいな、その感覚」

「…いや、普通です」

とりあえず殺気が無いとはいえ、グレイズリッターは数日前に戦闘をしていた相手だ。落ち着いて対処する。

するとその男は優しく微笑みながら言った。

「君のその勇姿にアグニカ・カイエルが存在を感じたよ」

「アグニカ・カイエル…ギャラルホルンを作った宇宙…いや、この世の英雄…」

その声から何かを察して落ち着いてしまった。

敵意が無い。優しく微笑みながらアグニカ・カイエルの名を出す。ギャラルホルンの

軍人。

つまりこいつは。

アグニカ・カイエルを尊敬している男なのだ。

「とりあえずこれで邪魔者は消えました。後始末は頼みますよ」

完全にリラックス仕切った状態でマクギリスという男に言う。

なんとなくこのまま地球にいる時間があるだろうが、戦争の後始末は僕の仕事じゃない。

「ああ。任せてくれたまえ。それで、名を聞きたいのだが」

「ユウ・タービン。ガンダムアンドラスのパイロットで狙撃手スナイパーをしています。」

「…… 本当に感謝する」

そう言うともクギリスは来てきた道を戻った。何故ここにきて直ぐに戻ってしまうのか。色々おかしいと思ったがその考えをとりあえず捨てた。

その顔は晴れ晴れとしていた。

第30話

地球でテイワズの狙撃手が過去のケジメを着けているその時、ロークスコロニーでは。

「お待たせ致しました。イプシロンの皆さん。私は貴殿方の言う反ギャラルホルン組織の一つ。レヴォルツ・イーオンを率いています。名前は……そうですね。レヴォルツ・イーオンからとって気軽にレヴォルツとでも及び下さい」

とある船に案内されてそこにつけばいきなり自己紹介。

真つ黒のスーツに白いネクタイをつけて第一印象は紳士といい表すのが一番良い男。周りの男達も皆ピクリとも動かずに腰を下ろしている。

反ギャラルホルン組織というと、ギャラルホルンに喧嘩を売っている組織という印象が尻尾の様にどうしてもついていくのだがこれを見る限りそうとは見えない。

その様子を見ながらアガータはレヴォルツの前に立ち自己紹介をする。

「私はイプシロン代表、アガータ・ベルクという者です。失礼ですが、率直に聞きます。貴殿方の言う、我々が欲している物とはなんでしょう？」

「……貴殿方の欲している物……それはですね」

アガートは神妙な面持ちでレヴォルツをみる。対するレヴォルツは所謂営業スマイルと呼ばれるそれで笑顔を崩さず見る。

しばらくするとレヴォルツが口を開いた。

「力。では無いでしょうか」

「力。ですか」

しかし出てきた答えは普通過ぎて頭に出てこなかった内容だった。当たり前だ。鉄華団程ではないとはいえ、こちとら戦闘を行っている。力は無くては困るものの、いくらあっても足りないと思ってしまうほどだ。

その当たり前すぎる解答に自分達の警戒の意味を考えてしまった。

しかし考えてしまえばおかしくはない。相手が複雑な事情があるとはいえ、当たり前前の選択肢をとらないとは限らない。

「（ゆーちゃんのこういう発想は誰に似たのやら……）」

忍耐力等は強いのに空回りして、悩んで、酒をガブ飲みして、愚痴を自分とアミダにして、何故か男嫌いの古い友人の事を思い出して内心苦笑してしまった。

「我々は現在のギャラルホルンの体制に不満があります」

少なからず驚いたイプシロンのメンバーにレヴォルツが言った。これも当たり前というか名前から察しがつく。

しかし力の内容からその言葉が来るといふことは。

「我々にギャラルホルンと戦えと」

「いえ、そうではありません。貴女方がギャラルホルンと対峙するのであれば此方も援助すると言うだけです。対峙しないのならば仕事の依頼も援助もしません」

まるで脅しのようにレヴォオルツは言うが元々援助も依頼も無かつたので全く脅しになつてない。

「……つまり今回貴殿方は我々がギャラルホルンと戦うというので手を貸してください。という事ですか？」

「ええ。ご令嬢を戦わせて我々だけ蓑に隠れる等我らレヴォオルツ・イーオンはしません」
ご令嬢という言い方にその場にいたイプシロンの女性は全員眉を動かしたり目を見開いたりとそれぞれの反応をする。

……正直に言つて、ユウなら（要望がない限り）絶対に言わない。エストも言いそうにない。名瀬も言いそうに見えて実は言わない。

なので驚きはするものの、良く思ったのは少なかつた。

名瀬やユウは女性を女性としか見ていない訳ではない。名瀬は居場所となり、ユウや、エストはそれを守つてきている。アミダ曰く、名瀬がもうそろそろ居場所の役目をユウや、エストに譲りたいと考えているらしいが。

それは良いとして、好奇と異質な物を見る目の二種類の目が彼を睨む。

「では、ロークスコロニーにモビルスーツモドキを送ったのも貴殿方なのですか。ギャラルホルンが相手とはいえ、A I搭載型を送るとは。そこまで悲観はしてませんよ」

「これはこれは。まさかこんなにも強いご令嬢がいるとは。申し訳ございません。此方の失礼でしたか？」

どうやらレヴォオルツは女性は前に立つて戦うべきではないという感情があるらしい。女性に優しい男でもここまで違うか。と内心驚いた。

それは置いておくとしてモビルスーツモドキを送る真意がわからない。たとえ、此方がもう死ぬかもしれない。という時で救援が頼めたとしても、こちらを傷つけるA I搭載型に頼ったりはしない。生身の人間を所望するだろう。

「貴女方の予想通り、ロークスコロニーにいた同士たちに連絡して援護をさせていただきますました。普通なら控えさせている筈ですが」

イプシロンの構成員が殆ど女性だからか、それともギャラルホルンに対抗する手段を持つているからか。それとも可能性としては少ないが名だけのイプシロンイプシロンのエースパイロット代表の事を知っているのか。もしくは全てか。

どれかはわからないが特別な待遇をとってくれているらしい。なんかコロニー側のパイロットが妙に優秀だったのはそのお陰かと隣でエストが呟くのが聞こえた。

次にレヴォルツが言った言葉はイプシロンの全員を驚かせた。

「我々の中には先祖が元ヘイムダルメンバーの男がいます。彼は……ユウ・タービンをこう言いました。トビー・メイと」

その頃そう言われた本人は。

「……終わった……のか？」

マクギリスが戻ってからやっと終わったという安心感がすると共に過去の記憶……もう自分の中では気にしていないと思っていた筈の記憶が掘り出された。

名前すら聞こえなかったがなんとなく、そんな感じがした。

僕はそいつを……殺した。

いままで何人も殺してきた。死という実感がないものが周りで起こっているのを何度も経験した。引き金を引いたときに出た弾がモビルスーツのコックピットをめちゃくちゃに抉っていった時のパイロットの成れの果ても見たことが何度もある。途中で止めることだって出来た。しかし辞めるどころか、それにのめり込んでいった。

けど今の感情はいままでどのれにも属さなかった。

初めて人を殺した時。子供ながらに家族を守りたいと決心して狙撃で殺しを援護した時。一人で、それも一撃でナノラミネートアーマーに包まれた部分を掻い潜り相手を

殺す方法を見つけて、それを実行した時。

どれとも違った。何か：… 切れてなくなつたような。

復讐心があるのかと言われればない。と答えるだろう。元々嫌な記憶ではあるがそこまで気にしていなかつたのだから。

「ゆーちゃん?」

さつきまでの怒りは何処へ行つたのか（本人に聞いたらまた出てきそうなので敢えて気づかないふりをする）シュインが此方に話し掛けてくる。

とりあえずコックピットを開きコックピットに入れていた栄養バーを口に放り込む。

美味ではなく、腹に入った気がしないが栄養は意外とあり、何故か腹持ちもそれなりにいい。

そういうことからモバイルスーツパイロットの必需品の一つのなっている。パサパサになつた口内に水を流し込む。

まるで狙撃する相手を待っている用だが全然違う。

双眼鏡で周りを見渡すがおかしな物はない。

そうしていると獅電のコックピットを開けたのかシュインが此方に寄つてきた。

「ん? シュイン姉さんどうしたの?」

「ねえ、ゆーちゃん。もう夕暮れだね… 鉄華団に戻れないんじゃないかな…」

「え？まさか…」

確かにさつき夕暮れにはなっていたがすぐに真つ暗になるとは思わなかった。というか別の事を考えてしまった為、頭になかった。

「あ」

「もう…： 夜になっちゃうね」

なんか急にシユインが顔を紅くして、髪を耳に掛けて、目をとろんとさせてゆつくりと近づき、その場から動かない事を良いことに肩に手を置いて身体を預けてた。

「シユイン姉さん…？」

急に変わるので驚きながらシユインの両肩を持つ。

上目遣いをしている目に吸い込まれそうになるのを押さえる。

まるで戦場にいないみたいだ。

「もう、お姉さんじゃ無いよ…」

あれ？何か…： 色っぽい。シユインらしく無さそうでなんかデジャヴを感じる。しかし、姉さんもそこまで痴女っぽくない筈だ。

「姉さん。お酒でも飲んだ？」

「飲んでません」

「…： 誘ってんの？」

「誘ってんの」

訂正。変態でした。それも救いようが無いほどです。

しかしあくまで此方からてを出すのを待つらしい。いままで女性に主導権を渡してきたので違和感で頭がおかしくなる。

「父さんが……僕に行ってきた。今度はお前が家族の居場所になれと……つまり、そういうこと？」

「それもあるけどね。一応ゆーちゃんの奥さんと彼女、私含めて4人もいるじゃん？その4人の居場所にはもうゆーちゃんは成れていると思うよ。後はちゃんと相手をすることかなー」

大半……というか4人なのだがそのうち2人は母性に溢れていて、手にかかる子供をあやすという感じなのだが、シユインのような変わり者もいるにはいるのだ。

「まだゆーちゃんに始めて会ったとき……覚えてるよね？正直言つて嬉しかった。私の事もよく理解してないのにそういう事を言ってくれた事が……まあ、本人は本気じゃ無かったようだけど」

そう言いながら本日二度目のジト目を受ける。あまりジト目は得意ではないため、とりあえず目を背ける。

まるでシユインが今の自分にまとりつく感情から目を背ける用になっているのか。

と思うと何故だか微笑ましく映った。

なら乗ってやろうと。なんだか心細くなると余計に塞ぎ混み無口になる自分だ。それを望んでないのならばならなければいい。そうだ。その通りだ。

「とりあえず。もう暗いし、敵がいるかもしれないから機体を隠そう。… お楽しみはその後で」

「…」

下手なウイंक（相手に合図を送るための片目のまばたき）をしてみる。

するとシュインが身体を預けるのを辞めて顔を見せようとせずそのまま機体に戻っていった。

というか向き合っているわけではないモビルスーツのコックピットから別のモビルスーツのコックピットに移れるとは… 地味に体力が自分よりあると感じてため息をつく。本当は彼も一般市民レベルいや、その上を行くのだが如何せん体力がいるモビルスーツのパイロットの中では体力はない部類に入る。細身でもある為、弱そうと言われれば弱そう。

とりあえずアンドラスに戻り森の中でも背の高い木が密集している所へと行き、モビルスーツを片膝ついた形にしてモビルスーツを降りる。後ろについてきていた獅電に乗っていたシュインもゆっくりではあるが降りてくる。

とりあえず持つている食料を集めて木に燃え移って火事にならないように注意しながら火を起こす。

その後拳銃とスナイパーライフルの細かな点検をしているとノーマルスーツ所かワンピースと下着しか着ていない。いつものシュインと比べるとだらしなない部類に入る。

「そのワンピース何処から出てきた」

「コックピットから」

「そんなもの入れているんだ」

「入れているんだ」

シュインは軽く笑い此方に手招きする。

「どうやら呼ばれているようだ。」

森に火がつかない用と気付かれないために火力を弱めに行っているからか、妙な雰囲気だ。

「仕方ないなあ…」

近づくるとシュインは自分の隣をポンポンと叩く。示されるままにシュインの側に座る。シュインの顔が赤くなっているのがわかる。多分僕もそうなっているのだろう。

まだ目の前には沢山の問題がある。でも、今はそれを考えなくても良いのかもしれない。多数の女性を愛し、愛され、守っていく。

何をしたって結局はそこにいくのだから。

シュインの頬に出来るだけ優しく触れる。シュインが酔ったような目で此方に顔を向ける。

「この前出来なかったからね」

その夜 二人は野宿した。

第31話

遠い遠い歳星にいるお父さん、お母さん。お元気ですか？僕は…

「あのなあ… ユウ… お前が言ったんだよな。歳星で集合しようって。ここは何処だ？」

姉さん達に弄られたり、抱かれたりしています。そして今

「え、えーと。地球」

イブシロンの中で珍しい男であるジョーカーに怒られています。

元気です。とはとても言えません。

「この馬鹿野郎！」

目の前に出てくる拳を受け止める術はなく、殴り飛ばされた。

視界に青い空が映る。

今日は… 快晴だ。

とりあえず重たくなっていた瞼を閉じた。

瞼を閉じた状態で一瞬であれからの事を思い出した。

あの男、ガラン・モツサを殺した後、シユインに怒られてその場で一晚野宿をするは

めとなり、その後、鉄華団地球支部へと行き、その場でラディーチェ・リロトを捕縛、並びにマクマードへの連絡をして、処罰を待つ状態にさせた。その後、ほぼラディーチェとチャド頼みだった事務の部分をイプシロンの仲間と協力しながらする。などから結局歳星に行けず、団長に仲間を地球に連れてくるように頼むこととなってしまった。やつてしまったと思いつつながら、意識を手放した。

「結局何だったの？こいつ」

自爆したせいで回収されたものの、エイハブ・リアクター以外ロクに使えないゲイレールを見ながら三日月はマクギリス・ファリドに言った。

「恐らくはアリアンロッド：。ラスタル・エリオンの息が掛かった者だ。まあ、その証拠は見事に灰となってしまったがな。部下達を尋問したが、ニユース以上の情報は出て来ない」

ガラン・モツサは用心深い男だった。

部下達に一切の核心を伝えず、情報は自身の頭と機体のソフトウェアのみで管理していたのだ。

自爆によりソフトウェアが見れなくなった事で、全ての証拠は隠滅された。

「しかし、ガンダムアンドラスのパイロットはとても興味深い存在だったよ……私は彼

にアグニカ叙事詩の主人公の姿を見た」

そういいながらマクギリスはユウという男について考えた。彼は普通ではない。戦闘中も出来るだけ中距離を保とうとしたこと以外アグニカと似ている。下手な芝居をするのではなく、圧倒的な操縦技術で乗り切る。

それにギャラルホルンの人間ではないのに、アグニカ・カイエルを知っていること。実に興味深い少年だ。

「アグニカ……？誰それ？」

「ギャラルホルンを創った、伝説の英雄さ。厄祭戦の時代、ガンダム・バエルに乗り込み世界を変えた男……それが、アグニカ・カイエルだ。では此方はもう失礼するよ。オルガ団長にも話したいことはあるからな」

そう言ってマクギリスは闇の中に消えていった。

マクギリスから視線をずらした三日月はチョコを口に放り込んだ。

アリアンロッド。そこでグレイズクルーガについて相談があつたライルがアメリカ

の元を訪れたのだが、アメリカの様子がおかしかった。

「アメリカさんよ、ちよいと相談があるんだが……」

「……」

黙って仕事をしている。前とは違う。前は心配等が頭から出てこないように仕事を事に回してきたのだ。しかし、今は仕事以外の情報を頭に入れるのを拒否している。昨日と似て非なる行為に気づいたライルはアメリカを小突く。するとその衝撃か、アメリカがきよとんとした顔で此方を見てきた。

「どうしたのですか？」

「……」
「ここで何も無い。とても言えば彼女はまた同じようになるだろう。」

「めんどくさい。彼が一番最初に抱いた感情だった。」

「お前、休んだらどうだ？ 疲れてるだろ。ほら、ここの数字も間違えてるし、ここの名前も間違えてる」

「そうパツと見て気づいた間違いをアメリカに言う。するとアメリカはそれを何秒か眺めた後、ハツとして書き直した。」

「それに、このレポートだって間違えてるだろ」

「…… すみません。すぐに直します」

彼女は出来るだけ頭に情報を入れたくない。ここまでは理解していたが、流石にこれ

程とは。そう思つて机をおもいつきり叩く。

彼女はこれまたきよんとした顔で此方を見てきた。

「だから休めつて言つてんだろ。俺とはいえ、すぐにこんなにもミスを見つけたんだぞ」

「……」

しかしアメリカは黙つてその修正にかかる。仕方がないので諸刃の剣を出すことにした。

「おじ様とやらが死んだらしいな」

「——っ！……ええ。とてもいい人でした。悲しいです」

アメリカは驚き、何かを抑え込みながらも、想像通りの答えが出てきたのでため息をつく。それがアメリカの目につき、眉が動くがアメリカは頭を降つて思考を戻そうとする。

「お前はその事をまだ、気にしているんじゃないのか？」

これも言うならば諸刃の剣だ。最悪の場合これで自己嫌悪に落ち着いたら引き上げる方法が浮かばない。しかし彼女はそこまでヤワじゃないと信じて話す。

「……はい」

アメリカが苦いコーヒーを飲んだような表情をしながら此方を見る。

悔しいのだろう。悲しいのだろう。

ああ。わかつてる。

「仕事は俺がやってやるから、お前は寝室で大泣きでもしてろ」

そう言つて強引にアメリカをたたせる。

「泣きません」

彼女は表情を変えながらも鉄の意思で保つていてた。

「何でだ？」

「泣くのは、弱い証拠ですから。ジュリエッタもまだ弱い。けど、私は強くなければならないのです。人の上に立つものとして、当然のことです」

こいつは何かを間違えている。自分は強いと。だから泣かないと。だから悲しくても仕事を完璧にこなせると。

実際今もまともに出て来ない。不完全な物を量産しているだけだ。

「はあ。確かに泣くのは弱い証拠だ。けどな。これを忘れるな。泣くのは同時にまだ強くなれる証拠でもある。自分に簡単に限界をつけるな。自分は強いと思いがけるな。お前は俺より弱い。確実に。だから強くなれ。それまで、泣いてろ。部下には伝えないでやる」

そう言うときアメリカは涙目になった。

歳をくつたら泣けなくなる？人の上に立つから泣かない？違う。泣くのは人として、

弱いものとして当然なのだから。恥じる必要はない。

「わかりました。でも、貴方に仕事を任せるのは少しプライドが許さないの……その……背中を貸してください」

「……わかった（胸じゃないのかよ……まあいつか）」

後ろ。扉の方向を向いて、机に座る。すると後ろからアメリカが抱きついてきた。そして、背中から声が聞こえた。酷く、泣いていた。

制服が涙と鼻水で汚れるだろうが、仕方がない。今後彼女が再起不能になると考えれば安いものだ。

「うっ……ううう…… おじ様…… おじ様あ…… うううう」

「泣けよ。お前はまだ強くなれる」

その頭を軽く叩きながら呟いた。

「エイミー……」

その後、鉄華団地球支部は鉄華団団長であるオルガとイプシロン代表であるユウの助言もあり、解体されることとなった。

元々鉄華団地球支部の存在意義がアブラウの軍事顧問としてだったのでアブラウ防衛軍が充分成長した事で、その存在が必要無くなった事だったので大きな理由の一

つとなつてゐる。

もう取り壊されるか、アーブラウに渡せるのかわからない応接間で団長であるオルガそして護衛なのかバルバトス、地球支部の偉い人、そして何故かユウ、アガートとギャラルホルン地球外縁軌道統制統合艦隊のマクギリス・ファリドがいた。

なにやら話があるようで。ジョーカーに殴られたのをまた起こされて連れてこられた。その間にジョーカーがどんな目にあつていたのか……なんかちゃんと謝る必要がありそうだな。と思う。悪いことをしてしまった。

とりあえずマクギリスが口を開いた。

「ガラン・モツサはラスタル・エリオンの息が掛かつてるとみて間違いない」

「またラスタルつてヤツか」

オルガがそう呟いた。ラスタル・エリオン……相当だな。あの団長さんがまたという言葉を使うとは。

「彼らを討たずしてギャラルホルンの改革はありえない。相手側が仕掛けてきたということはもはや全面対決も近いだろう。」

「全面対決？」

正気だろうか。ラスタルという事はアリアンロッド。地球外縁軌道統制統合艦隊と鉄華団を合わせてもとても倒せる相手ではない。

「これからも君たちには力を貸してもらわねば……私は君の期待したい。ユウ・タービ
ン」

「……その前に確認。良いですか？」

「ああ。構わんよ」

そう言ったのを確認して椅子の前にいたのを椅子の横に立った。アガーテが背中を擦る。それを観て、言った。

「何故、鉄華団と僕なのですか？そして、何故今なのですか？」

するとマクギリスふつとほくそ笑み、言った。

「ギャラルホルン……いやヘイムダルにはアグニカ・カイエルという象徴がいた。周りにいる天使を狩り尽くし、世界を再び平和へと導いた英雄。しかし、今はそれがない。私は君達の生きざまにアグニカ・カイエルと似たような物を感じた。君達の力を借りれば必ず成し遂げられる。ギャラルホルンのトップになることが出来る」

ギャラルホルンのトップ……

アグニカそのとマクギリス男は程遠い。それはこの中でユウのみが感じた感情だった。

「ギャラルホルンのトップですか？貴方は僕たちの力を借りてアグニカ・カイエルになるうと。そう言いたいのですか？」

「その通りだ。私はアグニカ・カイエルとなり、ギャラルホルンを改革する。そのために

力を貸してほしい」

そう言うとうウは黙りこんだまま椅子に、オルガの隣にどつしりと腰をかけた。

そして、ゆっくりと深呼吸を言った。

「貴方はアグニカ・カイエルにはなれない」

「ほう……何故だ？」

マクギリスはそれを否定せず理由を聞いてきた。

ウウは持っていたアグニカ叙事詩を開きながら言った。

「簡単です。貴方はマクギリス・フアリドだからです。確かにアグニカ・カイエルは人類の英雄です。ガンダムを駆り、モビルアーマーを駆逐して、人類の英雄になりました。そして、ギャラルホルンという組織を作りました。でも貴方がしようと、目指しているのは違う。ただ……貴方は……違う気がするんです。そんな高い場所を見たい訳じゃないって伝わってくる」

「では、君がなると言うのか？アグニカ・カイエルに。少なくとも私はその可能性を感じた」

その言葉を聞いて本を閉じる。目を閉じてゆっくりと本を膝の上に置く。

アグニカ・カイエル。幼い頃どんな書物か忘れてしまったが聞いたことのある名。しかし自分はそうではない。

「僕はアグニカ・カイエルではありません。髪も真つ黒だし、幼なじみなんていないし、親も自分も科学者でもない。政治なんて全然知らない。まず戦法だつて違うし、阿頼擲識もない。演説なんてしたことない。他にも色々ありますよ。僕とアグニカ・カイエルは違う。けど、なりたい。せめて家族だけでも救える。アグニカのような存在に」

「それは、アグニカ・カイエルのような存在であつてアグニカ・カイエルではないという事だな」

こくりと頷く。アグニカ叙事詩を持つ手を重ねて後ろのアガートが心配そうな視線を送るのを感じながら言った。

「アグニカ・カイエルはもう死んだ。ここにはいない。ならば僕たちは襟を正して死んだ後にアグニカ・カイエルに笑顔を向けられるように生きるべきだ。．．．だからギヤラルホルンの改革には賛成だけど貴方がアグニカ・カイエルになるのは賛成出来ない」

ユウの発言は言うならば我が儘だ。

マクギリス・フアリドにギヤラルホルンの全てを支配させてはならない。．．．アグニカとは言わせないと言っておきながら自身はそれに近くなりたいた言っている。

もうそれを追及していくと何もかもがわからなくなる可能性があつたのでとりあえずと言つてマクギリスの方向を向く。ユウと違い、マクギリスはあくまで大人の対応をしている。余裕だな。

ユウは一度落ち着いた後に言った。

「それで、どうして今なのですか？ グラディウスならアリアンロッドに並ぶのにそこまです。5年程度あれば十分だと思われませんが」

「足りないのだよ。5年では。それどころではない。今は一秒の時間すら惜しい。：君はモビルアーマーを知っているか？」

「当たり前だと思いつながらこくりと頷く。しかし団長や、バルバトスさんは何それ？ と首を捻る。

後ろを向きながら簡単な説明をする。

「厄祭戦にて人類の約4分の3。：およそ75%を殺した兵器です。AIで動くから対話の意味すらない上に純粹に人を殺すために存在するため厄介な存在です。厄祭戦にてアグニカ・カイエルを始めたヘイムダルに一匹残らず駆逐されたのでは？」

「へー。でチョコはそのモビルなんかどうかしたの？」

三日月はモビルアーマーについて興味があまりないようどちらかと言うとマクギリスがなぜその名を出したのかわからないようだ。事実僕もわからない。

「それが確認されたのだ。とはいってもモビルアーマーの子機であるアーラの残骸のみだがな」

「アーラ。：それでは周りにブルーマも？」

アールという物は聞いたことがない。この男は何を言っているのだろうか。

前の自分ならそういうだろう。それも仕方ない。アールというものはそれこそアグニカ叙事詩等がないと全くわからない物だ

「ブルーマもいた。しかしそれは厄祭戦からいままで回収されなかったという事が出来るためなんとも言えなかった。生産したMAがやられても、外部から電源をつければ起動するからな。しかしアールは違う。モビルアーマーの周りにしか入れないのは変わらないが、アールはマイクロウェーブを受けとるモビルアーマーを選ぶ事が出来る上にブルーマと違って数時間程度ならモビルアーマー本体から離れて行動するの事も可能だ。それに最悪エイハブ・リアクターを積んで動く事も出来る。ギャラルホルンではないがアールを見つけ、捕獲した組織があつてな。そして、そのアールには今は抜かれてるが、エイハブ・リアクターがあつた。それでわかつたのだ厄祭戦はまだ終わつてない」と

厄祭戦はまだ終わつてない。それはユウだけではなく、その場にいる、バルバトス以外を驚かせた。

「「はっ」」

ユウはとりあえずアガーテの方を向くがアガーテも意味がわからないらしく、首を捻る。

今は厄祭戦が終わってから300年以上たつのだ。なのに……まだ終わってない？ 厄祭戦は300年以上続いているということ？

「それを知っているのは？」

「セブンスターズ等、ギャラルホルンの上の人間だけだ。無論。信じるものの方が少ないがね。だから他言無用で頼む」

「当たり前だ。厄祭戦が終わってないならモビルアーマーでも、それこそガブリエルでも引き連れてこないとまだ厄祭戦の爪痕が残っている——で終わる。」

実際セブンスターズ等のギャラルホルンの上の人間もそういう解釈なのだろう。

しかし自分とアガーテは嫌な予感がしていた。

特に自分はアグニカ叙事詩を読んで知識を着けている。

「あと、質問良いですか？」

「構わんよ」

「その……アアラを捕獲したのって……反ギャラルホルン組織？」

そういうとアガーテが驚いてこちらを見る。しかし、気にせずマクギリスを睨む。すると、マクギリスは座り直して言った。

「ああ。その通りだよ。もしかしたら君は……」

「ええ。この前仲間が反ギヤラルホルン組織と接触しました。その上、アーラがロークスといわれるコロニーに運ばれて：： 勿論モビルスーツで反応はしませんでした。危険なので此方で回収しています」

そういうとマクギリスは少なからず驚いたようで目を細めて腕を組み、此方をしっかりとみてきた。

「：：それを此方に預けると言うのは？」

「ひとまず歳星に運ぶ事は決定してますが：： マクマード^代・バリストン^表に連絡してからです：： それでも良いのなら」

「頼む。我々はアーラを捕獲してないからな」

マクギリスが笑う。それが気味悪く見えて、顔を背けた。

この人が欲しいものはなんだろうか。もうわからない。彼が何を欲し此方に何を求めるのか何一つわからない。しかし、わからなくてはならない。

そんな気がした。

「とりあえず：：この話はここで止めましょう。話が脱線しましたし、何より団長さんもこんなに急じゃ話が出来ないですよね？」

「いや、俺は「ですよね？」おお・・・」

とりあえず頭に血が上っている団長を無理矢理沈めて話を引き延ばした。

しかし、マクギリスという男は彼に不安を与えた。

モビルアーマー編

第32話

「なんかあつたんですか？親父？生憎此方も仕事があるんですけど」

そう名瀬は親父という盆栽を手入れしている男に声をかけた。

マクマード・バリストン。

テイワズのトップで、鉄華団や名瀬等の男達を使う、圏外圏で一番怒らせてはいけない男と言われている。

その男を前にして、経験は何度もあるものの緊張する。それを平然に装い話すが、びしつとしないとビクビクしてもおかしくない。やはりそういう相手に「緊張した」という感想一つ持って帰ってくる息子の内の一人の男を思い浮かべて苦笑する。

すると盆栽の手入れを中断したマクマードが此方を向く。

「いや、別にそんな大切な事って訳じゃねえんだ。お前の息子の話だよ。ほら、数年前からテイワズの狙撃手とかなんとかよお」

テイワズの狙撃手。とある事件に巻き込まれた結果、射撃の才能が開花したユウの二つ名だ。

「ユウですか？」

「ああ。あいつの事なんだがよ。お前、ニュータイプって聞いたことあるか？」

ニュータイプ。直訳すると新しい型。

全く聞いたことの無い言葉に名瀬は張り巡らしている記憶を探るがそんな言葉はない。

それも仕方ない。大昔の死語なのだから。マクマードが知っている方がおかしい。

「ニュータイプ？いや、別に」

「これって物はないんだが、Xラウンダーとかあと…イノベーターとか色んな呼び名があるらしいがな」

実際Xラウンダーとイノベーターとニュータイプはそれぞれ違うのだが、情報があまりない状態なのでこういう感じになった。

しかしその全部聞き覚えが無い名瀬は首を捻る。

その感じから察したマクマードは煙草を手取る。そして、火をつけて一度息を吐いた後に言った。

「俺はな。ユウの事が気になるんだ。最近柔らかくなつたと思つたらアンドラス、アンドラス…まるで機体と話をしてるみたいにな。しかもあいつの母親…まだギヤラルホルンが嗅ぎ付けてねえのがおかしいくらいだ」

最近ユウがアンドラスといる時間が長くなったのは言うまでもない。アンドラス、アンドラスと何かを気にしているように、悪魔に取りつかれたように行動をしている。それが不安なのだ。

名瀬は拳を握りしめて、マクマードに言った。

「……あいつは命を散らしてまでユウを産んだ。諦めてユウを殺していれば自分の命は助かったのに。それでもユウを産んだ。そして、あいつは……。親父、それは何でだと思っ？」

名瀬はマクマードの顔をしっかりと見据えて言う。それは5万人の女を背負う男の目だった。

「あいつが子供を産みにくい身体だったからか？」

「それもあるだろう。けどもっと大きな理由がある。ユウに会いたかったからだ。」

そうだ。彼女は死ぬ直前言ったのだ。「産まれてきてくれて、ありがとう。大好き」と。

自身が身籠った赤子に、唯一の息子に何をどうしても会いたかったのだ。だから無理を言って出産して、そして息絶えた。

皆辛かったのだ。ユウを産むと決めた時点でもう死は確定していたのだから。

「あいつが死んで産んだユウはあいつの代わりに俺たちが守る。それがあいつにしてや

れる恩返しつて奴だ。それに親として、当然の義務だ。最初に言つてたニュータイプやらXラウンダーだか知らねえし、ユウがそれとも知らねえ。それでも親として当然の事をあいつにしてやる」

「まーまーそうかつかしなさんな。別に俺はあいつを捨てるとか言つてゐるわけじゃねえ。これはアドバイスだ。あいつはおそらく、覚醒する。もうそろそろ過去もケジメつけるんじゃないかねえのか？あいつはアグニカについて調べて始めやがった。もしかしたら、潜在的にどうすれば良いのか気付いてゐる可能性が高い。無論、本当の母親を知つてゐるとは到底思えんがな。潜在的に関わりがある程度はわかつてんじゃないかねえのか？…それで覚醒した場合あいつはお前の事を父親と言ふのだろうか」

向き合う二人はそのまま何も喋らないまま、時間だけが進んでいった。

過去のケジメ。それはユウがアンドラスに会う前、肩を撃ち抜かれた事。タービンスではその記憶があるからユウは人と認識すると撃てないというのが言われている。

父親か。確かに遺伝子でも、育児でも名瀬は父親である。それは確実だ。しかし自分の出生を知ったユウはもしかしたら自分の事を父親と呼ばなくなるのかもしれない。勘違いするのかもしれない。そう思った名瀬は、ユウの母親、自分の妻の一人を思い浮かべた。

「ありがとうな。クーデリア」

アープブラウに渡されることが決まった鉄華団地球支部の廊下で見て見たことのあるシルエットをみたユウはそのシルエットに話しかけた。

「いえ、たまたま持っていただけなので。詳しい資料はアドモス商会にあるので後日来てください」

「ああ。そうさせてもらおうよ」

そういうとクーデリアは重石を下ろしたようにふうーと息を吐く。

「それで？ 蒔苗のおじさんはどうだった？」

「元気でしたよ。外傷もそこまで無いようでした」

アグニカ、蒔苗。ここまで言ってしまうと話のネタが無くなる。家族相手だと毎日ネタが尽きないのだが、こうも外部の人間は話のネタに困る。

別に話なさい。というわけでは無いのでそれでも良いのだが。

するとクーデリアが口を開いた。

「その… 貴方は沢山の女性を妻にしているみたいですね」

その言葉にユウは少なからず驚いたが、折角きた話題だ。乗るしかない。

「まあ、父さんに比べれば少ないけど…… 4人。二人の妻に妻の候補が二人。50000とは桁が違うよ」

「では、貴方は名瀬さんよりも沢山の女性を妻にしたいと思いませんか？」

いきなりそんな疑問をぶつけてくるので頭の中にクエスチョンマークが浮かぶ。何を言っているのだろうか？この人は？何を知りたい？

そういうクーデリアは少し外を見ている。

仕方なく本心を喋る。

「いや、別に。女性は数じゃないでしょ。父さんは沢山の女性を妻にしているとも言っても、守っているだけだし。でも、僕の事を愛してくれたり、僕が守りたいと思ったら、妻にすると思う。別に女性の愛は数字じゃ語れないでしょ？」

とりあえず、本心…… 当たり前と感じている事を言った。

…… 今思えばそうとは限らない。クーデリアには、別の家族がいて、違う関わり方があって、違う当たり前があるのだから。

「…… 傲慢だったな。すまない」

そういって、クーデリアの制止を無視しその場から離れる。

さっさと歳星に帰りたい。今はそういう気分だった。

走っていると大きながたいの男に当たる。

クーデリアの事があつたとはいえ、不注意だな。と立ち上がる。

「——お前か」

「グシオンさん？」

当たつた大男は脳まで筋肉で出来てそんな男——脳筋というらしい。のグシオンのパイロットだった。

「なんかあつたのか？」

「いえ、別に。不注意でした。すみません」

頭を下げ、その場から離れようとする。するとグシオンさんが此方に話しかけてきた。

「もしお前は弟がタービンを止めたいと言つたらどうする？」

「弟？ 僕の弟なんて、だいたい文字の読み書きも出来ないようなやつらですけど。」

弟と言っても姉さんと父さんの子供。：地球にいたり、歳星にいたりする者だけだ。

だからあまり想像は出来ない。まず自他共に兄貴とか兄さんとかそういう感じではないと認められている。

まだ甘えん坊が抜けていないのかな。と苦笑する。それがグシオンにも見えていたようでグシオンが首を捻る。

「どうした？」

「あつ、いえ。兄貴とかそういう感覚僕にはわからないので。でも、もし家族がタービンを抜きたいと。それを自分の意思で言うのなら僕はそれを尊重したいです。みんなには広い世界を知って、自分で選んでほしいんです。夫も、仕事も、自分の未来も。他人の意思ではなく自分の意思で」

そう言われてグシオンさんは何処かを向いた後にゆつくりと言った。

「……そうか。ありがとう。実はな、アストンとタカキが鉄華団を辞めたいと言ってきたんだ。オルガも二人の意思を尊重して、地球での働く所を探してるってさ」

アストンにタカキ。あの男を殺してから始めてあつた鉄華団団員で、地球支部の大切な役割を担っていたらしい。自分の組織ではないので、よくわからないが。

タカキという男はフウカという妹がいて、彼女にも接触したが、精神年齢が高い。その頃の自分よりも。

その頃の自分というアンドラスに出会った辺りか。歳星に行く度に整備長に「僕のアンドラスは？」「良くなった？」等聞いて、何度も乗せてもらった。そんな今より我が儘で他人に頼ってばつかりの時期だった。

まず、学校という物を死ぬほど嫌がった自分と比べて喜んで学校に行く所が違うが。

料理等の家事が出来たりと、中々家庭的な女性だった。

アストンという男は今ここにいるグシオンさんが姓を与えた、所謂弟で、元ヒューマ

ンデブリ。

阿頼擲識を着けているからか、接近戦が強いらしい。

もしかしたら、アストンが辞めるということで兄貴として何か感じる事があつたらしい。

「もつと話をしておけばよかつたと悔やむ自分がある。まだお前がいたから生き残つてはいるが……これから俺達は火星へと行く。そしてアストンは鉄華団を辞める。それがな……」

「寂しいと?」

それで彼の考えていることがわかつた。弟……か……自分はタービンズみんなの弟!という感じで生きてきたからよくわからない。しかしタービンズを誰かが抜けるといふときの苦しきは知つている。たまにいるのだ。タービンズにはいない男と結婚するとタービンズを離れる人が。

「……ああ。」

「苦しいのはわかります。悲しいのもわかります。でも、それはアストンという人の人生ではあつて貴方ではありません。人の人生を他人が無茶苦茶にして良いなんて何処の誰が言つたのですか。かのアグニカ・カイエルも自分の人生を歪められてしまつた

ものの、他人の人生の路線を変更する際：ガンダムに乗る際には本人の意思を聞いてました」

自身のガンダムがどんなパイロットに扱われていたのか、アグニカ叙事詩を読んで知った。今の自分より若いパイロットらしい。

そのパイロットにもアグニカは此方に来るかどうかを聞いた。子供なら洗脳するのもそこまで難しくないので。

結局そのパイロットがどうなったかすら、アグニカ叙事詩には書いてなかった。というよりアンドラスに対しての記述が他のガンダムフレームに比べ、明らかに少なかった。少なすぎた。一度読んだだけでも不自然に思うほど。四大天使——ガブリエルの戦いまで生き残っているのに。

それは置いとくとして、人の人生を他人の勝手な意思で決めてはいけないのだ。

「そうか。ありがとう」

何故ありがとうなのかわからないままグシオンさんは歩いていく。

結局何かもわからないまま僕たちは歳星もしくは火星に帰った。地球支部も解体された。

とある男は昭弘・アルトランドとユウの会話を聞いていた。聞こうとした訳ではない。聞こえてしまっただけだ。

どっちでも良いとその場を離れようとしたとき、ユウが言った。

「もし家族がタービンを抜きたいと。それを自分の意思で言うのなら僕はそれを尊重したいです。みんなには広い世界を知って、自分で選んでほしいんです。夫も、仕事も、自分の未来も。他人の意思ではなく自分の意思で」

∴ その男は人に聞かれないように呟いた。

「自分の意思でか∴」

第33話

暗い部屋にてジャスレイ・ドノミコルスとその部下が話をしていた。その内容は最近テイワズの中で勢力をあげている鉄華団について。

ジャスレイ・ドノミコルス。テイワズの専務取締役で、同組織の實質ナンバー2。テイワズの直系企業の一つたる商社「JPTトラスト」の代表を務めている。そのJPTトラストは商社でありながら傭兵を雇い『自分の身は自分で守る』を実現させている。その傭兵の中にはジョーカー・クロウドもいた。

組織の幹部たちの中でも特に、保守的な考えを持つ。その為鉄華団とその兄貴分であるタービンスそして何故かイプシロンにも疎ましく思っている。

「おじぎ。アールレスを見張っている連中からの連絡です。ファリド公が火星に向かっているそうです」

「ファリド公が?」

セブンスターズのファリド公が直々に火星に向かうという事実を聞き、驚くジャスレイとその他の部下。

まだ地球で起こった名の無い戦争で起こった地球圏の混乱もまだ収まっていないの

に。

「はい。しかもギャラルホルン本部には内密のようで」

「セブンスターズがじきじきにお出ましかよ。ガキどもめ」

「しかしこれは使えるな……フアリド家当主の隠密行動……手土産には十分だ」

ジャスレイは楽しみながら部下に資料を纏めるように言つて頭の中に出来た作戦を再確認して、無理な所はないか。等を考えだした。

「いつまでもお前らの好き勝手になると思うなよ。名瀬、鉄華団」

それは結局JPTトラストと関係のあるクジャン家に送られる事となり、それをイオクが報告してイオクが無理な事を言い出したので彼女は頭を抱えることとなった。

歳星。

仕事を終えて一段落つき、また新しい仕事を……とも思っていたときに、前回の事の確認という名目でアガート、ジョーカー、エスト、シユインと話していた。

「そうか。反ギャラルホルン組織との対話もあまり意味は無し。そういうこと？アガート姉さん？」

「うん。私達の考えすぎだったみたい。彼方も『我々はギャラルホルンの現在の体制に不満がある!』とか言っても此方に何も要求しないし、ただ話たかったと言った方が納得出来るね」

しかし、僕たちが欲しいものを彼方が持っている。

そういうことを否定はしなかったらしい。しかし、それがなんのかすらわからない。

アガーテ曰く力だが、本当にそれとは思えなくなった。嘘についていなさそうでついでいそうという謎の感覚に襲われた。

「脅すにしても、どんなにか規模のかがわからなければなんとも言えない。航路をばらすとか?それとも個人情報か?もしくは新しい仕事?あーもうよくわからない!」

頭をかきむしるがそんなので答えが出るはずもなく、伏せる。ジョーカーが若干引いたように後退りする。エストに至ってはもう無視をしている。

まあ二人はこういう人間だ。そう納得しながら意識を反ギャラルホルン組織に戻す。ただ此方が大騒ぎしただけだろうか。

なんだなんだと大騒ぎして地球で自身を撃った(と思われる)相手にあつて殺して、なにやってんだか。

はあ。とため息をつく。

アンドラスとの同調がまた出来た等よいことも十分あった物の、鉄華団とか反ギャラ

ルホルン組織とかギャラルホルンとかアリアンロッドとか。めんどくさい、そして死ぬかもしれない物が浮き彫りになってしまった。アンドラスもそうだが、自身の強化を怠つてはいけないようだ。

結局振り出しに戻っている。まあいいか。

そう思つてとりあえず立ち上がる。

「結局、反ギャラルホルン組織は此方が勘違いで大きく騒いだけだ。うん。それだ。とりあえず仕事もまだでしょ？ 休もう」

それがこの状況から抜け出すのに一番良い案だった。

しかしそれは部屋に入つてきた男を見た瞬間消えそうになった。

その男は実の父、名瀬・タービンだ。

「父さん！（親父！）」

ユウとエストが同時に立ち上がる。すると名瀬は軽く笑いながら手を降つた。

後ろにはアミダをはじめ、沢山の女性がいる。

しかし、何かあつたのだろうか。急な訪問からその可能性が抜けない。

そう考えているのを察したのか名瀬が首を横に降る。

「ちげえよ。ちよつと頼みたい仕事があるんだ。とある子会社に歳星から火星に運ぶ仕

事なんだが。受けてくれるか？」

その名瀬の表情と言葉の内容から違和感を感じる。この前の地球といい、鉄華団に近づけさせているようにしか見えない。たまたま。と言えばそうなるだろう。

「ねえ、父さん」

「なんだ？」

「仕事は運ぶだけ？」

そう言うとき名瀬が軽く笑う。その嫌な微笑みを見ながら、ユウとエストは顔を見合わせた。

「ちよつと鉄華団に呼ばれていてな。なんか厄祭戦時の物とみられるブツを見つけたらしい。ガンダムと謎の機械をな。俺達にはさっぱりだからそこら辺の知識があるユウを火星に寄越そうという算段だ。それに、お嬢様の所に行けばまた資料が貰えるんだろ？」

自分が行っても良いんじゃないや。ということはある言わなかった。名瀬も馬鹿じゃない。何らか理由があるのだろう。

例えば同性との交流を深めさせたいとか。

全く……もしそうだとしたらと思うと嫌気がする。流石に名瀬もそんなこと考えないだろうがこの前にあつた鉄華団団員がほとんど男性な上にユウは自他共に異性との関わりはすぐに作れるのに、同性とは本人が嫌がる可能性が高い（エストは兄弟だから

で、ジョーカーは自身に課した課題)のでそうと考えるのも仕方ないのだ。

「わかったよ」

その後、その物資等を調べているときに届ける会社が聞いたことの無い会社で胸を撫で下ろしたのは言うまでもない。

「なあ！アメリカさんよ！休みとりたいんだが、良いか？」

アリアンロッドにて。ライル・バレルがアメリカに交渉をしていた。

交渉といえど、そこまでがつちりしたものではなくて、中高生が係りの仕事を頼み込んでいるような雰囲気だった。

「駄目です」

「何でだ？別に良いだろ？ちよいと火星に家族にあつてくるだけだ」

そう言うときアメリカは資料を見ながら勝ち誇った顔で言う。

「貴方の家族は火星にはいませんよね？貴方はコロニー生まれなのですから」

「ちっ！」

自分の生まれを調べられていたとわかって舌打ちする。一応学校は地球なのだが、火星生まれながら地球の学校へ行き、ギャラルホルンへと入る人間もたまにいる。有名な例でいうと二年前魔改造されたグレイズでアープラウの街を荒らしまくったアイン・

ダルトン三尉。

そういう事から騙せると思っていたので怒りを露にする。

というよりその情報は何処で集めたのだろう。殆どが地球産まれだと思っ
ているし（実際産まれてすぐに地球に住むこととなった。）友人やニールくらいしか言っ
てないだ。
だ。

「あーあー。上司とはいえ、自分の生まれまで調べられてたら個人情報なんてありや
ない。結局軍人にプライベートは無しですか。そうですか」

ライルは珍しくピシツとたつていたのを崩し降伏のポーズをとりながら壁にもたれ
掛かる。

「子供みたいな事を言わないでください。貴方には頼みたい事があるのです」

素晴らしいながら彼女はテキパキと仕事を片付けていく。その手腕は、以前不完全な物
を量産していた彼女と見間違えう程だった。資料に目を通して不完全な点はない。完
璧だ。それにこの速さ。正直言って事務の仕事は彼女一人で全て補える。

その様子を見ながら前の泣いていた彼女を重ねるとおかしくなって明後日の方向を
向きながら笑いを堪える。

が、すぐに思考を写して喋る。

「頼みたいこと？そんなのニールにでも誰にでも頼めるだろ？」

モビルスーツが必要な事もあまり思い付かないが、そのどれもが自分に休暇を与えないようなものではなかった。ニールだつてアメリカだつてゐる。わざわざ自分の休みを妨害する理由がないのだ。

「内容も聞かずにそんなことを言わないでください。良いですか？——イオク様を止めて下さい。あの人が急に変なことをいい始めました」

すべてを悟つたライルは強めに、そしてゆつくりと言う。

「お前がやれ。俺には無理だ」

「私こそ無理です。立場的に。貴方には立場的に意見を言えないなんて無いでしょう？」

その後子供の喧嘩のようにイオク足・クジャン手を押し付けあつた。

結局イオク・クジャンが火星に行くとか言い出したのでそれにライルがついていくという事になった。

高くついたらしい。

第34話

「……と言うわけだな。資料を見せてくれないか？」

事情を端的に説明した相手はクーデリア・藍那・バーンスタイン。少々気まずいが仕方がない。

側にはクーデリアの部下であるククビータ。そして、シュインがいる。とは言ってもシュインは物珍しそうに周りを眺めているだけだ。

とつくに仕事を済ませてアガータやジョーカー、エスト等の他のメンバーは鉄華団の方に行つて見てきて貰っている。アガータから貰った連絡だとジョーカーが鉄華団のメンバーと模擬戦を始めたようで何をやっているんだが……半笑いで止めるように言つたがおそらく無理だろう。一応モビルアーマーの近くまで接近しないようには言つておいたので大丈夫だろう。何やらかすかはわからないが。

そしてそこにはマクギリス・フアリドを呼んだとオルガが言つていた。問題を起こさなければ良いが……少し、嫌結構心配だ。

タービンスとイプシロンのメンバーにしか言つてないがおそらく鉄華団の掘当てたものはモビルアーマー。

かつて厄祭戦を引き起こした天使。

そのような事を考えるととは思わないのかクーデリアがからかってくる。

「大変ですね。貴方も」

「からかうな」

「ふふっ」

彼女が自然体でいるのにこつちが気まずい状態でいるのはおかしいのであくまで自然体で返す。あくまで、だ。

それにしても集めてもらった資料は此方でも処理するのが難しそうだ。大半がデータだが、データを受け取った端末の一つが容量が無くなるという事態が起こるほど、資料は多かった。彼女が集めるのが下手という訳ではない。むしろ凄い位だ。目を通した中でも同じ内容は省かれていて、非常に見やすい。

流石、一つの会社を背負うものだと思の前にいる女性の大きさを知る。

「此方から言っておいてなんだが良く集められたな。こんな資料見たこと無いものばかりだぞ。報酬とかも考えてなかったのに」

「報酬は大丈夫です。あくまで頼まれただけで依頼ではありませんし」

そこまで言われると金を渡そうとしていた此方が恥ずかしい。

器の大きすぎる女性を前にして少し楽しくなってきた。

そのまま資料に目を通していくと、やはりアンドラスに関する資料が異常に少なかった。全て歳星の方で集めた資料と同じだ。それを見ながらしかめ面をしたので察したクーデリアがこちらに言ってきた。

「すみません。アグニカ・カイエルの情報と共にガンダムアンドラスの情報も集めてみたのですが……情報が少なすぎて」

「ううん。大丈夫。ありがとう」

優しく言いながら頭を撫でる。するとクーデリアはその場でうつむき、ククビータは数歩後退りした後に警戒してそれを話そうとする。そして、シユインはそれを抑えると空気が変わった。

「え、えーとこれは……」

「あ、ごめん。良く姉さん相手にやってたから」

恥ずかしながらもクーデリアが口を開くとやらかしたと気付いたユウが手を離す。

クーデリアはそこまで男性との関わりだったり親密な男女関係もそこまで無い。

それに比べて女慣れしているユウは少々違うのだ。

「悪い。気を悪くしたのなら謝る」

ユウはやらかした事に気付き、少々パニックになるがすぐに落ち着かせる。ここに逃げ場などない。

「ゆーちゃん。女の人がみんな私達みたいな人だと思ったら大間違いだよ」

「だって… 5万人だよ」

そう言いながらシユインが会話をずらしてくれたことに感謝しているとアドモス商会の扉が叩かれた。

客人だろうか。しかしクーデリアが驚いている所から前々から言っていたというパターンではないだろう。

拳銃の場所を確認する。

「可笑しいわね。お客さんかしら」

「すみません。ククビータさん。確認してもらってもよろしいですか？」

「わかりました。社長」

そう言つてククビータは玄関の方へと向かう。その後ろをユウがもうひとつの拳銃をシユインに渡しながら追う。

シユインは銃のセーフティを外してクーデリアの前に拳銃を構えながら立つ。

ククビータが扉を開けるのとほぼ同時にセーフティを外して相手を見る。しかしそこにいたのは。

「なんだ？ なんてお前がいるんだ。ユウ・タービン」

「お前はっ！」

短くボサボサで手入れなどしていない金髪にそれなりの年齢であることを思わせる外見。しかしその不良みたいな感覚は外見より若く見える。もしかしたら只の老け顔なだけなのかもしれないが。

こいつとは一度モビルスーツ越し以外でもあつた事のあるためわかる。こいつは。

「ライル・バレル…」

「よお。生きてたのか」

目の前に何度も殺しあつた敵がいると知っていて余裕の表情をしてくる。二人とも拳銃のセーフティも外してトリガーにも指がかかっている。シユインに至っては狙つてすらいるのだ。

撃てないと思つているのか。確かに騒ぎも起こしてないのに撃とうとは思わない。しかし奴もギャラルホルン兵士だ。拳銃くらいは所持しているだろう。警戒すらしない。

「そんなに殺気だつな。俺はただあんたに会いたかっただけだ。クーデリア・藍那・バーンスタイン」

そう言つてライルはクーデリアの方へと歩いていく。

その背後の頭を狙つた。しかし引き金に指をかけなかつた。

安い挑発だなど呟くのが聞こえた。

その声から無理だな。と思つてわざとらしくため息をつき、拳銃をしまうがそれを気にするものはいなかった。

ライルがクーデリアを前にした瞬間、ライルが言った。

「やはりよく似ている。まさに瓜二つだな」

「え？」

そう言う彼の視界にはクーデリアの近くにうつすらと最愛の人物がいるように感じたがそれは他の人間にわかるはずもない。

「フツ。なんでもない。おい、クーデリア。お前の望みはなんだ？」

いきなり瓜二つやら望みやらかしな事を聞いてくるライル。前に会つた時はこんな人間じゃなかったはず。戦闘中もふざけたり熱くなったりはしたがこんな事を聞いてはいない。

「わ、私ですか！私は火星経済の発展と火星の独立です！」

クーデリアは2年間から掲げている目標を言う。しかしその声はどこか緊張をしているようにも感じられた。

「それは、地球と火星との差別を無くすという事で良いのか？」

そして、ライルはリラックスはしているものの暗いトーンで話す。二人とも以前とは違う。初対面だからか？いや、違うだろう。ライルはともかく、クーデリアは自分と

会ったときこのような状態にはならなかった。

「はっ」

「……わかった。俺に出来る事があるなら協力しよう。じゃあな」

そう言つてポケットに手を突っ込みそこから丁寧に畳まれている紙を置いて去つていった。まるで台風のように。

「……なんなんだ……あれは」

ほかにもしでかしているのではないかと思わせるほど何もやらずに帰っていたライルに対してユウが呟いた。

そのままクーデリアに挨拶を済ませて鉄華団の方へと行こうと思つたその瞬間だった。

急な頭痛が来た。頭がかちわれるのではないかと思われるレベルの頭痛。頭に何かが流れてくる。痛み能耐えかねてその場で膝をつく。

「ぐ……ああ……！あああ！」

「ゆーちゃん！大丈夫!?!」

「ユウ!?!」

回りの人間が大丈夫か聞いてくるがそれも頭に響かなかつた。頭に流れてくる情報を見してみる。

「なんなんだよ……アンドラス……」

相棒の名を呟きながら痛みを耐える。

口から苦しみの声が零れる。

するとクーデリアが急に後ろを向いて自身の端末を持った。

「連絡が来ました！どうやらイプシロンの人からのようです」

クーデリアが自身の端末を持ちながら教えてきた。

とりあえず痛みを顔に隠すかめながらもクーデリアの端末を見せて貰うと、そこには

「こいつか……アンドラス……」

ビームを頭上に放つ天使の画像が添付されていた。

数時間前。

「くそ！負けた！」

「強いね。あんた。あの太刀？とか言う剣を持つてなければ負けてた」

悔しそうに自分の機体を見るジョーカー。その隣で同じく自分の機体を見ながら火

星ヤシを食べる三日月・オーガス。

さつきまで、二人は模擬戦をしていたのだ。それも2回も。結果は一敗一分。どちら

とも終始五分五分の戦いで周りで見ている人はハラハラしていたので見ごたえはあったようだ。

いつの間にか出来上がった観衆はその二人を見比べていた。

「あのおっさん強くね?」「三日月さんに引き分けとか」「あれがタービンスのエース?」「あいつ三日月さんと戦う前に副団長ボロボロに倒してたぞ」「明弘さんも負けてたぞ」「マジかよ」

色々な声がかかるのを満足に思いながら火星ヤシが気になったように覗きこむ。

「何?」

三日月はそれに気になったように睨んでくる。

「いや、それはなんだと思つてな」

「食べる?」

そのまま手渡された火星ヤシと呼ばれるデーツのようなものを口に入れる。その瞬間。

「それ、たまにハズレあるんだ」

「確信犯だな。クソヤロー!」

苦い木の実に吐き気を催されながらその場を離れる。そして、落ち着いた頃に煙草を吹かし始めた。

すると遠くの方から金髪の青年が来る。その青年はジョーカーを見たその瞬間ビビったがすぐに落ち着いて三日月を呼んだ。ユージン・セブンスターク。鉄華団の副団長をやっている男だ。

「おい三日月！オルガが呼んでるぞ！」

「わかった。すぐいく」

そう言つて三日月は鉄華団のジャケットを羽織り直しユージンの方へと行く。

「お、おい！あんたも良いか？」

ユージンがビビりながらもジョーカーに話し掛けてくる。どうやら模擬戦の事がトラウマになっているらしい。

「良いぞ」

それに気づかず、ジョーカーは応じてオルガやオルガと話をしていたアガートと合流した。

そこにはマクギリス・ファリドがいた。

ユウ曰く、アグニカ・カイエルそのものになるうとしていているらしい。目指しているならそれで良いじゃないか。と言つたがユウは「何か違うんだ。あの人は」と言つて譲らなかつた。

「待たせてすまなかつた、オルガ団長」

マクギリスとその部下達が並んでいた。そこにオルガと数人の兵士がいた。

「こちらこそわざわざ来てくれて感謝している」

「会えてうれしいよ。鉄華団の諸君」

マクギリスがそう言うのと鉄華団団員は各々の答えを返す。

「君がイプシロンのパイロットだな。マクギリス・ファリドだ」

「… ああ。ジョーカー・クロウドだ」

そう言うのとマクギリスが手を出してきたので握手をする。

その後、モビルアーマーが埋まっている場所まで案内されることとなった。

モビルアーマーをみた瞬間、エストは写真を取り出した。多数の方向から取った写真を見せる。

「アガート母さん。ジョーカー。これがモビルアーマーだ。おそらくサイズとユウが言っていた情報からして天使長だろう」

モビルアーマーには階級という物がある。

強い順番から四大天使、天使長、天使という順番で一番下の天使でも、ガンダムフレームより高性能らしい。ユウ曰くアグニカ・カイエルは四大天使全てに止めをさしたらしい。

「ああ。ユウに確認をとらなければならぬけどな」

そうジョーカーが返した時だった。

「ん？なんだあれ？」

空から何かが落ちてきた。その赤い光は……モビルスーツ。それらは大切に掴んでいた大気圏突入用ボードを放棄し、モビルアーマーの近くに着地する

「不味い！」

エストが叫ぶ。モビルアーマーはモビルスーツに反応するのだ。つまりこれ以上接近されると起動してしまう可能性もある。

「動くな、マクギリス・フアリド！ 貴公に謀反の気ありと情報を受け、こうして火星まで追ってきたのだ！ 貴公がモビルアーマーを倒して七星勲章を手にし、セプンスターズ主席の座を狙っていることは分かっている！」

指揮官機らしい黄色と黒の機体が、通信を垂れ流し始めた。

モビルアーマーはまだ起動しない。反応しないギリギリか？ しかし安心出来ない今も不味い。さっさと帰って貰わないと。

「七星勲章？ なるほど。そんな誤解をしていたのか」

対するマクギリスはあくまで冷静に話し合おうとする。

LC S は……使えないか。

「ギャラルホルン全軍で対処すべきモビルアーマーの情報も隠匿し、ファリド家の私有戦艦まで使つてこうして貴様が火星へ来た事が何よりの証拠だ！ 貴様を拘束する！」

何も話を聞かない指揮官機は歩を進める。

「あいつは馬鹿なのか！モビルアーマーがあると知つておいて！」

「よせいオク！それ以上モビルスーツを近づけるんじゃない！」

エストとマクギリスが同時に叫ぶ。しかし、指揮官機は止まらなかつた。

「問答無用!! マクギリス・ファリド、覚悟！」

更に、イオク機は一步を踏み出す。

すると。

モビルアーマーに赤い光が漏れた。

ビームと呼ばれる兵器だ。

「なっ…」

天使は浮上し、ビームを吐き出しながら翼を展開した。

天使の咆哮が火星に轟いた。

その時、アンドラスの整備をしている整備兵がアンドラスを見て驚いた。何故なら。

「アンドラスの目が、急に… 光った…」

「なにこれ？」

そして、ユウは頭に衝撃を受けた。

流れ出てくる状態量の多さから鼻からは血が止めなく出てきて、床を赤く染め上げる。

「アンドラス…」

第35話

「ん？通信？」

無理言つて、先に火星におろしてマクギリスを見張るといふ仕事の合間アドモス商会に行き、クーデリアの意思を再確認。そして、マクギリスの居場所をイオクに送った。

その時嫌な予感にしたもののまさか当たつてないよな。と思ひながら自身のモビルスーツのコックピットに放り込んでいた端末を拾い上げる。するとその時にとある人間からメツセージが来ていた。

予想通り、案の定。色々な言い方が出来るだろう。しかし今はそれを考えている暇はなかつた。

イオクが何故マクギリスの居場所を聞いたのか。そして、何をしに行ったのか。そんなのどうでも良かったのだ。しかし、これは別だ。

そう差出人であるとある男の名前を見ながら思った。

「マクギリス・ファリド……何が目的だ？」

何故いままで見張つていた人間に通信を送るのだろうか。自身に求めるものといつたら……力？いや、まず今の自分はアリアンロード。敵に求めるものなどないはずだ。

すぐに通信を開くとそこには音声の代わりにひとつの暗号があった。画面に文字が出て、ノイズが酷い。

これは昔の暗号通信。もし自分以外に届いても内容が見られぬようにか？いや、ならば何故此方に届いた。資料があればこのくらいの暗号通信誰でも読み取れる。ならば「試されている。．．．とりあえず解くか」

端末に入っていたデータベースから暗号を読みといていく。時間がかかるものではない。すると

「成る程」

マクギリスの意図が読めた。しかしこれは大惨事だ。すぐに行動する必要がある。

そこにはみたことのない大型の兵器とその名前が記されていた。

モビルアーマー。人類を絶滅に追いやった天使。それが再び人間に牙を剥いていた。

「グレイズクルーガ。ライル・バレル。出ます」

すぐに機体を暗号から読み取った場所に走らせた。犠牲を減らすために。そして、必ず成し遂げなければならない。約束の為に。

自身の魂と今は亡き上司の魂が宿った機体は一本の剣を握り飛んでいった。

「おいおい。マジかよ」

モビルアーマーが短時間で回りのモビルスーツを破壊する様を見てジョーカーは絶句した。その間も鉄華団が忙しく動き回っているがあの最新鋭機を集めたセブンスターズの親衛隊が一方的に鉄クズへと変えられている時点で、その程度で何とか出来る代物ではないと察しは付いている。

採掘場がどこまでやられるのかわからないが諦めた方が良さだろう。そう思いながらエストの方を見る。

するとエストは端末を出して周りにいる全員に言った。

「モビルアーマーはおそらく、この後この辺りの人口密集地……即ち、クリュセに向かう可能性が高いです。あの場所から真っ直ぐ、バカ正直にこの峡谷を通るでしょう。その峡谷でブルーマとハシユマルを分断し、殲滅する。モビルアーマーの情報はテイワズ弟の狙撃手に聞いてます。子機であるブルーマを使うことで半永久的な活動出来る。ならば分断する必要があります。先程団長さんに見せてもらった地形データを見ると、こことここ……モビルアーマーの移動速度から考えて……」

マップを拡大しながら峡谷を叩くエスト。それを見ながら自身の端末とLCS用のドローンを打ち上げた事を確認して、鉄華団の本部から自分とエストの機体を持つてくるように連絡する。ユウが来れるかわからないがとりあえず自分達で止める必要がある

る。

大丈夫だ。ロークスコロニーで毎日模擬戦してたのは何処のどいつだ。

そう行き聞かせてエストの方を向く。そこにはユウよりうまく状況説明と指揮ができていたエストがいた。

「そして、ギャラルホルンの貴殿方がモビルアーマー本体を破壊する。異論は無いですね?」

全員が頷く。意思は固まった。

「止めるよ」

「頼むぜ。遊撃隊長」

三日月がそうオルガに言う。オルガは嬉しそうに返す。その信頼関係を築くのは難しいだろう。自分はそのままでとは言えない。

「ジョーカー。シュイン母さんからだ。ユウがおかしくなったらしい。鼻血を出したと思ったらモビルアーマー、アンドラス、アグニカ・カイエル。そのような言葉を口々に」

「あ? あいつ見てない内に何しているんだ?」

仲間の一人が変に狂ったのでひょうきんな声を出しながら目をしかめる。

「さあな。よくわからんが状況は理解出来る。モビルアーマーに対する知識も、あいつの方が上だ。本当は本体の破壊を頼みたかったが」

「ガンダムの影響か？」

「…」

エストは顎に手を押しあてながら考える。そして頭を降つて思考を戻す。

「わからん。だからこそ、あいつがいなくても成立させるんだ。この戦いを」

「わかった」

天使と戦つて勝てるのは人ならざる者のみ。

ここにそれはいるのか。

「はあ、はあくつ！あいつらの命、無駄にするわけにはいかない！」

目の前で部下が無様に殺されたイオク。その機体も左腕をやられて安定していない。

臉を閉じれば写るあのおぞましい現象。300年前の遺物になすすべもなく、潰され

ていく最新兵器。いままでの自分が否定されたように気持ち悪かった。

だからこそ、今度は手を抜かない。一撃。部下達が死んで私にくれたチャンス。

物にしない手はない！

失敗は許されない。イオクはやつとマルチロックオンシステムを使い、ハシユマルに

照準を合わせた。

「この、イオク・クジャンの裁きを受ける!!」

引き金を引き絞る。それがモビルアーマーに当たったのを確認して、イオクはすぐさま引いた。

「見たか!正義の一撃を!」

しかしその程度ではかすり傷しかつかない。そもそも距離が離れすぎているそれほど離れていると腕が良くないと一撃で殺すのは不可能だ。その腕がイオクにはなかった。ただ、それだけ。

そして、最悪の可能性は繋がる。イオクが逃げた先には農業プラントがある。天使はそれを確認した。

それにいち早く気付いた鉄華団が砲撃を開始する。しかし動じない。真つ直ぐと農業プラントへと向かう。

そこに、モビルスーツに乗ったジョーカーとエストが駆けつけた。しかし遠い。

「おかしい。進行方向が変わっている」

「鉄華団の団長からだ。正体不明機のせいでモビルアーマーの進路が変更、農業プラントへと移ったらしい」

エストが説明するがその声には怒りが籠っていた。それを察してモビルアーマーの方へと促す。しかし

「追い付かない。仕方ないが農業プラントの人は諦めてそこからの進路の変わりを見ない」と……」

エストはそう言つてすぐに端末をたたき出す。それにため息を出してあきれたジョーカーがエスト機を持ち上げる。

「な！ジョーカー！」

「いや、行くべきだ。もし間に合わなかったとしても。後悔するだろう？」

「……わかった」

今度こそおとなしくエストがついていく。しかし距離からどう考えても間に合わない。

「プラントの住人は？」

「データじゃそんなに多くない。けど、避難は……」

もう間に合わない。このままじゃ全滅だ。それだけは……

「俺が守る！」

獅電が一機、モビルアーマーの前に立ちはだかる。しかしモビルアーマーにとつてそれは道中にネズミが一匹いるくらいいどうでもよかつた。

モビルアーマーはビーム発射の為に頭部を展開する。獅電はそれを受け止めようとライオットシールドを前に出す。

「辞めろ！無駄だ！」

渓谷を渡り間に合わないと思ったエストが獅電のパイロットに叫ぶ。最悪共倒れだ。それをすぐやめろと、叫んだ。

そう。いくらシールドを出した所で、いくら前に出た所で、それはビームを弾くだけであまり意味はない。弾いたビームはそのまま農業プラントへと突っ込むだけだ。

それを戦士としての勘か、もしくはエストに言われて気付いたのか獅電のパイロットの表情は驚きそして、絶望へと変わる。

でも、遅い。全員死んで、絶望する姿が頭の中に出てきた。こうなるのか。

展開された頭部からピンク色の光が出てくる。

「うわああああ!!!」

叫んだ。しかしイプシロンも鉄華団も助けに行ける人間は誰一人いなかった。そう。その二つには。

遠くからだんだん大きくなる機影。ギヤラルホルンの機体。

空にも渓谷にも保護色が働かない所か逆に目立つだろう漆黒の機体が人間を辞めた速度で接近してくる。

「はあっ!!」

一機の戦士は天使の存在を許さなかった。

剣を掲げてそのまま投げ捨てる。それが展開された頭部に命中して方向をずらすのと、ビームが放たれるのは同時だった。

ピンク色の閃光が剣を焼き石盤を崩す。そのまま雲を切り裂いたがそれにまきこまれたのは0人。犠牲者は0。農業プラントはもちろん獅電のパイロットも救った。

「あ…誰だ？」

獅電のパイロットはその機体のパイロットを知らない。

しかしそのときにモビルアーマーに追い付いたエストとジョーカーはその存在に気付いた。

ロークスコロニーでイプシロンを追い詰めた現況。では彼は何故そして今、ここにいるのだろうか？

「ロークスコロニーの時の剣使い？」

「何故…？」

そう向けられた疑問を無視してパイロットは振り向いた。ボサボサの金髪に真っ黒の目。その目には怒りが籠められていた。

それは無能な上司だろうか。それとも…

「…大丈夫か？鉄華団の戦士」

「あ、はい」

「そうか。ならば下がれ。ここは俺に……ライル・バレルに任せてもらおう」

そう漆黒の機体――グレイズクルーガのパイロットはであるライルは自己紹介と任せると言って下がらせる。

しかしグレイズクルーガには武装がない。先程守るために投げた剣一本なのだ。

それに気付いた獅電のパイロットは止めようとする。

「待って！あんたには……武器が……」

「そんなことでは死なない」

そう言ってグレイズクルーガを接近させる。

追い付いたエストとジョーカーはそれに気づいて溪谷をかけ降りて追い付こうと、そして進路を変更しようと駆け出す。

「ジョーカー……」

「わかってる……」

お互いに声をかけながら目の前に出てきたブルーマを破壊する。エストはライフルでジョーカーが鎌。鎌という中々珍しい武器に軽く引き裂かれていくブルーマ。

そしてライルは無傷なブルーマを掴んだ。銃口を右腕で持ち、ドリルを左腕で剥ぎ取り、ブルーマの脚を掴む。

そうやって両手で支えてメイスの要領で殴る。プルーマが数機、吹き飛ばされたのを見た。

「な……」

そのままプルーマでモビルアーマーの股下に入って殴りつける。

ボロボロになればまた新しいプルーマを捕まえて殴る。

捕まえたプルーマが弾を出したり、ドリルを使ったりしたがいいなど効果がなかった。しかしモビルアーマーに効果も殆どなかった。

それでもモビルアーマーの気は充分引けた。すぐにスラスタでその場を離れる。モビルアーマーもビームでその漆黒の機影を追う。補足はされてない。

モビルアーマーはそれを倒さずクリュセの方へと向かった。

それを見たエストが一度離れてすぐに鉄華団に連絡を繋げる。

「天使が進路を修正した。前の説明通り、頼む」

「わかった！」

連絡をした後深呼吸をする。その内から湧き出る物を解き明かすのはもう誰にも出ないだろう。

「……はあ！まとめて破壊して！無茶苦茶してやるよ！」

ライフルを腰にかけて、シールドをパージ、そしてパルシザンを両手で握って突貫す

る。

モビルアーマーはまた頭部を展開してビームを放つ。漆黒のグレイズとジョーカーはともにそれを読んで下がる。しかし自分は違う。プルーマの一機に狙いをさざめてその一機に。パルチザンを引つ掻けるそのまま投げてビームを誘導した。

「たかがA Iとときに！人間様が負けるわけねえだろう！」

そのままモビルアーマーの股下でパルチザンを振り回す。

モビルアーマーの装甲の隙間にパルチザンを嵌め込み、引き剥がそうとしたその瞬間。

「うおおー！」

プルーマが飛び付いてパルチザンごと引き剥がされる。

結局なにもできず、モビルアーマーからすれ違うように遠ざかる。

「ちくつしよおー！」

「エスト！援護しろー！」

次はジョーカーが鎌を持ってプルーマの大群に突貫する。目の前に出てきたプルーマを三機まとめて鎌で切り裂く。その後追撃砲でモビルアーマーを狙うがあまり意味はない。

結局は数で押される。ならば、迂回するくらいしか方法はない。漆黒のグレイズもプ

ルーマを投げ飛ばしながら相手をしている。

そこにエストが援護射撃をしてくる。するとプルーマがまとわりつかなく、なったので鎌をブンまわりしてプルーマの脚をとり、射撃から守るための盾とする。

この間もモビルアーマーはクリュセに向かっている。

さつさと爆破が追い付けば良いのだが……それ以上考えても仕方がない。今は

「こいつを止めるだけだ！」

迂回してモビルアーマーに乗る。プルーマもモビルアーマーに乗っていくがエストと漆黒のグレイズの援護で破壊していく。

AIの位置をだいたいで決めつけてそこに鎌を振り下ろす。モビルアーマーは回りから火を吹きながら動きを停止する。そう思っていた。しかしどこから出てきたのか何機かのモビルスーツに阻まれ蹴飛ばされた。残りの二機もつばぜり合いの状態だった。

「こいつらは！」

しかしそれはモビルスーツではなかった。全身灰色の装甲に包まれて目の代わりに赤いバイザーを持つ。それぞれ違うバックパックを武装。手に持つ武装はライフルとナイフのみ。

「アーラ……まさか……こんなところにいるとはな」

漆黒のグレイズのパイロットが驚愕の声をあげる。おそらくモビルアーマーの登場と共にエイハブ・ウエーブで目覚めたのだろう。厄介なこと極まらない。

モビルアーマーの翼は各々の武器を握りながらそれぞれの敵に襲いかかった。

第36話

こちらに來たアーラは全てで五機。モビルアーマーと同時に行動するのも、アーラのみの場合もだいたい三機程度だったらしいので少々多い。

何故多いかという理由はわからないが予想するならばハシユマルの周りに他のモビルアーマーがいたと推測するのが楽だろう。

鉄華団のモビルスーツが銃で援護してくれているがそれでも止められるのは二機。残り三機のうち、一人一機づつ相手をさせられる。しかも、その二機も間を見計らえば此方に攻撃も容易に出来る。

「……っ！」

目の前にいたブルーマを掴み、アーラを殴っては見るがそんな鈍重な動き見切られない筈がない。

すぐにブルーマを破壊される。

これで7つ。先程アーラが襲ってきた影響でモビルアーマーがクリユセの方へと向かってしまった。しかも加速している。とりあえず本体の方は別の人間に任せればいいが、一つ問題がある。

武器も共に行ってしまったのだ。つまりもう武装がない。
ブルーマ

武装がないモビルスーツなんて動く鉄屑と同じ。

アーラに一方的にいたぶられるだけだ。

「頃合いか？」

背後を振り向く。イオク・クジャンを見つけていることは出来ないが仮面男とジュリエツタが搜索に行つたとアメリカからの通信が来ていたのでそこまでイオク・クジャンを探す必要はない。しかしもとより此方の目的はイオク・クジャンの見張りと無事に戻すこと。もう仕事としてやることは無いだろう。

しかし、あの男がモビルアーマーに撃つた理由はだいたいわかる。だからこそ、何らかの変化が訪れていた。

「あいつ：： 本当に部下を見る目だけは良くしやがって」

フツ。と軽く笑つてアラーの攻撃をいなす。

「エイミー：： 許して：： くれるか？」

答えは聞こえない。聞こえる筈がない。今彼女はここにいないのだから。

蹴り飛ばそうと脚を出すすがそれをかわされて逆に蹴飛ばされる。石盤に叩きつけられ、機体も限界が近い。

「：：」

使うなど言われた訳ではない。

何故、いままで使わなかったか。と言われるとあまり良い答えは出てこない。ただ、自身にセーブをかけた。ギリギリの状態にして、相手とレベルをあわせた。結局あうこととはそこまでなかったが。そして自分を、昔のライル・バレルを否定したかった。あの力に頼ることは昔と変わらないという事だから。

しかし、今でも時計の針は止まっている。過去に引つ張られて足掻いている。でも、そんなのは何も効果ない。それどころか悪い方向へと運んで行く。深い海で手足を振り回しているような物だ。

「止めよう。もう」

アーラの腕をがっしり掴み何処かへと投げる。そうやって距離を離れた後、スラスターを使いそこから離れた。

行く先はある男の元。その男は自分の力に等しい物を持っている。それを使えば現状を良くする事くらいは出来る。そう確信した。

アドモス商会を出たユウとシュインは一度民間の空港会社に預けていた自身の機体

を回収する。

相棒と獅電は二機とも両ひぎを付き、動かない。

鼻血も頭痛も治まった。それより体が軽く感じる。

アンドラスに乗るとそれはまた強く感じた。

「シユイン… 大丈夫？」

「ん？何が？」

とりあえずシユインに大丈夫かを問う。彼女らしくしていた。しかしそれが演技の様に感じた。何故かもだいたい察しがついている。

「… 何でもない」

しかしその答えを口に言う必要はない。彼女が大丈夫ならそれで良いではないか。心に余裕ができた為シユインに状況を問う。

「どう？シユイン？」

「ん？いい感じだよ？ゆーちゃんは？」

「最高さ」

いつもと違い爽やかに返す。それほど心には余裕が出来ていた。

パイロットスーツの酸素補給に関するスイッチを全てオフにする。ヘルメットは近くに置いて、栄養バーの確認。レールガンのパレルの交換は済んでいるのか。（レール

ガンはその性質上プラズマ化するため、バレルを交換式にしている。弾、スラストーのガス。スナイプモードの調整。空調の確認。現場の地形データ並びに今集まっている敵のデータ。そして、プログラムの齟齬の確認。

全てが完璧だ。出れる。

「じゃあ。行こうか」

「うん。シュイン・ヴァイプ！獅電いくよー」

シュインが飛び出す。その様子を見ながらモビルアーマーの進路の再確認をする。

同じガンダムでも、バルバトスやグシオンは危険だ。いや、違う。阿頼耶識が危険なんだ。

モビルアーマーに対して阿頼耶識を積んだガンダムで対抗しようとしたら情報量の多さで良くて失神悪くて死ぬだろう。あのアグニカ・カイエルやその仲間たちでも身体の一部を捧げたのだ。現代の人間が耐えられるとはとても思えない。

それに阿頼耶識をつけない自分が簡単な情報量で鼻血を流す程だ。いくら慣れているとはいえ、危険極まりない。

つまり、鉄華団の主戦力が戦えない。プルーマを遠距離狙撃ならなんとかなるだろうがそれほど効果があるとはとても思えない。ならば阿頼耶識の接続を解除して、モビルアーマーを撃ってもらった方が効果ある。阿頼耶識も接続しなければ変わらないのだ

から。

どちらにしろ鉄華団のエースが実力以上の力を使えない。それは大問題だ。

「となると僕が戦うのか。まあそれが願いだからね。仕方ないね。ユウ・タービン

！ガンダムアンドラスで… いきます！」

アンドラスが体を震わせながら立ち上がりスラスターを使つて飛び上がる。それは飛べない獅電を一瞬で抜かして、すぐに並んだ。

「調子良いね」

「うん。やれるよ。僕らなら」

敢えて僕ではなく、僕らならと言つた。勿論自分一人で勝てる相手だと思つてないからだ、ブルーマ、モビルアーマー、分断、鉄華団、ギヤラルホルン…問題は多々ある。スラスターを踏む足を見て、その後溪谷を滑るように行く。獲物はかつて人類を絶滅の窮地へと追いやった天使、モビルアーマー。それにどこまで対応出来るか。いや、やつて見せる必要があると見た。

こんな自分も、ガンダムのパイロットなのだから。

そう思いながらとある人物へ連絡を行った。

「ギヤラルホルンとイプシロンの応援はすぐに到達するとの事。しかし、アーラと呼ば

れるモビルアーマーの子機の乱入で部隊は困惑しています！どうしますか？団長さん？」

メリビットは端末を持ちながらすぐ近くにいる団長に話し掛ける。モビルアーマー本体もマクギリス率いるギャラルホルンとユウ率いるイプシロンでやれば三日月と昭弘を出さなくても倒せる。そう確信していたのだが、アースという子機で作戦が崩れた。

「とりあえずアースっていうやつを止めろ！モビルアーマーのサブユニットなら本体を潰せば動かねえだろ！」

そう吠えるがイオクの馬鹿な射撃とアースの乱入のせいでモビルアーマーも加速して石盤の爆破も間に合わないだろう。

そもそもアースはエイハブ・リアクターを持つことでモビルアーマーが停止しても動けるようになるのだが（という事をマクギリスとの話で聞いた筈だが忘れている）

「しかし爆破が間に合わなかったようで、足止めの戦闘でモビルスーツ隊の消耗も激しく半数は戦力になりません」

「おい！シノに連絡を取ってくれ！フラウロスで石盤を破壊する！」

フラウロスのダインスレイヴで石盤を破壊して、残りのプルーマに崩した石盤を破壊される前に破壊する。

そして、ギャラルホルンにモビルアーマー本体の破壊を任せる。

そう説明してシノに繋いだ端末に思いつき怒鳴る。

「これしかねえ！頼むぞ！シノ！」

アーラとモビルアーマーの情報はすぐにギャラルホルンの二人にも繋がった。

先程謎のモビルスーツが下がるところを見た為そのモビルスーツに気をとられていた。

「准将。アーラを確認した模様。どうやらモビルアーマーと共に目覚めたようです。現在ライル・バレルとタービンズと呼ばれる鉄華団と同じテイワズの下部組織が当たっているそうです」

「そうか。すぐにデータを取りたい。アーラの情報はギャラルホルンの方にもほとんどといっていい程ない。情報はあった方が良いからな」

しかしマクギリスは至って冷静で状況を分析している。モビルアーマーだけでも大変なのに、アーラまで出てくる。しかしアーラの情報がない今、こちらは安全圏から戦闘データをとれるというのは大きい。

モビルアーマーやアーラはパイロットをもたずAIで動いているため通常の機体より戦闘データの効果が大きい。

そう考えていると横から急にモビルスーツが来た。

「っ！ 准将！」

「またか… ん？」

そのモビルスーツは光信号で敵意はないと通信しながら両手を挙げて接近してくる。不恰好なモビルスーツだ。色は全身黒でシュヴァルベグレイズとグレイズリッターの面影を感じる。

自身の記憶を探ると一人の男が出てきた。カルタ・イシューの機体をくれと言っていた男。

「アールはどうしたのだ？ ライル・バレル三佐」

「その事で話がある。その剣… 借りるぞ」

その男はマクギリスのグレイズリッターの目の前に立つ。

そしてすぐさまグレイズリッターの腰にかけてあった剣を引き抜いた。

急なことだった為二機の動きが止まる。

「！ 貴様！」

石動が構えてライルを倒そうとするがそれに構わずライルの機体は去っていった。

遠くに撒いたと思われるアールに接近しながら。そのアールが下品な色をした機体をロックオンした事を知って。

下品な色をしたモビルスーツ。

それはピンクの色に塗られてしまったガンダムフラウロス。

変形機構を搭載しており、今その変形機構を使ってキャノン砲を使い、狙撃しようとしていた所だった。

しかし、それは乱入者によって妨げられた。

それを視認したパイロットのノルバ・シノは誰かに応援を頼もうとした。その瞬間、味わったことがないレベルの情報量で鼻から血を吹き出し、倒れた。

「なんだ！オルガー！こいつ…ブハッ！」

「おい！シノ、シノー！」

フラウロスに無理矢理乗せられたヤマギ・ギルマトンは急に鼻血を出して倒れた相棒の介抱をしようとする。しかし、アーラは射撃を使いながらフラウロスを蹴り飛ばしてひっくり返す。

「うわっ！」

ヤマギはシノの状態を確認しながらどうにかフラウロスが動けないか見る。しかし変形したフラウロスは動けない上にまた変形するまでに時間がかかる。ならばコックピットから抜け出す…これも駄目だ。彼はアーラをモビルスーツと同じ物だと考え

ているがそれでも危険だ。戦場で相棒を庇いながら安全地帯まで逃げれるとは思えない。(そもそもモビルスーツではなく、人間を追うので安全地帯等無いのだが)

「くっ！」

アーラはフラウロスを蹴り飛ばしてライフルでスラストターを破壊する。そしてナイフで肉薄しようとしたその瞬間だった。

真つ黒の何かがフラウロスを蹴飛ばした。

それはアーラのナイフを剣を交差して止めた。

そして、それは二本の剣を同時に引き抜く様に降る。するとナイフは明後日の方向へと飛んでいった。

「石動。覚えてるか。10年前の戦争。ジェラルド戦火を」

遠くでマクギリスは石動にそう言った。

第37話

何故か逃げないピンク色のモビルスーツ（？）を蹴飛ばして、アーラの前に立つ。

自身の乗るモビルスーツの両手にはそれぞれ一本ずつ剣が握られている。元々グレイズリッター用なので違和感はないが二本を扱うパイロットは少ない。当たり前だ。一人の人間が二本の剣に意識を集中させるのは難しすぎる。

でも……記憶を辿れば士官学校時代にも使っていた。その頃は何度か使う程度だったがモビルスーツパイロットとなった後は二刀流の方が多くなり気づけばギャラルホルン最強のパイロットになっていた頃には二刀流しか使わなかった。

アーラのナイフが迫る。

それを剣を交差させて止める。その交差を流れるように解くとナイフは弾き飛ばされ、地面に刺さった。

相手が普通のパイロットなら驚くだろうが相手はAI。流れるようにライフルを掴んで射撃を開始する。

しかし

「遅いっー！」

Zの字を描きながら接近していく。

その度にアールが狙いをつけるものの、剣を巧みに使って弾く。

操縦桿を引き戻してスピードを調節しながら、足元のスラストを吹かして低空飛行をして0距離まで到達する。

ライフルに利き腕ではない左の剣を刺して横に転ばせる様に丸くいなす。アールもその動きに対応してきたのか、右を封じようと左腕が出てくる。それを捻ることでギリギリ避けた。そして、空いた右の剣を使い、

亜音速でアールのコックピットに突き刺した。

いくらA-Iとはいえ、亜音速で近づいてくる剣を避けたり読み取ったりすることは不可能。結局コックピットに刺した状態でアールの残骸が微妙に上昇。そこにライフルを剥がした左の剣を横から突き刺す。

止めはこれで良いのだろうか。

そう思ったが全く動かない事から死んだと判断して剣を抜いて蹴り飛ばす。

これであと四機。そのうち二機はイプシロンに押されていて、残りの二機は鉄華団が止めているがもうそろそろフリーになるだろう。

それを確認した後、倒れているモビルスーツに触れて接触通信を開いた。

「何をしている」

「あーいや、その… 狙いがつけられなくて」

ピンク色のモビルスーツから聞こえた弱々しい声に少なからず苛立つ。

こいつは戦場に出て、モビルスーツ… それもガンダム・フレームの機体に乗る、装備も完璧。先程蹴飛ばしたのとアキラにやられていたが損傷しているようには見えない。まず損傷しているのなら狙いをつけられないではなく、装備が壊れた。と言う筈だ。なのに、こう言うことを言えるのか。

「雑魚パイロットが… 適当にでも狙って撃て！ プルーマ潰さんと近くの街が終わる！」

「うっ！」

無理矢理でもしなければならぬので強引に立てる。

どうせろくに狙いもつけてないのだろう。揺れたって構わない。

こいつの有効射程はわからないがハシユマルのスピードからして間に合わなくなる可能性が高い。

「もういい！ さっさと撃て！ 銃身が焼けるまで撃て！」

「ぐっ！ ダインスレイヴ… 発射！」

ピンク色のモビルスーツの肩に背負っていた弾が出てくる。何発か撃ってそのうち一発が石盤に辺り崩した。プルーマが巻き込まれたかどうかはわからないが例えハ

シユマルに当てようとしても決定打にはならないだろう。しかしこの火力ならハシユマルに接近でもして撃てば良いのに。そう思ったがその考えは近くにきたアーラで止められた。止めていた四機のうち、鉄華団が止めていた二機が包囲網を突破して危険と判断したこのモビルスーツと俺を殺しにきたようだ。

二機共来てしまったがああ状況でしかもこんなにも時間稼げた。民間の会社で考えるなら十分すぎる。

「流石に難しかったか……しかしここまで時間を稼いだんだ。上出来だ。鉄華団」

二本の剣を握り直してスラストーを使い真っ直ぐに突っ込んでいく。それと二機のアーラのライフルの銃口が此方に向いたのはほぼ同時だった。

鎌を大きく振ってアーラを真っ二つに使用とするがそれを横に避けてナイフで攻撃してくる。

「ちっ……ちよこまかとー！」

ナイフをいなして追撃砲で威嚇射撃をして、距離をとる。

鎌のように大型の武器はこのような相手には向いていない。ちよこまかと動き隙を見て攻撃してくるタイプのモビルスーツを相手にするとともに攻撃できない。先程

の大振りも時間をかけて作り出したチャンスだった。とはいえ、アーラの持つているナイフも0距離まで近づかなければ効果はない。ライフルも火力より装填数を重点に置いているようなので装甲が貫かれる事は無いだろう。

鎌の一番良い距離、刃にかかるギリギリまで接近する。するとそれと同時にアーラもナイフの刃を当てようと接近してくる。そのナイフを鎌で受け止める。単純な押し合いなら此方の方に分がある。押し合いをしているとアーラに蹴り飛ばされる。しかしそれはもうよんでいた。

「今だー！」

追撃砲で威嚇をする。しかし、アーラは構わずに接近してくる。追撃砲は当たった直後に少々煙が出る。エイハブウェーブがあらうと敵の細かい動きまで把握することは出来ない。

体制を整えながら鎌を大きく振り上げる。するとアーラは爆煙の中で気がついたのか下がろうとする。

「残念だなーおせえー！」

鎌をまた大きく振り落とす。しかしギリギリアーラがまた避けてしまった。しかし、終わる訳にはいかないのでそのまま重心を前にしてアーラを押しす。

アーラの腹に鎌の峰を押し当ててそのまま押し倒す。

押し倒した所にまた鎌を振り落とす。それをよんだのかアールが素早く立ち上がりライフルの引き金を引いた。

それはメインカメラに当たり、バイザーが弾け飛んだ。それでも止まらず、アールは引き金を引き続ける。その影響でメインカメラが破壊された。しかしライフルは今だメインカメラのすぐ近く。適当に撃つても当たる距離だ。

「たかがメインカメラ……くれてやる！」

間髪入れずに追撃砲でライフルを破壊。ライフルを明後日の方向に投げてナイフをもう一本出して接近してくるアールに追撃砲を適当に撃つ。勿論有効打にはならない。流石にメインカメラを破壊されたのは辛い。

でも……当たらない距離じゃない。何度も死線を潜り抜けてきて培った勘が教えてくれる。

サブカメラから追撃砲に何かが刺さった映像が来る。瞬間的に追撃砲を二つともパージした。

「どうせ残弾は少なかったんだ……それに、もう終わる！」

おもいつきり踏み込む。コックピットの中でもモビルスーツの足音とは思えない轟音が鳴り響く。

鎌を片手持ちにしてそのまま横に薙ぐ。

アールのフレームの上半身と下半身を繋ぎ止めるパーツがそのまま切断された。エグイ音がる。

下半身を失ったアールがピクピク動きながら体制を建て直そうとしているのを見て吐き気がした。そこに鎌をおもいつきり食い込ませた。

「はあ、はあ。楯突くからだ」

そして、その激戦の横では。

「はっ！邪魔アー！」

パルチザンを大きく振るい、アールを退かせる。ライフルの弾数もあと僅か。長期戦は上手い話ではない。それにアールが二機別方向へと行ってしまった。止めなければならぬ。

作戦がうまくいったとしても、モビルアーマー本体をどうにか出来るとは誰一人言っていない。元々それを止めるのが俺たちの役割だった。自身の役割を投げ出してなお、アールを逃がしてしまうとはタービンスの恥さらし他ならない。

まさか自分のけつすら拭けなくなっているとは。俺も落ちたな。

「けどなあー！」

ライフルをリアスカートに戻してライオットシールドを投げる。それをアールが避

けた所にパルチザンを叩き込む。

アーラの胸のパーツの一部がひしゃげたが、浅い。

そのまま勢いをつけて押し倒して、その横を通りすぎる。

熾烈な戦いをしている時間はない。パルチザンの伸縮機能を使い、パルチザンを伸ばす。此方の方が破壊力はある。

スラスターに頼らない高機動でアーラに近づき直ぐ様横に行つてすれ違う瞬間にパルチザンを当てる。すぐに転がる様子が見えた。

左脚を軸にしてまたほぼ直角に曲がつて接近。パルチザンを正面から叩き込み、その後上空に打ち上げる。

落下する前に機体の向きをただして当たると直後にパルチザンで加速させた。

パイロットが人間ならこれで頭でも打つて気絶位はしているはずだが相手はAI。

「立ち上がってくるとは思つてたぜ！オラー！」

立ち上がる瞬間に横からまた殴り込む。倒れたアーラに追撃を使用とするがライフで阻まれる。

それをライオットシールドを放棄したことを悔やみながらも装甲の厚い所で受ける。

その後パルチザンを回して上から叩き潰す。

相手はライフフルを放棄すると同時にナイフでパルチザンの動きを止めた。それに合

わけて左のマニピュレーターで殴るがそこにナイフが刺さる。

しかし読めている。マニピュレーターの動きを止めてナイフを掴んでそのまま勢いよく後方に放り出す。アーラはそれに大人しく従って後方に立つ。

「チエツクウ！メイトオ！」

パルチザンを引つ掻けて差し込みそのまま状態で石盤に押し付ける。その押し付けた状態でパルチザンを伸縮機能を使つて長くする。

コックピットに刺さつたどうかはわからないが動きが止まったので良しとする。

「ちつ。弟のやり方を真似る日が来るとはな。まあ戦場に立っている時間はやつの方が長いから……仕方ねえか。ジョーカー！行けるか！」

敵を殺して少々落ち着いたエストは側で動きを止めていたジョーカーに声をかける。

しかしその声にはノイズがかかつてよく聞こえない。機体は停止しているが胸部に傷が見られないため生きているだろう。トートにはアンドラスのスナイプモードのような機能はない。

「ジョーカー？」

「ザザザ……すまない。通信機器にダメージがあつたみたいだ。あとメインカメラと追撃砲がやられた。そつちは？」

まだノイズでよく聞こえないが通信機器、メインカメラ、追撃砲がやられたというの

だけはわかった。

「損傷は特に無し。残弾は少ないな、スラスタのガスは：：フルで行ったらロクに使える量はない：：な。結局補給を受けなきゃならんのは同じらしい」

「：：そ：：うか：：」

「どうやらトートの通信機器の損傷は結構深刻らしい。」

「まあ初のAI戦だから仕方ないがもう少し損傷を避けられなかったのかと思う。」

「俺は鉄華団の方で補給を受ける。お前もとりあえず推進材とメインカメラと通信機器だけでも治してこい」

「わかった」

残り少ない推進材をフルに使って鉄華団がいるところまで飛んだ。視界の端では漆黒の機体がアール二機を蹂躪していた。

何故こいつらはモビルアーマーと共にいたのだろうか。此方に乱入するまで何処で油を売っていたのか疑問は残るがそれを放棄して飛びだった。

第38話

「石動。覚えているか。10年前の戦争。ジェラルド戦火を」

「ええ。とはいっても聞いた情報だけです」

上司であるマクギリスが急に10年前の戦争の名を出すので少々驚いたが、マクギリスはこの状況に全く関係ない話をするはずがない。つまり何か意図があるのだろう。

「10年前。ギャラルホルンが管理するジェラルドコロニーというコロニーにて反ギャラルホルン組織が武装蜂起。ギャラルホルンと二度も戦った戦争ですね。そして、ギャラルホルンが一度敗れています」

厄祭戦後絶対的な力を保持して世界を纏めているギャラルホルンがその絶対的というブランドを壊された。

その時にアグニカ・カイエル、セブンスターズの意味は潰えたと証明されたのは今でも鮮明に覚えている。

「……その通りだ。ジェラルド戦火はギャラルホルンが絶対ではないという証明にもなり、反ギャラルホルン組織を増やす要因となった。しかし結果二度目の戦争でギャラルホルンは圧倒的な勝利を収めた。何故だかわかるか？」

「二機のモビルスーツが反ギャラルホルン組織の半数のモビルスーツを破壊させたと聞きますが……まさか！」

石動は自分で言いながら驚く。それを見てマクギリスの頷く。

「ジェラルド戦火以前二刀流や純白と呼ばれていたモビルスーツパイロットだ。そのパイロットの名はライル・アインスト……いや、アインストは旧姓だったな。ライル・パレル。それがジェラルド戦火の力関係を覆したパイロットの名だ」

「そこかつー！」

土煙に苛立っているとキュルルルル……と機械的な音声をモビルスーツが拾ったのでその方向に勘で姿を想像して剣を振るう。

幸い振るう直前に影が見えたのですぐに調整して弾き飛ばした。それを逃がさず蹴りを加えて横に流し、先程当てた剣とは逆の剣で足元を器用に掬う。

それに対応してアーラが飛び上がる。

その時にスラストターのガスがかかって視界が悪くなる。しかしそれをもろともせず突貫して何度も剣で切りつけてコックピット周りのナノラミネート塗装を剥がす。それと同時にコックピットの壁の隙間を広げようと剣を差し込む。そのときにライフ

ルの射撃が来た為下がる。

ある程度剥がしたので先程のアーラには目もくれず、別のライフルで撃ってきた方のアーラが接近してきたのでそれに応じる。ライフルで作られた弾幕をかわして、横から蹴りを加える。しかし体勢を崩しながらもナイフを此方に向けて倒れてきた。それを弾きく。

「スラストアーのガス……ハシユマルとの戦いのことも考えると高機動は避けるべきか……」

元々重力がある場所での戦いは得意ではない。ハシユマルの事も考えてすぐに終わらせたいという事は考えている。あの雑魚パイロットの下手な狙撃でハシユマルに何処まで効果があったのかわからないのだ。もしかしたらブルーマを一機も潰せていないのかもしれない。勿論確かめた訳ではないので全機潰せた可能性もある。しかしあの位置やハシユマルの動きから期待はしない方が良さそうだ。

その場合マトモにハシユマルと戦えるのは

「サシだと俺だけかよ！」

また機械的な音声が聞こえたので意識を戻して勘で敵の大体の位置を予測してバツクステップで避けた後に左足を軸として半回転する。その横にアーラが通りすぎたのを見た。まさに好機。

二本の剣を平行にして横に薙ごうとするがもう一機がライフルで援護射撃で止めようとする。しかしその程度の傷では止まらない。止まらない。

そのまま弾き飛ばされた0距離まで接近して軽くタックルして体勢を崩す。

それと同時に二本の剣があるか確認する。そこにはしっかりと鋼色の剣がある。

その一本一本に意識があるように感じられた。でも、それは違う。それを消し去るよ
うに左の剣を横に振るう。

その太刀筋を予測したのかアキラが体勢を崩しながらも避けた。
でも

「遅いっー！」

右の剣を右の肩に当てる。それから流れるように、自然に、予測出来ない太刀筋で左の剣を振った。右の肩の装甲が吹き飛ぶ。明後日の方向に飛んでいった装甲から避けるように姿勢を出来るだけ低くして右側に回り込む。

パイロットがもし人間なら逃がしていたのかもしれないほどその動きには無駄がなく、素早かった。

しかしアキラはAI。すぐに対応してくる。

「予想通り……！」

右の剣でコックピットの装甲を切る。しかし浅い。アキラはそれを見て下がる。

普通ならわざと浅く斬りかかったりなどしないだろう。それでも彼の動きはそれを見越したように流れていく。一回転して、エルボーを頭に入れた後に左の剣一本でナイフを弾き飛ばす。ライフルも流れるように無力化した。

アーラがエルボーの影響で左側に倒れていく。それを眺めながら右回りで後ろを回り、サッカーのスライディングの要領で脚を崩すがそれもアーラがスラストーを使って体勢をすぐに建て直す。でも、その一瞬を見逃すほど彼は甘くなかった。

すぐに二本の剣を巧みに使ってコックピットに刺す。アーラの死体と呼べば良いのだろうか。いや、この場合は残骸か。それを微妙に浮かす。

恐怖という感情がないA Iのアーラは仲間が破壊されても残骸に目もくれず此方にライフルを放ちながら接近して来る。

「——っ！——っ！——」

ライフルによって作り出された振動に耐えながら死んだ方のアーラを投げる。それを避けた瞬間すぐに懐に入って同じように、それ以上に酷い有り様へと変化させた。一機目はまだ人型とわかる形だが、これは人型ではなくダルマの回りに細長い何かがかつていた。

現状を見てやっと終わったと感じたライルは乱舞の間溜めていた息を一気に吐いた。

でも、すぐに最も大切なことに気付いた。

「あつ…：ハシユマルは…！」

不意に空を見た。

そこには自分とは真逆いや、自分が憎んでいる色に塗装された機体が遙か空を駆けていた。

ガンダム。

厄祭戦を終わらせた人類の力。英雄。

それが今自分の頭上を通りすぎて何処かに狙撃した。

「オルガ。本当に良いの？」

三日月が不機嫌そうな顔でオルガに言う。

本当なら自分が出ようとしたとき、ある男から通信が来たのは覚えている。

その男はこう言ったのだ。『モビルアーマーの相手は自分に任せてくれ』と。

勿論反対意見もあった。しかしオルガは一言「任せる」と言った。

「ああ。ちつけえのと本体はちゃんと別けたんだ。本体はあいつにやらせる。なんかあるのか？ミカ？」

「俺は別にオルガの決めたことならやる。でも……俺達が殺らなくて良いの？ さつき立場がどーとか言ってたじゃん」

オルガが心配しているのは手柄の問題だ。三日月にはその細かな内容はわからないが今のオルガや鉄華団のしがらみになることと判断して言った。

けど、オルガは「構わねえ」と一言言った。

ふと三日月は自分の愛機であるバルバトスを見た。それは彼の機体とほぼ同じ時期に活躍したらしい。

彼の機体と同じ白色の塗装が目を引く。

しかしそばにいますおやつさんもメリビットも他の案を考えている。おやつさんがオルガに言う。

「けどなあ……オルガ。加わるならまだしも一人で……そこまで上手くいくとは思えないが」

「……もしもの場合は今纏まっている団員達に任せる。ミカと昭弘は動けないらしいからな」

オルガは端末を見てハシユマルの位置を再確認する。勿論さつき言った通り、彼が負けた時の事も考えている。マクギリスの話が本当ならば負ける確率の方が高い。

「昭弘とミカは今回の作戦では出せねえ。ガンダムフレームはモビルアーマーに反応し

て阿頼耶識システムを異常にする機能が備わっているらしい。そんな状態でお前らを出せない。したとしても孤立したブルーマの破壊くらいだろう」

実はパイロットが求めなければ良いのだがモバイルアーマーの前にたつと阿頼耶識を異常にしてしまうと思つたオルガは三日月を出さないようにした。

すると今度はメリビットが言う。

「しかし……もうモバイルアーマーがクリュセに近づいています。時間は殆どありません。ブルーマの数も微量ながら増えているようですし」

「……わかつてる。おい！チャドに通信を繋げ！」

すぐに通信機を使いチャド達に後方の部隊を展開させる。それは文字通り最終手段だ。それ以上はモバイルアーマーがクリュセを破壊する様を指を加えて見ることにしか出来ない。

「チャド達が部隊を展開させるのにも時間はかかる。あいつもそれくらいは止められるだろう。けどなあ、期待はしない方が良い。ギャラルホルンの方も苦戦しているようだからな」

メリビットは勿論、おやっさんもそして三日月もオルガが任せようとした意味がわからなかった。

実際はオルガと彼は口論していたのだがそれを知らないのだから。

数十分前

「団長さん。タービンスの方から通信です」

メリビットが素晴らしいながら出してきた通信機を受けとる。タービンスということ
は名瀬だろうか。正直今はそのような連絡を受けて話をしていない場合ではないのだが。

モビルアーマーとブルーマだけでも充分困難なのにアールという乱入者の存在のせ
いで本体の破壊を請け負うメンバーが止められている。ギャラルホルンもそのせいで
マトモに動けない。

嫌々受け取った通信機を覗くとそこから若い男の声が聞こえた。自分達より明らか
に若い声だ。

「オルガ団長。僕にモビルアーマー。ハシユマルの撃破をやらせてください」

「ユウか？此方も数がいないから嬉しくはあるが、大丈夫なのか？兄貴との話とか」

その若い声からオルガは声の主を自分より若くタービンスの回線を使えるものとい
うことで名瀬の息子の内の一人である。ユウ・タービンと特定した。ユウならなぜ s o
und only にしているのか不明だが何らかの事情があると考えて先程頭に浮かん
できた考えを自分で否定する。

「父さんとの話は済ませました。ハシユマルの回りにいるモビルスーツを下げてください

い。今からモビルアーマーの本体、ハシユマルの撃破を開始します」

ユウはそう言った。確かにそう言った。聞き返そうと思ったがそれを堪えて止まる。

確かに先程ユウはモビルアーマーハシユマルを撃破を開始するから回りのモビルスーツを下げてくれと言った。

では、彼はモビルアーマー本体の破壊を一人でやれるということだろうか。流石にそれは無いだろう。ユウは此方ほど馬鹿ではない。確率が低い話には脚を突っ込まない。突っ込んだとしても予備案を用意するか関係を切る瞬間を考える。ならばおかしい。

「悪いがイプシロンとギャラルホルンの奴等もアールとか言う奴等の相手をしていて本体に攻撃は出来なさそうだ。待ってくれ、今から残りの纏まった奴らで本体を破壊する。最悪の場合テイワズから受け取った俺の獅電を出す」

アールというモビルスーツモドキは完全に此方の作戦を狂わせた。本体の破壊に貢献出来そうなパイロットに狙いをつけて殺しはできないものの、その場に押さえつけて本体の破壊にいけなくしている。とりあえずそれを除いたメンバーで本体の破壊を始めたいがそれでは確率が低いだろう。

しかしユウならもしかしたら充分本体の破壊にいい影響を出せると思う。阿頼耶識の影響でガンダムフレームの機体はハシユマルの破壊にはあまり使えない等の理由がある。だから本体の破壊を一人では無理ではあるが残ったブルーマも一人で頼めそう

だ。

後は此方に従ってくれば出来る。ユウの狙撃を上手く利用すればモビルアーマーハシユマルの撃破も夢ではない。

しかしそう思っている自分の耳に聞こえたその声は重くなっていた。

「駄目です。団員を殺すつもりですか。巻き込まれなくなかったら入らないください。狙撃の邪魔にもなりません」

「お、おい！突然どうした？急にそんなことを言い出して！」

ユウは自信家では、ないはず。今回は何かがおかしい。

「モビルアーマーにて狂わされる阿頼耶識システムも此方には搭載されていません。だから接近しても大丈夫です……」

「なら！数で当たった方が……」

「でも、阿頼耶識システムは無くてもアンドラスが反応しています。最悪の可能性も考えて兵を下からせてください」

そうだ。阿頼耶識システムをユウとそのモビルスーツであるアンドラスは搭載していないのだ。確かガンダムがモビルアーマーの影響で動けなくなるのは阿頼耶識システムが影響していると聞いたことがある。だから阿頼耶識システムの搭載していないユウは動けなくなる心配がないのだ。しかし、最悪の可能性というのが理解できない。

普通に動けるのであれば、普通に混ざることにも出来るはず。

そう考えていると通信機からまた重い声が聞こえた。

「お願いします。ガンダムは願いののです」

「願いの…？」

願いというあまり聞いたことのない言葉を急に言い出すので驚く。しかしこんな状況なので当たり前ではあるが冗談ではなく、本気だ。

「厄祭戦にて全滅の可能性があつた人類が生きたい。残したい。助けたい。護りたい。後世に思いを届けたい。そのような願いがガンダムに籠っている。ならばその願いを繋げなければならぬ。託さなければならぬ。叶えなければならぬ。ガンダムに乗るといふのは、そう言うことです。だから僕はモビルアーマーに立ち向かわなければならぬ。もしそれが無理だとしても。敵わ^叶ない願^いだとしても」

「… わかった。その願い俺達に後押しさせてくれ
「感謝します」

「だから… 力を貸してくれ。アンドラス！」

第39話 ハシユマル

「だから…力を貸してくれ。アンドラス！」

それに答えるようにアンドラスの両目が輝く。その緑色の光は真つ直ぐ伸びてゆく。

それを視認したハシユマルはビームを放つ。しかしそれを予測したユウは軽い横ステップで避けてレールガンで狙撃をする。

ハシユマルのビーム砲から火が出てくるがそこにブルーマが飛び付く。それを狙おうとした瞬間にブルーマが四機が此方に来た。

「ちっ！やらせるか！」

すぐにブルーマ四機を狙撃して蹴り飛ばす。しかし先程撃つた所はもう修復を終えたのかハシユマルが此方を向く。それに危機感を感じてバックステップをすると今さっきいた場所にビームが当たった。

いちいちそんなことをしていると罅があかないのでミサイルを二発をハシユマルに当たるか当たらないかの位置に撃つてそれがその触れたか触れてないかのギリギリをレールガンで撃ち抜く。流石に当たる物には敏感でもギリギリ当たらない物には興味

を示さない。そうでなければ脅しが有効になってしまふからだ。

ミサイルの爆風の熱でハシユマルのナノラミネート塗装を少しだけ焼く。

それを見届けてハシユマルの突進をギリギリでかわして後ろからレールガンで脚と思われるパーツを撃つ。もう一発と思つた時に目の前に迫り来るワイヤーが見えた。

キュルルルと機械的な音声を上げて先のパーツが此方を殴る。それに弾き飛ばされるがすぐに体制を整える。その体制を整えた直後來たブルーマを盾で持ち上げて投げ飛ばす。それに何かが当たつた。

「シユインー！」

一緒にここに来て、イプシロンの他メンバーの回収を任せたシユインが此方に戻ってきていた。

「私は大丈夫！ゆーちゃんはブルーマを！」

シユインには団長より早く、逃げるように言つていたので怒りたい気分になつたがとりあえずそれをおいてハシユマルに集中する。

「んー！」

また来た先にブレードの付いたワイヤーを今度は盾で弾いて、ミサイルで先程と同じように塗装を焼く。

まだ時間はかかる。ミサイルの数もそこまでない。塗装を剥がしてからの射撃はあ

まり期待は出来ない。

機械的な音をあげながら目の前に迫りくるワイヤーを避ける。通りすぎていったワイヤーに気をとられて直後横に來たハシユマルに気が付かなかった。

咄嗟に盾でガードをするが蹴り飛ばされる。盾から嫌な音がした。それを確認しようと思ったそこにブレードが引つ掛かり空中に放り出される。

「痛い」

レールガンで翼に撃って気をそらしてその間に谷に脚をつける。それを見たハシユマルがビームを放つ。

ピンク色の閃光を盾で受け止めて反らすが流石に端が溶けたようで溶けた端からポタポタと何かが地に落ちる。

塗装なのかどうかはその時頭がない。ただ、また襲ってきたブレードとワイヤーを掻い潜りながらレールガンで脚のコードを外す事で精一杯だった。

ハシユマルの右足から炎が上がり、そこにブルーマがしがみつこうと接近するがすぐに何発か貫いながらも狙撃して破壊する。

それを離れながらの流れ作業でして、ブレードを避けてワイヤーを掴もうとするが急に方向が変わったせいとか弾き飛ばされる。

何かが散った。おそらく指のパーツの破片だろう。すぐにブレードを避けて、身を屈

め、ワイヤーを見届ける。

スライディングで滑りながらも掻い潜ってレールガンの付属の刃の部分で斬るというよりは受け止めるものだが殴る。目の前の土煙を嫌がるがプルーマがしがみついていた。引きがそうとするが敵の攻撃を避けながらだと意外と当たらない。

これでもいい方だ。

「アンドラス…これが君の望んだ力？違うよね！」

レールガンで応戦するが虚しく何度も曲がったワイヤーが胴体パーツにあたってパーツを砕く。コックピットに損傷が出る前にブレードを挿んで石盤に打ち付ける。その後ブレードを引き抜こうとしているところに装甲の隙間に入る狙撃をする。

それと同時に今度は左の翼から火が出た。

プルーマよりも早く飛び付くがブレードが来た為とoriaえず離れる。

アンドラスを追うように急に曲がってブレードが来る。

時間稼ぎのためにブレードを何発か撃って時間を稼ぐ。

勿論それだんとか出来るわけではない。でも、反らすことならできた。それたブレードを避けてミサイルを放つとそこにはハシユマルはいなかった。

「――上か！」

そう。上から飛んで、いや跳んで来た。踏み潰されたら終わりなので避けて先程のミ

サイルが当たって少々崩れた石盤へと向かう。

すると素早く振り向いたハシユマルがビームを放つ。横に避けるが直ぐに首を降つて対応するので盾で受け流す。受け流されたビームが石盤をより崩す。

まだ、有効打は撃ててない。相手はAI。疲れなどないから長期戦は此方が不利だ。

「もつとーまだ隠しているんだろー！アンドラス！」

盾の塗装が剥げて破片が散る。そこにブレードが来る。今度は避けられず弾かれて、石盤に叩きつけられる。その後ハシユマルが上からのしかかる。

上に乗られたら重量的に終わる。まだ……まだ終わってない！

ミサイルを全て放つて盾をパージ。その反動とスラストで逃げ切る。

とりあえず深呼吸をするとまたブレードが来てアンドラスの肩パーツに引っ掛かる。

嫌な機械音がコックピットに響く。何か折れたのだろうか。しかしアンドラスは警報を出さない。ただ、肩の装甲と接続しているパーツの一つが弾けたのを見た。

ワイヤーがのたうちまわり、それに反するようにアンドラスは反対方向に動こうとするが直ぐにハシユマルが力で勝つて石盤に押し付ける。コックピットからギーと嫌な音がする。アンドラスの限界は近いか。

バックバックが凹んだ。でも、まだガスはある。

石盤が押し付けられた影響が崩れる。盾をパージした事を悔やみながらもそこから

逃げるとまたブレードが来て今度は腰パーツに引っ掛かった。

「ゆーちゃん!」

プルーマを駆逐していたシユインが悲痛な叫びをあげる。見るとそこにはエストやアガートもいた。

「大丈夫」

腰を強引に捻ってブレードを取る。

明後日の方向に行ったブレードを見ずにハシユマルのビームを上空に滑るようになりながら避ける。腰の後ろのパーツの一部が転げ落ちるのを見ながら戻ってきたブレードを避ける。しかしワイヤーに当たって後退する。

「こいつさえ押さえれば!」

ブレードとワイヤーをかわして上空に飛ぶ。そして狙撃をするのではなく、ハシユマルに飛び付いた。ブレードを避けて端を掴む。

「捉えた!」

それに反応してハシユマルがブレードを回して取ろうとする。アンドラスはそれに従って手を離す。するとブレードは明後日の方向へと飛んでいった。

間髪いれずに狙撃をしてビーム砲を破壊する。飛び付くプルーマを掴んで迫ってきたブレードに投げる。

ハシユマルは破壊されたビーム砲で乱射をする。それを後退しながら石盤をかけ上がって避ける。脚に負担が掛かる。警告音がコックピットから聞こえる。

しかし、アンドラスは加速した。

プルーマが付いたままのブレードを避けてワイヤーを潜り抜け、飛び付きをかわしてワイヤーと本体の接続部分の金具を狙撃で破壊する。

「はあはあはあ… もつとだ！もつと！」

ブレードが勢いよく旋回した影響で刺さっていたプルーマが火星の大地に叩きつけられる。それを避けるとハシユマルの脚が目の前に来ていた。

蹴りを入れられるのは目に見える。

「もつと！君の声を聞かせてくれ！」

しかし、ハシユマルの脚は虚空を斬った。アンドラスが左足を軸にして、一回転してかわした。

その後ブレードが襲いかかってくるがこれも、胴体のパーツを反らして避ける。

ハシユマルの再攻撃が来る前に、脚の装甲の隙間に腕を挟み込み、装甲を強引に外す。ケーブル線とオイルが弾けてアンドラスのメインカメラに掛かる。ケーブル線はそのまま地に墜ち、オイルは綺麗なまま、白いアンドラスを汚す。

ハシユマルが吠えながら飛び退く。自己犠牲のAIが見せた弱気。見捨てる気にな

ることはない。

「そうだ！僕に全てをさくらけ出して！」

そう叫ぶと同時にハシユマルのビーム砲から拡散されたビームが放たれる。所々がアンドラスに当たるが出力が足りないのか弾かれる。

「行くぞー！」

レールガンで乱射する。レールがプラズマ化するのを感じる。ろくに狙ってないが全てハシユマルの右足に命中した。装甲の隙間から火が見える。

先程までのキュルルルではなく、キューーと金属が押し付けられながら摩擦する音が聞こえる。先程の乱射で右足のパーツでも吹き飛んだのだろう。

だがアンドラスも良いとはいえない。致命傷は無いものの、スラストターのガスはもうあと少しだし、オイルが切れそうなのか関節の調子が悪い。メインカメラにも汚れがあつて見えない部分もあるし、弾を多数持ち込めるレールガンとはいえ、無限ではない。

正直に言えば危機的状況だ。

しかしただ相棒の名を呼び、狙撃手は自分の眼で狙いをつける。

厄祭戦にて明日を願った人々が願いをのせたモビルスーツ。ガンダム。ただ、単純な願い。目の前の天使の、破壊。

「アンドラス！」

その願いが届いたのかアンドラスの両目がよりいっそう強く輝く。
ただ、単純な願いだ。僕はその願いを託された。なら目の前の天使問題を駆逐片付けする必要性がある。

この天使に立ち向かうのは人ならざる者。悪魔の名を付いたそして、願いを乗せたモビルスーツ。

ガンダムフレームの機体、ASW — G—63ガンダムアンドラス。

「僕に力を貸せ！」

残り少ないスラストターのガスを吹かして両者は激突する。レールガンの乱射で左足から火が出る。

そして、動きにブレが出てきたワイヤーを避けてハシユマルにかするよう狙いをつける。ハシユマルの加速度も考えて感覚で標準をあわせて引き金を引く。すると跳弾によって後方のスラストターから火が出る。それもガスを使った時だったのでスラストター事態が爆破してハシユマルが吹き飛ばす。

初めて自分の意思ではない何かに吹き飛ばされるモビルスーツを見た。産まれて初めてだ。

それを確認するとアンドラスから情報が流れる。

「見えた！お前の心臓！」

ハシユマルのブレードを避けてレールガンを乱射する。それでビーム砲を破壊してスラストで一度離れる。

アンドラスは構えて、ユウはライフル型の狙撃用のコントローラーを出して標準を見る。

「《スナイプモード》！」

アンドラスの右目にロックオンのマークが浮き出る。

正真正銘の最後の一撃。

そして、ハシユマルは危機感を感じたのかブレードを出して撃たせないようにする。

それを飛んでかわす。元々あまり動けない《スナイプモード》だが最小限の動きは出来る。勿論通常より遅いが。

「無茶だ！やめろ！」

近くにいた。エストが叫ぶ。モビルスーツの工学について学習していたエストはスナイプモードのデメリットを叫ぶ。

「耐G無しでどうするんだよ！」

しかしそれでも止まらないアンドラスはスラストを器用に使いながらブレードを避ける。しかし中のコックピットはいつも以上、いつもの倍以上揺れる。

早くもユウは世にも珍しいモビルスーツ酔いをした。

吐き気を催しながらも狙いを外さない用にためていた空気を吐き出す。

「――！」

しかし追尾していくブレードは遂にアンドラスを弾き飛ばした。アンドラスのコックピットの壁にユウは叩きつけられる。これではアンドラスが無事でもユウが死ぬ。

しかしそれを考える必要はなかった。

これで終わりなのだから。

「――いけえ！」

引き金を引く。過剰なまでに強化された弾丸は避けようとするハシユマルの動く先に、それも装甲の隙間をぬい、A Iのメインコンピュータの部分に命中した火の粉を散らした。それと同時に出火しながらもたっていた脚が曲がり、前傾姿勢となり、火星の大地にひれ伏した。

天使は悪魔に敗北した。

「なんなんだ… あれがユウ？」

その惨劇を見た彼らの目に飛び込んだのは酔い過ぎたのかアンドラスのコックピットを開けて火星の大地に吐瀉物（糞）を吐く（与える）悪魔に気に入られた少年の姿だった。

タービンス編

第40話 引き金

「…というのが事の顛末だ。親父」

「そうかそうか。ご苦労だな。名瀬、オルガ」

歳星にある水上の邸宅にて名瀬とオルガがマクマードに事の報告をしていた。

盆栽の手入れをしながらマクマードは二人が言っていた話を整理していた。

あの子が。自分の事を親父ではなく祖父のように言っていたあいつがモバイルアーマーを。それも単機で仕留める。

いままでの働きから考えれば無理だと思ふのが普通だろう。それでもやり遂げた。やはり彼のモバイルスーツであるガンダムが関係していると見て間違いは無さそうだ。

「そうか。あいつが…か。いつの間にか母親の背中を越えちまったようじゃねえか」
顔は見せないものの、何処か悲しげな感じがするマクマードを見ながらオルガは答えた。

「母親？　そういえばユウ、自分はアミダさんから産まれてきたって…」

確かにモバイルアーマーを単機で仕留めたとなればアミダを越えた事にもなるだろう。

出来るだけ重大な損傷は控えて、軽傷だけで済ませて確率の高い方法を模索しながら戦っていたような気がする。鉄華団の中でもエースの三日月と反対の戦いかただ。

しかし名瀬はそんなオルガの顔を驚きながらも見て、言った。

「そうか。お前は聞いていないんだつたな。あいつの母親について。一応言っておくがなアミダは俺に会ってから子供が産めない身体だ。そして、ユウは俺の子。言いたいことは、わかるか？」

それはつまり、ユウがオルガに嘘を付いたということになりかねない。それなりの理由がなければ嘘をつくような内容でもない。それに彼はアミダの事を母さん。他のタービンの職員を姉さんといっていたから騙すのであればここまでやる事もない。そして、もしそうだとしたら、何故ここでボロがでているのか。しかし、もうひとつ答えがある。

それは彼がアミダが母親だと勘違い、もしくはそう教えられた可能性だ。

「ユウはアミダさんの子じゃない？でも、いや、まさか。じゃあ誰なんです？あいつの母親って？越えて言ったって、パイロットだったんですよね？」

「名瀬、俺が話そうか？」

マクマードが盆栽の手入れをしながら名瀬にいう。

「いえ、結構です。けどな、これは他の誰にも話すんじゃないぞ。特にギャラルホルンの

連中にはな。ユウはギャラルホルンの政権に対して爆弾になりかねない」
「あつ、はい」

「うまくやりやがったな、鉄華団の連中め」

「これでおやじはファリド家……いやギャラルホルンと鉄華団の関係を認めたってことになる」

「こつちもつながっただろうがよ。しかも相手はギャラルホルン最大戦力を誇るアリアンロッド艦隊。マクギリスって若造を相手にするよりよっぽどぶつといパイプだ。こつからだぜお楽しみはよお。なあ、名瀬よ」

何故こうなった。二人が歳星で自分すら知らない秘密の話をしているとはいざ知らず、今の自分の状態を顧みる。

ここは鉄華団団員なら誰もが知っている、バルバトスがあつた場所だ。そこには今アンドラスが次の戦いを待っている。アンドラスの整備をしていたエストが疲れきつた

のか隅で横になっていて（しかし起きてはいるよう）、その近くにアガーテが椅子に座つて端末を見ている。

それにしてもここは日当たりがよく、年中暖かい。バルバトスさんがお気に入りといっていたが理由がすぐにわかった。

アンドラスを撫でてしていると扉の開く音がしたので振り向くとそこにはエーコとアジーが走ってきた。

今日中には火星を出ると聞いていたが戸々で売る時間はあるようだ。

「ゆーちゃん！モビルアーマー討伐おめでとー」

「ちよっ！エーコ姉さん！」

エーコに抱きつかれる。自分がモビルアーマーを単独で討伐して数日がたった。その間自分が何をしてきたかと言うと討伐したモビルアーマー、ブルーマ、アークの回収。その解析だ。アークがどこから来たか、それはわからない。わかるのは宇宙から乱入してきた陰があるということだけ。

ということと暫く鉄華団所かイプシロンにもいなかったので、会えると思つたら全然会えなかった。というのもあると思うが締め付けが強い。

「おめでとー。ユウ。凄いいじゃないか」

「あ、ありがとうアジー姉さん」

エーコ姉さんがきつく絞めているのをおかしく見えないのか、アジー姉さんが頭を撫でる。そういえばいまままで鉄華団という男性ばかりの所にいたので寂しい思いをさせたのかもしれない。いや、確実にさせてしまった。でも、そこには同じく鉄華団の方へと行っていたラフタの姿がない。

何か事情でもあるのだろうか。

気がついたのかエストが此方に来たのでアジーがエストの方を向く。

「エストもお疲れさん。あんたもモビルアーマーを単機で破壊したんだろ？」

「俺は取り巻きの一匹だけ。ユウの方が凄いな」

アジーがエストの頭を撫でながら言う。

でも、前の情報を何もなし、しかもいきなり乱入してきたアーラと終始互角以上に戦った。

十分だ。

「でもエスト兄さんはパイロットじゃなくてメカニック志望だったのに凄いなよ。これじゃ殆どのパイロット顔負けだよ」

「そうか？ いや、そうか…。しかし、今後あいつらと合間見えたら何処までやれるか」

エストはあのギャラルホルン士官との対戦が人生ではじめての敗北だったらしく、自分達以上に悔しがつている。

そういえばあのグレイズダマシ（名前は知らないので仮）のパイロットは腕に牙が付いたグレイズのパイロットだと本能的に悟ったが本当にそうだったのだろうか。エストの細かい実力はわからないがこんなに簡単に負けたとは思えない。強く……なったのか？ なののために？

そう首を捻るがそれより大切な事を思い出してアジーに言う。

「アジー姉さん。ラフタ姉さんは？ 討伐戦でなんかあつたの？」

考えられるのはモビルアーマーに一撃やられたとか。でもそうだったらここでこうやって僕を抱えているのも、撫でているのも、反応がこないのもおかしい。

「いや、あいつなら昭弘の所に行ってるよ……あ、えーとガンダムフレイムの四本腕の奴だよ。ベージュ色でなアンドラスよりちよつと太いか？ グシオン、グシオン」

アジーが分かりやすく人ではなく、モビルスーツの特徴を言う。そこから誰なのかというのを思い出す。あのガチムチの筋肉の人だ。射撃をよくするわりには命中率は悪いがサブアームを自分の腕のように使える強さがある。それがわかると急に寂しくなってくる。そうか。もう姉さんもそういう時期なのかもしれない。

「そうか。少しだけ、寂しいね」

「もう察したのかい？ 勘が鋭いのも考えものだね」

その言葉だけで理解するアジーもアジーだな。と思いつながら頷く。

「……でも僕はラフタ姉さんを応援するよ。でもね、グシオンさんとはしつかり話した後で。もし、幸せを奪うと言うなら、鉄華団を沈めると釘も打つといてね」

「ああ。それがいい」

アジーが優しく微笑みながら頭を撫でた。それでエーコ姉さんも首の締め付けから解放してくれた。とりあえず伸びをしたあとに歩いて置いていかれていたアガーテに声をかける。

「アガーテ姉さん。そういえばクーデリア・藍那・バーンスタインは？」

「クリュセに何も無かったから通常通りだよ。でも仕事が忙しい、とは通信で来たわね。それと、ゆうちゃん」

アガーテが此方に近づいてきて、指を立てる。年甲斐もなく、そんなことしてもな。と一瞬失礼な事を考えたがそれをすぐにぶん投げて頭から消し去る。

「クーデリアさんがお礼言つてたよ。何でも依頼を受けさせたようね。此方に送金されてきたわ」

「あー。あれね。あれはクリュセ守つてやるから報酬くれっていったらくれた。何も変な事はないよ」

当然でしょ。と澄まし顔で答える。そう。何もしていないのだ。確かに依頼を受けろと言ったのは始めてではあるが。

「家の子はやっぱりおかしいよ。： そうだ。 シュインちゃんが先に宇宙に戻ったみたいだけどなんかあったの？」

ため息をわざとらしくついてアガーテが言う。

シュインは今回上手く働けなかったあの云々言っていたのと、先に宇宙に戻るといことは聞いた。理由は言ってくれなかったが。

「んーこつちも本人に聞いたけどどうまくはぐらかせられたよ。別に誰かに脅されているとかそういうもんじゃ無さそうだし。別にいつかって」

そういうとアガーテは考える顔をして、数秒後成る程と呟いた。

その表情は何処と無く不安な物を与えた。女性だからこそわかるものだろうか。

「ゆーちゃん！じゃあこつちも仕事あるから！三人はユウより先に。： っていうか今日の午後にはタービンスに戻る為に宇宙に出るんだから」

「わかってる。： じゃあ。： ほら二人とも」

そう言つて二人の背中を押す。

この三人はタービンスで少々仕事をしたあとにイプシロンに入るといふ事を名瀬ともう話している。時期的に二人になる可能性があるのだが。

「ああ。元気でな」

「えーもー！寂しすぎる！」

「大丈夫。アンドラスが直つたらすぐに宇宙に戻って仕事するから」
そう言つて背中を押す。

しかしその数週間後、この事を後悔することとなった。

それは突如きた通信。ただ、いつもなら単なる嫌がらせの筈だった。その内容は、輸送班と各地の事務所にギャラルホルンの強制捜査が入った。

ただ、それだけだ。それだけなのに。問題は肥大化していく。そして、とある大事件の引き金となる。

カラン。

グラスに中の氷が当たつていい音を出す。その音を出したのは誰なのか確かめようとはしなかった。微妙な明るさが何処か心地よい。

ここは地球のバーである。少々離れている位置から、マスターの方にグラスを付きだして「おかわり」と言う男を確認した。マスターがそれを注ぐより前に男はそこから目を背けて、隣でチビチビと酒を飲んでいる男に話しかけた。それも自分の唯一の部下なのだ。

「まさかお前も来ていたとはな。ニール」

「俺はギヤラルホルンの駐屯部隊にアリアンロッドの名で参加してただけですよ。まあ、モビルアーマーは倒せず通してしまいましたけど……しかし無人とはいえ、カメラを置くことに成功しました。そのデータは送ったものです」

そのデータは狙撃手がモビルアーマーを撃破して数時間後に送られたものだ。そこには撃破されたモビルスーツのエイハブリアクターを取る二機のアラーの姿が写っていた。

イオクを回収して火星からそそくさと逃げたあとにアメリカに連絡したあとにアリアンロッドの権限を使い映像を見たのだが、そこには人工密集地のクリュセに目のくれず宇宙何処かへと飛ぶアラー二機。別の所では宇宙へと出ていった一つの機影。一つの機影はおそらく、アラーと物資を乗せた大気圏を抜けられるロケットと思われる。

ギヤラルホルンの駐屯基地に襲ってきたアラーはバックパックが此方に襲ってきたものとは違い、大型のケースに多数のラックがあるものでそのラックにエイハブリアクターを強引に振じ込んでいた。

ここからわかるのはアラーが少なくともあの場^火に7機いたこと。アラーには少なくとも二種類以上あること。エイハブリアクターを欲しがっていること。そして、そのうち二機はあくまで人を殺すのではない、別のプログラムがあること。ただ、それだけだ。「あの人類を殺すためだけに産まれてきたモビルアーマーが人には目もくれず、エイハ

ブリアクターを盗むか。そして、それを宇宙まで運ぶとは。つまり……」
「誰かが。いえ、この場合は確定してますね。モビルアーマーがまだいる。そして、力を蓄えるためにアーラ二機にエイハブリアクターを求めた」

エイハブリアクターは今現在ギャラルホルンが権利を剥奪して自分の所でのみ使っている。他の組織が使いたいのならギャラルホルンから買うか、レストアして使うか、デブリ帯から取ってくるか、である。

しかし、それは厄祭戦後の人類のみ。厄祭戦時はそこにモビルアーマーから奪う、というのが追加されていた。

モビルアーマーはエイハブリアクターを動力源としているのはモビルスーツや、戦艦と変わらないが問題はその数だ。モビルスーツでは二個が限界なのに、モビルアーマーはその上を行く。

しかしモビルアーマーがエイハブリアクターが無くなったので人間から盗る。というのは厄祭戦の事が書かれているアグニカ叙事詩にも書いてない。理由は簡単だ。モビルアーマーが自分自身でエイハブリアクターを作れるから。いや、その言葉には語弊がある。実際はガブリエルという名のモビルアーマーがエイハブリアクターを作れる、だ。

勿論ガブリエルは厄祭戦にて撃破が確認されている。つまり、ガブリエルを失った後

のモビルアーマーが人類を殺すために力を蓄えているというのが正しい。

「実際、火星から木星の航路で幾つかの組織が行方不明になっております。おそらくアールに襲われた物かと」

「しかし、ガブリエルが死んだ後に他モビルアーマーとアールを率いていることができ、尚且つガブリエル並みの思考を持つモビルアーマー。四大天使にもそんなやついたのか？」

モビルアーマーの四大天使というのはその名の通り、四機しかいない、モビルアーマーの最高格の存在だ。他にウリエル、ミカエルが確認されたそうさ。

「神話の中で考えるとするならば他にもう一人四大天使がいる。キリスト教ではミカエル、ガブリエルと共に3人の大天使の1人と考えられて、守護天使を監督する天使とされている存在。イスラム教ではイスラーフィールとして知られていて、薬剤師、盲人、病人、精神障害、旅人の守護者。ラファエル。そいつだけが厄祭戦にて確認されていない」

実際アグニカをはじめとした厄祭戦時のパイロットはみんな化け物なので、個体名を出されずに天寿を全うしたモビルアーマーも多数いる。なので、情報が完璧とは言えない。

「ギャラルホルンでは、確認したものの、すぐに撃破したという情報がありますが」

他にも噂ですがガブリエル戦……オペレーション・ラグナロク 大天使殺しにて建設中の物を破壊したとかなん

とか。と言ってニールがチビチビ飲んでいたビールをやつと飲み干したのかグラスを置いて言う。

マスターに自分と同じカクテルを頼んで端末を見る。

そこには昔のギャラルホルンの情報がある。

「アグニカ・カイエルは現在確定されている四大天使の全てに止めをさした存在です。しかしそのアグニカでさえ、ラファエルについてよく知らないのかアグニカ叙事詩でもラファエルについて触れられていません」

「元々あれはヘイムダルのメンバーの一人が書いたものをアグニカ・カイエルが加筆修正したものだっただ。つまりヘイムダルにもそれほどの情報はないだろう」

ため息をつきながらライルはカクテルを飲み干す。

そのあと端末を見ながら過去の情報を見る。

「——駄目だ。わからない。もし、ガブリエルに値する知力を得たモビルアーマーがいたでしょう。ならばなぜ、エイハブリアクターをそちらに運ぶ？ガブリエルに値する力を持てる者。仮にガブリエル2号機とでも呼ぶか。そのガブリエル2号機になぜ、エイハブリアクターを用いればモビルアーマー、もしくはそれに準ずる者を作れるのにエイハブリアクターを作れない？」

エイハブリアクターの技術はこちらも詳しくはわからない。材料の問題なのかもし

くはまずエイハブリアクターのみ出来ないのか。どちらにしる人間側からとらなければいけない分、効率が悪い。

エイハブリアクターに必要な情報を集めるため……それも無い。だったら襲われて行方不明の者達がいんな事故か、海賊となる。

事故はそう頻繁に起こるものでも無い。それに発生予測ポイントが密集しているのもおかしい。海賊ならギャラルホルンがもう何度も巡回に行っている。ギャラルホルンが行方不明になっているものもあるにはあるがどちらにしる証拠がない。

わざわざ危険と時間と労力を起こしてまで火星へと赴き、エイハブリアクターを盗る理由が見えないのだ。

頭を悩ませていると通信が来た。

相手はアメリカだ。

「ん？どうした？アメリカさんよお？」

「地球での会議がもうすぐです。貴方方には護衛についていただきたくたいです。それと、とある企業について話が」

「……わかった。今すぐに行く」

ライルは金を置いてニールを叩き、引つ張りながら店から出た。

その様子を見て、会話を聞いた一人の男が微笑んだ。

第41話 蒼い瞳の女

それは遠い記憶。そこは火星の宇宙港の酒場だった。

実に綺麗に纏まった酒場でそこにいきなり呼び出されたときはどうしようかと思つた。

「私達を護衛に？」

「頼みたい。ちよつとでかくてやばいヤマがあつてな」

仕事仲間であるアミダがとある男に言う。そこには白い服を着た黒く長い髪を持つ長身の男がいた。話を聞く限りどうやら運び屋のようだ。本当に変わった仕事をするなど自分―アガ―テは思つた。

運び屋なんて必要ではあるがやりたくない職業だ。動いている間ずっと襲われぬのかとびくびくしなければならぬし、ずっとあつちこつち人に縛られながら動くことしか出来ない。でも今はそんな運び屋の護衛ばかりなんだけどなどと思ひ出して苦笑する。

とりあえず本当に我々に頼みたいらしい。それはありがたい。女である我々に仕事を頼む奴等なんて早々いない。しかもこつちは三人もいるのだ。とりあえず収入は確

保したい。

「いいんですか？我々は女ですよ」

「ん？どう言うことだ？」

そんなことを思っているとはいざ知らず、なにも知らない男が近づいていく。いくら近づいたって身体を預ける気は無い。それなりの男ならともかく、まだそこを見てすらいらないのに期待はされたくない。

「いいのかい？私が女だつて分かつた途端引くヤツ也多いんだけどね」

そんだけ谷間を強調すれば引く人もいるよと呟きながら酒で喉を潤す。そして、自分の胸を見て、人それぞれとか、みんな違ってみんな良い。と呟く。

首を捻りがなら意味がわからないとでも言いたげな様子で男が口を開いた。

「変わったことを言うなあ。女と男ならそりゃあ女を選ぶだろう？」

「ふふっ。なんなんですかそれ」

「あなたの方が変わってるよ」

こうして酒を飲み交わした相手が未来の旦那である。名瀬・タービんだ。

そして、今ここに居るのは名瀬・タービン、アミダ・アルカ、アガート・ベルク。そして今この場には居ないものの、仲間が一人いる。

「そういえば、お前達三人でやってるとか聞いたけどあと一人はどこ行った？」

「彼女ならモビルスーツの消耗品を買いに行つたさ。何せ男嫌いだからね。いや、間違えた。貧弱な男が大嫌いなものさ。強く自分の上をいかなないと満足しないって」

アミダが「飽きられたよな」と呟く。その小さな声を拾って「確かに」と言つた。確かにそうではある。彼女は拘りが強すぎるのだ。二重の意味で。

「そして、彼女に敵う人なんて女でも隣のアミダ位だからまだ男もいないですよ」

模擬戦としてアミダと戦う事はあつた。そのすべてにアミダが勝利をしたものの、全てがギリギリだった上に模擬戦とは思えないハイレベルの戦いをしていた。

「へえ。成る程ね」

名瀬もそれで大体を察したようでそれ以上突つ込みはしなかつた。世の中には珍しくはあるものの、男嫌いの女性はいる。それも大体が過去に汚された経歴があるものが多い。しかし彼女は違う。ただ単純に弱い者が嫌いなのだ。モビルスーツ、もしくはモビルワーカーに乗る、モビルスーツ、モビルワーカーの整備、部隊を指揮する、良い作戦を考える、発言力を持つてそれを行使する。この中のどれもが出来ない相手が嫌いなのだ。男も女も。しかし、そもそもそんなことを出来る人間は探す方が難しい。確かにこの世界は荒れてはいるものの、殺し合いを生業とするものは全体の20%辺りでそこまでではない。その中でモビルスーツを駆り相手を駆逐できる力があるものはどのくらいいるのだろうか。彼女も歳というわけではないが、この様子だと男は着かないだろ

う。

「それじゃあ頼んでも良いか。船は港につけてある。モビルスーツともう一人のお仲間さんを連れてこの時間に来てくれ」

話終えたので、男が端末を此方に見せる。これは口頭だと何処かに伝わるからだろうか。その端末には港の場所と時間のみが書いてあった。まだ信用しきっているわけではないとわかるがこちらもそうなので何も言う気はない。

「わかりました。そちらの船にはモビルスーツ二機位は乗せられるドック位あると思うので、モビルスーツ引っ張って行きます」

そう言つて男の顔を見るが表情は変わらずそのまま頷く。つまり、モビルスーツ二機位なら余裕があると言うことだ。

「頼むぜ」

その後彼と別れてモビルスーツの回収しに行った。

勿論そこには一人の女性がいた。赤いの髪に蒼い瞳。女性にしては長身で、体型は普通だろう。

アミダと会う前から傭兵稼業を営んでおり、度々誰かに連絡をする。

「あ、二人とも。どうだった？依頼者は」

「なかなかのイケメンだったよ。フリーランスの運び屋と言っていたが本当に一人だった。でも、モビルスーツ二機を運べる船持ちねー。彼処まで有能なのも珍しい」

フリーランスの傭兵ならこの世界には多数存在する。大体がギャラルホルンを辞めた者やギャラルホルンや、それに対する組織の総称である反ギャラルホルン組織、海賊に繋がりのあるものだ。

しかし、フリーランスの運び屋等早々いない。傭兵なら依頼を受けて弾薬、傷を業者に任せて置けば良い。ギャラルホルン等の大型の組織ではやってないがモビルスーツに個人データを登録しておけば奪われるなんて事にはならない。でも、運び屋は依頼を受けてそれを運び相手に渡すそのときまで一人、もしくは仲間ですらなくてはいけい。あの男の場合一人だったのでなかなか辛そうだ。

「ふん。でも、運び屋なんて大体ひよろつとしたガリガリさんか、温室育ちのポヨポヨお金持ち位でしょ」

「まあね。因みに前者だよ」

ふんつ。と言いなながら彼女はそっぽを向いた。少々遅れてモビルスーツ乗りにしては少し長い髪が続く。そしてそれが顔を追い抜く辺りで彼女は顔を戻した。

あの男は私生活がしっかりしているのでそこら辺の心配は大丈夫なのだが何せ弱い

もの嫌いの彼女が、何時になつたら受け入れるか。それは少し心配ではある。

「はつ。私を墮としたかつたらバエルでも引つ張つて来なさいや。それくらいしたら弱くても考えてあげるわよ。まあ、弱い者がそこまで出来るとは到底思えないけど」

「あはは。自信家だね。全く」

彼女も美人であるが、そこまでして彼女を求める。という男は今いない。まずそこまです求められて、要求を満たしたらもう彼女は人妻になつてゐるだろう。

「まあけど、やつてあげないとね。よわつちい男を守ればお金貰えるもんね」

そうして三人は名瀬を護衛する依頼を受けた。その後護衛して火星から目的の所まで届けた。道中の海賊も雑魚だらけでアミダと彼女がいたから名瀬の方には傷一つ無い。完璧だ。

しかし特に彼女にとっては気に入らないところもあるようだ。何かというのはとても簡単なことでその間にアミダと名瀬は仲良くなつたのでアミダがホテルに連れてかれた。ただ、それだけだ。依頼主と護衛が仲良くなるのは珍しくない。そして、男女が別れていた場合そこから発展していくのも珍しくはあるが前例は勿論あるので可能性としてはあつた筈だが、彼女は勿論、自分もそれに気づけなかつた。

別に何かおかしいことをされるといふわけではない。そこまでの男も糞野郎ではない。でも、彼女にとつては連れてかれるといふのは弱い男を認めたとしたことになり

かねないので面白くない。

そう思いながらアミダの背中を見送りもう何時間もたった。本当に何をしているんだろうかと思う。こっちはモビルスーツデッキで整備も終わって時間を潰しているというのだ。

まあ、まだ面倒なところはあるんだけどね。そう思いながら隣を向く。そこには彼女が難しい。いや、怖い表情をしていた。仕方無いのでとりあえず宥める。

「ほら。そんな表情しないの。かわいい顔が台無しだよ」

「良いの。どうせ私に靡く男なんていないのよ。だからわかるわよ。選り好みしている場合じゃないって。でもさ。あんな男の物になることはないでしょう？おかしいと思わない？」

流石にそれ以上は名瀬に失礼だが、この場にはないのを良いことに止めはしない。予想通り口々に「そんなに強いのか」とか「あり得ない」と何度も言っている。

しかし次の瞬間全く予想できない事を言った。

「まあ、子供は欲しいけどね」

「……え？」

驚きのあまり手に持っていた端末は手から離れたアホっぽい声をあげてしまった。

「いや、さつき。なんて？」

「え？子供が欲しいって言ったただけだけど。別に子供好きだし。そんなに驚くこと？」

確かに彼女は一度も子供が嫌いとは言っていない。むしろ好きだと聞いたことがある。でも、自分の子が欲しいと思うとは全く予想外だった。別に子供を産めない訳ではないが……と思いつながら彼女の腹を見る。

「う、うん。急に……そんなこと……」

「別にあんな男で良いとは言っていないわよ。弱い男は嫌い。でもね。いつか私も所帯を持つて子を育てたいなって……え？駄目？」

「いや、駄目じゃないけどこれだと妊娠所か所帯を持ってないし、それどころか男を逃がしちゃうよ……結構大変なんだよ」

彼女が子供がほしいとなると妊娠期間の間はマトモに仕事は出来ないだろう。モビルスーツに乗つての戦闘なんてもつてのほかだ。

「まあ、そんなことはないよ。次、ペインナッツ商会でしょ。あの子達の方がかわいそうよ」

ペインナッツ商会。女だらけの輸送会社で長期航路の輸送業務はいろんな事情から逃げ出した女たちの行き着く場所。しかも最悪な終着点の一つだった。安値で買ったかれ男でもはだして逃げ出すような危険な仕事ばかりを受けるはめになる。私達三人はそんなペインナッツ商会の船を進んで護衛していた。理由は簡単。女でも、受けて

くれる事と、最悪の運命を辿ることとなってしまった子達の少しでも助けになりたかったから。

しかし、その護衛の時にアミダと彼女は腹に傷をつけてしまった。特にアミダは深刻で二度と子供を孕めない状態となった。彼女も子宮周りの神経を取られて子供を孕みにくい、そして育ちにくく、産みにくい。という最悪の状態となってしまった。遠くから見送ることしか出来なかつたのが未だに悔しい。

「…仕方ないよ。こっちもあつちも命懸けで殺しあっているんだから。寧ろ生きていてラツキー。って思わないと」

「そう…だね」

彼女は「最悪子供はあなたに産んでもらうよ」と言いながらいたずらっぽい笑みを浮かべた。その赤い髪と蒼い瞳のおかげか結構綺麗に見えた。

するとアミダが急に戻ってきた。当たり前だが新しい外傷は見当たらない。その身のこなしを見てもおかしなところはない。

しかし、何処か嬉しそうなのは何故だろうか。と思っているとすぐにその答えを教えてくださいました。

「これはあくまで提案なのだがな…」

生睡を飲み込む。ここを出ていくのか。そう思いながら彼女の方を向くと少なから

ず機嫌が悪いようで何処かに当たりたいのか拳銃を弄んでいた。

そして次のアミダの台詞がタービンズを作ることとなった、

「ペインナッツ商会と合併して運び屋にならないか？」

「……は？」

そして生まれたのがタービンズ。裏社会に搾取される女たちを名義上妻にすることで救い出し、乗組員にすることで職も与える。女たちの安全を守るため後ろ盾を作るために名瀬はテイワズの傘下に入る道を選んだ。それから名瀬はペインナッツ商会等をまとめ上げてネットワーク化し、地球と木星の間を網羅する大輸送網を作り上げ、タービンズは構成員5万の巨大組織に成長した。その働きはマクマードにも認められて名瀬はテイワズで上り詰めていった。

その中にかげがえの無い大切な女性の死があつたこともその女性が最後に遺した愛する息子のことも忘れない。

今、その息子はテイワズの狙撃手と呼ばれている。

テイワズの中で狙撃手として必要不可欠になつた彼を見守る者は多かつた。それと同じく彼をタービンズごと殺そうとしている者もいるにはいる。

「大丈夫。貴女の……いや、私達の子は私達で守るから。だから安心して見守つてて」

第42話 覚悟

人の嫉妬は醜い感情だ。

人は妬み、相手を落とそうとする。

当たり前だ。自分が駆け上がるより効率的かつ、成功率が高いから。

そしてその醜い感情を振り回して他人に危害を加える場合がある。

その中の一つに復讐がある。

復讐。ある人は醜い感情、持つてはならない感情といい、ある人はとても人間らしい行動という。

黒く汚らわしいとある人は言った。それほどなのだ。

でもその人たちは知らない。憎しみはその程度で無くなるほど軽くないということ。しかし人間らしい行動といった人も知らない。対象がある程度の知識を持つ場合仕返し、妨害をされるということ。

とある男はその感情を部下達の忠義に対する恩返しとして考えた。そのために罪の無い者達が何人死のうとも関係ないと。

正義はいつだってすれ違う。

どうやら神は人の作り方を大きく間違えたようだ。

「ん？ギャラルホルンの手入れ？… またか。もういいよ。何度だつてすれば良いじゃないか」

あれから数週間たった。火星での仕事を終えて今は歳星にいて、アガーテに呼び出された。場所はフュンフ。これからタービンズ専用の小惑星を経由して、仕事をしようと考えていた所に、アガーテが大急ぎで来た。その走る姿で一瞬シュインを想像し、最近様子がおかしい彼女の事をかんがえたがすぐに思考を切り替えた。しかし、そこまでの事では無さそうだと考えた。思った時だった。

「でも…名瀬さんが雲隠れして… どうやら火星で使ったダインスレイヴっていう兵器のせいで…もしかしたら違法組織に…」

「っ！」

こんな時にそう叫びたかった。それと同時になんて叫びたい気持ちになったが喉から出てくるすんでのところで受け止めた。

此方はギャラルホルンの馬鹿のせいで起動したモバイルアーマーの討伐をしたんだ。

ダインスレイヴだってモビルアーマー相手に使ったのだから良いじゃないか。何故ギャラルホルンの尻拭いをした此方が違法組織として殺されなきゃいけないんだ。

「冗談じゃない！そんな、そんなこと……」

「落ち着いてゆーちゃん。多分内側からだよ。誰かがギャラルホルンにタービンを倒せと依頼したんだよ」

冷や汗を書いていたことを思い出しながら壁に凭れて頭を抱える。

見事に内側から刺された。相手は誰だろうか。鉄華団のオルガ団長。利点がない上に彼処まで信用していた兄貴的存在を裏切るとは到底思えない。これから鉄華団的にタービンは必要な筈だ。おそらく利用されただけ。マクマードおじいちゃん。これも同じくあれだけ認めた息子的な存在を切り捨てるとは思えない。切り捨てるとしても鉄華団が負けたりして此方に非がかかってくる時だ。タイミング的におかしい。

となれば簡単だ。相手はジャスレイ・ドノミクロス。もしくはその仲間たち。女を使つて成り上がっていると名瀬も思われてきたから恨みもあるし、名瀬が有能なお陰でジャスレイのN.O. 2という数字もだんだん雲行きが怪しくなっていくだろう。それにここでタービンを殺せば鉄華団の後ろ楯が減り簡単に切り離せてN.O. 2の力を長い間保持できる。あわよくばマクマードが死んだらN.O. 1にだってなれる。

「見事な様だよ。全くN.O. 2の数字も伊達じゃないか」

「女の使い方が荒いとは言ってもそれで場数だって踏んでいるしテイワズをいい方向に導いたのだって事実。おそらくその地位が怪しくなったから固めておきたいんでしよう」

でも、そんな理由で殺されてたまるか。悪戯程度に押さえつける事もできないのか。とイライラしながら歯軋りする。

「もしタービンスが違法組織となったら私達だって無事ですむかどうか。どちらにしろダーリンは…」

殺される。そう言おうとした。しかしそれよりも前に狙撃手は動き出した。今は一秒一秒が惜しい。その一秒で戦場はがらりと急変する。そう。かの英雄アグニカ・カイエルが戦場に出た時だってそうだった。

バエルに乗った英雄がふらりと寄るだけで軍人の指揮が代わり勝った戦いも多いと聞く。同時に大型、例えば天使長等のモビルアーマーの討伐に必死なのに他の戦場にふらりと寄ることなどあるのだろうか。とも思ったが。

端末を立ち上げてイプシロンの仲間にに連絡をするようにアガータに言う。

「アガータ姉さん。今から一時間後にイプシロンメンバーをフュンフにいくように言つて。あと父さんにも連絡」

その間にスーツを引っ張って身嗜みを最低限整える。ネクタイを引っ張り無茶ぶり

に首に縛る。

洗ったばっか：… とうかあまり使わない筈のスーツがしわしわになっていたが気にせず、羽織る。

「モバイルスーツ隊にはノーマルスーツの用意。整備班もモバイルスーツ整備。使えるものはなんでも使つて。あとオペレーターに父さんと通信をとつて場所と状況を聞いて。おそらく場所は小惑星だと思うけど。フロンフもすぐ出せるようにして！それと！先に鉄華団に通信して！非戦闘員を保護してもらうように依頼して！」

「何するの!？」

「おじいちゃんに許可を貰いに行く！許可が取れたらすぐに動けるようにして。モバイルスーツにはブースターも着けて先行できるように！」

まだ普段着やノーマルスーツの方が良いのでは、と思われるほど適当にスーツを着てマクマードの元へと急ぐ。

髪もボサボサ。髪が長くなっているせいでより目立つ。スーツも洗つてアイロンをしてあるが肩の位置がずれていたり良いとは言えない。ネクタイに至っては結びかけたが全然違う。しかし、そんなことに気を使うほど此方に余裕はなかった。

「なかなかいい仕事をしてくれるじゃないのあの坊ちゃんはよお。タービンをギョラ

ルホルンを前にしちやひとたまりもねえだろ」

「おやじはどう出ますかね？もしいろいろとバレたら…」

「そこまでおやじもバカじゃねえ。死んだ息子にや老人介護はしてもらえねえからな。かわいい息子が誰か分かっていても結局はそこに頼るしかねえのよ。それよりあいつの仕事も終わったようだから引き戻してやれ。本当の家族の場所にさ」

その頃マクマードは名瀬と連絡をしていた。名瀬から最後の話ということだ。

「おやじ、盃を返させてくれ。タービンズを解散する。そのうえでダメな息子の最後の頼み…」

タービンズの解散。それは即ちいままで名瀬が守ってきた人々が野に晒されるといふことだ。

まだユウもエストも全員の管理が出来るようにはなっていない。まだ危険だ。

そんなことがあればあるものは奴隷に。あるものは一夜の玩具に。そしてあるものは兵器として扱うだろう。元に戻ってしまふ。そんなことはさせたくない。

「女どもと子供の面倒見ろってんだろ？俺の直轄組織に入れるよう手配してやる。少なくとも子供が面倒見れるようになるまではな」

「恩に着ます」

名瀬は通信越しに頭を下げる。いままで何度こうしてきたのだろうか。

何度わがママを言ってきただろうか。今はそれを数えるのも懐かしい。

「はっ。今までお前のわがママをどんだけ聞いてきたと思ってるんだ」

「……これが最後です」

最後。これで終わり。それを突き動かそうと言うものも、それを否とするものもティワズにはいる。

「ユウ、エスト、オルガ。絶対に来るな。お前らまで死ぬことはない」

親父として、妻も、子供達も守る。その為に自分の命も投げ出す。覚悟は出来ている。今からアリアンロッドの本部にタービンスの違法兵器の運搬は自分一人で行った。そう言うってギャラルホルンに投降して命と引き換えにでも手打ちにするつもりだった。そうすることで皆の命も目標も守れる。

そう思っているのと通信が切れる。最後の声。聞こえたいのだろうか。まあ、聞こえていただろう。それをわかって通信を切った。最後の頼みとして、皆を止めておくことを追加しておけばよかったなと苦笑する。

その間数秒。するとまた通信がかかってきた。

「さてと。どっちが先だ？……イプシロン。やっぱリユウか」

扉を開けてアミダを呼んで通信を開く。

すると出てきたのはユウでもエストでもなくアガータだった。

「おいおい、アガータ.:」

「名瀬さん！すぐに助けに行きます。ですからそこを出来るだけ動かないで小惑星を盾にして下さい！ほとぼりが覚めるまで火星で鉄華団が非戦闘員を匿ってくれます」

こつちがマクマードに歳屋で保護してくれるように依頼したのに、そつちもやっているとは。と少々驚く。おそらくユウが言ったのだろう。使えるもんなんなんでも使う。特に緊急の時は。

そして、此方に来て戦闘員を助けてとんずら。それが彼らの考えている策なのだろう。

「お前らは来るな。ユウにもそう言っとけ」

「でも！」

「今や俺たちは違法組織だ。そして今、ギャラルホルンでイプシロンがタービンスの下部組織だと気づいている奴は少ない。.:。いいか。お前たちは来るな。これは俺たちの問題だ」

タービンスの解散によってイプシロンにも大きな迷惑が来るだろう。でも彼らならなんとか出来るそう名瀬は確信していた。

「お前らこそ、鉄華団に保護してもらえ。この絵を描いたヤツはお前たちが手を出してくることまで見越してははずだ。だとすりや突つ走れば連中の思うツボ。とにかくこいつはテイワズの内輪もめの結果だ。お前らに責任は負わせない」

「でもー」

アガーテが悲痛な叫びを上げる。この間にもユウはマクマードに必死の説得をしているだろうと思われる。鉄華団も動く筈だ。なのに、肝心の名瀬が動かないと助けられない。

「ユウに言つといてくれ。お前がいの一番に守らなきゃならねえもの守れ。それ以外は全部後回しにしろ。つてな」

「：： わかりました」

「よし。いい子だ」

そして名瀬は通信を切った。背を伸ばして、いつものスーツを羽織る。帽子を被つて、家族の写真を胸ポケットに入れて、あの日飲んだ酒を片手に持ち、部屋を出る。

その姿はとても最期を待つ男には見えなかった。

「行くぞ」

数時間後。ユウは非常に疲れた様子ではあるが戻ってきた。これまでに無いくらい怒っていて何が起こるのかわからない。

「くそ！おじいちゃんも無視しろって……このままじゃタービンは全滅だつてのに……！」

「ゆーちゃん。名瀬さんがね。こつちに来るなつて。わかつてるんでしょ。タービンを助けることで私達は違法組織となり共倒れだつて」

「わかつてるよ！そんなこと……でも、ここからなら中継基地も近い。今からなら本気で行けばフュンフならギリギリ追い付ける。モビルスーツで先行することさえ出来れば良いんだ。なのに……。手が届く所にいて、まだ親孝行もしてないのに……。殺しちゃう駄目なんだ！」

アガートが名瀬から告げられたユウは怒りながらも通信機を掴み、一瞬戸惑った後に頭を抱える。

アガートが心配してユウに触れようとしたそのときユウから掻き消されそうな弱々しい声が聞こえてきた。

「みんなを集めて」

そこから起き上がった顔は覚悟をしていた。

ティワズの狙撃手をやめる覚悟を。

第43話 太陽のように

「タービンス……成る程。それで俺を呼んだのか」

船に入った瞬間。言われた言葉に三秒程度の含みを持たせていった。

その言葉が「タービンスの討伐をするから手伝って欲しい」とのこと。

それもアメリカがタービンスの討伐を手伝えと言ったのだ。そう。イオクではなく、アメリカが頼んだのだ。イオクは自信家なのでなんとなくわかるがそれにアメリカが首を突っ込み、自身の部隊の最高の力を持つ人間に言うとは。

なので理解するのに三秒もかかったのだ。しかしタービンス。というひとつの単語で理解した。

「そうか。奴が来る可能性があるのか」

奴と言うのはユウ・タービンというモビルスーツのパイロットでガンダムフレームの機体を保有している。そして、これまた珍しく、狙撃手というモビルスーツ対モビルスーツの場合ほぼ意味がないとまで言われる狙撃を得意とし、成果を出している。単独でも。

「フツ。いくら小さな組織であろうと本気を出す。クジャン家の家訓だよ」

「ご立派なことです。とりあえず二人参戦するから適当に加えてくれ」

そう言つてモビルスーツを降りて無言でイオクに礼をするニールを見ながらノーマルスーツのチャックを開けた。

その時に胸ポケットから写真が出てきた。それは向きを変えないまま、明後日の方向へと飛んでいく。その写真には、過去の自分と一人の女性が写っている。

「——っ……！」

手を伸ばそうとしたその瞬間、それが金髪の女性に回収された。

あれはアメリカと一緒にいたときにあつたジュリエッタ・ジュリスだ。

「……これ、貴方のですか？」

「ああ。ありがとう。命の次に大切な物なんだ」

いつものとは違う優しい声をして視線は写真にあるのに、遠い場所を向いているようにジュリエッタは感じた。その声と視線から前に感じたイメージと違うからか首を捻る。

「じゃあな」

本人は意識をしたわけではないがそう言つて柵を蹴つて遠くに行くときの声は前のイメージと同じ不良っぽい声だった。

アメリカはたまに彼の話をするのだがその時に戦場で一番敵として会いたくない人

間と言っていた。まさにその通りだ。先ほどの優しい印象を書き換えて噂通りの秩序に沿ってない人間とジュリエッタは再認識した。

その後ろを部下のニールはジュリエッタに礼をして地球の鳥の雛のようにについてくる。二年で慣れたその姿を見ながらニールにいった。

「今のうちに家族に連絡しておけ。今回、荒れるぞ」

ユウ・タービンが行った単独でのモビルアーマー破壊。その上、仲間の二人も前とは見違えるほど強くなった。それも、信頼関係さえあれば背中を支えてもらっても良いと感じるほどに。

だからこそ心配なのだ。イオクは謎の自信が沸いているようだがそれを考慮しないとなると、今回の戦いは、犠牲者が増えそうだ。

「みんな。落ち着いて聞いてほしい」

イプシロン。フუნフ。今ここにはイプシロンの全員が集合している。時間はほとんど無いだろう。今現在タービンはギャラルホルンのアリアンロッドに終われて中継基地にいる。ここは中継基地から近いとはいえ、船で完全に追い付いても時間切れになる可能性が高い。やはりモビルスーツを先行させれるしかない。火星から鉄華団も非戦闘員の保護に一役買って出てくれた。

「もう知っているだろうけどタービンスは今、アリアンロッドに違法組織として終われている。追いつかれて捕まって皆殺しにされるのも時間の問題だろう」

みんなの顔が引き締まる。アリアンロッドと言えばこの前圧倒的な差をつけられた挙げ句情けを貰った相手だ。今から行っても勝てる見込みはおそらく少ない。

「だから僕はタービンスを助けたい。作戦は簡単。父さんが予定通り非戦闘員を逃がす。それを鉄華団に保護、護衛をしてもらってから此方は戦闘員を逃がす。父さんの事だからなんやかんや言って自分一人の命で手打ちにさせてもらう……と思う。でも、させてはいけない。助けるんだ」

そう言っても結果はなんとなくわかる。

僕の顔が見える位置にいるたぐさんの女性陣の背中に冷や汗が浮かんでいるのを想像する。

「勿論、真っ正面から戦って勝てる相手だとは言わない。タービンスを助けたい後はしつぽ巻いて逃げるよ。その後の事はその後考えよう。よく言うでしょ。あしたはあしたのかげがふく」

そう軽く言っても状況は変わらない。わかっている。

しつぽ巻いて逃げてもある期間はマトモに動けないだろう。タービンスという名前も、テイワズという後ろ楯も、同時に失う。女を一杯抱えたマトモに戦えない集団に早

変わりだ。そうなれば何処かの汚い海賊が手を出してくるとも限らない。守りきるのは難しい。でも、今ここで名瀬が死んでも終わりだ。僕やエスト、地球にいる兄弟たちに助けて貰ったとしてもあれだけいる女性の保護は難しい。あの大きな器が消えてなくなってしまうのだから。

「……だからここで僕の意見に合わない人はこの船を降りて。この船を降りればおじいちゃん全員保護してくれる。別にこの船を降りても責めたりしない。乗った人には降りた人を責めたり恨まないようにはしつかりいっておく。最悪一人でもアンドラスは動かせる。今ここで覚悟を決めて。はつきり言って分が悪賭けだ。乗らなくてもいい。乗る必要はない。わかっているとは思うけど乗らないことでタービンスから抜け出した事になる。でも、その先に待っている未来はハッキリ言って僕の未来より明るい。戦わなくても大丈夫になるからね」

責めさせないとはいったがこれはハッキリ言って蛇足だっただろう。みんな知っている。命あつての物種だって。死んでしまえばもう終わりだと分かっている。

「だからここで自らの頭で考えて答えを決めて。強引なものわかっている。恨んでも憎んでも構わない。僕はもう決めたから、テイワズの狙撃手をやめるって。もう、決めたから」

その後10分とたたずにみんなが答えを決めた。話を聞かされる前からそんな気は

していたのだろう。

そう思いながら降りていくみんなを見送った。

口々に「ありがとう」「元気だね」「子供たちは任せて」「もしテイワズに戻れたらみんなでもたやろう」「また会おうね」等言ってくれた。抱き締めて泣いた人もいた。

その後すぐにフユンフは出航。モビルスーツ隊は戦闘準備に入った。

心配がある。それは残ってくれたメンバーが少ないからではない。先程言ったように自分一人でもアンドラスを動かして行くつもりだったから。では、なんだ。それは残ってくれたメンバーの中にタービンスに恩義が無いメンバーがいたことだ。

「何故出ていかなかった」

恩義が無いであろうメンバー——ジョーカーにそう言うジョーカーは軽く笑い、壁にもたれ掛かる。まるでこの言葉の意味がわからないように。

「お前だつてわかつてるんだろ！ここで終われば死ぬ。僕達と一緒にいると死ぬ可能性が高い。それにお前には父さん達を助けたいという情が全く見えない。お前は何をしたいんだ！」

そう怒りながら問う。こいつの魂胆が全く見えない。何がしたのか全くわからない。今回のことはJPTトラスト、つまりジャスレイが関与している可能性が高いつまりそのジャスレイから送られてきたこの男はJPTトラストに戻ろうとするはずだ。

おそらくこいつの目的は僕の監視だろう。温厚な態度は取る必要もない。彼の性格上あり得ない事なのだ。そんな事も考えずに入れたりはした。こんなことになるとは考えてなかったから。

「何がしたい…：か…：さあな。けどこれで俺がお前の命令を聞くのも最後だ。それだけはいつておく」

どういう事だ。そう言おうとしたときにはジョーカーが目の前から消えていた。

意味不明な彼の目的に頭を悩ませるが全く理解できない。本当にJPTトラストを辞めて此方に来てくれたのか…：いや、違う。だったらこれで最後なんて使わない筈だ。

恩義があるのか？何故？何処に？それとも奴の正体は…：結局、頭を悩ませることしか出来なかった。

その後、残ってくれたシュインの横で宇宙そらを見る。こうして見るのも最後になるだろうから。

「今だから言うけど、本当はみんなに乗って欲しくなかった。一人でいけつて言つて欲しかった」

「でも、一人では無理だつてこともわかってた、よね」

悲しいがそれが事実だ。たった一人がどんな力を持っていたとしても多数にかかれ

ば何もならない。中には最強が一人いれば良いと考える人もいるがそれは絶対に違う。一人で多数の軍勢に勝とうなどたった一人で世界中の生物を絶滅させようとするのと同じ。これはいかなる力を持つていたとしても同じ。あのライルでも、かの英雄であるアグニカでも。

「無力だよ。本当に。助けたいと思っても力が伴わなくては只の雑魚だから」

「……うん。そうだね。でも、ゆうちゃんには力があるよ。それに守りたいって心もある。大丈夫。ゆうちゃんは私が守るから、初めて会った時ゆうちゃんが守ってくれたように。何度でも、何度でも」

その言葉を何度も聞いていたがその声に自信は少しずつなくなっていくのを感じた。それもそうだろう。アリアンロッドとの戦いで僕は途中で気絶したのだがシュインは最後まで見ていたのだ。たった10機いや殆ど2機のモビルスーツに部隊がほぼやられるという事実。彼女はエストと同様元々モビルスーツパイロットを目指していたわけではない。まだエストはメカニクというモビルスーツ関係の仕事を目指していたテスト時も自分で操縦していたからかパイロットとして最初からそれなりに動けたが、シュインはモビルスーツ所か戦争にすら関係のない職につく予定だった。

六年前、その時シュインは18だった。とある地球圏外の場所にてとある名無しの海賊がシュインと彼女の両親が乗った船を襲った。その結果乗員の殆どが死んだ。その

場にいたタービンスが助けに出たもののその時には酸欠状態で死にかけていたシュインしか回収出来なかった。別に無法地帯を通っていた訳ではないのに。今でもその海賊があそこに出たのか詳しい理由はわからない。

結局、シュインは18の時からかえのない物を失った。だから僕に同じ思いをさせたくないのだろう。たとえモビルスーツの経験が浅くても。

「なら僕はシュインを守る……大丈夫。僕は決めたんだ。何があつても家族だけは守るつて……あとさ」

此方に向けて首を傾げるシュインを見て、言葉を選びながら言う。

「もし……アグニカ・カイエルが生きていて僕の目の前にいたら僕を怒つただろうか。止めるのだろうか。つて思ったんだよ」

ギヤラルホルンの英雄。アグニカ・カイエル。もし彼がここにいたのなら。

前のマクギリスとの話でアグニカは死んだ！もういない！と言っておきながら口をそうだしているの自分も何処かアグニカを信じているのではないかと思う。

僕の……行き先を。信じているのだろうか。

「わからない。私にはアグニカがどんな人かつて聞かれても厄祭戦時の人位しか知らないしね。けどねこれだけは言える。沢山の答えがあり、誰も正解を示してくれないなかでゆーちゃんはこの道を選んだ。それは紛れもないけどゆーちゃんが決めたことだよ。

それを忘れないで」

シユインはそう言うと思いつき息を吸った。まるで力を溜めるように。しかし、次の言葉は短く低かった。

それがいつもにまして重く来た。

「…… ゆーちゃん。やるよ」

「ああ」

一瞬シユインが明後日の方向を見たので少々気になるがそれを頭の中から消去してアンドラスの元へと向かう。時間的に着いた頃には始まっているのかもしれない。

でも行くんだ。何も出来ませんでしたなんて結果にはさせない。

そう思いながらアンドラスに乗り込む。隣にシユイン、ジョーカー、エストとそれぞれのもビルスーツに乗り込む。

「発進どうぞ」

オペレーターの声が聞こえる。その声はいつもよりはつきりと聞こえた。もしかしたらこれで最後なのかもしれない。とより感じさせた。いままで手を抜いていたわけでも生き残れると言う確信があったわけでもない。でも今回はこれまで以上に厳しい。そして死ぬ可能性が高い戦いになると確信していた。

「エスト・タービン！ 獅電、出るぞー！」

「ジョーカー・クロウド、出るぞ！」

「シユイン・ヴァイプ。獅電、行きます！」

仲間たちが夜よりも暗い宇宙へと飛び出して加速していく。それを見送りながら自分の番を待つ。

グリップを握り直してその質感を再確認する。いつもと同じ感覚。いつもと違う戦場。殺すのではなく、救うのだ。この手で。

「これで最後になるかもしれないからね。言っとくよ。君が僕のモビルスーツで良かったと思っている。……さあ、行こうアンドラス。僕達でみんなを救うんだ！」

アンドラスがその声に答えたようにツインアイを光らせる。それと同時に僕の体を何かが包み込む。与えるのは安心。

そうだ。何度も、こうやって助けられた。今度は助ける。

「ユウ・タービン。ガンダムアンドラスで……発進します！」

純白の機体が漆黒の闇に吞まれていった。スラスターを吹かし、ガスの輝きが漆黒の闇を本の少し照らす。それとメインカメラの辺りから出た緑の光が置いてかれる程早くなり、緑の光は二本の線となった。

第44話 あの日の中

「アリアンロッドの艦隊がタービンスの基地に侵攻したそうだよ」

「いよいよ始まるか」

歳星にてたまたまバルバトスの整備とモビルアーマーで止まった原因を知るために来たおやつさんとバルバトスを一見みたいのとバルバトス専用の武装を考えて来た整備長が話していた。

話題はギャラルホルンがタービンスに侵攻する事。それで持ちきりだった。

「もう名瀬も耐えられないだろうね」

「俺達はあそこに嬢さん達を一人でも多く保護することしか出来ねえ。行けるか三日月」

「うん」

鉄華団はタービンスの保護を行うために歳星にいる三日月、ハツシユ。比較的タービンスの基地に近い所にいる昭弘、シノ、ライド。その五人に加えてヒューマンデブリである、チャド、デルマ、ダンテには五人が守ったタービンス兵を火星に率いれるために用意したランチまで護衛している。残りの兵はランチの準備をしてたり、火星で引き取

れる用意をしている。

全員でタービンスの兵を一人でも多く救う。名瀬やアミダなど重要なポジションにいる人達はイプシロンが救助に行った。マクマードの制止を降りきつての行動。もしかしたらテイワズには戻らないかもしれない。狙撃手としてユウの評価が高いとはいえ、これは裏切りも同然。子供だからって甘い刑罰ですまされるようなものではない。

いつの間にか準備が出来ていた三日月とハツシユが発進体制に移る。

「ハツシユ・ミデイ、行きます」

「それじゃ三日月・オーガス、出るよ」

端からそれを見ていたアトラは祈ることしか出来なかった。「みんな生きて帰ってきて」と。しかしわかっていた、それが叶わない願いだと知っていた。

それでも祈り続けた。ずっと。

「もうここは俺だけでいい。お前らも早く輸送船に行け。ヤツらの相手は俺がする」

タービンスの保有する戦艦ハンマーヘッドにてタービンス兵が輸送船にゆつくりと乗っていつていた。この輸送船で火星へと行き、鉄華団に拾ってもらギョラルホルンう算段だ。しかしアリアンロッドも逃げる者は追いたくなくなると思うのでハンマーヘッドであいつらの相手、いや手打ちをさせてもらおうと思っていた。

「でもー」

「アリアンロッドが来るまで多少の時間はある。お前らが安全圏まで離脱したのを見届けたら俺も尻尾を巻くさ」

女性陣は当たり前だが、無理だよと名瀬を止めようとする。まだモビルスーツ戦に慣れているのならまだしも、まだまだなのだ。モビルスーツ相手にうまく立ち回れるとは思えない。

「とはいえあんた一人じゃ危なっかしくて見てらんないよ。私が護衛につく」

「アミダ…」

長年の勘と溢れんばかりの愛のお陰で気付いたアミダが自分もと名乗りを上げる。

そして、他の仲間がなら自分もという前にそこを止めた。

「ラフタ、アジーあんたらは家族を守るんだ。モビルスーツは足は速いが携帯火器じゃ船の装甲は抜けない。慌てずに避難するように誘導してあげな」

「くっ！」

ラフタもアジーも口をつぐむ。縛り悔しそうな顔をしていたのは言うまでもない。しかしそれが合理的な判断だということにも気づいていた。

その後タービーズ兵は輸送船に乗り込み、戦闘員はモビルスーツに乗り、アミダを除いて輸送船の護衛。アミダはもう名瀬一人となったハンマーヘッドの護衛。

対するはライル、ニール、ジュリエッタというギャラルホルンでも選りすぐりのモビルスーツパイロットを入れたアリアンロッドイオク隊。

戦の火蓋は切って落とされた。

まず名瀬は一縷の望みにかけて停戦要請のための信号弾を放つ。

しかしやはりと言うべきか全く反応がない。

「アリアンロッドからの応答がない……」

するとアミダが名瀬に通信を送った。それに気づいて前方を確認するとモビルスーツが扇状に広がって、止まっている。そう。動かないのだ。不審な動きをしていないのが逆に不審に思われる。

——狙撃か？

息子ユウを思い出しながら名瀬の頭の中にそれが浮かんできた。しかしそれをすぐに否定する。あんな距離の狙撃なんて彼レベルでしか出来ない。彼レベルの狙撃手なんているものではないし、もし下手な鉄砲数撃ちや当たるだとしても扇状に広がっていることを説明できない。まるで範囲内ならどこに当たってもいいと考えているような……此方ではなく此方がいる範囲を狙っているような。そんな気がした。

「名瀬、敵艦隊前方に新たにモビルスーツ隊の反応だ。扇状に広がって……なんだ？」

「ヤツら一体何をするつもりだ？」

僅かに火花が散るのが見えた。その瞬間一斉に何か飛び出た。それは目で追う事も叶わない速度で輸送船に当たる。普通の弾丸ならそこで弾かれただろう。当たったのは火気でもなければガラス部分等の柔い所ではないのだから。しかし、それは輸送船に突き刺さった。輸送船は小規模な爆発を繰り返し、黒い煙をあげながら速度を落とす。

「なっ!？」

見るとそこには黒くて細い棒が突き刺さっていた。あの形に見覚えはない。しかし、ユウの話からなんとなく察した。

「まさか例の兵器を…」

彼方の見解では此方が違法兵器であるダインスレイヴを持っていたからとのことだったが。まさか彼方が使ってくるとは。しかも弾丸は通常の弾丸では無いためグレーゾーンではない完璧な違法だ。

違法兵器を持つなら此方も違法兵器を使うと言うことだ。

「こけにしてくれるぜ全く」

どちらにしろ不味いのは変わらない。さっきまではこのハンマーヘッドに敵の視線を釘付けにして雑魚兵をアマダに任せてアリアンロッドの艦隊に突入して交渉する予

定だった。予定通りにいくとは思わなかったがこれほどは……此方を狙わずなのか
たまたま当たらなかつたのかはわからないが輸送船に当たった。つまり輸送船も攻撃
出来ると言うことはわからない。

このままでは第2射が来る。そうすれば輸送船はもう……持たないだろう。当たり
どころが良かったとしても落ちる時間が変わるだけだ一応ランチがあるのだがそれま
での時間が稼げるかどうか。

「第2射が来る！」

「やめろ——！」

苦し紛れにスモークを。ありつたけのスモークを発射する。これで反れてくれ。

そう願った。すると第2射は……撃たれなかつた。

「名瀬！敵艦隊が爆発が…… あっ……」

此方はスモークのせいで見えないがスモークを潜ったアミダから通信が入る。敵艦
隊の爆発。アミダがやつたとは思えない。となれば答えは一つ。

「あいつら……来るなって言ったのに」

「いつまでも世話の掛かる子だよ。でも見えるよ。あんたのにやけ顔」

アミダから送られてきた映像にはひとつの戦艦の上で狙撃体制に入っている純白の
モビルスーツがいた。

「ヒット。シュイン、兄さん。敵モビルスーツが来る。相手よろしく」

「了解！」

純白のモビルスーツ……ガンダムアンドラスのコックピットに座り《スナイプモード》での狙撃。

見えれば当たる。これは狙撃手としての彼の当たり前だった。

「ジョーカー」

家族である二人に命令を送ったあと今か今かと戦いを待つ。一人の男が乗る獅電をユウは睨んだ。

でも決めたんだ場所で人を見ないって。

「僕は今回の件JPTトラストのせいじゃないかと思っっている。だから……お前の事も」

「憎んでいるか？」

正直に頷く。

その間も敵艦隊に狙撃をして気をそらしている。横にオレンジ色の細い線が何本か通った。下手な狙撃だ。自分はここにいますよと言っているようにしか見えない。

その兵器を狙撃しながらジョーカーと話す。

「でも、僕はお前を信用するよ。仲間だし」

「スパイかもしれないぞ」

「……わかってる。でも僕は今はお前を信じたい。ただそれだけだ……頼むジョーカー。敵モバイルスーツが来た。迎撃を頼む」

僕は人を信用出来ていなかった。家族しか信用していなかった。でも今は違うこの男をジョーカーを信用して敵モバイルスーツを任せる。親を救うために。

「わかった。じゃ、これが終わったら酒に付き合えよ……お前とは話したい事が沢山ある」

「ああ。好きだけ飲め。好きだけ話せ。その後僕の質問にも答えてもらおう」

そう言うジョーカー機は親指を立ててサムズアップをする。

そうして閃光を出しながら飛んでいく彼を一瞬だけ見た。

「あつ……ああ！おい！モバイルスーツ隊！早く増援を仕留めろ！」

イオクが艦長席に身を隠しながら叫ぶ。

ダインスレイヴ隊がいるため、この作戦は安心安全。ギャラルホルンに犠牲など出

ず、タービンズを全員仕留められる。そう思っていた。

その安心は招かれざる客によって覆された。

ダインスレイヴ隊にそちらを撃つように命じたが何せ角度があるのと距離が遠くてあたららない。

「圧倒的な力で振り伏せる筈がねー。これだから無能は」

そのイオクを見ながらライルはほくそ笑み、言う。それをイオクが素早く返す。本当にこう言うときでも陰口には敏感だ。

「む、無能とはなんだ！働いてないお前が言うか！」

声に出したのはイオクだけだったがオペレーターが全員そうですよ！と言いたい気分になっただろう。しかし今はタービンズが近づき、輸送船は逃げ、増援のせいで損害が出ている。

「イオク様！このままだと輸送船が有効射程外に出ます！」

オペレーターが急にそう叫ぶ。元の作戦が台無しだ。名瀬と違い、予備の案を考えなかったイオクは頭を抱えて項垂れる。しかしこれでも厄祭戦の英雄の血を継ぐ者。すぐに立ち上がり命令する。

「す、すぐにダインスレイヴ隊に撃つように言え！増援はモビルスーツ隊に任せろ！」

誰でも思い付くような指揮ではあるが状況が状況な為これしか思い付かなかった。

しかし不幸な知らせは止まらない。

「ダインスレイヴ隊の損害が10%を越えました！増援部隊と思われる隊に行かせたモビルスーツ隊の損害は40%を越えます！」

「くそっ！ラスタル様の隣に立つには……ぐっ！」

イオクが対応に頭を悩ませていると船がぐらついた。

数秒宙に浮かんだイオクを見ながらライルは横に立っていたニールの顔を見て、行けと言った。するとニールは敬礼をして

「イオク様！ニール・ガロン出ます！」

そう言っ指令室を出た。対するイオクは身体のバランスを保って慌てながら

「待て！ダインスレイヴ隊の邪魔をするな！」

と慌てながらもしっかりとした呂律で喋った。

「イオク様！先程の狙撃と思われる攻撃で本艦の損害が25%を越え、リアクター出力低下！」

狙撃。その言葉を聞き、ライルは眉を上げる。

もう来ているのは気づいていたがここまでおつきくやるか。この船がボスの物だとわかっているように。

オペレーターがブリッジに捕まりながらも指を止めずにイオクへの指示を仰ぐ。

「イオク様！前方の強襲装甲艦が近づいてきます！このままではダインスレイヴが上手く効果を發揮出来ません！」

ライルはもう限界だった。もう止めるのを諦めて笑いが出てくる。

「ははは！ぎゃーはっはっ！腹痛てえ！なんだよ！お前ら！それだけの力を持っていないからマトモに戦えてねえじゃねえか！これだから机にかじりつくことしか知らない平和ボケやろうが！だから死ぬんだよ！」

突如ライルが大笑いを出した。腹を抱えて目には涙が浮かぶ。今度はイオクも多すぎる情報量でパニックに陥って声がよく聞こえてないのか怒るところか応答しなかった。

「モビルスーツデツキに通信を取れ！俺が出る！そして無能なボスを叩き起こして言え！輸送船に俺達以外のありったけのモビルスーツ隊をいかせて前方の強襲装甲艦をダインスレイヴで迎撃。狙撃手は俺が止める！とな！せいぜい祈りな！死にませんように！気分に乗った神様が救ってくれかもしれないぞ！」

そう叫んで弾かれたようにブリッジから飛び出た。

もう形振り構っていられなかった。オペレーターが一人イオクに叫びながら落ち着くように言う。もう一人のオペレーターがグレイズルデンとグレイズクルーガをすぐに出すように言う。

このライルの指示が吉と出るか凶と出るかは誰も知らない。
ただ、わかるのがこの戦いは死ぬ可能性が高い戦いと言うことだ。

「ライル・バレル！グレイズクルーガ！出るぞ！」

オペレーター達はその姿を見ながら祈った。作戦は失敗しても良いから死にませんようにと。

「頼む。カルタ司令。力を…貸してくれ」

第45話 何が為の光

敵艦隊から新手が来た。

数は二機。少なすぎる。しかし、その速さは尋常じゃなかった。

真つ直ぐ此方に向かってくる。他の機体は全く此方には来ない。この状況に経験がある。とあるコロニーでの出来事が思い出される。同じだ。

「シュイン母さん！新手！強いよ！」

「わかってる！ロークスコロニーの人達でしょ？」

そう。ロークスコロニーというコロニーであった戦闘。そのときは此方がテイワズとは言わなかった筈だがもう機体からバレているだろう。

相手は気づいていると思うがとりあえずシュインと共にライフルで射撃をする。しかし糸も容易くそれを旋回で避けられたのが火花が飛び散らなかつた事とスラストの光の変化でわかつた。

そのまま固まった状態で射撃を続けるとジョーカーが来てジョーカー機が鎌を構え直した。しかし鎌を振るう事はせず、追撃砲を撃ちまくる。それも軽く避けられていくのだが。

それも読み通り、彼らならこんな攻撃当たる方がおかしい。そう思っていると急にその二機の内、一機が二度爆発した。その後、それで動きが一瞬止まったもう一機も爆発した。

いや、爆発したというと語弊がある。その機体が爆発したのではない。二機の目の前が爆発したのだ。

目から入ってきたその情報と経験から答えを導き出す。

「ユウー」

ユウの狙撃だ。しかしそれを読んでいたのだろうか。爆薬か銃かでそれを封じたと思われる。

けど、爆発の位置からして相手の手数が減ったのは事実。これを逃す手はない。

そう思い銃で射撃を行うと、黒い機体が消えた。視界から出ていったのだ。もうスラストの光すら見えない。

エイハブウェーブを見ようとしたその瞬間。自分の土手つ腹を剣で貫かれる映像が頭に流れた。紫色の靄がかかっているがそれは間違いなく自分だった。

それを振り払うようにレバーを動かすと急に衝撃が来た。

何かがコックピットを押した。ということに気付くのに0.1秒。それが盾だと気付いたのは0.5秒、そして相手が何をしてきたかを考えるまでに合計1秒かかった。

たまたま盾が剣からコックピットを守ったとわかるのにそこまで時間はいらなかった。

ライフル構えて、先程いたと思われるところに放つ。

それは勿論当たることなく、今度はシュインが弾かれた。見ると盾の左半分が所々凹んでいた。

剣でおこす傷じゃない。そう思った瞬間、横をオレンジ色の線がかけてそこに何かがあったのか火花となり、散った。その影響か0.5秒程度時間が止まったようにそれは動きを止めた。ライフルを構えるとそれはまた消え、気づくとまたコックピットに衝撃が来た。

先程止まった理由は簡単にわかる。ユウの援護射撃だ。つまりユウは遠くから見ているとはいえあの動きに対応出来ているということとなる。

時期に衝撃の正体にも気づいた。シュイン機だ。

凹んでいた盾の左半分が割れて破片が宙に浮いている。シュイン機の形からして蹴り飛ばされたのだろう。

「野郎……！生きてるか！」

「いったたた……お腹が……」

シュインの声から無事と確認してライフルを構えてコックピットにある関知したエ

イハブウエーブを出す。モニターを見る。

エイハブウエーブが出ているモニターを見るとジョーカーが動くのがわかった。追撃砲で威嚇をしてそのまま流れるように鎌をいつも通りに構えて機体を一回転させる。その回転を使い、すれ違い様に黒い機体を攻撃するが避けられる。ジョーカー機から削られたのか火花が散る。場所はコックピット辺りだ。それを確認しながらライフルで援護射撃をする。黒い機体は軽快な動きで避けて此方に向かってくる。

見るとその黒い機体は剣を二本握っていた。シュインが素早く立ち直り横に反れるのと同時に反対方向に避けそうとする。盾を構える。ライフルで射撃をする。

全てが無に返された気がした。盾で防いだとは思えない、重い衝撃が伝わる。機体は弾かれ、明後日の方向へ飛ぶ。そこには一機のモビルスーツが待ち構えていた。グレイズに似てはいるが所々が地味に違う。カラーは通常の宇宙用グレイズより濃く火星用に似ている。斧を二本持ちその斧を降り押ししてくる。

「あんときのーグレイズ… モドキ！」

名前はわからないがグレイズに似すぎている機体目掛けてライフルを振るう。そのライフルはその時のみ鈍器として役にたった。二本の斧の間を通り、グレイズモドキの頭部に命中する。殴った衝撃を無理矢理押さえて至近距離の射撃を行う。するとグレイズモドキが半回転しながら蹴りをいれてきた。避けられる筈もなく、機体が揺らぐ。

でもまだ、余裕はある。蹴りを入れてきた左の脚を持ち、ライフルで頭部を射撃する。何かが弾け飛び、ライフルの銃身から薄く光が漏れる。もしかしたらひびでも入ったのかも知れないな。と思っていると接触回線が開かれていたことに気付いた。

「あのときの……ガンダム……」

どうやらユウに怒りを持っているらしい。脚を強引に振るつたので素直に離して敵が射撃武器を持っていないことを確認しながらライフルを乱射する。所々から火花が散るがすぐに手に持っていた二本の斧を強引に振るって敵を下がらせられる。暫くはこいつを止めることが必要だな。と思いつながら先程のぶつ壊れ性能のグレイズを仲間に入れてそちらに背中を向ける。即ちそのグレイズモドキの真つ正面に立つ。

「ユウのもとに行けると思っやねえぞ……雑魚が！」

その時獅電が少しだけ大きく感じた。

パルチザンを握り直してライフルで威嚇しながら突っ込んだ。

二機のモビルスーツが火花をあげながらぶつかつた。

「あのグレイズ！ライル・バレル！」

この作戦初めて弾を避けられた事に驚きながらも変態的なマニユーバから敵を推測

してコントローラーを握り直して狙撃を再開する。

どうやら今ライルはシュインとジョーカーの二機と此方の狙撃に苦戦を強いられているようだ。あまり攻めてない。ジョーカーもロークスコロニー後からアーラに完全勝利出来るほど成長している。もうライルのレベルにたどり着いたとはとても思えないがそれなりに強くなりついていけている。シュインも慣れてきたようで二本の剣の攻撃を避けられている。

一度でも喰らったらそのまま地獄行きだ。やらせてはならない。

たった剣二本でアーラを三機ほどを解体したのだ。その力は計り知れない。いままでよりスキが無くなっているのを感じる。無駄がない。此方の狙撃もある程度は当たれることを想定している。お互いに手の内をさらしているような関係なので此方の狙撃能力の事もわかっていてその為此方に弱点を見せない。スラスター、メインカメラ、コックピット。それが此方の角度からでは全く見えない。狙撃地点を変えてもすぐと同じとなるだろう。つまり出来るのは接近からの狙撃。剣の当たる範囲内に入ったら1分も使わずに殺される。剣の攻撃を当たらないようにしながら、敵の動きを止めて狙撃をして返すしかない。

「しかし……狙撃点もおかしいけど未だに様子見をしているライルの方もなかなか不思議だ。本気でかかれれば止められるか」

動きに無駄は無いものの攻めも最初と比べて弱くなっている。時間稼ぎが目的か。それとも、嘗めているのか。

後者はおそらくない。本当に強い奴は敵の力を見るのだから上手い。その証拠に剣を二本持っている。

狙撃で封じているのもあるがそれを警戒し手なのかあまり攻めてない。こつちに至っては傷一つついてない。

もし増援が狙いならここまでしないだろう。

通信をひらいたままライルとシュインとジョーカーの動きを見てシュインとジョーカーの邪魔にならないように狙撃をする。

「シュイン・ジョーカー！挟み撃ちで仕留めるよ！」

「了解！」

それぞれの機体が左右に散る。それに気をとられた一瞬の内に《スナイプ・モード》を解除し、スラスターを吹かして剣の間合いの10倍程度の距離で止まる。

それに気付いたライルがこちらを標的にした。

しかしそこで気づくべきだった。いままで弱点を晒さずに攻撃してきたのが続くと。

一瞬で視界から出ていった。スラスターで真っ直ぐ当たってくると考えていたので驚く。しかしそれでも歴戦とは言えなくても一人の戦士。感覚で攻撃方向を悟り、そこ

に盾を重ねる。それをした直後盾に脚が入った。カウンターを警戒している。モビルアーマーを破壊したことで此方が強くなったことに気付いている。おそらくタメも張れるのではないか。勿論危険なので避けてはいくが、警戒されているというのは認められたというのとほぼ同じなので喜びながらもすぐに建て直す。

「近づかれた！」

バルカンで威嚇して下がるがバルカンが効かないとわかっていて、真つ直ぐ追つてくる。

それを見ながら左で斜めから振られた初撃をシールドで防ぐ。すると衝撃を感じた。左ではない。右だ。右でコックピット周りを峰打ちされた。きつい体制かと思つたのだがそれで逃げられるほど相手も気を抜いていたわけではなさそうだ。でも、防がれることを読んだんじゃない。それをわかつたのは第三撃が左で頭部を狙つた時だ。まるで流れ作業だ。一種の迷いが無い。こちらをマネキンとして考えているかのごとく、連撃をする。必死にかわしたり、盾で防ぐが限界だ。流星に接近戦は相手の方が慣れてる。

「ユウー！」

ジョーカーが鎌を振り下ろし、ライルの連撃を無理矢理中断する。しかしライルは両方を同時に蹴飛ばして再び連撃の準備をする。それを見ながら、レールガンを斜めに向

けてシールドからミサイルを放つ。ミサイルが危険だと知ってそれを避けるがギリギリの位置で狙撃して爆発させる。爆煙と熱が敵モビルスーツの邪魔をする。

するとシューインが連射しながら近付いてきた。パルチザンを展開し、突貫する。ジョーカーも鎌を構えて追撃砲でライルがいると思われる方向に連射する。当たったと何度も撃つてきた経験から理解してレールガンで狙撃しながら遠ざかった。

爆煙があけるとそこから剣が一本ジョーカーの獅電に命中した。しかし投げる程度の攻撃で痛手が来るとは思えない。

…いや。違う。この跳ね返り方は…

その剣を見つめて気付いたのでレールガンで狙う。肝心のジョーカーは鎌をそのまま剣が出てきた方向に振り下ろしながら接近する。

「駄目だー」

声をあげるがジョーカーは止まらない。

このまま行けば振り下ろされた鎌が当たるだろう。しかし当たった鎌は跳ね返り丁度接近したジョーカーの獅電の肩辺りに漂った。

「それはー」

その瞬間。一本の閃光がジョーカーの獅電を貫いた。そのまま固定され衝撃から装甲が砕け弾けとんだ。

コックピット周りを押さえる二本のフレームの内右の一本が明後日の方向へと飛んでいく。

その映像を目に見せつけられながらも精神を保ち、引き金を引いた。ライルに命中するが止まらず漂っていた剣を握り流れるように回り、肩に目掛けて第二撃を当てる。肩二本の一本の傷が出来る。作用の力で離れていくジョーカーに一瞬で追い付き第三撃を右方向から腰に当てる。第四撃も命中。その全てが装甲かフレームも抉り、削り、切った。

「ジョーカー！」

シューインが追い付き、パルチザンを振るう。それを弾いたライルが離れるまで数秒程度。その間にジョーカーに攻撃が何回当たったか、数える暇もなかった。それくらいの速度だ。

人間辞めてやがる。

剣が一本増えるだけで連撃の幅が急に広がった。機体の動きも力もいまままでと全く変わらないのにそこだけで本当に変わる。

とりあえずジョーカーに背中を当てながら威嚇射撃をする。しかし当たっても怯まない。くるくる回り流れるような動きで弾を弾き、ドリルのように接近する。

ジョーカーの獅電の損傷は中破といった様子か。

所々フレームが丸見えで無いところもある。メインカメラもヒビが入っている。しかし必死の防御のお陰かコックピットには小さな傷は大量にあるものの、大きな傷はなかった。

逆に言えばジョーカーレベルでなければ死んでいた。背筋に冷や汗が走るのを感じる。次はお前だと言わんばかりの物を感じる。

その瞬間頭に閃光が走るような痛みを感じた。しかしこれは身体的にダメージが入った訳ではない。

「そっつー！」

感覚的にレールガンで撃つと何かが弾かれるようにその場を離れた。おそらくマニューバで避けたときに装甲の一部でも削れたのだろう。…コックピットを狙った筈なのだが。

外したか。

そうわかるやいなやアンドラスを駆りジョーカーから離れる。

「シユイン！ジョーカーと体勢を整えたあと後ろから挟むから回り込んで！」

「二人でやるっていうの!?!」

シユインがいつもとは全く違う声色で言う。余裕が無いのはわかる。しかしここでも状況は変わらない。

「やれるさー！僕と！アンドラスで！」

アンドラスのツインアイが輝き、再び緑の線を書きながらアンドラスはレールガンの引き金を引いた。

第46話 タービンの力

宇宙空間なので聞こえない筈の音がコックピットに響いた。

これは機械が出している擬似的な音だ。そうとは気付いても、その完成度から音が出てくる度に冷や汗をかく。

その音は重い金属と重い金属をぶつけた、独特の音だった。

「ぐっ…やるッ！」

パルチザンの柄を短くして再び斧を受け止める。

それでまた音が響いた。

その音を出す原因となっているもう一つの存在。今それと戦っている。双方の武器がぶつかり合い、ならず音は鈍かった。

俺はこの相手と戦った事がある。そのときは数がいたのにも関わらずしてやられたが、今回も同じ結果になるとは思わない。

アーラを単独で討伐する程の腕まで上昇した。代々タービンの姓を受け継ぐものは才能の開花が早いのではないかと勝手な推測が出来るほど短い期間で上達している。

「このっ…邪魔だ！」

二本の斧を使って強引に横をすり抜けようとするグレイズモドキの猛攻をパルチザンをシールドで受け止める。

得物の数は少数とはいえ、こちらの方が勝っている筈だ。相手は尾二本、たいして此方はパルチザンが一本、ライフルが一丁、シールドが一つ。

シールドは攻撃に向いていないので実質2対2となっている…。筈なのだ。しかしバカでもわかるほど今は押されている。

それぞれの機体に変動的な機動で相手の機体を沈めようと武器を振るう。結局今は相手の攻撃を押さえるので精一杯だ。モビルスーツとの戦いは一秒で状態が変わる。それは勿論言い方向にも悪い方向にも。

今は相手が出し惜しみをせず当たってきていると信じるしかない。そして敵の行動パターンを読み取って避けるしかない。

… 出来るか。

とりあえず仕留められる可能性が高いので蹴りを入れるのがそれを防がれて加速された。

しかしその速度も早くはあるが獅電で追い付けない速度ではない。

「そんなので抜けるとでも！なめるなあ！」

加速をして回り込む。スラストのガスが青い光を出して真っ直ぐもう一つの光へ

と進む。

パルチザンを振るう。普通なら防げる振り方だが両方とも速度が速度なので押さえきれずに弾く。

弾かれたことよってよろけたグレイズモドキに瞬間的な加速ですぐに追い付いてパルチザンを再び振るう。今度は斧で受け止められていなされた。

「トロいんだらよおー！」

すぐにUターンをしてシールドを前に押し出すように出しながら接近する。そこに何か硬い物が当たりそれは弾いたりすることはなく、つばぜり合いのようにびくびくしながら機体が止まっている。

今止まっていると言ったが厳密に言うとは違ふ。ほぼ同じ速度で動いているだけ。硬いものの正体は相手の得物だとすぐに気付いた。

ライフルさえ取れば状況は変わるのだがあいにく此方には腰にアームを回す時間はない。パルチザンを振るおうともシールドが大きすぎるせいでうまく当たらない。

その間も加速した二つの機体が膠着状態となっていた。

するとコックピットから警報が流れた。しかし振り向かない。どうせ機体の限界だろう。それにハイそうですか。と聞いていては此方がやられる。

「グレイズルデンが押されている。!?ギャラルホルンの機体ではない上に、量産機だ

ぞ！」

接触回線で相手の声が聞こえる。若い…おそらくジョーカーと同じか、ジョーカーと自分の間くらいの年齢の男だ。

グレイズルデン。それが相手の機体だろうか。言葉からエース機もしくは改造機ととれる。

相手の驚きも頷ける。量産機とは誰でも使いやすくするため、そしてコストを押さえるために性能を試作品等と比べて少々落としているのだ。それなのに、性能を押さえていない機体が量産機に劣るなど。それも両腕と片腕でつばぜり合いしているのだ。それは驚くだろう。

ここで相手の頭の中では獅電の株が急上昇しているだろうが、本当はただ無理をしているだけなのだ。

腕の限界が来る前にシールドを微妙にずらす。するとすれ違うように相手が流れた。無理に後追いはしない。反撃の可能性が一番高いところなのだから。

しかし両方とも即座にUターンしてそれぞれの得物をぶつけ合う。くの字と反転させたくの字が重なったような絵を描きながら流れていく。両方ともいなすのに集中しているのがわかる。

その間もスラスターの加速は止まらない。この勝負は早い方が勝つ可能性が一番高

い。それもあまり機体性能の変わらない機体同士。ほとんどがパイロットの問題となる。

「はっ！」

「ぐっ！」

お互いに声が似ているためか途中からどちらがなんといっているのかわからなくなってきた。無論、戦闘中による極限状態。というのも大きいだろうが。

しかし永遠にその時間は続かない。武器は損傷していき、スラスタアのガスは減る。間接は磨耗し、フレームにはヒビが入る。金属疲労が起こっていて設計の段階よりも破壊しやすくなっている。

現在敵モビルスーツの内部の損傷はどのくらい進んでいるのかはわからないが此方の獅電は限界に近い。左肩のフレームは一部を残してヒビが入り、シールドは端の方が欠けて、中心には幾つもの深い傷が入り、中には割れているところもある。敵モビルスーツの外部の損傷は斧が刃零れしている程度。先程の発言から無理をしていないと考えると、此方が不利だ。

「ちっ！短時間で終わらせるしかないのかよ……耐えろよ！」

そう言いながらも状況を変えることは出来ずに繰り返していた。

ミサイルを放つがあの速度と反射神経を持つ男が避けられない筈がない。すぐに避けて横方向からの反撃が来る。それを盾で防いで、連撃に警戒しながらもレールガンで撃つ。それをかわされたら距離を取る。

たつたこれだけの行動なのに相手の強さが現れている。行動一つ一つに隙がなく、此方から突つ込めば磨り潰されて終わり。そう感じさせた。

無理には動けない。

「ユウ・タービナー！」

「なんだ！」

敵機——ライルの駆る黒いグレイズ（イプシロンでは異質^キ同体^メグレイズやニコイチグレイズ、真つ黒グレイズ等と呼ばれている）に向けて叫ぶ。

よくこんなに余裕が無いのに敵と話せるな。

アンドラスがその感情を読み取ったのか、何かを伝えてきた。

それを知る筈の無いライルが真つ直ぐに突つ込んできた。

「読めた！」

それをバックステップで避ける。簡単に言うが相手が狙いをさざめてから当てるまでの短い間にバックステップで剣の当たる範囲から逃れたのだ。

剣がコックピット横からコックピットスレスレを通っていく。もし避けてなかったらと思うとぞつとした。

どちらしろ、これはチャンスだ。

「そこおっ！」

レールガンを構えて撃つ。しかし相手から見れば急にモビルスーツの間に弾丸が出てきたような物。いや、弾丸を視認した後に避けられる人間なんている筈無いからそのままその弾丸は黒いグレイズの右肩に命中。

「っ…っ…っ！また…」

読み取れない射撃、どれだけ鋭い感覚を持つていても、どれだけ戦いを経験してもこの射撃だけはどうかくるかわからない。曲がる訳でもないし、急に加速する訳でもない。銃には種も仕掛けも無いのだから。つまり僕が自分の意思でやっていること。

それが僕の唯一の才能。

先読みも出来ない状態で放たれた弾丸をかわせるやつなんて思考が加速しすぎて当たらなくても脳が壊れる。震える程度ではすまない。

いままでの問題はそれが出来なかつた事。強敵との戦いでは相手が此方の特性を知つてからは狙つて狙撃が出来ないもしくは狙わせないように動いていた。でも今は「アンドラスがいる！」

変に気を張る必要性はない。

アンドラスの援護に従えば良い。

「アンドラス！」

ライルが自分から離れた。自分の攻撃が当たらなくて此方の攻撃は当たるというのに。

高速戦闘に持ち込んで先程の射撃をさせないつもりだろう。それくらいは簡単に推測出来るがどう戦えば良いかを考え、行動するのは難しい。

一度呼吸を整える。するとライルが回りながら此方に来た。これは誘っている。

操縦幹を握りしめて言った。

「行けるね。アンドラス」

アンドラスがそれに答えるように一瞬より目を輝かせて此方の援護を開始した。

イメージをする。自分の身体をどのように動かしているか。実際動かしているのは操縦幹とペダル、ボタンとタッチパネル程度ではあるがイメージをすることですんなりと動く。阿頼耶識とは似て非なる物。

身体を温かい何かが包んだような感じがした。本当は何も包まれてないのだが。

アンドラスが加速する。黒いグレイズの煽りを受けて真っ直ぐに突っ込み適当な所で横に逃げてレールガンを構える。

黒いグレイズもそれに対応して追ってくる。

機体の速さで言うなら黒いグレイズの方に分があるだろう。出来るだけ無駄を省き、攻撃力と素早さに特化させた機体だ。

それに対応して此方は正確無比な読み取れない射撃の為のカスタマイズ。その小さな差を大きくしたのがパイロットの腕だ。

腰のストラスターが変態的に動きながらアンドラスを狙う。アンドラスも絶対の一撃の為にミサイルを放つ。そしてそれを狙う。敵の視界妨害並びに塗料を効率よく剥がすために用いる方法だ。

しかし弾丸がミサイルを破壊する前に何か横からミサイルを斬った。

爆炎で腕の当たりの塗料が少々剥がれだが、狙いたかったコックピット回りは何もなかった。

「くっー！」

読まれた。

すぐにシールドを構える。剣が命中して機体が揺らぐ。

いまままでならこれで一呼吸置けた。

しかしすぐに対応出来ないスピードでもう一本が盾を弾いた。

これでは丸裸も同然。すぐにバルカンを撃つが威力もそこまで無いので機体に弾か

れる。次、攻撃がこれば簡単にコックピットに剣の侵入を許すだろう。

守れない。かわすにも剣の軌道が全く読めない。かわせるかどうかなんて不明だ。ただ、まだ頭が動く。

「(アンドラス!)」

そう頭で思うのと同時に剣が機体の横をすり抜けた。

違う。

機体が動いて剣をかわしたのだ。

いままでとは違う。アンドラスの援護がある今は優位に立てる可能性が高いのだ。

「これまでのようにはいかない! そうだろ! アンドラス!」

二機のモビルスーツが多数の線を出しながら視界から消えるほどのスピードで駆けた。勿論二機とも機体を損傷させるほど無理はしていない。

アンドラスが中心となり、それにかするようにはグレイズクルーガが当たる。そのままアンドラスが狙い撃ち、それをかわしたグレイズクルーガが強襲をする。それを何度も繰り返し続けた。しかし二機とも大きな損傷はせず、そのまま重なりあう。

何度もしてきた戦いに終止符を打ちたいが為に。

第47話 兄として

機体の限界がどこにあるか。

量産機であればデータを取っているためわかる。ワンオフ機でもある程度の戦闘データからある程度読み取れる。

それは当然の事。

元メカニック志望で地球の学校へ行き、とある日に弟に呼び出されていなければ、適当な企業にでも就職していたのかもしれない。

それで弟に呼び出されて何をやっているのだろうか。

それは戦闘だった。

元メカニック志望である自分なら先程言ったようにモビルスーツの性能を無知な人間よりよく知っている。

そして常識としてモビルスーツは破壊されると動かないと言うことも。

ならなぜ。

「今俺は機体に普通出来ない行動を求めているんだろうな」

戦闘中とは思えないほど頭が急に冷静になった。

グレイズルデンと言うらしい機体と何度も切り結びながらそう思った。

おそらくだが、相手は最初からモビルスーツパイロットになるつもりでギャラルホルンに入隊したもの。

機体の性能もパイロットの腕も、本当は彼方に軍配が上がるのだ。

今は機体に無理をさせて、パイロットの腕で空いた穴を埋めさせている。

コックピットの中で警報アラートが鳴り響く。

弟は一言で言う才能があつた。自分が地球に降りて、勉強をしているうちに彼は自分の才能に、自分で気づいた。そして努力でそれを伸ばしてテイワズでは欠かせない人間となっている。

自分はどうか。それなりに勉強はした。努力はした。何においても普通より少し上を保ち、安定していた。

結局自分の才能はまだ、目覚めていない。

わかつた。俺は悔しかつたんだ。小さい頃なんて甘えん坊で、泣き虫で、駄々っ子で、寂しがり屋で、怖がりで、けど好奇心がある弟が、自分より明らかに劣っていた筈の弟が、今では年上であり、兄である筈の自分を追い抜き、名前だけとはいえ、責任者となっている。

だからあいつを出し抜きたかつた。あいつが倒せなかつた相手を倒したくていま、

戦っている。

不純だがそれでも、戦う。

親孝行をして、強くなりたいと。

「だからあー！」

新たな警報。機体の限界は近い。

短期決戦。

一瞬、一瞬に命を……懸ける。

「だあああああ!!」

パルチザンをしまい、盾で構えながらライフルを弾を惜しまずに撃ちまくる。

もう一機の敵はユウ達が止めてくれていて、此方にはこない。

敵機は行動が変わったことに困惑をせず、狂ったと思ったのか素直に接近してくる。

ユウのような射撃スキルは無いため、弾丸は全てグレイズルデンに弾かれて終わる。

しかしある程度は食らった筈。

盾で一度斧を迎え撃つ。その盾に衝撃が来る。素直に斧を振るったようだ。ここま

ではいままで通り。

敵機の損傷はそこまで無いだろう。少なくとも外部から見ると損傷は少ないし、そのまま無理をした乗り方はしていない。考えた通り長期戦は不利。それどころか勝てる見

込みがない。

「ぐっ！だあっ！」

冷静さを欠いたようにライフルを投げてそこに意識を向けさせて盾をパージする。これで少なからず驚いた筈と読んでパルチザンを素早く抜きそれで殴る。長くしている時間は無い。短い状態で、抜刀（刀ではないが）した直後に殴った。

「あああっ！」

その後よろけた所に追撃を加える。パルチザンを槍のように構えて刺すようにグレイズルデンに向けてそのまま突っ込む。

しかし、グレイズルデンのパイロットも普通ではない。ギャラルホルン最強のパイロットの教えを受けた唯一の生徒。エースなのだから。

斧を一つ逆手持ちにしてパルチザンをいなした後に膝蹴りをする。

獅電が一回転している間に斧で左肩の装甲を割る。

コックピットの中から嫌な音がした。装甲が剥げるのでも削れるのでもなく、割れた。破片が飛び散りタッチパネルにそこが映し出される。フレームに装甲の一部が当たり、明後日の方向へと飛んでいった。

「つつうー！」

でも止まらない。すぐに左腕で斧を握ってそこを軸としてグレイズルデンを巻き込

みながら一回転してその衝撃を利用して膝蹴りを返す。

スラストーの一部がひしやげ、調整が困難になったようだ、動きが止まった。それを逃がすほど此方に余裕はない。

すぐにパルチザンを延長させて、右肩にパルチザンを差し込む。

そのまま押し当てて、テコを使って引き剥がす。装甲が吹き飛び、フレームに強烈な負荷がかかった。

今頃敵機のコックピットではコンピューターがそこからベキベキだろうか音を鳴らしているのだろう。

その瞬間、敵機から余裕が消えた。憎悪と怒りの感情が見てとれるようになる。

通信越しに雄叫びが聞こえた。

訓練等では決して出てこない。命の危険を感じている。それは同時に相手が本気ということと、それほどの相手であると認めたことの証拠だった。

「ああああ!!」

斧が頭部のバイザーを引き剥がす。頭部もある程度曲がり、フレームの一部の損傷が大きくなったと警報が知らせてくる。バイザーが吹き飛んだことにより、映像が少し鮮明になったように感じた。その追撃を受けながらも蹴りを加えて距離を取る。

視界が若干クリアになったとはいえ、それは申し訳程度な上に、危険なところをわざ

わざさらしている。これでもし、相手に射撃武器があったなら負けている。

メインカメラがほぼ露出した状態のまま、覚悟を決めてペダルを踏み込んだ。

ライフルを投げて此方に射撃武器はない。残りの武装はパルチザン一本のみ。それに加えて相手のモビルスーツは腕が片方極めて動かしにくい、もしくは動かない状態とはいえ、斧が二本。手数は逆転された。機体もボロボロといっても過言ではない。

それでも勝利の可能性はある。

「……で決めてやるよおー！」

「……ッ！来るかー！」

もう敵のモビルスーツもアンドラスの事が頭から抜けている。ただ、俺を倒す。その事だけに頭を使っている。

パルチザンを横風ぎに振るい、避けられた所を突く。腕が両方とマトモに動くためそれが避けられた所に拳を振り込むように入れる。

しかしモビルスーツとはいえ、パンチが効くわけもなく、双方の距離を実感離して終わる。そこに今度は自分の番だと言わんばかりのグレイズルデンが左腕のみを使って斧で風ぎ払う。片方だけなので避けやすい攻撃ではある。だからこそ、それがおかしく見えた。何故、こんなにも避けやすい攻撃をしてくるのだろうか。疲れているようには見えないが。

何度か振り払うと急に止まったので、パルチザンで突く。

その瞬間、グレイズルデンは急に傾いた。

避けられたと思つた。でもそれだけではない。

「しまっ——」

気付いた時には左腕でパルチザンを止められていた。斧を吹き飛ばせたようだが問題はそこではない。

余つた右腕にはしっかりと斧が握られている。

敵に余裕が消えたのはわかつていた。俺だけを倒すために全力で来たことも。右腕の損傷的にはまだ二、三度降れてもおおかしくないということも。

だから、わかっていた筈だ。

左腕に意識を集中させて、右腕で決めてくることも。

それに気付いた時にはグレイズルデンの右腕が破壊する音とコックピットの壁がひしゃげる音が聞こえたがどちらがどのような音か、違いは全くわからなかった。

「エストー！」

ジョーカーの介抱をしていたシュインがジョーカーの獅電から情報を得た。隣には

応急措置をし終わったジョーカーが感覚を確かめている。

しかしあくまで応急措置。コックピット内に侵入した破片が腕を斬っていた。

「あいつなら生きています…。でも回収はしないと。とりあえずコックピットから出る。コックピット内に空気を入れる」

しかしジョーカーはあくまで冷静に機体の状態を調べている。そして肩を押してシユインを外に出した。

そのままシユインは自分の獅電に乗り込み、そこに酸素を流し込む。ノーマルスーツのヘルメットのバイザーをあげてモニターを確認する。

グレイズモドキとエストはグレイズモドキの方に軍配が上がったと思われる。ジョーカー曰くエストは生きているとのことだが回収はしなくてはならないだろう。ボロボロとはいえ、モビルスーツの目の前で。

黒いグレイズとユウの戦いは膠着状態…。と言う筈だが、両方とも物凄いスピードで駆けているので、その言葉が正しくないように思える。

もう頭が一つ抜けている所ではない。遠くの世界へ行ってしまったように思えた。勿論助けに行ったら足手まといだ。

ならばしなければならぬのは名瀬とアミダの保護だろう。逆にいうとジョーカーがエストは大丈夫と言ったのとユウのあの状況からそれしか出来ないのだ。

ジョーカーと通信回線を繋ぐ。

そこには同じような状態のジョーカーがいた。どうやら穴を埋めたようだ。ヘルメットのバイザーをあげて楽な状態になって栄養バーを頬張っている。

まるで戦場じゃないみたいに振る舞っているその姿を見ながらも怪我がよく見える。

「私はアミダさんの援護行くからジョーカーはフუნフの所まで戻って」

「いや、俺はユウの援護に行こう。あいつの戦いは元々一対一が主じゃない。前衛役の誰かがいることであいつの優位性は何倍も強くなる」

怪我は戦えない程ではない。しかしあの高速戦闘についていけるとは思えない。怪我がなくてもついていけるかわからないのに、怪我があるとついていけずユウの足手纏いになる可能性が高い。

「安心しろ。あいつの足手纏いにはならねえよ。出来るだけあいつを止めてイプシロンの家族を……タービンを助けさせれば良いんだろ？」

その言葉はまるで自分はイプシロンとは関係ないと言っているように聞こえた。

しかしそれに気にする事は今はしない。自分もタービンスには、イプシロンには居続けると思うが戦うのはこれで一旦終わると思ったから。

それより通信越しに見える。ジョーカーが今までとは違い、此方を睨んでいた。

「……わかった。お願い。ゆーちゃんを生かして」

「任された」

ジョーカーの機体は一瞬エストの方を向き、その後高速戦闘へと突入していった。その姿はまるで特攻しているように見えた。

「エスト……信じてるから。生きて帰りなさい」

——俺、死んだのかな。

急に体が軽くなる。弱い重力を感じるのここは……地球だろうか。しかし先程まで宇宙で戦闘をしていた自分が地球に行くことが出来るのはおかしい。しかも何も見えない真っ暗な状態で何も視認出来ない。身体が妙に軽く感じる。確かに身体はあるのだが何も触れない。

——多分、負けたんだ。

ギヤラルホルンの名も知らぬパイロットに。負けたのだろうか。殺されたのだろうか。

最期の映像が頭の中で繰り返される。

痛みは感じない。

——悔しい。みんな、助けられたかどうか……

それすらもわからない。

助かれば良いのだが。何もわからない為、ゆっくりと重力のようなものを感じる事しか出来ない。

——嫌だ。

俺は、こんなの嫌だ。

望んでいない。俺はこんなの望んでいない。

身体は動く。動くんだ。

じたばたしながらもがく。

嫌だ。まだ死にたくない。死にたくない。

——俺には……俺にはまだ！

まだ沢山の物がある。息子である自分を愛してくれた家族がいる。残して死ぬなんて出来ない。

せめて、安心できるようにしないと。

——死ねない……死にたく……ない……

意識が遠退いていく。力が抜け、死という一文字が此方に迫るように感じる。

しかしまだ、諦めない。

——あいつだって！こんな状況経験しているんだ。兄貴である俺が負けてたまるか

よ！

何が、何があっても。

——まだ、死ねるかあ！

動け、俺の体！獅電！俺が動かしたとおりに動け！まだ死ねない。死ねない。死ねない。死ねない。

その瞬間何かが手をつかんだ。

「何言つてやがる？腕も足も有る。身体も動く。なら、お前はまだ戦える。どれだけ無様でも、最期の最後まで足掻きやがれ。

——家族を、守るんだろう？」

真つ暗闇が一気に取り払われる。

その瞬間、視界に半壊したコックピットが入ってきた。ガラスの反射で身体から出る血がよく見える。何かが身体に刺さったのか、そこに違和感を感じた。すぐにそれを身体から抜き去る。

何かが吹き出したが気にしない。

「最期まで付き合ってもらうぞ」

獅電のメインカメラが輝いた。

それは安心等を与えた訳ではないが力を感じた。

機体のコックピットにめり込んだ斧はもうそこにはない。今さっき、グレイズルデンが持ち上げた。そこまで長い時間あの空間にはいなかったらしい。

どちらしろ、意識がすっかりしている今しかチャンスはない。この一瞬にすべてを賭ける。

出てくる代償を想像すらしなかった。

もう警報は聞こえない。今しかない。

グリップを握り直す。そして、それを前に倒した。

「ああああ!!」

パルチザンが動いて敵モバイルスーツのコックピットを打った。敵モバイルスーツのコックピットは凹みはしたものの、外傷はそこまでないようだ。

それでも止まらない。

スラスターのガスも気にせず突っ込む。

パルチザンで突く一度の攻撃。

「(それに全てを)」

世界がゆっくり流れていく。敵モバイルスーツは退きもせず非常にゆっくりとしたスピードで斧を振り上げていく。

それが振り落とされるということを頭から抜き去り、パルチザンを当たれば一撃の

所、ユウが一番最初に狙う、コックピットの開閉部に合わせる。

パルチザンはそのまま吸い込まれるようにグレイズルデンに当たった。

「(ありがとう。名も知らぬパイロット)」

俺はもう一歩先に進める。

そのパルチザンはそのままグレイズルデンのコックピットの上部を破壊して強引に動きを止めた。

同時に獅電の両腕がもぎ取れた。

グレイズルデンのパイロットの安否は確認しなかった。しかし戦闘不能にするという条件なら

引き分けだろう。

今度は勝つと誓いながら意識を手放した。

第48話 その力は正義か

鳴り響くのは銃声。それもレールガンという特殊な武装。それに時々命中しては弾かれたり、小規模な爆発を引き起こしながらも攻撃してくるモビルスーツ。そのモビルスーツが持つ、アンドラスに傷をつける剣。

その剣が盾を削る音も聞こえる。

後は機体の駆動の音などが入り交じっている。

そのような状況でもアンドラスの中からグレイズクルーガとの通信をして、会話をしようとする。

「何故！何故この作戦に協力した！断ることも出来ただろうに！」

こいつの目的はなんとなくわかる。クーデリアの元を訪れたときに言っていたのだ。地球と火星の差別を無くすこと。

もしかしたら火星出身なのかもしれないと考えたが結局答えは出なかつた。

「今タービンスが崩壊すれば鉄華団にもダメージが来る。すればクーデリアにも影響が出る。そうすればお前の目標は遠退く！」

そう言いながらもレールガンの引き金を引いて漆黒の宇宙に小規模な火花を映す。

しかしそれでも遅くなるということを知らない漆黒のグレイズは自分の体のように機体を操作して此方に攻撃を繰り返す。

「何故だど？命令だからだよ！」

亜音速で降られるその剣を盾でしつかりと受け止める。

盾が削れ、アンドラスが弾かれる。

「今は地固めの時期だ。過去の自分にすがりつかず、目標を達成するための！」

結局、戦いの目的はそっちのけなのだろう。

こちらの目的はあくまで家族を救うこと。アリアンロッドに打撃を加える意味はない。

対してアリアンロッドの目的は殲滅。一匹残らず仕留めなければならないのだ。

ライルは目的を知らなくてもこいつを殺せ。と言われたらその命令のままにそいつを殺せば終了だろう。しかし僕にはその後家族を助けるという本来の意味がある。

最悪こいつとの戦いもパスしたいのだ。

「だからって！罪もない一般人を勝手に大罪人に仕立て上げて武装が無い輸送艦を狙うのか！」

狂っている。

今のギャラルホルンの行いも、アリアンロッドのこの行為も。

これを初代セブンスターズが作ったと言われるが本当なのか甚だ疑問なのだ。

「そんなに大切か！下らない上司の命令は！」

そう言いながらも高速です移動してモビルスーツに対し、レールガンで狙う。

傷だらけとなった盾で再び剣を受け止める。そしてまた、傷をつけられる。

ミサイルで塗料を払いたいがこの速度ではマトモに捕捉できず、当たらないだろう。

結局怒りを感じながらも高速で動くモビルスーツの攻撃をかわしたり、受け止めながら狙撃するしかなかった。

「軍人じゃないお前が言うか！子供のお前が言うか！何も知らずに、育てられただけのお前が言うか！」

珍しく自分と会話をしながら此方に殺気に向けてくるその相手はレールガンで狙うにも弱点を隠しながら戦っている。高速戦闘でもうまく動ければ戦況が此方に傾く。

その殺気と怒りが隠った剣を今度は受け止める。流すのではなく、完璧に受け止める。

そのままこちらの怒りをぶつける。

「そちらの都合で勝手に殺して……！救える命に手をさしのべないばかりか力強く生きているその手を切り落とすのか！それで何が正義だ！ただの暴力装置じゃないのか！」

レールガンを差し込むように前に出してその引き金を引く。しかしグレイズクルー

方は退かずにこのまま押しきろうとしてくる。

強い圧にアンドラスが押される。リアクター出力はこちらの方が上だというのに。これが、パイロットの差なのだろうか。

そうか。これはアンドラスの戦闘能力の使い方の問題だ。このまま押し込まれると此方がコックピットに剣を振り込まれて終わりだ。その時間を与えてはならない。

この至近距離ならミサイルも避けられまい。熱は若干此方にも伝わるが相手が火器を使わないことからそこまで変わらない。

一瞬だけ欲しい。一瞬だけ。

そう思っていると先程の言葉をライルが返してきた。

「違う！力こそが：。力こそが正義だ！ギヤラルホルンが正義なのではない。ギヤラルホルンの持つ力が正義だ。適当に心に響きそうな言葉ばかりを並べて！お前は、お前も持つ正義である力を自分で否定するのか！」

気がついたらもう一本の剣が腰に当たってコックピットを中心に一回転。

その時の一撃は純粋な怒りを感じた。何も隠していない。ただ、僕の言葉にキレた。まるで子供のような怒りだった。

バルカンを放つと今度は素直に離れてくれた。その瞬間に回りながらもミサイルを放ち、バルカンで爆破させ爆炎を当てさせる。

少ない酸素で作られた小規模な爆炎をマトモに喰らい、塗装は剥がされていく。それもコックピットの端の部分だ。

弱点の守りが剥げて危機感を感じたのか距離をとらずに仕留めに来た。剣の斬撃を二、三度程流すと、コックピットに蹴りを加えられる。距離を取ったりするものではなく、脚すらも打撃武器として扱っているということだ。場合によれば横から殴る、ではなく蹴って、コックピットを潰すという扱いをしてくるのではないかと思われる程に。

「お前だって何人も人を殺してきただろう！それはどうなんだ！」

剣の斬撃が不安定になって数発本体に当たったので弾き飛ばされる。そのままコンボが繋がると一生出れないので素直に下がる。しかしそれはいそうですか。と見守る訳もなく、追撃してくる。

「僕だって！好きで人を殺している訳じゃない！」

「同じだ！人を殺している時点で俺もお前もイオクも！」

仕方ない。仕方ないのだ。そういう言葉も出る筈だった。しかし、僕も沢山殺しているだ。

その者にも家族はいただろう。中には巻き込まれただけとはいえ、一般人もいる。その時点で僕とこの作戦を考えたやつは同じなのではないか。

そう、思えてしまった。

その人たちは僕を憎むだろう。もしまだ生きていたら狂気となり、襲ってくるだろう。

なのに、僕は今自分の意思で自分の為に、自分の家族を救おうとしている。

「わかっただろう！お前も俺ももう戦う事と、誰かを殺す事にしか自分の価値を見いだせない！それしかできない！」

ぐつ。とその言葉を反論出来ず、一撃を軽くくらう。

舌戦では負けているがそれでもモビルスーツ戦はほぼ互角だった。

全く戦況が傾かない。傾いても、すぐに修正される。

あんなにもボロボロに負けていた相手にここまで追い付けているので成長を感じるがその均衡状態が焦らしてくるようで気味が悪い。

それでも弾丸はまだいくらでもある。家族を救うためにもそれを惜しむわけにはいかない。その決意だけは揺らがなかった。

しかし思いで倒せる相手でもなく、均衡状態は未だに続いていた。

「つーでも……いや、だったら！僕は後ろ指指される事になっても！自分が守るべき物を守る為に戦う！」

「そうだ！その言葉が聞きたかった！」

レールガンで遠くからちまちま攻めるのをやめて突っ込む。

グレイズクルーガもすぐに加速をする。

血迷った訳ではない。もとより接近戦でライルに勝てるなど一度も考えたことはない。

真っ直ぐ線を描く二つの機影。普通なら何もおかしいことはない。しかしこの場合は片方が狙撃手という離れて戦うのが普通のパイロットがいる。この情報を加えるだけで今回の内容は異例中の異例だ。

あと100メートル。まだ遠い。この距離はどちらかというと僕の距離だ。このまま離ればまた、いままでの繰り返し。

あと50メートル。加速をしているのであと半分という感覚はない。ここまで来ると逃げようとした瞬間に一撃は入れられる。

あと10メートル。お互いに武器を伸ばせば武器同士が当たる距離。ここまで来ると視覚してから動くが遅い。

高速でしかし馬鹿正直に真っ直ぐ線を描いて衝突した両機。そのまま火花を散らしながらもすれ違う。

ライルは普通攻撃出来る状態になったらたった一撃では納得しない。何撃か加えてそして仕留める。

そのライルが一撃のみですれ違うように離れていく。
そして此方の狙いはその次。

素早く切り返し元々準備していたレールガンを素早く構える。剣で一撃のみ加えて満足しているその背中にそのままレールガンで狙撃をする。スラスターが小規模な爆発を起こしながらその影響で二機は離れる。

しかし見た瞬間気付く物もある。

「外した」

当たらなかつた訳ではない。相手もそれをわかつて半回転したのだ。しかしスラスターには命中してそこから爆発した。動いている途中に確認したが敵機のスラスターはグレイズタイプにしては少し変わっている物でバーニアが背中に3つ、腰に1つある。特殊な物を含めれば腰にあと2つ、左右にある。そのスラスターを巧みに使っている。つまりそこを撃ち抜ければ使えなくなるはずなのだが、腰のスラスターは特に、撃ち抜いても小規模な爆発が起こるだけで、あまりかわらず動いている。コックピット周辺の人間で言う、胸辺りのパーツに関しても同じことが言える。最初こそ、弾かれたが今は塗料が剥がれたのか、小さな爆発を何度もおこしている。見るがモビルスーツとして上手く動くのに大切な物は失っていない。損傷度なんてそこまでないだろう。

結局いままで弾いたのは最初程度でそれからは全ての弾を当てながらダメージを与えている筈だ。しかしこの様子を見るにそうとは見えない。後でメカニックにでも理由を聞こうと思いいながらもすぐに戦闘に頭を切り替える。

あそこまでのアタックはしたのだ。なのに、まだ敵を仕留めるどころか均衡状態を崩すことすら出来ない。

「ムカムカする…。どうして」

結局またいままでの状態に戻る。

しかしこれがそのまま続く訳ではない。スラストーは無くなり、残弾は尽きる。

最初に来るのはおそらく…。アンドラスの弾切れ。

残弾の確認をするとその隙に攻められそうなのでしていないがあまり弾はない筈だ。

だからと言って節約すると死ぬ。相手が攻め込めないように撃ちながら大きな隙を探しているだ。

ならば短期決戦に持ち込んでかけてみるか。賭けるのは自分の命。賭けは賭けでも成功率が少ない。そういう戦いは相手の方が数が多い。即ち、経験が豊富でその時に使える手も、負けそうになったときに均衡状態に戻す術も此方とは大きく違う。賭けにしては分が悪すぎる。

その時、ハツとしてアンドラスを下がらせた。

気付いてしまったのだ。ライルの狙いに。

連続し止まらない速度で動き続ける剣で相手の動きを止めて仕留めるライル。彼は弱点をどんな経験や、能力を持っていても読めない狙撃で、そのたった一撃で仕留める僕とは違う。

どんな連撃を持つていようと歴戦のパイロットや、才能のあるパイロットなら、何度も見せられると見切る事が出来るようになるだろう。すれば、反撃される可能性がある。つまり出来るだけ相手にチャンスを与えず、初手の有利な状態で仕留めたい筈。つまり、此方より短期決戦型なのだ。

「してやられたか」

ライルも何度も戦っているため此方の動きのパターンがわかってきたのだろう。だからこそ、威圧をして弾を使わせて、残弾を使い果たす前に仕留めようとさせて、自分が得意な短期決戦にして仕留める予定なのか。

こちらが仕掛ければそれだけライルがこちらを仕留めやすくなる。

そのせいで弾を使いまくり、残弾が少ない。

ライルはこちらを仕留める用意が出来ている。並んだように見えて、相手の方がまだ上にいたのだ。

「まだ上にいるのか！ライル・バレル！」

「まあなー」

その言葉を受け取ったのかライルは余裕で剣で攻撃を繰り返しながらも返してくる。してやられたがもう遅い。このまま長期戦に持ち込んでも残弾が切れる。節約してもしすぎるとライルの四方八方からの攻撃で殺される。

ならば短期決戦にして、守りながらも一撃に賭けるしかない。無謀も良いところだ。自分を殺してくださいと言っているようなもの。

無理だ。

今回の戦いの意味を忘れてはならない。今回の目的は相手を殺す為ではなく、みんなと生きて帰ること。帰る場所が無くてもみんなと生きること。家族の、みんなで。

家族、みんなと生きる。そうだ。金持ちは当たり前でやることに僕は命を賭ける。

「みんなで…生きるんだーだから…止まれるかー」

機動を変えてレールガンの弾を節約しながらバルカンを撃つ。

このまま長期戦に持ち込むしかない。銃をもう少し多く持ち込めば良かったなど、反省する。

今度はアンドラスに武器を沢山くっつけてやろうと考えながらレールガンで狙撃をして、爆発させる。

「だったら！お前の力で俺を振り伏せてみる！」

その爆炎から逃れながらも此方を攻めてくる一機のモビルスーツ。

その剣を盾でしっかりと受け止める。

正直に言つて、補給無しではこいつを振り伏せる事など不可能だろう。つまり、隙を作りその間に補給を受けるか父さんと母さんを助けてトンスラするしかない。

とすれば人数が必要だ。今動けるのは何人だろうか。レーダーの反応には残りの三機ともいる。エストの獅電があまり動いていないような気がするが周りに動いている敵機はいないので大丈夫だろう。シユインは父さんと母さんの方へと向かった。

そして、ジョーカーは——いなかった。

レーダーの範囲外までいったのだろうか。母艦に戻つて補給か？だったら何故こちらに連絡がない。

「ジョーカー!?!」

そう声を上げた瞬間に危険を察知して機体を強引に下がらせる。しかし避けきれなかったのか、コックピットが揺れた。強い振動だ。腹の辺りに擬似的な痛みを感じた。

しまった。

周りに気を配ったせいで隙が出来たか。そう理解しながらも頭は素早く動いた。当たったのはおそらく、コックピット。直接くらった。コックピットに繋いでいる端末に表示されている謎の英数字を見ながらモニターを一瞬だけ見て、損傷箇所とそのレベルを見る。

「カハッ！」

追撃を盾で防ぐが急速で出したものだった為、簡単に弾かれてその次をくらう。

肺にたまった空気が抜けた。今度こそ、本物の痛みを感じて身もだえる想像をするが死の意識をしたのでそれを止めてレールガンで下がらせる。

呼吸を整える暇はない。

——次

止まらない。目にも止まらぬスピードで繰り出される剣を感覚でかわす。頭痛と耳鳴りがしだした。

離れると言うようにスラスターを使うがすぐに追撃をくらってそれを止められる。その度に貫く衝撃が痛みを引き起こす。耐Gを使用はしていると言うのに。

「終わらせる！」

そう言う声と共に出てきた剣を止める術を今は持っていなかった。

しかしその剣を受け止める訳にもいかずゆっくりとアンドラスが離れていく。視界がクリアになり、世界がゆっくりと進む。走馬灯のようなものが流れ出し、それが頭痛をより強くする。

次の瞬間コックピット内に響いたのはコックピットが貫かれる音ではなく、レーダーが何かを感じた音と、低い男の声だった。

「――伏せろ」

その声の正体を知ることなく、その声の言う通りにアンドラスの方向を変える。剣が何かに押されて、アンドラスから離れた。内側に刃がつき、L字に近い形状をした武器。鎌だ。アンドラスの横側から鎌が出てきたのだ。

その正体を理解しながらスラストで後ろに下がる。

その仲間が何故レーダーに映らない瞬間があったのかわからない。それを理解する必要はすぐに消えた。普段なら頭の中には答えが浮かんでいるだろうが今はその答えは全く浮かばずにただ、仲間の乱入と敵を見ていた。

「大丈夫か？」

ジョーカー・クロウド。

イブシロンの前衛だ。

「……お前のせいだよ！」

第49話 燃える太陽

「こいつ…！どうやって…まさか、ナノミラーチャフ!?」

グレイズクルーガのコックピットの中で種も仕掛けもないその視界から急に現れたその機体に驚く。止め、というわけではないが損傷を期待できた筈の一撃を横から反らされたのだ。驚きながらもすぐに答えを探そうとしている最中に予想がついた。乱入してきた速度から言ってすぐ近くまで接近した後にさもいまままでそこにいたのかと思わせるように出てきて気が緩んだ瞬間の一撃を期待したのだろう。

そしてライルの頭の中で導きされた答え。それはラノナミネットチャフ。LCSを妨害して完全にモビルスーツ間の会話を接触通信のみにしてしまいう代物。それでレーダーをごまかしてある程度近づいた後に暗殺。

いなかっただのではない。通信障害コトしていたのだ。

結局こちらも相手の安っぽい罠に嵌まってしまったのか。

しかし見るからにその攻略は難しいものではない。

「罠なら罠らしく一撃で沈めるようにしろよ。素人」

二本目の剣を振るって、鎌を弾く。

そのモビルスーツは先程連撃をして、中破した筈だが損傷をモニターから見る限り、小破程度で留まっている。

パイロットも何も無しでは終わると思えないがこの様子を見ると動く事は出来るようだ。

これで敵機は二機になったが、それぞれ小破したモビルスーツで急襲も失敗。「殺れるもんなら殺ってみろ」

自信に満ち溢れた状態で剣を軽く降って煽る。

此方だ。来い。そう思っているながら相手の事を軽視せず警戒しながらも誘う。

「最後まで力を貸してもらおうぞ。カルタ司令」

グレイズクルーガのメインカメラのバイザーが開いた。そこから黄色の光が出てきて、敵モビルスーツを照らす。モニターに「ASWG-63」と「STH-16」が表示されている。そのモニターの反応を見ながら舌で下唇を濡らした。

「大丈夫か？」

「…お前のせいだよ！…まあ今回は許す」

ジョーカーの声に激しく反応しながら安堵する。よかった。ここまで危険な手を使

うということとは信用していい。いままで信用出来ないような肩書きを持ちながら信じてくれとは言わずに作戦に参加した彼を、少しでも信じていてよかったと思う。

剣の勢いをそのまま反らし、追撃は出来なかったものの僕は生きています。そしてジョーカーも続行可能。

今は第三者が息を吹きかけるだけでも切れてしまいそうなほどのはりつめた空気（宇宙なので空気はないが）になっている。

しかしその中でも少し安心しながらジョーカー機を見る。小破というより中破辺りまで行ってしまうため高速戦闘に持ち込むとジョーカーが追従できず、遅れていくのだ。

「無理するな」

ジョーカーから接触回線が開かれる。何故ジョーカーが何も無い空間から出てこれたかわからないがそれを聞くのは終わって落ち着いてから酒でも飲みながら話した方がいい。

無理をせず、お前の得意^組な事^撃で仕留めろ。そういう意図を察しながら、頷きながら言う。

「わかった。ありがとう」

アンドラスに頷くモーションをさせながら深呼吸をする。高速戦闘の後は酸素が少

ないと思つたが想像よりもあるようでモニターに表示されている数値も安定している。狙撃で相手を仕留めるには動くにしても弱点が見えて、アンドラスが引き金を引くまでの若干のラグと弾が当たるまでの時間の差を考える必要がある。

でもそれは一人かつ、乗っているモビルスーツに慣れていない場合のみ。

前衛としてジョーカーがいる。機体の損傷もあるがここまで動いているので敵意を向けさせるくらいなら出来るだろう。

機体を至つては最高だ。なんとたつて10年もこの機体を使っているのだから。

「三コンマ後に行く。遅れるなよ」

3。 2。

状況は全く変わらない。

空気はコックピット内しか無いのに、その外にもあるように感じることはたまにある。しかしその空気がこんなにも張り詰めているのははじめてだ。

1。

空気は変わらない。こちらが動かないので相手も動けない。逆に言えば片方が一瞬でも動いた瞬間、また始まる。このような張り詰めた状態はモビルスーツ戦ではあまりないことだ。おそらく、それは相手も同じ。同じ土俵に立っているならば、数がある此方が有利。

「ゴォー！」

機体のバーニアをいいタイミングで吹かしてグレイズクルーガを狙った。その機体に何かの意志が汲み取れた。

「だからっ！行かせないって！」

そう叫びながら一機の獅電がライフルで牽制射撃を行う。その声の主であるシユインは余裕が無いことに気付きながらも声を出して自信を鼓舞する。そのライフルの射撃に気をとられたグレイズの上にパーソナルカラーのピンク色に染めたシングルナンバーと言われる高級な素材が使われていて性能の優れる百鍊が重なりコックピットに目掛けて0距離射撃をして一機仕留める。

その百鍊が重なった時出来た隙に攻めてきた謎のモビルスーツに敵モビルスーツの残骸を蹴って牽制がわりに使う。

「この！邪魔をするっ！」

「ちよーつと動きが単調だねえ。まるで小さい頃のあの子を見ているようだ」

その謎のモビルスーツはこの前の火星で見た、新型であるレギンレイズに似ており、灰色のブレードが両腕に出てきている。その他にも型と腰から出る細長いパーツが武

器にも見えなくはない。それでは全身刃物だ。機動性能はともよく、いままで見たどんなモビルスーツも凌駕している。

その証拠に先程蹴飛ばしたモビルスーツの残骸を軽くかわして一撃入れられる。

「入った……！」

衝撃が来るが予想よりそれは小さくすぐに抜け出す。

逃がすかとも言っているのかすぐに追い付ける速度で接近するその機体目掛けて牽制していると横からアミダの百錬が蹴りを入れて蹴り飛ばす。

「私は……ラスタル様の剣に……」

通信越しに聞こえるその声は若い女だった。丁度自分と同じくらいなの。

しかしだからといって手を抜く気はないし、何かを変えるわけではない。でも少なからずその声に驚く。

ブレードをぐるぐる回してそれを蛇腹状にして、アミダの百錬に攻撃をするがそれを軽くかわす。

「もつと頭で考えたらどうだい？ 闇雲に振っていたら当たるもんも当たらんよ」

そのモビルスーツは子供のチャンバラのように素早くはあるが闇雲にその武器を振るっている。

新型を任せられると言うことはパイロットとしてエースであることは間違いない。そ

の機体の性能差が大きかったエース機にここまでの差を見せつけるとは。アミダの強さが伺える。

適当にあしらわれて敵パイロットも流石に堪えたのか機体性能を生かしてバルカンで牽制しながら突っ込む。あれなら大丈夫だろう。アミダ相手だと単純な攻撃は通じない。彼女程のパイロットとタメを張るには才能によつてつけられた技術が必要不可欠だ。つまり、あそこまでの強さになると良くも悪くも才能が物を言うようになる。彼女も才能があるように感じだがまだ磨けていないと感じる。才能と努力、そしてそれを生かせる環境。その全てで勝ち上がった彼女には勝てまい。

「それじゃあこつちもやりませんか」

獅電のバルチザンを振り回しながら敵モビルスーツを弾いて、ハンマーヘッドの護衛をする。

名瀬にはユウのことを説明した。

それを知って名瀬は敵艦隊に突っ込むのだ。今回の件を出来るだけ穏便に済ませる方法。それは交渉に持ち込むこと。今回の件はギャラルホルンのミスでした。等と言わせるのが一番だが出来て今回の違法兵器の運搬は俺一人のせいだ。程度だろう。ギャラルホルンはそういうことをするのに長けた連中が本当に多い。

「名瀬さん……」

守ってくれる。しかしこちらは守れない。その事実がまた悲しく心に突き刺さる。もう二度とユウの目の前に立つことが出来ないんじゃないかと苦しくなる。

あの日だって救ってくれたのはタービンスだ。仕事は運搬だけのはずなのに精鋭部隊を蹴散らせる護衛を引き連れて助けを必要とする人を救う。

「私は貴方のために出来る事をします。ですから……一緒に帰りましょう」

叶わない願いを言つてハンマーヘッドから目を外す。

もう私たちがイブシロンという突如の援軍はタービンス側に味方をして、一人一人がそれなりの実力をもって、そこにはガンダムフレームのモビルスーツがあるというのを理解して、対応が落ち着いてきた。

どうやら作戦内容は兎も角、優秀な人材がそれなりにいるようだ。

「姐さん！それは任せます！」

「あいよー」

百鍊が新型を蹴飛ばしたのを一瞬見た後にハンマーヘッドに追隨しながらライフルの弾を装填して、回りの機体に牽制射撃をする。何発もハンマーヘッドに当たるが流石にモビルスーツの携帯火器では、ダインスレイヴのような馬鹿みたいな威力の武装がユウ並みの射撃能力がない限りあまり意味はない。塗料を地味に剥がしてしまふ程度。一機入れれば状況は変わる。敵モビルスーツが獅電を脅威と捉えてこちらに射撃しても

外れるか、盾に命中するだけ。

しかしそれは敵モビルスーツが母艦であるハンマーヘッド、もしくは獅電を狙っている時のみ。

モビルスーツのほとんどが輸送艦を有効射程内に入れるつもりだ。だからこそハンマーヘッドに並びながらも牽制射撃を行い、グレイズの動きを止めていく。

「無理かもしれないけど。一機でも多く……ここで止める！」

ライフルの銃身が焼けるまで、この引き金を引き続けるしかない。しかし弾が当たってもナノラミネートアーマーに弾かれるのみ。数が多すぎるから闇雲に狙って撃つしかない。弾が無くなって装填している間に何機も横を通りすぎていく。

こちらにはあまり興味が無いようだ。それもそうだろう。作戦の進行もかなり辛くなってきている筈。あまりダメージにならない射撃を繰り返しているだけの脅威となりにえないモビルスーツの相手をするより作戦として重要なしつぽ巻いて逃げている輸送艦の相手をした方が手柄もたてやすい。

それでもこの現実がかなり辛かった。いるにも値しない等。悔しいが現実だ。でもそれなりに時間は稼げた。後は護衛の仕事だ。

届いていないかもしれないが悔しい気持ちを押して止めて笑顔で言う。

「後は……任せる！」

結局輸送艦に多数のモバイルスーツが向かう結果となる。しかしこちらに項垂れる暇などない。先程の通り、輸送艦の護衛は鉄華団等が行ってくれる。標的を獅電もしくはハンマーヘッドにしたモバイルスーツ隊を確認したのでそのモバイルスーツに向けて射撃を繰り返す。

残弾を惜しみ無く使う。ハンマーヘッドを破壊されるわけにはいかない。ユウには悪いが今回の作戦、不可能だと自分は感じた。もう違法組織だと認定された事は今更覆らないだろう。なら何故ここに来たか。それは、名瀬が守りたいけど自分のことに精一杯の時に名瀬が守りたい人を守ることだ。タービンのメンバーは勿論、今戦っているユウも。

今度は自分が守る。

「はああああ!!」

リスクが大きいからか、接近しても全然接触してこないのでパルチザンを抜刀してライフルで牽制しながら突っ込む。

敵モバイルスーツであるグレイズのライフルも盾を貫通しないのは勿論の事、獅電のライフルに命中せず、間接等を狙っているようにも見えない。

獅電の機体性能はグレイズより少し下程度だが、すぐに追い付き、パルチザンを一機に差し込む。嫌な音がしたが、パルチザンに異常は無いのでグレイズのナノラミネート

アーマーの薄い部分が破壊された映像をモビルスーツが拾ったのだらうと推測してそこから一機しとめたと再確認する。

そのまま流れるように差し込んだ一機を放棄して適当な所にいたグレイズに向けて、蹴り飛ばして他の一機のライフルを此方のライフルで破壊。間髪入れずにパルチザンで一撃。これで二機目。当たりが弱くなってきた。元々攻めてこないのにここまで来ないとなると流石に戦場に立つ兵士としての風格を疑う。でも、止めることはない。二機目を解放してライフルを適当な所に向けて撃ち、当たりが弱い者が近くにいたのですぐに飛び付いて横からパルチザンを叩きつけてる。その一撃でのけぞった所をライフルで0距離射撃をして三機目。

それを仕留めた時には残りのモビルスーツが急に離れていった。三機も倒せば危機感が出てくるのは仕方ないだらう。しかしこれは流石におかしい。全く攻めてこなかった。まるで時間稼ぎをしていたように。

その瞬間、とある事を思い出した。フロンフで見たひとつの兵器。ユウいわく、ナノラミネートアーマーを貫通する射撃兵器。

ダインスレイヴ。

「くるっ……」

機体を反転させながら無理矢理捻る。その瞬間だけは自分の事に頭が一杯だった。

だから自分が避けると何に当たるかあまり考えられなかった。

「しまっ——」

その先にはハンマーヘッド。どうするか今ならまだ強引に戻すことも出来る。しかしそれでは自分が死ぬ。

頭で考えていると間に合わない。

咄嗟に倒したグレイズを盾に押し付けながら前方に出した。それまでの時間はとても早かった。この速度で武器が振るえればユウにも勝てるのではと思うほどに。

その瞬間襲ってきた衝撃は敵グレイズを破壊して盾を粉碎した。それでも勢いは収まらず、後方にアラートか鳴った瞬間には後ろから鈍器で殴られたような衝撃がきた。ダインスレイヴとは違う。貫くのではなく、ただ殴るような感覚。

肺の空気が無理矢理出されて呼吸困難に陥る。

「カハッ！」

見なくてもわかった。ハンマーヘッドに叩きつけられたのだ。破壊されたグレイズは腕が一本明後日の方向へと吹き飛び、残りには一本の黒い槍が刺さった状態で漂っていた。盾の破片が飛び散り、大きめの破片は破壊されたグレイズについて回る。というかダインスレイヴに刺されていた。

「これが……違法兵器……?」

獅電はまだ耐えられるがハンマーヘッドに何発か命中したのかハンマーヘッドは非常に危ない状態だった。

黒い煙が出てきて、これをあと一度か二度繰り返せば破壊出来るほどに。

衝撃に苦しんでいると近くからモビルスーツの反応。

「どっしょよ……」

ハンマーヘッドの影に隠れてこの好機を待っていたのだ。それほどのパイロットがこれを見逃す筈がない。

しかしハンマーヘッドは勿論、獅電もマトモに動けない。

衝撃からきた腹痛に腹を押さえる。

グレイズがライフルで獅電のライフルがいに限界を超えて、破壊した。

「うっ……そん……」

そして、接近してくるグレイズ。今度はアックスも出してやる気が伝わる。

でも、まだ抗える。機体はまだ動く。ライフルは失ったものの、パルチザンはまだ生きています。一矢は報いてやろう。そう思った瞬間、残りのグレイズ全機がコックピットの開閉部分から火を一瞬のみ吹いた。

反射的に放たれた方向を見る。

そこには予想通りの人、いやモビルスーツがいた。

「ゆーちゃん…。」

「言つたでしょ。守るつて」

おかしい。なんで。そう言おうとしたが声がよくでなかつた。かすれた弱々しい声がほんの少しだけ出てくる。しかしそれを理解したようにアンドラスは頷く。

「シユインは二人の回収を頼む」

「二人…？ ジョーカーも？」

「うん。すまない。ジョーカー…許せ」

そう言いながらアンドラスは敵戦艦に目掛けてレールガンを構えた。そしてオープンチャンネルを開いてその声を無理矢理届けているのがわかる。

そこからの声はどう考えても

「聞こえますか。アリアンロッドの兵士。僕の名前はユウ・タービン。単刀直入に言います。今回の件は冤罪です。証拠もある」

彼らしくはない。流暢に話すその姿は誰かを模しているようだった。

頭に憧れという言葉が出てきて軽く笑う。彼の事をまた一つ知れたのだから。

そう思っていると彼は通信の最後の言葉をタメを作つて言つた。

「：
冷静な判断をお待ちしております」

第50話 照らされる者

二つの武器がぶつかった金属音が聞こえた。

モビルスーツが勝手に出している音とはいえ、それは地球等の空気がある環境の物とほとんど同じ。つまりこの音も地球で全く同じ事をしたら毎回出てくる音なのだ。

レールガンで援護射撃を行う。ライルはすぐにジョーカーに蹴りを入れる。その勢いで半回転をして射撃が弱点に当たるのを避けてそのままジョーカーに追撃をした。

「ジョーカー！避ける！」

すぐに連撃を入れられて死なないようにミサイルで援護射撃を行う。

ライルは前のミサイル爆破による熱で塗料を溶かす行動を危惧してか、一度引いてミサイルをかわす。それも今ミサイルを爆破させてもギリギリかからない距離。それを維持している。

流石と言える行為だ。一度の爆破でここまで見切るとは。でも相手は敵だ。新たな方法を考えなくてはならない。そうしないと手札はすぐに無くなる。ここまで動きが俊敏だと、いくら読み取れなくても狙いがさざまらない。狙いがさざまらなくては意味がない。

こういうときに相手の二手三手読むスキルが重要となるのだが、それも今の僕のレベルでは彼相手にはあまり効果がない。

結局何度も武器を打ち付けて貰うしかない。

ジョーカーの機体にも限界はあるだろう。先程ライルにあれだけの連撃を食らったのだ。逆にここまで動けるのが凄い位だ。

「大丈夫か！」

レールガンで狙撃をして、出来る限りはライルの動きを緩めて敵意を向かせている。しかし此方にも弾切れというものがある。レールガンはその特徴から調整が楽でうまく調整すれば無駄撃ちをしなくてすむが、だからといって無限ではない。

問題はライルの機体の損傷度だ。あれだけの攻撃を受けているので腕一本くらいもう限界だと思うのだが。まず、それ以前にスラストをあれだけ使って、あれだけタンクを破壊して、まだ余裕があるのか。

「こいつには自己回復能力でもあると思っちゃうよ」

モビルアーマーの感覚が未だに抜けていないらしく、モビルスーツでは、あり得ない事を思わず口にしてしまう。それほどなのだ。堅牢すぎる。と思えば速すぎる。

理由はわかつている。ライルのパイロットスキルだ。

「こいつが一番動いている筈なのに……な！」

ならばそれを越えるには人手が必要だ。

ジョーカーと二人だけでは正直厳しい。しかしここは戦場だ。あれこれ言ってはられないし、それを考える時間と余裕があるなら手を動かせというのが常識。

ならばやることはわかっている。

「ジョーカー！何でもいい。仕留められないように動きまくれ！無理強いするな！」
「わかった！」

ジョーカーの獅電はとにかく止まらずに追撃砲を馬鹿みたいに撃ちまくっていた。一樣狙っている弾だが、ライルには一発も当たらない。

流石に読んでその位置に射撃は難しいようだ。他の機体なら全弾当たっていただろうと思わせた。

「アンドラス！」

アンドラスがレールガンの引き金を引いてグレイズクルーガに当てる。しかしそれでも速度は変わらず変態的起動を続けている。

追撃砲の弾幕を掻い潜りグレイズクルーガの剣は獅電の鎌の柄に命中して獅電とつばぜり合いになる。

「不味い!!死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！」

「ジョーカー!?!くそ！」

その瞬間アンドラスからとあるイメージが伝わってきた。それはだんだん鮮明になつていき、そして消えた。

そのイメージはジョーカーの獅電のコックピットに剣が突き刺さっているイメージ。つまり押し負けるということ。

「ユウ！ミサイルだ！当てなくてもいい！」

「どうするつもりだ！」

「考えるな！」

そのジョーカーの言葉通りアンドラスのシールドからミサイルを放つ。ライルはそれを軽くかわすがそれだけで十分だ。

次の瞬間、何をするかはライルしか見ていなかったから。普段から戦闘仲間が何をしているかなんてあんまり気にしていない。というか気にする暇がない。危なくないかくらいは見えてはいるが例えば後ろから撃たれる等は全く考えていない。

つまり、ジョーカーが次の瞬間、追撃砲でどこを狙うかなんて考えもしなかった。

「——ん なっ！」

アンドラスが何かを拾った。ジョーカーが鎌を離して両腕の追撃砲をライルの方向へと向ける。しかしそれを気にせずアンドラスを逆方向に移動させた。

次にアンドラスが拾ったのは爆音だった。当たり前だが逆方向に行ったアンドラス

に効果はない。効果があるのはアンドラスがレールガンを構えてないことから爆発しないと考え、爆発したときの範囲内にいながらジョーカーを攻撃しようと思ったライルとジョーカー本人のみだ。

赤い炎が一瞬だけ見えて酸素がない影響ですぐに消えた。次にきたのは閃光でそれが二機の間でちらつき、そして巨大化するそれから逃れるなど出来る筈もなく、二機とも呑まれていった。

そしてアンドラスが拾った爆音がコックピットの中に響いた。

「あの馬鹿ー」

心配する声は何故か出てこなかった。かなり近いとはいえ、ミサイル二発。塗料が剥げる程度だろう。その考えは簡単すぎた。爆煙が晴れるとそこには二機のモビルスーツがお互いの得物を弾いた状態で取っ組みあっていた。

どちらとも損傷が想像を軽く越した。

間接からは火花と電気が漏れてあまり持たない事がわかる。お互いの得物はモビルスーツの回りに浮遊しているのだが、取っ組みあっているせいで拾えない。

「ジョーカー!? 応答しろ! ジョーカー!」

今が最大のチャンスだと言うことを忘れていながらもレールガンを構えてジョーカーへ通信を送る。しかしそれは全て一方通行でジョーカー側からは何もこない。死

んだのかと思ったがならばなぜ取っ組みあいをしているのか。だったら死んではない筈。通信機器がやられたか。そう思いながら次の行動を考える。

両方とも損傷は酷い。こちらが手を下せばすぐに破壊出来るだろう。

レールガンで狙っていた事を思い出す。すぐにグレイズクルーガに狙いをつけるが地味に動いている上に弱点を此方に向けていない。跳弾を狙うにも成功率は低い。

それに肩などを破壊したとしてもまだ武器が散らばっているので戦えるだろう。その上父さん達の方にも早くいかななくてはならない。

するとノイズ音に重なって通信がきた。

「ユウ・すぐにハンマーヘッドの方に向かえ！」

その声はまるでこうするしかないと言っているように聞こえた。

そうだ。ここで時間を取られては当初の目的を無し得ない。ここで言葉をかわずその瞬間でも時間は進み、生存確率は下がる。

「……ありがとう」

こうしてアンドラスを駆り、ハンマーヘッドにたどり着いた。

側で危険だったシュインを助ける事が出来た。しかしこの件は僕のお陰ではない。

最初は嫌々だったが今なら信頼できる仲間の事を考えながらシユインと通信をする。

「シユインは二人の回収を頼む」

「二人……？ ジョーカーも？」

「うん。すまない。ジョーカー……許せ」

最後のは小声でジョーカーに謝った。彼だつて死にたがりではない。本当はこんな件に関わりたくなかつただろう。一度アイツとサシでやりたかつたというのもありそうだがこうして親を助けるチャンスをもらつた。

生かせなければジョーカーに二度と顔を向ける事も脚を向けて寝ることも出来ない。

「聞こえますか。アリアンロッドの兵士。僕の名前はユウ・タービン。単刀直入に言います。今回の件は免罪です。証拠もある。何故貴殿方がこのような行いをしたのか。タービンスである我々には全くわかりません。今回我々を攻撃した理由としては違法兵器であるダインスレイヴの所持並びに運搬と聞いております。しかし現在この宙域から抜け出す直前の輸送船にもこの船にもそのような物は確認されておりません。敢えて言うならば確認されたのはダインスレイヴに近い兵器です。その兵器は並みもモビルスーツの火力でもダインスレイヴには届かない代物です。出来てモビルアーマーの通路を遮断するために石板を崩す程度です。少し前の話ですが貴殿方ギャラルホル

ンのアリアンロッド艦隊のモビルスーツ隊がモビルアーマーを目覚めさせました。その事実は貴殿方もよく知っているものだと思います。そしてその目覚めたモビルアーマーの討伐に使用したのは今あるダインスレイヴに近い兵器です。我々はギャラルホルンと敵対する気は毛頭ありません。平和な解決を求めます。今から貴殿方のところへ出向きます。今度はこのような場ではなく、正式な場で会いましょう。……冷静な判断をお待ちしております」

これが彼がアリアンロッド艦隊に言った言葉だ。

皮肉を込めながらも怒りの感情を抑えて言った。産まれて初めてこんなにも長い言葉をつつ本番で言ったものだ。

敢えて言わなかったが今アンドラスが持っているレールガンは敵艦隊の重要な戦艦、おそらく今回の作戦の指揮をしている者が乗っている戦艦に狙いをつけている。

アンドラスが背中を押すように手に温かさが来る。それに応じるようにその手を擦ったあと、敵戦艦を見る。

どうくるか。

相手の司令官もライルを率いる事から馬鹿ではないだろう。ならばレールガンが向いていることも知っている筈だし、こいつらにとってはタービンの崩壊もそこまで重

要度は高くない筈。ここで死にたい訳がない。

確かにメンツは丸つぶれだろうが死ぬよりましだろう。

そう思っているもの、引き金にかけている引き金に力がかかった。

すると安心させるように全身に温かさが来る。それが少し面白くてそこまで心配しなくてもいいよと呟くとそれが収まる。やっぱり彼女はこういう人だ。いや、人か？

そう思っているとレーダーの範囲内で行われていた戦闘が終わった。相手の方も通信でもしたのだろうかと思う。

映像で確認するがジョーカーは最後に見た状態が続いていたらしく、機体の損傷は変わっていないかった。エストも動きが止まっているが命に問題は無さそうだ。

それを確認するとアマダ機に肩を捕まれてその影響で接触回線が開かれた。

「ユウ。これが終わったらたつぷりと叱ってやるからね。覚悟しな。．．でも、ありがとう」

「うん」

誰かを切り捨てることで得られた物があると少々悲しくはある。けどそれが現実なんだ。だから僕はそれに乗っ取って家族を助けなければならぬ。

これで終わりだ。このあと適当に交渉かなんかすれば何もなかったように次が開ける。

そう思っているとギヤラルホルンから通信が来た。アミダ機の通信越しにも聞こえることからタービンス全機に放送しているようだ。

「こつ、こ此方は！ギヤラルホルンアリアンロット艦隊の！いい、イオク・クジャンだ！そちらの話は理解した！此方も攻撃を止めよう」

確定した。

今回の作戦は……成功だ。みんな生きているし、仕事も続けられる。後は交渉と事後処理のみだ。

良かった。本当に良かった。

「……感謝します」

そのままゆっくりと頭を下げて、レールガンをおろした。そして通信しているアミダにやりきった顔で笑った。

この判断がミスだとは気付かずに。

第51話 タービンス

「イオク様、よろしかったので？」

乱入してきたモビルスーツの内一機に狙いをつけられた挙げ句、煽られた無能代表イオク・クジャン。

元々この作戦は通常通り行ってもラストルの許可無しに勝手にやっているのですからお咎めなしになる筈無いのに、ライルまで引っ張ってきて、そして自分の命に大きな損傷を起こすピンチ。

そのシヨックで伸びていたのだが部下に起こされて今に至る。

なんとか時間をかけて落ち着いて行くその姿に一代前のクジャン公を重ねたものは誰一人としていなかった。

中には何故イオクはこのような男なのかこのような男として生まれてきたのかという疑問が頭の中から出てきたものもいるほど。

どちらしろこの危機的状況を何とかするのに手はなかった。

「何故なんだ！私は……」

イオクもとりあえず慌てながら応じたものの、通信がきれると同時に項垂れた。オペ

レーターはその様子を見ながらモビルスーツ隊に武器をおろすように伝える。もうピクリとも動かない上官に頼るものなどいない。

十数秒たったあとにイオクはゆっくりと頭を上げる。絶望に満ちたその表情はまるでこれから世界が終わると告げられているようだ。

「こんな野蛮人に……屈するなど……私はラスタル様の隣にはたてないのか……!!」
自身の無能さに少しは気付いたのか涙を流しながらまたうなだれる。

しかしこの件の責任等が何処へ行くかということはわかってないらしい。ただ、自分が無能だと思っていた相手にここまで損害を広げられるとは思ってなかった。

「ラスタル様の隣に立つために、時には己の命を守る覚悟が必要……」
ボソボソと呟きながらもイオクは落ち着いていく。

あの一言で敵の攻撃は止まったのでオペレーターはひとまず安心するがこのあと自分達にも責任が来ると考えるとゾツとする。

やはり倒しておきたい。しかし今の力では難しいこともまだ事実。
「イオク様、タービンスからの使者が来ます。どうなさいます?」

そう言いながら振り向いたオペレーターはとりあえずモビルスーツデッキでも開けておくかと思いつきながら一応イオクにいう。

その瞬間イオクの頭に一つの案が浮かんだ。

いままで無能と言われ続けたイオクだと考えれば頭の使いかたがわかったと取れるだろう。

「そうだ！内部通信でダインスレイヴ隊に言え！今、私が言葉で敵に武器をおろさせた。そして…」

「我々に向かう悪を殺せとな」

そのときのイオクの顔はまだ撃つてすらいなのに勝ち誇っている顔だった。

その顔にオペレーターは恐怖を抱き、それがダインスレイヴ隊に伝わることとなった。

最悪の案が伝わった。

「いってえ…」

「ハイハイ。ジョーカー、お疲れ様」

相変わらず扱いが悪い男を開けたコックピットから見る。機体の損傷度はすごく本人の身体も結構限界だった。この機体ではフロンフに戻ることに難しいだろう。と
「いか不可能だ。誰かに引っ張って貰うしか無さそうだ。」

「良く生きてる…」

「悪口か？」

「ええ」

戦闘も終わったのでシュインもジョーカーの扱いが軽い。対するジョーカーもやりきったからか、それを悪く思わなかった。もう思うほどの余裕もないと言った方が正しいか。

「どちらしろ。あいつはやりやがった」

「うん。やるよ。だってゆーちゃんだもん」

そういうシュインの顔はこの上ないくらい輝いていた。

束の間の希望もすぐに潰えた。

「ダインスレイヴ隊！発射！」

数多の数のダインスレイヴから火花が飛び散った。

ハンマーヘッド周辺。

何か悪いイメージをアンドラスから受信したユウは回りを見渡す。

今からアリアンロッドへ行こうとするのになんというイメージを送ってくるのだろうか。

まさか嫉妬……等もないだろう。アンドラスがそのような事をするのは初めてだ。

そう思ったその時、今度はアンドラスからではなく、戦士としての勤が働いた。

その時避けていればすぐにアリアンロッド艦隊に発砲出来ただろう。しかし今回は悪く、気づいただけだった。

「ユウー」

何かがアンドラスを蹴飛ばした。衝撃が来ると同時に物凄い轟音が轟いた。目の前でミサイルでも着弾したのではと思うほどの音。

鼓膜はやられなかったものの、衝撃で一瞬気を失った。

そこから目を開いたそこに飛び込んできた映像を見て、自分の目を疑った。見慣れたピンク色の装甲。そしてピンク色の百鍊の左腕。

「ああ…」

止めるもののないその破片がアンドラスに当たり明後日の方向へと行く。

フレームはネジ曲がり、そこから破片が散らばり、その回りに電撃が走る。ネジ曲がったフレームはヒビがはいり、身体能力最強の人間の力でも折れそうな勢いだった。

勢いが強すぎたのか当たったとは思えないメインカメラにも損傷が見れる。無理に動いたのだろう。もう人形ではなかった。

「ああ…」

意味のない嗚咽がまた口から漏れた。

驚きという感情どころか悲しみも生まれなかった。

ただアンドラスにやられたときよりも多数の情報が頭のなかを巡り、そして動かなくなつた。

ろくに頭が動かない状態でポカんとすることしかできない。

普通ならすぐに駆け寄つただろう。助け出そうとしただろう。けど真つ白になつてしまつた頭には何も入つてこなかつた。

そしてゆつくりと頭の機能が戻つてくる。

真つ白になつて動かなかつた脳に感情というものが出てくる。

「母さんー」

まだ完全に戻つてはいないが必死に百鍊にしがみついた。アンドラスのアームでコックピットを抉じ開ける。

コックピットもひしゃげていて中身は確認しなくても読めていたのかもしれないが、今は頭がそこまで回らなかつた。

アンドラスのコックピットから出て、百鍊のコックピットに侵入する。

何も無い状態であつてくれ。と無理なことを願う余裕が出てきた。しかし、その余裕もすぐに奪われた。百鍊の側に浮いていた破片を手で押し退けると、そこには当たり前だがパイロットのアミダがいた。

しかしそれは酷い有り様だった。

コックピットの所々がび割れ、その隙間から電子部品が見える。

アミダの身体には何処かのパイプが土手つ腹を貫いていたのだ。そこから赤黒い血が止めどなく溢れてくる。そのパイプはコックピットシートにまで突き刺さっていた。ノーマルスーツの赤くなり、いつもは着けないはずのヘルメットのバイザーはび割れていた。そこから本の少しではあるが空気を感ずる。顔も気があるのかないのか確認出来ない。パイプを引き抜けば運べるだろうがそうしてしまうと、血の量が増える。どうすることも出来なかった。

何故だ。

後1秒。あと1秒だけ早く気づけていれば！

医療スタッフじゃないからって軽い応急措置だけではなく、これほどの重体患者の応急措置を知っていれば！

僕がすぐにイオクとやらを撃っておけば。殺していれば！

殺す事が出来るのなら、それを守る力に変換できた筈だ。出来るはずの力はたっぷりあった。何故出来ない！いや、何故しようとしなかった！

アグニカ・カイエルという英雄に憧れるだけ憧れてその力を得るために何故全てを投

げ出そうとした。

僕が殺したような物だ。

親孝行をしたいなどとほざいておきながら結局は親に守られている。

そう思つて何も動くことができない。その僕に何かが当たる。アミダの手だった。そして優しく言う。

「ユウ…… かい？ 悪いね。ちよつとよく見えないよ」

「…… つ！ 僕だ。僕だよ。ユウだよ。母さん！」

ノーマルスーツにある空気もそこまで多くはない。すぐに限界を迎えるだろう。そしてたら待つているのは、死だ。

「ごめんなさい…… 僕のせいで」

「大丈夫。あんたはよくやってくれた。私こそごめんね。あんたに…… 教える事が出来…… たのはのはひとつ……」

「そんなことない！ 僕は沢山貰った。人として一番大切な物を家族に貰った。人殺しなんて教えてもらつてない！」

涙が溢れる。それを拭うこともせず、はつきりとアミダを見た。アミダのかき消された。そうなの声一つ一つを聞き逃さないように。

「ああ：： そうだね。ユウ。今度はあんたが与えるんだ：：。生きて、与えるんだ。あんたなら出来る：：。なんとって：： 名瀬と私と：： あの子の子供なのだから」

わかっていた。アミダは子供が産めない身体。なのに何故自分に私がお母さんだと言ったのか。

それは自分の本当の母親がもういないということ。

「うん：：」

アミダの手から力が抜けていく。血がバイザーに付いた。視界が歪むがそれすらもわからなかった。

「僕はいつか父さんを越えるような立派な人間になるよ。そして刻^{とき}すらも支配して見せる。だから：：」

「ああ。あんたなら出来る。気がする：： よ。あんたが目指：： すアグニカすらもなし得なかつた事を：： 行きな。生き抜くんだ。負けちやいけないよ。あんたはもう最強の：：」

アミダの言葉がどんどん小さくなっていく。手の力が抜けて僕をコックピットから出す。

「狙撃手^{スナイパー}なのだから」

「くっ：：」

百鍊のコックピットから身体が出ていく。その自分を包み込むようにアンドラスが自身のコックピットに入れた。

そうしてアミダの動きが止まった。

アンドラスも何も言わなかった。

静寂が訪れ、そしてしつかりとした声が聞こえた。いや、感じた。

「名瀬：：私らがいなきやあんたは咲くことができない。だったら私は：：名瀬、見せてやるよ。とびつきの輝きを」

百鍊がライフルを握りそしてその引き金を抜いた。

その衝撃に耐えられず百鍊は崩壊した。

爆発にアミダは吞まれてもう死体すら回収出来ないだろう。

「母さん：：ううっ：：ぐっ！」

すぐにハンマーヘッドに近寄って通信を開く。

今さっきした誓いを訂正するわけにはいかない。

死んではいけないんだ。もうこの命は僕だけのものじゃない。

涙を拭くこともせずにハンマーヘッドと通信を開く。

「父さん！すぐにハンマーヘッドを出て！ランチ位あるだろう！脱出を！」

そう呼び掛けるが名瀬の反応は薄かった。

「いや、アミダを一人で逝かせる訳にはいかねえ。行けよ。ユウ」

「何言っているんだ！こんなときに！」

無理矢理でもアンドラスを振り込ませて名瀬を救出しようと考えたが名瀬がノーマルスーツを着ているとは思えない。それに…… さつきの言葉。

彼には命より大切な物があるのだ。それを守るための時間としてそして、愛する人のそれを守れなかったから。自分もそこへ行きたいと。それを止める術は僕にはない。けど

「僕はまだ、何もしてやってないよ！親孝行くらいさせてよ！」

「もう充分だ。ユウ。お前には沢山貰った。親孝行なんて考えなくていい。もし考えるなら俺達の家族を守ってやってくれ。それがお前に出来る唯一の親孝行だ」

ハンマーヘッドは止まらず、動かないアンドラスの横を通り、アンドラスを隠す。

この次に待っているのは親の死だ。そんなの許してはいけな。そうだ。抗わなければならぬのだ。しかし身体がうまく動かない。

「父さん！待って……！」

手を伸ばすがアンドラスに阻まれる。コックピットのその壁を越えて伸ばしたいのに、何も変わらない。コックピットの中でもがいているだけだ。

何で守れない。何で力をつけられない。何で弱い。何で動かない。
何で。

「うう。うおおおおつ!!」

雄叫びを上げる。これならアンドラスは動いてくれる。いつもの彼女なら僕に力を与えてくれる。

しかしいつまでたつてもアンドラスは動かない。操縦幹を動かしてもアンドラスは動かない。

「どうしたんだ! アンドラス! 僕はもう何も失いたくないのに! 動け! 動いてくれ!」

アンドラスは沈黙して何も言わない。

もがいても、唸っても。何も変わらない。

どうして。どうしてなのだろうか。どうして、僕はこんなにも。

無力なんだ。

「父さん!」

ハンマーヘッドにダインスレイヴの槍のような形をしている特殊弾丸が突き刺さる。一発ではない、二発、三発。何発も刺さりハンマーヘッドは黒い煙を上げる。それでも

止まらずに真つ直ぐ突つ込んでゐる。

また声を感じた。今度は父さんの声。

「女は太陽なのさ。太陽がいつも輝いてなくつちや男つて花はしなびちまう。いつも笑つていてくれよアミダ。強く激しく華やかに笑つていてくれ。そうすりや俺はどんなときだつて顔を上げることが出来る。お前つて太陽に照らされてりやあ俺は……」

それ以上は聞こえなかった。

ハンマーヘッドはギャラルホルンの戦艦にかすつた後、そのまま一つの戦艦に当たり、爆散した。

それはハンマーヘッドがよくやる、突貫に似ていた。

いや、それだ。最後の最後に船を一つ沈めてハンマーヘッドはその生涯に幕を下ろした。操縦席にいた名瀬・タービンと共に。

最後のあがきで船を一つの沈めたのだ。

「あ、ああ……僕は……僕は……ああ。ああ……」

涙が止めどなく溢れてくる。それを止められる者はこの世界を探しても誰一人とていない。

何人もの人が泣いた。悲しんだ。

それほど愛されていたのだ。彼らは。

そしてもう二度と会えないという喪失感を感じる。そして：：無力さを。

「うっ：： うわあああああああ!!!」

ただ泣き叫ぶことしか出来なかった。

助けに来て、何も出来ずに：：終わった。

「逝ったか。タービン」

J P T トラスト編

第52話 遺されたもの

一人の女が死んだ。一人の男が死んだ。美しきつがいの死は愛の名のもとにあった。しかし残された者にとつて彼らの死は冷たく重い鉛の十字架となる。

「うわああああああ!!!」

彼には失った物が多すぎた。

これまでの記憶が一気に頭に突っ込んできて、それと同時に悲しみの感情が支配する。

結局泣き叫ぶことしか出来ない少年はただ泣いていた。

しかしこれで終わりではない。

「そんなアミダさん… 名瀬さん…」

「あの火力… やりやがったな。アリアンロッドめ」

端から見ることは出来なかった二人も。

まだ終わりではない。

まだアリアンロッドは健在なのだから。

すぐに、ダインスレイヴの次弾が装填される。

それに一番早く気付いたのはジョーカーだった。ボロボロの機体を動かして体制を整える。ノーマルスーツを即座に整えてペダルを踏む。

「シユイン。すぐにエストを回収後フュンフに戻れ」

「どうするつもり？」

シユインが離れていくジョーカーに問う。アリアンロッドとの対戦に敗北したのがそのトーンはいつもの変わらなかった。少し安心というのは違うが戦場にはいないように感じた。

「ユウをここから逃がす」

逃がす。その言葉からまるで自身をここで投げ出す。という風に聞こえた。それに気付くが確かにそちらの方が確実だろう。

「ジョーカー。それってつまり……」

「どうせもう限界だ。なら託したい物がある」

ジョーカーも死ぬ覚悟をしている。ならばここでそれを駄目というのは彼にとって失礼にあたるし、どちらにしる行くだろう。ユウに生き残る可能性があるならそこに掛けたい。

「： わかった。すぐにフュンフを発進させてこの宙域から逃げるからそれまでにゆーちやんだけは助けて」

「わかつている」

ユウはこんなところで死なせてはならない。ろくな話し合いもしてなかった救えなかった後の話だがその二人の意見は一致した。

「なかなか楽しかったよ」

「俺は嫌な目で見られただけだったけどな」

「ううっ… 僕は… この…！」

どうして僕は。ユウはずっとその言葉を繰り返した。

僕は自分の事を強いと思っていた。はじめての操縦でアンドラスの加護があったとはいえ、正規兵に勝利したのだ。モビルスーツを操縦したことの無い僕が訓練した兵に勝つ。才能という物を信じた。それと同時に現状では満足していなかった。だから僕を越えたアミダやライルを越えたいとずっと思っていた。僕より強い人間がいるならもっと強くなりたいと。

その中で力の… 強さの象徴であるアグニカ・カイエルに憧れた。彼になる… 事は不可能だが彼のような人間になることでもっと強くなれる。そして誰が出てきても倒

せる。そんなパイロットになりたかった。

得るのは嬉しいのに、失うのは嫌う、わがままな人間だから。だからこそ、家族も誰一人として失いたくなかった。

そのわがままな感情があるから僕は強くなれないのか。わがままとはただの甘えだ。僕は甘いから、弱いのか。

強いと勝手に思って思い上がった罰なのだろうか。だとしたら僕は……それを決定した神を憎む。目の前に出てやってこの世で一番残酷な事をして殺してやりたい。僕は……嫌いだ。

罰をするために僕を殺すのではなく、僕の大切な物を狙った物を。結局は他人から奪うことしか出来ない者を。

許さない。許してはいけない。

殺したい。

殺してやりたい。

自らが神と思っている、アリアンロッドを。たとえ神であろうと殺してやりたい。殺す。クロスクロスクロスクロス！

「殺せ、アンドラス。醜い者をこの世から排除しろ！」

アンドラスに命令を下す。

アンドラスのその両目は死んだように輝かないが先程とは違いアンドラスが動いた。その時駄目という声が聞こえた。その声の正体を探る余裕はない。

「駄目だと。何が駄目なんだ！ いままでだって！ さんざん殺してきた。何を今さら！……もういいよ。僕は殺すだけだ」

アンドラスを動かす。アンドラスは何も答えてはくれないがその身体は容易に動いた。システムの補助も消えたがただ、他のモビルスーツと同じ状態になっただけ。

逝ったのか。と一瞬考える。ならばその願いも乗せて、殺す。

目の前に入ってきたのはアミダとやりあっていたモビルスーツ。おそらくアリアンロツドの新型。そうだ。母さんはこいつに殺された。こいつが無駄な事をしなければ死ななかったのかもしれない。

こんなやつに……。こんなやつのおかげで。母さんは……。死んだのだろうか。

「ははっ」

乾いた笑いをしながら殺気を出さないそのモビルスーツに飛び付く。レールガンでスラストを即座に破壊してミサイルでコックピットを炙る。

中身のパイロットにも熱が伝わって……。死ねばいいのに。

「お願い。死んで」

少しづつ、感情が消えていく。

憎悪も、怒りも感じなくなっていく。

あるのはただ、殺さなければならぬという使命感だけ。

アンドラスに殺せといったが、そのために動いているは自分だ。でもそんなの関係ない。誰でもいい。誰でも良いから殺さなければならぬ。

接触回線が開かれる。

そこから聞こえたのは一人の女性の声だった。若い女の声だった。家族の中にも沢山いる世代だ。

しかし感情は出てこなかった。感情のままに殺す訳ではないのだ。勿論多少感情はある。しかしそれは少しづつとはいえ、なくなっていく。

「私はーラスタル様の剣ーラスタルのために！」

ふいに口が動いて音を発した。

「もういいよ。喋らなくて」

その言葉が善意から来たものではないだろう。何処か自分を客観的に見るようになった。まるで自分が自分でないみたいだ。ただ、殺さなければならない。破壊しなければならぬという使命感ばかりが前に行く。

まるで死んだ魚のような目をしながら目の前のモバイルスーツを少しずつ破壊していく。その様子は悪魔のように映った。

「あつ… うつ！悪魔め…」

敵モバイルスーツパイロットの少女も恐怖にからだは動かなくなっていく。その声を聞いて一瞬誰かを想像した。その影響かかわいそう。苦しそう。と思い、感情が出てくる。

「待つてて。すぐに楽にしてあげる」

しかしそれはすぐに薄れていった。ゆつくりと薄れていく敵モバイルスーツのパイロットよりも早く意識が消えていく。

その時誰かが問いかけてくる。

——何故彼女が苦しんでいるか、わかる？

死にそうだから？痛いから？怖いから？

——じゃあ、それを与えているのは誰？

僕だ。殺そうとしているのも、苦痛を味会わせているのも。怖い思いをさせている奴も。みんな僕だ。

——貴方がしたいことは何？復讐？彼女を攻撃することが復讐になるの？

なんだろう？わからないや。僕はただ、奪われたのが悲しかった。お母さんが、お父さんが目の前で無様に奪われていくのが悲しかった。

——だから彼女に当たった。彼女に同意を求めたの？彼女が苦しめば貴方の悲しみ

は無くなるの？

無くならない。なんで？どうして無くならないの？彼女だって死にそうなのに。どうして？同じ状況にしくちやならないの？

——相手に苦しみを与えたってあなたに来るのはそれでも晴れない虚無感よ。考えなさい。自分がどうするべきか。死んだ人達が貴方に何を望んだのか。

生きること。そして、家族を守ること。父さん達が命をかけてそうしたように。僕は守りたい。守らなくちやならない。

——そのために彼女を殺すの？

違う。それは違う。今必要なのは危険なここからの脱出。

——やっとわかったようね。そこまで分かれば充分。後は守りなさい。大切な人たちを。その為にはすべてを犠牲にする覚悟をつけなさい。

わかったよ。

「アンドラス」

ゆっくりと薄れていったものが戻っていく。

まだ悲しいが、それよりしなければならぬ事が頭に出てきた。ずっと目から出てきていた涙を拭き取る。

「ユウ！」

ジョーカーが寄って来る。それに気づいた瞬間にアリアンロッドの新型を蹴り飛ばす。その影響でパイロットが生きてようが死んでようが構わない。此方には関係がない。それより大切な事をしなくてはならない。

「大丈夫か？」

「うん。父さんと母さんはもう死んだ。軍配はあつちに上がった。でもまだ終わらない。終われない。僕はここから出たい」

ゆつくりと落ち着いていく中でジョーカーにそう言う。

結局僕はわがままなようだ。

いつだってそう言うわがままをみんなに聞いて叶えてもらった。ならもう少し、あと少しだけ甘えるか。そう思いながら操縦幹を握り直した。

「：：なあユウ」

ジョーカーが話し掛けてきたのでそちらの方を見る。ジョーカーの機体はもう限界だった。なんだかんだ言って機体に無理をさせなかったジョーカーだが、今回ばかりは損傷が酷い。

「俺の機体は限界だ。そして、今の状況。わかるか？」

なんとなくその次の言葉を察した。

その事にOKをするかどうか。それが今僕にかかっている。

ここで僕がいいよと一言いえばジョーカーは特攻か、攻撃を仕掛けてその間に逃げろとでも言うだろう。つまり困だ。ジョーカーの事だから殿を勤めるとでも言うのだろうが死ぬことにはかわりない。しかしその機体の損傷では、フュンフにいれないと戻ることすら不可能だろう。あの位置にいたとしてもそれで今ここに来た。つまり……もう生きる気がないということだ。

「ごめん。ジョーカー……僕が弱いせいで」

「お前に責任はねえ。あるとすればそれはあいつの剣技を避けられなかった俺だ。でも戦場ならよくあることだろ。気にするな」

今から死に行く人間の台詞ではない。そう他人事のように一瞬感じた。

しかし彼は最初からイプシロンの一員だった。今だつてそうだ。これから。死んだつて変わらない。

「ジョーカーいままで事、感謝する。そしてすまない。本当は酒でも交わしながら交流したかったが」

「結局そんなことは一度もしなかったな。まあいい。お前があんな女たちを愛しているのはよくわかった。守つてやれよ。守れなかった俺の代わりに」

最後は何か思わせるような言葉を言つてアンドラスを押しした。その軽い衝撃が最後だと言ふことを理解してアンドラスを頷かせた。後は任せろと言ふように。

「しっかりしろよ」

僕が聞いた彼の声はこれで最後だった。

もうこれ以上構うと彼の行いが無駄になる可能性もあるのでそのまま見捨てるように……. というか実際見捨てているが、そのままフンフへと戻るためにアンドラスを駆った。途中で浮いていた百鍊の左腕を回収して。

振り向かずに戻った。

「さてと。最後の仕事はとても充実しそうだな」

第53話 ジョーカー・クラウド

「さてと。最後の仕事はとても充実しそうだな」

画面を見ながら獅電にフュンフとは逆方向を見させる。

武装は鎌に追撃砲のみ。ライフルとシールドの類いは鎌の邪魔だからパージしてきた。

スラストアーのガスは勿論少ない。今から本隊に戻れないほどのなだ。

メインカメラの損傷は特に酷い。完全に割れてしまっている。現在サブカメラに引き継がせてなんとか整えたがそれでも画質が悪い。装甲は傷付き、基本的な低威力のマシンガンでも浴びてばすぐに破壊されるだろう。一番大切なコックピットもそうなのだ。

「まあ、でもユウが近くの機体をボロボロにしてくれたのはラッキーかな」

鎌を担ぎながら装甲が近くに漂う機体を見る。武器も完全に引き剥がされていて、結構痛々しい。まるで悪魔に補食されている最中のようだ。

「こんなひでえの始めて見た……ん？」

先程の情報を整理するとこの機体はほとんど動けないだろう。此方に悪い影響が発

生するとは思えない。しかし、パイロットの安否が確認できない為、人質には不可能だろう。でも使えるものはまだある。ちょうどここには他のモビルスーツもないし、この武器はかかっておく手はない。

蛇腹状の剣を一本盗み、鎌を担ぎながらそのモビルスーツを反対方向に蹴っ飛ばす。一応アリアンロッドの兵も人ならパイロットの安否確認程度はするだろう。その時間分、気を引ける。

目的を見失うな。俺は今、死ぬだけとはいえ、目的はユウ達をここから逃がす事。即ち、敵の視線を釘付けにすること。

「さてと、行くかー」

ペダルを踏んで獅電を敵の艦隊に突っ込ませた。ユウの言っていた禁止兵器の射程だが、こつちに向かないことを期待して、スラストを全開に開ける。

モビルスーツに乗っているとは思えないGが体に来るが気にしない。どちらにしろこれで終わりなのだ。だったらおもしろい潰す。いや、切り裂く。

敵の艦隊にはすぐに近づけた。

その艦隊の前には扇状に広がったモビルスーツがいて、そのモビルスーツは大型の武装を持っていた。そのモビルスーツであるグレイズもカラーは宇宙用だけで特殊な所は無いのではないかと思われる。しかし遠距離射撃をするのだから専用のOSはつ

いているだろうと思う。というかついていなければおかしい。おそらくその武装はダインスレイヴという禁止兵器だろうと推測する。

しかしその武装はフロンフの方向に向いていた。遠目とはいえ、そこまでではないと思われているのか。それとも先程武器を盗んだモビルスーツと間違えられているのか。どちらにしろ好機。

それも敵から見れば妙に映ったらしく、此方の射撃武器の有効射程に入つてやつと敵に殺意を向けられた。

「まだまだ抗うぞ。おせえー！」

追撃砲を連射すると同時に高速マニューバで下に潜り込む。扇状の陣形の為、高速マニューバを使えば一撃程度ならギリギリかわせる。元々ここまで接近出来た。射撃のタイミングがわかった。邪魔をするモビルスーツがなかったので自由に動けた。元々此方のスイッチが入つていて、相手側のスイッチが入つていなかった。もしくは此方に殺気が向いていなかった。という事が大きいため、自分がかわせなかったメンバーより上とはとても言えないがそれでもかわせたのは大きい。

鎌を横風ぎに降るつてダインスレイヴを持つている先頭のグレイズを切り裂く。艦隊側にはダインスレイヴを持つているモビルスーツと何故か武装の無いグレイズに似ているモビルスーツ。確かフレックグレイズという名前の機体があった。問題はダイ

スレイヴだが流石に戦艦に近づけば撃つては来ないだろうと思う。同士討ちなんて、敵である俺に殺されるより嫌な筈だから。

そう思いながら止まらずに動いて、グレイズを翻弄する。これではマトモに動けない。ユウのアンドラスの《スナイプモード》と同じ。敵モビルスーツがこちらを狙おうとしてもダインスレイヴをあまり動かそうとはしない。まるで割れ物で扱うようにゆつくりと動かして、補足しようとするが、当然の事ながら補足できる筈がない。

まあ、ここにユウレベルのパイロットが話は別だが。

「いるわけ無い」

そう吐き捨てながら鎌を一見乱雑に見えるように振るう。破壊されたグレイズが二機、バラバラに分解されていく。斬られた後はまだ綺麗でスパツと簡単に斬れていく。そのまま勢いに任せて何機も切り裂く。

ここでダインスレイヴの弱点が浮き出る。接近戦闘に異常に弱い。移動が遅い。切り替えが出来ない。一回撃つてから装填が難しい。簡単にやろうとすると二機以上使うことになる。その装填用のモビルスーツも武装が小さく、数も積めない。つまり攻められたその瞬間一気に劣勢となる。特攻に弱い。

タービズ、名瀬・タービン、アミダ・アルカ。ダインスレイヴに破れて死んだ彼らのおかげでここまでたどり着けた。本当の役目はあくまで殿をつとめる事だが、相手の

気を引けて、イプシロンはもう確認出来なくなったのでよしとしよう。

「さらばだ。イプシロン」

そう言つて、敵モビルスーツの破壊を加速させた。

「……そう。ジョーカーが」

「うん」

ダインスレイヴの有効射程から逃げ切つたイプシロン。

フუნフの司令室にてイプシロンの重要メンバーが集まっている。アガートもジョーカーの事を少しでも考えただけ考えがすぐに思考を戻した。兎に角今はダインスレイヴを逃げ延びることが出来た。

しかしその敗走は仲間を捨てた事による物だ。残つた者はひとまずこの戦いは生存することが出来たということだがまだ問題は多い。

テイワズという後ろ楯を失う。つまり始めから地固めをしなくてはならないと言うこと。守りたい物も守れず、後ろ楯も全てを失つた。逃げるために仲間を切り捨てた。完全敗北だ。

母さんと父さんが言っていた。家族を、タービンスの女達を守ってくれと。だから守るんだ。元々言われなくてもそれが自分の存在価値なのだから。とユウは思いながら壁に凭れる。

「エスト兄さんも命はとりとめた物の、意識がない。命に問題は無いけど、重症だ。最悪もうモビルスーツに乗れないかもしれないって」

エストも心配だが、それ以外にも問題はあつた。エストも優れたモビルスーツパイロットとして今まで戦つてくれた。ジョーカーも切り捨てた為、モビルスーツパイロットとして今すぐに戦える人が僕とシユインしかない。

この世界において、力が必要な物だ。力がないということとは簡単に襲われる。それは避けたい。襲われた場合簡単に倒せるとは想えない。だから、このあとどうするか。それを考えなくてはならない。

とりあえずいくつか手はある。

一つ、このままイプシロンをテイワズから独立させて、一つの組織として僕がみんなを守っていく。

これは最も可能性が高い手だが、最も守るのが難しい手だ。今の僕にはテイワズの狙撃手という二つ名はない。そして今イプシロンは女だらけの組織だ。海賊など野蠻で汚い者共からすれば格好の獲物だ。僕はそれを殺戮しなければならない。大抵が弱い

だけの奴とはいえ、量を持つている物もいる。つまり結構難しい。

二つ、鉄華団に保護してもらおう。あわよくば鉄華団として入団してそこから孤立してタービンを作り直す。

これは関係がひっくり返ることとなるが可能性は高い。でも、それで良いのだろうか
と僕の中の感情が言う。

三つ、テイワズに入れるかどうかはわからないがマクマードに交渉する。

これは一番可能性が低い。勝手に出ていった孫を受け入れるとは思えない。ただの家族ならともかくこれはテイワズという一つの組織なのだ。そこまで現実には甘くない。

そして四つこれも出来るだけ取りたくない手だ。

今手を取れるとは思えないが、反ギャラルホルン組織のレヴォオルツ・イーオンにバツクについてもらって運び屋を辞めて単なる武装組織となること。

なんかレヴォオルツ・イーオンという名前が温かく聞こえるのは……僕だけだろうか。どちらにしろ今から動かなくてはならない。

「とりあえず今から行けるところを整理しよう。火星、もしくは歳星だ。可能性が高い方にかけるなら鉄華団だ。父さんが残した鉄華団との関係でなんとか出来るかもしれない」

とりあえず僕の一存では決められないのでレヴォオルツ・イーオンを避けた方が良いだ

ろう。一番可能性が高いのは先程言った通り鉄華団との同盟もしくは合流、入団だ。団長さんもあの様子だと引き受けてくれるだろう。

上がりはなに食わぬ顔でテイワズに入ることだ。

そう思っていると何処から通信が来た。

考え事をしたため、わからなかった僕より先に、アガーテが通信をとった。

ある程度話をしたあとこちらを振りかえって言った。

「ゆーちゃん。マクマードさんから」

その数時間前。

歳星のマクマードの住宅。そこにはとある客が来ていた。自身の所属を隠す気は更々なく、制服を着ている金髪の男。

「それで？ギャラルホルンのお偉いさんがこんな組織に何のようですか？」

マクマードが敬語になりながらも接する相手それは、ギャラルホルン、グラディオンのリーダー。マクギリス・ファリド。自身の前髪を弄った後に口を開く。

「我々の革命に手を貸してくださいさらないでしょうか。特にテイワズの狙撃手。ユウ・タービン君には協力頂きたい」

マクマードはオルガからマクギリスの話を報告を受けていたのでなんとなく言いたいことがわかった。つまり、ギャラルホルンの内部戦争に参加しろということだ。

しかし今は問題がある。彼が要求しているユウ・タービンは此方が止めたにも関わらず、歳星を飛び出して親父であり、もうテイワズではない名瀬を助けに行つた。もうテイワズから除名しようと思つていたので。

「すみませんねえ。ユウ・タービンは此方の事情でテイワズから除名しようと考えています」

「タービンスとアリアンロッドの抗争です」

殺戮、抹殺という言葉をあえて使わずにマクギリスは言う。

マクマードは一瞬だけ目を見開いたがすぐに戻る。マクギリス・ファリドも知つていて当然なのだ。ただ、アリアンロッドじゃないからと言つて知らない筈が無いのだ。

「しかし、それを言われたのは名瀬・タービン率いるタービンスであり、彼が所属しているイプシロンではない。彼はあの辺りをいたときに家族が襲われていたので戦闘に参加した。ただ、それだけです」

「奴の肩を持つてののか？何故？」

マクギリスがさも彼は関係ないと言うのでマクマードの目にもおかしく映つた。当たり前だ。まずマクマードでなくてもそう見えるだろう。

「私は彼の姿にアグニカ・カイエルを感じました」

「——っ！」

マクギリスのその一言で場の雰囲気は一気に変わった。知っているマクマードと知らないものの、人間的に感じ取っているマクギリス。双方の考えが読めないからこそ、雰囲気は一気に重くなる。

「何か、ありましたか？」

「いえ、アグニカ・カイエルという名を小耳に挟んだ事があって…。それで。ユウにアグニカ・カイエルを感じたとはいえ、そこまで擁護するほどですかね？」

その言葉は地雷だった。

マクギリスが軽く笑ったその瞬間から察するべきだった。

「では、今からアグニカ・カイエルがどんな存在で何故私が彼とアグニカ・カイエルを重ねたのか説明しましょう」

「いや別に。私は大丈夫…。」

「となると厄歳戦についても話す必要がありそうですね。まずは…。そうだ。今から約300年前に遡ります。エイハブ・バラエーナ博士とプラージャ・カイエル博士があつてモビルアーマーを制作するところから始まりましてね…。!!」

その後普通の人ならどんな説教より嫌な数時間に渡るアグニカ・カイエルと何故彼と

ユウを重ねたのかの説明をされた。言っていることは充分分かりやすかったが何せ長いせいで途中からユウという一人の男の存在価値を考えていた。

目の前に出てきたモビルスーツを全機破壊した……と言うわけではないが、いままで鉄華団等の相手をやっていたモビルスーツが見えてきた。やり過ぎたな。と自重が出来ない自分を笑った。

ここまでこれはもう適当に動いてもユウ達は助かるだろう。俺が抜けたその後の事を考えたがその考えはゆつくりと頭から消えた。

ここからはもう誰の意見とか関係ない。自分自身で自分の死に方を選べる。コックピットの中で自害するもよし。自爆するのもよし。道連れを増やすもよし。

好き勝手に動いていいのだ。

「さてと、これからは俺の好き勝手に動いていいんだよな」

そういつた瞬間。それは駄目だと言わんばかりに後ろからモビルスーツが来る。黒い装甲に二本の剣。

ユウに何度も勝利をした俺が知っている限り最強。その機体を見た瞬間に、自分の死に方を決めた。というか決められた。

俺はこいつと最後に戦って負ければ終わり勝てればイオク・クジャンを沈めると。

「遅かったなあ！黒いグレイズのパイロット！」

「っ！命を無駄にするな。若者！」

武器を交じり会わせながら接触回線を開く。そのまま別の通信チャンネルを開いて、その男と通信を始める。

しかしその男が一番最初に言ったのが予想外すぎて肩透かしをくらう。

「え、お前そんなこと言うやつなのか？」

「前のように降伏しろと言っている！」

しかし彼の剣は止まることを知らず確実に連撃をしてくる。しかし、先程の言葉からこれは威嚇、もしくは鹵獲するためだろう。押しが少しだけ弱い。

これに甘えるか。しかしどちらにしるこのままだと本当に鹵獲される。敵のモビルスーツ隊と会わされるともうお手上げだ。自爆するしかない。

まだ、抗ってみるか。コックピットに自爆用のスイッチを開かせておく。いつでも自分の最後を決められるように。

「降伏はしない。する必要性が感じられない」

「お前のやりたいことはもう終わっているだろう！降伏して武器を捨てろ！」

何故か彼方もこちらを生かしておきたいようで必死だが相手の事を考えながら戦えるほど俺は器用ではないし、そこまでの余裕もない。手を抜いているとはいえ、流れる

ような剣技に完全に押されている。

「こちらは全力だと言うのに。」

仕方なく、左に持っていた蛇腹状の剣を闇雲に振り回す。しかし、簡単に避けられてそれは蹴飛ばされる。

「んならっ!」

その蹴飛ばされた剣を蹴り返す。しかし速度は乗らず簡単に避けられていく。

やはり奪った武器ではロクに戦えないか。

鎌を両手持ちに変えて、一撃を打ち込むために構えを取った。

何度武器を重ねただろうか。先に攻撃を食らったのは獅電だった。左肩に一撃当たりそのあと気がついたら四撃程度左肩に入って左肩の装甲が半分斬られて、残りは飛ばされて消えた。残ったフレームに剣の刃が差し込まれる。

「しまっ——」

「ふんっ!」

その後ソードブレイカーを使うように流れ、左肩のフレームが割れる。どう考えても剣の方が柔い筈なのにこんなにも流れるように一撃で剣には傷をつけずに剣より硬いフレームを割るとは。

そのまま流れるように後ろを取られてスラスターを切断される。スラスターの爆発によって機体が動きバランサーの一部が外れたり、破壊されたりする。その動きを止めるものがないこの宇宙ではまともに動けない。

「なあんのおー!」

スラスターをページして、そのスラスターごと鎌をぶつける。いままでのように切り裂くのではなく、鈍器の様に殴り付けた。

嫌な音をモビルスーツが流す。恐らく、スラスターが壊された音、つばぜり合いの音は流れてこない。

避けられたか。スラスターから漏れたガスがスラスターを明後日の方向に飛ばし、間の遮る物がまた一つ無くなる。

ここままで正面きつての戦いとなるとバランサーもスラスターも不良な此方はもう戦えないと言えるだろう。

「武器を捨てろ!」

「嫌だね!」

諦めろといわんばかりライルが声をあげる。

必要性のない殺しはしないようだ。まるでいつでも殺せるけどなんか引きずりそうだからやめておくと。

もしかしたら尋問してイプシロンの情報を聞くか人質としてユウを誘き寄せたいのかもしれないがどちらの手もとられるわけにはいかない。

「俺を殺してみろ！そうすれば捕まえられるぞ！」

「そうか。若さ故の…か」

残っている膝裏のスラストとバランスを巧みに使って鎌を振るう。避けた所に追撃砲を乱射するが一発も当たらずに全てが宇宙の闇に行く。

ライルの迷いがたちきれたのを感じた。

一撃にかけるしかない。これだけポロボロにされたのもうバランスが乗った一撃にかけるしかない。

追撃砲をその近辺の装甲と共にパージしてメインカメラもパージする。

最後にこいつだけ道ずれに出来れば万々歳だ。

最強と思っているこいつにこれだけ戦えるようになるとは本当に人生何が起こるかわからない。

「最期に付き合ってもらおうか！」

「野郎と付き合う気持ちはない！」

鎌を握り直す。その瞬間、右肩から青い光が出てくる。その正体を探る気にはならない。フレームがバキバキと言い出して、塗料と思われる何かが剥がれる。

機体の悲鳴が感じるのでなく、音が聞こえて、警報アラートがけたたましく鳴り響く。モニターには機体のフレーム画像に hazard という文字が多数表示されている。

機体も、体も限界だ。ならばそのなけなしの力を。

俺の力を全部——！

この一撃にかける。

「はあああああつ——」

「だあああ!!!」

その瞬間、世界がゆっくりと流れていった。しかし身体はうまく動かない。その中でこれまでの記憶が頭の中に浮かんでいく。

これが走馬灯と言うものか。

もう何も考えてなかった。思考がゆっくりと頭から抜け出していき、自分という身体の中から抜けていく。

視界がだんだん暗くなっていくその状態でも敵と鎌のゆく先をしつかりと見ていた。

世界の色が失われた頃。鎌とライルのモビルスーツの剣が近づく。その二つの得物は敵の機体に吸い込まれるように近づく。

あと少し。あと少しだ。

思考をして、無理矢理動かそうとしてもどうせ身体は動かないのだからそのまま勝手に傾く体に身を任せた。いや、身を任せたというのは少しおかしいのかもしれない。言い換えて、多大言い方に変えるなら少し前に思考した状態を変えようとしなかったとなるだろう。

そして。

鎌はライルのモビルスーツの左肩を容易く切り、それと同時に獅電の右肩が限界を迎えたのか右肩が壊れる。

そしてそこにライルの剣が追撃を加えた。コックピットを貫き、ナノラミネートアーマーを容易く割り、侵入していくその剣の先も思考通りに体が動けるのだったら避けられるのかもしれない。と夢を考えた。

どちらにしろ無理なものはいくらやっても無理だ。

でも出てきた感情は絶望ではない。なんかやりきったような、達成感のようなものが自然と出てきていた。

何故だろうか。俺には全くわからない。負けている筈なのに。

頑張ったね。という声が何処かから聞こえた気がした。

そのままジョーカー・クラウドは肉体以外全てをこの世から切り離した。

第54話 もう一度

元気に鼻歌を歌いながら、側に部下をつけて後ろに歩くのはイオク・クジャン。

禁止兵器を使用しながらも勝利は勝利なので若干の怪我をしていながらも機嫌が良
い。

そのイオクの道を塞げるように一人の女性が一人の部下をそばにつけて立ち塞がる。
赤い髪を持った女性。アメリカ・エリオン。その姿を見てイオクは誇りたくなつて胸
を張りながら進む。しかし、アメリカは苦いコーヒーを飲んだ子供のような表情をしな
がら動かない。

「聞きましたよ。イオク様、ダインスレイヴを使用したようですね」

出来るだけ怒りを抑えながらもアメリカはイオクに言う。まるで何をしたのかわ
かっている子供を諭すように。

「ああ。どんな相手であろうと本気を出す。それにタービンズにはお前が目をかける程
のパイロットがいるのだろうか？」

確かにそう言う事を言った記憶がある。しかしそれは眩いた程度の事で彼がその
情報を拾ってくるとは思えなかった。

ユウ・タービン。それが自分が目をかけるパイロットの名前だ。ギャラルホルンでも最強を誇るライルに食らいつき、ライルにもアイツとは出来るだけやりあいたくないと言わせる程のパイロット。

年はとても若くライルからしてみれば自分が一番最初にモビルスーツに乗った時くらいの年齢で1度ではあるが会ってしつかりと見たこともある。とはいってもライルの説明からの予想ではあるのでそっくりさんの可能性もあるにはあるのだが。

とてもモビルスーツに乗って人殺しをするような少年には見えなかった。人殺しをする覚悟もないような無垢な少年と感じた。なので間違いなのかもかもしれないがあの子がユウ・タービンという男ではないのかと思っている。

理由は特にない。誠に恥ずかしいことだが、今更ロークスに行つたところで会えない確率の方が高い。しかしまた会いそうな気がしないこともない。

どちらにしろ、彼に目をかけていたことは本当だ。しかしそれは秩序を乱してまでとは思えない。

「ですから、ライルとニールを送つたのです。確かにあの子は強いです。それにアリアンロッドとして貴方にも捜査をして違法組織なら制裁を下す権利があります」

隣にいるライルを一瞬だけ見て、すぐに視線をイオクに戻す。ライルは扱いは難しいがギャラルホルン最強のパイロット……いや、現実生きている人間最強のパイロットと

言えば世界中の人間が頷くだろう。それほど人間を送ったのだからダインスレイヴなんて使う必要は無いのだ。なのに、敢えてなのか不明だが、イオクは違法兵器を使用した。イオクにこの行いの意味をわかってもらわなければならぬ。

「ならば良いだろう。貴様がいうガンダムフレーム。我々の先祖である高貴な方々の機体を冠した紛い物の機体にも私は勝利したのだ。それも！紛い物ならば当然だな」

「でも、ダインスレイヴという一つ間違えれば違法兵器となる兵器を使つてグレーゾンを越えて貴方は違法な行動をしました。それが許されることですか！例え、違法組織の調査であろうと……！」

「そこまで言う」と流石にイオクも怒りの沸点に達したようであり、いままで以上に重く、そして武器となりそうな声で言った。

「いい身分になったものだ。アメリカ」

いつもの馬鹿っぽいイオクとはかけ離れた姿とその言葉に流石のアメリカも驚く。

「プライドの強さからここまで言われるとその感情も力となるのか。」

「ぐっ……」

「私はタービンスという組織がダインスレイヴを所持しているのを確認した。だから違法組織とし、ギャラルホルンの力を用いて崩壊させたのだ。それを違法ととるか。甚だつごぞ」

その言葉に側についていたライルが怒りを隠せなくなったのかイオクの目の前に出る。

「止めなさい。ライル」

そう言うライルはピタリと止まり少々躊躇したあと、元に戻る。その顔から此方への怒りは向いてはいないようだが、邪魔をするなど言っているように感じた。

おじさまが死んだとき慰めてくれたその姿といつものふざけた姿、そしてこの鬼のよ
うな姿。どれが本当の彼なのだろうかと関係ないことを考える。

「では。私はラスタル様にマクギリスの火星での活動に楔を打ち込むことが出来た事を報告に行く。お前にはラスタル様も私も期待しているのだ。頼むぞ」

イオクも怒りが収まったのかもしくは、ライルにビビったのか、いつもの声で此方に言う。

肩を叩きながら、優しくしているつもりなのか耳元で言われる。囁くではない。本人はそうしているつもりだと思っていると想像したが此方は嫌気がした。

その後こちらが何も動かないことを良いことに頭をさらつと撫でながら通りすぎていった。

「イオク様」

その通りすぎた姿を人目も見ずに声に出した。イオクがゆつくりと勝ち誇った表情

で見る。

ライルも驚いているのか、目を見開きながら見る。しかしその二つの視線のどちらとも無視をする。

「なんだ？」

「まさかタービンの件、免罪、もしくは嵌めたなんて…… 言いませんよね」

「勿論だとも。タービンは絶対的な違法組織。私はその情報を得て、捜査をし、見つけたのだからな」

そう言って通りすぎていくイオクを見ようとはしなかった。ただ、歯を食い縛る事しか出来なかった。

「よう。ユウ。ひでえやられようだな。どうだ？」

「……」

地味に怪我していた自分の身体を擦りながら目の前の相手を見た。マクマード・バリストン。ここ、歳星を運営するテイワズのボスでお祖父様等呼んでいた相手だ。

何故、タービンの救援に行くためにマクマードの命令、つまりテイワズの意見に背

いてギャラルホルンを攻撃、つまり反社会組織となりかけた組織の長である僕がこの場に
いるのか。

それはギャラルホルンのアリアンロッドとの抗争に敗れた後の事だった。

マクマードから言われたのだ。

早く歳星に帰ってこい。

と。

怒るのでもなく、ほかるのでもなく、何処かあきれたようなため息混じり声を出しそ
う言ったのだ。

氣遣ったとは思えない。元々マクマード・バリストーンとはそう言う男だ。しかし僕を
テイワズにいさせておくメリツトはあまり浮かばない。

結局、これはマクマードの氣遣いということと考えている。だからただ、感謝するこ
としかできなかつた。

出来の悪い孫でごめんと何度も頭の中で繰り返した。

「んんつと。俺はよお本当はお前をテイワズから出すつもりだった。お前の行いは褒め
られたものではない」

「わかつています。許されないので、僕が今ここで腹を斬ります」

覚悟はしている。僕が今ここにいるという事は殺されるということだろう。そこま

で社会は甘くない。せめてみんなが無事に生きていけたらと思いつながら、深呼吸をした。

しかしマクマードはそれを望んでいないようで扱にくい機械の使いかたを悩むような顔をして、首を回す。

「けど、今回ばかりは許してやらんでもない。お前さんがテイワズにもたらしたものは以外とでけえ。その経歴と名瀬の頼み、そして依頼があるからな。その依頼をやれるという自身があるのなら今回の不祥事許してやらんこともない」

その言葉は望んでいると同時に不可能とわかっていた言葉だった。激しい感情の起伏に沿うように立ち上がる。

「お祖父様：。ありがとうございますー！」
頭をおもいつきり下げる。

希望が見えた。今ここでテイワズのボスにここまで言われたということはテイワズに残ることが認められたということ。これでみんなを守るための地固めは出来たような物。後はちゃんと組織を作り直すのみ。

「忘れるな。俺は依頼をやれるならと言った。あとそのお祖父様ももうやめろ。名瀬と俺はもうなんの関係もない」

マクマードは軽く手を降ってそう言う。

忘れていた。今ここで認めてくれる訳ではない。ちゃんと果たさなければならぬことがある。

「では、その依頼とは？」

出来るだけ落ち着いてそう言うのとマクマードはニヤリと笑いながらどこから出したのか端末を机に置く。

そして、何故かドヤ顔をしながら言った。

「裏切り者の成敗だ」

そこにはJPTトラストの情報を書いてあった。

勿論、ジャスレイ・ドノミコロスの名前も。

「あの、七光り野郎が！嘘ばかりじゃねえか」

ライルが部屋に着くや否や、壁をおもいきり殴った。

おそらく音からライルの手は赤くはなっているだろう。しかし硬い壁は人間の力で凹んだりする筈もなく、ただライルが痛がるだけでおわった。

「……そんなことしたって痛いだけですよ」

「ちっ」

ライルは舌打ちしながらも意味ないとわかっていたので引き下がる。

確かにこの頃のイオク・クジャンはおかしい。馬鹿なところはあったがそれでもまだ可愛い物であり、十分許せる範囲だった。

「とうかなんでお前はラスタルに言わなかった」

「口止めされました。あの時から気づくべきでしたね」

邪魔をするなど言われて、持ち込む予定の武装からダインスレイヴを見つけたその瞬間にライルとニールを送るのではなく、約束を破り、ラスタルに報告したほうが良かったと今さら後悔する。

「あのダインスレイヴは充分違法です。マクギリスはそこら辺を嗅ぎ付ければ無事ではすまないでしょう」

「そんなことあどうでもいい。問題は俺たちの身だ。さつさとマクギリスに白旗降って政権上げた方がいいんじゃないの？」

ライルが軽く笑いながら先程殴った壁に凭れた。

咳払いしながら、ライルを睨む。しかし最強の戦士はその程度でビビる筈もなく、何処から出てきたヤスリで爪を研ぎ始めた。

「貴方はマクギリスの狙いに気づいているのですか？」

そう言うのと音が消えた。ライルの動きがピタリと止まり、そしてゆっくりと動き出した。

爪を研ぐ音がよく聞こえるほどに他の音がなくなった。

「まーな。力を振るえば支配できる。力があればのしあがれる世界。偽りの平和がない分ましじゃねえか？」

「そう言うのは貴方みたいに力がある人が戦争屋、戦闘馬鹿のような方だけですよ」

そう言いながらライルを見ると爪を研ぐことに夢中なのか空気が椅子の状態で爪を研いでいる。

彼の小さな素顔を見たような気分になり、慌てて顔を背ける。

「かもな。けど、生まれはどうやっても変えられない。けど、力はゆっくりとだが変えられる」

才能の前には無力だけだな。と繋げてライルは笑う。

本当に不思議な人だ。沢山の顔があり、どれが本当なのか全くわからない。もしかしたら全てが違うのではないのかと思うほどに。

「どちらにしろ、こつちも動く必要がありそうだな。どうする？あのラストルだったらテイワズと交渉するだろう。もしかしたらそこに」

「彼がいるかもしれない。上手く良好な関係になればマクギリスの大きな手札が一

つ：… いや二つこちらに來ます」

マクギリスはモビルアーマー討伐時からわかるように鉄華団、つまりテイワズと良好な関係を作っている。

今回は此方が違法兵器と数で勝った物の、彼の力は充分強い。鉄華団という多数のガンダムフレームの機体を保有する組織も大きなカードになりうるだろう。

つまりテイワズという組織の奪い合いがこれから発生するのではないか。

「どちらにしろ、あいつとは戦いたくねえな。ときどき、こつちが殺られそうになる」
「戦場とはそういう所でしょう」

「特につて意味だ。無駄に子供らしかったり、冷静になれなくなったりするのがあいつの悪いところだが上手く直せば俺も越える。そう確信している」

そう言いながら空気椅子を止めずにしまいには脚をくみだすライル。

彼が俺も越えるという事は現在この世に生きている人の中で最強になるということ。しかしロークスの時に見た二人はその強さのベクトルが違うようにも見える。…がそれは今、関係ないだろう。分かっているのが彼は強いという周知の事実のみ。全く変わらない。

「随分と肩を持つんですね。珍しい。何かあったんですか？」

「… さあな。可能性、とかなのか？」

ライルはそう言いながらもヤスリの手は休めずに爪を削る。

そのあやふやな答えにため息をつきながら近くにあつた端末を手取る。そこにはとあるモビルアーマーの情報があつた。

——ガンダムベリアル。

自分の父であるラスタル・エリオンの先祖、ドワーム・エリオンのモビルスーツ。

それが何故この端末に写し出されているか。

先日ラスタルに言われた言葉が彼女の中で思い出された。

「もうそろそろお前に継いで欲しいんだ。セブンスターズも、ガンダムも」

何故このような言葉が彼の口から出てきたかはわからない。しかし、私に継がせるということはアリアンロットも私が継ぐことになる彼女らが高いということだ。

ラスタルも充分高齢なのでおかしくはない。死んでいないのに役職を継がせるといふのは少し珍しいが、ファリド家の事もあるのでそこまで不思議にはとられないだろう。

しかし自分はこの事に関してあまりいいイメージをもたなかった。

「おもい…」

小さな声で呟きながら顔を埋めた自分とは対象的にライルは顔と手を上げて言った。

「出来た」

「逝ったか。タービン」

彼とあつた回数はまだあまり無い。彼も自分の事はあまり覚えてないだろう。

しかし自分はよく覚えている。

今でも脳裏にちらつく一人の女性。奴隷商に格安とはいえ、無理矢理買わされた一人の女性。赤い髪は埃をかぶつて、白い肌は傷だらけで、蒼い目に生氣は全く見えず、瘦せ細っていた。打撲の後もあり、酷い様だった。

回されたのだろうか。そういう事は一度も聞かなかつたが聞いてもはぐらかされただろう。

「おい、大丈夫か!？」

「貴方なんか…嫌い」

最初手を出した時は手を噛まれた。手当てをさせようと部下を呼んだ時にはタックルされた。

父性というものが出てきたその時にはその女性は傭兵として独り立ちした。その後も何度か連絡を取った。

名瀬・タービン。その名は連絡の時に何度か出てきた名前。愛していた訳ではないが子供が好きな彼女は彼との子供を期待して……妊娠したと聞いたとき、嬉しくて泣いた位だ。

しかしそれから連絡は一度も来ていない。おそらく死んだと思われる。それからだった。偽の名前で偽の組織を立ち上げてタービンをと接触したのは。

名瀬・タービンは義理堅い男であった。

信用深く、多数の女性を愛しながら愛される大きな器を持っていた。偽物でしか接することが出来ない此方が悪いと思う程に。

ある時、こう言った。

「とある女性を探している」と。

そして、彼女の事を話した。すると彼は答えた。

「子供を産んだと同時に死んだ」

それから彼とは会っていない。その子の名前も聞かずただ、そうかと一言だけ言つてその場から離れた。

その事から後悔がないと言うと嘘になる。ギャラルホルンに潜入してスパイ活動をしている仲間からアリアンロッドがタービンを違法組織として抹殺すると聞いた時

からそう思った。

すると後ろから声がかかる。

「おい、サイオン。誰だ？タービンってのは？」

赤い髪と黄色の目を持つ長身の男。左頬には傷が出来ている。

彼は今の世界を壊しかねない存在。だからこちらにいるのだ。

優雅に座って紅茶を飲みながら此方を向くその目は殺気は感じられないが此方が恐怖を感じる程強い力をもつ。

「昔の友人ですよ。ユダ様」

「そうか。残念だったな」

しかしそれも慣れたので落ち着いて対応する。

ユダは服を正して、端末の操作を始める。

「マッドナツグの量産化計画は？」

「予定通り、進んでおります。ユダ様の分も勿論」

UGR—G74 マドナツグ。

厄祭戦時にオセアニア連邦が開発したガンダムに似せて造られた機体。現在は部品などは回っているものの厄祭戦時の物はギャラルホルンすら作れなかった。

その機体の量産化計画が今進んでいる。

そう言うとユダは端末になにかを打ち込んだ後、椅子から立ち上がり空を見る。

「じゃあ見せてやろうか。カイエル家の力、ユダ・カイエルの力を」

——そう。彼の名前はユダ・カイエル。

アグニカ・カイエルの本物の子孫だ。

第55話 復讐のため

目の前に出てきたのは黒く、大きな棺。

その中は……空っぽだ。何にも入っていない。

そう。手足一本所か、髪の毛一本も入っていない。

「……父さん、母さん」

せめて死体でもあれば今ここで火葬も出来たというのに。

何も入っていないという事実が胸を締め付ける。タービンズ人が泣きながらそれを見るたびに悲しくなる。

何故だと誰かが問いかける。

何故あそこで無理矢理でも名瀬とアミダを救おうとしなかった。モビルスーツ隊に構わずにさつさと二人を回収して逃げていれば良かった。余裕がなかったと言えばその通りだ。しかしだからといって誰も力を抜いてくれない。戦場で手を抜く事は相手に対しても失礼なのだから。

ゆっくりと歩を進めて棺の方へと行く。みんなの横を通る度に何かしらの感情が伝わる。悲しみ。まっすぐに純粋な悲しみ。自分の親は本当に立派だった。こんなにも

の女性を抱えて、守り続けた。そう思いながら棺の目の前に出るその棺には布がかかっており、その布にはタービンスのマークが書いてある。

「いままでありがとう。二人の分も… 僕が… その願いを繋ぐから」

誰もいない空つぼの棺を撫でる。するとそこに水が落ちた。ゆつくりとその量は増えていく。

「ゆーちゃん…」

近くにいた女性達が背中を擦る。

それと同じスパンで水が落ちて、布を濡らしていく。

泣いている。もう二人とも僕の名前を撫でてくれない。僕を褒めてくれない。怒っても、ぶつてもくれない。僕の事を自慢もしてくれない。

もういないんだ。

この世には僕の目の前は二度と出てこないのだ。骨すらない。その事実がまた突き刺さる。

痛い。これなら頬をぶたれた方がマシだ。蹴り飛ばされた方がマシだ。

それでもし、二人が帰ってくるのなら何度だって受けてやる。でも死んだ人間が甦るなんてそんなことはない。そんなことはあつてはならないと頭ではわかっている。わかつてはいるのだ。しかし今の自分はそれを望んでいる。本当は夢でした。そんな事

であつてほしいと何度も思つてそして、願つた。しかし変わる筈もなく、喪つたという事実だけが悲しく残る。

「うん：： 大丈夫：： もつと辛い人もいる：：」

そう言つて泣きながらと笑つて見せた。けどその笑顔は長くは続かない。悲しみの感情が長くは許さなかつた。

またなんにもない空っぽの棺を見る。

やるせない感情が出てきた。

その時だつた。

「おーちゃんと届いているじゃないの。結構、結構。」

とある男が部下を引き連れ来た。

ジャスレイ・ドノミコルス。

テイワズのN.O. 2でそして、テイワズのボス、マクマードが裏切り者として出した名前。

確かにマクマードならタービンを違法組織として立ち上げさせるためにジャスレイが絡んだのだから分かる筈だ。だとしてもだからってN.O. 2を裏切り者として扱えばテイワズの力が弱くなる。

何故なのだろうか。良くはわからないがあつた男を恨んでいる今は万々歳だ。しかし

マクマードはこう言った。

「けど、動くのは今つて訳じゃねえ。ゆっくりとその瞬間を狙うんだ。そう。お前さんが得意な狙撃のようにな」

つまり監視しろということ。勿論イプシロン（この名前ももうじき使えなくなる）のメンバーに声をかけて交代で監視して貰っている。

「オオー。なんか臭いと思つたら宇宙ネズミと名ばかりの狙撃手様じゃないか。尊敬する兄貴と親の最後だ。しっかりと見れやれよ」

ジャスレイは一人の部下を肘で軽く叩いたあとその部下が口を開いた。

「こいつ。無理矢理言わせたな。」

「まっあのきたねえ長髪の本も残つてねえだろうがな！」

「はっはっは！いい気味だぜ！」

しかしこの言葉が出てくるといふのに純粹な怒りを感じた。何故、何故そんな事が口から出せる。お前が、お前らが違法組織として出さなければ何もなかった。今頃二つの企業がどちらとも平和に行つていただろう。

「お前……どの口で……何を……」

そのジャスレイをしつかりと見る。完全な合理主義の彼と僕はわかり会えない。どうせ殺すんだ。今から一発位殴つたってバチは当たるまい。

するとラフタが後ろから強引に首を掴んだ。

そして、耳元で囁いた。

「待って。今殴ってどうするの。殴ったらやり返されるし、テイワズとして働けなくなるかもしれないんだよ。今の立場を考えて。もっと冷静になつて。ゆーちゃんらしくない」

最後の一言がまた突き刺さり、その場で押し黙る。

何もしてこないのを面白くないと思ったジャスレイはゆっくりと近づき、そして僕の頬を殴った。

「——！」

「ゆーちゃん——！」

「おつとお！わりいな。影が薄すぎているとはわかんなかったぜ。何せココソ隠れる事しか出来ないスナイパー様だもんなあ。はっは！悪い、悪い」

あまりの痛みに立ち上がる事を忘れた。

そこに何人もの女性が集まって介抱してくれる。その現実がまた苦しかった。

「大丈夫!?!ゆーちゃん!?!」

「腫れちゃってる...」

「痛くない?」

「氷嚢持ってくるね！」

その僕を見て笑ったジャスレイもゆっくりと此方に来て拳銃を目の前にちらつけさせながら言った。

「お前も名瀬と同じ、女を使ってしか名を上げることが出来ねえ雑魚だ」

今すぐにでも殴り返したかったが先程のラフタの言葉を思いだしそのまま下を向いて黙った。

結局、親の葬式は苦しい気持ちで終わった。

名瀬の葬式が終わり各々の持ち場に戻っている時、ユウはマクマードの方に行った為自然とシユインは格納庫へと行くするとそこには当たり前だがアンドラスがいた。

損傷は少ないがその機体に哀しみを感じた。

するとアガーテが此方に気づいたのか手招きする。

「ガンダムに感情があるっていつたら信じる？」

そして行つた瞬間にこんな言葉を言われた。

思わず、は？なんてアホな声をあげてしまったが実家（タービンスに入る前にいた家）には何故かガンダムフレームの情報があつたのを覚えている。

「何処かで：ガンダムフレームの機体には本物の悪魔が宿っているって聞いたことがあります。悪魔という名前を得たAIの可能性も捨てきれないですけど：。って何かあったんですか？」

そう言うアガーテが整備長を呼ぶ。するとやつれた顔の整備長がノロノロと来た。

その顔から困っているのは良くわかる。ガンダム一機であんなに喜んでいた整備長と同一人物とは思えない。

「うーん。この機体はね。まだ謎が多いんだ。これを見てくれ」

そう言うて此方に出した端末にはユウ・タービンの心拍数などがあった。これとアンドラスが何かあるのか？と思い、首をかしげたがそれを見た整備長が端末を指で叩く。

「ここ、それとここだね。戦闘中にも関わらず落ち着いている。まるで寝ているときみたいには言わないものの結構落ち着いているよね。でもそんなものはあり得ない。声や顔なら繕う事はできても戦闘中に精神をここまで落ち着かせるといふ事はあつてはならないんだ。それも、親の命がかかっている現場ではね」

当たり前だろう。ユウは名瀬やアミダの事を誰よりも慕っていた。そんな現場で安心なんて出来る筈がない。

「じゃあ、何故？」

「私はね。悪魔が何らかの手段を使ってパイロットの精神を支配しているのではない

かつて考えているんだ。いままでも稀とはいえ、アンドラスに乗っている時のみこのような反応が見られた。君達もなんか思い当たりはあるかい？」

そう考えるといくつか思い当たる点がある。

ユウが良くアンドラスの名前を叫ぶのだ。するとその瞬間だけ彼は少しだけ強くなる。かわせない筈の攻撃をかわしたり等していた。

これは単に自分を鼓舞するものだと思つたが、悪魔に意思、感情等が見られるとなると話は違う。

確かにアンドラスにもつと君の声を聞かせてくれとは普通言うわけがない。常識的に考えればあり得ない話だが、もしかしたらユウはアンドラスと会話をしているのではないか。

コックピットに籠つて楽しそうに独り言言っていたのも、アンドラスの整備中に何も出来ないと言うのに何度も邪魔をしに行く事もちゃんと意味があつたのではないかと思えてしまう。

「つまり：アンドラスの中には悪魔が宿っているというのには本当でその悪魔がゆるちやんの精神状態を支配している…」

「そう言うこと。まあ、そこら辺は彼に聞けばすぐにわかる話なんだけどね」

そう言いながら整備長は端末を操りとあるシステムを画面に出す。それはユウも何

度か使用した経験が在り、モビルアーマー討伐の助けとなったシステム。

《スナイプモード》

「これは元々アンドラスの中にあつた未完成のシステムをこちらが完成させた物なんだ。けど、ほとんどが完成されていてね。もしかしたらこれもアンドラスがやつたんじゃないかつて」

整備長の言いたいことはこうだ。

アンドラスはユウとの戦闘データを見て、自分の中にある厄祭戦のデータを使用してユウ専用のシステムをプログラムする。しかしこのままシステムを出してもユウは理解して使ってくれるかもしれないが、自分の存在を知らない。つまり、整備をしたりしている人間からすれば謎のシステムをそんなに簡単にユウに渡すことはしない。そこで、敢えて未完成のシステムを製作して、ある程度鍵が外しやすくして置いておく。後は時間が経てば整備をしている人間が偶々引き上げてそれを安全に使用できるようにしてユウが使うことが出来る。

「それが本当なら随分と慎重な悪魔さんね。根本となるプログラムは悪魔さんが作ってくれたようだから誰よりもゆーちゃんの事を理解しているってこと？」

「少なくとも、戦闘中の彼の事は我々よりも彼女の方が知っているだろうね」

整備長に端末を返すと整備長はじゃあ彼にもよろしくねと一言だけ言って別の機体

の整備へと行ってしまった。

ため息をつきながらゆっくりと考える。とあることを思い出した。小さな一つの疑問だがあんなに自然に言えるとは少しおかしい。

「彼女？」

アンドラスの事だろうか。なんなのかはわからず首を傾げた。

マクマードには裏切り者の成敗と言われたが結局やっているのはジャスレイの監視。それから数日たった。

未だにジャスレイは動かない。動いたと言えば僕をぶった時くらいだろう。それと名瀬を侮辱するような発言。

まさかあれで敵討ちだ！というしながら動くと思っただろう。しかしその程度では動かなかつた。ということはもう分かつた筈だ。2、3日前には新しい行動に出てもおかしくないが今は何も情報がない。

鉄華団もあと数日したら火星に戻るらしい。団長さんにも感謝をしなければならぬ。鉄華団のお陰で名瀬とアミダ以外の犠牲者はいなかったのだから。

「……ふうー」

名瀬とアミダの葬式も軽く終わってしまった上に、今回の件で一時は仕事を受けられ

なくなるという事態の為にジャスレイの監視しかすることがなくて正直暇だ。というかそういう状態にならない限り仕事は来ないのだが。

お偉いさんに頭下げたりなどを考えたが結局マクマード一人に下げただけで解決したのだ。

良かった。と思つた方が良いのかもしれないが、名瀬とアミダが亡くなった虚無感は押しやうとしたが出来る筈もなく、最近ポケーとすることが多くなってきた。仕事はこれではいけないと引き締めるのだが上手くいかない。

そしてマクマードとの話で少し気になった点がある。

何故、ジャスレイが名瀬を売つたと分かつたか、そして何故その件一つでジャスレイを裏切り者として僕たちに殺されるつもりなのか。

これではまるで僕たちに殺させた後にその罪を着せて殺させようとしているような物ではないか。

しかし、それは違うだろう。ならばなんだと言われると別の理由、僕らに隠している理由があるからとしかわからない。

これも交渉、なのだろうか。

商人が考えることは全くわからない。

「さてと、No. 2さんはどう動きますかねつと」

そう言いながら遠くでジャスレイ宅の方を双眼鏡を使って監視していると通信が来た。

相手はアガーテ。これはもしや。そう思いすぐに受け取ってジャスレイ宅を離れながら小声で言う。

「動いた？」

「うん。それが…」

しかし歯切れが悪い。声はアガーテの物だが…

気味が悪く感じたので回りを見渡して誰もいないことを確認し、走る。

「まだ確定したことじゃないけど… 偶々近くを通りかかった男がね、通信の時にジャスレイの名前を出した。それに、タービンスの女がどーとか言ってる。今気づかれない距離で監視している」

その言葉を聞いた瞬間に大体理解した。

暗殺。それを行うつもりだろう。まだ確証はないがただ訪れるだけなら自分でいけば良いし、忙しいのなら先程ジャスレイ宅でばか騒ぎしていたのは何処のどいつだ。

つまり、自分の手は汚さずに誰かを殺すつもりだ。

しかし誰だ。そんな簡単にバレるような作戦ならマクマードは無理だろう。もしそうだと僕が動く前に捕まえられるのがオチだ。それを出汁にしてジャスレイを

捕縛することも出来る。

ならば違うだろう。あと考えられるのが鉄華団団長さん、そしてタービンスの誰か。

「その男は今どつちにな？」

「商店街」

商店街の方向を大体だが思い出す。

ジャスレイだつて人間だ。急ぎたく気持ちはある。狙撃手である僕だつてそうなのだから。

拳銃の残弾を確認しながらその建物に入る。そして中の様子を見ながら小声でアガートと通信を再開する。

「とりあえずそこら辺を見える建物があるから登ってみる。アガート姉さんは団長さんとマクマードさんに連絡にしておいて」

「わかった。気を付けてね」

とても見晴らしがよさそうな建物だ。商店街の方も、良く見える。でも今考えればこれはダメーなのではないかと思ってしまう。もし完璧にやりたいのなら狙撃手等何かしらを用意しておく筈だ。つまり、これはわざとアガートに気付かせたダメーで出来たらラッキー位の考えだろう。ここでミスをすれば自分がテイワズの全員から睨まれるようになってもおかしくないのだ。予備の案位は用意する。

つまり、本命は

「まさか、狙撃するなんて。考えたね」

階段を登った踊り場の所でスコープを覗く男。その隣でなにかを咀嚼しているのか、顎が動いている男。

狙撃手と観測手だ。

こんな所で練習なんてある筈ないし、あつたとしても聞いている筈。つまり、許可なくここで狙撃しようとしているとなる。しかし、この二人の男が誰の差し金か確定してない為、声をかけた。

こちらがこんなところに来るとは思わなかったのか、両方とも驚きこちらを向く。その服にはJPTトラストのマークが小さいながらもあつた。それを確認して拳銃のセーフティをノールックで外す。それを見たのか見ていないのかは不明だが、観測手が声を上げて拳銃を此方に向けてきた。その拳銃目掛けて一発。そして躊躇せず、両足に一発ずつ素早く撃ち込む。

「ひぎやあー！」

観測手が悲鳴を上げながら壁に背を当てる。目から涙、鼻から鼻水、口からヨダレが出てくるのが汚い。

その男の脳天に一発撃ち込む。

「ちっ！オジキ！」

狙撃手がそう叫びながら通信機を手取る。

おそらく、ジャスレイを呼ぶつもりなのだろう。しかしこんな所でそれを見せると言うのは撃つてくださいと言っているようなもの。

拳銃の残弾が一発だとわかってその通信機に撃ち込む。通信機を貫通した弾丸はその狙撃手の左手を貫いた。

「ぐっ……悪魔が……！」

「言いたいことはそれだけか」

拳銃の装填を素早くした後、襲いかかってくるその男を撃ち殺した。

周りに血が飛び散る。しかし躊躇はしなかった。死体を退かして置いてあつた狙撃銃を手取る。

商店街方向に銃を向け直した頃に此方の通信機に着信が来る。相手はわかりきっている。

「どう？アガーテ姉さん」

通信機を耳に当てながら商店街の方を双眼鏡で見る。

相手の狙いはわからないがおそらく狙いは家族だろう。今考えてみればマクマード、団長さんはガードが高い。あのジャスレイがそこまでガードの高い所に敢えて人を送

ることはない。しかし、僕たちの堪忍袋の緒を切る程の人。

考えてみれば簡単な事だ。

「ゆーちゃん。今何処」

「建物の上。ちよつと高い塔みたいなやつ。そう。時計台だ、時計台。そこにスナイパーが配置されていた。ついでに狙撃銃盗んだから撃てるよ」

そう言いながら双眼鏡で見るが流石に暗殺するような奴が怪しい格好で動く筈がない。しかし歩いている人が少ないため、撃つ直前まではバレないだろう。

その時歩いているラフタとアジーを見つけた。嫌な予感がするが確定じゃない。

とりあえずラフタとアジーを含めてタービンスの女性達をストーカーしていそうな男を炙り出す。

するとアガータが少し間を置いて言った。

「そいつの特徴を教えるね。紺のジャケットを来ている大柄の男。髪の色は茶色。今服屋の前で腕時計を見た。確認できた？」

双眼鏡で出してくれた大体の位置と特徴を頼りに探すとすぐに見つかった。

そしてその男の回りには……二人の女性。

「うん。じゃあとりあえずそいつが何らかのアクションを起こしたら教えて……つてそいつの前！ラフタ姉さんとアジー姉さん！」

やはり買い物中の二人が狙いか。すぐに狙撃銃の残弾を確認してその男の後頭部を狙う。しかし、まだ撃つわけにはいかない。先程殺した男二人はジャスレイとの関係がわかったが二人のストーカーをしている男はまだ確定ではないのだ。

そのまま少し時間がたった。

アジーとラフタが離れた。男がもしどちらかを撃つならここがチャンス。ここにいる。いや、もう死体となった男に合図を送るかする筈だ。

時を待つ。と言えどそこまでは待たないだろう。少なくとも先程まで張り込んでいた二人に比べれば。

「ゆーちゃん」

「わかってる」

すると予想通りすぐに動いた。

ラフタ姉さんが何処かの店に入ってすぐその場に止まる。そして何をするのだろうかと考えていると通信機の雑音が大きくなった。そしてスコープに入ってきたのはずっと狙っていた男に接近する一人の女性。アガーテか。

「アガーテ姉さん!?!なにやってんの!」

しかし危険人物の可能性が高いとはいえ、たかが可能性。それで引き金を引くわけにはいかない。

それなのにアガーテ姉さんが出てきた。

ラフタ姉さんを助ける為なのだろうか。それとも証拠を提示させて此方に狙撃させるためだろうか。何かはわからないが危険な事極まりない。

だからといってここで通信機に向けて怒鳴りでもすれば相手に気づかれる可能性も0ではない。これでは失敗だ。

やはりアクションを起こしてからでは遅い。いままでの狙撃と違い、相手がはじめから敵とわかつているわけではないとこの仕事の特長を知る。

するとその通信機にアガーテの声が入ってきた。

「撃つて。だけど殺さないように」

迷う事はなかった。そのままそれがスイッチになったように体が動き、引き金を引いた。

そのままそれはその男の腕を貫いた。

「ヒット」

もう、後には引けない。

第56話 変革

あの後、ジャスレイが歳星からいなくなつたことと、ジャスレイがテイワズを乗つてゐるのではないかという疑惑の浮上。その二つの件からテイワズの幹部が集まつて集会を開き、今後の対策を練つてゐる。現地にはアガーテをいかせた。というのは建前で、ゆーちゃんは今なくていいと言つて行つてしまつた。

そのアガーテからメツセージが来たのは先程の事だ。今現在、ジャスレイを向かい撃つという派と、中立派の二つに別れてゐる。

その勢力の中で一番大きいのは中立派だ。ボスが誰になろうと関係ないのだろうか、と少し頭を悩ませる人達。

しかし、その中立派の中にも嫌な連中がゐる。今回の狙撃手等はジャスレイの判断ではないのではないかという連中だ。おそらく、ジャスレイに金でも握らされているのだろう。そして嫌なことにそれが殆どらしい。

少なくともこの歳星で人殺しをしようとしてゐる時点でボスが責任をとつて辞めるくらいあつてもいいと思うのだが。そこら辺はN.O. 2だからなんだとかあるのだろうか。

「やっぱり：。マクマードさんが高齢だから次のボスになる可能性が高いジャスレイの肩を持つ勢力も結構いるね」

それにこのままじゃテイワズが半分どころか三つに割れる。中立派が何も行動しないだろうとはいえ、残りの二つがここで潰し合いなんてしたら生き残ったもう片方も長くは持たないだろう。すぐに動き、ジャスレイを孤立させて叩く。

それが今、重要な事だ。

未だに何故マクマードがこれほどジャスレイを殺させようとするのか僕には良くわからないがわかる必要もいつか無くなる。

結局あの後男を一人捕獲、残り二人は拳銃を向けてきた為、過剰防衛ということで方がついた。その過剰防衛というので終わったというのは少し意外ではあったが残りの一人との関係性そして、ジャスレイとの関係が浮き彫りになったのでそこら辺はなあなあにして済まされるだろう。

それにしてもそういう時のみは此方に時の運が回りすぎている。都合が良すぎて逆に不自然。しかし、不自然だからといって退けないのも事実。動かなければならないのは変わらない。

「父さんなら：。どうしただろうな」

もし彼処でタービンスの救援を鉄華団のように違法組織ととられないギリギリを攻

めれ行けばどうなつてただろう。少なくとも、マクマードの依頼を断れた。

しかし、どちらにしろ受けていただろう。

復讐の為に。

「多分名瀬さんなら自分の家族を守ることのみに徹していたと思うよ。名瀬さん、そういう人だし」

僕の一人ごとに隣に座っているシュインが答えた。その彼女も疲れた表情をしている。

今、ジャスレイを討てばどうなるのか。僕にとってはテイワズの力が弱くなるので少し心配程度で落ち着くが依頼してきた本人であるマクマードからしてみれば大打撃だろう。しかし、また何処かの組織を斬られたり寝首をかかれるよりは充分かもしれませんが。

今進んでいるのは今回の件はジャスレイが指示したのか他のJPTトラスト職員が指示したのか。そのどちらかの判断ということで、この件がJPTトラストのせいだと言ふことはもう、自分が撃ち殺した狙撃手と観測手からわかっている。つまり、ジャスレイの判断でないのではないかと考える連中が頑張つてジャスレイがもし、直接的な罪を回避できたとしてもそれなりの圧がかかる筈。社会的なイメージも滑落し、ジャスレイは自分で自分の首を絞めることになつただろう。

つまり、ジャスレイからすればマクマードを討てる最後のチャンスとなりかねない。

そのチャンスのみすみ見逃すような男なら今回の件は起こらなかった。

だとしてもその力は圧倒的に強い。まず、数が桁違いだ。テイワズを支えてきたといっても過言ではない経済力とそれだけの数をポンと集められる人脈。加えてその傭兵はジョーカーのような変わり者でありながらも強かった戦士。

テイワズのNo. 2も伊達ではない。

今後、マクマードがもういいと言うかジャスレイがテイワズをやめるかしなければこの仕事は終わらない。しかし、この様子だとジャスレイは本気でマクマードを狙うつもりだ。もう後には退けないのだから。死を覚悟したものより強いものなどこの世にはいる筈がない。

もうジャスレイも僕らも賭けるしかない。自分達が持つ純粋な力一つに。ジャスレイからすれば僕らを殺せば中立となるであろう者達が一斉にジャスレイの味方をする。そうすれば、マクマードが捕縛されるのも時間の問題。それに比べて僕らはただ、ジャスレイ達JPTトラストを必要以上に痛め付けるだけでよい。

でも、出来る訳じゃない。

先程の考えたようにジャスレイの資金力と人脈は物凄い。それこそ父さんですらも足元に及ばないくらいなの。そして、戦場での勝敗は数によって勝利するという事がほとんどなのだ。戦争は数だよと言うことだ。

「.:. そう。だよね.:. やっぱり遠い」

遠い。そう。遠いのだ。名瀬・タービンという存在は数多の女性の居場所となり、支え続けその間に僕やエストのような子供が産まれてもその子の居場所共なり、そして仕事をやっていった。

ずっと支えられることしかできず、ただモビルスーツ射撃が少し上手いだけでチャホヤされている僕とは全く違うのだ。

その差は毎日感じていた。嫉妬していた訳ではない。イプシロンとしてその中の女性の居場所になろうとしても、そこには大きな壁があった。結局その壁を越えようとしても越えられずにそのままなのだ。今出来る事はいままでと同じ、支えられること。つまり、成長していかないのだ。モビルスーツの扱いは少し上手くなったかもしれないがそういう問題でもない。

だから名瀬という大きな存在が必要だった。支えられて、守れて、居場所となれる大きな器を持った男が。いなければいけなかった。だから助けようと。勿論親孝行もしたかったが一番として、名瀬がいないとタービンス、そしてイプシロンの女性は守る物を失うから。僕は勿論エストも今の状態だと名瀬ほど沢山の女性の居場所にはなれない。このままでは意味がない。

マクマードにこの仕事を充分に出来たらテイワズとしてのこつてもいいという話は

したが、だからといってジャスレイが倒せるとも思えないし、ましてや沢山の女性の居場所になれるとは思えない。

どうすればいいのかなんて僕の頭では思い付かない。元々頭を使うのは別の人に戻している筈なのに、自分がやるべき事もやれずに現状に甘えているだけ。

「流石に届かないよね。名瀬さんには」

「うん」

素直に頷く。こうしている間も幹部の意見は纏まる。…と思ったがいつこうに纏まらないらしい。ジャスレイにテイワズを辞めることを強制。聞かないのならその場で処刑。今回の件が本当にジャスレイの指示か不明なのでとりあえず呼んでその後、もう一度会議を開く。

そうこうしているうちにジャスレイが傭兵を率いて攻めてくるかもしれないというのに。中立派の人間は頭の中お花畑ではないだろうかと疑ってしまう。

そう思いながらもため息をつく。

シユインとの会話も止まり静寂が流れる。僕はジャスレイとの抗争はいつかあるものだと考えている。だとすると勝てるのだろうか。

そんなことを考えてしまう。

そんな自分を察したのかシユインが横から声をかける。

「ねえ、ゆうちゃん」

僕の手の上にそつと手をのせて、優しく言ってきた。その雰囲気からなんとなく察した。

何か秘密があるのだろう。それを打ち明けようと。

「何？」

「その…もし、もしもだよ…ジャスレイと戦うつてことに…なるんだよね。なつたら…」

「なつたら？」

「…」

いつになく歯切れが悪い。不思議な事にシュインは特にこういうときはいつもより流暢に喋るのだ。用意してきたように。いや実際用意していると思うのだが。

それほどの問題なのではないかと緊張感が増す。

彼女の口がゆつくりと開く。緊張感がゆつくりとだが、強くなっていく。

「私を出さないで欲しいの」

そしてはつきりと言った。

私を戦闘に出さないで、と。

色々思うところはあるだろう。アミダが死んだのは自分のせいだと思っているのか

もしれない。自分のモビルスーツの操縦技術に問題を感じたのかもしれない。ジョーカーの事、責任を感じているのかもしれない。

わからない。しかし、彼女がこうはつきりと言ってくれた。夫として答える必要がある。

「わかった」

「…え？」

しかしシユインはその答えが意外だったらしく、目を丸くする。この答えは外れだったのかと少し他人行儀で考えた後にじゃあ正解はなんだろうと再び考える。

いや、僕の戦闘にはお前が必要だ！と言つて欲しいのだろうか。しかし、雰囲気からそうとは思えない。なんか深い物を感じる。

そう思っているとシユインが慌てながら言う。

「え？いや、何でとか…聞かないの？」

「ん？ああ、なんで？」

理由なんてあんまり考えてなかったが本人からするとそれが一番大切らしい。

咳払いをして緊張感をぶち壊すようにいつもの声で言う。

「ゆーちゃんはね。確かに名瀬さんに劣るよ。でも、そこまで悲観する必要は無いんじゃない？」

なんで？と聞いたのにいきなり話の内容を変えてきた。

でも、落ち着いて聞くことにした。彼女の一言一言を逃さないように。

「そう？」

「うん。それに私はそんなゆーちゃんが好きだよ。名瀬さんよりも。だから胸を張って。ちゃんとしてなきや守れるものも守れないよ」

シユインは遠くを見るように僕から視線を外した。

そして歳星ではない別の場所を見るように視線を送ったシユインは言葉を選ぶように小言を言ったのか何度か口を動かしてそして此方に振り向いて言った。

「ゆーちゃん。お父さんになるんだから」

「・・・は？」

その瞬間頭の中が真っ白になった。何を考えているのかもわからず、というか何も考えていなかっただろう。

どんだけ自分が危機的状態のかも忘れるほどの。

戦場だったら素人でもプロを殺せそうな程の時間が流れてやつと状況が掴めてきた。とはいっても冷静さは失ったが。

「お父さん？」

「うん」

「僕が？」

「うん」

そう掛け合いをするとまた情報を整理していく。

まず、一つ僕がお父さんになる。つまりそれはタービンスの誰かが妊娠したということ。そして僕ということなので僕が相手をした女性の誰か。そしてそれは先程の言葉から言つて、シユインだ。

シユインが妊娠したと言うこと。しかし、彼女は妊婦特有のぽっこりお腹ではない。ではまだ出来て日が浅い……のだろうか。

そう頭の中で思考がぐるぐる回り、混乱しているとそれを見かねたシユインが僕の手をとった。

「ちよつ！待って！シユイン！」

「ほらー！」

そう言いながらシユインは自分のお腹に僕の手を押し付けた。そのお腹は意外と膨れていた。

「あつ……」

暖かい。その温度で少し安心した。

妊婦さんの事はよくわからないが姉さん達が妊娠しているときに何度か触った事が

ある。ふくよかな感じとは違うこの不思議な感覚。まさにそれだった。

「わかった？」

「うん。いつ… って… あっ」

完全に理解をした。鉄華団地球支部への救援の時のあれだ。ゲイレールのおっさんを殺したあとだ。その後のあれで… 本当にこの人は。

そう何やってんのといいたくなる気持ちを抑えながらも、とりあえず簡単な状態を聞いていく。どちらにしろ、暫くの間戦場には出せない。出せたとしても船の中で何かをしている程度だろう。

それほどだった。

「なんで」

「ん？ 何かな？ 驚いてくれた？」

「なんでこれをもつと早く言わなかった！ わかってからすぐに言えばそれなりの対処はとれただろうに。」

本当に、本当に何をしているのだろうか。父さんと母さんを救うための戦いだって本当はそれなりの葛藤があった筈だ。なのに僕はさも当たり前のようにシユインをモビルスーツに乗せて戦闘をさせた。もしかしたらもうお腹の胎児は死んでいるかもしれない

ない。

そう思いながら察しの悪い自分を自虐するのと今までの時を悔いているとシユインが察したのか頭を撫でながら言う。

「んーと驚かせたかった。：というかね。ゆーちゃん、難しそうだったから。安心して私達がいる」

いままで甘えながらずっと繰り返させていた。言葉それをまだ繰り返す。僕だつて時が立てば大人になるかもしれない。けどこのまま甘えていていいのだろうかと思つてしまう。

「でも、僕はちゃんとみんなの居場所に…なれなきゃいけない」

「うん。そうだね。でも、そんなに気にする必要は無いんじゃないかな？」

今、彼女は気にする必要はない。とそう言った。

全く気にするなという意味でないのはわかるがそこまで意識しなくても良いという事になる。気を楽にさせるための一時的な嘘か。しかしそうとは思えない。

意外と考えれば簡単な事なのかもしれない。

一人でやらなくてもいい。居場所になるというのは意外とあやふやな物で人によって対応の仕方が違う。だから、僕の考える居場所とシユインの考える居場所は少し違うのかもしれない。

そう考えている時だった。

「ゆーちゃん！」

端末に時折送られてくるメッセージが通信に変わった。

慌てて端末を拾い上げるとそこにアガーテの顔が写し出される。その顔には汗が出てきて、余裕の無い状態と伺える。会議で何かあったのか。

「とりあえず落ち着いて、深呼吸……どうしたの？」

そういうとアガーテは深呼吸をして多少落ち着いたのかゆつくりと話始めた。

「ジャスレイが攻めてきた。しかも中立派の殆どが動こうとしない。多分……」

「動けないように細工されたか、それとも脅されているか、金かなんか握らされているか」

そういうとアガーテは頷く。結構大変な話になった。最悪だ。戻ってきたばかりのテイワズがいきなり真つ二つ。流石に事を大きくし過ぎたと反省する。

とにかく、動かなくてはいけない。

ジャスレイよりも早く。もう迷っている時間なんて無い。

「動かなきゃ。今動かなきゃ間に合わない」

「ああ。わかつてる」

ジャスレイがそこまで動くということは動けるメンバーは自分達の力で倒せると

思っていると言う事だ。つまり、増援は期待できない。最悪鉄華団も来ないかもしれない。

それでもやらなくてはいけないのだ。

「シュイン！」

「大丈夫。任せて」

シュインは僕が呼んだだけでやって欲しい事がわかったのか自分の端末を持って通信を始めた。今は一秒も惜しい。

戦力も足りなければ時間も足りない。イブシロンに至ってはもうマトモに戦えるパイロットが僕しかいないのだ。でも、だからといってハイそうですかと引き下がれるものではない。これにみんなを守るかどうかがかかっているんだ。

そう思っている瞬間、頭痛がした。痛い筈なのにそれが嬉しさへと変わる。別に痛いのが嬉しい訳ではなく、それが相棒からの合図だと気付けたから。

「行こう。アンドラス」

第57話

因果応報の一撃

「遅い」

そう言つて遠くにいるマン・ロデイ、おそらくヒューマンデブリの機体を狙撃で仕留める。相手からすれば緊張しているときに急にコックピットに弾丸が入ってきてそれに巻き込まれたという感じだろう。心中お察しする。とは言えど、一人一人は弱いものの数が凄まじい程ある。JPTトラストそして火星圏と木星圏内で集められた海賊の連合軍。

迎え撃つは鉄華団を始めとした数は少ないものの、一人一人が強力なテイワズ代表精鋭。

そこには勿論、テイワズの狙撃手と言われた僕もいる。

「ピット」

また一機仕留めた。ここそこ隠れて撃っているだけなので危険はあまりない。だからこそ、周りの状況が見れる。周りの状況はというと、最初こそ、圧倒的数で押されていたがたかが勝手に集めて、連携もろくにできない傭兵と同じく非武装の民間人ばかり狙う海賊。強い筈もなく、鉄華団の悪魔を始めとした精鋭達にその首を刈り取られてい

く。

最悪僕がいなくても勝てそうな勢いだ。

「アジー姉さん。もうこっちは終わったから移動するね」

「わかった。ラフタにも言っておく」

アジーに通信をして言った通りその場を離れる。もうそろそろ敵にこの居場所がバレる時間帯だから。

そして気づかれないようにそして早く。タービンス特有のエイハブウエーブ隠しを使用してその場を離れる。

それを隠すようにラフタとアジーが少し敵を誘導する。

そして持ち場についたらまた構えて《スナイプ・モード》を使用、敵機は接近してこないで絶対の一撃を利用して遠くから狙撃すれば外したりしない限り、危険度はない。

そこまで出来れば後は簡単。敵の中で強そうなやつ、若しくは指揮をしていそうなやつを勝手に選んで（指揮官機はブレードの数を増やしたり敵の位置が見やすいところにいる確率が高い。）

そいつのコックピット目掛けて狙撃をして一撃で仕留める。そして相手が位置に混乱しているうちに他の機体を沈める。正面戦闘をしたら時間はかかる上に勝てる見込

みは薄いのでバレたら逃げる。

そこまで理解して完璧に動ければいい。ただそれだけが僕の仕事。それがただ上手いだけでテイワズの狙撃手と仲間たちに持て囃された。そうして現状に甘えて、大切な物を失った。

後少して僕も父親になるんだ。その子には見せてあげたい。戦争なんて無い世界を。だから――

「ヒット」

僕はこの引き金を引き続ける。今度は守るべき物を見失わないようにするために。

その頃JPTトラストでは。

黄金のジャスレイ号という少しダサイ名前をした戦艦を中心に円形状に幾つもの戦艦、総勢6隻が数多もモビルスーツを出撃させながら状況を見ていた。

相手は精鋭とは言えど、数はこちらの半分にも満たない。戦艦で言えば3隻。でも、戦闘ばつかしている脳筋共が多いからまた寄せ集めとはいえ、海賊を呼んだ。戦艦で言えば総勢1隻あわせて総勢7隻。それがいまいる戦力だ。だからこそ、金で買いまくったヒューマンデブリを使用しながらも安心して戦える筈だった。しかし、それほど簡単

にはいかない。

「ユーゴー一、二、三番機被弾。戦線を離脱。加えてヒューマンデブリ一隊全滅！これにより我が方の戦力更に5%低下！」

「ちっ！あいつら……いくら金払ったと思ってるんだ。ヒューマンデブリも数増やしたつてのによお！」

ヒューマンデブリも海賊も。本来なら要らないと思えるものですら雇って買って使っているんだ。仕事もマトモにしないんじゃないや金を払った意味がない。

金持ちのくせに貧乏揺すりをしながら苛立つ。

そしてまたジャスレイの胃に穴を開けるような事が報告される。

「続いて、ユーゴー八、九、十番機破壊。狙撃と見られる攻撃です。おそらくテイワズの狙撃手キです」

親父を失ったテイワズの狙撃手はマトモに戦えずタービンスも崩壊した筈。何故今動いている。しかも元タービンスメンバーを集めて。

何故だ。何故だ。あの人数を纏めあげられるほどの人がいるとは到底思えないのだが。

「おい、モビルスーツ隊！聞こえるか！数で押し潰せ！時間が立てばクジャン家の援軍、それに予め雇った海賊たちだつて来るんだ！それまでは耐えろ！一対多数を維持して

「一機つつ潰せ！」

そう通信しながらも汗を流していた。これは危険だ。一つ間違えれば、自分が死ぬ可能性だって十分にある。

「ガンダムフレームには気を付けろ！特に一対一を避けて囲んでゆつくりと落とせ！」

ガンダムフレームという敵の脅威をとりあえず知らせる。鉄華団のバルバトス、グシオン、フラウロス。そしてタービンスのアンドラス。どれもテイワズの中で上位にいるモビルスーツパイロットが操る機体だ。実はもう一機存在しているがその機体は今確認されていないようだ。兎に角、寄せ集めの傭兵一人が到底倒せる相手ではない。

それでも数は十分なのだ。しかし鉄華団は喧嘩だけは強いからと海賊まで呼んだ。なのに、それなのにこの現状はなんだ。徐々に此方が押されている。

しかし此方にも奥の手がある。ギャラルホルンアリアンロッドのクジヤン公。タービンスを潰した時のように圧倒的な差で殺してくれる筈だ。嬉しいことにクジヤン公は鉄華団とタービンスを嫌っている。その二つの勢力さえ落とせば後はそこまで難しくない。

「おい！クジヤン公からの連絡は！」

「それが……まだなんの連絡も……予定の時間はとつくに過ぎているのに！」

追加で雇った海賊達も来ない。おかしい。

その時頭の中に一つの考えが浮かんだ。しかし、そんなことはない。あのクジャン公がそんなことを良しとする筈がない。

「あのヘタレ野郎が……ここまで来てケツまくりやがったのか!」

肘当てをおもいっきり殴りながら吠える。いやそんな筈はない。そんな筈はない。そう頭の中で言い聞かせるがどう考えてもそれ以外の理由が思い付かなかつた。

「糞! 予定通り鉄華団だけが攻めてこれば! 罪を全部積ませてあの狙撃手と同士討ちをさせることだつて出来たのによお! ふざけやがつてえ!」

本当ならイオクの働きで一番の邪魔物である名瀬を消す。その後鉄華団の怒りを此方に差し向ける。それと同時におそらく精神崩壊もしくはそれに近い状態となつた残りのタービンスメンバーを徴収。特に狙撃手なんてヤク漬けにすればヤクとモビルスーツの部品代なんて軽く払えるほどの金が手にはいる程の力を持っている。鉄華団が兄貴の敵討ちとかいつて攻めてきた頃にタービンスメンバーと傭兵達、ありつただけのデブリを激突させる。数は圧倒的に此方が上回っている上に宇宙ネズミはタービンスを撃つことに躊躇する。此方の勝ちは見えている。

そしてイオクを使ってマクマードをでっち上げの罪で捕らえさせる。自分は実はその事がわかつていて潜入していましたがともいう。そうすることで俺はテイワズの

トップに登り詰める上にギャラルホルンとのパイプをもっと太くできたと言うのに。
「ふざけるなあああ!!」

その頃マクマード宅。

「礼を言わなくちやならねえなあ…海賊の始末。レヴオルツ・イーオン」

盆栽の手入れをするマクマードに椅子を進められながらその椅子にゆっくりと腰かけるスーツを着こなした男。中年ではあるものの、古臭さはなく、丁寧だ。でもよくわかる。これは作られた偽物の物だと。

「いえ。そちらの内部状況があまりよくないとのことでした。非力ながら我々も力を貸させていただけないかと思ひまして」

「名瀬が死んでお前がお前だと気づく人間がもういねえからか?…いや、やっぱいい。どうせいわねえだろ」

その男の方を振り向くとその男は時間が止まったように動かなくなっていた。おそらく押ししても無駄だろう。それほどショックを受けていた。

「懸命な判断です…死をこのように利用するのは許されません」

「そうか。それで?お前の目的は?」

これはただの救援だったり、ただの商談をしに来たのではない。だからすぐに双方の嫌な空気が晴れた所に男が口を開く。

「我々はマクギリス・ファリドの言う革命に参加するつもりです。我々の目的はあくまでギャラルホルンの改革なのですから」

そう言つてその男は立ち上がりとある紙を此方に渡す。白い綺麗な紙だ。殆どの物がデータ上で作れるようになった今は紙はとても珍しい。これは我々は紙を低コストで作ることができる、もしくは紙を格安で入手できるルートがあると言ふことだが、それが何の意味を表すのか。

それを無言で受け取り紙を開く。そこにはギャラルホルン革命に参加してほしいとの内容があった。それも直筆だ。目の前の男の血液指紋まである。この部屋には二人しかいないと言ふのに慎重……言ひ方を変えれば無駄な手間をかけさせる。

「協力しろと?」

「彼女の息子……テイワズの狙撃手にはせめて協力して欲しいですね。なんとつて彼は……いえ。この事は言わなくても良いでしょう」

その男はユウがテイワズの狙撃手と呼ばれることを知っている上に彼すら知らない秘密を知っている。本当にユウは面倒事を濁いたスポンジのように吸い込んでいく。

このまま上手くいってジャスレイを撃てたとしても、JPTトラストというテイワズ

の資金源を失う事になる。勿論ジャスレイに殺されてテイワズを乗っ取られるよりはマシだが、資金源を失えばテイワズというでっかい組織が弱体化すればそれに比例するように他の海賊も強くなる。ならば、この場でレヴォルツ・イーオン、ギャラルホルンと組んだ方がいいと考えられる事もある。しかしそれは危険な賭けだ。マクギリス・ファリドというのはセブンスターズとはいえ、最近聞くようになった者。大局を見るのはおそらく難しい。失敗すればテイワズは終了。残りのギャラルホルンに襲われて塵も残らないだろう。

「…希望者のみを一時的にテイワズから切り離し、戦わせて勝てたら戻し勝てなかったそのまま縁を切る」

「つまり、どちらが勝とうとテイワズにマイナスが発生しないようにするおつもりなのです。しかしその場合、勝利したときのプラスが小さくなりますよ」

「ああ。構わねえ。このまままだこの組織も終わりが近い。こんなところで終わらせるわけにはいかねえからよ」

盆栽の手入れを再開しながらそう言った。確かにユウがいたとしてもあんな多数VS多数の戦いでは現状をひっくり返せるとは思えない。でも心の中ではもしかしたらと何度も言われる。その可能性を考慮した最良の考えだ。

「承知しました。ファリド公にも伝えておきます」

後はジャスレイが打たれるのを待つだけ。

「ヒット」

また一機僕が葬った。ずっとヒューマンデブリとイキリちらしている海賊共の相手ばかりなので体力が無くなってきた。モビルスーツは弾丸とガス、後は損傷部分を直すだけしかも僕は一発も食らってないので損傷パーツはない。スラスタも殆ど使わずでなく、当たり前だがモビルスーツ隊の中では一番消費量が少ない。

スコープで相手の隊を見ると残りの二機がラフタ、アジーを始めとしたタービンズメンバーに呆気なく殺されていく。相手を順調に倒してこちらは損傷はあれど小破程度で犠牲者もタービンズメンバーでは0。

「姉さん、もうそろそろジャスレイの戦艦を狙える。モビルスーツを止めておくだけでいいから」

「了解！ やつちやえゅーちゃん！」

「任せてよ」

そのまま一度深呼吸をして、再びスコープを覗く。そこには黄金のジャスレイ号という子供っぽい名前を持つ船がある。その名の通り、そこにはジャスレイが乗っている。

引き金にかけた指に力がこもる。

こいつは人間、ただど人間じゃない。人間としての価値なんてない。だから殺す。

そのまま引き金を引いた。超高速で飛び出た鋼鉄の弾丸は真っ直ぐ飛んでいき、そしてその船の横つ腹を爆破させた。位置的に、スラスタの部分を当てた。元々船の見取り図は大体把握しておいたので簡単だった。

これであいつらは怯える。この戦闘に勝てないと知る。せめて愚かに命乞いをする姿を見てみたい。そう思い、ほぼ同じ部分に向けて何発か叩き込んだ。

そして丁度いい位置を探す。すると有効射程内ギリギリに入ろうとしている戦艦を見つけた。近い気もするが現在その船を先端として槍のようになっていたのでおかしくはない。

それは鉄華団の船だ。団長さんなど鉄華団の重要メンバーが乗っている。

「位置を変えるよ！場所は鉄華団の船、イサリビ！」

「了解！」

周りは制圧しているので簡単にイサリビへと戻れる。《スナイプモード》を解除してアンドラスを動かす。もう酔って吐くなんてしたくないし、まず宇宙じゃ出来ない。その短い間にアンドラスに座標を教えて動かしてもらい、鉄華団の団長さんに通信を開く。

「おお、どうしたユウ」

団長さんは怒りがあるものの、それを見せないようにそしてそれをこちらに向けないように意識しているのがバレバレの表情で通信に応答した。

「敵の本丸を狙撃します。イサリビの上部を使わせてもらうのと、もしJPTトラスト側から何らかりアクションのが来たら通信をしてください」

「わかった。許可する」

その許可を貰いながら操縦幹を握り直し、機体を駆る。簡単な事だ。イサリビの上立ちモビルスーツ隊の指揮を任せて後はもう一度《スナイプモード》を起動させて黄金のジャスレイ号のブリッジを狙う。そして後は待つ。幸い此方の勝ちが決まったような物で仲間達がモビルスーツ隊を蹴散らしてくれるのを見るだけだ。

その時に何かまた新しい感覚が来たので苦笑する。どうやらご不満のようだ。おそらく厄祭戦のパイロットはスナイパーではないのだろう。ガンマンだと聞いた。

「今回ばかりは焦れたい？僕だってそうだよ。でも待つてくれ、せめてあいつの命乞いくらい見ようか」

そう言うとは何か満足…はしていかないようだがアンドラスがとりあえず静まる。それを待つていると鉄華団団長から通信が開かれた。時間か。

そうするとジャスレイの声が聞こえた。

「お前らの力はよく分かった。で、どうよ、ここらで手打ちといかねえか？もちろんタダでは言わねえ。お前だつてただ俺を殺したつてなんの得もねえだろ？ここはお互いの利益のため。」

こいつは何を言っているんだ？それが最初に抱いた感想だつた。手打ち？父さん達の戦いは逃げることにすら許されなかつた。それを仕掛けて影で笑つて。部下だつて海賊達だつてみんな頭がどうであれ、戦争として正々堂々かは別として戦っている。死んでいつている。

なのに、こいつはそれを避けるか。その上手打ちときた。これは完全に仲間すら人と見ていない。道具扱いだ。お互いの利益それを大切にするのなら。

「僕はお前を殺す」

「え？え？そこに、狙撃手がいるのか？！まあ、いい。お前だつてわかるだろ？今ここで俺を殺したつて良いことねえぞ」

ちやんとある。そう言おうとしたが、それを口から出すのは流石に躊躇つた。ここでそんなこと言つては後々他の組織に手を出される可能性だつてある。そこだけは隠して、出来るだけ冷酷に。残酷に。もう僕はタービンスを守ればそれでいい。もしそれでタービンス全員に嫌われることになつても……悲しいが罪を受け入れるならそれくらい覚悟が必要なんだ。

だから冷酷に、残酷に。殺す。

「なんだと思ってるの？僕はねえ、お前が命乞いをする姿は面白いだろうなと思って团长さんにそれまで生かすように頼んだんだよ？ま、全然面白くなかったけどね……もうお前の存在価値はない。死ぬ」

これが僕だ。

もう一度黄金のジャスレイ号に標準を合わせる。

微妙だが逃げているようだ。ブリッジが動いている。でもそんなのは関係ない。僕はシステムよりも早く撃ち、それを当てる男だから。

「待った、待て！金じゃねえなら詫びか！だったら指の10本も100本も詰める！アイワズも手を引く！だから！だから……！」

その指はどうせ部下の者だろう。

そうあらぬ疑いをしながら引き金を引いた。詰める指が自分の物でも部下の物でもどっちでもいい。

死ぬんだから。

その瞬間黄金のジャスレイ号のブリッジは爆発した。ジャスレイの僕の狙い通りな頭を弾で抉った筈だ。しかしジャスレイが椅子から離れていれば生きていたかもしれないが、どちらにしろブリッジにいることから宇宙に投げ出されて酸欠で死ぬだら

う。

ブリッジの破壊が確認された後に黄金のジャスレイ号は動きを止め、待っていましたと言わんばかりにモビルスーツ隊がプルーマの如く引っ付いて中に侵入していく。その様を外から眺めながらやったよと一言呟いた。

革命編

第58話 宣戦布告

「つまり僕らに地球に行けと？」

「ああ。テイワズに戻る事が確定したとはいえ、お前の足場もまだ危ういだろう？ だったらしつかりとしたものにしてやる」

JPTTトラスト討伐から一夜あけた今日。

マクマードから呼び出しがあつた。何でもお偉いさんがお前さんを指定してきたとのことだ。この言葉を聞いたときははじめは何らかの罠かと思つたのだ。それほど僕のことを気にかける人間なんてもうタービンス以外にはいないだろうと。だからといって行けませんとはいえない。今さつきマクマードが言つたようにテイワズに戻つたとはいえ、0からのスタートなのだ。周りの女性を守るだけで強いとはとても言えない。せめて、そこら辺を整えなければなんともならないのだ。

とはいえ、ここまで早く仕事が来るとは流星に想定外だつた。そして気になるのはマクマードのしてやるといふ言葉。まるでこの依頼は100%成功……いや、失敗したとしてもマイナスに傾かない。そんな風を感じられた。勿論必ず成功する依頼がある

なら喜んで突っ込むだろうが逆にその安定が不安を煽る。

マクマードが言う事を簡単にいうと。

ギャラルホルンのお偉いさんを護衛して地球にいけ。他の組織にも声をかけているらしいが僕の場合は半強制的だ。まだタービンス全員で行けと言われるよりかはいいが、半強制的というのがまた首をかしげさせる。クーデリアの時を思わせるような言葉でしかし、裏があるとは僕でもわかった。それをわざと感じされるような振る舞いだっただけだ。しかももう一つ僕の頭を悩ませる物があった。それは一度ティワズを抜けて終わったら残った全員仲良くティワズに戻る。つまり一時的とはいえ、ティワズとは無関係の組織になるのだ。ティワズの風評被害を若干抑えるためだろう。そう考えながらももしかしたら勝利を期待されていないのではないかと思ってしまう。

「マクマードさん。今回の依頼、何か裏がありますよね？話してください。包み隠さず」僕がタービンスのメンバーを守りたいようにマクマードにだって事情があるのはわかっている。最悪の場合タービンスも鉄華団も簡単に切り捨てられると。だからこそティワズという組織のNo.2であるジャスレイがいるJPTトラストもすぐに切り捨てる決断をしたのだ。しかし、今回の件も僕が必要かと言われると首を横に降らざる終えない。確かに最後の狙撃も戦争にするために整えたのも僕ではあるがその場に僕

がいなくても遅かれ早かれこうなっていただろう。JPTトラストなんて頑張れば鉄華団だけでも倒せそうな組織だ。そのときにわかったのだ。今回の件のみに僕の利用価値があるわけではないと。タービンスという違法組織の人間を取ってマイナスのにたつたこれだけでプラスになると自惚れるほど僕も短絡的な思考ではない。それに今回は嫌な予感がするのだ。

「名瀬に頼まれたのもある。だが勿論それとモバイルスーツパイロットとしては押しがまだ弱い。ガンダムフレームだつてオルガの野郎達が持つてきたりどつかから発掘したりでテイワズの中では価値としては下がる。まあ、それとテイワズの物流を任せる人間としてというのを加えるとしても手放せる人材じゃない」

「では、僕の価値というよりタービンスとしての価値で僕を助けてくださったのですか？」

「勿論不服な訳ではないが、自分の価値がとても低い事を痛感する。確かに助けてくれたのはとても嬉しい。もし駄目だったらレヴォルツ・イーオンとかに頼るかそのまま傭兵にでも身を落とすしか無かったが特に後者はみんなを守るのが難しくなる。多分無理だろう。それくらい切羽詰まっていたのだ。」

「……まーそんなもんだ。けどな、テイワズじゃ狙撃手として戦場に出て化け物と戦えるのはお前さんだけだ。しっかり助けてやったんだからよお。期待してるぜ」

そして僕らの地球行きが決まった。その時に感じた嫌な予感はずだつていて、これによつて引き起こされる戦いが今後のテイワズ……いや世界を動かす結果になるとは僕は思わなかつた。そしてこれを後悔してもすることが出来なくなることも。

地球圏。

そこでは反ギャラルホルン組織の一つレヴォオルツ・イーオンが歳星の方へと向かつていた。

彼らの仕事はテイワズからの使者と共にギャラルホルンの護衛。ギャラルホルンに反するものがギャラルホルンの護衛を行うなど普通ならあつてはならないことだ。そう、普通なら。しかし勿論彼らはギャラルホルンに屈した訳ではない。自分達の目的を達成するために最短で進んでいる。ただだ。とはいえ、その護衛している側からすればギャラルホルン内であーだこーだ言われそうな内容、そして此方も説明しているとはいへ、他の反ギャラルホルン組織にギャラルホルンに屈したと思われたくはない。

ということとで護衛といえどついていくだけだ。しかもそれなりの距離をとつて。しかしこれにも大きな意味がある。

その中にて。

「ユダ様、マクマードさんからの連絡です。彼が動く」と

「そうか……しかしあの男に注目しているのはお前だけだぞ」

あの男、彼というのはテイワズの狙撃手、ユウ・タービンである。確かに彼等にとつてテイワズ（一度抜けた扱いなのだが）の救援はとても嬉しい。しかし、一人の男にそこまで注目していない。元々テイワズの精鋭達しか来ないので彼らからすれば数がほしいのだ。その中で一人、しかもその組織の長が一人の男に期待しては疑問が残るだろう。一騎当千が出来る強さなのではと疑ってしまうほどだ。

「狙撃手なら此方にもいるが確かにあいつには遠く及ばないだろう。しかしたった一人の男。お前はやはりあの女の息子だからと見込んでいただけだろう」

「おっしゃる通りでございます。しかしそれは即ち彼女の意思をついだ存在。ということです。ユダ様がアグニカ・カイエルの意思を継いで立ち上がったように」

今回レヴォルツ・イーオンはユダというカイエル家の男が立ち上がったのでそれに協力するというスタンスになっている。つまりカイエル家の人間がギャラルホルンの革命をする。ということになる。これはあくまで推測だが、アグニカ・カイエルもこの状況を見たら見て見ぬふりなんて出来ないだろうし手を貸すなんてもつてのほか。なので少し勝手だがユダが先祖であるアグニカの意思を継いで立ち上がった。そこがユウという少年と彼女の関係に似ていたのだ。

「俺は彼女の事をよく知らないがお前から見た彼も似ているのか」

「……まあそれはおいおい説明するとしましょう」

彼はそういうとその場に片ひぎぎをつけてひぎまつく。ユダも顔が引き締まり、緊張感が出てくる。

兵も数はある。中でもアールを捕まえられるほどの戦力がこちらにはある。未だにエースにしか配っていないとはいえ、マッドナッグなど厄祭戦時のモビルスーツ。それも高性能量産機を使える。

強い。それにもとより負けてやるつもりなどない。しかし当たり前のことだがギヤラルホルンも強く、アリアンロットは中でも一番の組織だ。それを引つ張るラストルに勝利を飾るために。

「時が満ちました。我々レヴオルツ・イーオンは再び貴方に忠誠を誓います。お受け取りください。ユダ・カイエル」

そう言うユダがいつもとは全く違う口調で返す。まるで式典のように。その声は優しくそして強かった。

「受け取ろう。そなたらの願いを」

そして地球に行くために出発する当日。

マクマードが声をかけたメンバーがゾロゾロと集まる。その中で一際目を引くのは鉄華団。バルバトスこと三日月・オーガスを始めとした戦闘員、他にもJPTトラストの残党の傭兵、海賊達。テイワズの中でも武道派に入る組織のパイロット。

テイワズの精鋭達だ。特に鉄華団とJPTトラスト関係は自分達が持っている戦力のすべてを用意してきた。

そして隣にラフタとアジーに並びその中に入る。

「ゆーちゃん…… 凄い気迫だね」

「でも僕らもその中に入る」

軽い会話をしながらも確かにこの中には歴戦の戦士が多数いる。流石最強のマフィア。これだけの気を放つパイロットがゴロゴロいる。しかもこれが全部潰れてもテイワズが回るレベルということはまだいるといってもいい。これだけ入れればリアンロットも怖くない。その半分ほどがJPTトラスト討伐に手を貸してくれた者達だ。今回も借りるしかあるまい。

そう思いながら鉄華団団長オルガ・イツカの目の前に立つ。

近づいてきた僕達に数人のパイロットが頭を下げる。団長さんは僕が近づいたことに疑問を感じたのか。此方の方を向いて尋ねた。

「ん？どうした？ユウ」

「地球に行つた後完全な私事を達成するために三日月・オートガスさんの手を借りたいんですけど。よろしいですか？」

「あ？いや、別にいいけどよ…何をするつもりだ？」

団長さんがそう言ったを確認すると何人かが戦艦の中に入っていく。出発の時からい。もう後には引けない。

残した者達の為にも、僕は必ず生き残る必要がある。絶対に。

「世界を変える」

その声を聞いたアジーとラフタは顔を見合わせて笑った。

そしてその1ヶ月後。マクギリス・ファリド率いる、地球外縁軌道統制統合艦隊が行動を起こした。

まずセブンスターズを召集し、ヴィーンゴールヴを制圧。アリアドネを通じて声明を発表した。その中にはイオクが起こした罪、タービンを違法組織に仕立て上げて強制捜査。その後ダインスレイヴを自ら使用したということとSAUとアーブラウの国境での戦争。それをコントロールしたガラン・モッサとラスタル・エリオンとの関係。ど

ちらともユウと鉄華団に関係するものだった。

そしてクーデターという形でこれを成し遂げたマクギリス。ギャラルホルンのヴィーンゴールヴの部隊を三日月に無力化させた。しかしそこにはマクギリスが把握していない少年がヴィーンゴールヴを走っていた。三日月の方には大体の地形しか渡っていない。なのに少年は迷うことなく、目的の場所へと走る。

「ユウ：．．．ちゃんとやつてるかな？」

「はあはあ：．．．後少し：．．．間に合えつ：．．．」

ゆっくりと時計の針は進んでいく。

しかしそんなことを知らないマクギリスはテイワズ精鋭部隊とレヴォルツ・イーオンに対アリアンロット用の防衛網を作らせる。

そして仕上げとしてとある施設に入る。

今回のクーデターをギャラルホルンの謀反ではなく、正しい行いだとするために。

バエル宮殿。

それがその施設の名前。

そこにあるのはセブンスターズ各主席のガンダム。パイモン、ヴィネ、ベリアル、キマリス、アモン、アスモデウス、プルソン

しかしベリアル、キマリス、ヴィネ、アモン、プルソンについてはそこには無い：．．．

いや、違う。一機、帰ってきた。

外装をつけヴィダールと名を変えて。300年前クリウス・ボードウインが使用したモビルスーツ、ガンダムキマリスが。

そして今に至る。

ヴィダールのコックピットから出た仮面の男はその仮面をゆつくりと外す。そこにいたのはガエリオ・ボードウインその人だった。マクギリス・ファリドの親友で当たり前だが後にセブンスターズの一席を担うはずだった男。それが今、バエル宮殿に降り立った。

そしてそこには二人の因縁とは全く関係ない男がいた。

「まあそんなに燃え上がるな。燃え上がったって尽き果てたときに悲しくなるだけだ」

その男、ライル・バレルは拳銃を引き抜きながらマクギリスにそれを向けた。つまり、マクギリスと敵対するという意思表示。

「バエルは貰うぞ」

第59話
いきたい

ここはどこだ。

暗い。一つの光もないその空間でそう思った。自分という存在がいつからここにいるのかなんてわからない。けど気付いたらそこに立っていてそう考えていた。

いや、たっているかどうかかわからない。寝ているのかもしれないし、座っているのかもしれない。体に感覚が無いからそう思ったのだ。

——俺死んだのかな？

いや、そんな筈は無い。あの後誰かわからない声に引き上げられてそして敵を打ち、そして気を失った。

ではまだ眠っているのか？ そういうえば戦いはどうなった？ 父さんは？ 母さん達は？
タービンは？

光も体の感覚も奪われた世界で俺は唸った。何もかもがわからない。考えることすら、この空間では邪魔な気もする。せめて、一筋でいい。光があれば。そこへ走っているのに。

体の感覚もないので喋ることも出来ず、ただ頭でここはどこだと考え続けた。体感時

間だと一週間はたった。もしかしたら何年もたっているのかもしれない。

でも、その世界に光はなく、全てが奪われた悲しい世界が広がるだけだった。

——やっぱ俺、死んだんだ

長い時間を過ごして俺はそう考えた。ではここは天国だろうか、地獄だろうか。そう聞かれるとおそらく地獄だろう。全てが無に満たされたここで一生どころではない永遠に住み、そしていつか頭で考えることをやめて精神が崩れて全てが停止してまた無に還るのだ。

ではここでもなにかを考えるのは無駄なのではないか。結局そうなんだ。あるべきものが無いところで手を動かしたって何も起こらないのは当たり前。そうだ。声も出せなければ音も聞こえない感触がなければ運動もない。熱いもなければ寒いもない。

全てが無で全てが無駄なんだ。

これが死だと少ない人生の経験を使い感じた。人間が死んだら仏様になると教えられたことはあるがもしかしたら仏様とは無なのかもしれない。思考も動きも全てが停止した者。

あとどれくらい続くのだろう。だったら早く楽になりたい。考えるのを、感じるのを辞めて楽になりたい。無駄な事はしたくない。したって何も起こらないのだから。

——殺してくれ

死んだ筈の空間でそう考えた。殺せと。この空間からも消してくれと。しかし頭の何処かで嫌だと誰かが言った。俺はこんなところに居たくない。帰りたい。家族がいるべき場所に。

頭が回らなくなってくる。そして全てが他人事のように感じてきた。

マイナスな自分がゆっくりと動きを停止していくなかでもう一人がゆっくりと立ち上がる。

そして動きを停止していく俺の肩を叩いて言った。

——君はもどりたいくないのかい？

——だって戻れないじゃないか。俺は死んでしまったんだ。駄目じゃないか。死んだ者が出てきちゃ……

——死んだなんて誰が決めた？君だろ？誰かが言ったのか？貴様は死んでいると

そう俺に話しかける俺はゆっくりと体制を戻していく。

それと同時に頭が戻っていく。何故何も見えないこの空間で俺が立ち上がったのがわかった？何故感覚がないこの空間で肩を叩かれたとわかった？

そう考えているといつの間にか自分が座っていたとわかる。いつ座っていたんだ？絶望したとき？何故座れたんだ？

そう頭で考えているともう一人の俺がいう。

——君はどうしたい？ いや、俺はどうしたい？

——こんなところにいるのは嫌だ。俺は……生きる！

そうだね。じゃあ……戻ってみようよ。本当にいるべき居場所に。

そういうともう一人の俺が俺の中に入る。そして一人の人間が再び出来る。そうだ。これこそが自分だ。

両足をおもいつきり使って飛び上がる。すると重力が無いのかそれは止まらずに進み続ける。

——俺は生きる！どんな障害があっても生き延びて見せる！

そうしているとゆっくりと白い者が見えていく。

光だ。これを何年も待つていた。この瞬間を待つていた。

その光に手を伸ばすとそこから出てきた腕が俺の腕を掴み引き上げた。

目が覚めると知らない天井が視界に入ってきた。というの嘘ですぐに今の場所を思い出す。ここは歳星の病院だ。そうだ。まだよく聞こえない耳でうつすらと聞こえる音は間違える筈もない、病院だ。

つまり、あの戦いのあと歳星に来て俺を入院させたということ。

「た、戦いは？」

声がよくでないが、それでも声を出してそれが聞こえるという現象に感謝しながら身体を起こそうとした。

寝ていた間全く動かなかった体が少し悲鳴を上げたが想像より痛みは無かったのでそのまま上手に起き上がる。もし何年も眠っていたら体も動かないと思うというのと身体中の細かな傷から眠っていたのは長くても2、3カ月程度だろうと推測する。

回りを見渡しているとその部屋の扉が急に開いた。そこにはアガーテを含めた数人のイプシロン、タービンズメンバーが入ってくる。その中にはイプシロンではないメンバーもいたので全滅ではなかったととりあえず安堵する。するとアガーテが急に抱きついてきた。

「ちよつ…アガーテ母さん？」

「もう…心配したんだからね？ ゆーちゃんにも後で連絡するよ！」

そういう彼女はとても嬉しそうだその両目から涙が溢れている。本当に俺も愛されている。なのに彼女の空間にいて諦めようなんて考えた自分を一度殴りたくなかった。

とりあえずそう言うことから思考をずらしてアガーテに問う。

「じゃあ、戦いはどうなった？ 父さんは？ 他の母さん達は？」

そう言うところが急にしんみりとする。みんな顔を伏せて言葉を失った。そうか。死

んだのか。元から無茶な作戦だとは思ったがあの弟ならなんとかなるんじゃないかと思つてしまった俺も俺だ。さしずめこれは俺がこんなボロボロになるまで戦つたのに成果が得られなかつた事を悔いているのだろう。

「その…名瀬さんとアミダとジョーカーが…」

「そうか…わかつた。ありがとう。他のみんなは無事だつたんだよね」

「うん…なんとか」

アガーテが俺を強く握りながら言う。声から耐えているということがわかる。

父さん、アミダ母さん、ジョーカーが死んだことは勿論悲しい。けどそれでも他のみんなが生きているんだ。これだけでも今回動いた価値があつた。

「ありがとう。生き延びてくれて」

そう言いながらアガーテの頭をゆっくりと撫でる。それに合いの手を打つように涙がこぼれる。

もう死んだ人の事を悲しんで。俺たちの行いは無駄では無いはずだ。沢山の人を救えたのだから。

そう思いながら、もう死体すら無いだろう家族の事を考えた。

——大丈夫。安心してくれ。ターピンスは俺たちが守る。少なくとも、ユウが上手く出来るようになるまでは俺がしっかりと引つ張つてやる。なんたつて兄貴だからな。

だから任せて見守ってくれ。父さん。大きな母さん。

こうしてエストが復活した。医者の話だとモビルスーツの操縦はまだきついらしいが整備くらいなら何度でもなるらしい。本当にパイロットという仕事がどれだけ体力を使うのかを考えさせられた。しかし、それくらい使うのなら僕の体ももう少し筋肉がついてもいいんじゃないかと関係ない事を少し思ってしまったのは蛇足だ。起きたばかりで悪いがエストも作戦に組み込まれることを頭の中で決めた。

出発の数日前。

流石に妊婦であるシユインを行かせる訳にはいかずシユインは作戦のメンバーには入れなかった。他にも弟、妹達とそれを育てるためのメンバー。戦闘向きではないメンバーは置いていくつもりだ。マクマードさんも残りのメンバーはちゃんと守ってくれるらしい。僕はその男を信用した。とにかく、組み込まれなかったことにシユインは不服があるらしく呼び出された。

「ねえ、ゆうちゃん。本当に行くの?」

「うん。マクマードさんも仕事柄僕達に隠していることはまだあるとは思う」

言った通りだ。マクマードさんも部下の僕達には口が裂けても話せないのような事、いくつもある筈だ。今回の件だってギャラルホルンのマクギリスの護衛とした聞いて

ないがそれ以外の理由があるのは明確だ。そうでなければテイワズの精鋭なんて集めようとはしないだろう。

「だったら……！」

「でもね。この賭け乗ってみてもいいと思う。最悪護衛はしたのではいさよならと言えば帰ってこれるし、戦果によっては幹部のなかでの僕の扱いが変わる」

簡単に言えば軽く切り捨てられる立場から逃げたいと、そういうことだ。無理に突っ込む気は無いがこれは千載一遇のチャンス。それを逃せば認められるまで長い時間を要する。僕には時間がないのだ。いつ死ぬかわからない戦場に降りたって銃を握って狙撃をして動く。もしかしたら明日死ぬのかもしれない。今やらなくてはならないのは僕が死んでも良くすることだ。父さんが死んだときに思ったのだ。父さんは死んでも僕らがテイワズとして活動出来るように調整してくれた。もし闇討ちされたとしてもイプシロンとタービンスが融合するだけで終わっただろう。それほど立場を安定させたというのにそれを一度僕は崩してしまった。だから、次は僕がそれを積み立てる。そのための時間はあまり無いのだ。

だから、最短で行くしかない。もし僕が死んでも問題ばかりで涙を流す暇さえないのは嫌だ。

「確かにそれは成功すれば確実に景色は変わるよ。でもね、それは成功すれば。失敗し

たらテイワズどころじゃない。死ぬよ」

「いつだってそうだ。同じくらい苦しむなら上がりは高い方がいいに決まっている。」

賭けるチップの価値が同じなら報酬は多い方がいい。勿論今回もまだ何かしらあるだろう。ただ地球まで護衛してはいさよならで逃がしてもらったとしてもマクギリスがギャラルホルンで何かしらやらかせばこっちまで影響がある。

そう考えていると端末にメッセージが来た。シユインに断つて端末を見る。そこには今回の依頼主マクギリス・フアリドに聞いた今回の仕事内容を細かく記載したものがあつた。マクマードが話してくれないのなら依頼主に聞けばいいじゃんと何処かのお姫様が思い浮かびそうな案が頭の中に出てきてそれを見る。その中にはギャラルホルンのクーデター、そしてバエルを使用しセブンスターズの大半の勢力を味方につける。最悪足掻く者がいたとしても今回雇った護衛、地球外縁軌道統制統合艦隊と残りのギャラルホルンを使えば戦力差は二倍三倍どころではない。

あのときのか。

それは記載された情報を見てユウが最初に思ったこと。あのとき、とは鉄華団地球支部の救援に言ったときにマクギリスから話があつたのだ。アグニカ・カイエルになりたから力を貸せと。あのときは交渉するのはあくまで鉄華団団長だったので彼を無理矢理押さえ込むことで話を終わらせたが強引に来た。よほど僕たちの力が欲しいのだ

ろうと感じる。しかしテイワズの精鋭全員でも月外縁軌道統制統合艦隊、アリアンロッドには及ばないだろう。二倍とは言わないが圧倒的な戦力差がある。そこまで欲するもので無いはずだ。つまり本当の狙いは過剰な戦力ではなく、アグニカ・カイエルの意思を感じた僕らを戦わせること。なのだろうか。よくわからないが勝手にそう判断する。そして気になる点がもうひとつ。

最後の仕上げ。

ガンダムバエルに搭乗してアグニカの魂がマクギリスを選んだ人間としたということとを世界に広げる。

300年前の人物と言えど現在でも最高幕僚を務め、正式なトップとなっているアグニカ・カイエル。彼がもしマクギリスを選んだとすればマクギリスがギャラルホルンのトップとなることも難しくはない。

これが自分がアグニカ・カイエルになると。そういうことか。彼の中ではバエルに乗るものとアグニカ・カイエルは同じ存在なのだろうか。少し違う気がするがそんなことをしても堂々巡りを繰り返すだけなのでここで一度停止する。

そう考えながらもぼくの頭の中にはひとつの考えが浮かんでいた。

それはバエルをマクギリスに渡していいのだろうか。ということ。

確かに今回起こす予定のクーデターを正当化するにはバエルに乗るのが一番手っ取

り早い。勿論乗れるのであればだが。しかしマクギリスだってそんなに馬鹿じゃないいままでバエルに乘ろうとしたパイロットが沢山いたことも、それが全て失敗していることも知っているはずだ。それでも挑むと言うことは確証があるのだろう。自分なら行けると。バエルを動かせると。

だからこそ思ったのだ。アグニカ・カイエルの魂をマクギリス・ファリドに渡しているものか。例えば僕がバエルを手にしたとしてもアンドラスはあるし、アグニカ叙事詩を読んでわかったバエルの大体の性能から僕に向いていないことはあきらかだ。ではなぜこんなにも嫌な感じがするのか。目指していたゴールを横から奪われるような感じ。

「ゆーちゃん？」

端末を見ながら考え事しているとシュインが後ろから覗きながらぼくの肩を叩く。それで現実に引き戻された。

「何？」

「無理はしちや駄目だからね。絶対に帰ってきて」

わかってている。けどいままでの行いからわざわざ無理な方向に進んでいる気もする。結局ここまで来てまた落とされるだけ。そんな結末になる可能性だって十分あるし、おそらくそちらの方が確率は高いだろう。

無理だつて、みんながそういえば僕は引き下がったのかもしれない。でも、このままだじや駄目なんだつてこともよくわかっている。

その事をわかつているから帰つてきてと言つたのだ。危険な事に脚を突つ込むのだから。勿論成功すればテイワズも僕らも安定を得ることができる。父さんが与えてくれたのに気付かず、そして捨ててしまったものを取り戻すことができる。

「わかっている。けど戦場に絶対なんてない」

「知ってるよ。けどね、諦めちや駄目だよ。私はずっとここで待っているから、何年たつてもずっとゆーちゃんだけを。だから必ず帰つてきて」

本当は彼女だつて戦いたい筈だ。しかしそのお腹が柵となり、彼女を歳星から出れなくしてしまう。憎むだろうか。その子を。しかしそうしてはいけないのだ。だからこそ、絶対に生きて帰らなければならぬ。いいことにここに帰ってくるだけでみんなに会えるんだ。

これがうまく進んだら死んでもいいと考えた筈なのに死にたくない理由が出てきてしまった。本当に、彼女はずっとそうなんだろう。意思を揺らがせる。

もしかしたらこれが終われば切つた貼つたから卒業出来るかもしれない。少なくともみんなを卒業することは可能だろう。

「わかった」

意思是決めた。後は貫くだけだ。もう心配することは何もない。僕ははじめから一人では無いのだから。

第60話 王のイス取り

バエル宮殿にて対峙する二人の戦士。二人ともその背中には阿頼耶識システムが突っ込んであり、向かい合う戦士の内の一人ライル・バレルの物も、もう一人のマクギリス・フェアイドの物も厄祭戦時代の物を復元した最高のモデル。

悪魔を操る資格を得た二人が対峙しているのだ。

「それはつまり、私にバエルを渡さないということかな？ライル・バレル」

マクギリスがライルにそう言いながらも自身の腰のホルダーにかかった拳銃を手探りで探す。ライル・バレルという男についてはマクギリスもよく知っている。ジェラルド戦火という戦争の戦況を一人で変えた悪魔。異名なら黒い二刀流剣士、漆黒。昔の物となると純白、そしてアグニカ・カイエルの再来という大層な異名がつくほどの人間。「そうかな、俺は別に誰がバエルに乗ろうが関係ないただ、バエルその機体が俺に向いているだけだ」

その言葉を聞いてマクギリスは眉を動かす。彼には覚悟はあるが本当に欲しているのはアグニカになるということでも、アグニカの意味を継ぐという物ではない。ただ、単純な力。膂力の強いバエルを使いたいという単純な欲望。アグニカに憧れている彼

から見ればそれは許してはならない物だった。

俺に向いている。その一言で神聖な機体を使う許可等降りるはずもないのだ。

「そうか。残念だ、ライル・バレル。君なら……勝ち取れると思っていたのだが」

思わせ振りのセリフを吐きながらマクギリスはため息をつく。その反応をおかしく思ったライルは拳銃を握っていない手で通信機を持つ。そして道端に落ちているゴミを見るような目でマクギリスを見ながら言った。

「まるで自分が勝てるような言い方だな。此方が拳銃を突きつけているというのに」

そう言つて拳銃を微妙に動かして音を立てた。しかしマクギリスはその程度では眉一つ動かさないうた、一点。こちらの拳銃を睨んでいるだけ。たとえ防弾チョッキを着ていたとしてもこの距離だ。撃ち抜けるこの距離でこの余裕はおかしい。

増援でも来るのだろうか。それとも俺がこの引き金を引かないと思つているのか。

「案外君が私に勝てると思つているのは君だけかもしれない」

「そうか。なら長話は終わりだ。その四肢を撃ち抜かれてアメリカにその身を与えろ！」

素晴らしい放ちながらライルはその拳銃の引き金を絞る。それをしようと思つた。しかしその瞬間バエル宮殿の扉が開き、そして天井が崩落した。崩れた天井がこちらに落ちてくる。そのぽつかりと空いた隙間からは一機のモビルスーツの影が見えた。

半開きの状態で突如動きを止めた扉からは小柄な少年が何かを投げるところまでは確認した。

「マクギリス：： 貴様あ！」

ライルは叫びながらもヴィダールから飛び落ちていく。天井の一部がヴィダールに命中するのを片目で見ながらも苦し紛れに放った一発はマクギリスの頬を浅く切った。

体制を維持しながらも持ち前の体力と筋力をいかし、自身より重さが重いためか落下が早い天井の一部に脚をかけて再び飛び降りてバエル宮殿の橋に手をかける。後ろを振り向くとヴィダールが乱入してきた鉄華団のモビルスーツに弾かれて壁にぶつかつた。白い機体で、その肩パーツは鉄華団のマークが掘ってあり、そこから名前がわかった。何度か戦ったことのある相手だ。しかし、その時と比べて機体が変わっているがその得物の特徴は大体同じだ。そのモビルスーツが落ちてくるのとはほぼ同じ瞬間にヴィダールに何らかの攻撃をしたのだろう。ヴィダールが倒れた衝撃で浅い水溜まりから水が跳ねて制服につく。

「鉄華団のガンダム：： バルバトスカ。ボードウィン！そちらは任せる！」

了解との声も聞こえなかったが少しくらいなら大丈夫だろう。モビルスーツを生身で相手できる訳がない。ここはボードウィンに任せて拳銃の脅威からひとまず逃れた

マクギリスがバエルを盗む前に此方が盗みたい。すぐに橋に立ち上がると目に違和感を感じた。この違和感は痛みだろうか。それにしても弱すぎる。もしかしたら目に何が入ったのかもしれないと思いつきながら周りを見渡す。

そう考えている瞬間に扉から投げ込まれた物がわかった。催涙ガスだ。しかし、それを投げた人間もそこまで頭は回っていなかったのだろう。普通は顔に直接当たるそれを何本か開けて投げ入れたのか空气中に散乱していた。勿論何本かで量が足りる筈もなく、一面に広がり、涙は一滴も出てこない。しかもバエル宮殿は意外と広いためすぐに晴れていく。効果が薄すぎる。

そこから素人だと推測される。催涙ガスを使うにしてもこの使いからは間違っている。なんなら可燃性ガスと共に火でもぶっこめば爆発が起こっただろうにと最悪の結果を頭で考えながら橋にかけて手の逆に握っていた拳銃を構えながらマクギリスを探す。

いや、場所はわかる。先程の催涙ガスは前述の通り、顔には届いていない。つまりバエルは見えているのだバエルを見てもまだ起動していない。つまり、マクギリスはまだこの橋にいる。そう考えていると意外とすぐに見つかった。これで振り出した。

「両手を上げろ。マクギリス・ファリド」

しかしそう上手くいくわけはないことはわかっている。マクギリスのその手には拳銃

が握られていた。二つの拳銃が双方の脳天を狙っている。

「君はアグニカ・カイエルの再来と呼ばれるほど、力があつた。そして君には人間誰しもが持つ欲望があるはずだ。それが人間であることの証明なのだから。何故叶えない？ 叶えようとしはない？ まさかこれを保つことが君の願いではない筈だ」

「そうだな。欲望、願い……か。あるぞ、でつかいのがな。それを叶えるために手柄が欲しい。お前はその生け贄だ」

両者がピクリとも動かないその横で二機のガンダムフレームは激しい戦闘をしていった。たまに出てくる水しぶきが橋を濡らす。

しかしおかしい先程催涙ガスを撒いた本人が出てこない。まさか催涙ガスで終わりとでも思っているのか。そんな筈はない。只でさえこんな場所に侵入してきたんだ。そんなイタズラめいたことで終わるとは思えない。

しかし、バエルの方に向かった人間はたったの二人のみだ。つまり未だに扉からその身体を投げ出していない。

そう思い、扉の方向に意識を送りながらも相手を睨む。

すると拳銃に強い衝撃がかかり、吹き飛んだ。

全くわからなかつた。まさか、扉の裏側から放つて屋根に跳弾させたか。そうわかつた瞬間にマクギリスが引き金を引く。身体を捻つてすんでのところまでそれをかわすと

同時にマクギリスの拳銃も吹き飛んだ。

意識を向けていたというのに気付かなかったこと。そしてこれだけの射撃スキルで生きる人間はこの世には一人しかいない。

「ユウ・タービン」

そう言うのと扉から小柄な少年が拳銃を構えながら出てきた。整えられたとは言えなくもない黒く長い髪を持ち、それと同じくハイライトがかけた真つ黒の目を持つている。脂肪をこそぎおとしたように最低限の筋肉と骨と皮しかないように見えるほど痩せているが健康的な印象を受けさせる。モビルスーツパイロット向きとは言えないが他に似合っている職業があるとは一言も言えない。おそらく産まれてきてから今日まで沢山の愛を注がれた少年。

ティワズの狙撃手が。

跳弾の計算は正直に言って苦手だ。

だから何発か撃ってそこから当たりをつけたかったが相手の緊張感からしてとてもそんなことが出来る余裕はなかった。

相手の拳銃を一通り落として安心しながらいままで自分の身体を隠してくれた半開

きの扉を撫でて姿を現す。

その扉は勿論嚴重管理されているものを閉じ込めているので人の力では開かないほど固く、暗証番号がないとびくともしない。なので暗証番号を撃ち込む筈なのだが勿論そんなものは知らない。開けた後に多少の威嚇はするであろうマクギリスに聞いとけばよかつた等と唸りながらそれに悪戦苦闘していると急に開いたのだ。理由はわからない。しかしそこにはなんとかコードと書いてあつた気がする。とにかくその開かずの扉がゆつくりと開いていくことに感謝しながら半分くらい開いたところで拳銃を鳴らして動きを強引に止める。

そこからは考えていた通りに動いた。催涙ガスを撒いて殺気だたせながら天井の形状を確認して跳弾の計算をして、相手の戦闘能力を無くす。

上手く事が運んだのでとりあえず安心しながらも顔を崩さずにしっかりと拳銃を握り、二人の男を睨む。

しかしこれで僕に勝てる物はこの場にはない。というわけではない。拳銃は未だに二人の背後に落ちている。片方を撃つた隙にもう片方に撃たれては意味がない。だから動けないと踏んで動けばその男から撃ち抜く事が出来ればもう一人も打てる可能性が高くなる。

また空気が止まったように息苦しくなる。拳銃が震えているわけではないがモビル

スーツに乗ってないのに死が形をもって近づく。

ここまで来た理由はなんだと自分に言い聞かせなければしつぽ巻いて逃げていたのかもしれない。

「ユウ・タービン」

目の前にこの男、ライル・バレルがいるのは少し想定外ではあったものの、相手も武器を出す素振りは見えないしとりあえず此方が変なことをしなければダメーじはない。

「お前もバエルを？」

「違う。僕はバエルを使えるなんて思っていない。知りたいのはなんでバエルなのか。バエルに乗るって言うことはアグニカの意思を継ぐって言うことだから」

ハシユマルとの戦いでアンドラスが教えてくれたガンダムの願いという一種の本質に近いもの。

つまりバエルにもアンドラスのように願いがある。それはおそらくアグニカ・カイエルの願い。アグニカ・カイエルは厄祭戦を生き抜いているのでそこまでシリアスな願いではないだろう。あるとすれば訪れた平和を守ること。

もしアグニカが今の世界に転移されたらあくまで予想だが彼はギャラルホルンをなんとかしようとするだろう。最高幕僚長の権限を使い、建て直しを図ってもおかしくない。アグニカの願いがそれであると仮定してバエルに乗り込みそれを成す——とい

うことを考えたが二人とも違う。

その内容をマクギリスからゆつくりと話し始めた。拳銃を向けて死が迫っていると
は思えない不思議な空間に囚われる。

「俺には力が必要だった。そして見つけた。今この世界で最高の力の象徴……権力、気
力、威力、実力、活力、勢力、そして暴力。全ての力を束ねる存在。ギャラルホルンの
トップ、アグニカ・カイエル。俺はその存在に憧れた。そうなりたいと思った。君もそ
うだろ？ユウ・タービン」

まずマクギリスは自身がアグニカ・カイエルになること。それこそがマクギリス・
フアリドの最後の目標で目的。彼からしてみればアグニカ・カイエルという存在は最強
の力としか映らないのだろう。権力、気力、威力、実力、活力、勢力、そして暴力。そ
れらを全て内包した存在。それが彼の言うアグニカ・カイエル。この時点で僕と彼には
違いが出ている。

正解は知らない。まず知ることなんて出来やしない。

「俺はお前という人間を理解出来ない。バエルに乗るということが何故アグニカ・カイ
エルの意思を継ぐということなのか。まあ、いい。こんなところで長話していいのか？
時間はたつぞ」

ライルに至ってはただ、その機体が自分にあっているから。確かにこの前の戦いで見

せた剣技は臂力が強いバエルを使えばもつと効果が得られるだろう。しかし本当にそれでいいのか。アグニカ・カイエルという男はおそらく彼にとってバエルに乗った男という印象しかない。

「……」

戦争とは異なる正義のぶつかり合いという言葉聞いたことがある。誰が言っていたかも記憶にないが。異なる正義が自らが正しいと吠えながらも意見をぶつけ合う。簡単な感情になればなるほど邪魔な物が消え、人間の本質が見えてくる。そこにある戦場はとても美しいと。

人が人に美を感じるのがおかしいとは思わない。しかし戦場を美しいと思う感情は少しずれていると思うだろう。しかしその感情すらも人と人との繋がり会で作られるもの。即ち人だ。人の本質が作る。下等な動物の雄が雌を奪い合うように人が武器を握り、各々の技術わざを披露するのが美しいのだと。

今まさにそのような状態なのだろう。異なる複数の正義が存在している。

「ユウ・タービン。その拳銃は我々と同盟を組まないと言っているような物だ。すぐの下ろして欲しい。我々も君と元テイワズ精鋭と戦うのは気が引ける」

その言葉に怯えは塵一つとして存在していない。おそらく彼の言うアグニカに少し

近い。アグニカ叙事詩の彼に少しにしていた僕を撃つのは難しいのだろう。僕だつてただでやられるつもりはない。

「僕は争いをするために来たんじゃない。マクギリスと敵対するつもりはない。その証拠にマクギリスの護衛という仕事は今も続いている」

「成る程。三つ巴でも始まるかと期待したんだが。結局組むのかい。それにしても組んでいる相手に銃を向けるか」

ライルがまるで軽口を叩くように言った。しかしその声は緊張感で張り巡らされたこの空間をまた強くした。

「考え無しと罵るのであればそれでいい。卑怯者との罵るのであればそれでもいい。それくらい想定しているし男共おまえらになんて言われようが思われようが関係ないし、気にするつもりもさらさらない」

だからと言って引き下がる事も出来ないので意思を強く保ちながら拳銃を構え続ける。戦闘中の方がそういうのは保っていた。これでは僕はアンドラスがいないと駄目じゃないか。駄目だ彼女に依存してはいけない。

「で、どうだ。マクギリス・ファリド。僕はお前と手を切るつもりはない。それ相応の覚悟もあるだろう。だからお前を利用する」

「まるですべての思考を辞めたようなセリフだな。ついに頭がオーバーヒートしたか」

ライルがそう言いながら笑う。まだ余裕なようだ。ここで僕とマクギリスが再び手を組もうとなつたら自分だけがとりこされて撃ち殺されるだろうに。

この男は僕が引き金を引けないと感じているのか。もうロークスコロニーの時とは違う。

「僕がこれからしなくてはならないことをするためにはマクギリスの力が必要だ。だから利用するだけ。勘違いするな。僕ははなつからお前に賭けていない」

「それでいい。私もそのつもりだ」

そう言つてマクギリスがゆつくりと立ち上がる。

先程の言葉は事実だ。本当ならここでゆつくりと話し合っていたい。マクギリスと手を切つてこの場で二人とも射殺して、テイワズに戻りたい。でもマクギリスと歩んだ方が高い景色を見ることが出来る。もう僕が死んでもいいようにするには最短でかか上がるしかない。その為に使えるものは何だつて使う。

ライルに向けて拳銃を構えながら微笑する。そうすることで少しは不安感が出てくるかと思つたが気持ちは相手の方が上手らしく、全く動じない。

「後はお前だけだ」

「そうだな。どうせ今からバエルの回収は出来ないだろうから、こうさせてもらうか！」
そう言い放つてライルは後ろに下がる。しかしそれを見逃すことはしない。心臓を

捉えて撃つ。その引き金には迷いはない。弾丸がライルの腹部、心臓の辺りに当たって、ライルは勢いで後ろに倒れるがそれと同時に落ちていた拳銃を拾う。しかし普通ならその場で倒れて絶命する筈。

まずい、防弾チョッキか。彼の身のこなしから来ているとは思わなかった堅いかわりにとても重い服を想像した。そう思った瞬間には僕の頬スレスレを何かが抜けた。その何かはすぐにわかった。当たり前だ。ここまでの時間を与えて引き金を引かない人間がいるはずがない。

「ちっ」

「おうらよっー！」

頬にきた痛みで一瞬身を退いたらその瞬間にはもう接近されていた。そのつぎにきた痛みは腹を蹴られた痛み。衝撃で骨でも砕けたのではないかと思ってしまうほど強力な蹴りをくらいからだ吹き飛ぶ。

鍛えている人間とはいえ、急にこんな蹴りをされるとは思わずモロにくらう。

からだ床に叩きつけられた時に目を覚ましたがその時にライルは拳銃で此方を狙っていた。

「おえっ…… うぐっ」

「形勢逆転…… だな。最初から出てこなければ死ななかつたのに。お前とは戦場で会い

たかないのでな！」

痛みに苦しみながらもライルが引き金を引く。その瞬間に辛うじて握っていた拳銃を撃つ。狙いはライルの拳銃そのもの。今度は弾くのではない。破壊するのだ。しかし、ライルの撃つた弾と当たり明後日の方向に飛んでいく。

それも想定済みだが。隙間をいれずにもう一発を撃ち込む。その瞬間に鈍い音がしたかと思えばライルが拳銃を落とした。

「よくやってくれるっ！」

反動で腕一本無くならないかなと期待したが流石にそうはならず、撃てなくなつた拳銃。L字の引き金がついた鉄屑を放棄したライルは一回転してその回転も使つたのかそのままそれを蹴つた。蹴られた鉄屑はこちらの方向へと回転しながら飛ぶ。しかしすぐにエネルギーを失つて水溜まりに不時着した。あれを食らつたのが自分だったらと考えてゾツとした瞬間。横腹に蹴りを入れられた。

体が半回転して再び叩きつけられる。今度はその後襟首を捕まれて再度叩きつけられた。

もう青アザくらいは出来ているだろう。身体中が痛すぎて現実味が薄れる。感覚が麻痺してきたのか具体的に何処がどう痛いのかわからない。

「一般人が身体勝負で正規兵に勝てると思うなよ。こちらだつて鍛えているんだ。これ

でも主席でね」

気を失いそうになりながらも相手を見つめ、勿論そんなことでは驚いたりすることは無い。ただ、楽しむようにほくそ笑み。腕を握るだけ。しかし、それだけ。それだけだ。確かにもう凶器となり得るものはないのかもしれない。しかしあいつだつてこの場に居続けるのは駄目な筈だ。

「お前今、何故未だに動かないつて思つているだろう。マクギリスがこのままだとバエルを起動する。そうすればモビルスーツは二対一すぐに此方側が不利になり、モビルスーツが勝つた方が生身の人間を殺せる」

その通りだ。だからこそ、何故そこにいるのかわからない。今ここで僕をいたぶつたところでなにも変わらない。

「残念だが俺はもう帰るよ。本当はお前を始末しておきたかつたが」

そう言いながらライルは僕の片腕を上げる。当たり前だが僕の身体がつかれて立ち上がる。その腹に拳が入つたかと思つた瞬間にまた意識が薄れた。

だんだん小さく、そしてぼんやりとしていく視界には謎のモビルスーツに向かつて跳ぶ、ライルの姿がいた。

「運命か……」

ガンダムバエルのコックピットの中でマクギリス・ファリドはそう呟いた。かつてガンダムバエルに乗ったアグニカ・カイエル。その血を受け継いだ者とそれを目指そうとする者が今は自分の手の中にいる。そしてそれを押しつけて自分がバエルのコックピットに座っている。ユウ・タービンは反対していたようだが彼もいつか認めてくれるだろう。純粹な力のみが成立させる、偽りなど一切ない眞実の世界を。

作るのだ。アグニカ・カイエルと似た少年達と共に。

「聞け！ギャラルホルンの諸君！マクギリス・ファリドの元に、バエルは蘇った！ギャラルホルンを名乗る身ならば、このモビルスーツがどのような意味を持つかは理解できるだろう。ギャラルホルンにおいてバエルを操る者こそが唯一絶対の力を持ちその頂点に立つ。席次も思想も関係なく従わねばならないのだ。アグニカ・カイエルの魂に！」

強い声で、演説を開始した。

ヘイムダルを作った英雄、アグニカ・カイエルのように。

第61話 思いの交差（前編）

「すまないな。ボードウィンさんよ」

「気にするな」

ボードウインの乗るガンダムヴィダールと接触回線を開いて通信をする。自分が乗っているランチには仮面を取ったガエリオ・ボードウインが覚悟した顔でいた。それを見ながらあくびをして、ノーマルスーツのヘルメットを外してランチ内に放り投げる。

「俺はあいつの気持ちを理解してやるのが出来なかった」

覚悟した顔を全く崩さずにいるが悲痛な声が小さく聞こえる。こいつだって思うところがあるだろう。親友であるマクギリスに裏切られその復讐の為に武器を握り、先程なんて演説をしたというのに。

「人の気持ちを完全に理解することなんて出来ない。出来る筈がない。だから気にするな」

「本当にお前という人間は……いや、いい。兎に角エリオン公と合流しよう」

ランチとヴィダールの回線が切れる。接触回線が開かれていたわけだから離れれば

切れるのは当たり前だ。しかしすぐに軽い衝撃を伴ってヴィダールがランチを掴んだ。「なあ、お前あんだけ言って家族はどうするんだ？」

「妹はマクギリスの嫁だ。父親がいまボードウィン家を率いている。どちらとも俺が生きていた事に驚いているだろう」

ボードウィンはため息をつきながらそう言った。覚悟はしているので家族の話題を出したって何も起こらないだろう。

そして、その後何も会話の無いまま、青い閃光を出しながら革命軍の防衛圏を抜けた。

「大丈夫？ユウ」

そう声をかけられて目を覚める。目を開いた瞬間に飛び込んでいた情景に目を疑う。

先程まで自分がいたバエル宮殿は殆ど崩壊していて、壁と天井にはひびが入り、時折塗装が剥がれて落ちる。勿論ロクに質量を持たない物体なので痛い訳ではないがもう完全に崩壊して、潰されるのではないかと思ってしまう。

声がかけられた後ろを振り向くとバルバトスが何事もなかったように立っていた。傷も少なく、まるでセブンスターズのガンダムのように当然といった様子で棒立ちして

いた。

痛む腹を押さえながらゆっくりと立ち上がりバルバトスの方によるよると寄つていく。

なんとなく状況は理解した。ライルと謎のモビルスーツはバエル宮殿を荒らすだけ荒らして宇宙へといつてしまったようだ。

「ユウ、動ける？」

バルバトスから声が出てくる。普段のバエル宮殿ならトンネルのように響いていた筈だ。しかしここまで壊されてしまうと筒抜けだ。

「なんとか……兎に角アンドラスがいなくてここから動く事すら出来ません」

この場にアンドラスがいなくてここから逃げる事が出来ない。最悪バエル宮殿の崩壊に巻き込まれて犬死だ。そこまでの前にバルバトスが動いてくれると思うがアンドラスがいた方が色々と自由だ。

すぐにアンドラスを呼ぶように念ずる。念ずるとはいつでも頭の中でアンドラスを呼ぶだけなのでそんなに変わったものではないが。

するとそう時間がたつ前にバエル宮殿のぽっかり開いた穴からアンドラスが入ってくる。水しぶきを上げて豪快に着陸する。彼女らしくない動きだ。

「あれ？新し手？」

「バルバトスさん。そいつは仲間なんで攻撃しないでください」

見たことのある機体とはいえそれがパイロット無しで動いていることを不思議に思ったのかバルバトスさんがそう言った。当たり前だろう。普通モビルスーツが動くということは生体ユニットであるパイロットが必要なのは当たり前だ。そうでなければ動かない。動くとすればそれはもうモビルアーマーの分類だろう。

今のアンドラスはモビルアーマーと似て非なる存在。モビルアーマーが積んでいる生体ユニットの代わりであるAIとは違う。悪魔がアンドラスにいるのだ。名前は機体名と同じアンドラス。ガンダムの中には悪魔というAIと違う、しかし生き物とも違う何かが入っている。

今アンドラスを動かしたのはそれだ。つまり、ア・ン・ド・ラ・スがア・ン・ド・ラ・スを動かしたということ。

勿論、モビルスーツパイロットよりうまく動けるかと言われると違うので戦闘にはあまり使えないが、移動だけなら眠らない、離れないの二つが揃ったアンドラスの方が適している。

「悪いな。また新しい仕事だ」

アンドラスの装甲を撫でながらそう言った。アンドラスは仕方ないなあとも言い、たそうな感じをこちらに与えてくる。彼女はそういう悪魔なのだろう。

それを感じ取ってアンドラスを撫でるのを止めたあと、アンドラスのコックピット内に入る。

計器の調整をしながら周りの確認をする。そこにはいる筈の機体、ガンダムバエルがない。やはりマクギリスに持っていかれたのだろう。あの状況でバエルに乗らなかったらなんのためにここにきたと言うことになる。自分がそういわれかねないような動きをしているのだが。

しかしこれで決心がついた。ギャラルホルンの状況なんて考えている場合ではない。自分がみんなが安心できるように大きくなる。強くなる。その為にギャラルホルンとのパイプ、ティワズでの地位向上は必要不可欠だ。

「行きましょう。ここにいたってなんにも出来ない」

アンドラスに動こう。と一言言ってレバーを握る。

アンドラスはそれに答えるように温かく包み込む。

リアクター、正常。スラスター、正常。各部間接負荷、許容内。残弾、最大。「ユウ・タービン。ガンダムアンドラスで出撃します！」

それから数日後。

ギヤラルホルンの大半は今回の戦争に関与しないことを決定した。

戦争をするのはマクギリス・フアリド率いるグラディウスを代表としたギヤラルホルン革命軍、元テイワズ精鋭、そして本当はギヤラルホルンに反する組織。レヴォルツ・イオン。

目的はギヤラルホルンの革命、もしくはギヤラルホルンとのパイプ作り。

対するはラスタル・エリオン率いるアリアンロッド。

中でもラスタル・エリオンの妾の子という設定のアメリア・エリオン率いる通称アメリカ隊。ギヤラルホルン最強パイロットのライル・バレルを擁し、物量で制圧するアリアンロッドでは珍しく、全員が精鋭となっている。

目的はギヤラルホルンの膿と称する革命の制圧。

世界を管理するギヤラルホルンの内部戦争なので反ギヤラルホルン組織は勿論、世界中が注目している。マクギリス・フアリドが勝利をすれば世界中は変わる。もしラスタル・エリオンが勝利してもギヤラルホルンの内部は変わる。その後ゆっくりとではあるが世界も変わっていく。

変わり方は勿論違う。その詳しいことは知らないだろう一般人も仕事で身体をボロボロにしながらもニュース画面を注視している。

一人の男も端末を持ちながらニュースを睨んでいた。

「さあ、潰し合えギャラルホルン。その角笛が壊れるまで」

とある研究所でその男は大笑いをした。その後ろでは何機かのガンダムフレームの機体があつた。

そしてまた別の場所。

何機ものブルーマとアーラが飛び交いながら鉄屑やエイハブリアクターを運んでいく。

だんだんと形になっていくそれは近くにモビルアーマーを侍させてその大きな翼をゆつくりと開く。

その横をひときわ小さなブルーマが通る。それと通信をしながら完成していく天使は喋つた。

まもなくだ

まもなく 世界は変容する

人類が殺し合いを 繰り返すと云うのなら

それは ワタシ 此方に取つても都合が良い

——覚醒の時が 遂に来た

翼を完全に開きながらそれ——ガブリエルは完成したすべてのカメラを起動させた。

アグニカ・カイエル

厄祭戦の英雄　ワタシの仇敵

アナタだけは　いや　アナタだけでも――

そんな者達が動こうとしていることを知らず、その戦争の渦中に居るものたちは、準備をしていた。

アリアンロッド。

アメリカに案内されながらライルがナイフで遊びながらモビルスーツデッキへと行く。ほぼ無重力だと言うのに重力があっても危険なナイフ遊びをエイハブリアクターの疑似重力があるといえ、ほぼ無重力の空間でナイフでペン回しするように遊んでいる。

「んで、用ってなんだ？アメリアさんよ」

「：：　貴方のグレイズ：：　先の戦いで負った損傷が大きく整備士が投げ出してしまいました」

勿論嘘だ。これはライルに別の機体を渡すためのいわば言い訳。そういうことはライルもすぐにわかった。グレイズクルーガの損傷といったら腕が一本さよならしたくらいなのだから。といっても今それを言う気にはならない。

どうせレギンレイズだろう。まさかジュリエッタの使用しているジュリアを使ってもいいなどプライドが高い彼女が許すわけないし、二機目があるとは聞いてない。

レギンレイズは彼女の使っていた物もあるし、余りも数機あった筈だ。それを俺ようにカスタマイズしてくれるのだろう。と胸を踊らせる。こういう時は少年のようにイキキしているのはおそらくモビルスーツパイロットのさだろう。

しかしそうしていると馬鹿にされるだろう。だから落ち着きながらアメリカが希望するであろう言葉で繋げる。

「んじゃ新しい機体を用意してくれよ。とっておきが、あるんだろ？」

「ええ。あります。この先に格納されていますがヴィダールの換装作業も合って完璧とは言えませんが」

アメリカはそう言いながら悲しい顔をする。まるでこの機体を使用する、ということが死を意味するように感じる。アメリカがどこまで自分の事を理解しているかわからないがその目は全てを見透かすように見えている。

こいつは司令官として必要な物が一つ足りない。それは残虐性だ。自らの目的の為に残酷に動くことが出来ない。と言うか自らの目的、マクギリスのような胸に籠った野望と言うものがない。足りないのはそれと、その為なら全てを投げ出せる覚悟。それだけだ。

そう考えるとモビルスーツデッキの奥につく。

そこには整備士が群がりながら一つのモビルスーツが今か今かと待っていた。

黒いモビルスーツ。そのバックパックはおそらくヴィダールの物を転用したのだろう。そのバックパックパーツの両端のスラスタ部外側に太刀がそれぞれ一本、合計二本ラックしてある。腰パーツの前と後ろはまんまヴィダール。つまり、その材料はな

いと推測される。

黒いモビルスーツと今言ったが勿論それ一色というわけではない。所々にある灰色のパーツが輝く。

「この機体は……」

圧倒的されながらもそれだけを返す。頭ではなんとなく理解できている。この機体は、この構造の機体は世の中で一種類しかない。このフレイムはそう。ずっと自分が敵として戦ってきた機体と同じ。

「ガンダムフレイムの機体、個体名はベリアル。ここまで言えばわかりますね？我がエリオン家秘蔵のモビルスーツです」

ガンダムベリアル。初代セブンスターズ、ドウォム・エリオンの乗機。ドウォムは指揮もしながらモビルアーマーを狩っていたのでセブンスターズ内でもそこまで上というわけではないがセブンスターズというだけでエリート中のエリートに違いない。

「何で俺にそんな機体を用意しているんだ。そっちの家の誇りを踏みにじるような物だぞ」

ほとんどの兵はこの決断に反対するだろう。この戦いはアメリカの指揮能力さえあれば十分勝てる。俺に自分の家の誇りを使わせてまで動くような戦いではない。

しかしアメリカは明後日の方向を見ながらうずくまった。

「私はエリオン家を継ごうと思います。しかし、私はモビルスーツを扱うことが出来ません」

ラストルは一般兵並みにはモビルスーツが扱えるというわけではない。ガンダムを使えないことはないがそこまで強いというわけではない。それと比べるとアメリカはもっとひどい。一度グレイズを使わせたらしいが、移動だけで精一杯だったのだ。ガンダムなんて使えない。

「だからと言って俺に渡すことはないだろう。俺はレギンレイズだと思ったのだが」

レギンレイズも性能が高いモビルスーツだ。グレイズにひけを取らない性能。勿論グレイズクルーガなんて性能から見れば天と地ほどの差。そこで満足だったのだ。

「貴方じゃレギンレイズでは足りないでしょう……それにこの戦いは激しくなります。周囲の目は私がかします。だからお願いします。使ってください」

アメリカが初めて、頭を下げた。心からのお願いというのは誰でもわかる。勿論周囲

の目なんて俺からすれば関係無いので願ったり叶ったりなのだがアメリカはそれでは本当にいいのだろうか。妾の子だから、自分の家に誇りが無い。なんて言われた日にはエリオン家の威光も無くなっていく。

しかし、そんなことをアメリカが考えない筈なのだ。彼女は優秀な人間であり、いつかこのアリアンロッドも継ぐ。

その前に確認したいことがある。

「顔を上げろ。上司が部下に頭を下げては威厳が無くなる。なあ、アメリカ。最後に聞きたいことがある」

「なんでですか？」

アメリカはゆっくり顔を上げてそう言った。夢も希望もある一点だけを見ていた俺がこの機体に乗るためには一つだけ大切な事がある。

「お前、この戦争が終わったら、エリオン家を継いだらどうする。まさかマクギリスの件を終わらせてやり直しにするというのか」

強めの声で脅すように言う。大義の無い。もしくは行き着く道が同じ人間はいつか裏切るときが来る。その時に、その家を代表していたモビルスーツには乗りたくない。

「平和。と言つても今とは違う世界を作りたんです。でも、お父様の目指す世界とは違う。産まれや階級で差別されない……夢物語でしょうか」

——夢物語でしょうか。すみません！その、こんな立場だからって……

——良いと思います。いつか叶えましょう。

「私達で」

遠い記憶が重なって何故かこんな張り積めた時だというのに笑えてしまった。結局どうあがいても俺は、彼女を忘れられない。ずっと……愛しているのだろう。

「ライル？」

そう見るとアメリアの一つ一つの仕草が彼女と重なる。

俺の新たな姓をくれた。一生を誓った相手に。

もう終わりだ。此方も覚悟はもうできた。俺は水先案内人だ。人の夢の為の道を繋ぐ。その為の事はもうほとんど終わった。

ならば俺に出来ること、最後に出来る事は。

「わかった。ありがとう」

彼女の意思を尊重するのみだ。

第62話 思いの交差（後編）

革命軍側も着々と戦闘準備を進めていた。

革命軍は勿論、鉄華団の方もその組織の規模にしては多すぎる量のモビルスーツの整備に動いている。

その中で元タービンスメンパーもそれぞれの船で動いていた。

「アンドラスの予備パーツ急いで！」

いままで接近することがなかった為か損傷が少なかったアンドラスもエイハブリアクターさえあれば二機三機作れそうなレベルのパーツは余っている。今回はその全てを持ってきているだ。

この作戦の要となるであろうアンドラスのコックピットの中でパイロットであるユウ・タービンが端末を慣れた手つきで操作している。

勿論それだけではない。大量の獅電が全てを閉ざした状態で隙間なく綺麗に並んでいる。

「4番と5番に弾薬を詰めといて！」

「イオフレームとガンダムフレームとあれのパーツは分けておいて！」

沢山の女性の大声が飛び交う中で大型のアームにフレームのパーツや弾薬を入れたケースが運ばれていく。

まるで団体行動だ。色々な方向に飛び交いその間をアームや弾薬が入っていく。なのに誰一人接触していない。それも打ち合わせしていたわけではない。三次元の団体行動とは流石に凄い。しかしそんなことを考える余裕があるのはおそらく僕だけだろう。

怪我から復帰したばかりのエストでさえ、今回はメカニックとして動いている。彼すらも世話なく動いている。とても回りを見る余裕なんて無さそうだ。

「ユウ！手を止めるな！時間ないぞ！」

訂正。どうやらそれなりの余裕はあるようだ。しかし、医者から聞くと戦場に出せない。出せたとしても最早足手まといだ。

「ハイハイ。とりあえず鉄華団とお話してこなくてもいいの？」
「行ってきたよ！参謀さん曰く戦闘準備は整っている」

どうやら鉄華団と話をしてきたらしく、鉄華団の情報も伝えてくれる。参謀さんというのはおそらく、美味しそうな名前をした人、ビスケット……とかだった気がする。何度か共に戦っているというのに、鉄華団のメンバーの名前はあまり覚えられない。どちらにしろもう後には引けないのは変わらない。

するとラフタが寄ってきた。どうやら伝言を持ってきているようだ。

「ゆーちゃん！レヴォルツ・イーオンっていう組織の人が会いたって！」

レヴォルツ・イーオン。反ギャラルホルン組織でありながらギャラルホルンに協力すると言う変わった組織。

自分が会った訳ではないが何処か変な感じがする。

「そんなのアガーテ姉さんか、エスト兄さんに行かせて」

僕はこの組織では代表ではない。タービンスの事件の事を反省して人の上には立たないようにしているのだ。

それにめんどくさいし、それが出来る人間に任せただ方がいい。

「どうせお前は暇なんだろ？システム面だつて大体整備長が言う彼女がやってくれだろ！」

するとエストが少し怒りながらも、そう返す。しかしそれよりも問題なのはエストが彼女と言う言葉を出したこと。おそらくアンドラスの事だろう。隠す気はなかったがこんなにも早く当たり前のように出てくるとは予想外だった。

「それに！名指しなんだって！」

そう言いながらラフタに引つ張られる。端末を投げ出されてコックピットから無理矢理引き出される。

ラフタにしては強引すぎる。つまり、それほどのレベルで重要と言うことだ。少なくともアンドラスがやってくれるアンドラスのシステム面の整備よりは優先度が高いの
だろう。

「わかつ…ごぼっ！」

わかつたと言おうとした瞬間ラフタに襟首を引つ張られる。これはかなりきつい。抱き締められた瞬間の倍は空気が吸えない。

「ああーい…き…」

腕をバシバシ叩くがラフタは何の反応も示さずに引つ張る。アジーと言うストップ役がいらない今は呼吸だけでもと、戦場にいらないのに命に危機を感じていた。

というか死の危険が目の前にあった。

「本当に。お前は優秀に見えて馬鹿だよ」

「私は期待しているんですよ。ユダ様にもいつかわかります」

そう言いながらレヴォルツ——サイオン・ジェーンは笑う。その笑みを気味悪く感じてユダは顔色を悪くした。

深い傷がある頬を撫でながら目の前の端末を片手で兵と連絡をする。

「血なら俺がいるぞ」

「ええ。そうですね…。これが終わったらそれを使って女性を引つ搔けるおつもりで？」

「当たり前だ」

そう言いながらユダは笑う。それに釣られてサイオンも笑いながら「そうですね」と一言返す。

モビルスーツの整備等の戦闘準備は鉄華団等の小さな企業と比べて順調に進んでいる。

「私もそろそろ妻の方へいかななくては。愛想をつかれてしまいます」

「なら生き抜くとするか」

「ええ」

そういえばユダは身を固めていない。カイエル家という血が良くも悪くも彼の人生を動かしている。いままで彼はその波に流されて続けただけだった。あるときはギャラルホルンにおわれ。あるときは奴隷にされかけて。あるときは目の前で家族を奪われ。そしてあるときはこのレヴオルツ・イーオンで匿われて戦闘訓練ばかりを受け、カイエル家の人間だからと後ろ指指されながら生きてきた。

その彼が今回初めて自分の道を自分で決めた。ギャラルホルンに対する復讐ではなく、自分のような人間が二度と出ないようにするために、ギャラルホルンの革命を行う。

「失礼します。客人をお呼びしました」

すると一人の兵がそう言つて部屋に入ってくる。

呼んでいたテイワズの精銳の話だろう。

「ありがとうございます。では私はこれで」

「ああ」

こちらを見向きもせず片手で端末を操り続けるユダを片目で見て、部屋を出た。スーツを整えて小型の端末を起動する。そこには一人の女性が写っていた。

「確かに、期待のしすぎかもしれませんね」

——貴方口汚い。ちよつと直しなさいよ

——はあ？いいんだよこれで！アイデンティティーとかいうやつ！

——そんなこと言っているから奥さんと喧嘩するの！ほら！さっさと仲直りしなさい！

奴隸として買い取つた筈なのに奴隸として利用した事は一度もなかった。なんか、そのように利用するのは気が引けたのだ。

場合によつては怒られたし、殴られだつてした。喧嘩もした。

本当に娘のような存在だった。

ならば彼は孫か。孫に期待するくらいは許してほしい。才能があり、あの血が通つて

いるあの子の息子だ。大丈夫。我々なら勝てる。

そう確信しながら、待たせている部屋の扉をノックした。

レヴォルツ・イーオンの船にいくと、大男に囲まれながら、とある部屋にラフタと共に呼び出された。

聞くとここによるとこの組織の代表は多数の名前を名乗っており、アガーテ達に言ったレヴォルツというのもその一つらしい。

ここまで僕らを運んできた大男は一礼のみして部屋から出ていった。腰のホルダーにかかっている拳銃はおそらく抜く必要性はない。

「まずは突然の呼び出し。申し訳ない」

「いえ、これから戦場に行くので不安要素は無くした方がいい」

部屋に入ってきたレヴォルツは丁寧な口調でそしてこっちがつなぎだというのにきれいにスーツを着ている。慣れているなど感じる。確かにアガーテ等が言っていたとおりの人間だ。身だしなみは正しく、言葉使いも丁寧。紳士という男だ。

「……よく似ている」

不意にそういう声が聞こえた。男の声なので消去法的にレヴォルツであることは確かだ。しかし、何が何に似ているのだろうか。わからない。レヴォルツが何を見ていたのかが分かれば良いのだがレヴォルツの顔をその瞬間見ていなかった事からよくわからないがその言葉からおそらくラフタか自分だろう。

しかしあまり気にしなくてもいいだろう。似ているからと言って何も起こらない。

「そちらの準備は整っていますか？」

「順調とは言えないまでも進んではいます。おそらく戦争の前には終了するかと」

まず最初に聞いたのは此方の状況。レヴォルツ・イーオンという組織はモビルスーツの数も少なくはない反ギャラルホルン組織の中でも一、二を争うとは言わないものの上位の軍事力を保有している。

しかし周りの人間も急いでいる印象は全くなかった。もう終わっていると考えてもいい。

「マクギリス・ファリドから連絡が来ました。アリアンロッドと戦争を始めるポイントを決定したそうです」

こつちにはそんな情報は届いていない。今回此方の立場は傭兵のような物だ。そこまで重要ではないのだろう。俺についてこい。戦って勝て。その二つさえ言えば充分だろう。

しかしここまで聞くと気になるのは仕方ない。

「何処です？」

「地球の近くです。それも相当近いです。おそらく地球外縁機動統制統合艦隊を動かしやすい位置だからでしょう」

地球圏で戦う。火星で地固めをしたというのに火星の兵は使わないつもりなのだろうか。

「フォーメーション等の戦略はどうですか？」

「元々それを送るためにここまで呼んだんです。なんとたつて君は……いえ、それは愚問ですね」

何か思わせ振りの一言を言いながらレヴォオルツは端末を渡す。そこにはレヴォオルツ・イーオンは勿論、革命軍の動き等がある。いままで当たって砕ける、もしくは目の前の敵を蹴散らせとしか言われなかった此方からすれば複数の動きが書いてあるものはこんながらがつてウザく感じる。

「私は貴方に頼みがあります」

そう思っているのがバレたのかレヴォオルツが笑いながらその端末を見ずに操作して新しい画面を開く。

「貴方にしか出来ない事ですから」

そして時は経ち、戦争が始まる。

戦闘準備が整った双方は威嚇しながら牙を剥く。

「久しぶり。母さん」

アメリカに貰いながらも利用することは少なかつた自室でそう言った。端末から見える顔は正真正銘、母親の物だ。俺がギャラルホルンに行く前に脚を悪くしたと聞いたが何も変わらない。それどころか少し老けたように見える。

結局あんな事件があったというのにアインスト一家はあの場を離れなかった。

「あんたも何やってたの」

「ごめん、ギャラルホルンってさ意外と忙しいんだよ」

母さんでも今回の戦争の事を知っているだろうが自分の部隊の名前は知らないだろう。アリアンロッド。今ニュースは見ないようにしているためどちらが正義ととらえられているのかは知らないがアメリカ曰くどちらとも大きく取り上げられているらしい。

「それで今日はいきなりなんだい？」

母さんの声はゆっくり、そして今にも消えそうな声で。もう永くは無いだろう。悲しい現実が胸に刺さる。もう、覚悟していた筈なのに。それ以外の事は切り払うと決めた

のに。準備が終わったら他の情報が入り込んできて、悲しく感じた。

「俺、ギヤラルホルンを辞めようと思う」

俺ははつきりと決意した言葉を言った。アメリカの行くべき場所。彼女ならいつかたどり着ける。この戦争に勝てれば彼女の優位性は急上昇する。彼女ならそれを土台に使い、ギヤラルホルンを支配することも夢ではない。

「……そう」

仕事を辞めると言った息子に対する親の返答と言えば、転職は決めたか等の次どうするかを聞くか、ふざけるな等のやるべき仕事を放棄した怒りの言葉だろう。

「だからさ。そっちに帰るよ。あいつらの親父代わりにもなるよ」

「あの子達はもう残さず成人しているよ」

母さんが小さく微笑んだ気がした。また死ねない理由を増やしてしまったことを少し後悔した。

一度鉄華団に行ったことがあったが中にいるみんなが口々にこれで終わりだ。これで最後だからと言っているのが何故か物足りなく感じた。

アンドラスの方を向くとそこにはいままでとは違うアンドラスがいた。一際目に付

くバックパックには大型のミサイルポットが二つバランスが悪い形でついていた。その両腕にはレールガンとミサイル付きのシールドではなく大型の二門のライフルとそれを覆い隠す白と青のシールドが両腕にそれぞれ一つついている。ライフルとシールドは接続されているので手は空いている。肩、膝等の間接部等には灰色の装甲がくつき、コックピットには普通の装甲に加え灰色の特殊な装甲を着けた。

「なんかずんぐりむっくりになっちゃったな」

仕方ないでしょ。いつもの声が聞こえて来たので。そうだねと呟いてコックピットに入る。

何度も入ったアンドラスのコックピットすら何か物足りなく感じる。中に入れている栄養バー等も準備万端な筈だ。不意に近くにある救助用のキットが見つかった。

その瞬間蘇るのは母さんの最期の姿。ここにあるものではあの状態になったとき、無力だろう。しかしあのとときみたいになにもしないで行くのはもう嫌だ。

そう思いながらそれをシートの上に強引にぶちこんだ。

結果、アンドラスには怒られた。

そうしているとアガーテが近くに来た。戦闘が始まれば仕事が無くなるわけではない。それどころか仕事が増えるのだ。辛い戦いになるというのにアガーテが余裕があるように近づく。

「ゆーちゃん」

いつもの声でアガーテが言った。いつもとは違う戦場でアガーテはそれでもいつもの調子でいう。

「私達未亡人になっちゃった。だから変な奴等が来ると思うよ。守ってね」
「わかってるよ」

父さんが守ってきたかけがえのない家族を守るのは僕の役目だ。父さんを救う事ができなかった僕が守るんだ。

わかっている。そう何度も口の中で繰り返す。その度にやるせなくなるが過去は変えられないのだ。

「だから・シユイン達を同じ気持ちにさせたら許さないから！」

そう言つて小突いた。力は優しかったが死にたくない理由ではなく、死んではいけない理由としては強く刻み込まれる。

「ああ！」

そう言うとは何処からかアンドラス下ろすよ！と声が聞こえた。アンドラスがゆつくりと降りていく隣で沢山の女性達が離れていく。

コックピットを閉じると画面にエストが出てくる。管制室から通信をとっているようだ。パイロットが出来ないからって動きすぎたのか包帯の量が増えている気がする

がそれは今良いだろう。

「兄さん、もし僕が死んだら。みんなを頼む」

先程は死んではいけない理由ができたが戦場に絶対はあり得ない。エストだってわかってるだろう言葉を言った。

「わーかつてる。行けよ」

そう言うときエストからの通信が途絶えた。

視界を前に向けてとカタパルトが出てきた。出撃の瞬間だ。

その時大丈夫か？と一言聞こえた。懐かしい声。もう二度と聞けないと思っていた声だ。何故聞こえるかは今は愚問だろう。必要の無いことを考える頭は僕にはない。

「父さん、母さん……大丈夫。僕は強いから」

もう手放さない。救う。自分が救いたいと思ったものを。その為に全てを捧げる。この声途切れて、四肢が体から離れて、魂すらもこの世から切り離されるその瞬間まで。

「ユウ・タービン！ガンダムアンドラス type β で出撃します！」

変わったアンドラス——ガンダムアンドラス type β がカタパルトから元気よく飛び出した。青い閃光を放ちながらその役目を果たすため戦場へと向かう。

それぞれの思いが交差しながら戦場は輝く。

第63話　アベック・スナイプ

「はあっー!」

通信越しに聞こえる怒号や雄叫びに重ねるように気合いを込めて先程自分が倒した機体の残骸を蹴り飛ばしてそれを避けた機体目掛けて、目の前の機体を持っていた大剣をコックピットに突き刺す。

その隙に接近してきたもう一機を確認して大剣を瞬時に抜き放ちスレ違い様にフレームを切り裂く。

その後ろでもがいていた一機は僚機に落とされた。

黒と緑のツートンカラーでその得物はガドリングと斧。

ゲイレール・ウムゲケート。レヴォルツ・イーオンが真っ正面から戦闘をする際に一般兵が用いる。モビルスーツ。

此方の機体はマッドナッグ。厄祭戦にて使用された機体でロディ・フレームでありながらフレームも改造されているためその姿はガンダムに酷似している。その為そのフレームをマッドナッグ・フレームという人も少ないながらもいる。所謂偽ガンダムでガンダムタイプより扱いやすく（とはいっても通常の機体より癖があるが）カスタムの幅

が広い。この機体はその背中に大剣をラックさせ、腰にライフル。得物はその二つのみだ。カラーは青。

回りに機体がないことを確認して一度貯めていた息を吐き出す。この戦いが始まっていくらたつのだろう。一週間過ぎた辺りから数えるのを辞めた。地球のどある国では8時間で終わった戦争もあると聞いたのでここまで長いとそれは嘘なのではと思ってしまう。

倒した敵の数ももう数えるのをあきらめた。

「お見事です。ユダ様。」

僚機の内の一機がそう言いながらこちらに接近してくる。その間も周りの警戒は怠らない。

「世辞はいい。本当にあいっすらモバイルスーツを無限に持っているのかと思われる量だな」

周りにはあるのは仲間と敵モバイルスーツの残骸のみだ。これだけ倒したというのにリアンロッドにとつては傷とも感じていないのだろう。戦力差は倍もなかった筈だがここまでやっても変わらないとなるとモバイルスーツが無限にあるのではと考えてしまう。

「しかしこのまま続けなければいつか尽きます」

「だと良いんだけどな」

流石に天下のギャラルホルンの中でも一番の兵を持つアリアンロッドと言っても無
限ではないし、最初から全員で当たるなんて考えるわけがない。此方の兵力だつて大体
は理解している筈なのだ。長期戦になるくらいわかる筈だ。

「とりあえずこいつを使って敵の新しい情報の解析しろ」

先程コックピットではなく、フレームを切ったモビルスーツを蹴り飛ばす。おそらく
だがパイロットは生きているだろう。僚機がそれをキャッチした瞬間にそのコック
ピットの壁を剥ぎ取った。すると中から人が飛び出す。それを大剣で凧ぎ払う。

すると僚機が倒した機体を持っていった。

「この戦い。いつになったら終わるんだ」

そう言い残して僚機についていった。

双方の司令官から見ると戦場は膠着状態だった。

アリアンロッドは連度の低い革命軍を狙い艦隊の分断を狙っている。それを読んで
いたグウイデオンは革命軍側に元テイワズ精鋭、傭兵達を運び分断を阻止。

アリアンロッドはゆっくりと囲むような陣形をとりながらグウイデオンを殲滅し

ていた。

「やはり連度の低い革命軍を狙ってきますか。そちらには元ティワズ精鋭を行かせたので大丈夫ですが」

レヴォルツ・イーオンの船にてサイオンは画面を睨み続ける。我々レヴォルツ・イーオンや元ティワズ精鋭を加えた革命軍とアリアンロッドの戦力差は少ない。アリアンロッドが少し大きいが彼らなら充分戦って勝てるレベルの差だ。

しかしアリアンロッドは未だに隠している兵がいるのではと思うほど、湧いてくる。モビルスーツの量が圧倒的に違うのだ。

「前に頂いた資料は間違っていたということですか……ラスタル・エリオン。やり手ですね」

特に今回の戦争はラスタルの娘、アメリカも指揮をしている。この膠着状態もすぐに終わる。相手を調子に乗らせてはいけない。それをわかっていたサイオンはすぐにレヴォルツ・イーオンの部隊に広がるように指示を送った。

「読み通りに動けば良いですけど……アメリカ・エリオンが自分の部隊しか動かせないことを祈るのみですね」

そういう彼の視界には敵軍の後退信号が飛び込んできた。

そしてその膠着状態はすぐに終わる。

始まるのだ。なぶり殺しが。騎士道も武士道も何ももたず、ただ自分の利益の為に動ける人間の成れの果て。

それは、革命軍側の青いグレイズの内の一機を注視した。その肩にはとある兵器が担がれている。

「アメリカには反対されたが……バレてはいないようだ」

そしてその青いグレイズはその兵器の引き金を引いた。オレンジ色の閃光と共に自らの軍の何人かが殺られていく様を見ながらそれは高笑いをした。

勝利を確信した瞬間だったからだろうか。それともこれを見抜けなかった革命軍を馬鹿にしたからだろうか。

「答えは本人しかわからない。」

「革命の暴徒は違法兵器を使用した。その愚行を断じて許してはならん！アリアンロッド艦隊総司令官ラスタル・エリオンの名において命じる。ダインスレイヴ隊禁忌をもつて報復せよ！」

先程革命軍から撃たれたダインスレイヴはたったの一発だがアリアンロッドは数え

きれないレベル……正確に言うると120機のダインスレイヴが一斉に3列に並ぶ。そして躊躇いもせずにそれが一斉に放たれた。

長細い閃光が曲がりもせず、真っ直ぐに飛ぶそれは革命軍側のいくつものモビルスーツ、戦艦を破壊していく。

「っ……しまっ……！」

その閃光のたどり着く居場所を大体の位置で特定したある男はそのタイミングをあわせて自身の得物である大剣を振るい、ダインスレイヴの矢を弾く。

しかしそれでも数本程度。残りは邪魔されることなく真っ直ぐに進んで近づくものを破壊し続けた。

数えきれない爆発の量に革命軍側の殆どの兵の視界は薄い酸素の中で燃える真っ赤な炎とそれを吐き出しながらエイハブリアクターによる疑似重力によって崩壊していく金属の塊となった。

「本当にダインスレイヴが使われるなんて……」

敵が退いたので補給をしようと戻っていたユウはアンドラスの中で眩いた。ギャラ

ルホルンの船が簡単に破壊されていく。これが禁忌の力。父さん達の命を奪い、ハンマーヘッドを爆散させ、百鍊を砕いた。

詳しい情報は伝わってこないが全艦隊の半数は破壊されているだろう。膠着状態だった戦場が一気に不利になった。

その時に思い出すのはそれによつて壊滅的な状態になった輸送船、ハンマーヘッド、ピンク色の百鍊。そしてその対抗策を考えていたレヴオルツだった。

彼はダインスレイヴが使用される可能性があることを自分の中だけとはいえ、考えていた。グウィディオンだけならまだしも、ここまでの兵力が揃うと普通に戦ったら負ける可能性をアリアンロッドは考えると。

それにラスタル・エリオンという男の性格を考えると何かしたらの力、それも禁忌レベルの物は使用されるだろうと。勿論、これほどとはおもわなかっただろうが。グウィディオンにもそれを話、最悪の可能性を考慮してダインスレイヴを持ち出したらしいがそれが裏目に出たらしい。

しかしまだ終わりではない。もうひとつ、対抗策がある。

——貴方にダインスレイヴを破壊してほしいんです。

あのときは正気かと疑ったが今彼はそれなりに有能だと感じた。もしかしたらただ、

スパイを入れていただけなのかもしれないが。

どちらにしろそれが出来る力がある。

「アンドラス。力を貸してくれ」

——いつも通り。やればいいんでしょ？

「ああ。固まっている銃をミサイルで射抜くと考えればいい」

アンドラスにそうとだけ伝えて武装の再確認、システム面の整理をもう一度行う。端末を叩く指に汗を感じる。ここでミスをすれば一卷の終わりだと。でもこれを成し遂げれば勝利に導かれる。

するとレヴォオルツ・イーオンから幾つかの画像と座標が届いた。その画像にはダインスレイヴの発射される瞬間の光が幾つかの角度から載っていた。そして座標はおそらく味方側のものでだろう。おそらくあの位置だとモバイルスーツのエイハブウェーブは感知出来ない。この画像と照らし合わせて狙撃しろ。そういうことだろう。動いている可能性は考慮していないようだ。

「やってくれる…！」

——無理だと思うの？

「君がいなければね」

軽い会話をしながらその情報をアンドラスに送る。

ダインスレイヴを破壊するのはアンドラスの背中にラックされているため大型のミサイルポッド。これを特定の場所でプログラムを打ち込んで切り離し、小型ミサイルでダインスレイヴを狙撃。ダインスレイヴはその威力を持ちながらデメリットとして衝撃に弱い。小型ミサイル一発でも当たれば二度と撃てなくなるか整備が必要になる。その整備も1日2日で終わるものではない。少なくともこの戦場で直す事は不可能。

大型ミサイルポッドに入っている小型ミサイルは合わせて120。ダインスレイヴの総数と同じ。偶然だがダインスレイヴが多すぎなくて安心した。もし小型ミサイルの総数よりも多かつたらどうしようかと思った。

兎に角これで安心だ。

僕がここにこう撃つと思考をしてアンドラスがそれを実現する。完璧だ。

「ユウ！アンドラス出れるぞ！」

「了解！ユウ・タービン！ガンダムアンドラス type β で出撃します！」

再度出撃する。出てすぐに何機か狩りとったであろう辟邪が二機いた。パイロットは勿論ラフタとアジード。

「ゆうちゃん！」

「作戦通りにいくよ！」

「了解！」

幸いな事に敵パイロットは存在せず、破壊された船等の破片が散らばるのみだった。モビルスーツに当たったって損害はないがこの位置で撃つと残骸に当たって無駄になる弾は増えるし、まず射程外だ。

残骸かわしながら高速で進む。露払いの必要すらないこの空間が不思議に思えるがそこまで余裕はない。

ダインスレイヴが次弾を撃つのもすぐだろう。ダインスレイヴには装填用のモビルスーツが必要となるがそれさえあれば二三発はほぼ連続して撃てる。

一秒でも遅れると次が撃たれる可能性がある。次が撃たれてしまえば損害は相当な物となり、たとえダインスレイヴを潰したとしても勝利の可能性はほとんど無くなってしまう。そんなことはさせてはならない。

一秒が惜しい。最悪これが成功したあとはまた補給をうければいいのでスラストスターをフルに使い特定の場所に着く。

残骸が多いがこれを避けるしかない。

弾の軌道を想像する。120発ものミサイルの軌道。一番無駄無く、そして砲撃による破壊が難しく、残骸を避けられる。そんな軌道を。

ミサイルの細かいデータを加味しながらひとつひとつ、細かい動きを想像する。
「()かー」

それでも避けられないであろう残骸をライフル付きシールドで退かす。ゆつくりと動いていく幾つかの残骸を見ながら再度想像してその軌道を頭の中で完成させる。

「つーアンドラスー」

——任せて!…出来た!

アンドラスに呼び掛けることで人間だと数時間かかるプログラムも数秒でやってくる。しかし出来るのはプログラムによる武装の動きのみでそれを細かく伝える、そしてそれが可能な物であるかどうかもパイロットにかかっている。

まさしくこの二人でなければ不可能な行動だ。

よくレヴオルツは出来ると思ったな。

すると画面に幾つかの線が浮かび上がってくる。120本となった線は全てダインスレイヴを狙っている。

「ミサイル各部の軌道修正完了。敵モビルスーツによる損害、無し。弾のブレ、修正。射撃の妨害、確認できず。視界は良好。エイハブリアクターによる疑似重力、計算済み」

ほとんどがアンドラスの手柄だ。本当にアンドラスには頭が上がらない。

そのままプログラムを流し込み、ミサイルポッドを射出した。

「いつけええ!!」

大型ミサイルポッドはそのまま元氣よく飛び出す。この程度では氣付く輩はいないだろう。まさかダインスレイヴを狙っているだなんて。

そしてそのまま小型のミサイルポッドがそれぞれ二つ、合計4つ出てくる。その小型のミサイルポッドがスラストターを使いプログラム通り、ギリギリまで接近する。

ここが敵の最後のチャンス。そして氣付く人間が出てくるであろう場所だ。

それを見届けながら汗を流す。ここで誰かに撃たれて爆破でもすれば終わりだ。

しかし氣付く物はいなかった。そのまま小型のミサイルを大量に細かく言えばそれぞれに30発。三つの面からそれぞれに10発。合計で30発のミサイルを着けた小型のミサイルポッドが4つなので合計120発のミサイルが飛び出す。

それがモビルスーツの間をすり抜けてダインスレイヴには着弾し小さな爆発を作るのを見届けながら息を吸うことを忘れていたことに氣付き、深呼吸をした。

第64話 最後の指導

双方共にアリアンロッドのダインスレイヴが一斉に爆撃された事に度肝を抜かされた。
た。

革命軍側は喜び、雄叫びを上げて。モビルスーツを前に出した。消耗していた筈の空気が一気に変わった。

アリアンロッド側はダインスレイヴで終わるだろうと推測していたものが多く、対処に遅れた。ダインスレイヴを操作していたパイロット達は命に別状はないがダインスレイヴが全て使えないと知ったその瞬間、絶望した。

未だにアリアンロッド側が有利だが流れが変わった。アリアンロッドはその数を持ちながらもゆつくりと潰されていく未来しか無かった。

もし、彼女がいなかったら、だが。

「モビルスーツ隊に陣形を取らせてください。私の隊のメンバーを前面に出します。負傷者をすぐに下げて。流れは敵の物ですが物量なら此方が上です」

父親であるラスタルが絶句している横でそんなこと想定していますと言わんばかりの表情と声のアメリカがファフニールの中で命令する。

「お父様。指揮、変わりましようか?」

「いや、いい。今回の戦いはお前の出る幕はない」

そう言いながら二人は戦場を眺めた。また膠着状態となるのか、ダインスレイヴのダメージがまだ響くかわかった物ではない。

「ライルさん!」

モビルスーツデッキ。アリアンロッドの中では早すぎるが文句なしの撃墜王となったライルが補給を終えたらしいベリアルに乗って戦場に行こうとした。その時だった。

クリーム色の毛を持ち、ギヤラルホルンの制服を軽く羽織った男が出てきた。その体は傷だらけで立っているのもおそらく奇跡だろう。

「ニールか。傷は?」

「主治医には寝てろと言われました」

彼はそう言いながら笑う。この前の戦いでニールは敵のパイロットに深手を負わされた。俺の方も色々あったので結局拾ってやるのに時間がかかったので傷が膿んでないか心配ではあったが全然大丈夫なようだ。

となるとまた新しい問題が出てくる。トラウマだ。2年前、ニールは今回のようにアンドラスというテイワズの狙撃手のガンダムに深手を負わされた。そこでまたアンド

ラスに出会った瞬間に錯乱したのだ。

またあのときのよう錯乱するのだろうか。

しかし彼は自分がそんなことを考えているとはいざ知らず、淡淡と言う

「聞きましたよ。ライルさん。これが終わったらギヤラルホルンを辞めるって」

「止めに来たのか？」

「いえ、止められないことなど十も承知です」

ギヤラルホルンにとってライル・バレル、もしくはライル・アインストという男は最強の兵として位置付けされている。

なのでギヤラルホルンは離すとめんどくさいのだ。お偉いさんであればあるほど俺の価値を知っている。(イオク?そんなもん知らん) 戦闘における圧倒的な力。あの日から何度も模擬戦を行ってきた。中には一対三等も普通にあつたが負けることなど一度も無かった。戦争を一人で動かした男に勝てるはずもないのは仕方ないが。

そして阿頼耶識という技術。ギヤラルホルンは禁忌と言うがその力は特にセブンスターズのような者達は十分知っている。勿論やろうとは思わず、先祖がやって来た物としてだが。しかし安心安全に出来るのなら着けてもいいと思うものもある。その実験台として利用価値もあるのだ。この背中にある阿頼耶識はヒューマンデブリ等が使うものよりは少々ましではあるが、流石に厄祭戦時代となると性能は同じでも反動が違

う。それでもそれなりの阿頼耶識保持者ということだ。研究期間が注目している。早かったのはマクギリス・フアリドだ。傭兵の如くあらゆる部隊を転々としていた自分をすぐに引き抜き、阿頼耶識搭載機を送ると共にその戦闘データ等を取っていった。そうして彼などの特にギャラルホルンの中でも優秀な人間には俺のような力がある人間が必要なのかもしれない。なのでアメリカも本当に良いのですか。等数えきれないくらい言われた。

しかしその反対も押しきってきたのだ。今更ニール一人の制止で止まるわけがない。

「私は部隊の中でも劣っているかわかっていたから貴方の力が欲しかった。誰にも比肩することの無い圧倒的な力。結局その端くれをもらっただけです」

そう言つてニールは笑う。

彼の頭の中ではどのような情景が出ているのか。彼女を失つた悲しみをそのままぶつけていた自分に手をさしのべるのではなく、手をさしのべてくださいと願う一人の男。自分と同じ力を持った人間がもう一人いれば出来ることが広がり彼女の意思を継ぐことが出来ると。結局そうとしか思わなかった。それでも彼にとっては俺が先生なのだろう。ならば最後に言うべき事がある。

「ニール。最後にこれだけは言っておく。一度しか言わないから、よく聞け」

「はい」

ニールから顔を反らす。出撃準備をしろと言われて結構な時間が経っている。どうせ辞めるので少しくらい遅れてもいいかと勝手に思いながら言った。

「自分の才能を理解しろ」

「才能……ですか」

「ああ。人間誰しも向き不向き、得意不得意がある。その中で才能という光るものが誰しも一つはある。殆どの人間がそれを見逃すがそれだと気づかないまま、その人生を終える。しかしその才能というものは圧倒的な力だ。人間が行える努力では覆せないほどの。努力に勝る才能は無い？ふつ、笑わせるな。そもそも努力に負けるような才能ならそれは才能ではない。個性だ」

才能。人との差。

ある人は努力すれば才能を持った者に対抗できると言った。しかしそれはその人もある程度その分野に才能を持っているからそれに努力という積み上げたものがあるから出来る行為。元々才能の欠片もない人間が努力したところで人である限り不可能だ。例としてイオク・クジャンが上げられる。

しかしそんな彼ですら才能がある。それさえ輝かせればそれに気付かずそれを使えない環境にいる人間に対し、大きな差を作れる。自分のように。

過信しているわけではない。確信しているのだ。

「ちやんと俺は肥料をくれてやった。後はお前がお前の力で成長しろ。自分の才能を活かせ。それこそがお前が強くなれる唯一の道だ。んじゃあな」

ニールの返事も聞かずにそのまま歩く。ニールは声の一つもかけなかったが最後に礼をしているように感じた。

これでお別れだ。もう二度と会うことは無いだろうお前が俺が行くコロニーに行ったりしない限り。

そのままモビルスーツデッキへと出向きベリアルを見る。もし貸すではなく渡すであつたら俺はこいつを持ってコロニーへ帰つたのかもしれない。それほどのモビルスーツ。何度かシミュレーションを行ったが圧倒的な性能だ。自分の思い描いたように動いてくれる。ベリアルに阿頼耶識のコネクタを刺しながらモビルスーツデッキから切り離す。

得物はバックパックにかかった二本の剣と右手に持ったマシンガンそして両腕にある腕部100mm砲。無さそうに見えて意外と持っている。

「ライル・バレル。ガンダムベリアル、出るぞ！」

ベリアルがファルニールから飛び出し青い閃光を上げながら近くのモビルスーツを潰して進んだ。

「あの男：サイオンの読みがあつていたのか：」

アリアンロッド側に起こる幾つもの爆発を見届けながらマッドナッグのコックピットでユダ・カイエルは呟いた。

敵方の作戦、ダインスレイヴで一網打尽にするという作戦のお陰で今この宙域に敵モビルスーツの反応はない。

それで安心してため息をつきながら自分が破壊したダインスレイヴの特殊な、弾というより矢といった方が正しい気もする弾を手を持った。

今さっき自分はこれを切り落としたのだ。大剣をその特殊な弾の腹に突っ立てて向きを強引に変える。そうすることで自分と今後ろにいる戦艦を守ったのだ。

「大丈夫か？」

「あ、感謝します！ユダ・カイエル！」

自分と同じくらいの年齢の男がそう言うのを片目で見ながら良いと一言返した。男は革命軍側の司令官の一人とも言うべき男で名をライザ・エンザという。

自分がここにいないければダインスレイヴに貫かれて死んでいたのであろう人間に対してもあまり感情をもたない。

そんなことより重要なことがある。ダインスレイヴを潰されたということはアリアンロッドも動き出す。

「とりあえず船を下げる。敵モビルスーツをいくつさばけるかなんてわからない。あつそうだ。仲間に言つといてくれないか？カイエル家は未だに途絶えていないって」

そういうとマッドナッグがエイハブウェーブを捉えた。機体数が多い。ダインスレイヴで痛手を負つたからこのまま押し潰すつもりか。

機体はおそらくレギンレイズとか言う最新鋭の機体。しかしこちらは厄祭戦にて消えたモビルスーツ、マッドナッグ。負ける気はしない。

「行けー」

「了解しましたー」

そう言つてライザ・エンザが乗る船が遠くに逃げていくのを片目で見ながら敵のモビルスーツ隊を睨んだ。

数多の爆発にて破壊されていくダインスレイヴを見届けながらサイオンは艦長席から立ち上がりたい衝動に駆られたがすんでのところで押さえた。しかし笑みは隠しきれずにそつと漏れる。

彼はやつてくれたのだ。自分もまさかあんな無茶な事を実現できるとは夢にも思つていなかった。元々翼として展開していた部隊を向かわせてダインスレイヴを潰すつ

もりだったのだ。その事を伝える必要性も無くなったので今では単なる無駄だが。

「やはり彼は：：。そうですね。君の息子です：：。ヘステイア」

サイオンはアンドラスを見ながら口角を上げた。そのときのオーラは無気味だった。彼の近くに浮いている端末にはとある情報が記してあった。

数分後、彼の視界にあつたのはレギンレイズの残骸だった。他のモビルスーツの残骸は欠片も無い。つまり彼一人でこれだけの数を仕留めた。

「はあ：：。うっ。ライフルの残弾は殆ど無い。大剣でどこまで切り抜けるか」

先程敵機を持ち帰った僚機は無事だろうか。増援は来るのだろうか。モビルスーツの首パーツを動かせば見える地球を片目で見ながらそう思った。まず地球外縁機動統制統合艦隊の増援は見込めないだろうが、レヴォルツ・イーオンからはもうじき来るはずだ。

あのサイオンがここで自分を置きっぱなしにしておくなどあり得ないのだ。指示も何もないのにここで大切なカイエル家の人間を置いておく筈がない。

すると遠くから二種類のモビルスーツの反応があつた。一つは援軍、この機体コードはおそらくグウイデオンのもの。来ないかと思つたが意外と来るもんだ。まさかサイオンがそこまで指示できるとは思えない。マクギリス辺りが俺の存在価値を理解した

のだろう。

そしてもう一つは敵機。

通常のモビルスーツの三倍の速度で接近してくる。

敵機は遠くからだだったのであまり気には止めていなかったがあまりの早さに対応が遅れる。

「つ!!来るかあ!」

大剣を一度風ぎ止まることを知らないであろう敵機が視界に入った瞬間に降る。素人ならこれで一度下がるか受けるか。しかしその機体は下がりもせず滑らかな動きで避けて、蹴りを食らわしてきた。マッドナッグが軽く吹き飛ばす。

体勢を整えながら蹴ってきたモビルスーツを見た全体的に黒が多く、所々に灰色のパーツがある。左腕にはマシンガンが握られている。アリアンロットから出てきたことも踏まえるとおそらくガンダムベリアル。

「お前が… ライル・バレルか」

敵側のエースを見ながらユダは呟きそれと同時に大剣を構える。

その意図を察したのかベリアルもマシンガンを放棄してバックバックから一本の剣を引き抜いた。

二体のモビルスーツは睨み、そして援軍が到着する前にその状態を崩してぶつかり

合
つ
た。
。

第65話 子孫VS再来

ガンダムフレームが出せる最高速度を出しながらも残骸をかわして真つ直ぐに進む。アメリカはダインスレイヴが破壊されることを見越して部隊を出したらしいがそれらしい反応は見えない。

流石に先に行かれたとはいえ、ここまでのいまいとなるとおかしい。しかし、目の前に広がるのはダインスレイヴによって殺られた残骸のみ。敵の大部隊もない。

数が少なくなってきた敵方は部隊を集めるだろうとアメリカは言っていた。

しかしそれらしい物は見えない。

まだ離れているのか。流石にレギンレイズの最高速度で動くななんて事はあり得ない。

「最後の戦いで迷子なんて笑えねえぞ」

残骸に当たれば機体は大丈夫だろうが体はべったんこになりそうな最高速度を出し続けながらも笑いながら言っていると反応が見つかった急ブレーキをかけながら相手を見る。

「——はあ？」

しかしそこには先行していたレギンレイズ隊はいなかった。いや、残骸となって宙を

漂っていた。それだけなら敵の部隊と接触、戦闘になりその末に敗北。となるが浮いている残骸はほとんどがレギンレイズのもので破片からして時間はたつてない。そしてそこには一機のモビルスーツがいた。たった一機で全員仕留めたと言うのか。

青っぽい装甲を嵌めた自分が乗っているガンダムフレームに似た形をしている。フレームが露出している部分もよくにている。アメリカが一度言っていた。今回戦うレヴォルツ・イーオンという名の反ギャラルホルン組織はガンダムフレームに似た機体をエース機として使用すると。名前は確かマッドナツグだったきがする。シルエツトだけなら所々がガンダムバエルに似ているアーラとの戦闘、そして自分が今ガンダムベリアルに乗っていることから複雑な心境だったが兎に角これが反ギャラルホルン組織のエース機。

そしてレギンレイズ隊を壊滅させるレベルのエースパイロット。剣を抜く相手としては上等だろう。

バックパックを動かして剣——とは言っても刀の方が近いが、それを一本握って構える。相手を舐めている訳でない。相手の手札を出しきるところか全くわからない状態で二本は不意を突かれたさいに、攻撃力を失う。それは即ち死を意味するものというの
は誰だつてわかる。

「行くぞ」

ユウ・ターピンの時とは違う緊張感。彼は接近戦は挑んでこないからこういう接近戦にて強いと思わせる相手は久しぶりだ。

相手が大剣を構えたその瞬間にスラストを一瞬だけ最大にして加速する。そのタイミングにあわせて大剣を振るうマッドナッグの大剣を細かい動きで反らして避ける。

普通の相手ならこの後のカウンター一撃で沈められた。しかし、マッドナッグがそれを見切り、その状態で一回転。それをまた避けると蹴りを入れられる。

こいつ。やり手だな。シミュレーションだけではこんな動きはまず出来ない。実践経験を積んでいる。しかしその細かな動きから少し若いと推測できる。証拠に蹴りに感情が乗っていた。お互いに初対面だろうに。どちらにしろ、感情が乗っている蹴りにくらったのは変わらない。その感情を隠していた訳ではない。感覚を鈍くされたのだ。

「殺気か」

とりあえず適当に答えを出して考えるのを止める。そうでもしないと隙に潰れ込まれる。

一旦離れて両腕の100mm砲を乱射する。マッドナッグがそれを避けたのにあわせて剣をふるう。しかし今度はマッドナッグが先程の剣技をコピーしたように反らす。

しかしこちらはガンダムフレーム。その力は馬鹿にならない。そしてこちらの方が場数を踏んでいる！

素早い動きで切り返しマッドナッグを強引に離す。そして周りこんでもう一発。一応当たりはしたがその二つとも手応えを感じられない。

おそらくユウ・タービンと同じ手を使ったのだ。普通に当てられたように見えるが実際は間接や得物など脆い部品の為に硬いパーツに当てさせたのだ。ミスディレクション、挑発、細かなバランサー調整。全てが完璧に出来てないと出来ない芸当。

「やる…！」

勿論当たったことにはかわりないので追撃を繰り返す。細かな動きを調節しながら剣を当てると今度は対応しきれないのかマッドナッグは大剣を盾にして一度剣から守る。先程の芸当が出来ない動きなのか、それともしても無駄だと気付いたか。

「おそらくは、その両方か！」

一本の剣でそのまま切り結ぶ。何度も離れては切り結び当てては追撃し、当たっては防御で追撃を防ぐそのような事をお互いにやり続けていた。

モビルスーツが再現した音では鈍器のぶつかり合いをイメージするが実際は攻撃をそらしあっているのみだ。特に此方は刀なのでいくら堅くて丈夫と言えど下手には使えない。そうして火花が散る度に緊張感が増して頬を汗が伝う。

これはいい緊張だ。何処にいて、いつ撃たれるかではない。ここにいていつ切り捨てられるか、そしてそれに対応できるか。そんな気持ちのいい緊張感だ。その為気持ちも

高ぶる。

相手も同じ気持ちなのだろう。こちらとは違い剣に感情が乗っているがその乗っている感情がとても熱く感じさせる。

そのまま何度も何度も、切り結ぶ。お互いの装甲に何度か当たり、そして硬いパーツでカバーをして、カウンターで追撃。少しづつお互いが相手の動きに対応出来るようになった。しかしこちらにはまだ二本目がある。それをいつ、どこで出すかが問題だ。

阿頼耶識が行える最大の情報量を送らせようと思ったがその瞬間、援軍が来たのでマッドナッグを蹴り飛ばす。

「援軍か」

「ユダ・カイエル！援護する！」

機体は四機のグレイズとマッドナッグの二倍のレベルの大剣を持ったヘルムヴィーゲ・リンカー。合わせて五機のモビルスーツが此方に突っ込む。

しかし先程のマッドナッグで熱された熱が一気に冷めると同時に四機のグレイズをスクラップにした。

「なんだと!？」

「遅い」

そのまま半回転してヘルムヴィーゲ・リンカーを蹴り飛ばし、刀を引つ掻けてその得

物を片手で握る。とても重い得物だ。これで速度重視の自分に勝てると思ったのか。ナメられていると感じた。しかしそれでも強いわけではない。それは先程スクラップにした、四機のグレイズを見ればわかる。一瞬だけスラストーを使って接近しただけなのに防御すらしなかった。おそらくその速度を想定していなかったのだろう。普通の速度なら防御が間に合った筈だ。

勿論、こんな得物に当たればガンダムフレームとはいえ、ただではすまない。しかしそれを持ち合わせた今、それはこちらの得物。ヴァルキュリアフレームが地上の活動での限界重量であっても此方はガンダム。振り回せる。

それをわかつての事だろう武器も持たずに接近してきた。

「うおおおっ!!」

しかしそんな接近なら素人でも弾ける。大剣を降るってヘルムヴィーゲ・リンカーを弾こうとしたその瞬間。ヘルムヴィーゲ・リンカーは別方向に弾かれて持っていた大剣も反らされた。

「…悪いな。放ってしまつて」

「いや、構わない。再開しようか」

マッドナッグが剣を真つ直ぐに此方に向けて突つ込む。コックピットごとぶつ刺すつもりだろう。反らされた方向に一回転したあとにその大剣を踏み場にして避けなが

ら冷静に蹴りを入れる。その蹴りを使ってマッドナッグも一撃をベリアルルの脚の装甲に叩き込む。ベリアルルの向きが変わり、一時的にバランスが使えなくなる。

「今だ！」

「今だ！」

両者が同時に口を動かしながら叫んだ。マッドナッグは先程と同じようにコックピットごとライルを貫こうと剣を真つ直ぐに立てて突っ込む。ライルは相手の追撃を見る。持つている剣を適当に振り、そちらに思考を向けながらも一本を引き抜く。ユダはそれに頭を動かしながらも剣はコックピットの方を向いている。しかし目はもう一本を見ていなかった。

さしずめ予備だとも思っていた刀が急に横から現れて機体を弾くとは想像していなかっただろう。

今度はマッドナッグがバランスを一時的に使えなくなる番だ。しかしマッドナッグはスラストで巧みに動かし、ベリアルルに攻撃を入れる。

「二本目！」

「そうかい！」

しかしそこにまた横やりが入る。

大剣を持ち直したヘルムヴィーゲ・リンカーがベリアルルの後ろに周り大剣を振るう。

しかしそれを理解する筈もなく、ベリアルは攻撃された反動でうまく避けてヘルム
ヴィーゲ・リンカーに蹴りを入れる。

「邪魔するな！ 剣スタンド！」

大剣ばかりに目が行ってしまうモビルスーツなので剣スタンド。全く適当な名前
だが長いのでしようがない。

「お前は下がれ！」

「しかし！」

「邪魔をしなければ良い！」

マッドナツグの損傷もそれなりに酷い。ガンダムフレームの機体とそれも阿頼耶識
を積んだギャラルホルン最強のパイロット相手によくここまでもつたと称賛が送られ
るレベルだ。

しかし、此方だつてそんなことで手を抜く事はない。それに気づいている石動は援護
という体裁でベリアルを倒すつもりだ。

頭が冷える。視界は良好。ヘルムヴィーゲ・リンカーが馬鹿正直に突っ込んでくる。

「うおおおっ！」

それを軽くかわして両腕の装甲に刀を差し込み、抉ってパージさせる。ここまで馬鹿
正直に突っ込んでくると何か裏があるのではと思ってしまうがそうではないだろう。

当たり前だが先程スクラップにしたパイロットも今ここで自分が相手をしているパイロットもギヤラルホルンの中で見ればエースと言っても誰も反論しないだろう。そしてギヤラルホルンの兵は決して弱い訳ではない。

「まだ生きているか！」

「あんの馬鹿！」

止め。そう思った時にそのヘルムヴィーゲ・リンカーの巨体をマッドナッグが掴んで回転しながら投げた。刀は宙を裂き、ベリアルが一瞬だけ隙を見せて、同じくマッドナッグは投げたことにより、隙を見せる。

両者が見せた隙はほとんど同じ時間だった。微妙にマッドナッグの方が反応が遅かったがその回転をそのまま使って剣を振るい、牽制をした。

「仲間を助けるか」

ベリアルが冷ややかな目をする。まるで道端に落ちている空き缶を見るような目を。

その瞬間ベリアルは加速して一本の刀を振るった。マッドナッグはギリギリでそれを受け止めて、弾く。しかしベリアルには二本目がある。それをマトモにくらって装甲が弾け飛ぶ。

「なんのおー！」

装甲の欠片をパージで吹き飛ばした後、マッドナッグがスラスターをそのままフルに

使って、ベリアルに体当たりをする。急な事だったのでライルもぐらつき、対処が遅れた。

そしてマッドナッグが剣を掲げた瞬間、ベリアルは二本の剣でマッドナッグの剣を弾く。二機の体勢が崩れて宙を回る。

それを石動は見逃さなかった。その大剣を真っ直ぐに伸ばし、ベリアルを引つ掻けてそのままマッドナッグから離れる。そしてある程度離れたら蹴飛ばして距離を取り大剣で止め。

エースらしく流れるような動きだったがライルは機体を軽く捻らせて簡単にかわした。

「なっ……！」

これで最後だと思った自分の力を込めた一撃をここまで簡単にかわされて石動が呆気にとられているとベリアルが次は自分だといわんばかりに先程と同じようにヘルム・ヴィーゲリンカーを引つ掻けて適当なところで捻りながら蹴りを入れる。

「ぐあっ！」

そしてそのひねりを維持しながら流れるように逆回転。ヘルムヴィーゲ・リンカーの大剣を弾き飛ばし、それに蹴りを加えてそのまま足下を周りスラストターに一撃。

スラストターの爆発と同時に二本目、三本目と連続の攻撃を食らわせる。

装甲は弾け飛び、フレームはヒビが入り、コードは切れて飛んでいく。

そして頭部に攻撃。ヘルムヴィーゲ・リンカーの頭部でも一際目を引くその角に：：一撃。

その瞬間石動の目の色は変わっただろう。最悪のスタンスだがここで一撃を加えれば状況は完全に此方に向く。

そのヘルムヴィーゲ・リンカーの角は電撃角と言って敵に組み付いた極至近距離戦で使用される武装であり、敵の装甲に突き刺し内部構造を焼き切る目的で使用される。

なお、放たれる電撃から機体のセンサーを保護する為、使用時にはフェイスマスクが展開されるのだがこの場合ではフェイスマスクの展開を考える暇はない。敵の装甲に突き刺すこともできないが金属である刀に触れば少なからず本体にも流れて腕の一本くらいは使えなくなる。その為に石動は電撃角を起動しつばなしの状態にした。センサーがお釈迦になったがそれよりもベリアル腕をうごけなくできれば勝利も夢じゃない。

そしてベリアル刀ゆつくりと電撃角に近づき、そして触れる。電撃角は半ばで折れるがその電撃は腕に伝わ：：なかった。

言葉すら発することができず細い角は呆気なく刀に切り落とされる。

その瞬間酷い画質のサブカメラで石動が確認したのは。ベリアルの手がほんの数cm、

刀から離れているところだった。空気すらない宇宙空間では電撃を伝えるものはない。空気さえあれば抵抗は強いが無限ではないので雷のように折れ曲がりながら何処かには命中しただろう。しかし宇宙では何もなかったため伝えるものもない。刀に電気が通っただけだ。それに手を添えられた為、持っているものだと思ってしまった。その刀がヘルムヴィーゲ・リンカーに当たり、放電する。これでただヘルムヴィーゲ・リンカーがミスをしてセンサー類を壊しただけとなった。

「ううっ！」

「来るとわかっていて手を警戒しない筈がないだろう！」

そして最後の一撃を決める。頭部の装甲は弾け飛びセンサー類に不調が起こり、今度こそヘルムヴィーゲ・リンカーは何も出来ないただのダルマとなった。装甲をとられてフレームのみの状態にされる。

そしてベリアルが刀を振り上げた、その瞬間。

「止めろー！」

青い閃光が突如機体の間に入り、片手に持った大剣をベリアルへとぶつけた。速度に任せて鈍器のように殴っただけだがその衝撃でベリアルは弾け飛ぶ。

「ああ……」

ヘルムヴィーゲ・リンカーのコックピットで石動はその戦いを見るしかなかった。

素早く体制を建て直したベリアルとマッドナッグが切り結ぶその姿を。圧倒的な力の差を。

しかしその時間は長くは続かなかつた。ただでさえレギンレイズ隊との戦いで疲弊しているマッドナッグ。その上ベリアルの猛攻に耐えたので損傷も酷い。

「ぐあっ！」

結局ベリアルが出力で押切、マッドナッグを吹き飛ばす。その青色の装甲も傷だらけで辺りに青い破片が浮いている。

「まだあっ！」

マッドナッグは吹き飛ばされた時に得られたなげなしのエネルギーにモビルスーツの出力すべてを加えて蹴りを出す。そのマッドナッグの力が籠った右足をベリアルは差し出すように出した左脚で蹴り返した。

普通ならマッドナッグの脚がベリアルを飛ばすか脚をもぎ取るくらいしただろう。しかしその一撃はベリアルが勝った。

「ああっ！」

マッドナッグの左脚はもぎ取られ。その衝撃でマッドナッグが吹き飛ばされる。明後日の方向へと半壊しながらマッドナッグは吹き飛んだ。

そのまま流れるようにベリアルは不安な体勢のまま、ヘルムヴィーゲ・リンカーへと近づく。

「(っ)まで…」

ヘルムヴィーゲ・リンカーも大破した大剣の破片で対応しようとしたがその時間も与えられなかった。

ベリアルがマッドナッグを倒したと思った瞬間に石動は絶命していた。そのヘルムヴィーゲ・リンカーのコックピットを守るフレームは音速を軽く越えたベリアルの刀を受け止めきれずひしゃげて貫かれたのだ。

その刀をゆつくりと引き抜きながらベリアルはその場に佇んだ。

「今、僕の知らないところで僕の知っている人が死んだ」

第66話 射撃VS近接

「今、僕の知らないところで僕の知っている人が死んだ」

アンドラスのコックピットの中で意識していない言葉が口から零れた。

確かに先程何かを感じた。強い意識の力が膨らみそして急速に萎む。そんな感覚を遠くで感じた。

何か……嫌な予感がする。敵のエイハブウェーブをアンドラスは感じ取っていない。しかし何かを感じたように気味の悪いものを感じたと伝えてくる。

「アンドラス。僕もだ」

そういつて操縦幹を掴みその方向へと機体を動かした。

「ゆーちゃん？」

ラフタの声を無視して。

まだだ。

そう声を出そうとした。しかし呼吸することに精一杯で声が出せない。ノーマルスーツのバイザーの一部が息で白く染まっては戻る様を何度も見た。

それくらいしか出来ることはなかった。敵のガンダムフレームとの度重なる衝突。その衝撃からか体はついに限界を迎えたらしい。動かす度に痛みが貫く。

モビルスーツもスラスターのガスはほとんどない。関節はすり減り、破片を挟んだのか傷だらけ。メインカメラはどこでやられたのか割れていて、左脚は押し負けて爆発と共に消えてしまった。

マッドナツグの性能はガンダムより下だとは知っている。自分には阿頼耶識がないので劣るのも仕方ない。そうとも考えられる。しかしそんな中でも良いのかと自問自答する。

アグニカ・カイエルの子孫。

この一言で革命軍側の戦意は凄く高いのだ。カイエル家の、何者にも汚されなかった血が300年間、隠されて時には守られて受け継がれたのだ。自分はその末梢。ただのギャラルホルンの兵士一人にここまでやられて良いはずがない。

「はあ…はあ…」

そう考える頭とは反対に身体は動くことを拒む。ここで動いても結局負けるだけだ。ということは考えればわかる話だ。ここまで痛む体で動いても奴どころか敵兵一人として討ち取るとは難しい。

圧倒的な力だ。そこまで圧倒的な力の前に敗北したのだ。今さら邪魔者を咎めれば

勝てる話ではあるまい。それどころかその男が生きているという証拠は無いのだ。

幸運か今の身体に過度な出血等は無いため命は助かりそうだ。先程マッドナッグを蹴り飛ばしたガンダムもエイハブウエーブすら確認できない。そして新たに発見したエイハブウエーブは味方機だ。確か鉄華団という組織だった気がする。

「おいおい…… 本当に…… 俺は…… 運が…… 良いな……」

ゆつくりとそう言いながらももうスクラップにされるだろうマッドナッグのコックピットを撫でた。

「おい三日月！ どうしたんだ！」

「いや、あれ」

通信で鉄華団の若い男の声を聞いたとき思わず思ってしまった。自分によく似ていると。

「アンドラス」

一言声をかけてアンドラスを止まらせる。その後壊れた戦艦の影に隠れる。

まだエイハブウエーブにはなんの反応もない。あるとしたら隠れた戦艦のみだ。

しかし宇宙と言うのは不思議なもので遠くまで見通せるのだ。そこに何かが映った。

真つ黒の機体がフレームだけとなったモビルスーツに何かを刺して佇んでいる姿を。

「あの男だ」

一目見ただけなので細かい機体を考えることはできないがその感覚から何度も交わった男だと推測される。

そのときに思ったことはあの男を超えたい。そんな単純な感情だった。まるで小さい子が友達にゲームで負けたからリベンジをしたいと考えるような。そんな感じの感情。しかしこれはゲームではない。負けたら死亡の戦場だ。なのに僕はあの男に何度も敗北し、その度に逃げた。

そして仲間を切り捨てて今ここにいます。

「僕は……強いから……くっ……」

父と母に言った言葉。

そうだ。僕は最初から一人ではない。父さんがいて、母さんがいて、シュインがいて、アガートがいて……アンドラスがいて。そして新しく産まれてくる命がいて。

この場にいるのだ。

「行くよ。アンドラス」

ペダルを踏んで戦艦からそのカメラを覗かせる。ここからの射撃は難しい。距離等は別に大丈夫なのだが位置が詳しくわからない。黒い機体だからか宇宙と混ざって見

にくい。見えても距離が掴めない。

最悪適当に撃つという事も出来る。当たり前だが弾は真っ直ぐ進むため、離れている距離が1mか2m違っててもあまり変わらない。では何が違うかというとその威力。空気がない宇宙空間なら実弾も何かに当たらない限り永遠に威力を損なわずに真っ直ぐ飛んでいくと考えているのも多いが実際は地球よりその要素が少ないだけで何処かで威力を失い最悪人が当たっても無傷というレベルまでいく。おそらくエイハブリアクターによる疑似重力などで減衰するのだろうが詳しいことは知らない。

しかし難しい事には変わりない。でも僕は強いから……負けない。
そう思いながら狙いをつけて引き金を引いた。

「ヒット」

そして当たり前のように黒い機体に命中する。そして気付いたであろう瞬間に全ての引き金を引いた。それぞれの盾から二門あわせて四門のライフルの狙撃を一齐に食らう。しかしその程度ではあまり効果無いのはわかっている。急速に接近してくる。ただ弾が当たただけでエイハブウェーブには反応は無い筈なのに真っ直ぐに突っ込んでくる。でもその程度では同じにすぐさまガード姿勢をとってしっかりと受け止める。

狙撃手としては失格であろう戦い方だか元々この戦いに僕のプライドなんて関係な

い。ただ、こいつを倒して超えたい。その為の装備。

アイツが短期決戦思考なのはわかっている。だからこそ戦いを長期に伸ばせば僕一人でも勝機がある。元々あつたミサイル付きのシールドを破られなかったことから力業でシールドを破壊はしないだろうと推測。元々刀はそういう物ではないと言うのもあるが。だからこそシールドの硬さは前のシールドとほぼ同じ。そして面積と数を増やしてガードを固める。装甲も追加することで守りとしては完璧な筈だ。そして攻撃力はシールドについている二門のライフルが主武装だ。バルカンは威力が低めな為、追加装甲をパージしたあとに使えるようにセッティングしてある。

僕の読み通りその黒い機体はシールドで守られたとわかると周りこもうと旋回する。

しかしその速度は僕の読みを大きく外れていた。

「速い…」

阿頼耶識の最高の反応速度だけではなく、機体の処理速度、そして単純なスピードも前の機体とは比較になら無い。

すんでのところでシールドで弾いて後退する。その瞬間その機体がか何かを理解した。まず前に突っ込んできた瞬間に理解するべきだった。アンドラスの同じフレーム構造をしているモビルスーツ。ガンダムフレームということにはわかる。そしてこのエイハブウエーブは。

「ベリアル。ガンダムベリアルか」

「ご名答。久しぶりだな、ユウ・タービン」

独り言の筈だったのにいつの間にか通信を開かれたらしく、会話になってしまった。しかしそのお陰でこのパイロットが誰か断定できた。このパイロットは読み通りライル・バレル。ギャラルホルン最強のパイロットにしていままで僕が敗北してきた相手。「タービンの件でお前はガンダムを降りると思ったが……あのミサイルを見て思ったよ。お前は強くなった」

「師匠気取りか？」

こいつと対面するとよくなってしまふこの状況。お互いの殺気で周りの空気のようなものははりつめる現象。動いて射撃した方が良いのに動けばその瞬間仕留められるのではないかと警戒している。

「ま、そんなところだ。俺とお前は何度もその殺意をぶつけ合ってきた。そしてそれはこれで最後だ」

もし両方が生き残っていてもだ。

そう繋げてライルは言う。

まるで自分が戦うのはこれで最後だと言うように感じられた。おそらくここで確実に仕留める！という意気込みじみたものがあるわけでもないだろう。では、自爆でもす

るのだろうか。いや、ならばそう感じさせる事は言わないだろうし、ガンダムにも乗る筈がない。

「なんのつもりだ？」

「さあな。それはこっちのプライベートだ」

プライベート。その言葉から大体の事は予想できた。もしこいつが嘘をついていないのなら戦うことをやめる。そうなるだろう。

確定ではないがそう思うと何故そうなるのかと想ってしまう。あいつはもう長生き出来ない程の傷があるのか。それとももう歳なのか。

「・・・」

「まあ、どちらにしろこれで終わりだ。お前がいくら撃ち殺してもこちらの方が数がある」

急に声が低くなり二本の刀を構える。いままでの剣のように押しきるのではなく、切断する。

しかし先程シールドでは守りきれた。うまくシールドさえ扱えればあいつの刀の動きが鈍る。その時を待つしかない。

「ライル・バレル！ガンダムベリアル」

「ユウ・タービン。フルアーマーガンダムアンドラス！typeβ！」

こちらも左腕で守るようにそして右腕の前に出して狙う。警戒されないように、狙っていると思わせないように。どちらにしろ相手は自分の射撃を読み取れないのいいと思うかもしれないが未知数な為、警戒しながら行く。これで勝つ。この戦いで勝ちたい。

僕はこいつに勝ちたい。

「行くぞ」

ベリアルが高速でシールドにぶつかつた。

端から見ればモビルスーツの事故みたいな体制だったがモビルスーツに乗るお互いの視線だと流れるようなスピードでベリアルがアンドラスのシールドをかすつてすれ違つたように見える。

全く動きに機械を感じさせないパイロットだ。一つ一つが早く、迷いが無い。流れるようにこちらを追撃してくる。

「アンドラス」

その猛攻をベリアルに合わせながらシールドでガードする。ガードしては弾かれたように下がり、距離をとってライフルで射撃。そしたら接近して来るのでシールドでガードという特定の型がもう決まった。

ベリアルとアンドラスのカタログスペックではアンドラスは汎用機。ベリアルは一

応接近戦が得意なようにセッティングされている。そしてこのパイロットの差。

接近戦を続けられればこちらの敗北は必至だ。

だから無理に攻めずにガードで守る。奴の話し方からしておそらく悪魔のベリアルにはまだ会っていない。つまり加護を受けている可能性は低い。そう考えればアンドラスの加護で阿頼耶識があらうと反応速度は変わらない筈だ。防げなくはない。普通の機体ならいや、普通のパイロットならその後弾いたりして、カウンターを決めることができたが奴の二本目の刀がそれを許さない。完全にこちらを追撃して反撃の機会を奪ってくる。

「どうした？そうしていても俺どころか兵の一人も殺せんぞ！」

「挑発か！」

それも高速で動きながらなので動きに慣れていなかっただけにやられていただろう。

何度もこの高速戦闘は行っているため、もう慣れた。二年前から、何度も何度も。そしてそれを超えるために鍛練したのだ。負けたくない。

「ここでお前を逃がせば今回の戦争は負けになる確率が高くなる。僕がここでお前を止めること事態に意味がある！」

「お前の力を持ってこそか！」

お互いに何度も死線を潜り抜けた戦士。

小手先の力では通用しないと理解している。ぶつかり合うそれぞれの機体のメインカメラが一瞬光る。

「ただ戦いたいだけのようにも感じるが？」

「その言葉！そっくりそのまま返すよ！」

時には四門のライフル全てでその機体に向けて撃つが効果がある部位には全然当たらない。相手が一瞬でも止まってくれれば良いのだが待っていても一向にその状態にならない。その上、ならさせようとアクションを起こせばどうなるかわかったことじゃない。

お互いにお互いを強いと理解しているからこそ、よく動けないでいた。

「本当に……世界で一番めんどくさい奴……！」

「お前がそう思うなら俺だってそう思う。しかしアメリカと考えればお前の相手をしている時間はない」

完全に守りしかない、狙撃手としては異例中の異例な行動をしながらなんとか命を保っている。

流石にライルがガンダムフレームのモビルスーツに乗ってくるとは想定してなかった。その威力に押されている。

ほとんど出力は同じ筈だ。カタログスペックでは同じだが、グレイズとゲイレーレルの差を感じる。流石に慣れていく戦いかたに見あつたモビルスーツは強い。

こちらも狙撃銃を持ち歩けばよかっただろうか。人間サイズの物すら積んではない。自分の得意な狙撃よりも相手の土俵にわざと入った振りをした方が落としやすいと考えたがそれはミスだったようだ。

しかしそれでも面倒と感じているのならそれは、敵の動きに悪い影響が出るといふこと。

「そつちの司令官がそれで困るなら！」

「そう来たか」

此方からの攻撃はカウンター以外避けるようにしながら回避と防御に専念して防ぎきる。

刀でもシールドを割りたいわけでは無さそうでおかげで傷だらけではあるがそのまま突っ込んでこようとは思っていない。逆に刀というのは意外と消耗が激しく、はこぼれなどをきにする必要が出てきた。

弾の心配を考えなくていいからといって接近用の武装も永久に使えるわけではない。

このままぶつけ合えば脆い方が壊れる。刀を除いた他の攻撃は全てをかわしている。つまり、シールドと刀の脆さ勝負ということになる。勿論それだけではない。銃を撃つ

ときに必ず頭にある要素の一つ、残弾。

このシールド付きライフルも長期戦を想定しているため、残弾は多い。なので考えなくても良さそうだ。スラスタアのガスの量も普段のアンドラスと比べると格段に増えている。

「堅いな…。さつさとマクギリスの夢に抱かれて死ぬ！」

「断る！僕は…。ユウ・タービンだ！」

ライルの動きがだんだん速くなる。

此方が長期戦を望んでいると理解して焦っているのか。それでも、その刀の流れはとも丁寧で最初の攻撃を倍速にしているような物だが。フェイントも混ぜてきたりして確実に仕留めようとしてくる。

ここまで焦るといふことは何かしらが限界に近いのか、別動体の動きを感じたか。

「その言葉！あの若者に聞かせてやりたいよ！」

「——っ！ジョーカーか」

自らの家族が生き残るために切り捨てた仲間を思いだし、一瞬守りが甘くなる。すぐに直すがその隙を着かれてシールドが欠ける。

シールドが白い破片を周辺に撒き散らしながらアンドラスのコックピットへの道を開ける。つまり、アンドラスの守りが外れる。

その瞬間、アンドラスのコックピットの壁に刀が突き刺さっていた。流石にそれは対応所か見ることもできず進行を許してしまふ。

コックピットに衝撃が伝わる。急に揺らされたので耐Gもうまく働かず、頭を壁にぶつける。そして一瞬だけ気を失った。

「ああああっ!」

「抜けないだど!」

しかし突き刺したライルは驚きを隠せずに動きを止める。

その瞬間、気を失ったユウに変わり、アンドラスがその胸パーツをパージする。灰色のコックピット周辺を囲んだ装甲はライルの刀にくつついたままアンドラスから離れる。そしてベリアル体制が崩れる。後ろ方向に半回転をゆっくりと始める。

「リアクティブアーマー!」

「そこだあ!」

瞬間的に覚醒したユウはその情景を瞬時に理解した。勿論ベリアルのその隙を逃すほど馬鹿ではない。

すぐにライフルを構えて一斉放火をする。四門のライフルの射撃を全て受け止めたベリアルはまた怯み、弾の爆発による煙を吐き出しながら後ろへと後退する。

「覚悟!」

その程度の後退ではライフルから逃れることはできない。すぐにアンドラスの左腕のシールド付きライフルがベリアルを狙う。このライフルでもベリアルは貫通するのではなく、剥がすことが可能な筈だ。

引き金にかかった指に力がかかる。このライル・バレルというパイロットにどれだけ苦しめられたか。黒幕ではないとはいえ、親が死んだ戦場においてそれなりの仕事をした。そして仲間を殺した。

「アンドラス！」

愛機の名を叫びながら引き金を引く。

しかし、ライルもただのパイロットではない。その人生で何度も死線を潜り抜け、アグニカ・カイエルの再来という、英雄の名を冠した二つ名を持つ男。

そして彼にもやらなければならないことがある。

彼女の夢、それを叶えさせるために同じ夢を持つアメリカを使って叶えさせる。その為にはアメリカがギャラルホルンの実権を担う必要がある。この戦いに敗北は許されない。約束があるのに、まだ死んではいけない。

「まだだあ！」

その瞬間だけベリアル目が紅に輝く。

ライルの叫びに答えるように一部故障していた筈のバランサーが急に吹き出してあり得ない機動で機体の体制を立て直す。そこにアンドラスの放った二発の弾丸が止まることなく、突き進む。しかし動きがゆっくりだ。もしかしたら時でも止まっているのかもしれないと思うほど。しかし身体もうまく動かない。頭だけが、脳だけが加速しているようだ。

なのでそれを受け入れることにした。弾丸に対して何かをしたところでこの距離ではもうなんとも出来ない。ゆっくりと弱点であるフレームの弱い点を隠しながら装甲が突き刺さったままの刀を差し出すように投げる。

ゆっくりと進むそれを見ると急に時間が戻ったようにベリアルが再び爆発による煙に包まれる。どうやら避けようとしたが完璧に避けられたわけではなかったようだ。コックピットに破片が飛んできたので首を軽く捻ってかわす。

しかしそれと同時にシールド付きライフルに刀が突き刺さる。

そしてそこから爆発して刀が飛び出す。

「しまっ——」

仕留めきれると気を抜いたユウは驚きながらも頭では次の行動を考えていた。

ライルならここで体制が崩れた自分を追撃しに来るだろう。刀も後から拾える。死んでいないのなら、突き進んでくる筈だ。

「ならこれだー！」

瞬間的に右のライフルを上げて、ロクに狙いをつけずに撃つ。それは、ベリアルベリアルの左目に命中して右目のカメラを散らさせる。そしてもう一発が左腕の肘に命中したが特に効果はなかった。

その時にユウは気付かなかった。違和感すら感じなかった。ベリアルベリアルの目の色が一瞬だけ変わったことを。

そして同時にバランサーバランサーの調子が悪くなる。

「潮時か」

ライルライルはそう言いながら爆発に飲まれた刀を流れるように掴み、同じく流れるように装甲を弾く。

機体の調子が悪い。大体はあの大剣使いのマッドナッグマッドナッグのせいだろう。次こそは仕留める。

そう心に誓いながらスラスタースラスターのガス量を一瞬だけ見て、下がった。

「待てー！」

当然追撃しようとユウはアンドラスアンドラスを駆る。先程はこれで終わりだなんだ言っていたのに急にこんなに変えてハイそうですか。と言えるか。ということは置いとくとしても力が持った敵兵に逃げられると困る。こちらの武装を明かされる可能性もあるの

だ。

そう考えていベリアルを追っていた時だった。

「ユウ！下がれ！」

アンドラスに急に通信が入ったかと思つたら急にベリアルが何かを避けるように動いた。そこに何かが通る。おそらく弾だ。

敵兵ではなかったので気にしていなかった。味方機がそこにいた。ピンク色の装甲に包まれたガンダムフレーム。名前はフラウロスという。

「下品な人！」

「酷い名前」

そう切り捨てながらベリアルとつばぜり合いをする白い機体。名前はバルバトス。確か整備長がルプスと呼んでいた機体だ。ソードメイスという大剣のようなメイスを刀にぶつける。単純な質量での攻撃に怯む。

「お、おい！下品な人はないだろ！」

「ユウは下がって。ここは俺たちで何とかするから」

すると何機かの鉄華団の機体が群がるように集まる。

しかし圧倒的な数の差の環境でここまで回せる戦力なんてどこから捻り出したのだろうか。

「あとオルガから伝言。補給ならこっちでしろ。だつて」

その言葉からなんとなく理解した。敵艦にいるラストル・エリオンを直接仕留めにいく気だ。つまり、特効のようなものではあるが鉄華団らしいと言えば鉄華団らしいと言える。

その為には僕を使いたいのだろう。そしてその為必要な事としてもうひとつ敵方の優秀な兵であるライルを今のうちに仕留めておきたい。鉄華団はそう考えているのだろう。

ふとイサリビという鉄華団の船を見ると先程より前に進んでいる。その後ろにはタービンのフュンフと鉄華団のホタルビがついていつていた。

そしてホタルビの隣と後ろには崩壊した戦艦が釣られている。無事とはいえないが側面にダインスレイヴが突き刺さって危険な状態だ。さしずめ盾代わりだろう。

「早くー！」

「感謝しますー！」

そう言つてアンドラスをフュンフの方向へと動かした。

視界の端で一機の獅電がスクラップにされていた。

「すぐに…戻るから！」

第67話 孤独VS家族

マッドナッグとの戦いにアンドラスとの戦い。自分ほどとは言えないが充分強者の部類に入る二人との戦いで流石にベリアルも疲弊する。それで補給に戻ろうとしていたところに急に撃ち込まれる。

下手ではないが上手くもない射撃だ。狙撃手の相手をして慣れてしまったのか軽く避けてエイハブウエーブを感知する。

ガンダムフラウロス。そこにはそう書いてあった。まさかエイハブウエーブを感知させれもアラートされないとは、まさかそこら辺のパーツを破壊されたか。

「くそ。めんどくさい」

そう毒づきながらもその射撃をかわしていると裏から高速接近してくる機体を確認。白い機体でコードはバルバトス。

列車でカルタを殺った奴だ。もう本人は忘れているだろうが少し怒りに任せた攻撃でもしようと思い、まずは攻撃を押しさえる。

「邪魔だ。どけ」

ライルもこの連戦には流石に堪える。少々怒りながらもバルバトスルプスのソード

メイスをガツチリと受け止めた。

「じゃあ死んで」

転じてバルバトスのパイロットも通信で返してきたが落ち着いている様子だった。流石に戦場に出ている兵士なのでこの程度で怯んだりするはずがない。

「断るー」

バルバトスのソードメイスを弾き、バルバトスに蹴りを加えると武器を振り上げたまま接近してきた獅電と聞いているテイワズの量産機を斬りつけてスクラップにする。

まだイプシロンと戦っていた時の兵は近づかせないか、近づいてもそれなりに対応出来ていた。

鉄華団がこの程度とは感じないがおそらく、このバルバトスが鉄華団一番の力を持つのだろう。先程の獅電のへなちよこな攻めを見れば明らかだ。武器を振り上げたままなんて無防備すぎる。

しかしマッドナッグとの戦いで群がってきたグレイズと比べると反応はよかったし、数もある。弾も簡単に避けられるレベルで被弾せずに切り抜けるのは難しくなさそうだが、一言で言うともんどくさいとなる。

「落ちろ」

そう言いながら囲んで来た獅電五機を弾き飛ばす。

全てが風に吹かれた紙のように舞って、吹き飛ぶ。ガンダムフレームの力があるからともとれるがそうだとしてもモビルスーツ五機を同時に弾き飛ばすというのは中々難しい。すぐに飛ばした機体同士がぶつかり、離れる方向が変わる。

その結末を確認せずにもう一機、スラスターとバランサーを切り刻み、操縦不能状態にして蹴り飛ばす。すると口を止めてないのに手を離れた風船のようにガスを撒き散らしながら普通のモビルスーツでは出せない速度で飛んでいった。

「これ以上はやらせない」

すると体制を整えてきたバルバトスがソードメイスを担ぎながら急速接近してきた。その鉄の塊を構えた状態からあまり型を崩さずに受け流すとそのまま飛ぶかと思ったらすぐに旋回して突っ込んできた。流星にいままでのパイロットとは出来が違うようだ。

「ならばなあ！」

二本の刀をクロスさせてソードメイスを受け流して攻撃を防ぐ。そして背を見せた所にまずは一撃。腰のスラスターを一部破壊して蹴り飛ばしてその方向に向けて100mm砲で追撃して、接近してきた獅電を破壊する。

「やめろー！」

「はっ！」

すると先ほどまで突っ込まずに落ち着いて当たらない射撃をしていたフラウロスが接近してきた。なにが起こったのを考える間もなく、先程破壊した獅電を器用に刀で吊り上げて盾にする。その瞬間フラウロスの動きが止まる。おそらく、そのパイロットと交流があったのだろう。もう死んでいるだろうが。しかし戦場でそれも敵兵の目の前で停止することがどれだけ愚かか思いさらせてやる。

「しまっ——」

「はあああー！」

瞬間移動したような速度で接近して回り込む。まずは左の一本で左脚を斬り込む。破片すらも飛び散らせずに綺麗に装甲が斬れて剥がれる。左足のフレームが悲鳴を上げるように曲がるがそれに気にせず、蹴りを加えて回り込み、用意していた右腕の一本で腰に一撃加えてパーツを破壊する。同時に動きが止まり、フラウロスの目、メインカメラに灯っていた光が途絶える。切れたコードが飛び出しフラウロスに当たって弾ける。しかし追撃の手を緩めることはなかった。

フラウロスのパイロットからすれば急に後ろから斬り込まれたかと思いきや、実は前にいたという手品のような動きに見えるだろう。しかしフラウロスの積んでいるレールガンが微妙な動きを見せた。凝視していないとわからないレベルではあったが地味に此方に向いたのだ。

その事実には驚くが対応は全く遅れなかった。なんとか勘で弾のタイミングは理解できる。それに対応してレールガンの弾を弾く。これが最大火力のダインスレイヴなら避けるしかなかったと呟きながらすぐにそのレールガンを破壊する。それを確認もせずには腰をまた二回斬りつけて関節を破壊する。

「があああ!!」

「シノー！」

すぐに間にバルバトスが入ってくるがその攻撃を流す。そして急接近してタツクルをした後、肩パーツに刀を刺して強引に曲げる。パーツは割れて掘ってあった鉄華団のマークが崩壊する。そのまま横に流れてバルバトスが怯んだ所に横から回し蹴りをする。マッドナッグの脚を落とした蹴りをマトモに食らってバルバトスがぶっ飛んだ。耐Gである程度は緩和されるとはいえ、ここまで大きくやられるとそれなりに不具合が出てくるのは当然だろう。

「あのときの借り！代えさせてもらう！」

「あつぶねえ…なあ！」

しかしバルバトスは止まらない。ソードメイスを強引に振って回り、単純にベリアルを叩き潰そうとしてくる。その攻撃はいなすだけなのに攻撃力が違う。

「まだ抗うか！」

叩きつけるのが本命のメイスの相手は得意ではない。しかし、それにも対応は出来るようにはしている。ソードメイスの打撃により、刀が折れたりしないように気を配りながらもその攻撃をいなす。

しかしバルバトスが振るつた一撃がベリアルに命中した。右肩におもいつきり当たった一撃でベリアルが大きく曲がり、バルバトスがソードメイスを担ぎ上げるように持ち上げて止めと言わんばかりに構える。

しかしその動きは実に単純だ。感情が乗っている。その若い攻撃を防ぐことは難しくはない筈だ。

「ナメるなあー！」

そのソードメイスの攻撃を右側から打って反らす。そして重心が傾いたところに蹴りを入れて、とりあえず距離をとる。

「三日月ー！」

そこに通信を割り込みながら何機かの機体が割り込んでくる。来たのはまた新しい機体だ。種類は三種類。ひとつは獅電でひとつはロディフレームの機体という事はわかる。白とオレンジ色に塗られていて、目立つ形をしている。それが三機。そしておそらく、通信に割り込んできた機体であろうページジュの機体が一機。これも見た事がある機体だ。反応ではグシオンとなっている。確か鉄華団が何処からか拾ってきたモビ

ルスーツと聞いている。二年前から鉄華団あるモビルスーツでバルバトスとツートツプを張るであろう機体。

「へえー。面白い」

ベリアルのコックピットで機体が危機的状態だというのに盛り上がったことに純粹に喜んだ。

グシオンがその場で止まり、四つの腕からライフルを取り出す。そしてそのすべてを此方に向けて撃つてくる。それを弾きながら回りに気を配ると何機かの獅電がバルバトスとフラウロスの保護へと走り、残りロディフレームの機体が後ろに回るのを確認した。

「初心者離れした機動……阿頼耶識か」

グシオンの弾を切るのを諦めて当たらないように高速移動をしながら後ろから攻めてくる機体を攪乱する。フラウロスのパイロットといいこのパイロットといい、やはり接近戦を仕掛けた方が勝率が高くなるのではと予測してしまうほど射撃が当たらない。元々阿頼耶識というのは射撃に対する補正があまり働かない。パイロット自身が射撃を得意としているのなら話は別だが訓練を受けていない場合は接近戦の補正の方が圧倒的に高い。理由は簡単だ。素人なら撃つより殴る方が強いから。

素人同士の戦いで片方が拳銃、片方が西洋剣を持っていた場合、大体の人間が拳銃を

持った方が勝つと言うだろう。しかし拳銃を持った方が初段を外せば西洋剣が勝つ。反動が強い拳銃なんて素人では一度撃つのが精一杯だろう。そして当たる確率なんてほとんどない。元々撃ちやすい部類に入る拳銃とはいえ、素人がはいよと撃てる代物ではない。

それは人型であるモビルスーツに言っても同じ。そしてその動きを人に限りなく近くするという阿頼耶識は特にその差が顕著に出る。

鉄華団が素人集団というわけではない。先程斬ったフラウロスもギヤラルホルンに突っ込めば一躍エースとなれる力を持っている。しかし、フラウロスが遠距離戦重視の機体というのが脚を引っ張っているようにも感じる。

どちらにしろ、ガンダムに乗っている時点で他の機体より扱いづらいだけで性能はそれなりに良いのはかわりないのだが。

「俺もあるー!」

しかし俺の背中にも三つの阿頼耶識が突き刺さっている。その全てが俺の鼓動に揺れ、神経に繋がり、圧倒的な力を生み出す。

ロディフレームの機体に飛び付き、刀を交差させてその後滑らせるようにさらりと装甲とフレームを同時に斬る。それを二度行い腕を破壊したあと、バックパックに蹴りを加えたまま、100mm砲を連射して破壊する。

「ぐっ！出力が：：アア！」

「デルマー！」

その機体を脚で組倒した後、急接近する二機を同時に蹴って離れた後そのうちの二機に二本の刀を巧みに使って滑らせて四肢を切断する。そしてもう一機が何かを投げたのでそれを避けるとほぼ同時に先程の機体と同じように四肢を切る。その後二機にそれぞれ脚を押し当てて接触回線を開いてもなんも聞こえなかった。

「チャド！ダンテ！デルマー！：：お前エエエエ！！」

止めとばかりに1000mm砲を乱射していると逆鱗に触れたのかグシオンが同じく乱射しながら急接近してくる。

実に感情的な攻撃だ。その感情の思う通りにグシオンが動いて、襲いかかるその様はまさに獣だ。ネズミだと思ったが実は獣だったようだ。

「その牙の扱いは下手だがな」

その攻撃を避けるのは簡単だ全ての攻撃にタイミングをあわせて踊るようによける。おちよくっているのだ。

射撃武器を持って自ら接近して仕掛けようと変わっている。俺の得意な距離にわざわざ入ってきた。相手からすれば先程解体したモビルスーツのパイロットを気遣っての行動だろうがすぐに自分がその中に入ることを考えていない。

冷静に相手をすれば難しい相手ではない。弾幕を掻い潜り、キックで銃を二丁へし折る。その銃を刀で破壊した後、離れていくグシオンを確認しながら100mm砲で視界をふさいでもう一度再接近してバックバックに刀を突き刺す。

「うおおおお!!」

グシオンのパイロットは雄叫びをあげながらサブアームの腕を振り回すが逆に負荷がかかり、悪くなるだけで意味がない。バックバックのほとんどはサブアームのケースのようなものだつたのだろう。装甲も妙なくらい薄く、パリッと割れる。

その破片を見ながら後ろには周りバックバックを本格的に解体する。アームを切り離し、スラストターを切り落とす。それは貯まっていたガスにて吹き飛びグシオンの体制を大きく変える。

「ぐああ!!」

「その牙を俺に見せろ!」

しかしサブアームはまだ動くようでも間接を強引に曲げてライフルで打撃を行う。接近して来て、撃つこともできず、結局はライフルで射撃。

獣のようにそのときの本能に従って動いている。しかしこの打撃も出力だけなら馬鹿にならない。気付いたときには装甲が割れてもおかしくないのだ。

「うおおおおああ!!」

「随分と直感的な攻撃だな。しかし、それが獣か」

離れたら離れたでライフルを乱射しながらバックパックが自壊していく。ライフルの反動に耐えられなくなったとは思えない。おそろく、自壊とはいったがほとんどが俺のせいだろう。

どちらにしろ解体することは変わらないが。

先程と同じようにキックで銃をへし折り、そのサブアームも刀で器用に分解する。破片はあまり出てこず、そのかわり分解されていくアームのパーツが宇宙に浮く。

「お前がアアア!!」

その後露出しているフレームを蹴り100mm砲を連射してグシオンを出来るだけ傷付ける。装甲にヒビが入り、剥がれ、フレームが見えてくる。

「投降しろ。すれば命は奪わない」

「ふざけるなあ!」

グシオンがその場で暴れるがマトモな武器を持たないモバイルスーツの攻撃が会ったところで向きを変えられる程度だ。あまり変わりはない。

殺すか。そう思い、刀を上げる。グシオンが離れようとスラスターを馬鹿みたいに吹かすが元々姿勢補助の為のスラスターではマトモに動けない。

「くそっ!くそっ!」

「だから投降しろと……いや、獣なら投降という考えすらないのか」

誰かが脳に薬を積めていると言っていたような記憶があるが彼らは違う。脳まで筋肉に汚染されているのだ。

そう自分で考えて笑う。なんて馬鹿馬鹿しい考えなんだと。しかしいままでの言葉の中で一番的を得ているような気もする。

では一思いに殺してやろう。

今思えば彼をここまで生かしたのだったってあまり意味はない。ただ、ガンダムフレームのパイロットが気になったただけなのだ。そして今、こうして暴れるとなると生かす価値はない。

そう思った瞬間何か不気味な感覚に囚われて思わずグシオンを蹴り飛ばす。まるで自分の身体に何かを縛り付けられたかのような。その不気味な感覚を感じた腕を確認したがなんにもない。ため息をつきながら機体の状況を見ると左腕に負荷がかかって間接が故障しているアラートが小さいながらも出ていた。

アンドラスの戦いでもマッドナツグの戦いでもこのようなレベルの損傷はなかった。いつ、何故ついた。

エイハブウェーブを感じるのには先程蹴り飛ばしたグシオンと数機の獅電。しかしその獅電がこちらを狙い撃って破壊したとは思えない。

おそらくマッドナッグとのつばぜり合いの負荷でやられでもしたのだろう。

なので右を振り上げた瞬間だった。何の前触れも無しに一機の獅電が接近してきた。何のカスタマイズもされてない一般機。強さも感じない。だと言うのに一機で接近してきた。

先程数でかかっても倒せなかったというのを見ただろうに。死にたがりなのだろうか。

「ハツシユか!?!止めろ!」

「若いな」

そう切り捨ててその獅電を蹴り飛ばしそれで離れる前に右でライフルを持っている手ごと斬る。そして追撃しようとしたその瞬間だった。その獅電があることかシルドを投げて来たのだ。

「——!?!」

「今だ!」

思いきりのいいパイロットのようで若い声を張り上げながらすぐに接近用の武器であるパルチザンを瞬時に展開してシルドを避けたベリアルを追うようにその得物を振るう。当たらない距離で。

しかし相手の意図を察したのでそのパルチザンの軌道に刀を合わせる。するとパル

チザンが伸びた。

イブシロンにもパルチザンを使うとパイロットがいて、彼もその伸縮機能を利用して。彼の相手はだいたいニールがしていた為、そこまで慣れていた訳ではないが、意図を察したのに防がない手はない。

刀を合わせてパルチザンを斬る。

するとそれに驚いたのか獅電が下がった。

「……判断力は良いようだ。しかし！」

獅電がその機体性能をフルに使ったところでベリアルに追い付けないわけない。そう思つてそのペダルに力を入れようとした瞬間だった。

「……後退信号？」

背後からアメリカの隊用の後退信号が上げられた。他のグレイズやレギンレイズが気にせず戦っているのはアメリカの隊では無いからだろう。

「命拾ひしたな。若いの」

アメリカに何の意図があるかわからない。しかし、彼女がそれを希望したということ。はもうそろそろ戦場が動く。丁度補給を受けたいと思つたところだ。

そう思い、ベリアルを獅電とは反対方向に駆った。

第68話　これしかない

アリアンロット。

フアフニールの中で何度かのモビルスーツ隊からの報告を受け取ったアメリカが違和感に気付く。すぐにラスタルの後ろに回り耳打ちする。

「鉄華団が退きました。おそらく体制を整えた後、此方に突っ込んでくると思います。どうします？お父様」

「ジュリエッタの隊を下がらせろ。数回に分けて補給をしながら艦隊前で待機だ」

ラスタルはそのまま何事もなかったようにオペレーターに指示を送る。それを見ながらアメリカは胸騒ぎを覚えてモビルスーツデッキに通信を行った。

「ガンダムベリアルへの補給の準備、お願いします。後同時にパイロットのメデイカルチェックを至急お願いします」

そして鉄華団もホタルビにモビルスーツを収用させて補給を取らせていた。

しかし状況は最悪だ。

イサリビの中でオルガとユージンとビスケットが作戦会議を行っている中に一人の

鉄華団団員が端末を持ちながら入って来る。

「団長！報告します！獅電合計八機が大破、一機が小破。ランドマン・ロデイ三機が大破。フラウロス、グシオンが中破。バルバトスが小破しました」

「そんな！三日月達は!？」

「機体が大破されたパイロットは…」

その団員はばつが悪そうに口を紡ぐ。仕方ないだろう。鉄華団はその力で圧倒的な力で数で劣る戦いも勝ってきたのだ。だと言うのに数で勝った戦いに負けた。

それもこの被害はベリアルというたった一機のモビルスーツによってもたらされた被害なのだから。

「一応チャドさん、ダンテさん、デルマさんは命に別状は無いようです。しかし傷は深く、今回の戦いではとても…」

「機体の状況は!？」

「バルバトスならすぐに出せるようです。グシオンとフラウロスも時間があればある程度の修理は出来るようです」

バルバトス、フラウロス、グシオン。鉄華団の虎の子の兵器だ。ガンダムという30年前の機体でありながらその性能は折り紙付きで鉄華団の力の象徴となっていた。

その機体がまだ戦えると聞いてひとまず安心するも、状況は良くならない。

「兄貴を殺った兵器のせいで全艦隊の半数以上が大破したつてのに……」

「どうするオルガ！ギャラルホルンから引つ張つてきた船を盾代わりに使えば接近することだつて……」

「それは危険だ！大体アリアンロッドと戦うつてことが無茶だつたんだ！」

ユージンが出した捨て身の意見をすぐにビスケットが否定する。今回の戦い。ビスケットは上手くオルガ達のブレーキをかけることが出来なかったが流石に特攻は許せなかった。

「じゃあこのままプチプチとやられていくしかねえじゃねえか！そんなの勝てる分けねえだろ！」

今の彼らには後ろ楯があるようでない。ここで逃げてしまえばテイワズは鉄華団を見捨てる。

本当にあの時に切られた企業となつてしまふ。

「だからつて！特攻したつて犠牲を増やすだけだ！」

「……」

ユージンとビスケットが激しい口論を繰り広げている間で挟まれながらオルガが目を閉じて考える。

確かにビスケットの言う通り、特攻は得策ではないのかもしれない。ここで突っ込ん

だところで相手に挟まれて落ちるだけかもしれない。そんな危険な賭け……出来るだけ乗りたくない。しかしユージンの言う通り、ここで撃ち合つてた所で相手がモビルスーツを出しきつてしまえば物量的に劣る此方は簡単に落とされる。マクギリスもレヴオルツ・イーオンも、残りのティワズ精鋭も。

決めなければいけない。それに三日月達が束になつても少しの間止めることしか出来なかつた。パイロットの対処法も……考えなくてはならない。

「オルガー……は一旦退いて……」

「退いて何処へ行くんだ？何処にも居場所なんてねえぞ。ここで勝たなきゃな」

絶望的な状態だがまだ諦める訳ではない。ここで勝たなければ完全に後ろ楯を失うことになるのだ。ティワズも、マクギリスも。

全てが無駄になる。そんなことはあつてはいけない。

例え、どれだけ汚い手を使つたとしても……。しかしその汚い手でもアリアンロッドに一泡吹かせるとは思えないのだ。

「ちよつといいいか？」

するとその指令室に誰かが入つてきた。

赤い髪を生やした黄色い目を持つ長身の男。額には包帯が巻かれている。

マクギリスに勝るとも劣らない美形でその綺麗な白い肌を持ちながら服の上からも

筋肉が見える。

「なあに。無理して勝とうなんてしなくてもいい。ようはあいつらに存在を認めさせるだけでいい」

「は？あんだ急に入ってきて何言ってるんだ？」

ノーマルスーツを着ているのとその外見から三日月達が拾った男だと推測できる。しかしその男も気絶レベルはいつていたと思つたが回復が速く、そして頭が冷えるのも速い。

「アリアンロッド司令、ラスタル・エリオンもその娘であるアメリア・エリオンも馬鹿ではない。特にアメリア・エリオンは今後モビルアーマーと戦闘する事を加味してここでの犠牲を出来るだけ減らしたいと思つている」

「モビルアーマー？」

「お前、マクギリス・ファリドの奴から聞いてないのか？テイワズ精鋭がモビルアーマーの天使長ハシユマルを討伐したと言う一大ニュース。あれで未だに厄祭戦は終わつていないと言う証明の意味は充分果たしたと言えるだろう」

ユウが願いだなんだ言いながら倒した化け物兵器だと思ひ出す。

確かマクギリスはアアラとか言うモビルアーマーを討伐するとき乱入してきた奴を確認したことで厄祭戦は終わつてはいないのではないかと推測していたがまさかあ

のハシユマルで充分な証明が出来たとは思ってなかった。

「とあるモビルアーマーを追っている組織がいてな。そこには俺の友人もいるんだが。そいつらも確認しているようだ。300年前百合の花園ヘブンスフィアから退却するモビルアーマーをな」

「んでそれが今回の戦いと何の関係があるんだ?」

百号やらなんやら知らない単語が次々に飛び出して頭が狂いそうになるが出来るだけ整理しながらも理解しようとする。しかし話が難しすぎて理解できない。

「お前、何聞いてたんだ? 耳あんのか? モビルアーマーはお前らもわかる通り馬鹿みたいな火力に優れたA Iを持つている。文字通り世界の光となって消えたヘイムダルが解体された今、誰がどうしてあれを止められようか」

「そこでモビルアーマーを討伐した実績のある僕らを使いたいということですか?」

「まあな。だから双方の意見は違うように見えて実は同じだ。モビルアーマーを対策するために組織の再編成をしたい。その為にトップになってギャラルホルンを一時的でも支配したい。単にマクギリスはお前らと言うカードを持っているだけだ」

冷静に返答するその男を睨む。

こいつは三日月達が束になっても倒せなかった相手にひけをとらない戦いをした最強のパイロットといってもいい奴だ。その頭だつてナマクラではない筈だ。

しかしそれはつまり、戦争をする必要がないのに始めたと言う事。単なる子供の喧嘩ならまだしも、犠牲が出ていると言うのに。

「んじやお前はそれを知ってこの戦争に協力してんのかよ！狂ってんじやねえのか!!
ああ!!」

「待ってユージン。すみません。失礼ですがお名前は」

ユージンも流石に怒れてきたようで掴みかかる。しかしその男はそれをかろく払いのけてユージンの追撃を軽くかわす。

その動きはとても慣れていている。そしてその背中に阿頼耶識があるかないかを確認したがそれは無かった。

また繰り返し返そうとしたユージンをビスケットが必死に止める。

場の空気を悪くしながらもその男は全く悪びれずに手を降りながら答える。

「ユダ。ユダ・カイエルだ。好きに呼べ」

「んで、あんたは戦いたいだけの戦闘狂か？それでもなければなんだ？しなくてもいい戦争に協力して俺たちの家族を無駄に死なせた。もしそれが戦いたいだけだったら、その落として前、しっかりとつけてもらわないと困るが」

片目を閉じながらそして殺気を放ちながら威嚇する。

しかしユージンの攻撃を軽くかわしたような人間がその程度の威嚇が通じるわけも

なく、そして威嚇を威嚇と思うことなく軽く話す。

「はっ。言ってくれる。俺が単なる戦闘狂だと？またまた。冗談でも辞めてくれ。戦う事しか能がない男どもにそういうられる日が来るとは。先祖に笑われそうだ」

「随分と上から目線だな」

「それは許せ。お前らのような相手と話した経験は少ないんだ。礼儀ができる相手ならそれ相応の礼儀で返すさ」

「嘗めたような口調でユダは話ながら何処からか端末をさつと出してなにかを打ち始めた。

何も殺気を感じない筈なのだがそのオーラに此方が負けそうだ。人間として最悪の恐怖を感じる相手。

「俺は、この戦争……必要だと思っている」

「ここで戦争すれば俺たちが死ぬかもしれないねえのにか？あんた正気か？戦争が必要だと？」

戦いによって資金を得て生活している鉄華団でも戦争が必要だという感情はない。敢えていうなら稼ぎ方としてだが、だからと言って戦争を起す馬鹿はいない。

「出来レースとは言わないがここで勝者が出ることがこの戦争で一番重要なことだ。セブンスターズとか言う昔の威光の欠片もないじじい共ではなく、力を持った権力者が

ギヤラルホルンを支配する。どちらともモビルアーマーを驚異と感じているのは当たり前だ。そして編成したギヤラルホルンをモビルアーマーにぶつける」

ユダがまるで他人事ように喋る。何処にも感情が籠っていない、棒読みのように読んでいる。

しかしどちらでもいいのなら今から白旗を上げて降伏するはずだ。しかしそれをしてないということはマクギリス側、もしくはラスタル側に何かしらの感情が入っていると推測される。

「んとまあとにかく、敵を無理して倒そうなんてしなくてもいい。ただ、敵大将の船のど真ん中に銃を構えて佇むだけ。それで終わりだ」

「それでも、危険なのは変わらないですよね」

先程まで黙っていたビスケットがユダの目の前に出ていく。言葉から臆病なようにも見えなくはないがこの男の目の前に出ていけるとは本当に肝っ玉が座っている。

目の前に立たれるだけで此方の背中は汗で濡れる。

「…そうか。お前はそういう奴か」

ユダは低い声でそう言ってビスケットを睨む。その視線が此方に向いているわけではないのに身体が震えだした。勿論睨まれた本人であるビスケットも分かりやすくカタカタと震える。

殺されると思ったわけではない。なんなのかわからない。しかしこいつは危険だと頭の中の本能が告げている。

「鉄華団とは勢いになった小企業だと思っていたが……頭が動く奴もいるのか。しかしその頭が脚を引つ張ることもあるのを忘れるな。デメリットを考えすぎて踏み込めない奴は結果を出せない」

「だからと言って……アリアンロッドの数を考えれば僕たちが勝てる可能性は低いです。ですので……」

「だから、お前耳あんののか？勝つ必要はねえよ。あつ、これマクギリスには言うなよ。怒られそうだ」

こいつとマクギリスは交流があるのかわからないが笑いながらユダは口の前に人差し指を立てる。おそらく何かのジェスチャーだろうが何を意味するのかわからない。

マクギリスとの交流はおそらくあるだろう。あれだけ強いパイロットだ。おそらく三日月より強い。そのようなパイロットがいたことに驚いたがマクギリスなら知っていてもおかしくはない。

「では、アリアンロッド相手に何をすれば終戦出来ると言うのですか？モビルスーツで接近するなんて普通に狙うより難しいですよ」

「うーむ。俺は、そうしようと思ったんだけどなあ。アリアンロッドの力は半端じゃな

い。しかもお前らも結構な痛手を背負っている。その状態で今、ライル・バレルとか言う二つ名で先祖の名前を使っているような不屈き者をどうするか……だか？」

「先祖？」

ライル・バレルという男は知っている。あの黒いモビルスーツを動かしているパイロットで幾つもの死線を潜り抜けてきた鉄華団のメンバーであるビスケットやオルガをビビらせるレベルの覇気のような物を持っている男であるユダ、鉄華団最強のパイロットである三日月を倒した敵。しかしその男の2つ名は知らない。そして目の前にいるユダも今日始めて知ったのだ。先祖の話など知ることもない。

「まあ、先祖の話はおいおいするでしょう。とりあえず、フアフニールに接近する。あいつらは今失うには惜しいからな。半殺し程度に止めておけ。最悪ライル・バレルは此方に引つ張ってくれば俺の部下達が何とかするだろう」

「賭けに出るのか」

「それしかねえぞ。いいか、こんなときにビビっているようじゃ勝利はねえぞ」
ゾクリと背中嫌な物を感じた。

もう覚悟は出来ている。少しでもでかくなるために、斬った張ったの世界から離れるために、決めたことだ。

すると近くに敵モビルスーツの反応を感じた。レギンレイズが三機。此方に接近し

てきた。

此方がモビルスーツを引つ込めたからと言って彼方が手を緩めてくれるわけではないのだ。

「覚悟は出来たか？」

ユダがそう言った瞬間船が揺れた。直撃だ。あまり長い時間こうすることは出来ない。

もうこれしかない。成功の確率は少ない。ほとんどないだろう。失敗の確率の方が高い。しかし0と1は大きく違う。決断するときなのだ。鉄華団団長として。

「……くっ！ユージン！今すぐホタルビに戻ってホタルビにかけたギャラルホルンの船とモビルスーツ隊を寄越せ！」

「わかった！」

ユージンが司令室から出ていったのを見ながら艦長席に座る。

これしかない。これしかない。そう心の中で繰り返しながら命令を送る。

「ホタルビから受け取つたらその船を盾代わりにしてギリギリまで接近する！フラウロスとグシオン、バルバトスを出撃準備！他のモビルスーツ隊を船に着けて露払いをさせろ！」

「りよ、了解！」

敵の船に突っ込んでそれなりの損傷を与えてそして帰ってこれそうな三人のパイロットのモビルスーツの名前を出す。

ユダは銃を構えるだけでいいと言ったがそれだけでは不十分だ。何処かで撃たれる可能性もある。

そう思いながらユダの方を見るとそれでいいと口を動かして司令室から出ていった。

おそらくユダはわかっているのだろう。ただ、近くにモビルスーツを寄せて終わりが正解でないことを。三機のガンダムフレームの名前を出したのが彼にとつての正解。

「ビスケット」

「もういいよ。その代わり必ず成功させるよ」

「ああ。負傷者をホタルビに移せ！ホタルビが囷として使えるかわからねえがやってや
る」

二年前地球にて使用した手だ。負傷者等を囷としてギャラルホルンの目を引き、その間にモビルワーカーで仕掛けた。

今思い付いた手だ。穴はあるかもしれない。しかしこれしかない。

「マクギリスの方に連絡を取れ！もう覚悟は決めたってな！」

イサリビから出て仲間誘導されながら近くのハーフブーク級の戦艦に乗り込む。ハーフブーク級、ヘイムダルがいた時代から運用されている戦艦だ。

その中でも黒と赤に塗装された戦艦。メガセリオンの愛称で呼ばれる戦艦の中に入り、ため息をついた。

壁に凭れる。すると近くの兵士が声をかけてくるがその声もあまり耳に入っていない。

「わりいな。サイオン、もう限界だ」

あんだけ大きく言っておいて、あんだけギャラルホルンに恨みがあつて。

一人の男に負けて、血の気が多い男共に完全勝利はしなくてもいいと弱気な事を言うてしまった。

「後は……頼む……」

ゆつくりと視界が黒くなっていく中でその意識を手放した。

第69話 再戦 獣VS悪魔

「行くぞおめえらー！」

「おうー！」

団長さんの掛け声でハーフブreek級がイサリビを引つ張る。正しい言い方をするとイサリビからハーフブreek級を動かして盾にしている訳だ。

「無茶苦茶だ」

「でも実際地球に降りる前も同じような事をしている」

イサリビの上でアンドラスの最終調整を終えて今の鉄華団の判断をそういうと隣で同じく最終調整を終えたアジーが返答する。

「それに、無茶苦茶しないと駄目だから」

「…そう」

ラフタがそう言いながら出撃して隣に降り立ったのを確認してライフル付きシールドを構える。

するとアジーとの通信越しに男の声が聞こえる。その声を聞いて少し安心しながらもため息をつく。

「兄さん、なにやってんの」

戦えないから整備士として出ているのでこんな時にイサリビに移ることはないだろう。しかしエストは包帯を巻きながらも笑顔で戦いそうな気がしてきた。

戦闘は駄目だとドクターストップがかかっていると言うのにそれでもまだ無理をしようとする。

「ちよつと頭に血が昇ってな」

「マジで辞めて」

そう言いながらもイサリビは止まらずだからといってアンドラスで抱えて戻るわけにも行かずそのままにするしかないと理解してまたため息をつく。

その瞬間味方機以外のエイハブウェーブを確認した。

「来たぞー！」

「任せて！」

瞬間的に狙いを定めて撃つ。その機体はコックピット付近に火を一瞬だけ吹いて止まった。もし運良くパイロットが生き延びてもコックピット内の酸素はもうない。ノーマルスーツの中の酸素で此方を襲えるとは思わないし、まずまずノーマルスーツがその日に耐えられるとは思えない。

そのままイサリビは進んでいく。

実際戦艦とモビルスーツの移動速度の差は圧倒的なのでモビルスーツが追い付けない訳ではないのだが。

「ライル、準備は出来ましたか？」

「ああ。いつでも行ける」

チャックを上まで上げて、ノーマルスーツを再び着る。

モビルスーツデッキの手摺に凭れながら浮かせていた栄養バーを口に放り込む。

その後、ノーマルスーツを着る前に言われたことを思い出す。

——貴方のメディカルチャックをした医師からです。どうやら左足と脳の神経が少し無くなってきているようです。何が原因かはわかりません。現状日常生活に何の問題も無いですがこれを繰り返したらどうなるかわかりません。最悪もう二度と歩けなくなる可能性だってあります。それは……ギヤラルホルンを辞める貴方が負うべき傷ではない筈です。ですのでベリアルでリミッター解除は控えてください。

そう、悲痛な声で彼女はそう言った。左足と脳の神経が一部消えている。どうやった

らそうなるのかは不明らしい。どうせ理解も出来ないものであろうが。

ガンダムには悪魔がいる。それは頭の片隅に残っている。ギヤラルホルン必読のアグニカ叙事詩に書いてあったのだ。しかし、こうなるまで完全に忘れていた。どうせ脳の神経は阿頼耶識の影響だろう。しかし左足の神経は……ガンダムが行ったこと。何故、どうして。それは全くわからない。まさか医者やアメリカがこんな極限状態で嘘をつくとは思えないので受け止める必要性がある。

アメリカの言葉からするにベリアルのリミッター解除をどこかで行ったと言うことだ。

思い出す点はいくつかある。しかしどれもここだと言う確証がない。メデイカルチャックは戦闘前にも行ったため戦闘で無くなったのは確実。となればもうガンダムにやられたとしか考えられない。

アンドラスのパイロット……ユウ・タービンもこのようなことで悩んでいたりするのだろうか。いや、おそらく無いだろう。何度か彼とあつてはいるが阿頼耶識を確認していない。

「……ライル。おそらくマクギリス・ファリドもこの鉄華団のアタックが終われば退くでしょう。そうしたら我々の勝利は確実です」

「他の艦隊も特攻してくるかもしれないぞ」

「おそらくそれはないかと。それに最悪の場合を考えています」

マクギリス・ファリドは大胆な男だが流石に艦隊での特攻は考えない。では、単機でなら……とまで考えたがそこまで追い込まれている訳ではないのでそれは無いだろうと片付ける。

それはともかく、アメリカの読み通り鉄華団は特攻をしてきた。モビルスーツの数すら此方が上回って……だからこそかけたんだろう。

「誘い込んだのか？」

「それはご想像にお任せします」

「……」

おそらく表情からハズレ……だと思われる。確かにダインスレイヴが一気に潰させるなど普通は考えない。

それを考えていてなら他の部隊で誘導させるなど普通なら考えない。さしづめその可能性はあるだろう程度。つまり、ここで部隊を動かせば逆上して特攻する可能性も頭に入れていたと。

考えてみれば鉄華団が特攻を仕掛けてくることに関してアメリカに特に利点はない。最悪自身が撃たれる可能性だってあるというのに。そこまで危険視する程鉄華団は化

け物集団ではない。少なくともあのバルバトスのパイロットを除けばアメリカ隊の他のメンバーの方が十分強い。アリアンロッドとして考えればわざわざ誘い出せば運悪くバルバトスやアンドラスに狙われる可能性があると考えれば逆にデメリットの方がデカイ。

「…ライル」

「なんだ？」

準備も終えたのでアメリカも早く司令室に戻った方が良いだろうに。未だにこんなところで話している時間も双方には無いだろうに。しかし、この言葉がやけに大切な言葉に聞こえた。

「もしこの戦いに勝利して、これが終わったら何か食べに行きましょう。エリオン家の焼き肉、食べさせてあげますよ」

しかしその言葉が彼女らしくなかったのでおかしく思えてきた。

要するに彼女はもし勝てたら奢るから勝てと言っているのだ。奢るだなんて。彼女の口から出てくるとは思えなかった。そんなみみっちい事ではないが命令さえすればついてきてくれる仲間がいたので奢るといふ発想がなかったのだろう。まず行くような店もない。

しかしエリオン家の肉はギャラルホルンでは相当有名だ。食べたことはないがなん

でもくそ旨いらしい。

それを一度の勝利で奢るなど太っ腹にも程がある。

「おいおい。それは全額そちら持ちだよな？金、大丈夫なのか？」

「セブンスターズのお金をなめないで下さいたかが……」

「おい聞いたかおめえら！勝てたらアメリカが飯奢るつてよ！」

これは儲け話だ。どうせ去るのなら少し位取っていつでもバチは当たるまい。それさえ分かれば充分だ。しかしいまレコードが無いため、実は嘘でしたやそんなこと言いましたっけ？なんてなればどうしようもない。しかしここまで大声で叫ばれては今更変えるのも気が引けるだろう。

「……」

当のアメリカは驚いたのかいままでに見たこのないような表情で引いている。物静かだたまに毒を吐く彼女らしくない。まるで普通の女の子のように感じた。流石に大声で叫んで逃げ場を無くすのは異端だろう。しかしその仕草が面白くて肩を叩いてその場から離れた。

「さあ、ラストと行こうか。ユウ・タービン」

これだけ大きな賭けなのでおそらく鉄華団のメンバーだけ、と他の兵は思うだろうがおそらく違う。読みが正しければ……おそらく自分がライバルと認定した少年が来る。

彼との最後の勝負となるだろう。であれば自分の力で振り伏せる。最初から最後までそうしてやる。

そう心に決めて、ベリアルに乗り込んだ。

その頃戦場では、アメリカがラスタルに情報を流してラスタルが出させた対鉄華団用であるジュリエッタの隊がイサリビを落としに行っていた。

「それ以上はやらせない!」

ソードメイスで二機同時に葬ったバルバトスルプスに対してレギンレイズ・ジュリアが接近してジュリアソードをソードメイスに重ねる。

「ちっ!」

「私は!ラスタル様の剣になるために!」

レギンレイズ・ジュリアはそのまま止まらずに連続で攻撃を仕掛ける。重い一撃で仕留めるバルバトスルプスとは違う戦術。しかしライルのそれを見てしまった三日月にはその剣はとて遅く見えた。

対応できない速度ではないのだ。腕部200mm砲でレギンレイズ・ジュリアを牽制させるが、その程度では遅くならず、そのまま正直に二機の機体がぶつかる。速度を重視

したレギンレイズ・ジュリアと重きを重視したバルバトスルプス。ツインリアクターの性能も相まって出力的にどちらが勝つかは明白だった。

バルバトスがレギンレイズ・ジュリアを弾き飛ばして蹴りを入れる。

レギンレイズ・ジュリアが弱いわけでもバルバトスルプスの性能が良すぎるわけでもない。言うならレギンレイズ・ジュリアの方が出力以外では勝っているのだ。ではなぜ差が開くのか。それはパイロットの差。いくらワンオフ機といえど乗り手がそれではそこまでの力を出せない。阿頼耶識をその背中に埋め込んで人間を辞めている三日月と人間のまま信じる上司の為に武器を振るうジュリエッタ。戦場ではどちらが強いかは明白だった。

——もしそれが一対一だったらという条件付きだが。

通常とは違い、肩パーツに二本の線が入ったレギンレイズ二機がバルバトスルプスに向けてライフルを放って牽制する。レギンレイズジュリアに集中していたバルバトスルプスはそれを受け入れてしまう。もしその二機とバルバトスルプスが対面しているのならバルバトスも勝機があっただろうがレギンレイズジュリアの介入によって意識が反らされてライフルの射撃に当たって腕部200mm砲が破壊された。

「ハイ、つら……強いな」

通常とは違う肩にマークを入れたレギンレイズ。肩パーツ以外は通常機と何ら

変わりもない。

しかし乗り手は異常だった。ロークスコロニーでの犠牲を考えてアメリカの指示の元ライルを分析して作られたパイロット育成プランにて訓練を行ったモビルスーツ隊。

その育成プランを完了したメンバーはそのレギンレイズに青の線を入れている。結果アメリカ隊のモビルスーツ隊メンバー全員がそれを完了した。

「ジュリエッタ機の援護だ」

「了解！」

その機体がバルバトスルプスを挟み込むように接近してライフルで動きを止める。バルバトスルプスはソードメイスでいくつか弾くが物量によって押されていく。

その瞬間三日月も理解した。これはヤバいと。

しかし、洗礼された動きで二機のレギンレイズはバルバトスを押さえ込む。その2つの得物で攻撃するのではなく、双方から押さええたのだ。腕に負担がかかる。

流石のツインリアクターといえど二機のモビルスーツに押されてはうまく動けない。

そこに立ち直ったジュリエッタが飛び込む。ジュリアソードをバルバトスルプス目掛けて振り下ろす。

「防御姿勢」

「…っ！」

突如聞こえた音を頼りにコックピットの中で身を固める。この声は合図だ。なぜこの瞬間なのかは不明だが。レギンレイズ・ジュリアはコックピットの中で身を固めていると知っているわけなく、馬鹿真面目にそのまま突っ込む。しかしそれとほぼ同時にレギンレイズ・ジュリアのスラスターが横から撃ち抜かれて爆散した。反動で吹き飛ばレギンレイズ・ジュリア。

「狙撃!? あい…!」

「今だっ!」

それを確認した二機のレギンレイズが一瞬、出力を弱めた。バルバトスルプスはそれを見逃す筈もなく、二機を一斉に弾いてソードメイスを握り直す。そしてスラスターが半壊したレギンレイズ・ジュリアをソードメイスで殴って追撃する。追撃をもろにくらい、大型シールドにひび割れが出てくる。

「なんだ…この馬鹿力…!」

二機のレギンレイズはレギンレイズ・ジュリアをバルバトスから離すと同時にグレネードを乱射、バルバトスルプスを下げた。飛び散る破片と爆炎の視界が晴れるとレギンレイズ達はその場から離れていた。

逃がすまいと動こうとしたがオルガの指示はあくまで露払いなのでこれ以上離れると危険だと判断してその場で止まる。

そしてイサリビの上で狙撃を行った盾付きのライフルをつけている純白のモビルスーツを視界に入れて位置を確認しながら他の機体を見つけて攻撃を開始しようとする。ラスターからガスを噴射した瞬間だった。

一瞬アラートが鳴ったと思ったら機体が弾き飛ばされてイサリビに叩きつけられた。少年時代の習慣のお陰ですぐに回避運動を本能で始めた為、大破まではいかなかったが決して弱くはない衝撃が耐Gを通り越して身体に来る。

「ぐあっ！」

しかし身体は鍛えている。機体の損傷も少なかった為、敵の位置をメインカメラで探す。すると大破した獅電の破片が此方に当たる。その方向を見ると黒いモビルスーツが二機の獅電のコックピットに刀を刺していた。

「致命傷を避けたか。あの一瞬で」

そのモビルスーツはなんなのかという事はあまり考えずに敵だと片付けて突っ込む。一瞬だけスラスターをフルに使い、そしてガスを止める。相手から見ると瞬間移動させたように感じさせる技だ。それを何度か見た外観と本能で成功させた。一瞬にして距離を詰めてその黒いモビルスーツに向けてソードメイスを振るった。

しかしそれは吸い込まれるように追隨したパイロット亡き獅電に当たり、その機体を大破させた。

そして、もう一機、パイロット亡き獅電がバルバトスルスに命中。敵パイロットはこちらのモビルスーツを鈍器として扱ったのだ。

「——っ!!」

少なくとも怒りを感じた瞬間。

殺気を感じて本能のまま、その殺気から機体を守るようにソードメイスを重ねると火花が鳴り、衝撃が来た。

しかし次は上手く受け止めている。しかしそれは一度ではない。流れるように次の一撃、そしてまた一撃と来た刀を受け止められずに腕部の装甲にヒビが入る。そのヒビに刀が刺さり、何かが砕けた。

高速で降りかかる刀をさばく力はバルバトスルスにも三日月にも残っていないかった。

角を折られて蹴りで離される。蹴りの衝撃も普通よりは重かったが最初の吹き飛ばしよりは軽かったので出来ていなかった呼吸を離れた瞬間に開始する。

アンドラスは……と最後の希望をかけるとアンドラスは横で二機のレギンレイズを追い払っていた。

「三日月!」

しかしグシオンリベイクフルシテイがライフルを片手に持ちもう片方にはハルバードを持って急接近してきた。サブアームを失い、変わりに簡易なバックパックをつけたグシオンリベイクフルシテイ。その機体が黒いモビルスーツに勝てる要素は0。

「遅いな」

何かしたらの回線。わざと聞かせたのかはわからないがそのモビルスーツのパイロットがそう呟いた瞬間にバリなく、綺麗に切れたグシオンリベイクフルシテイのライフルが横をすり抜けた。

「明弘！」

すぐにバルバトスルプスを駆ってグシオンリベイクフルシテイに追い付き黒いモビルスーツの目の前に出る。

一瞬でライフルを破壊されたがまだグシオンリベイクフルシテイには切り札がある。腰パーツの後ろにかかったシールド。それはペンチの形に変形することができて捕獲さえしてしまえば確実に潰すことができる。

「すまねえ。三日月、囧になつてくれるか」

「いっよ」

シールドを持ったグシオンリベイクフルシテイではなく、極めの一撃が決められる可能性が低く、尚且つ本能のままとはいえ、黒いモビルスーツの攻撃をある程度防御でき

る三日月を囿に使う。

これしかなかった。

話し合っているうちに黒いモビルスーツは獅電を落とし、前の船のブリッジを切断した。その間にグシオンリベイクフルシティはパンチを展開して広げる。

完全にやりますよと言っているような物だが昭弘はそのスピードを捌くことはおろか見ることが出来ない。賭けるしかない。相手がバルバトスルプスを弾いたその瞬間。それしかない。そして、その時が来た。殺気を此方に向けてきたのだ。

「来るぞー」

その瞬間バルバトスルプスは防御姿勢をとる。するとバルバトスルプスは風に吹かれた紙のように飛んだ。黒いモビルスーツが刀で弾いたのだ。

しかしその弾いた瞬間、黒いモビルスーツの動きが止まる。

「オラアアア!!」

雄叫びを上げながらその機体に突っ込む。黒いモビルスーツのコックピットを捕らえるまでに時間はかからない。黒いモビルスーツがゆっくりと刀を動かしたが遅い。

グシオンリベイクフルシティがパンチを勢いよく締めた。先程ことごとくやられていった鉄華団の思いも込めて。打ち碎かれたプライドの恨みも込めて。

黒い何かが飛んでグシオンリベイクフルシティに当たった。

普通ならどうせモビルスーツの装甲が弾けて当たったりしたのだろうと気にしないだろうしかし、黒い物はそのモビルスーツの装甲ではなかった。

刀によって綺麗に斬られたペンチだった。

刀をモビルスーツの装甲につけて、接触回線を開かせる。そこから出てきたのは金髪のおっさんだった。

「悪くは無いが、甘いな」

そう言つて一瞬だけ笑顔になった。最後の切り札が呆気なく破壊されたことと、それでも余裕そうな事に気をとられていると両腕が宙を舞った。

「あ」

何も出来なかった。蹴られた機体の中で呆気にとられながらグシオンリベイクフルシテイはイサリビから離れていった。

第70話 特攻―賭け―

鉄華団のありつたけのモビルスーツがイサリビを守る。イサリビもモビルスーツより遅いとはいえ、戦艦とは思えない速度で動いている。しかし

「押されているな」

圧倒的な物量に押されだんだんイサリビへの直撃が多くなってきた。しかもアリアンロッドはまだ切り札が残っている。ここで出さないといいことはやられた可能性もある。しかし団長に聞けば罨でも罨ごと噛み砕くとザ・脳筋な事を言い出した。今回は自分より団長さんの方が立場的に上なので仕方がない。

狙い撃つだけだ。

ラフタとアジーが当たっているレギンレイズを撃ちながら切り札を出す瞬間を待つ。レギンレイズはコックピット辺りに爆発を起こしてそのまま減速していった。

「ゆーちゃん!」

ラフタがまた一機葬りながら接近してきた。見る限り損壊しているわけでも弾切れしたわけでもない。となると答えは限られてくる。

「ここは大丈夫だから反対方向よろしく!」

そう言われて反対方向を見ると鉄華団のエースであるバルバトスさんが何処かで見
たモビルスーツと戦っていた。大型のシールドに細身、緑色でトゲトゲしたモビルス
ーツ。

あいつには見覚えがある。大切な物を失った戦いで敵として出てきて、そして直接的
な被害はあまり出さなかったものの、死ぬ原因となったモビルスーツ。

母さんを苦しめた奴だ。思い出してみれば動きも似ている。奴だ。頭の中が煮え
たように熱くなる。まだ生きていたのか。あのときはアンドラスに暴走を抑えられ
たからといって止めはさした筈なのだが。やはり甘いようだ。

「わかった」

確かに彼女だつて生き抜く為に戦ったのかも知れない。しかし、家族として母親が死
ぬ原因となったものを見過ごしたくはない。僕だつて人間だ、恨むし妬む。だからその
感情を内に隠しながらも戦う。

それが狙撃手だ。それが出来てこそ狙撃手なんだ

そう思つてバルバトスの邪魔にならないように通信を繋げる。普通ならタッチパネ
ルをなんとかしなければならぬが、此方にはアンドラスがいるため、そこら辺の操作
は簡単だ。

するとどこからやってきたのかレギンレイズが二機、回りながらバルバトスに接近し

ていく。

しかし周りながらもその肩に青に線が二本入っているのを見た。あんな風に付けられるのはエース機のみだろう。アリアンロッドは大きいからそんなカスタムもし放題だろうと思うかもしれないが簡単なものとは言え、少ない数のみやってしまつては同じもの量産する量産性に欠ける。しかもあのカラーのレギンレイズをまだ見ていない。

おそらくアリアンロッドでも選りすぐりの兵だ。

試しにコックピットを狙つてみようとするとその機体はバルバトスの方へと急いで向かった。

気付かれた。それは違う。元々僕の売りは誰にも気付かれないことなのだから。それはライルと戦うときだつてそうだった。彼はいつも僕が狙っていること前提で動いているのだ。だから止めどなく動いて攪乱する。

ライルがそこまでやるのにエースとはいえ、一端のパイロットが出来るはずないのだ。

「エイハブ・ウエーブか。やり手だな」

アンドラスのエイハブウエーブを探知してそれに当たらないように動いているだけ。文字だけではじつに簡単な事だがこんな乱戦をしている最中にエイハブウエーブを見

ることが出来るのはエースの証拠。

そう思いながらも適当にそこら辺をうろついていた一機を撃ち落とすとした。

普通ならこうなるのだ。戦闘は当たり前だが自分だけではない。相手がいるのだ。しかも相手だけではない。気温、気圧、風向き、天候、障害物……等など多数の状況により成り立っている。それを見るのは狙撃手として必要なスキルの一つなので自分もあのパイロットより持っている自信はある。しかしそのパイロットも普通以上に持っている。それに加えてダインスレイヴという兵器を全滅させたとはいえ、たった一人の兵、そのモビルスーツを狙撃手として危険視する。そこから先程のエースパイロットの情報力も伺える。

だからといって逃がすという訳では無い。逆だ。それだけ強いから逃がしては姉さん達に影響が出る可能性がある。それにバルバトスさんをここで死なせては後々面倒だ。

レギンレイズ2機がバルバトスさんを拘束する。バルバトスさんでも2機の相手を押しつけるのは難しいだろう。援護するしかない。強い相手に巡り会えた事を喜びながらも落ち着いて狙う。それも時間はかからない。ただ危険だと思ふ原因を取り除くだけ。

「防御姿勢」

バルバトスさんに言うとその瞬間に機体が揺らぐ。それを認識する前に引き金を引いた。弾を大型のレギンレイズに当てるのはそこまで難しい問題でない。あの時は正気ではなかったとはいえ、苦手な接近でなんとか出来た相手なのだ。

大型のレギンレイズのバックパックに弾を当てるとその瞬間に拘束を解いたバルバトスさんが大型のレギンレイズに追撃をする。大型のレギンレイズの盾が崩れてバルバトスさんから離れていく。

どうやらここは大丈夫なようだ。

もしレギンレイズのエースが本当に2機のみだったらそこまで問題はなかった。そしてやってしまった大きなミス。それは狙撃をした後にバレた可能性が高いというのに移動をしなかったことだ。

移動もせずにまあ大丈夫だろうで、切り捨てた。それが大きな問題だ。

一瞬だけ激しい頭痛を感じた。この感覚はアンドラスからの反応。そしてそれを考えているとアラートが鳴る。

反射的にシールドを構えるとそこにグレネードが当たり爆炎を上げながら衝撃が来た。勿論耐Gが働いているのでそこまで重い訳では無いが位置を知られたこと、そしてそこに撃ち込まれたことに驚く。

爆炎で視界が隠されながらも撃ってきた機体を確認する。先程のレギンレイズと同

じ肩パーツに青い二本の線が入ったレギンレイズ2機。先程の状況判断と言い、エースであることは間違いない。

「やられたー！」

グレネードの嵐が収まったのを見計らって1度そこから離れる。撃ってきたレギンレイズ2機の位置を再確認しながらライフル付きシールドを調べる。一応、爆炎などで銃身は歪んではいないようだ。こんな所で銃身が歪んでしまうと泣くに泣け無い。それに今からこいつらを倒すと考えると難しい。僕はライルというアリアンロッド側の切り札に対して対抗するための最後のカード。エース機とはいえ、ここで長い時間は立てられない。

「アンドラスー！」

愛機の名を叫びながらそちらへと突っ込む。格闘戦で勝てるなど毛頭も考えない。勿論ここで命を投げ出すつもりもない。2機のレギンレイズはまるでこちらがそう来るのを分かっていたように一瞬も遅れずに刃を振るってきた。それをシールドで抑える。

完全に先程のバルバトスルプスと同じ状況となった。バルバトスルプスという格闘に重心を置いたカスタムを行った機体が切り抜けられなかったのにアンドラスという射撃に重心を置いたカスタムを行った機体が切り抜けられるわけない。

普通ならそうだろう。パイロットで考えてもバルバトスさんと僕で格闘戦を行ったらバルバトスさんが勝つ。それは当たり前だろう。阿頼耶識システム自体が格闘線に強くなりやすいというのもあるが。

しかし完全に同じになったと先程言ったがそれは外見のみで実はこの押さえられている状況は実は先程のバルバトスルプスが押さえられている状況とは違う。先程のバルバトスルプスは押さええる前提なのに対し、こちらは攻撃されているのだ。しかも刃をぶつけているのでグレネードやライフルを使ってもこちらには当たらない。

そちらは僕は狙撃手だから射撃に全てをかけたモビルスーツで全てをかけた戦い方をするとでも思っていたのだろう。実はアンドラスは汎用機であり射撃に対する補正などはほとんど無い。実はフラウロスより弾が当てにくい機体なのだ。

そして押さえられているのではなく、攻撃されている。

「今だー！」

攻撃ということとはつまり、一点に力がかかっているということだ。バルバトスルプスが押さえられている時は完全に腕を掴まれていた為、抜け出せないが攻撃なら盾をずらすだけで抜けられる。そしてその抜けた瞬間は隙となる。

勿論攻撃に出ると言うことは分かっていた。押さええるということはトドメ役がいるのだがここにそれはいない。何処からか呼んできたとしてもこれだけ大きなシールド

だ。パージされることを考えているに違いない。掴むことは正直リスクが高い。それを知った上で挟み撃ちなのでこうした方が意外とやりやすかったりするのだ。

体制が崩れたレギンレイズが立て直す前に射撃して破壊する。パイロットがいなくなつたであろうモビルスーツを蹴飛ばしてバルバトスの方向を見る。

その横をイサリビが通過していく。それが晴れた時、そこには黒色のモビルスーツが佇んでいた。両腕を斬られたグシオンリベイクフルシテイが気を失つたのか全然動かない。そのままグシオンリベイクフルシテイはイサリビから離れていく。本人が生きているかどうか確認する必要があるが今はそれどころではなかった。2機のガンダムフレイム。それも鉄華団のエースと戦つて勝てる奴なんて世界にはそうそういない。勿論この戦場にも。そして黒いモビルスーツ。二本の刀を持ち、スラリとしたフォルムを持つ。

「ベリアル……」

この戦場にいるガンダムフレイムの機体の内の1つ、ガンダムベリアル。パイロットはライル・バレルだ。こんな短期間でしかも専用機のパイロットを変えとは思えない。ガンダムベリアルの同型があるとは思えないし、まずまずあの2人を軽く倒せる相手なんてそうそういない。

あいつに噛み付いて行けるのは僕だけだ。僕がやるしかない。しかし、勝てる見込み

は無い。どちらかという時間稼ぎだ。勝てる可能性など元から考えてないし、死ぬ前提の話が殆どだ。勿論死にたくなんてないし、死ぬない。ここで挑まずに分かりませんでしたーですませれば負けても生き残れる可能性が高い。

しかしそんなのでいいのか。僕はテイワズの狙撃手。今の戦いは狙撃手とは言えないがそれでもテイワズとしてプライドもすくならずある。それに僕が逃がせばみんなが危険だ。死人だつて増える。その中にタービンのメンパーを入れたくない。ならやるしかない。殺るしかない。

ライルだつて今は僕が来ることは分かっているのだ。分かっている、佇んでいる。イサリビに追いつく必要はもう無いのでイサリビの方に一度だけ視線を送る。姉さん達は大丈夫だろう。そんなヤワな人達ではない。

深呼吸をする。それと同時にアンドラスが話し掛ける。

— 私が行けるよ

僕を安心させるように暖かい何か包み込む。それどころでは同時にみなぎってくる自信。行ける。スティックを握り直してそのままの勢いに任せて突っ込んだ。

それにベリアルが反応して目にも止まらぬ速さで突っ込んできた。

すんでのところでシールドを構えて防ぐ。それすらも貫き、耐Gを突き抜ける重い衝撃。身体が反応をする。ビリビリと何かが震えて緊張感が高まる。

しかしそれは瞬間的な物だ。頭に閃光が流れる。それと同時にアンドラスが行った思考が言葉として流れてくる。それを加味した直感とは言えないだろう直感でベリアル の位置を読み取り、シールドを合わせる。

火花が発生してシールドに傷がつく。また来た重い衝撃に揺らされながらも目を見開いて相手を見た。黒いベリアル。

「これで最後だ。ライル・バレル」

2人の戦いが再び始まった。

第71話 ライバルその1

第71話

シールドでベリアルの刀の攻撃を抑えるたびに来る衝撃が痛い。しかしアンドラスにとつてはそれくらいへでも無いので受け止め続けることが出来る。シールドも無限に攻撃を止められる訳では無いがここまで隙のない攻撃だと攻撃した瞬間にカウナー食らって自爆だ。ここは耐えるしかない。それに移動しながらも着いてきて高速で刀を振るような技量だ。攻撃のチャンスなんて初めから無いのではないかとまで思える。

良かったのが狙撃手として耐えることにはそれなりに慣れている。とはいえ、モビルスーツの狙撃は対人の時より当てるのは難しいが待つ時間はそこまで長くないのが普通だ。元より運び屋に隠れて狙撃なんてあまりない。その成果戦闘をしているとガンマンじゃないのかと勘違いされることもあるレベルだ。どちらにしろ耐えることにはそれなりに慣れている。ここはその経験を生かして耐え続けるしかない。目にも止まらぬスピードで来る斬撃をアンドラスと自分の思考そして直感のみで位置を当ててシールドで守る。そんな高難易度な事を途方もない時間やらなくてはならないのだ。

ベリアルのスラスタのガスが切れるかライルが攻撃を一旦諦める。その瞬間しかない。しかしその時にそこまで頭が回るだろうか。思考のし過ぎで今でも頭が痛い。何かが震える。もし機体がアンドラスでなかったらこの頭痛で頭がやれるかライルの剣筋を見せずに切り刻まれるかだったろう。

結局、シールドが壊れるか、僕がライルに切り裂かれるか、そしてライルが諦めるかしかこの先の未来はない。確率が一番高いのは僕がライルに切り裂かれる事だろう。まずまず一撃一撃が防げる見込みのない攻撃なのだから。

もう傷だらけのシールド。運がいいのかそういう設計なのか歪まないライフ。ここで勝負に出た方がいいのではないかももう一人の自分がそう囁く。

その度に駄目だ。まだ、まだあいつは尻尾を見せてはいないと言い聞かせる。正直それくらいしか出来ないのだ。あとは刀を捌くことに必死なのだ。それぐらいの速度、まず人間である限り思考してからじゃ間に合わない。モビルアーマーレベルの反応速度が無ければまず捌けない速さなのだ。現に幾つか追加装甲に命中している。恐らく、先程のリアクティブアーマーを警戒してか突き刺す攻撃はしてこない。

刀だつて本当は消耗が激しい武器なのだ。なのに、ベリアルは一向に割れる気配がしない。ヒビなどは速すぎて確認出来ないが流れるように切ってくることから消耗はそこまでしていないと思われる。

「——っ!!」

集中力が切れた。左足の追加装甲が切れて破片が飛ぶ。装甲自体が斬られて、穴が開く。そこへ追撃されそうだったので、その追加装甲を急いでパージして難を逃れる。

そしてまた接近してきたベリアルを抑える。一瞬だけ火花が散り、盾を削る。もう限界だ。早くしてくれ。そう声を出すことすらままならず、身体と精神を破壊されていく。

気が遠くなる。目も半開きで何故ここまで耐えられたかが分からなくなってきた。

「ああ…!!」

左のシールドにヒビが入る。刀より消耗が激しいシールド等聞いたことも無いが物理的にも限界だ。

賭けに出てシールドをパージしてみるか。そうすれば一発くらいは当てられる隙が出来るだろう。しかしその賭けもあまり良くはない。慎重に慎重に。刀だってもう限界な筈だ。押せば折れるだろう。彼の思考から長期戦は避けたいから刀をこうも酷使するなど想定外な筈。ギリギリまで粘ればあちらが尻尾を見せてくれる。そう信じるしかなかった。

イサリビ。鉄華団という小さな組織が持つには多すぎる量のモビルスーツがあったのだがそれは全て出してしまった。とはいえ、整備を受けなくてはいけない機体が無い。しかしその殆どが弾切れの補給のみなのでそこまで人員は要らない。

弾切れの補給をしに来た獅電に詰めておいたライフル用の弾を出しながら戦うことが出来ない（まさかのドクターストップ）ため、現在整備士として働いている。

「あいつら、大丈夫か？」

獅電のライフルの弾の補給をしながらもそう呟く。弾入れの作業なんて整備士があののようにワラワラ集まってすることではないので手が開く人もいる。

ブリッジでは細かい指示を飛ばし、モビルスーツ隊は戦艦の死守に命をかけている。整備士は作戦前と先程までの動きが忙しかった反動があまり仕事がない。先程も述べたように整備士以外は猫の手も借りたいのだ。特にモビルスーツ。時折直撃してくる弾からこれも長くは持たないということはよく分かる。モビルスーツそれも自分が一人行くだけで状況は変わるのではないか。時々そう思う。整備士は今これ以上要らない。ならば人員が欲しいモビルスーツ隊として参加するべきではないのか。ラッキーなことに誰にも使われていないモビルスーツが一機、ユウが拾ってきた機体が一騎のみある。それを使えば状況は変わるかもしれない。しかしこの身体がもつとも限らない。

モビルスーツはエイハブリアクターの影響で耐Gが働くから身体への負担が小さいと思うかもしれないが衝撃は耐Gでは守りきれない。それにドクターストップがかかるほどポロポロになった身体が対抗できるか。

時折思い出す。暗く何も無い空間で起こった一日にも感じれば数億年にも感じた時間の中。あそこは精神的に辛かった。何も無い、何も出来ない空間で数億年も暮らせばしない。眠気もない、腹も減らない等良いこともあったがそこに閉じ込められたの一言で表すなら地獄だ。もうあそこには出来るだけ入りたくない。しかし昏倒状態となった者は入ってしまうのかもしれない。状態となった者は入ってしまうのかもしれない。あの空間がどんなものでなんの意味があるのか知らないのかもしれない。あそこは辛いだろう精神がしつかりしていないやつは耐えられないのかもしれない。生きることを諦めてしまうかもしれない。そうなれば死ぬのだろうか。自分はどう考えている。

ユウは勿論、ラフタやアジもその空間に捕えられたら出れるかと言われたらその時は首を横に振るだろう。それほど辛かったのだ。その空間は。

簡単に言うとか心配なのだ。家族が心配で、なのに戦えない自分に嫌気がさしている。

「……行くか」

なら簡単だ。行ってしまえばいい。身体に不調は感じなかったし、この際船が落とさ

れるよりマシと言ってしまえば許されそうな気がしてきた。機体だって丁度テイワズから取った余り物が残っている。性能的には獅電より弱いがこの際わがままは言ってもらえない。そう想いながらイサリビの端っこに佇む一機のモビルスーツを見た。

左のシールドを庇いながら攻撃を受け止めると右のシールドも限界を迎えた。しかし、その中でも衝撃に耐えながら、手応えを感じていた。

蹴りが増えたのだ。

ライル程のパイロットならこれだけ高速で動き刀を振るったことでどの程度傷つき、限界までどれくらい振れるかわかるはずだ。そして長期戦を嫌うライルが決定打になりにくい蹴りを混ぜてきて、その割合が増えてきた。つまり、刀をこれ以上無駄に振るうのを避けたいということとなり、それは即ち刀の限界が近いということ。

一瞬だけでも隙が作れば出来る対応が増える。それにこれ以上ガードするのはシールドも限界だ。勝負に出るか。

そう思った瞬間だった。ベリアル刀の刀が右腕の追加装甲を貫いて本来のアンドラスの装甲に到達した。少しだけ削りながら、動きが急激に遅くなる。

「……っ！」

今だ。など言う余裕すらなく、反射的にその追加装甲をパージして離れるベリアルにお返しとばかりに射撃を行った。乱れ打ちのようなものだが相手が呆気とられたからか全弾命中。勝負の流れがこちらに来た。怯んでいる。今がチャンスだ。

今まで刀の攻撃を防ぐのに酷使し続けたアンドラスをまた呼び起こす。アンドラスから送られてきたのは機体の損害状況、残弾等の機体の調子だ。それを一瞬で送られてきたが頭がタフになったのかそれに全く動じずに狙いを付けて射撃する。狙いは全て武器。ベリアルの刀を見ると右の刀の損傷は特に酷い。うつすらとヒビのようなものが見える。

「ああっ！」

その間一秒もせずに処理をして動く。もしここで僕の射撃がライルに気付かれたらかわされて流れが元に戻っただろうがそれを悟らせるほど僕は甘くない。

狙うは右の刀。ヒビの部位。それも刀が横を向いたその瞬間。そこしかない。刀は性質上、横方向の力に弱いのだ。

まずは手始めに前から右肩に向けて一発。弾のタイミングを掴めないからか斬るのではなく、射線に刀を入れて弾く。やはり右肩を失うのは惜しいようで何発か撃つても刀で守る。

その瞬間、頭の中に閃光が流れる感覚とプレッシャーが同時に来た。アンドラスでは

なく、自分の本能のようなものだ。ベリアルからオーラのようなものが出てきて、アンドラスを通過する。殺気とは少し違う気もするが反射的にそれが攻撃方向だと理解をしてそこから避ける。するとそのオーラもゆっくりと方向が変わる。薄くて世の中に存在するものではないということとは分かる。幻覚が見えている訳ではなく、まるで未来が見えるようなものなのだ。

「なんだと!？」

ベリアルから驚きの感情が見える。その不思議な感覚に囚われながらも、何故か頭は冷静だった。

理解した。こいつの動きに頭が慣れていると。人の慣れとは普通こんなに早く訪れる訳はない。2年間積み上げたものが花開いたのか。しかしその可能性も薄い。こいつの速さはガンダムフレームに乗ったことで磨きがかかっていたのだ。逆にライルの速さになれるのであればここで困惑していたはずなのだ。

どちらにしろこれらは好機だ。ここまで耐え続けたかいが
「あつたんだ!」

人体では耐えられないであろう加速をするベリアルをかわしながら刀に狙いをつけて連射する。

ベリアルの方も時折、攻撃はしてくるが全てシールドでがっちり防いだ。今までライ

ルの流れだったのがこれで変わった。それぞれがほぼ、同じ技量を持つ、均衡した状態へと。

たった一機で、それも狙撃手という正面戦闘が苦手な者が。ギャラルホルン、いや世界最強に対して正面戦闘で均衡状態を作ることが出来る。それは大きなことだ。そしてイレギュラーにも程がある。

しかし、ライルはなんにも疑問はなかった。少し早いと感じた程度で。いつかはそうなると分かっていたのだらうか。そう感じさせる余裕を感じた。

「そうだ！お前の強さを俺に見せろ！」

ベリアルから出てくる感情から高ぶりを感じる。死への境地に近づいているというのにその高ぶりには喜びも含まれているように感じる。

強い敵と出会えた喜び。というのは理解出来る。理解出来るが共有したいとは思わない。

自分だって人だ。死ぬのは怖いし、死ねない理由を作られてしまった。この状況では死の可能性が高いことをしたくない。

「お前がダインスレイヴを破壊したことでギャラルホルンの中ではお前の株は上がるだろう。モビルアーマーの討伐をするならお前という戦士が必要だと、誰もが思う！」
「それがどうした！そちらが勝てば力を基準とした世界ではなくなる！僕は腐った男共おまえたち」

に必要とされたくないし、必要とされても行きはしない！」

それぞれの得物をぶつけて高速で戦場を駆け巡りながら、言葉をつつけ合う。その空間には誰も入れない。入ったものは一人残らず、屍へと姿を変えられる。

「家族が最優先事項か」

「当たり前だ！ いままで、どれだけ僕が事態を引つ掻き回したか。わかっているんだよ！」

鉄華団。タービンズ。僕という人間がどれだけ事態を引つ掻き回して悪影響を及ぼしたか。あの時に父さんの言う通り、テイワズで留守番しておけば、全ては失わなかった。父さん達の大切な意志を。命を落としてでも守りたかったものを。自分勝手な行為で振り払ったのだ。

だから同じものを作る。タービンズを。今までのタービンズと同じものを作る。それが僕の人生の中で一番やらなければいけないことだ。その為ならギャラルホルンが崩れようがモビルアーマーが騒ごうがこちらに不利益がないならどうでもいい。勝手に騒げ、勝手に殺せ。

それさえ出来れば僕に居場所はない。また作るもよし、一人で朽ち果てるもよし。それは作ってからの話だ。その為に負けられないのだ。ライルにも勝てないと僕はタービンズを守りきれない。

「その為に僕は悪魔になる！アンドラスに僕の全てを捧げるんだ！」

「そのための悪魔か！お前は！悪魔に魂を売ればそれで強くなれると！」

「今はお前さえ消えれば！」

それぞれの得物にヒビが入り、限界は近い。しかし長期戦になればなるほど長期戦向きのフルアーマーアンドラスの方が有利となる。

勿論伸ばせば勝てるという訳では無い。しかし無理に当たらなくてもいいということとは余裕を産む。

しかし感情が、それを許そうとしない。こいつを殺せ、こいつを消せと何度も訴えかける。確かにこいつの相手をしている間に他のみんなが危なくなるのかもしれない。でも、ここで先に行つては犬死だ。そしたらタービンスはもう……

「僕は一人じゃない！それでも！お前を倒せなきゃ……前には進めないんだ！」

「だから、だろ。お前はタービンスの総意を自分の器に注ぎ込めると思ったか！思い上がりだ！そもそもお前はそれほど大きな人間じゃない！」

機体からアラートが鳴つてくる。アンドラスも限界に近いようだ。しかしそれより大きな負担をかけているベリアルも限界が近い筈だ。だから無理には踏み込めない。

でもライルも馬鹿ではない。もっと良い方法を何処からか出すのかもしれない。その前に倒さなければ、倒さなければ行けない。

「じゃあそこで止まるのか！僕の命はタービンスの為のものだ。罪を重ねた僕が、許されてはいけないんだ！」

「ならば、ここで死に果てる！すればお前の命はささげたことにだってなろう！」

ベリアルが刀がアンドラスの追加装甲を削る。あれだけ打ち合ったというのにまだその切れ味は健在なようだ。しかしその瞬間鈍ったのを見逃さなかった。

「その為に殺す！」

スラストを一瞬だけ吹かしてベリアルの背後に回る。ライフルをベリアルのバックパックに向けた状態で引き金を引く。それを防ぐようにベリアルが刀を振るい、射線に合わせて弾く。素早い切り返しだったからか、弾が切れてベリアルをかする。

「その為の！」

それを合図にタツクルをする。衝撃が伝わるのと同時にシールドのみを動かし、右の刀の横を叩き、そこに目掛けて射撃をする。

その時だった。ここまで幾度となく、ライルの剣技に耐え続けてきた刀が、ついに限界を向かえて半ばで折れた。右の刀だ。

そのまま蹴りでも加えようとしたが軽く避けられる。ベリアルは乱暴に動かしてお返しとばかりに左を振るうがそれはシールドの端を切り取って終わった。

流れが、また変わった。

第72話 ライバルその2

ここまで幾度となくライルの剣技に耐え続けてきた刀がついに限界を向かえて半ばで折れた。

これで流れが変わる。そう確信した。

2本しかない刀なんだ。それで二刀流を行っていたライルからすれば戦闘方法の変更から始めなければならぬ。そしていままで2本で慣れたのだ。1本でも戦闘している回数で言えば経験が多いのだ。やれる。

「チャンス！」

ライフルで牽制しながら1度離れる。あいつの長所はなんと言ってもスピードだ。耐Gをどれだけかけているのかわからないが多分間に合っていないだろう。それでも耐えられるパイロットの強靱な肉体。刀が折れたところでそれは変わらない。それを精一杯利用されて、叩かれたら終わりだ。ここまで来たのに負けられない。

とは言ってももう一本の刀も限界はそう遠くない。関節など弱い所を庇いながら攻撃してたので刀もボロボロな筈だ。対するこちらの盾もボロボロだが追加装甲で防げればよい。最悪追加装甲にはパーズという段階がある。あいつのもう一本の刀が折れ

てしまえばもうリンチでもなんでも出来る。

「やるな… それでこそ！」

ライルはまだ諦める印象もなく、真つ直ぐ当たってくる。シールドを重ねて防ぐがアンドラスから嫌な金属音が聞こえる。シールドの限界を再現させたのか。

本当にわざわざ面倒なことをする。しかし限界を迎えようとどうしてもここで仕留めなければならぬのだ。その為には無理をする。何度も心に決めたことだ。今更変えたりだなんてしない。

「僕はまだ死ねない！死んじやいけない！」

心に決めたことを繰り返しながらベリアルに攻撃をする。生きたいではなく、死ねない。という事を。

「戦場で死ねないというのは甘えだ。なら来るな！」

対するライルもまだ諦めてはいないようで刀で弾を弾きながらも距離を保つ。ベリアルが急接近することを考えるとどちらとも危険な距離だ。ここを保つのも難しく、保てば瞬間的に接近される可能性がある。懐に入られたら斬られるしかない。何かなんでも抑えるしかない。

「それでも！僕は戦うことしか！」

ベリアルは双腕から後で埋めたと思われる遠距離武器が顔を覗かせる。しかしそれ

での射撃はそこまでうまくという程でもなく、十分あしらえるレベルだ。でもそれが接近の為の布石と考えるとどうも動きづらい。

「守るものがある！好きにすればいい！しかしな！」

ベリアルとアンドラスの射撃する対決はアンドラスの方に軍配が上がる。ベリアル
の被弾が増えて装甲の隙間から煙のような物が出てくる。

そこで射撃戦は不利だと感じたのかベリアルは折れた刀を投げた。

躲すか防ぐか一瞬迷った。折れた刀といえど殺傷能力がない訳では無い。躲すこと
で隙が生まれるとその隙をつけ込まれる。しかし防ぐは防ぐでそれも危険だ。考えを
めぐらせている時間はない。その刀をギリギリで躲す。その間もベリアルを見失わな
いようにベリアルを見たが、迂闊だった。

ベリアルは刀を投げると共に、アンドラスの脚側へと回り込み、死角へと逃れた。

「アンドラス！」

「それが自分の脚を引っ張っているということ！忘れるな！」

咄嗟に取った防御姿勢も虚しく懐に入られる。その瞬間死を覚悟した。それほどの
力をベリアルから感じた。ゆっくりと機体と後ろへと傾けるにしかし、ベリアル
の刀はアンドラスの追加装甲を意図も容易く斬った。弱くない衝撃で機体が揺らぐ。これ
ほぼ、追加装甲は役目を果たさない、ただの飾りとかした。

シールドを動かそうとするが内側から刺されてシールドに穴が開く。

「うわああ！」

強引でありながら丁寧な刀の扱い。一つ一つの動きに圧倒的な技量を感じさせて、怯む。

これがライル・バレルなんだと。自分が挑んでいる相手がどれほどのものなのか自覚をした。勝てると思った。それなりにいい戦いもしてきたから、刀を折ったから。しかし、ベリアルは怯まずに戦ったのだ。強い。圧倒的すぎた。

「諦めろ」

刀のように鋭い言葉。それは僕の心に突き刺さる。

分かっている。僕は勝てないと言うこと。強い強いとイキって本当はただの男嫌いなだけだということ。甘えることしか出来ない、情けない男だということ。分かっている。分かっていたのに、悲しい。悔しい。

どうして。どうして僕はこんなに弱い。あれだけ人を殺して来たというのに、何故弱い。どうして。僕は強いからと親を安心させるように言ってもなんにも変わらない。

何度も繰り返し。心の中で嫌という程繰り返し返した。それでもまだ止まらない心が壊れてしまうのではと思う位の何かが僕を潰そうとする。辛い。

強くありたいと、何度も願った。そのたなら、多少のことは犠牲にできる心の強さも必要だ。

僕は、まだ強くなりたい。強くなって大切な人たちを自分の手で守れるようにしたい。だから賭けさせてくれ。どうせここで動かなければ死ぬのだ。強いから。そう嘘をつき続けたい。だから少しだけ。

「フルパージ」

全ての追加装甲を一瞬でパージする。切り刻まれた装甲がバラバラになりながらもベリアルに無理矢理下がらせる。

ここが勝負だ。ここで相手に何らかの障害をおわせれば勝てる確率が出てくる。

ライフルを構える。いちいち狙いを付けている時間はない。感覚に頼って撃つ。ベリアルが少し下がったとはいえ刀の間合いより少し遠いくらい。馬鹿でなければ撃つて外す距離ではない。

それもテイワズの狙撃手が外す所か装甲の厚い所には当てない。

直感と知識を一瞬だけ総動員させて引き金を引く。弾はそのまま真っ直ぐ飛んでいき、頭に当たり跳弾、コックピットの薄い部分へと命中。これでコックピットに侵入した弾がライルの身体をひき肉へと変える。

—— 筈だった。

アンドラスが確認したのは弾かれた弾だ。一瞬だけの判断とはいえ、狙いは完璧だった。あの瞬間ベリアルが意味不明な挙動をしたわけでもなく、すんなりと弾の侵入を認める筈だった。

「二重装甲か、また同じミスを一！」

ライルが僕と戦う時に用いられた方法だ。自分の技術を上げるだけでなく、他人の状況。そして相手がどう考えるかまで考えなかつた結果だ。

必殺の一撃は容易く弾かれてベリアルのバランサーが機体を整える。正確無比な読み取れない射撃のチャンスが無駄にしてしまった。その衝撃は大きかつたが即座に頭を整えた。それが出来たのは恐らくこれが咄嗟の射撃だったからだろう。これももし、相手が気付いておらず、そして完璧な防御でない上に、狙って撃ていればもう立ち上がれなかつただろう。どちらにしろ、この数秒で世界が変わるのが戦場だ。命のやり取りをしている場所だ。

ベリアルが視界から消える。宇宙の色がないから黒いベリアルを見失う確率が高い。それもあるがあれだけ痛手を負っておきながらまだあの速さが保てるとは計算外だ。全てに対して柔軟に対応する必要があるようだ。

兎も角、これを防がなければ終わりで。ここまで思考が追いついたのも、恐らくライルとの戦いに慣れてきたからだ。そうでなければ思考どころか急に回り込まれて一刀

両断つと言うことになっていただろう。若干ではあるが僕も成長しているのだ。
「……っ！」

若干ではあるが頭が動いたのでそれなりの対応ができる。ベリアル velocity はアンドラスで追いつける自信はないが、それに対応することは慣れた。刀を見てシールドを動かす。しっかりと構える暇は無いが、直撃さえ避けられればマシだ。

シールドはまだ耐えられる筈だ。そこら辺の学習は全くしてないのでどれだけ耐えられるかということを感じてしか予想が出来ないがもうそろそろ壊れてくるだろう。先程突かれただけで穴が空いたことから簡単に推測できる。

穴が空いた。刀で突いた訳なのでおかしくはないがそこに何かおかしい物を感じた。確かに刀とは突くことも出来るしかし、ライルがやるように斬ることだって出来る。何故この盾は砕けずというか何故斬られる心配ではなく、砕かれる心配をしていたのか。

そこまで考えるとシールドから圧力が来た。流石に脳がライルのスピードについていけているとはいえず、余所事を考える時間はない訳だ。

乾いた唇を舐めながら、ここで余所事を考えるのはやめておこうと考える。気になったら最悪この戦いが終わったあとでもアンドラスに聞くなり、兄さん達に聞くなりすればいい。僕のチンケな頭で考えるより、とそちらの方が正答率が高いだろう。

「防いだところだ！」

「なんのー！」

ベリアルは2本目が無いため、鋭い追撃は来ない。そしてスラストーを使い果たしたのか高速移動もあまりしてこない。スピードが持ち味のライルからすればスラストーのガスは自分の命だと言ってもいいものだ。狙撃手はあまり動かないのでスラストーのガスが無くなっても動かないかそこら辺をプカプカ浮いていればいいので問題ではないが高速移動のための機体がこれだとかなりきついだろう。ここまで追い込んだのだ。誰でもない、この僕が。

「ちつーどこか補給出来るところ…。」

「逃げるな！アンドラスの餌になれ！」

ベリアルも補給ができる場所を探しているようで鋭い攻撃が減ってきた。とりあえず盾を斬るような事はされないだろう。

補給することで刀を新しく手に入れられたらそれこそ面倒どころの騒ぎではない。刀一本持つてくるだけでアンドラスの敗北は必死だ。

アンドラスはスラストーのガスを増量しているから今問題があるかと言われればそうではない。シールドは大問題だが、補給して余りがあるとは言えない。元々無かった物を適当にしいるてきただけなのだ。恐らくこれで最後。逃がしてはならない。

元より遠距離勝負は此方の方が有利なことなどライルからすれば宣告承知だろう。

ここまで痛めつければ帰る可能性も低い。

「ここでお前を落とす！」

「舐めるな！」

アンドラスの射撃を視線を見ながらかわして行くベリアル。その様子を見ながらベリアルは行動パターンを見る。スラストーのガスを出るだけ節約しながらかわしているのがわかる。だからといってここで銃口を移動させても無駄だろう。タイミングは知られてないが、銃口は完璧に把握されているのだから。現在は銃口を隠すことなどできないし、隠れるというのは以ての外。隠している銃もない為ここで無理に攻めない方がいい。弾の無駄遣いはさせるべきだ。

すれ違いざまに切り込んでくるベリアルを確認しながらバックステップを踏み、直後にスラストーで回り、躲す。刀を中心として、円を書くように躲したので、後ろを取る。しかし、そこでは狙うだけで引き金は引かない。引いたところでライルはそれくらい読んでいる。その通りに動くのはなんか癩に触った。刀が一本になった、そしてスラストーのガスが少なくなったことでライルが戦法を変えてきた。その為、余裕を持って、躲すことが出来るようになった。しかし、これでも同じ土俵に引きずり落とすただけ。結局ライルの方がパイロットとしては優秀なのでここまで引きずり落とす必要があった。双方の攻撃が上手く決まらない状態。先程まで抑えれていたとは思えない。

「俺にもプライド程度ならある！」

「当たり前だ！だからこそ、お前を越えたい！越えて、その先に行かなくちゃいけないんだ！」

まだ粘った方がいいのか、それともここで仕掛けた方がいいのか。粘れば時間がかかるがもし、耐えられれば簡単に仕留められる。仕掛ければやられる可能性が高い。が時間もかけずに済む。

ライルの方は少し様子見をしているようだ。無理に攻めたところで無駄だと気づいたか。もしくはそれ自体が罠で仕掛けてきた瞬間に終わらせるつもりか。相手の心が読み取れないため、めんどくさい。

頭の回転ならライルの方が速いだろう。モビルスーツで高速移動しながら攻撃するというのはGに耐えられる身体は勿論、動体視力、そして頭の速さが重要なものだから。

つまりここで高速戦闘は不利。確実に仕留めるには、隠れて狙撃が一番良いのだがここで隠れる時間はないし、隠れてもベリアルが補給に行ってしまう今までの行為が水の泡と成り果てる。ベリアルの刀が届かず、急接近しても耐えられる距離を保つしかない。仕方がないが粘るしか無さそうだ。

そう思い、アンドラスとベリアルの距離を離れた。

ベリアルはそれを良しとするはずなく、瞬間的な加速で詰められる距離を保とうとす

る。

あちらも限界な筈だ。この戦い、終わりは近い。

そのまま、2機のモバイルスーツが攻め手を温存するあまり、適当な距離を保ち続けるという不思議な空間が完成した。

目の前のモバイルスーツのコックピットを開き中に入る。端末を接続して細かいところを見直す。システム面は問題なし。武器は適当に獅電の物を持っていくことにする。丁度いいのか武器庫には武器がまだ余っている。ライフルも弾を詰めれば使える。スラスターガスは何故か最初から入っている。短時間であるならば、十分に動けそうだ。

「機体名は：：スピナロディ・リペア：：か」

スピナロディと言えば海賊などでも使われるほど流通されているロディフレームの一種で、民間のコロニーでも使われるほど安価なモバイルスーツだ。ロディフレームは際立った特徴こそ無いものの、フレームそのものの剛性が高くペイロードもかなり余裕があるために優れた拡張性を有したロディはとにかく大量に生産され、厄祭戦の後にも相当数が稼働状態で残り、とにかく様々な組織へ流れていった。父さん曰く、アミダ母さんが父さん達に出会った時に使っていたモバイルスーツ。これを持ってきたユウ曰く、

ナノラミネートアーマーにマトモな塗装すら塗られなかったオンボロで中距離戦ですら不利になるモビルスーツだったらしい。結果、四肢は切断されてエイハブリアクターも不安定な形で保存されていた。

リペア。つまり修理されたということと共に眠っていたマンロデイと鉄華団が仕留めたガルムロデイの装甲を切り貼りしてとりあえず形にはしたモビルスーツ。勿論ナノラミネートアーマーの塗装も万全でカラーはスピナロデイが水色（勿論業者によつて違ふがユウが拾つたは水色だった）に対し、黄色と蒼のツートンカラーとなっている。

コックピットも替えられたのか肌触りがいい素材になっている。どうでも良さそうで地味に大切な所を抑えている。

「まあマトモな機体が余っているだけマシか……これでどれだけ対応できるか」

マトモな機体ではあるが、ギャラルホルンでエース用に配備されているレギンレイズは勿論、グレイズ、そしてティワズで配備されている百鍊、百里、漏影等よりも兵器としては弱いだろう。補正も弱いし、スラスターが出せる最大のガスも少ない。反応が弱いので無駄が多いと大きな隙ができる。余裕はあるため、無理しても壊れることは無いが性能が低いため、無理して動くことすら出来ない。

こんな機体でも利用価値はある。それにドクターストップがかかるレベルで身体が

ボロボロな自分と見ると背丈にあったモビルスーツでは無いのかとまで思う。

そこまで考えて直角ステックを軽く触る。反応はなし。これは獅電と同じ要領で動かすと接近戦で不利になる。慣れるまで遠距離で戦わなければならないようだ。

すると後ろから怒号が聞こえた。

「おーい！そこのお前！勝手にモビルスーツに触るなあ！」

どうやらお怒りのようで額にミミズが這っている。鉄華団曰く、臭くないらしいがタービンズと比べると明らかに異臭がするその腕を避ける。恐らく鉄華団は鼻でも曲がってしまったのだろうと失礼な想像をしながら漂うおっさんの腹に蹴りを加える。

「わりいなおっさん。今日の俺は……最っ高の仕上がりなんだよなあ！そこでそのくせえ指啜えて見てな！この俺が！ギャラルホルンを駆逐していく姿を！そして怯えろ！」

盛り上がっていく感覚を収めようとすることなく、そのままスピナロディ・リペアに乗り込む。計器等の異常は無し。

あと心配な点といえばパイロット、つまり自分のコンディションだけだ。見た目や動きから想像出来ないが、医者から止められるほど自分の身体はボロボロらしい。実際動いている自分ですら、まだ行けるんじゃないのか？と思ってしまう。

しかし限界というのは意外と行かないと気付かない物だ。それが目の前に立っても

自分をよく見れてなかつたりすると気付かなかつたりする。

「まあ、なんとか出来るだろ。笑いものにはされたくないしな」

コックピットのハッチを閉じながら周りを見渡す。先程蹴りとばしたおっさんは子供達に回収されているようだ。その少年たちを含めて全員が目を真ん丸にしながら此方を見ている。その動きが準備でもしたように一緒なので笑えてしまう。

流石鉄華団。息びつたりだ。

その事はどうでもいいとして、問題はどうかやってここから出撃するかだ。まさか正直にカタパルトまで誘導してくれるとは思ってない。一応乗り込んでくるモビルスーツの為に開けているため、ぶっ壊しておっさん達を宇宙に放り込む必要は無いが、乗り込んでくるモビルスーツと鉢合わせは普通に気分が悪いし、こんな所で事故なんて起こせない。

仕方ないが、無理矢理抜けるしか無さそうだ。間を見計らってイサリビから出る。

「スピナロディ：： エスト・タービン！出る！」

第73話

ライバルその3

距離を詰めようと思っても射撃が得意な為そのモビルスーツはほぼ同じ速度で逃げていく。

距離は全く変わらず、不思議が空間を形成する。

強くなった。心の中でそう感じた。最初の頃、地球外縁軌道統制統合艦隊に雇われた身として鉄華団を攻撃していた時、同じく鉄華団に雇われたであろうガンダムが目の前に立ちはだかった。その頃、使っていたシユヴァルベグレイズカスタムもそこまで強いとは言えず、そして未確認のガンダムフレームということでも不利だった。それでもそのガンダム、アンドラスというモビルスーツを圧倒し続けた。結局、数が少ないあちらが俺に対して数で圧倒するす戦い方を取ってくるようになった。勿論、あの頃のユウ・タービンも弱いわけではなかった。あの頃から自分の才能を理解して、それに見合った努力を感じた。ニールを倒す程力をつけるのにそこまで時間はかからなかった。

そしてそれから2年後。彼は単身でモビルアーマーを討伐した。ハシユマルという天使長の位につくモビルアーマーだ。狙撃手としては名を馳せる彼が、一人で討伐したのだ。イレギュラーな事だったが逆にそれが嬉しく感じられた。メインカメラを輝か

せて、小回りがきいた機動を見せるアンドラス。遠目に見ても弾く自信が湧かない上にその全てが敵の弱点を捉えた射撃。その一撃一撃がまるで自分を狙っているように感じた。それから少し経つとある戦いでアンドラスと1対1で戦う事になった。その戦いにて討伐する対象が彼の家族だったのだ。彼は自らの思いを真正面からぶつけてきた。感情が籠るあまり力んでいたが、それでもその射撃スキルは健在だった。

これだけ戦って見てわかる。彼は最初、自分の才能を磨くことしかしなかった。それが悪いという事ではない。無理なことを永遠とやつたところで無理なものは無理だ。それなら伸びる才能を伸ばせばいい。それは事実だ。しかしそれだけで戦えるほど戦場は甘くない。もしこれがスポーツだったら彼は最初から全く成長しなかっただろう。そして俺に負けて地べたを這いずるだけだった。しかし彼は自らの弱点を覆い隠す、そして自らの射撃を生かせるスキルを身につけた。これまで自分の剣技を抑えたシールドだつてその1つだ。自慢ではないがこれほどの速さで刀を振るえるのはこの世にないと自負している。それだけではない。防がれた場合のカバー等の技術も自分を超えるものはいない。しかしその時彼はそれを防ぎ続けた。シールド本体の傷を抑え、それごと斬られないように気をつけながらも全てを防いだ。

その結果刀を1本折られてそしてスラスターのガスの無駄遣いによるガス欠を誘っている。

これを行うことは容易ではない。ただでさえ、ギャラルホルン最強である自分の剣技を1度防ぐだけでも勲章ものと言っているギャラルホルン兵が多いのに対し、それを防ぎきり、ライル・バレルというパイロットを調べ尽くしている。そうでなければここま
で出来ない。

本当に彼と向き合うと自分が死ぬのではないかと考える。射撃スキルも彼以上の物は見たことない。というか彼の行為こそが普通では考えられない技術の集合体なのだ。モビルアーマーすら真似は出来ないだろう。それ程なのだ。

10年振りに背中から冷や汗をかく。

でも死ねない。家に帰れば家族がいるのは自分も変わらないのだ。これが終わったから実家に帰る。いままで積んできたものを卸して楽になろうと決めたのだ。それに……彼女の願いもある。

今でも瞳を閉じれば思い出す。透き通った声。陽の光を受けて輝く金髪。傷一つなく、綺麗な色白の肌。

——ありがとう。ライル。

片時も忘れることの無い思い出。一つ一つの感情すらも鮮明に覚えている。彼女との大切な……どれだけ出されても替えられない大切な時間を。

そしてその願いを。

いつか、生まれや階級などで差別されない。自らの磨いた牙を使うことでのし上がる
ことが出来る世界。彼女はそれを望んでいた。

それを彼女の変わりに実現する。その為に自分の全てを使う。そうしてきたのだ。
俺は牙だけでのし上がっていると証明するために敢えて力を誇示する。人々が考える。
悪になりきり、結果的に自分を除く部隊の結束を深めながら、牙を磨けば上に上がれる
ということを証明した。アメリカやクーデリア等今になってソレを望む人が出てきた。
後は彼女達に引き継いでもらえばいい。

後は彼女達を守ることだけだ。アメリカに至つてはこの戦いさえ切り抜ければ後は
自分がいない方がいいだろう。悪魔が抜けることで残ることはライル・バレルという最
強のパイロットがいた事だけだ。そちらの方がアメリカとしては悪い印象を持たなく
て済むだろう。そうすれば彼女の願いを叶えられる確率が高くなる。

その為にもこの戦いには勝たなくてはならない。そしてアメリカだけでも守らなく
てはならない。強くなったこテイワズの組撃手いつに。勝てる、圧倒的な力を。

「やりたくなくてみた」

案は一つだけある。アメリカに止めろと言われた、阿頼耶識の最後の段階。

リミッター解除。厄祭戦、特に四大天使討伐時は当たり前のように使われた手である
がそれは最早欠陥品だ。出力が正常値を大きく上回り、どこに隠していたのか分からな

いがスラストターのガスの心配もなし。まるでエイハブリアクターを弄ったようなものだが、その代わり、パイロットの神経を取っていくらしい。どのように、何故等分からない点が多すぎるが実際そうなのでなんとも言えなかつたらしい。

どうせ自分がつけている阿頼耶識も同じようなものだ。

ある時はモビルアーマーに反応すると自動的に働くようにしてしまふプログラムも組み込まれたらしいがギャラルホルンの技術なら外せるらしく、実際ヴィダールとベリアルは外れている。とはいえ、使えない訳では無い。使おうと思えば今でもリミッター解除して身体をぶち壊しながらアンドラスの解体ショーを繰り広げることが出来る。磨きに磨いた牙として人の目に映るか。それとも、狡をして力を上げたイキリ野郎として映るのか。

まだアメリカの元にいるのでそこは少し問題だ。アメリカは部下に無理矢理リミッター解除させて勝利したとなれば悪いイメージもついて行く。それではわざわざ自分が辞める意味が無い。いやしかし、力こそが正義な世の中ではその事も闇に葬られて、アメリカは有能ということだけが残る。都合のいい考えたが、ここで負けては元も子もないためこれしかない。

「おい、ベリアル。お前の力はこんなもんじゃないだろう？もつと、もつとよこせ。セブンスターズを大きく超える……」

ガンダムはまだ限界を超えていない。

パイロット保護なのか、力を持って余して暴れるのを防ぐ為なのか。その真意は分からないがそんなものどうでもいい。自分にそのリミッター解除が行えれば。それだけで

英雄達と同等若しくはそれを超えるということなのだから。

「お前の力を」

悪魔の眼が紅く輝いた。

アンドラスとベリアル。自分とライル。その2つの差はそこまで大きくない。ユウは正面戦闘の事を考えて己の刃を上手く使える狙撃を敢えて避けている。そしてライルは自身の刀を一本折られて、短期決戦で仕留めるためにガスを大量に使い、後はそこまで無いと推測される。タービンスではある時ではバランサーと呼ばれるエイハブスラスターも出力がそこまで無いため、ライル向きとは言えない。出来て仕留めた後に帰還する程度。

お互いに自分の強さを相手に削られ続けたため、残りの手段まで削られないように温存している。残りの手段といえど、そのみで仕留められるとは思っていない。お互いがどれだけの強さか分かっているから。それだけ戦ってきた相手だから。とはいえ、ここで一瞬でも気を抜けばその瞬間、気を抜いた方は魂をこの世から切り離すこととなつ

てしまう。

結果、この状態だ。しかし、それなりの強さのモビルスーツパイロットならこの空間に進んで入ろうとはしない。入った瞬間味方に殺される可能性もあるから。それだけ貼り詰めた空間を形成している2人のエースパイロット。

とはいえ、二人ともこの状態を待っていた訳でもこの状態を作りたかつた訳でもない。先程も言ったように（強いとも、確実とも言つてない）最後の切り札を温存しているだけだ。

スラスターのガスも、弾丸も、集中力も無限に続く訳では無い。

多数の外装を付けてフルアーマー化したアンドラスは長期戦が向いているとはいえ、追加装甲は全てパージしてしまった上、気を抜けば死に至る戦場において楽観は出来ない。そして今も、双方がいつ出すかいつ出すかと頭を悩ませながら距離を保つ。

その時僕はライルの切り札が僕の集中力が切れた瞬間に一瞬だけ加速して、攻めて斬ると思っていた。つまり、忘れていたのだ。阿頼耶識の、もうひとつの段階を。

「やりたくなってみた」

不意にライルがそう呟いた。お互いに集中していながらもその声はよく聞こえた。全く隙を見せずにそう呟いた。

頭があまり回らない状態だったため何も考用途しなかった。ただ、ライルが何かを呟

いたという情報だけが頭の中に入った。

そしてベリアルが一旦離れる。先程まで、一瞬で詰めれないギリギリの距離を保っていたので詰めてくるのではなく、逆に離れたのは予想外だった。

その時におかしいと思ってももう遅い。まだあいつは諦めていない。

ベリアルのメインカメラが、人で言う眼にあたる部位が紅く輝いた。紅い光が尾を伸ばす。

大きさも何も変わっていない筈なのに、大きくなつたように見えて圧倒される。

「なにこれ……」

集中力を保ちながらもその覇気に押し潰されないうようにとりあえず声を出した。しかしその声も掠れていて、力がない。頭に浮かぶのはアグニカ叙事詩に書いてあった阿頼耶識のリミッター解除。

しかしあれは高度なスキルな上に自分の身体を壊してしまう代物だ。もし使えたとしても、もう戦わないと言つたライルが使う手ではない。

何故その存在を知っている。そして何故それを今使う。どうやって戦うかという事を考えずただ頭に浮かぶのはライルがリミッター解除を行ったことを考えていただけだ。

戦場にて余計な事を考えることは思考を放棄しているのとあまり変わらない。つま

り、先程までギリギリで保っていたのもが限界を迎えたということだ。

その瞬間、穴が空いた左側の盾が真つ二つに斬れた。綺麗な切れ口で真つ二つに切断された。防ごうと思う前だ。思考が別の方向に行つてしまったからと言つても流石に速すぎる。それほどにライルが反射神経、ベリアル反応速度が速いということだ。

その衝撃で目が覚める。

確認できない速度で斬られた盾。斬られたからか、盾が朝つて方向へと行く。今更拾つても防衛性能は望めないだろう。ライフルも若干掠っているのか傷が見える。

目だけを動かしてベリアルを追う。その姿は確認出来なかったが一瞬の殺気を感じ、バック転の要領で回ると先程までコックピットがあつた部分に刀が突き出ていた。一回り大きく感じる刀。二刀流では無いため、二連撃目は遅いだろうと踏んで脚でその刀を持つていた右腕を蹴り上げる。

「右か！」

自分が折つた刀は右の刀。つまり、先程の見えない間に左で持つていた刀を右に移動したということになる。マニユプレーターが故障した訳では無い。恐らく、右利きなのだろう。今考えてみれば剣が一本だった時も右で持つていた。

ベリアル右腕に渾身の蹴りが決まる。それは申し訳程度に2機の距離を離し、ベリアル姿勢を同じく申し訳程度に崩した。

瞬間的に左側にライフルを構える。狙いは右腕。この距離では外すわけもない。躊躇い無く、引き金を引く。しかしベリアルが引き金を引いたのとほぼ同時に右側に避けた。疲れたのかボヤけてきたその姿を確認してシールドを構える。でも、普通に構えるだけではダメだ。先程斬られた盾を思い出す。ボロボロになるまで打ち合った盾とはいえ、あんなにも簡単に斬れるなど想定外だ。いや、簡単ではない。物を切るという行為そしてそれを無重力で行うこと。それだけで相当難しいのだ。しかしライルはそれを簡単に行うパイロット。彼が阿頼耶識のリミッター解除をおこなったということ。は完全にこちらを切り捨てる気だ。

「だからって……そこー！」

ライルの方も盾と向き合うのは避けたいよう盾を構えると回り込もうとしてくる。確かにその速度にまだ慣れていないのでそれは有効打となる。

何度もベリアルに向けて撃っているのに1発も当たらない。全て弾が見ているように避けられる。

しかしそんなことは無い。そして、タイミングが読まれているということも。

あれだけの速度で動きながらも銃口から目を離さずにいる。

射撃が当たらないのであればもう何にもできない。このままベリアルのがス欠を狙いたいがこの状態では上手くいかないだろう。となれば勝てる可能性があるのはただ

一つ。この速度に慣れるしかない。

ただでさえ、この戦いでベリアルに慣れるのに相当な時間を要した。それもアンドラスをフルアーマー化して、防御重視にしたため耐えられただけのこと。しかし今はその防御性能も半減所ではない。追加装甲は全てパージしてしまい、シールドも一つ失った。

耐えられるはずがない。万事休すか。

そう思った瞬間、目を離さなかった筈のベリアルが視界から消えた。シールドを構えると強い殺気を感じた。振り向くと後ろにベリアルが刀を構えた状態でいた。後ろを取られていた。

自分の反応が遅くなっている。そう気付き、スラスターを一瞬だけフルに使って前に進む。刀を振れば当たる距離にいたのでとりあえず前に進まないと斬られるからだ。後ろを見ずに左のライフルでベリアルがいたであろう位置に向けて撃つ。手応えはなかったが、それで下がってくればと思つて撃つ。その間もベリアルの反応を探す。

音がした。金属が奏でる、美しい音。しかしそこには何か嫌気を感じた。

「しまった——」

気づいた時には遅かった左のライフルが解体されていた。先程のフェイントにまんまと乗ってしまったのだ。

そして反射的に振り向いたのも間違いだった。

嫌な音がした。

まるでナノラミネートアーマーを貫くような。まるで何かが人体を貫くような。骨が碎ける音、筋繊維が裂ける音、限界を迎えた筋肉がちぎれる音。

おそらくはそれだろう。頭から何かが落ちた。赤い液体。血だ。

それと共に自覚する痛み。それが全身を貫く。声も出せずにそのまま。何かが消えた。

第74話 義務

目の前のグレイズをパルチザンで器用に解体する。その感覚を身で覚えながらステックを握り直す。全てを忘れてはいないようで安心した。

そのまま、接近して来たモビルスーツ2機を一瞬で仕留める。

反応はお世辞にも良いとはいえないが、モビルスーツとして最低条件は満たしているモビルスーツだ。

スピナロディ・リペア。市販機であり、モビルスーツとして最悪な状態だったものを改造したものだ。それでも獅電やグレイズのレベルには届かず、こうして強くもないのに扱いづらい機体となっている。本当に何故とこのモビルスーツを用意したのかが謎だ。これを置く場所があるのなら、ライフルを二、三丁置いた方がマシかもしれない。それでも今こうして戦闘に勝っていることを考えると結果オーライなのかもしれない。

でも、これでも完璧という訳では無い。機体も良いものとは言えないがそれは身体も同じ。医者に戦闘はすると言われているこの体で何処まで動けるか。身体に負担がかかると言えば高速戦闘だが元々、この機体はスラスタをフルに使っても高速戦闘にはならないため、心配することは無い。でも、被弾などにおける衝撃の感じ方は一般の

パイロットより酷いはずだ。楽観視は出来ない。被弾は出来ない。した時には命を投げ出すような物だ。戦場にいる時点で賭けではあるが生き残りたいのは皆同じだ。死ぬ目的で戦場に行くものなど一番最初に死ぬ。

そう思いながらライフルで牽制する。おそらく相手もこちらの狙いにはもう気付いているだろう。敵の頭を狙っているということ。なのに当たりが弱い。まるで行ってもいいよと言っているようだ。罠が仕掛けられているのかもしれない。しかし鉄華団の団長がそう言った以上、俺は嫌だとは言えない。元々罠にかかってもいいようにモビルスーツパイロットは控えるべきだ。しかし何も無い気がしてくるのはなんだろうか。これが当たればいいのだが、気の所為だった時が危なそうなのでとりあえず控える。そこに2機の辟邪が接近して来た。パイロットは直ぐに気付いた。

「ああ、母さんどうし…。」

「なんで来てるの！エスト！」

「イサリビで待ってろって言っただろ！なんで出てくるんだ！それもこのモビルスーツで！」

高くなってきたテンションを一旦抑えて言う。辟邪のパイロット、ラフタとアジーはそう言って軽く突いてきた。お仕置きの感じなのだろう。衝撃としては耐Gの為に何も来ないが。どちらにしるお怒りのようだ。二人とも自分の身体を心配してくれ

ているというのは分かる。それに乗機がこれではもつと心配させるような物だ。多分だが自分よりラフタやアジーの方がこれのやばさを知っているのだろう。

今更なんでこのモビルスーツに俺が乗っているって分かった？等は不要だろう。

「あーいやーごめん。でもさここで落とされたら元も子も無いし」

結局これなのだ。勿論みんな危険だしーとか、自分が燃え上がりそうだーとかなんとかあるが結局これだ。ここでイサリビが落とされてはみんなおしまいだ。マクギリスも尻尾巻いて逃げて、鉄華団と元タービンス^{自分達}を置いて逃げるだろう。着いてこれればまたメンバーに加えるかもしれないが、ここで落ちてもいいように計らうだろう。

一見残酷かもしれないがそれが普通だ。それが戦場だ。今更それを悔いる気はさらさらない。

「… わかった。付いてこい」

「アジー!?!」

その想いが伝わったのかアジー母さんがイサリビの先頭を指す。するとそこにはもうボロボロになったギャラルホルンのハーフビーク級の戦艦があった。イサリビの中心にいても作戦は分かっている。その戦艦を盾にして特攻。適当なところで切り離し、イサリビは撤退。その後、切り離れた戦艦からフラウロスがダインスレイヴを放つ。

賭け事をしているような感覚に陥る作戦だがこれが一番いいと言うのはあながち間

違ってないのかもしれない。ダインスレイヴは1発しかない為、アリアンロットみたいに物量でなんとかすることも出来ないし、フラウロスのパイロットがああ位置から射撃しても当たるとは思えない。ならばギリギリまで近づくのがいいが、それだとアリアンロットの部隊に押しつぶされる。となれば可能性が高いものといえは高速で突っ込んで畳み掛けるしかない。

「駄目だつて！そんな身体でマトモに戦えるわけないじゃん！」

ラフタには想いが伝わってないという訳では無い。ただ心配しているのだ。自分の身体がここで壊れてしまうのを。それ相応の覚悟があるのでいいかもしれないが、やはり心配なものは心配なのだ。

「なあに。死ぬかよ」

この一言で安心できるとは思っていない。でも焼け石に水であろうが期待はしたかった。ラフタも若干不満そうだが引き下がってくれた。彼女の為にもここでは死ねない。

アジーについて行き、先頭の戦艦に立つ。そこには数えきれない数のグレイズとレギンレイズが武器を構えてこちらに射撃を行っていた。

これだけ砲撃を受ければこの戦艦も長くは持たない。切り離す前に使えなくなるのがオチだ。

つまりは護れということなのだろう。身体がボロボロであろうと出てきたのだから働いてもらうと。

「行くぞで」

良いだろう。受けて立つ。

そう思いながらパルチザンを伸ばして、ライフルを乱射させた。数機のグレイズに当たり、減速した所にパルチザンを嵌めて潰す。振るう瞬間にパーツが弾けてフレームが曲がる。

近づいてきたレギンレイズをラフタとアジーが狩りとる。それもとてスムーズで心配しなくてもいいレベルだった。

それを見て安心しながらもテンションを抑えようとするのを止める。堪えられなかったら笑いが零れる。

「ふふふふ：。アハハハ！ハハハハ！雑魚どもが！これくらいでポンポン倒れるなんてさあ！」

言葉は荒ぶりながらも狙いは外さずにレギンレイズを一撃で仕留める。ゆつくりと、しかし着実に上がっていくテンションを抑える力を持つとうとはしなかった。

そうしている間も、最後の一撃の時は近づく。

「ノルバ・シノ！流星号！行くぜオラー！」

全身を貫く痛み。痛覚以外何も感じなくなる。何に身体が触れているのか分からない。まず、身体があるのかすら、分からないのだ。声も出せない。

「——！！」

身体から出てきて自由になった血が無重力だから浮かぶ。視界が赤くなり、そして狭くなる。アンドラスからのアプローチが消えて、自分だけが一人取り残される。

痛みに悶えながらも自覚した。ああ、僕死ぬんだと。

みんなに生きて、帰ってきてと言われたのに。父さんたちに心配させないために強いからと言ったのに。

まだ心残りはあるのに。

戦場がそれを許さない。そんな簡単に認めてくれない。辛い。それがただただ辛い。死ぬことは怖くない。死んでしまうことでみんなと離れることが怖い。

ジョーカーも、死ぬ時はこんな感じだったのだろうか？今となっては彼も懐かしい。自分が生きるために切り捨てた存在。せめて自分も死ぬことでみんなが生きてくれればと願う。それだけでいいのだ。それだけで。みんなが、家族が平和に、危険もなく、い

つまでも笑って暮らすことが出来ればもうそれでいい。ずっとそれだけが欲しいのだ。それ以外のものなど、その為の道具に過ぎない。

しかしそれを成すことが出来なかった。兄に、エストに全てを託すしかない。父さんの覚悟を踏みにじったというのに。本当に僕は救えないクスだ。

そう思うこともおそらく、走馬灯のようなものなのだろう。

最後までどうでもいいことを考えてしまう自分が嫌になる。

ああ……時が見える。真つ赤な視界に何かが輝いたので勢いのまま、意味の分からない事を考えながらそのまま身を投げ出そうとした。

いや、元々しなくてもこの身体は死に絶えているはずだ。身体を貫かれた人間がそこまで長い時間生きていられるわけがない。

では今誰がこれを考えているというのか。天国、いや地獄というものが本当にあるということか。そしてそこは真つ赤な世界でコックピットによく似ているのか。

そこで違和感に気づく。まるで魔法が溶けたようにハッキリと。

「さ、きつる……？」

思ってみれば身体を貫かれたりした感覚のわりには血も少ないし、身体どころかコックピット内部に刀は入っていない。

痛みも引いてきて、頭がゆっくりと回ってきた。世界に色が戻り、広がる。

操縦桿から手を離していた事に驚きつつも、この状態に混乱する。何が起こったのか分からない。

—どう？ 死んだときの痛み、想像を絶するものだと思うけど？

そこに頭の中に声が聞こえてきた。何年も聞いてきた女性の声。アンドラスだ。先程までアンドラスからのアプローチは途絶えたはず。なのに今になって復活するばかりかまるで自分がこれを与えたかのように言う。

「アンドラス…？」

モニターを見ても何も見えない。真つ暗な宇宙が広がるだけだ。しかし死んだ訳では無いということは直ぐにわかった。ここはアンドラスが連れてきた空間であるということを。

—気がついた？ この馬鹿、無理して

何がどうなっているか不明だが心配をしてくれたようだ。おそらく生きていると思われるのも彼女のおかげと見て間違いない。

操縦桿やモニターがゆっくりと薄くなり、無くなる。コックピットから投げ出されたような感じになり、すべてが消えたらいつから出来たのか白い床の上に立っていた。

見渡す限り白い床。地平線の方までそれが見える。白いと言っても現実の白い床とはかけ離れている。光っているのだ。本当に現実から切り離された感じがする。

知っている。僕はこの場所を知っている。どこかで、見た、大切な思い出のはずだがよく思い出せない。

痛みも完全に消えて何も無かったように成るが、結局何が起こったのか分からない。とりあえず歩いてみる。足場はしっかりしているようで足音も聞こえる。つまり、聴覚も戻ってきたということ。

すると後ろから気配がしたので振り返る。そこには一人の女性がいた。黒い髪を伸ばし、白いワンピースを着ている。見ているだけで吸い込まれそうな翠色の目をしている。ネックレスを付けていて胸の辺りに指輪が通っている。自分と同じく細身の女性だ。

「アンドラス」

「……今どうなっているか、分かる？」

細身の女性、アンドラスは口を開いた。そして声を出した。その声は今まで僕の頭の中で響いてきた声だが、それを耳ででききとれることが素直に嬉しい。

アンドラスの質問についてだが全く分からない。が正解だろう。僕はあの時、死んだと思った。コックピットを貫かれて。自分が敵モビルスーツのコックピットに弾を入れるようにぐちゃぐちゃに殺されたかと思った。しかし身体はしっかりあり、今この場に生きている。

訳が分からない。彼女が自分に夢を見させているようなものだろうか。ならば直ぐに覺まして欲しい。戦場で寝ている時間はない。

「半分合つてて半分違う。ここは貴方の中。貴方の中にあるもうひとつの意識を弄つただけ。だから戦闘中でも影響ないから安心して」

全くわからない。アンドラスの言っていることは意味不明というか理解しようもないが、とりあえず戦闘に影響がないのならいい。地味に心を読まれた気もするが相手はアンドラスなので、今はそこまで大きな問題ではないだろう。しかし大きな問題がもうひとつある。何故、アンドラスはここに自分を導いたのか。無事であるならばそのまま戦闘続行にしておけばいいものを。わざわざ僕を弄つてまでここに引つ張つた。

「じゃあわざわざ僕をここに呼んだ理由は？話がしたいからつて訳じゃないよね」
アンドラスを指さしながらさういう。

するとアンドラスはくすりと笑いながらゆつくりと頷いた。

「当たり前。そもそも貴方、さっきの攻撃をかわせたとも思つてるの？」

当たり前と聞いた時には怒りたくなつたが、その続きを聞くとその怒りが急に覺めた。つまり自分では無理だった。防ぐことも、かわすこともできなかつた。では何故ここにいるか。死んでいる訳では無いとすると、アンドラスが動かして防いだとなる。そのミスをした僕に対して何かあるのだろう。

「僕を叱りに来たのか？ わざわざ？」

「本題は違うけどね。言つたでしょ？ ここは貴方の中だつて。叱るなら普通に声をかけるわよ。でもね、そんな余裕そもそもないでしょ？」

アンドラスの考えが読めない。まず叱るといふことも今まで無かつた。そんな乱暴な戦いをした訳では無い。確かにアンドラスがいないと死んでいたのかもしれないがそれは結果論だ。今更あーだこーだ言う必要性は無い。まずミスをする度に呼びつては僕の精神は耐えられないだろう。この経験は一度もない。アンドラスがいないと死んでいたことなんて数え切れないほどある。つまり、叱りに来たといふこと事態がおかしいのだ。

アンドラスの考えていることが分からないことは何度かある。いままではまあいいか。で済ませてきたが今回こんな場所に連れ込まれているのでまあいいか。では済まされない。本当に理解しなければならぬ時が来た。

「アンドラス、君の目的はなんだ」

「……じゃあ言つてあげる。貴方、生きる気ある？」

アンドラスの言葉に思わず口を紡ぐ。まさか彼女は僕が死に場所を探していると思つているのだろうか。

死にたい訳が無い。姉さん達を悪いやつから守るには絶対的な力が必要だ。暴力だ

けでなく、権力、気力、威力、実力、活力、勢力。それを手にする為に戦っている。もし僕が途中で死んでも大丈夫なように。だから父さんが築き上げて、僕が壊してしまつたものを築き直すんだ。あわよくばそれよりも積み上げる。それこそが僕の存在意義なのだから。それ以外の理由なんて無い。要らない。それを積み上げるもの僕の手元には何にもない。みんなが優しすぎるから僕はそれに甘え続けていた。だつたらいまで与え続けてきた愛を返さなくてはならない。それがその時なのだ。

「貴方はなんにも分かつてない。タービンスのみんなは貴方に死んで欲しいなんて微塵も思っていない」

「わかっている！わかっているよ！けど、命投げ出すくらいししないと僕が生きる意味がないじゃないか！」

僕が犯した罪にはそれ相応の罰が下るべきなのだ。本当ならそこで僕は死ぬべきだった。生きたいとか死にたくないとか関係なしに、死ぬべきだった。しかし何も積み上げてない僕はここでまた甘えた。父さん達が積み上げたものを崩したのだからそれを直せばいいと。そう許しがでたのだ。みんなに甘え続けた結果まだ甘えることしか出来ない自分が嫌になつたがそれでもタービンスにはどちらの方がいい影響を及ぼすかと考えて自殺するほど、僕は馬鹿ではない。死ぬのはまだ早い。せめて父さん達が積み上げたものを戻してから死ぬなり、傭兵になるなりすればいい。

それが最適解なのだ。それこそが本当の正解なのだ。何が違う？何処が、どう間違えているのかわからない。

「そうやって間違えたら死ぬばいいって自分勝手な考えは止めなさい！」

「違う！僕なんて、いない方がいいんだ。……だつてそうだろ？僕がいなければ僕があの時父さんと母さんの気持ちを理解していたら、今頃姉さん達はここにはいなかった！戦争なんかせず、歳屋でゆつくりすることも、運び屋の仕事をするこつだつて出来た！」

いない方がいいのに、必要ないのに。そんな物が沢山の人を救つてきた父さんや母さんの意志を踏みにじつたのだ。そんなこと許されていいはずがない。許されてはいけないんだ。だから罰として自分の命を差し出す覚悟だつてある。だからライルに自分から仕掛けて対戦を挑んで、そしてリミッター解除まで追い込んだ。

リミッター解除は予想外だったがこれこそが僕の答えだ。今更アンドラスに言われたところではいそうですかと言う訳にはいかない。

「なんで許して欲しいって言えないの？」

「言つたつて何が変わる！何も変わらないじゃないか。行動に起こさなきゃ意味ないだろ！そもそも、許してもらおう貰わないじゃない。義務だ。僕が命を投げ出して姉さん達を守るのは義務だ。権利じゃない！」

やらなければならぬことなんだ。自分で自分を強制するしかないんだ。

確かにこれだけで姉さん達が僕を許してくれるとは思わない。普通なら何を行つても許されてはならないんだ。命を投げ出し、苦痛を味わい、死ぬことより嫌なことを味わい続けなければならぬ。それが罰だ。

いくら謝罪に誠意があつた所でその罪がなくなる訳では無い。父さんも母さんも帰つてこないのだ。僕の弱さが殺した。その罪は、計り知れない罰が必要だ。

「タービンスのみんなは貴方に名瀬さんをやつて欲しいわけじゃない！名瀬さんを求めているわけじゃない。もう彼女達は弱くなんてないじゃない。貴方が命を投げ出すことで悲しむのは誰！敵？赤の他人？違うでしょ？積み上げたところで貴方が死んでは水の泡よ」

「だからそうなつてもいいようにしているんだろ！」

父さんも自分が死んでいいように準備していた。結果的には僕が壊してしまつたのだから意味はなくなつてしまつたが、本当なら僕やエストにその代を引き継ぐ筈だったので。それだけ準備していたというのに壊してしまつたことを悔いながらも、それと同じものを積み上げて最悪僕が死んでもエストやほかの兄弟に引き継ぎ出来るようにしておくべきだ。それもちゃんと考えている。

「だから貴方まで死んでみんなを悲しませてどうするの！」

「そんなのいいよ。僕がいた事なんてすぐに忘れられる。そもそも邪魔者はいない方

が……」

いい。そこまで言おうとした時だった。アンドラスが直接殴ってきたのだ。それも拳骨で。感情がこもっていた為避けられると思ったが何故か身体が動かさずにマトモに食らった。まさか殴られると思わなかった事が理由のひとつだが他にもありそうだ。アンドラスに殴られたのは勿論今回が初めてだ。

殴られた反動で飛ばされた所に襟首を掴まれて引き起こされる。ラフタに首を絞められるより、痛く、苦しい。

仕返しをしようとしても身体が上手く動かない。ここがもし、アンドラスの作った空間なら僕の身体を動かさないようにしたのだろうか。そんなこと想像出来ないが、おそらくそうなのだろう。そうでなければ何故、動かないか理由がつかない。無理なんだ。

そう思っているとアンドラスが一際強く襟首を持ち、首を絞める。

「……どうして」

抵抗しようとするがアンドラスの声でそれが自然と止まる。何故か抵抗をしてはいけないように感じた。誰かに言われた記憶もない。それよりも急に首を閉められて抵抗しない方がおかしいのだが。別にそれが気持ちのいいものではないことなど誰の目からも明らかだ。なのに、手が出ない。アンドラスが何かをしたということは間違いではなさそうだ。そう思いながら視界から外していたアンドラスを見る。

「どうして変わってしまったの…。」

アンドラスは悲痛な表情をして僕を見ていた。目頭が赤く、その目はからうつすらと涙らしきものが見える。

その表情でこの身体が動かないのはアンドラスのせいじゃないと分かる。おそらく、心のどこかでまだ甘えているのだろう。それがアンドラスを殴っては、アンドラスの言葉を否定しては駄目だと言っている。まだ、甘えているのか。他人に対して悪い影響しか与え続けなかったと言っている。まだ、まだ甘えるというのか。自分が嫌になる。

「僕も大人になったんだ。もう…君と会った頃の僕じゃない」

「みんなそう言つて、私から離れた。あの子だつて…だから…」

あの子とは誰だろうか。おそらく厄祭戦時のアンドラスのパイロットだろうが、アンドラスはその話を進んでしようとしなない。此方もわざわざ傷を掘り起こすつもりはないので聞こうとはしなかった。

その時の気がついた。アンドラスがここまで感情豊かな理由。それを僕は知らない。最初は小さい頃だったので全てに感情が宿っているのが当たり前という意味のわからない考えをして、アンドラスの意識があることを普通として生きてきたので考えようとはしなかった。そういえば、アグニカ叙事詩には悪魔が宿っていると書いてあった。では、その悪魔は何処から来る。それにアンドラスのこの感情は悪魔的イメージとはかけ

離れている。

何がどうなっているのかが分からない。

「大人って無責任ね。他人の為に行動しているように見えて自分勝手。そうでしょ？ 今の貴方がいい例よ！ そうやって他人の気持ちを考えないで！」

アンドラスの目から涙が零れる。

その彼女を見てやるせない気持ちになりながらも、こんな所で曲げる訳にはいかない。

アンドラスの手が緩んだところでアンドラスから数歩離れて叫ぶ。

「そうだよ。： そうだよ！ 身勝手でさ！ 自分のやりたことしかやらない！ 他人から奪うことになんの感情も起こらない！ 人の事しないで勝手に戦争おっはじめて、好き勝手に人を殺す！ でもね、それが人なんだ。子供とか大人とか関係ない。ただ、大人になつたことで考えてそれを行おうしたりするだけだ！」

世の中は残酷だ。救いなんてない。神の手なんて殺傷道具にしかならない。欲望があるから人は成長出来る。しかし、その欲望に知識が加わることで他人に不幸を与えたり、することが出来る。

動物は殺し合いたないと、人間の戦争より動物の喧嘩の方がマシだと誰かが言った記憶がある。それが証拠だ。他の動物だって人間並みの知能があれば争う。時には殺し、

その結果で強くなる。絶対的な力は他者を食い散らかし、経済的には貧富の差を産む。その中に優しきなど儂いものは消え去ってしまう。それほどに人は、獣は、欲望が強いのだ。

それが人なのだ。今更何を言っても、何をしても変わらない。それが人だ。

そして僕は人だ。だから人でいさせてくれ。儂い優しきで僕を塗りたくって美しい物にしないでくれ。

「だから死ぬくらい僕の勝手にさせてくれよ！…いままでありがとう。アンドラス」
アンドラスには感謝している。何度も命を救ってもらった。精神的も、ひとりじやないことは支えになった。狙撃する時には観測手になつてもらつたり、僕の心の支えだった。

しかし今はそれを否定する。僕はアンドラスじゃない。アンドラスにはなれない。

もう彼女のアプローチはいらぬ。最初に決めた通りにライルと戦い、ライルには勝てなくても戦争に勝つことでテイワズの中のターピンスのイメージを上げる。そしてマクギリスを利用してターピンスの力を上げて、父さんと母さんが積み上げて、僕が崩してしまったものを積み上げる。

それだけ。それだけ出来ればいいのだ。

最初から決めている。後はここから出よう。彼女との別れを告げて、本当に一人で、

ライルに立ち向かおう。最後まで戦い切つてやる。

そう決めて、アンドラスに背を向けた時だった。

「だつたら自分の気持ちに正直になりなさいよ！」

彼女の叫びが聞こえた。

本当は僕だつてそうしたい。だけど許されないことなんだ。それが罰だから。正直にはなつてはいけない。僕はもう、人として扱われることを否定される。タービンスの中で単純な暴力を使う化け物、悪魔。それがいいのだ。そうでなければならぬのだ。なのに、未だにわかつたと言いたい自分がある。甘えている自分がある。それが嫌だ。もう断ち切つた筈なのに今更そこに戻るなど許されない。

「言つたでしょ！それは許されちゃいけない！これが僕に下つた罰だ！」

辛くなければ罰である意味が無い。苦しくなければ罰である意味が無い。あれだけの罪を犯した僕が簡単な罰では許されない。そんな勝手なことは許されない。

僕は1人だ。1人で堪え続けて執行されなければならないのだ。

アンドラスに背を向けたまま歩き出す。このまま歩けば元に戻れそうさ。ライルとの戦いに戻れそうさ。これは間違いではないと証明できそうさ。

アンドラスはその場から動こうとしない。僕を止めようとする。それでいい。

今度はもつとマシなパイロットを探せよ。

最後にそう言おとした時だった。

「それくらい！じゃあそれを！私にも背負わせなさいよ！お前も背負えって言いなさいよ！」

アンドラスの言葉に思わず歩が止まった。歩き直そうとしても足が動かない。アンドラスに抵抗しようとした時と同じだ。弱い僕がアンドラスの言葉を肯定している。甘えている。

「……このっ！動け！動けよ！まだ甘えるのかよ！僕は！」

必死に足を動かそうとすると引きずってでも、這ってでも動かなければならぬ。そう思うのとは裏腹に足はピクリとも動かない。結局そこで倒れる。

そこにアンドラスがゆっくりと近づく。

来るな。来るな来るな。もうお前とは別れた。僕は1人だ。

そう言いながら必死に身体を動かそうとする。しかしその時には手の指すら動かなかつた。

「貴方が戦うのは、貴方が1人じゃないからでしょ？その背中のお後ろに守りたい家族がいるからでしょ？なのに、生きるのを諦めるなんておかしいよ。貴方を、子供に死んでもいいなんて言う親が世界の何処にいるのよ……」

「アンドラス：… ああ：…」

涙を流しながらアンドラスが後ろに座る。ゆっくりと僕の身体を起こして、そして抱いた。温かい、生命の温度。それが身体を温める。

「重いものなら一緒に背負う。みんなですうしてきたでしょ！今になって：… じゃあ一人で背負うなんておかしいでしょ！一人にさせるなくらい怒ってみせてよ！」

「でもこれは僕のせいなんだ。僕が：…！：… あつ：…」

その時白い床に涙が落ちていのに気付いた。これはアンドラスじゃない。僕だ。僕が泣いているのだ。アンドラスの言葉で泣いているのだ。

「いつも一緒だから。ね？だって家族でしょ？家族なんだから、一緒じゃなくつちや：…」

そう言つてアンドラスは僕を強く抱き締めた。その時許された気がした。

僕は一人ではない。その事実が、当たり前前が優しい。

その時、声が聞こえた。記憶に懐かしい声。

「お前は強いんだろ？ユウ、見せてくれよ。お前達の力を」

父さん。僕の目標となり、家族の居場所になつてくれた。

それと共に一つの光の玉が来る。

「なあに大丈夫さ。あんたなら。いつもどおりにやりな」

母さん。僕の母親になってくれた。本当は母さんが子供が産めない体だということ
は知っていた。だけど、僕からしたら母さんは母さんなのだ。

また光の玉が2人の周りを回る。

「いつまでも泣いてんじやねエ。負けたら、その時はその時だ。やるべきコトをやれ」
「大丈夫だよ——キミならきつと」

「アンドラスを……お願い」

それだけではない。聞いたことの無い男女の声が聞こえた。数えきれない量の玉が
身体中を回る。

その光はとても温かい。これが道を照らしてくれる。迷うことは無い。

今なら行ける気がする。今なら、2人なら。

「行こう、アンドラス」

そして目を閉じた。この光があれば迷いはしない。自分の道を行くことが出来る。
みんなで。

目を開けるとやはりアンドラスのコックピットの中だった。ベリアルベリアルの攻撃はすん
でのところで止まっている。アンドラスがベリアルベリアルの腕を掴み止めてくれたようだ。
これで再開できる。

アンドラスの姿もないし、先程まで僕らの周りを回っていた光もない。けど、1人ではないと確信できる。あれば夢ではない。

行ける。

深呼吸をする。そこにはまだアンドラス達の温かさがある。これで僕は強くなれる。

「アンドラス、一緒に行こう。僕らの限界を超えに」

アンドラスのツインアイが輝く。そしてベリアルと同じように線を描く。しかし、その線は阿頼耶識のリミッター解除をした紅ではなく、通常のアンドラスと同じ、緑色だ。

それと同じ瞬間にコックピットの中に温かさを感じる。アンドラスがやってくれているのだろう。安心出来る。

「こいつ……今の一瞬で何を！」

ベリアルから接触回線で伝わるライルの声から先程の現象が一瞬だったと理解出来る。でも、僕はその一瞬を非常に有意義に使えた。

「さあ、終わらせよう。ライル」

ベリアルの腕を離し、その瞬間に蹴りを入れる。ベリアルが離れた瞬間にシールドをパージして残った2丁のライフルを両手にそれぞれ一丁ずつ持つ。

ライフルの残弾はまだある。スラスターのガスも、少なくともこの戦いの間は心配しなくてもいい。

「そうだな。もう年だから身体も悲鳴を上げてきた。終わりにさせてやるよ」

2機のガンダムフレームはお互いに高め合うようにプレッシャーを放つ。だからか、止まっているはずなのに誰も襲ってこない。それどころか逃げる機体が増える。

まるで2人のために用意された空間だ。しかし、これは2人にとって都合がいい。最後を締める為に無駄な乱入は防ぎたいから。

そしてそのプレッシャーが切れたと思つたその瞬間に、2機のガンダムフレームは動き出した。

第75話

トドメの一撃

だんだんと近づいてくる鉄華団の強襲装甲艦。その前方にはグヴィデイオンのハーブビーク級が飛び出ている。普通の組織ならとらない行動だろう。戦艦だってそうボンボン買えるものでもないし、幾らナノラミネートアーマーがあるとはいえ、防ぎ切れるとはいえない。そして、全方向を守る訳では無いのだ。

そこまで考えてアメリカは笑った。確かに自分もとうとうとしない手だ。いつか真似するのでもいいかもしれない。

「窮鼠猫を噛むとはまさにこういうことですね。しかしネズミはネズミでも、得物が鋭いのですから、気は抜けませんね」

そう口に出しながらハーブビーク級を睨む。自分の隊のメンバーには何処を攻めるか詳しく連絡した上に今からでも変更出来るようにしている。

そして勿論モビルスーツパイロットから敵の情報も送られてくる。

「問題はトドメ役ですね。恐らく、バルバトス。もしくはフラウロス……ですね。恐らくフラウロスでしょう」

グシオンをライルが片付けたという情報はもう入っている。それから結構時間は

経っているの、鉄華団が気づいてないわけなのだ。もしトドメ役ならもう諦めているだろう。そもそもトドメ役をそんなところに遊ばせておくわけがない。フラウロスは現在確認できてない上にダインスレイヴ搭載の可能性もある。

一応部下には探すように言っているが未だに見つかっていないらしい。おそらくまだ鉄華団の強襲装甲艦の中。この船に一撃加えて屠るつもりなのだろう。

「失礼します。ニール・ガロン二尉です。アメリカ・エリオン一佐。報告します。準備が整ったとの事です」

そこに一人の男が入室する。

アメリカ隊のメンバーではあるが、身体の傷などの影響で戦場には出れないがその前は相当の成績を叩き出した兵。ニール・ガロンだ。包帯を身体中に巻いており顔にも巻かれていたらミイラと見間違えたかもしれない。

「ご苦労さまです。すみません。本当はゆっくり療養させてあげたいんですけど」
「構いません。私は戦場に出ている兵士ですから。お役に立てるのであればなんでも」

本当なら彼はアリアンロッドの基地に置いていくつもりだった。しかしその基地に立ち寄る前日に目を覚まし、自分も動けると言ってきたのだ。確かに動けてはいる。しかし主治医から聞いた情報から考えると立っているのもきつい筈だ。

ここでキツクいいから寝なさいと怒鳴れば彼はある程度反論してくるだろうが命令と言えばゆつくりしてくるだろう。しかし、今は兵の1人でも欲しい状況。言うのであれば猫の手も借りたい状況なのだ。

結局、不甲斐ない上司を許してくださいとしか言えなかった。

「ではマクギリス・ファリドの方はどうなっていますか？」

「現在、クジャン公の兵をはじめとした隊のが鎮圧に当たっている模様。しかし戦果は良いとはいえません」

あそこには、ガンダムバエルがある。それを封じる手段としてラスタルに直接マクギリスを屠りたいと言ったガエリオ・ボードウィン元特務三佐がガンダムキマリスを駆っているとはいえ、それでは流石に役不足だ。しかしティワズの精鋭さえ抑えつければ此方の物だ。レヴォルツ・イーオンにも、グヴィディオンにも降伏するように促している。上手く行けばこのままティワズ精鋭が押さえ付けられたら降伏ということもできなくもない。それに逃げ切れたとしてももう手は打てるようにはしている。

実際ダインスレイヴを使うこと以外はこの作戦は結構自由にやらせてもらっている。大体は敵の動きを読んでラスタルに報告するだけだったが、ここまで部隊を動かしても別にいいと言われるということは、認められたと考えてもいいだろう。だからこそ、ここで指揮の半分くらいを担っているのだ。

しかし、指揮をする者が多いと兵も大変だろう。今後は自分がエリオン家の頭首となるのでしかたないと思うが。

「今後も続けて鎮圧に当たってください。そしてグヴィディオンとレヴォルツ・イーオンにも降伏するように促してください」

「はっ！」

ニールが司令室を出ていくのを見送りながらラスタルの後ろに立つ。

ラスタルは顎に手を当てながら盾にされているハーフビーク級を見ていた。

「アメリカ。お前はあのハーフビーク級からモビルスーツが出てきてこちらを狙うと、そういうのか？」

「はい。お父様が使わせたダインスレイヴがその後鉄華団の手に渡っていてもなにも不思議ではありません。そして、それをより確実に使用するためには我々の懐に入るのが一番です」

敢えて使わせたという言葉だけを少しだけ強く言いながらラスタルの返答に答えた。その後ラスタルは少し渋い顔をしたが直ぐに戻り、顎から手を離れた。

ため息をつき、艦隊に指示を出す。

「モビルスーツ隊に言え！何としても鉄華団を仕留めろと！」

怒鳴るレベルの大きな声でラスタルは指示を出し、此方に振り向く。

その顔はずっと変わらない、父親の顔だ。何も変わらない。老けることもせずずっとエリオン家を担ってきた顔だ。

「アメリカ。よく見ておけ。これが終わったらお前は晴れてエリオン家を継ぐことになる」

女性である自分にその代を継ぐということに反対意見も多かつただろう。特に重要なポジションにいるメンバーは、自分が妾の子どころかエリオン家の血を一滴も入っていないことを知っている。それがバレたらどうなるか。ラスタルだつてわからないわけが無い。

それでもその反対意見を聞いてしかし私はアメリカに継がせたいと言つたらしい。

自分が疲れたとかそういうことではないのだろう。純粋な親の愛。血が繋がつてなからうとそれが根本にあると信じている。

「ええ。お任せ下さい。お父様。必ずやエリオン家を。」

でも、それも一人でやってきたことではない。沢山の兵がいて、経済を支える民がいてこうなっているのだ。それだけの人がいなければ私という人間は存在しない、もしくは皆無に等しい存在なのだ。だから私はその一人一人の民を平等に扱いたい。あの時の、髭のおじ様のように。

そしてそれを成すにはまた兵たちに押し付けることになる。それでも、それ以上の物

を渡せるようにならなければならぬ。

だから……無事で帰ってきて

「固まってんじやねえ！殺されてえのか！」

怒鳴り散らしながらも肩に2本の線が入ったレギンレイズを弾く。この肩に2本の線が入ったレギンレイズ……パイロットが凄いのか、機体が強いのかそれともその両方かは不明だが、強い。単純に動きに無駄が無く、此方の動きを大体知っているかのように動ける。そこまで上げてやはり特に厄介なのはパイロットだなと片付ける。

こんな奴相手に固まっては上手く動けずに撃破されて行くだろう。

厄介にも程がある。

結局盾になるはずのハーブビーク級の前方でそれを片付けようと振るっているのは頭に血が上がったからだ。

こいつらが襲ってくる前まで隣で撃っていたラフタとアジーも離れてどこかへ行ってしまった。少なくとも、イサリビの辺りにはいるだろうが視認出来ないのは守りきれなくなる可能性がある。

「とうかこんな棺桶に腰掛けている自分の身を守ることから始めなければならないのだが。」

「しやあらくせええあ！」

強引にパルチザンを振るい何とかレギンレイズとの距離をとる。しかしこれでも一瞬の油断も許されない状況だ。この常識破りのレギンレイズも少ないので包囲すれば行けそうな気もするがその数はない。あるとすれば鉄華団のだが鉄華団の方も他の機体を退けるのに手間取っている。とはいえ、テイワズ精鋭もターピンズと鉄華団だけではない。彼らの負担が増えることとなるが他の機体を潰しさえすればそこに人員を割ける。

その為にはここでやられる訳にはいかない。元々この動きも露払いと時間稼ぎなのだ。このハーフビーク級の戦艦をぶっ飛ばしてファフニールという戦艦を仕留めさえすれば此方の勝ちだ。

獅電の時すら壊したというのにこのスピナロディ・リペアで何処まで戦えるのか。少し恐ろしくはある。

「あと少し！あと少しだ！粘れ！」

そう他のメンバーに聞こえるように叫びながらも自分を鼓舞する。

そうだ。あと少し。あと少しだけ粘ればいい。そうすれば、俺達の勝ちだ。

そう思いレギンレイズと鏢迫り合いをした瞬間だった。考えてもいかなかった最悪の状況に陥った。鏢迫り合いをした事で接触回線ガンダム開かれて、別の回線越しに敵パイロットの声が聞こえたのだ。

「ハーフビーク級の内部にモビルスーツを発見！おそらくガンダムフレームと思われる！」

「アメリカ様に伝えよ！」

「ダインスレイヴと思わしき兵器を持っている！」

「敵は手負いだ！散開して破壊する！」

それぞれ違うパイロットの声だったがそれよりフラウロスが見つかったことに驚きそして絶望した。フラウロスが見つかったということは手の内を晒しているようなもの、ここまで接近した意味を消された。今から頑張つてフラウロスを守りきったとしても敵の司令官にはダインスレイヴのことは伝わってしまうだろう。つまり、回避行動を取られかねない。そして本当に避けられたら一卷の終わりだ。攻め手を失った革命軍はアリアンロットに潰されていく。まるで子供が梱包材のプチプチを潰すように簡単に。

歯噛みしながらもそのレギンレイズを弾き飛ばす。せめてフラウロスを守らなければ。まだダインスレイヴが破壊された訳では無いのだ。諦める訳にはいかない。最後

の1人まで足掻いてやらなくてはティワズにも、死んだ家族にも顔向け出来ない。

「フラウロスを死守しろ！敵に存在が知られた！繰り返す！フラウロスを死守しろって
言っつてんだろ！」

若干喜怒哀楽が可笑しくなっているのを自覚しているのがそれに構う余裕はない。
すぐ様近くにいたグレイズのコックピットを潰してレギンレイズの方に蹴り飛ばす。

なんでもいい。時間を稼げればなんでもいい。

フラウロスのパイロットがファフニールを射抜けるとは正直思わないがやるしかない。
もう俺達はそれしか賭けるものがないのだ。こんな所では終わりたくない。とな
ればフラウロスのパイロットを信じて守りきるしかない。

他のレギンレイズに素早く狙いをつけてパルチザンを叩き込む。しかしそれを読ん
でいたかのようにレギンレイズはその得物を押さえ込んで罅迫り合いの状態を作り上
げる。そしてそこにもう1機のレギンレイズが打ち合わせをしたように自然に入り込
んで来る。

「来るっ！」

レギンレイズの接近するタイミングに合わせてスラストを横方向に向けてレギン
レイズ事動かして避ける。

かなり暴力的な上に反射的な動きだがこのモバイルスーツでも、出来た。

そのまま鏢迫り合いをしていたレギンレイズに蹴りを入れて最接近してきたレギンレイズを。パルチザンで叩く。

「キリがねえなあ、おおい！」

叩いたレギンレイズを蹴りで吹き飛ばしながらまた違うレギンレイズにライフルで狙いをさざめて撃ちまくる。ほとんどが当たってないか防がれてるが回避行動をとる前に接近して再びパルチザンで叩く。

そのレギンレイズを蹴り飛ばしている間周囲を見回す。すると何処から辟邪が突っ込んできた。スラスターがやられたようであまり早くは動けてない。

エイハブウェーブの反応からして、ラフタだ。

「さっさと掴まれ！死にてえのか！」

「ごめん！」

直ぐに辟邪がハーフビーク級に掴まる。しかしこれは後に切り離す物だ。直ぐにこのモビルスーツを退けて一緒に逃げるしかない。

するとそこにバズーカを持ったグレイズが乱入してくる。イサリビを沈める気だ。

「このど素人！」

背後から接近して素早くコックピットを潰す。ついでに蹴り飛ばした後にバズーカをライフルで狙い撃つ。

その時何かが聞こえた気がしたがグレイズのコックピットを潰す音でかき消されたのか分からなかった。

「フラウロス！ さつさと逃げやがれ！」

「流せ…… うおっ！ ちよつと！」

気付けばもうファフニールはすぐそこだ。仕方ない。ここでフラウロスに撃つてもらうしかない。そう思つて直ぐにパルチザンを離してフラウロスを掴み、強引に投げた。その時、フレームから嫌な音がした。

しかしそれに気になっている暇はない。直ぐ様パルチザンを拾い、フラウロスの存在に気付いたグレイズを一撃で屠り、ライフルで牽制する。しかしそのライフルも途中で弾切れになったので蹴り飛ばす。

それだけの行動をしながらも鉄華団との通信チャンネルを開くことに成功した。

「団長！ さつさと切り離せ！」

「待つてオルガ！ 今は危険だ！ すぐそこにモビルスーツが……」

「わかつた！」

映像はよく見えなかったが、太った男を制止しながら団長が応答するのが見えた。

それに安心しているとそこに2本の線のレギンレイズが接近して来た。おそらくこ

いつは囷、本命はフラウロスに送っている。

「本当に連携が早い上に無駄がない。何度も何度も行っている強さだ。それだけの信頼関係が見える。だからとはいえ、ここを譲る訳にはいかない。」

「どけえ！」

「アメリカ様の為に！ここは断じて通さん！」

「パルチザンが悲鳴を上げる。そこにブレードが刺さっていく。完全に俺を危険視して止めるつもりだ。」

「ここで動かなければ負ける。フラウロスの武装はダインスレイヴしかないのだ。勝てるわけがない。」

他のやつに任せるしかないのか。

「そう思った時だった。何処からか来た辟邪がそのレギンレイズを押し込んだ。アジーの辟邪だ。そこにラフタの辟邪も接近して得物を強引にぶつける。」

「アジー！」

「エスト！頼む！」

それ以上の言葉は要らなかつた。

「そのレギンレイズには目もくれずにフラウロスに接近する。その瞬間、イサリビとハーフビーク級が切り離された。ハーフビークのみそのまま真っ直ぐ突き進む。」

そしてフラウロス、そしてダインスレイヴを破壊しようとしたレギンレイズを無理矢理弾き飛ばす。しかしその瞬間、パルチザンが限界を迎えて折れた。

しかし時間は充分稼いだ。フラウロスが狙撃の体制に移る。しかし撃たない。大きなチャンスだと言うのに、それをみすみす見逃している。

「どうした!」

「狙いが定まらない! やられちゃった!」

彼の言っていることが一瞬理解出来なかった。それほど衝撃だったのだ。つまり、彼は照準がお釈迦になったから撃てないと言っているのだ。そこに1機のレギンレイズが突っ込んできた。それを抱き締めるようにタックルしてすんでのところ、フラウロスから退ける。しかしフレームからもう限界だと警報が流れる。

あと少し、あと少しなのだ。

「撃て!」

「撃てよ!」

「シノオオオ!!!」

全員がフラウロスのパイロットに撃てと言う。しかしフラウロスのパイロットはパニックになり、引き金を引こうとしない。

急に飛ばされて引き金を引けと言われたがシステムがぶっ壊れていると慣れはここ

までパニックになるのも仕方ないがそれはこちらとで同じだ。此処で外せば全てが終わる。終わらせないためにはここではないそうですかと認める訳にはいかない。

クソが。そう一言吐き捨ててレギンレイズを蹴り飛ばしているフラウロスにタツクルする。そしてダインスレイヴを握った。

そして強引に合わせる。自分を照準にするのだ。これしかない。

「撃て！フラウロス！」

「スーパーギャラクシーキャノン！発射ア！」

そしてフラウロスのパイロットは引き金を引いた。当初の予定より大幅に変わってしまったがその弾はファフニールの横を

多少削って終わった。

「なっ……」

驚いてダインスレイヴを確認すると銃身のひび割れができていた。つまり、歪んでいたということ。投げ出した時か、レギンレイズにやられたのかどちらかだろう。どちらにしろ、急いだ自分に責任がある。

何故あの時、もつと考えなかった。

身体がボロボロだから？

まだ未成年だから？

機体が弱いから？

そんなの関係ないただ、負けたという真実があるだけ。そう、戦場ではそんなこと関係ない。あるのは力があるかないか。強いか弱いか。ただそれだけ。それこそが戦争の本質だ。

そこにレギンレイズが出てきてフラウロスを取り押さえる。

「クソが……クソガアアアア!!」

フラウロスのパイロットの絶叫を通信越しに聞いた。まだ生きてはいる。しかしそう思うとこれからされることを想像すると悔しくなる。しかしもう助けることは出来ない。一言謝ってイサリビへと逃げた。

しかしそのイサリビの方を見るとイサリビも抑えられていた。単純な数の暴力で囲まれていた。

「そのパイロット！武器を捨てて投降しろ！」

もう武器はないこの機体に狙いをさざめながらレギンレイズのパイロットが言う。物量、実力全てにおいて敗北だ。やはり勢いだけでは無理だったか。

「降伏しろ！」

その近くでは数に押されたか辟邪2機も押さええられていた。その辟邪との通信が開かれる。二人ともコックピットの中で悔しそうな顔をしながら止まっていた。

結局、両手を上げて降伏をした。

この戦争ももう時期終わる。アリアンロッドが勝利を飾って終わる。

俺達はテイワズには戻れず、また野良に逆戻り。

そう思った時だった。

「革命は終わっていない！」

革命軍側の通信が開かれる。革命軍全てに繋がっているのだ。出しているのは、ガンダムバエル。マクギリス・ファリドだ。

「諸君らの気高き理想は決して絶やしてはならない！」

ガンダムバエルから演説を行っているのだ。この敗北ムードを変えようとしているのだろう。

「アグニカ・カイエルの意思は常に我々と共にある！」

するとスピナロディ・リペアが多数のエイハブウェーブの反応を拾った。この反応には見覚えがある。

レヴォルツ・イーオンの戦艦だ。鉄華団の方に戦力を割いたからか手薄になったレヴォルツ・イーオンは一部の部隊をアリアンロッドの後方、つまり此方から見ると前方に回していた。

「忘れるな！アグニカ・カイエルの望んだ未来を！それを我々が成し遂げる！皆！バエ

ルの元を集え！」

囲まれたと思つていたらこちらが囲んでいたのだ。グヴィディオンも追い上げてこちらのあとを追う。

気付けばアリアンロッドは一点に集まつていた。ダインスレイヴという条約違反の兵器を使用してまで追い込んだものの、テイワズの狙撃手によってそれを破壊され、その隙をついた鉄華団を取り押さえるも、手薄になった場所から他の兵が押し上げる。

「ちよつとだけ、やってみるか」

そう呟いた時には幾つかの戦艦がイサリビを解放していた。アリアンロッドに焦りが生まれる。そこに潰け込むように降伏を促していたレギンレイズを殴って武器を奪う。形勢逆転だ。望まれない形ではあるものの、勝利は近づいている。

すると別のグレイズがこちらに向けて発砲してきた。とりあえずそれを避けながらそのグレイズを沈める。そしてもう一機接近してきた。するとそこにグヴィディオンのグレイズが割り込んでくる。そのグレイズの不意打ちに負けてアリアンロッドのグレイズが落ちた。あそこで演説してすぐだと言うのにここまで来るのが早い。何をどうしたのかは分からないがこちらにしてみれば嬉しい誤算だ。

「我々の力で、アグニカ・カイエルの理想を成し遂げる！」

そう言いながらガンダムバエルが突っ込んできて、何機かのグレイズと2本の線が入っているやつはいないとはいえ性能の高いレギンレイズを仕留めてこちらに来た。

「君がユウ・タービンの兄か。その力、計り知れないな」

「よくここまで出来たもんだ。なんかあったのか?」

お互いに背中合わせになりながらお互いの少ない射撃武器を使い、牽制をする。彼の狙いはおそらくフアフニール。沈める気ではないだろうが、突っ込んで降伏を促すのだろう。

「君の弟に、ユウ・タービンに言われたんだ。アグニカ・カイエルの願いを継げるのかと。彼がわざわざバエル宮殿にまで潜入して意思確認をとった意味がわかったよ」

あのバエル宮殿に潜入して一発やらかしたことについてだろう。あの時俺は起きたばかりだったので言葉で聞いただけだがわざわざバエルに乗り込もうとする2人を無力化してものの、マクギリス・フアリドにバエルを譲ったことだ。自分の弟ながらもくやる。と思っていたようだがそれも無駄ではなかったようだ。

「待て! マクギリス!」

牽制している2機に紫色のモビルスーツが接近してくる。ガンダムフレームの機体、キマリスだ。おそらく因縁かなんかだろう。しかし勝利の為にはここは譲れない。

「行け、そして勝て」

「感謝する」

バエルがフアフニールに行くのを見ながらキマリスの槍を弾いた。初心者離れした機動。おそらく、阿頼耶識だろう。しかしアリアンロッドのパイロットが何故それを。しかし考えるのはそこでやめた。

今はこいつをねじ伏せることだけを考える。

「なんだ…こいつっ！」

確かに強い。出力などの機体性能において全て負けている。パイロットの強さはほぼ同じとなるとどちらが負けるかは明確だった。

一体一なら、だが。

「三日月・オーガス！」

キマリスに出力で負けながらもその名を叫ぶ。すると何処からか来たバルバトスルプスがソードメイスをキマリスに強引にぶつける。キマリスはサブアーム付きのシールドで防ぐが単純な衝撃は抑えきれず、シールドを支えていたサブアームが破壊される。

「あんたチョココの隣の人じゃん」

三日月はユウに負けず劣らずの変な名前を思い出したのか、そう言いながらキマリスの槍を弾いた。そこにスピナロデイ・リペアがレギンレイズから奪った銃剣を強引に当

てて、槍を吹き飛ばす。

「()を通せ！」

「断る！」

キマリスはそのまま刀を引き抜いて銃剣を弾く。同時に銃のパーツに傷を付けながら歪ませる。

そこにバルバトスルプスが割り込んで刀を抑える。

「行くぞー！」

そこに出来た隙を付き、キマリスもうひとつのサブアームを破壊しながらキマリスを取り押さえる。

そしてそのバツクパツクに銃剣を押しえつけた。

どれだけ歪んでいようがゼロ距離なら関係ない。

そう言いながら馬鹿みたいに撃ちまくる。当然銃も壊れていくがキマリスの損傷も馬鹿にならない。バツクパツクを破壊され、エイハブリアクターを破壊できないからと押される。フレイムのナノラミネートアーマーとエイハブリアクターでペチャンコ。

そう思ったがエイハブリアクターが上手く押せないでそこから火を吹かせる。これでパイロットは運が良くとも気絶、悪かったら絶命しているだろう。その証明としてキマリスのツインカメラの光は無くなり、動きを停止した。

そのキマリスをとりあえず蹴り飛ばして見ると、バエルがファフニールに取り付いて、そのバエルソードをブリッジに突きつけていた。

隣の船もレヴォオルツ・イーオンにやられたのか、見せしめにされたのか沈んでいた。

「終わったな」

「うん」

その様子を見ながら呟くと隣にバルバトスが並ぶ。そこに辟邪が2機、接近してきた。二人とも無事だったことに安堵する。

相手からの攻撃を全く受けていないのにも関わらずボロボロになったスピナロディ・リペアのコックピットの中で貯めていた息を吐いた。

その顔はやり切った顔だった。

第76話

ユウ

「アンドラス！」

「ベリアル！」

お互いに限界を超えたガンダムフレームの機体。機体性能は同じと考えても良いだろう。つまり、ここからはパイロットの腕次第。

勝つのはどちらか、傍から見ている側にはその戦いを理解することは不可能だが、一刻も早く終わって欲しいと願った。

しかしそのパイロットには黒い塊が紅い線を出しながら動くのと白い塊が翠の線を出しながら回るものしか見えないが。

それでも強すぎるプレッシャーを感じた。

後ほど分かる事だが、運悪く近くにいたパイロットは気絶していたらしい。

両者のモビルスーツが高速で動ける場合、接近戦になることが多い。高速で動くことで射撃は外しやすくなるし、接近戦ならその移動のエネルギーをそのまま相手にぶつけ

ることが出来るからだ。他にも、撃つ時に狙うという作業と撃った瞬間は止まっていな
いと銃身が壊れたりするというのもある。そのせいか、出力が大きいガンダムフレーム
は接近戦を好む機体が多い。このアンドラスも本当は汎用機なのだ。フラウロスによ
うな射撃に重点を置いた機体は珍しいのだ。

「だからといって負けるつもりは無いけどね！」

みんなで生きて、帰るために。ここで負ける訳にはいかない。

ここまで来ると消耗などは考えない方がいい。時間が無いのだ。考える内容は少な
い事に限る。短時間で必要最低限を思考する。

「勝って、帰るんだからな！」

そう言いながら、ライフルで射撃を開始した。勿論狙いはベリアル。それも、スラス
ターだ。刀は今から折る余裕はない。しかし、コックピットに弾を入れるにはどうにか
して二重装甲、もしくはナノラミネートアーマーの厚いパーツを攻略しなければならな
いのだ。バリアが貼られているようなものだ。しかも人体の動きを忠実に再現出来る
阿頼耶識は回避が非常にやりやすい。ガンダムフレームなら動きの無駄を無くすこと
が出来る。それにバエル宮殿にて戦った時に思った感想としてあいつは生身でも相当
強い。つまり、阿頼耶識との相性はいいはずだ。では、どうするか。答えは簡単だ。阿
頼耶識の影響がない部分を狙って戦力を弱くすればいい。生身の体にスラスターはな

い。

もちろん先程の銃身の件もある。あれだけの速度を誇り、阿頼耶識のリミッターまで外したベリアルは止まるわけないし、旋回も早い。というか銃口を睨まれている時点で正確無比な読み取れない射撃はあまり期待できない。射線から常時ズレているのだ。となるとそこに合わせる方法は少ない。とはいえない訳では無い。

1度わかりやすく、ベリアルを狙う。予想通りベリアルはそこから離れて回り込むようにしてくる。そしてそれを追うようにした後すぐさまベリアルのメインカメラを狙って二発撃つ。その弾は吸い込まれるようにベリアルに当たった。これだ。

やはり幾らライルと言えども僕の気配は感じることはできないのだ。阿頼耶識のリミッターを外してもパイロットが変わる訳では無い。つまり、ある程度の常識は通用するという事。操縦の細かな癖も全く変わらない。予想通り次弾を警戒してベリアルが旋回した。そのまま狙う時間も与えずに突っ込む。

「早いーけどー」

銃身の問題があるので撃つ瞬間は前か後ろにしかいけない。それだけ動きが制限されるこちらに比べると接近戦は逆に範囲が広がる。不利なのはこちらだ。

ベリアルは刀が一本しかないので連撃はおそらく来ない。来るとすればスピードを生かしたヒット&アウェイ。

一撃を防げればもう一撃までの時間が開く。そこを突いてみるしかない。

そう考える間にベリアルの一太刀目が見えた。殺気で読み取ってからでは遅い。勘と反射で動くしかない。

「——っ！」

「はっ！」

ギリギリまで引き寄せれば最低限の動きでかわせる。あと少し、それを読み取ろうとした事がミスだった。

かわそうとするがその対応が遅く、ライフルを一丁斬られる。アンドラスの動きと連動して斬れた破片が離れていく。

ギリギリなんて考えている場合じゃない。思考する時間は愚か。脳の指令が神経に到達するまでの時間ですから惜しい。剣先などは速すぎて見ることに出来なかつたのだから。

ベリアルを見逃さないように目で追いながらも離れる。しかしフェイントを仕掛けられて視界から消えられた。

「んっ！」

——上だ！

何処だという暇もなくて、頭に響いた音に従い、その場から離れる。そこにベリアル

が通過する。おそらく狙いは残ったライフルだろう。これを斬られてはマトモな武器がなくなる。

しかしベリアルはまだ諦めずに急に曲がって追ってくる。

その速さは弾丸並みだ。

まだその速さに思考が追いつかないので回って旋回して避ける。

今度こそはベリアルから目を離さずにライフルで撃つ。狙いは変わらずスラスター。しかし、思考が遅いのか射線にベリアルが入らない。

——遅いか！

——反応は何とかする！貴方はデータを！

アンドラスから言葉が入るがその内容は理解不能だ。まさかプログラミングをはじめからやり直すということだろうか。

そんな事を考えている間にもベリアルはまた視界から消えて攻撃を仕掛ける。

視界から消えた瞬間にブーストをかけて記憶の中のベリアルがいた位置に行く。こゝなら攻めては来ないので一瞬だけ安全だ。

今までの軌道はベリアルのカメラの光が教えてくれる。光が取り残されるほどの速度で動いているのだからベリアル軌道は読める。勿論過去の軌道だが。

しかしその安全も一瞬でなくなる。ベリアルがアンドラスの軌道を読み取れないは

ずが無い。すぐさま大きく旋回して戻ってくる。

——私と自分を重ねて動いて！

先程と同じアンドラスから声がかかる。しかし頭に入ってくる音が少ないからかその真意が読み取れない。

詳しく！と言いたいがその間にベリアルは2回以上は突っ込んでくるだろう。それだけの時間は取り残されてない。

——操縦桿をはな…

アンドラスの音声が途絶える。その一瞬だけ操縦桿の感度が悪くなった。

まるでこれは必要ないとでも言うように。アンドラスが自分で動かすとも言いいたのか。しかし、アンドラスなら素早い反応は出来ても大切なテクニクがない。その場合ベリアルとの鬼ごっこが始まるだけだ。

それに抵抗しようとした瞬間をベリアルが逃がすはずなかった。紅い線を描きながら回り、後ろから突っ込んできた。

——思考を！

——そうか！

アンドラスが反転するのにどれだけの時間がかかるだろう。この状態ならベリアルがたどり着く前に出来そうだが、その為に回避の時間をとるのは惜しい。となればこの

背を向いた状態でかわすのが良いだろう。

後ろに目はない。先程の言ったように殺気やプレッシャーを感じてからでは遅い。勘で避ける。

それと同時にアンドラスの真意を理解出来た。操縦桿を握って動かす必要は無い。アンドラスがこちらに情報を与えるのならこちらも出来るはずだ。しかもそれは喋るよりも文を見るよりも早い。

動きを想像する。ベリアル最後の最後に見た旋回のほんの少しの軌道から、そして彼の動きの癖のデータから考えて来るのは

——そこ！

バランスサーを使って軸を倒す。そのギリギリをベリアルが通過した。

操縦桿を全く動かさずに。思ってみればアンドラスがアンドラスを動かすのに操縦桿を必要とはしない。それに自分の身体を動かすように滑らかにかつ、最高の反応速度で動ける。

考えるだけで動く。身体を動かす必要は無い。ただ、外の情報からアンドラスに動きを伝えるだけでいい。身体を動かすという一工程が無くなるだけで反応速度は速くなる。

そして両者ともに加速する。

斬られたライフルを投げる。ライルは何かあると踏んだのかベリアルを大きく回しながら旋回させる。

—今っ！

—当たれ！

ベリアルのスラスターから狙いを離さないようにしながら数発撃つ。加速すること
で衝撃が強くなる接近攻撃に比べ、射撃武器は出力が弱いと逆に弱くなるという障害が
発生する。問題は機体の速度ではないのだ。

それでもこのライフルが弱い訳では無い。ナノラミネートアーマーに覆われてさえ
なければ貫通できる力を持っている。筈なのだ。しかしスラスターに当たっても弾が
弾かれる。リミッター解除は装甲に影響を及ぼすとは聞いてない。何かしらの減衰術
でもあるのだろうか。

ここは接近戦でもやるべきだろうか。一瞬だけそう考えてすぐに否定した。そんな
ことしても変わらない所の騒ぎではない。慣れてないことでは強敵は倒せない。

結局かわし続けるしか無さそうだ。

今のうちは残弾の心配をしなくていいのが唯一の救いだろう。アンドラスに操作を
任せたから反応は速くなっていてそれにそれを感じさせないくらい速いベリアル。もう
パイロットが人間がどうかすら疑わしい。

ベリアルに向けて何発か撃つ。しかし先程と同じようにスラストターの被害は少ない。おそらく、硬い場所に当たって弾かれていただけだ。スラストターのガスを発射する口ならバルカンでも破壊できる。逆にタンクを守っているパーツはそれなりに硬い。そしてそれは向き合っていて、スラストターを狙うとすると当たる主な場所となる。どちらにしろ、手段がゼロな訳では無いがそれなりの行動を起きなければ負けるので、別の手段を考える必要がある。

まわりを見渡す。なんでもいい。何かライルに大きな隙を与えられるものならなんでもいい。何か、何かないのか。

他のモビルスーツは逃げたし、他の銃器はない。辺りには何も無い。

いや、ある。パージした装甲やシールド。宇宙空間に漂っているだけのただのデブリだ。だが有効価値がない訳では無い。

脚部ナイフを展開する。そしてベリアルから一目散に逃げた。アンドラスとベリアルは速度はほぼ同じ。そのアンドラスが逃げればベリアルも簡単には追いつけない。

つまり、思考と会話をする余裕が双方に現れる。

とりあえず深呼吸をする。ベリアルも1000m砲を馬鹿撃ちしているがこの距離とそのエイムでは当たっても損傷は少ない。

機体の損傷度を見るがそこまで悪くは無い。ただ、左腕の損傷が不自然な程に酷い。

ライルの刀を何度も受けてきたとはいえ、右腕よりやけに損傷が酷い。

おそらく盾をやられた時だ。その時に破片か何かが関節に入ったりしたのだろう。破片によって関節がすり減つたらしたら面倒くさい。

左で撃つのは控えた方がいい。そして現在は抑えて撃つ方がいいがトドメは出力をあげた方がいい。多分そこら辺もアンドラスに言ったら適当にやってくれるだろうが細かい調整が必要なのでそこは手動でやりたい。操縦の手があくのでやりやすくはあるが。

そう思考していると目標の地点にたどり着く。機体の速度が速い割には思考の時間が十分あったということは頭が慣れてきたのだろうか。普通ならありえないがアンドラスが強引にやらせていると考えればなんでも出来そうな気もする。

兎に角作戦とも言えないポツと出の賭けを実行してみる。

ベリアルとの距離は目視だが500辺りだろう。宇宙では距離感が掴みにくいいため定かではないが、タイミングを合わせるためにはベリアルの動きと距離を知るのが必要不可欠だ。とりあえずけつている間に追い付かれておしまいなんて距離じゃない。

「やって…とぉー！」

まずはパージした装甲を蹴り飛ばす。ベリアルの速度ならそのまま突っ込んでくる可能性もあるにはある。というか旋回という無駄を省きたいと普通なら考える。外か

ら見ているものだったら、だが。しかしパージした装甲とはいえ高速でぶつかればどうなるか。ライルが分からないはずもないし、高速でデブリなどが接近して来れば幾らガンダムフレームのモビルスーツに乗っていようと流石に恐怖を感じるだろう。コックピットを狙ったのでそこを危険視する可能性もある。

そこまで考えるとベリアルがそこに突っ込んできた。急いで先程頭の中で考えた構想に合わせるようにアンドラスに頭で命令を送る。そしてアンドラスが準備をしながらライフルを構えて、その状態で身体を左斜めに傾ける。右の攻撃を避けるように。

「——っ！」

反射的なのか分からないがベリアルが横に避ける。方法はベリアルから見ても右、つまりアンドラスから見ても左だ。そして刀を持っている腕も右。左ががら空きだ。

——今だ！

そう言う余裕は無かったが心の中ではそう思いながら展開させていたバックパツクのサブアームをベリアル脚に絡ませる。丁度スラスターだったらしく、そこに早撃ちの要領でライフルを動かして向けて撃つ。スラスターが一瞬火を噴いたかと思うとベリアルをはじき飛ばした。その負荷に耐えられなかったのかサブアームの関節パーツが弾けて壊れた。しかし後ろを取れた状態でスラスターをひとつでも壊せたというのは正直大きい。

直ぐ様ライフルで再び狙いをつける。とはいえ簡単な物だが外しはしない。引き金を引く。それとほぼ同じタイミングでベリアルが振り向きながら刀を振るった。弾丸は当初の予定だったスラストスターをかすり、膝に命中した。そして刀はアンドラスの左腕の付け根に突き刺さり、そして壊された。アンドラスの左腕が斬られたのだ。

「——っ！」

声を出そうとしても出せなかった。それほど動揺したのだ。アンドラスの左腕が破壊されたのはこれで初めてだ。それどころではない。明確な部位破壊をされたがはじめてなのだ。これまで何度もライルと戦ったが腕も脚も破壊されなかった。それだけ守ってきたのだが今回は違う。ライルもベリアルというガンダムフレームのモビルスーツに乗り込み、そして戦いリミッター解除という段階まで足を踏み入れたのだ。

殺す気なものも彼が常識を簡単に破壊するほど強いのも分かっている。それに安心してわけでも慢心したわけでもない。

単に壊されたということに驚きを感じた。それと共にまた明確な恐怖を。死の1文字が大きくなるのを感じた。

しかし頭を直ぐに切り替える。ここでやられたらみんなの気持ちも、僕の努力も、父さんや母さんの積み上げたものが全部無駄になる。それはさせない。それだけは絶対にさせてはならない。

——痛いだろう、アンドラス。ゴメンな。でも、負ける訳にはいかないんだ！
アンドラスがツインアイを再び光らせる。それと共に頭の中に音が流れる。その音にも感情が籠る。

——いいよ。私も背負うから。行こう。

——ああ。一緒に！

アンドラスを加速させる。斬られたのがライフルやそれを持った右腕でなかったことは不幸中の幸いだった。

まだ続行できる。

ライフルの出力を上げる。狙いはバックバック。完全な無力化をするしかない。

「うおおおおおー！」

「はあああー！」

2人のガンダムパイロットが雄叫びを上げながら攻撃する。ベリアルは攻撃をシールドがない代わりに脚部ナイフで受け止める。その度に脚部ナイフを固定しているパーツが悲鳴を上げる。その為脚部ナイフを使ってこちらから仕掛けることは出来ない。

両者が後ろをとろうとして、加速をしながら攻撃を繰り返す。その度に装甲に傷がつき、武器は消耗していく。しかし流れる緑と赤の光は交わりながらも混ざり合うことな

くお互いの得物を酷使し続ける。

アンドラスも限界だ。ライフルの残弾も正直言って無限になる訳では無いのでここまでやっていれば弾切れも近い。自分の身体ももう持たないだろう。加速しているからか身体から嫌な音がする。今力を抜いたら身体が壊れてしまうのではないかと思ってしまうほどだ。勿論試さないし、試したくもないが。

しかしこのままでは共倒れだ。痛み分け所ではない。何も変わらない。お互いにお互いを殺して終了。

何か策を打たなければならぬ。とは言っても思考はベリアルルの動きに対応することとで精一杯だ。戦場から離れているのか近づいているのかすら全くわからない。分かることはもう随分と思考しっぱなしという事だ。激しい頭痛もする。もう自分がどうなっているかすら全く分からないのだ。

出るのは雄叫びかうめき声。マトモに喋ることすら出来ない。

しかし耳は大丈夫なようだ。時折何処かから声が聞こえてベリアルルの場所を教えてください。それがどこかで聞いた懐かしい声も混じっているという所は思考を切った。

味覚は分からないが触覚、嗅覚も明らかに鈍くなっている。これもアンドラスの力の影響なのだろうか。

答えはわからない。しかし考えずに戦うことしか僕にはできない。やるしかないの

だ。

その時だった。アンドラスから情報が流れた。

——ユウ！

一瞬アンドラスに示された場所を見るとそこにはアリアンロッドの戦艦があった。フアフニールかは分からないのでこいつを壊しても戦争は終わらないかもしれないがここまで接近するとは思わなかった。そしてここまで接近して撃たれないことも。

そこまで考えた瞬間にバックバックに大きな衝撃を感じてその戦艦に叩きつけられた。見なくても思考しなくても分かる。ライルだ。しかし背中から押し付けられたということはこちらが背を向けているということ。それは不味い何かしらの手を打たなければ負ける。どちらにしろ出しては防がれるのイタチごっこだが。

——アンドラス！

このままでは危険なので左脚を軸として右脚を振り回す。遠心力の入った脚部ナイフがベリアルに叩き込まれる。

何かが歪む音がした。限界を迎えて右脚の脚部ナイフが曲がる。

しかし軸が安定していたベリアルはそのままの勢いで刀を刺す。コックピット付近に刺されたそれは破片を飛び散らしてアンドラスを押し付けた。破片がコックピットの中に入る。そのうち、1つが腹に刺さった。

アンドラスが与えたものではない。本物の痛み。とめどなく血が溢れる。痛い。そのあまりか思考が止まる。しかしその一部をアンドラスが緩和するように光が包む。痛みが緩和したので今度は左脚の脚部ナイフをベリアルに突き刺した。とはいえ、その位置は左腕だが。

流石にライルもこの位置では殺せないことを知っているので直ぐに抜いて一旦離れる。そこにライフルの残弾を叩き込むように引き金を引きまくった。

鉄の雨が降るようにベリアルを破壊していく。巻き添えになった戦艦も火を吹いて壊されていく。

——アンドラス！出力全開！

流石にこれではライフルの弾切れでこちらの負けだ。もう勝つ方法はひとつしかない。完璧アドリブのゼロ距離射撃。つまり、刀の間合いで撃つことになる。

緊張が高まる。しかしベリアルはそれを楽しむように戦艦を一周して後ろに来た。

ここでは無理だ。そう悟って脚部ナイフを盾にして一撃を防ぎきる。しかし衝撃で飛ばされてまた戦艦に叩きつけられた。もう耐Gが働いてないのではないかと思うほどの衝撃が身体を壊す。

頭の中がぐちゃぐちゃになって行く。でも、生を諦めたくはなかった。

アンドラスのスラスタを破壊する勢いでガスを使う。コックピットでは爆音が轟

き、コックピットに身体が押し付けられて、身体に刺さった破片がより深くまで行く。血が飛び散り、コックピットは無残な形と成り果てる。

「俺は：： お前を殺す！」

ベリアルからそう聞こえた。完全にライルの全力の声だ。重いプレッシャーがかかるがそれを気にせず引き金に指をかけるように操縦桿を握る。スナイプモード用の引き金は破片で壊されてしまった。少なくとも今は効果を期待できない。

「ここで仕留めて終わりにしてやる！」

「こつちもそのつもりだ！」

まだ何故か呂律はしつかりしていた。しかし自分でも何を叫んでいるのかその言葉がよく分からない。それほど集中を高めてベリアルに特攻した。

死を覚悟する訳では無い。生きる為の、みんなでまたやり直すための特攻。

思考の時間も十分じゃない。マトモに頭では考えられないこの状況でなんでこんな答えが出たかすら、分からない。

しかしそれが僕の答えだ。

「確かにお前は強くなった。最初は見間違えるほど、しかし！」

ベリアルは直ぐに構えて特攻に対応する。ライフルの引き金を引かせずに終わらせるつもりだ。ライルも分かっているのだろう。ゼロ距離射撃が狙いだ。しかしその

タイミングは掴めないし、いつ襲ってくるかが分からないのでいつでも対応できるようにしているのだ。

「それは負けてもいい理由にはならない！」

ここまで構えられるとゼロ距離所ではない。気付けば斬られているようなレベルなのだ。フェイントでも、使ってみるか。しかしそれに簡単に騙されてくれるとはとても思えない。最悪こちらが乗せられる可能性だつてある。

そう思った瞬間、ベリアルが一気に距離をつめてきた。速すぎて殺気を感じる前に刺されそうだが勘からしてライフルが狙いではない。狙いはコックピットだ。仕留めに来ている。勿論こちらもそのつもりだが刺し違える覚悟もあるし、可能性も考えている。

「僕には、帰る居場所があるんだー！」

ここで仕留められては全てが無駄になる。

タービンスの家族が…… シュインだつて僕の帰りを待っている。だから負ける訳にはいかない。

——アンドラス！頼む！君の全てを僕にくれ！

動かしても意味が無いというのに操縦桿を握る強さが強くなる。それと同時に歯を

食いしばりながらそして、痛みには耐えながらベリアルを見る。

ベリアルが馬鹿正直に突っ込む。そんな馬鹿正直な突きでも動きは読めない、力はナノラミネートアーマーを貫通する、そして、下手な芝居を諸共しないその速さ。

アグニカ・カイエルの再来とはよく言ったものだ。

だからこそ全てを使う。自分が今まで積み上げてきたものを全て、ここで使うことでライルを倒す。

そしてこの戦いを終わらせる。

「うおおっ！」

ベリアルの刀をずっと見ても攻撃はかわしきれない。確認してからでは遅い。もつともつと早く。反応速度の問題なら自分が一番はやいのだ。だからこそ、かわせない訳が無い。2人ならかわせないはずがない。

そう思っていると強い殺気を感じた。その瞬間から目に見えない力に動かされるようにアンドラスを斜めに傾ける。するとアンドラスが先程までいた場所に刀が通り過ぎる。

しかしベリアル本体はかわしきれずにそのまま衝突する。物凄い速度の質量が当たる衝撃は馬鹿にならない。実際メイスなどで叩かれるより、質量も速度もある。その衝撃に耐えられなくなったのかフレームが悲鳴をあげる。このままペチャンコになって

しまうのではと思うほどベリアルが近くにきて、そして離れた。しかし警報の類は一切流れなかった。おそらくアンドラスが止めているのだろう。それを確認している時間があればライルは確実に仕留めてくる。普段は危険を知らせる警報が危険を呼び寄せることとなるのだ。そういう小さな配慮にも感謝しながらもすかさずバルカンを放ち、ベリアルメインカメラを傷つける。しかしバルカンの威力ではそこまで期待はできない。当たり前のように動くベリアルの攻撃をすんでのところでさける。

そのままベリアルとの鬼ごっこが始まる。もうそろそろ、フラウロスの一撃が決まってもいい時間なのだがそれらしい音は全く聞こえない。ミスしたのか。となればこちらも逃げたいがライルが逃がしてくれるはずもないし、ライルを逃がす気もない。そのまま鬼ごっこを続けている間に最初に叩きつけられてその後盾として使っていた敵艦が落ちていくのを感じた。流石にアンドラスとベリアルの力には耐えきれなかったか。敵艦なのでそこまで大きな問題は無いがこれでベリアルとの直接対決を妨げるものは無くなった。

「これだー！」

ライルもそれを分かっている、尚且つゼロ距離射撃の可能性を分かちつて突っ込んでくる。ベリアルは100mm砲を全く使わずに、そのまま真っ直ぐ突っ込んでくる。

自分だって死ぬかもしれない。戦場に立っているのだからそんなこと分かる。しか

し彼は今の今まで死ぬ可能性が高い手を使ってきただろうか。否、あれだけ強いと間違っているように感じるが彼は生き残ることも大切にしている。しかし今彼は死ぬ可能性が高い手段を使い殺しに来ている。

それでないかと殺せないかと分かっているから。自分と同じ、強いパイロットと認めたとその証拠だ。

——ここで決める！

そう意気込んでライフルでベリアルを狙う。チャンスは一度、もう残弾全てを吐き出す。その上その射撃が有効なタイミングは一瞬もない。思考しても間に合わない。精神を研ぎ澄ます。するとアンドラスから何か送られたのか衝撃が来て刺された場所から血が飛び出る。その時に構えたベリアルを見ると、ベリアル動きが何かと重なって見えた。そして少し遅くなる。とはいえ、その速度は目で追える速度ではない。思考を加速させたという事は直ぐに分かった。自然な思考の加速の慣れでは間に合わない。そうアンドラスだつて分かったのだろう。

突っ込んでくるベリアル。その速さはアンドラスの限界を超えている。もしアンドラスからの思考の加速が無ければ確認することすら不可能だつただろう。しかし狙いアンドラスのコックピットということは分かりきっている。しかし、今から回避したところで無駄な時間を喰うだけだ。意味は無い。接近してくれるということはゼロ距離

射撃がやりやすくなる。これは相手の攻撃をかわした方が勝つ。本能的にそう悟った。刀の軌道もゼロ距離射撃の為のライフルの動き軌道もわかりにくい訳では無い。双方共に相手の動きは熟知している。だからこそ、そのわかり切った動きをどうやって当てるか。思考の時間は十分でない。フェイント等を使うこともおそらく不可能。使えても使つてこないだろう。

単純な接近勝負だ。素人でも、よくある勝負。ただ、それが機体の限界を超えた勝負だということだけ。しかしそれがパイロットの身体と精神を壊していく。

身体の中で血が逆流するような気持ち悪さとともに口から何か飛び出る。

しかしそれでもベリアルは刀から目を離さない。それを目で追いながらアンドラスの行動を頭で組み立てる。

ベリアルが刀を振りかぶる。普通ならそのまま衝突するだろう速度。それに合わせられるということはライルもベリアルは援護を受けているのか。真意は分からないが、その思考は常人離れというレベルではないということだけはよくわかった。

ベリアルが刀を振るう。それはアンドラスのコックピットをかすり、その横に突き刺さった。そしてアンドラスのライフルもコックピット横を貫通した。そして当たった部位から爆発が起こった。

両者のモビルスーツのフレームをぶつ壊したのだ。しかし直撃を免れたコックピット

トも無事ではない。すぐ横で爆発が起こったのだ当然先程とは比べ物にならない破片が飛び散り、身体を割く。そして爆炎によって身が焼かれる。

「エ、エイミー……」

「アンドラス……」

また爆発が起こる。小さなものだったがそれはお互いのモビルスーツを離しアンドラスのライフルを破壊した。

流れていくアンドラスの中で意識が遠くなる。アンドラスが与えている痛みではない。逆にアンドラスが弱めてくれていたのだ。それと同時に悟る。もう死ぬんだと。もう身体感覚がほとんどないのだ。土手っ腹には大きめの破片が突き刺さり、血が止まらない。それだけではなく、ノーマルスーツを貫通するほどの大きさの破片が数え切れないほど突き刺さっている。流石に死を覚悟した。

それと同時に理解した。これはアンドラスが最後に用意してくれた時間であると。

——ごめん。私にはこの程度しか

頭の中にアンドラスの声が聞こえる。ずっと僕を守ってくれた、支えてくれた声。死ぬ時も聞かせてくれたのだ。

「ああ……んどう……す……」

肺もやられたのか、スースーと音が聞こえて、声も上手く出せない。勿論上手く呼吸

もできない。身体も動かずにただ、身体から出て自由になった血がコックピットを赤く染めていた。

目の前が真っ赤で良く見えない。こんなにも世界は赤かったのか。それがなんの色なのかよく分からない。

「みえ…な…」

——大丈夫。私はここにいる。ずっと貴方のそばにいる。

今度は真っ黒になった。瞼が閉じたのか。それとも目に異常が出たのか分からない。

しかしアンドラスが安心させるように光を出す。真っ暗な世界に温かさだけを感じる。しかし冷たい世界では焼け石に水だ。なんにも感じない。

死ぬんだ。僕は死ぬんだ。

死にたくないと言つて。まだ死ねないと足掻いて。しかし死ぬんだ。

心残りはある。タービンスのみんなは、これからどうするのだろう。僕が死んでも、大丈夫だろうか。苦しくないだろうか。これから辛いことは沢山あるので僕の死で諦めて欲しくない。エストだけでは無理かもしれないから地球から兄弟を呼ぶのだろう。僕がやったように。それなら守れる。ちゃんと父さんと母さんが作ったものを作り直せる！シユインは悲しむだろう。生きて帰つてくると誓ったが志半ばで倒れることになったのだから。お腹の子が男か女かも分からない状態で。まだ見ぬ我が子を抱

きもせず。そして、アンドラス。僕がここで死んだら君はどうするのだろうか。何処かに回収でもされるのだろうか。その時に直そうとした整備兵やパイロットを殺したりしないだろうか。悪魔だから殺つてしまふかもしれない。少し心配だ。

——アンドラス、僕が死んだら次はもつとマシなパイロットに乗つてもらえよ

——貴方以上のパイロットなんて……もう……！

最初は全く理解できなかったアンドラスの気持ち痛みほどわかる。感情が理解できる。その時に10年前のあの日のことを思い出す。逃げてた僕に立ちはだかった君を。

あの時は何も理解できなかった。十分ではない力を振り回してただけだ。今は少しくらいマトモになれただろうか。少しくらいかっこよくなれただろうか。

——もう十分よ……お休みなさい。ユウ

——ありがとう。相棒……

そう心の中で思った瞬間身体が急に軽くなった。これが死か。魂が身体を捨てて飛び立つのだ。みんななら大丈夫。僕はちゃんとあの世で見てるから。僕がいつまでも見ているから。

すると世界に色が生まれた真つ白だ。アンドラスに連れられた空間は下が白だったが、ここは全てが白だ。

身体を感じる。気がつくとも自分の身体があった。傷も何一つない身体だ。あの世での仮の身体だろうか。そういうことを1回も調べようとしなかったのは少しやらかしたなと思つたが今更仕方ない。

そう思っていると、後ろに人の気配を感じた。振り向くとそこには2人の男女がいた。

男の方は黒髪の長髪で世界と同じような白い帽子と服を羽織っている。女の方は露出が大きく、赤いブラジャーのようなものを付けている。

僕はこの2人のことをよく知っている。僕をあの世界に産んでくれて、育ててくれた人だ。

「父さん！母さん！」

走りよつて2人に抱きつく。その2人から生きている人の温かさは伝わらなかつたが、他にある大切な何かを感じた。2人は死んでしまっているがそれでも僕らを見てくれていたと、そう感じられた。

「よく頑張つた。ユウ」

「じゃあ行くか」

「うん！」

右は名瀬の手を握り、左はアミダの手を握つて2人の間で歩きながら笑う。

そして僕らは白い空間に消されて行った。

第77話

遺されたもの

戦争は終わった。

この戦争は後にマクギリス・フアリド革命と呼ばれることになる。この革命により、力を持つ者が政権を握るべきという考えが生まれ、そしてイシュー家の件もあり、セブンスターズ合議制を廃止、より民主的な組織な組織と再編する動きが生まれている。代表はマクギリス・フアリドになることは決定しているが、より民主的な組織にしたいという理由で本来はギャラルホルンを否定するはずの反ギャラルホルン組織の一つである、レヴォルツ・イーオンが参加することとなり、レヴォルツ・イーオンが影ながら支えたユダ・カイエルは月に移住することとなった。レヴォルツ・イーオンの代表、サイオン・ジエーンは反ギャラルホルン組織の約25%程を纏めあげギャラルホルンに協力するスタンスをとった。

この革命で結果的に負けたエリオン家とクジャン家だが、アリアンロッドを実質的に支配していたラスタル・エリオンが代を妾の子であるアメリカ・エリオンに譲ったことからアメリカ・エリオンの手腕により、施設の改革等の雑務を一気に終わらせたことでエリオン家の株は急上昇している。

マクギリス・ファリドはこの革命を気にギャラルホルン火星支部の武力面の協力者として鉄華団を推薦。結果的に鉄華団は火星を支配とまではいかなかったものの、火星支部に口出しできる一般企業へと成長した。そして経済圏による火星の支配を強引に打ち切らせ、火星連合を設立させた。火星は投票の元、初代連合議長はクーデリア・藍那・バーンスタインが就任した。一部ではこの革命を成功させた兵を送ったということでも勢力を拡大したテイワズの後押しがあつたと言われているが真相は定かではない。

誰にも等しく自身の力を振りかざすことが出来る時代。マクギリス・ファリドの幼少期からの夢が現実味を帯びてきた。そしてその革命の中にいた兵は忘れていく。その革命の中で緑の光を放って消えていった、一人のスナイパーを。

「もう、行ってしまうのですね」

「ああ。家族に会うのは何年ぶりだろうな」

ジェラルドコロニー。そこではその革命時に撃墜王となり、ギャラルホルンを引退したライル・バレルとエリオン家の代表、アメリカ・エリオンがいた。

ライルのその左脚はどう見ても人の物じゃない。マクギリス・ファリド革命により、差別意識が薄まった義足を付けているのだ。理由はガンダムベリアルによる、リミッター解除。無事であるはずがない。

しかしどう見ても不自然なのはそれだけではない。ライルは兎も角、アメリカは有名な人なので後ろで部下が記者を抑えている。しかしアメリカはそれになんの疑問も持たずに笑顔を作るのでライルは思わず吹き出してしまった。

「どうしましたか？」

いつも通りアメリカが此方に話しかけて来るのでまあ彼女ならこうだろうなで片付けてなんでもない。と返す。

これが最期の会話だろうに、話せることが何も無い。話そうにも、話す雰囲気ではない気がする。部下が普通に可哀想なハメになっているし。

「そういえば」

その時アメリカが口を開いた。この空気を耐えかねたのかは分からないがまだ何か未練があるように感じられる。

「ガンダムアンドラスの件ですがまだ搜索中との事です」

「まあ、パイロットはとつくの前に死んでいるだろうがな。たかがタービンスからの要請だろ？単なる一企業だし蹴つても良かったんじゃないや？」

あの後ベリアル共にコックピットで気絶していた自分はその後、レヴォルツ・イーオンの捕虜となったらなんにもされずにそのままアメリカの元へと返還された。しかし共に消えていったアンドラスとそのパイロット、ユウ・タービンの死体は未だ見つかつ

ていない。タービンス曰くアンドラスが遠くに逃げたと言っていたがあの傷でパイロットが無事であるはずがない。良くても出血の量は馬鹿にならないだろう。それに発見していない期間がもう3ヶ月にもなるのだ。コックピットに幾ら食料があるうとさすがに飢えて死んでいるだろう。というかそうであつて欲しい。そう願っていた。

「いえ、実は私も不思議に思つていたのです。ガンダムアンドラスのあの機動、おそらくベリアルとほぼ、同レベルの時がありました。接近特化のベリアルと汎用型のアンドラスの速度が同じなど普通は有り得ないのですが……」

「まあ、いい。これで俺も晴れてニートだ。ニユースは見てるからなんかあつた度に迷惑電話流してやる」

「止めてください。流星に怒りますよ。確かにあなたは入隊している間は迷惑ばっかかけてましたけど」

「どうやら地味に毒を吐くところまで変わつてないらしい。しかも無自覚だ。女つて怖い。」

「…… そうだな」

それも今となつては懐かしい。弟妹や、その頃から少し足が悪かつたお袋の為に稼ぎがいいギャラルホルンに入隊したのは16歳の時だ。飛び級を続けて、お偉いさんに媚を売り続けた。その結果少し怒られて機体を真っ白にされたりしたが今思えばそのお

かげで彼女と出会えた。最初で最後の心から愛せる人だった。勿論今でも愛している。彼女から貰ったバレルの名は今でも俺の誇りだ。

しかしここで起こったジェラルド戦火で変わった。彼女は俺に夢を話し、そして息絶えた。俺はその夢を実現させるためにギャラルホルンを続けた。目の前の敵を屠り、圧倒的な力を見せ付け、そして恐怖させた。しかしセブンスターズは逆に興味津々で色んな部署を回ることとなったが結局最後はこの女なんだなと少し後悔する気持ちになった。

「それでは、お元気で」

「ああ……じゃあな……アメリカ様」

そう言ってアメリカに背を向けた。そして足に伝わる感覚に興奮しながらとそれを隠し、家へと帰った。

クリュセ市内。

「ただいま」

「あつ三日月、おかえりー」

晴れて結婚して夫婦となった三日月・オーガスとアトラ・ミクスタ。アトラのおなが最近重くなってきたらしい。理由は見れば分かる。

「もうそろそろ産まれるのかな、俺とアトラの子供」

「流石にまだじゃないかな。シュインさんの子もまだ産まれてないんだよ」

シュインとアトラは同じ妊婦ということとひと足早いママ友となっていた。今でも連絡を取り合っている。シュインはユウが行方不明になったということを聞き、一時は産み落としてしまうのではと言われたがこの子はユウの子だからユウの分も愛すると言つてより一層子供重視になつたらしい。そう思えばユウ・タービンが死んでもタービンは回つていると言える。

結局あの後、タービンはユウが死んだということと代表にユウの兄、エスト・タービンが就任した。マクギリス・フアリド革命により、少しばかり増えたテロリストの鎮圧なども行つており、裏からは魔王と呼ばれているらしく、本人もそれを気に入っているようだ。上がり上がった鉄華団と盃を交わしたことで、そしてその盃がエストが6、オルガが4という名瀬の時と同じ感じになったことからタービンはまだ鉄華団に負けていないと言うことになっている。

鉄華団も三日月とアトラが休んでも十分回っている。あの戦争にて行方不明だった

明宏もすぐにレヴォルツ・イーオンが見つければ後日鉄華団に戻ってきた。両腕の骨が折れていたらしいが命に別状はなく、時期に仕事も再開できるようになった。グシオンも歳星にてバルバトス、フラウロスと共に残っている。最近は火星支部の武力面の協力者なのでまだ武器を捨てきれないでいるが農場や他の企業の護衛などで仕事が多すぎで捌けるかどうかが不安だが彼らにとっては嬉しい悲鳴だろう。

「名前、どうしよう」

そういうこと三日月の目はこれまでの中で一番優しかった。そんなを見せてくれたことにシンプルに喜びながら、アトラは答える。

「三日月はどんな名前がいいと思う？」

「うーん……オルガ」

「それだとオルガさんと一緒になって大変でしょ」

そういう難しいのを考えようとしなのは三日月らしいのかもしれないがまさかオルガの名前を出すとは思えずにアトラは笑う。

すると玄関の扉が叩かれる。客人を招く予定はないが誰かが来たのは明確だ。

「俺が行くよ」

「ありがとう、三日月」

三日月が玄関の扉を開ける。するとそこには三日月よりガタイがいい男が立ってい

た。三日月の頭を鷲掴みしてクシヤクシヤにしながら入ってくる。

「あれ？ エストさん？ どうしてここに？」

髪の毛をクシヤクシヤにされた三日月をほっておいでそれより先にエスト・タービンがいることに突っ込む。

彼のスケジュール等知る由もないがもし火星に来たとしてもここに送りものがある訳でもない上に事前になにもなしに来るなんて彼らしくない。

「まあな。仕事の手が開いたから覗きに來ただけだ。腹の子、でかくなってるな。ユウの子よりでえんじやねえのか？」

エストはそんなことを言いながらアトラの方に歩く。

彼もタービンの仕事が忙しいらしいが火星で尚且送り届け先が鉄華団やそこに近い企業だとたまに来るのだ。女性慣れしていない団員が多い鉄華団の団員に対して小さい頃から女性との経験があるからか慌てることなくそれなりの対応が取れる。オルガさんが名瀬さんと同じように兄貴と言うのもうなずける。そう言えば彼の弟や兄ははオルガから見るとどう映るのだろうか。少し見てみたくなった。

「うん。元気に育つよ、この子。そうだ！ 名前！ 何がいいと思います？」

彼のようにそういう場面に立ち会った経験が多い人間ならいい案が出てくると思つて提案してみる。

するとエストは三日月とアトラを繰り返しみて答えた。
「そうだな… 暁… とか？」

ヴィーンゴルーヴ。

「マクギリス」

そこではひとまず仕事を終えたマクギリスが部屋で仮眠をとっていた。あの革命を起こしたマクギリス・ファリドとて人の子だ。疲れはするし寝なければおかしくもなる。

そのマクギリス・ファリドの前にある男が立つ。あの革命にてエストと三日月に瞬殺されかけたガエリオ・ボードウインだ。

2年前、マクギリスに裏切られたガエリオはラスタルの元へと行き、ヴィダールと偽物の名を付けられ、そして復讐のために戦ってきた。しかしそれすらマクギリスには届かなかった。マクギリス所か軍すら目を向けられないようなモビルスーツにやられた

のだ。プライドなど全てが崩れた。

しかしそんな自分にマクギリスはそれなりの位を与えている。妹のアルミアにもよく会いに行き、関係の修復をしようとしている。

意味がわからない。自分の野望の為に裏切った相手ともう一度仲良くしようだなんて。意味がわからない。本当なら打首だろう。生かすだけでもおかしいのに関係の修復などマクギリスらしくない。とすれば裏に誰かいるのか疑いたくなるがそんな人物は知らない上に、いても自分は打首獄門等少なくともこんな位には付けなかつただろう。

マクギリス・ファリドの補佐など、出来なかつただろう。

「お前は……何がしたいんだ」

口からその言葉が零れた。

「彼は、あなた方といえることが楽しかつたのでしよう。しかしそれを認めるということは今までの努力を否定するようなものでした。イズナリオ・ファリドからの酷い仕打ちを受けても努力した事を。だから自身の野望を最優先させたのです。」

声が聞こえたので思わず振り向くとそこには見知った男がいた。確かにサイオン・ジェーン。元々反ギャラルホルン組織、レヴォルツ・イーオンを率いたものだが今は彼もギャラルホルンに入り、マクギリスから仕事を受けている。ということはいい。問題

は彼がなぜこれを知っているかという事だ。彼よりマクギリスと接してきたのは自分だ。幼少期からずっとマクギリスと共にいたのだ。ぽつと出の男に全てを見透かされているのが辛い。

「何故わかる。サイオン・ジェーン」

「彼と同じような男を知っているからですよ。彼の場合はその場から逃げ出せたものの、逃げ出せなかったら今頃どうなっていたか、それは私にもわかりません」

まずなんでここにいて心を読んでいるのかを突っ込みたいが今それを突っ込んでも無駄なような気がした。自分より下であろうと上であろうと敬語を使うのは何故かジュリエッタに近いものを感じたが即座に否定する。

「では何故言ってくれなかった！そんなに酷い仕打ちを受けたのなら俺にくらい言えばよかったのに！出来ることは少ないけど、それでも！」

近くではマクギリスが寝ているというのに、大声で怒鳴る。しかしサイオンは落ち着いた雰囲気では宥めるように言う。

「何が変わりますか？自分の起きている現状を再確認して悔しくなるだけです。彼が欲しいのは同情ではないのです。それにイズナリオ・ファリドに汚された彼を貴方は受け止めきれますか？」

「出来るさ！俺は勿論、カルタも！アルミリアも！」

サイオンが宥めようとしても止まれなくなっていた。それどころかどんどん怒りガンダム湧いてくる。こんなことを言うサイオンとおそらくその通りである理由でこんなことをしたマクギリス、そして一番近くにいたのにそれをわかってやれなかった自分に。

「それは結果論です。マクギリス・ファリドは同情と引き換えでも貴方達を、一生の友を失うのは辛いのです」

「なら何故殺した！意味がわからない！殺すくらいなら失うの覚悟で言ってくれれば……」

「言つたでしょう。彼が欲しいのは同情ではないと。現状を変えられる力です。その為に貴方達を切り捨てた。切り捨てなければ目的を見失ってしまう。それが怖かった」

自分がどれだけ怒鳴つてもサイオンは落ち着いて宥めるように言う。残酷なようだが彼の言う通りだ。同情なんて何もならない。されても何も変わらない。

「貴方は彼にとつての……」

サイオンがその続きを言うことは無かった。自分の手が自然と動いてサイオンの頬を思いつきり殴つたのだ。

頬を殴られた中年の男はそのまま流れるように転がり壁に叩きつけられる。しかし口から出たのは謝罪の言葉ではなかった。

「それ以上は言うな！言わないでくれ！言ってしまったら……許してしまう。俺は許してしまいそうなんだ……マクギリスを……カルタの為に、アインの為に……だから言わないでくれ……」

「ガエリオ……？」

流石に近くで暴力沙汰が起こったのでマクギリスが目を覚ます。

寝起きの筈なのに妙にしっかりしているのは聞かれたのかもしれない。

するといつ起き上がったのかサイオンが敬礼をしていた。

「いえ、代表。何もありません。失礼します」

そう言つてサイオンはそそくさと逃げ出した。何故かふざけているようにも感じたがそれは自分だけなのか、周りなんにも不自然に思っていない。というか暴力ガンダムあつたのに起こったことがマクギリスが起きる程度つていうのも相当おかしいが。

「マクギリス」

無理矢理起こされたばかりだと言うのに時間かと呟いて端末を操作し始めたマクギリスをガエリオが引き止める。

何か言いたいことがあるはずだ。しかしその言葉は口から一向に出ようとしない。マクギリスも流石に不審に思い、振り向く。

仕方がないので言葉を選びながらも言った。

「いつか腹割って話をしよう」

「——ああ。勿論だ」

このいつかがいつになるのかは誰にも分からないことだがそれからマクギリスは仕事を早く終わらせるようになったらしい。

「全く本当に何も変わってないな。まあ、あんなことが会ったから仕方ないか」

10年前のとある戦争にて戦地となった場所だと言うのにそれなりに発展しているのはおそらくこの住人が頑張ったのだろう。一時期はテロリストの住処と言われていたこのコロニーも見るからに新しいビル群に車道には車が行き交うあの頃のコロニーに戻っていた。

意外と過去に対してうじうじしているのは自分だけなみたいだ。

そうしているうちに辺境にあるマンションに辿り着く。階段を踏みしめる度に懐かしい記憶が思い出される。小さい頃はここで敬礼して写真でも撮ったっけ。ギャラルホルンを退役して積荷が降りたのかあの頃の記憶を思い出してきた。

そうだ。そうだ。俺は楽しんでたんだ。あの頃は人生を楽しんでいたのだ。

そうしているうちに1つの扉が出てきたので開けようとしたが少し躊躇われる。あ

の日から自分はアインストの名を捨てて生きてきた。

1人でやれると言い張ってずっと一人でいたのだ。今から思い出すとほんとうに恥ずかしい。仲間さえいれば変わっていたのだろうがあの時自分を直すと本当に今と変わらないと思ひ出す。ユウ・ターピンは戦いながら進化してきたが自分は少しでも変わったのか。答えはわからないが、もし変わっていなくても変われる気がする。何故か。そう思えた。

「エイミー……ありがとうな。愛してる」

そう言って少し物思いにふける。その時間は相当長かったようで気がつくとも真上にあった太陽が沈みそうだった。

扉を叩き、ハンドルを引く。そこから広がった世界には見覚えがある。当然だ。これまで自分が育ってきた家なのだから。

すると1人の女性がこちらに走りよってくる。金髪のツインテールでその目は青色だ。その女性がこちらに飛んで抱きついてきた。

「ライルお兄ちゃんおかえり！」

そうか。これがおかえりというものか。久しぶりすぎて忘れていた。10年程度そんなことをしてこなかったから。殺伐とした世界にいたおかげで忘れてしまっていたのだ。しかし返す言葉は覚えている。家族なら当たり前、しかし大切な言葉。

「ただいま」

ハッキリと言いながら笑った。その笑顔はとても爽やかな笑顔だった。

ガンダム。それは人のある時は欲望ある時は願いを具現化した戦争の兵器。人を殺す為だけに存在しているもの。

本来はその筈だ。しかしそれが人が存在する、生きる為に存在した時期がある。厄災戦だ。その殺伐とした世界を越えてまだ残るアグニカ・カイエルの未練を変わりに成そうとする者がいる。

しかし、アグニカ・カイエルの願いは、まだ終わっていない。